

バージョン 6.1.0



WebSphere Process Server のインストールおよび構成

バージョン 6.1.0



WebSphere Process Server のインストールおよび構成

お願い

本書に記載されている情報をご使用になる前に、本書末尾の特記事項セクションに記載されている情報をお読みください。

本書は、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6、リリース 1、モディフィケーション 0 (製品番号 5724-L01)、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

IBM 発行のマニュアルに関する情報のページ

<http://www.ibm.com/jp/manuals/>

こちらから、日本語版および英語版のオンライン・ライブラリーをご利用いただけます。また、マニュアルに関するご意見やご感想を、上記ページよりお送りください。今後の参考にさせていただきます。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： WebSphere® Process Server for Multiplatforms
Version 6.1.0
Installing and Configuring WebSphere Process Server

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

目次

表 vii

第 1 章 製品のインストールおよび構成 . . . 1

第 2 章 WebSphere Process Server の
パッケージ化 3

第 3 章 ドキュメンテーションのインスト
ール 37

新しいヘルプ・システムのインストール 38

既存のヘルプ・システムへのドキュメンテーション
のインストール 39

ヘルプ・システム・ビューアーの開始 42

ヘルプ・システム・ビューアーの停止 43

ドキュメンテーションのアンインストール 43

第 4 章 WebSphere Process Server の
インストールに関する前提条件 45

db2licm コマンドによる DB2 製品ライセンス・キー
の登録 46

第 5 章 インストールのためのオペレーテ
ィング・システムの準備 49

AIX システムのインストール準備 49

HP-UX システムのインストール準備 54

HP-UX システムでのカーネル値の設定 57

i5/OS システムのインストール準備 60

製品ライブラリー、ディレクトリー、サブシステ
ム、ジョブ・キュー、ジョブ記述、および出力キ
ュー 62

i5/OSでのサブシステムの構成 63

Linux システムのインストール準備 64

Linux パッケージのインストールと検証 67

Solaris システムのインストール準備 69

Solaris システムでのカーネル値の設定 72

Windows システムのインストール準備 73

第 6 章 サーバーおよびノードの停止 . . . 77

第 7 章 ソフトウェアのインストール . . . 79

Launchpad の開始 81

Launchpad のオプション 83

WebSphere Process Server の対話式インストール . . . 94

WebSphere Process Server のインストールおよび
プロファイルの作成の対話式実行 101

デプロイメント環境による WebSphere Process
Server の対話式インストール 109

WebSphere Process Server Client の対話式インス
トール 121

既存のインストール済み環境への追加フィーチャ
ーのインストール 125

WebSphere Process Server インストール済み環境
への WebSphere Enterprise Service Bus または
WebSphere Process Server Client インストール済
み環境の変換 128

Linux、UNIX、および Windows へのサイレント・
インストール 131

i5/OS での System i サーバーからのサイレント・
インストール 135

Windows ワークステーションのコマンド行から
i5/OS をサイレント・インストールする 138

i5/OS でのスクリプトの実行 140

ファースト・ステップ・コンソールの開始 140

ファースト・ステップ・コンソールのオプション 144

第 8 章 製品のインストールの検査 . . . 151

インストール済みファイルの検査合計の検証 . . . 152

部品表との照合 153

構成済みファイルの品目に対する新しいベースラ
イン検査合計の計算 158

検査合計の比較からのファイルの除外 161

特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計
の比較 165

installver_wbi コマンドのデフォルトのメッセー
ジ・ダイジェスト・アルゴリズムの変更 168

installver_wbi コマンドを使用したメモリー不足
の状態の処理 170

installver_wbi コマンド 171

第 9 章 ほかの WebSphere 製品のイ
ンストール済み環境との共存 181

各種 WebSphere 製品の既存のインストール済み環
境と共存する WebSphere Process Server または
WebSphere Process Server Client のインストール . . 182

WebSphere Business Integration Server Foundation 製
品および WebSphere Application Server 製品の構成
インスタンスと共存する新規 WebSphere Process
Server プロファイルの作成 184

WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルと共
存する新規 WebSphere Process Server プロファイル
の作成 186

第 10 章 プロファイルの使用 189

プロファイル 189

プロファイルの作成または拡張に関する前提条件 190

非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリ
ーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付
与 193

プロファイルの作成または拡張前の共通データベ
ースの手動作成 197

プロファイルの作成	198
プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成	199
manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成	203
既存のプロファイルの拡張	206
プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張	207
manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの拡張	212
統合されたプロファイルの手動での拡張	215
manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの削除	216
プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成	217
プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成	218
i5/OS でのリモート・データベース・サポートの構成	219
i5/OS データベースおよびコレクション	220
リモート・データベースに接続するためのスタンドアロン・プロファイルの作成	221
リモート・データベースに接続するための Network Deployment プロファイルの作成	225
リモート z/OS サーバーに DB2 を構成するスクリプト	227

第 11 章 デプロイメント環境の検証 229

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターの始動の確認	230
テスト・アプリケーションのインストール	231
ルーティング用テスト・アプリケーションの構成	232
テスト・アプリケーションの開始	233
テスト・アプリケーションの実行	234
その他のアプリケーションのインストールおよびアクセス	234

第 12 章 Update Installer を使用したフィックスパックおよびリフレッシュ・パックのインストール 237

Update Installer for WebSphere Software のインストール	242
保守パッケージのアンインストール	244

第 13 章 ソフトウェアのアンインストール 249

GUI の使用またはサイレント・モードによる製品のアンインストール	250
アンインストールに失敗した後の再インストールの準備	256
AIX システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備	257
HP-UX システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備	260

i5/OS システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備	263
Linux システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備	264
Solaris システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備	268
Windows システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備	272
Business Process Choreographer のアンインストール	276

第 14 章 IBM Installation Factory の使用 277

Installation Factory - 概要	277
IBM Installation Factory のインストール	279
カスタマイズ済みインストール・パッケージの処理	281
Installation Factory の開始	283
カスタマイズ済みインストール・パッケージの作成	309
カスタマイズ済みインストール・パッケージのインストール: タスクのロードマップ	318
install コマンド	341
カスタマイズ済みインストール・パッケージによりインストールした環境の保守	342
カスタマイズ済みインストール・パッケージのインストールのアンインストール	344
Installation Factory ツールのアンインストール	344

第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング 345

Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング	349
サイレント・インストールのトラブルシューティング	350
i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント	351
失敗した Ant 構成スクリプトの診断	353
メッセージ: インストールおよびプロファイル作成サポートされる IBM JDK が見つかりませんでした。この製品で出荷された IBM JDK は install_root/JDK に配置されている必要があります。問題を訂正して再試行してください。	356
エラー: 入力行が長すぎます (Error: The input line is too long).	356
注: 次のファイル・システムがインストール中に拡張されます (Note: The following file systems will be expanded during the installation).	357
ディスク・スペースが必要とするより nn MB 足りません。(The disk space is nn Mbyte less than required.) インストールは続行できません。(The installation cannot continue.)	358
別のディレクトリーを指定するか、または、手動アンインストールを実行してください (Specify a different directory or perform a manual uninstall)	358
エラー: /usr/opt/ibm/gskta/bin/gsk7ikm: が見つかりません (Error: /usr/opt/ibm/gskta/bin/gsk7ikm: not found)	358

ファイルの書き込みでエラー = 一時ディスクスペースが不足している可能性があります。(Error writing file = There may not be enough temporary disk space.)	359
エラー: localhost はリモート・アクセスに有効なホスト名ではありません (Error: localhost is not a valid host name for remote access)	359
警告: スtring "<type_name>" をタイプ FontStruct に変換できません (Warning: Cannot convert string "<type_name>" to type FontStruct)	359
通知: システム設定ディレクトリーを java.home に作成しました (INFO: Created system preferences directory in java.home)	360
インストーラーは RPM データベースに製品情報を正しく追加できませんでした。(The installer could not successfully add the product information into the RPM database.)	360
エラー: java.io.IOException: konqueror: が見つかりません (Error: java.io.IOException: konqueror: not found)	360
ログ・ファイル	361
プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリ	365
Business Process Choreographer 構成のトラブルシューティング	368
第 16 章 インストール情報	369
i5/OS スクリプト	369
製品のバージョン情報および履歴情報	370
オペレーティング・システムのレジストリー・キー .nifregistry ファイルおよび vpd.properties ファイル	371
既存の WebSphere Process Server のインストール済み環境でのインストール	376
既存の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール済み環境でのインストール	380
既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境でのインストール	383
Linux および UNIX オペレーティング・システムでのディスク・ドライブのマウント	385

製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー	388
製品コンポーネント	395
install コマンド	396
Mozilla 1.7 での各国語サポート	401
パスポート・アドバンテージからインストールするときの特別な考慮事項	401
製品ライブラリー、ディレクトリー、サブシステム、ジョブ・キュー、ジョブ記述、および出力キュー	402
ポート競合の回避	404
ポート番号設定	405
manageprofiles コマンド	406
manageprofiles コマンド・パラメーター	408
プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項	427
複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド	435
デフォルト値を使用したプロファイルの構成	435
デフォルト値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成	436
デフォルト値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成	439
デフォルト値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成	442
カスタマイズした値を使用したプロファイルの構成	446
カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成	447
カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成	487
カスタマイズした値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成	509
デプロイメント環境に対するプロファイルの構成	518
デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成	520
デプロイメント環境用のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成	542

特記事項	551
-----------------------	------------

表

1. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア	4	30. WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus を登録するときに使用するキー	371
2. AIX メディア・パック (32 ビット) の内容	9	31. vpd.properties ファイル内にある WebSphere 製品の ID	376
3. AIX メディア・パック (64 ビット) の内容	11	32. install_root デフォルト・ディレクトリー	389
4. HP-UX メディア・パック (32 ビット) の内容	12	33. profile_root デフォルト・ディレクトリー	390
5. HP-UX メディア・パック (64 ビット) の内容	14	34. updi_root デフォルト・ディレクトリー	390
6. i5/OS メディア・パックの内容	15	35. cip_proc_server_root デフォルト・ディレクトリー	391
7. Linux x86 メディア・パック (32 ビット) の内容	19	36. クリーン・サーバーの i5/OS デフォルト・ディレクトリー	391
8. Linux x86 メディア・パック (64 ビット) の内容	21	37. WebSphere Application Server または WebSphere Application Network Deployment が既にインストールされている場合の install_root デフォルト・ディレクトリー	392
9. Linux POWER メディア・パック (32 ビット) の内容	22	38. WebSphere Application Server または WebSphere Application Network Deployment が既にインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー	392
10. Linux POWER メディア・パック (64 ビット) の内容	24	39. WebSphere Process Server の既存のインストールが存在している場合の install_root デフォルト・ディレクトリー	393
11. Linux on System z メディア・パック (31 ビット) の内容	25	40. WebSphere Process Server がインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー	394
12. Linux on System z メディア・パック (64 ビット) の内容	27	41. WebSphere Process Server を WebSphere Enterprise Service Bus の既存のインストール済み環境の上にインストールしたときの install_root デフォルト・ディレクトリー	394
13. Solaris メディア・パック (32 ビット) の内容	28	42. WebSphere Enterprise Service Bus がインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー	395
14. Solaris SPARC メディア・パック (64 ビット) の内容	30	43. WebSphere Process Server のフィーチャー	395
15. Solaris x86 メディア・パック (64 ビット) の内容	31	44. WebSphere Application Server コンポーネントのインストール・コマンド	397
16. Windows メディア・パック (32 ビット) の内容	33	45. コンポーネントのインストール・コマンド	397
17. Windows メディア・パック (64 ビット) の内容	34	46. WebSphere Process Server install コマンド・オプションの値の表	398
18. WebSphere Process Server の推奨カーネル設定	58	47. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン	428
19. WebSphere 製品の既存のインストールに基づく次のステップ	98	48. 「Common Event Infrastructure の構成」パネルの後の次のステップ	462
20. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデプロイメント環境パターンによって提供されるクラスター	118	49. Derby Embedded の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド	462
21. ファースト・ステップ・コンソールで使用可能なオプション	144	50. Derby Network Server の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド	462
22. ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンド	148		
23. 保守パッケージのアンインストール時に必要な情報	245		
24.	327		
25.	339		
26. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ	362		
27. i5/OS 用の WebSphere Process Server でよく使用されるスクリプト	369		
28. i5/OS プラットフォーム固有のスクリプト	370		
29. 製品のバージョン情報および履歴情報のリンク	371		

51. DB2 Universal Database の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構 成フィールド	463	72. DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 の場 合の必須の共通データベース構成フィールド	503
52. DB2 UDB for z/OS の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィール ド	464	73. DB2 UDB for z/OS V8 の場合の必須の共通デ ータベース構成フィールド	504
53. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) の場 合の必須の Common Event Infrastructure デー タベース構成フィールド	465	74. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) の場 合の必須の共通データベース構成フィールド	504
54. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) の場合の 必須の Common Event Infrastructure データベ ース構成フィールド	465	75. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) の場合の 必須の共通データベース構成フィールド	505
55. Informix の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド	466	76. DB2 CLI の場合の必須の共通データベース構 成フィールド	506
56. Oracle の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド	467	77. Informix の場合の必須の共通データベース構 成フィールド	506
57. Microsoft SQL Server の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構 成フィールド	468	78. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須 の共通データベース構成フィールド	507
58. Derby Network Server の必須の共通データベ ース構成フィールド	476	79. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必 須の共通データベース構成フィールド	507
59. DB2 Universal Database の場合の必須の共通 データベース構成フィールド	476	80. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フ ィールド	508
60. DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 の場 合の必須の共通データベース構成フィールド	477	81. Oracle 10g の必須の共通データベース構成フ ィールド	508
61. DB2 UDB for z/OS V8 の場合の必須の共通デ ータベース構成フィールド	478	82. Derby Network Server の必須の共通データベ ース構成フィールド	535
62. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) の場 合の必須の共通データベース構成フィールド	478	83. DB2 Universal Database の場合の必須の共通 データベース構成フィールド	535
63. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) の場合の 必須の共通データベース構成フィールド	479	84. DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 の場 合の必須の共通データベース構成フィールド	536
64. DB2 CLI の場合の必須の共通データベース構 成フィールド	480	85. DB2 UDB for z/OS V8 の場合の必須の共通デ ータベース構成フィールド	537
65. Informix の場合の必須の共通データベース構 成フィールド	480	86. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) の場 合の必須の共通データベース構成フィールド	537
66. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須 の共通データベース構成フィールド	481	87. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) の場合の 必須の共通データベース構成フィールド	538
67. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必 須の共通データベース構成フィールド	481	88. DB2 CLI の場合の必須の共通データベース構 成フィールド	539
68. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フ ィールド	482	89. Informix の場合の必須の共通データベース構 成フィールド	539
69. Oracle 10g の必須の共通データベース構成フ ィールド	482	90. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須 の共通データベース構成フィールド	540
70. Derby Network Server の必須の共通データベ ース構成フィールド	502	91. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必 須の共通データベース構成フィールド	540
71. DB2 Universal Database の場合の必須の共通 データベース構成フィールド	502	92. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フ ィールド	541
		93. Oracle 10g の必須の共通データベース構成フ ィールド	541
		94. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデ プロイメント環境パターンによって提供され るクラスター	547

第 1 章 製品のインストールおよび構成

以下の項目をご覧になると、よく使用されるインストールおよび構成タスクを迅速に開始できます。

- インストールの前提条件について
- 製品の対話式インストール
- コマンド行を使用した製品のインストール
- **i5/OS** System i™ サーバーからの製品のインストール
- **i5/OS** Windows® ワークステーションのコマンド行からの製品のインストール
- プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成
- manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成
- プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張
- manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの拡張
- manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの削除
- ランタイム環境での Business Process Choreographer のセットアップ
- 製品のインストールおよびプロファイル作成の検証
- デプロイメント環境の検証
- 製品のアンインストール
- IBM® Installation Factory を使用した製品インストールのカスタマイズ
- Installation Factory のインストール
- Installation Factory の開始
- Installation Factory でのビルド定義ファイルの作成
- Installation Factory でのカスタマイズ済みインストール・パッケージの作成
- Installation Factory を使用したカスタマイズ済みインストール・パッケージのインストール

第 2 章 WebSphere Process Server のパッケージ化

このトピックでは、WebSphere Process Server の入手方法と、そのメディア・パックおよびダウンロード可能な電子インストール・イメージの内容について説明します。

WebSphere Process Server の入手方法

以下のいずれかの方法で、製品コードを取得することができます。

- CD-ROM および DVD メディアなどの製品メディア・パックから。
- パスポート・アドバンテージ・サイトから。ここでは、ライセンス交付を受けたカスタマーがインストール・イメージをダウンロードすることができます。ダウンロード可能なイメージの詳細については、パスポート・アドバンテージのダウンロードの資料を参照してください。

このソフトウェアを購入するには、IBM 担当員または IBM 販売店にお問い合わせいただくか、WebSphere Process Server のホーム・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps>) にアクセスして、左側の列の「How to buy」のリンクを選択します。

WebSphere Process Server に付属するソフトウェア

各メディア・パックには、WebSphere Process Server をインストールし、WebSphere Process Server 環境をセットアップし、アプリケーションのアセンブルとデプロイを行うのに必要なソフトウェアが含まれています。また、お客様の実稼働環境や開発環境に付加価値とツール・サポートを提供するオプションの補助ソフトウェア・プログラムも、各メディア・パックに組み込まれています。

4 ページの表 1 に、WebSphere Process Server 製品に付属するソフトウェアを示します。必ずしもすべてのプラットフォームにすべてのソフトウェアが供給されているわけではありません。

表 1. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア

ソフトウェア	説明
WebSphere Process Server	<p>サービス指向アーキテクチャ (SOA) を基本にした、単一の単純化プログラミング・モデルである WebSphere Process Server は、オープン・スタンダードに基づくすべての統合スタイルを実現しサポートすることにより、多種多様な要員、ワークフロー、アプリケーション、システム、プラットフォーム、およびアーキテクチャにまたがるビジネス・プロセスを自動化する次世代のビジネス・プロセス・サーバーです。WebSphere Process Server のこのリリースの新機能は、「WebSphere® Process Server for Multiplatforms バージョン 6.1 製品概説」PDF の『このリリースの新機能』のトピックで説明しています。または、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.1 オンライン・インフォメーション・センター (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r1mx/) で、トピックを表示できます。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment	<p>業界最高峰の Java ベース・アプリケーション・プラットフォームで、ダイナミックな e-business の世界でのエンタープライズ・データやトランザクションを統合します。WebSphere Process Server の土台になっている Network Deployment 版は、優れたアプリケーション・デプロイメント環境を提供し、WebSphere 製品ファミリーから期待されるセキュリティ、パフォーマンス、可用性、接続性、スケーラビリティに加え、トランザクション管理の拡張機能を提供するアプリケーション・サービスを備えています。さらにこの構成によって、クラスタリング、エッジ・オブ・ネットワーク・サービス、Web サービス機能の強化、分散構成の高可用性を実現できます。WebSphere Application Server Network Deployment について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 インフォメーション・センターを参照してください。</p>
IBM HTTP Server	<p>すべての e-business アプリケーションの基礎は Web サーバーです。IBM HTTP Server の機能には、次のようなものが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 容易なインストール • SSL セキュア接続のサポート • Fast Response Cache Accelerator • WebSphere バンドルの一部としての IBM サポート • ハードウェア暗号のサポート • IHS サーバーの管理および構成に役立つ Administration Server • すべての WebSphere 製品に共通の、ナビゲートが容易な設計を採用したヘルプ情報

表 1. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
Web サーバー・プラグイン	WebSphere Process Server は、サポートしている Web サーバーごとに、固有のバイナリー・プラグイン・モジュールと関連のプラグイン構成ファイルを提供します。プラグイン・インストール・ウィザードにより、必要なファイルがインストールされ、WebSphere Process Server の Web サーバーと基本のアプリケーション・サーバーが構成されてサーバー間の通信が可能になります。
WebSphere Application Server Application Clients	アプリケーション・クライアント・モジュールは、Java™ アプリケーションにアクセスするためのクライアントが格納されている Java™ Archive (JAR) ファイルです。基礎となる WebSphere Application Server 製品と通信する J2EE™ およびシン・アプリケーション・クライアントを実行するには、Application Server のエレメントをクライアントの実行先マシンにインストールしておく必要があります。ただし、システムに Application Server がインストールされていない場合は、使用しているクライアント・アプリケーションにスタンドアロンのクライアント・ランタイム環境を提供する Application Clients をインストールできます。
Eclipse ベースの IBM User Interface ヘルプ・システム	WebSphere Process Server 資料のダウンロード可能版は Eclipse 文書プラグインとしてパッケージ化されており、IBM User Interface ヘルプ・システムを使用して表示する必要があります。このヘルプ・システム (つまりビューアー) および文書プラグイン形式は、Eclipse Project によって開発されたオープン・ソースの方法を基にしています。
IBM Message Service Clients	メッセージング機能と Web サービス機能を非 Java 環境で提供するソフトウェア。提供された以下のクライアントを使用することにより、アプリケーションと WebSphere Process Server 間の対話を拡張します。 <ul style="list-style-type: none"> • IBM Message Service Client for C/C++ は JMS モデルを拡張して、C および C++ アプリケーションへのメッセージングを行います。 • IBM Message Service Client for .NET を使用すると、.NET アプリケーションを JMS ベースの情報フローに加えることができます。
DataDirect Java Database Connectivity (JDBC) ドライバー	Microsoft® SQL Server との接続を有効にするために DataDirect Technologies 社が作成した 2 つの JDBC ドライバー。これらのドライバーとは、SequeLink ドライバーおよび Connect JDBC ドライバーです。
WebSphere Application Server Toolkit	WebSphere Application Server Network Deployment などのアプリケーション・サーバーに公開するための基本的なアセンブリー・ツールおよびデプロイメント・ツールを提供します。このツールを使用して、基本的な単体テスト、デバッグ、プロファイル作成の各機能を実行することもできます。

表 1. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
WebSphere Application Server Edge Components	Edge Components を備え、高可用性、ハイ・ボリューム環境のニーズに対応しています。Edge Components には高性能のロード・バランシング、キャッシング、および集中セキュリティー機能があります。詳細については、WebSphere Application Server Network Deployment Edge Components の Web ページを参照してください。
DB2 [®] Restricted Enterprise Edition	<p>DB2 Restricted Enterprise Edition には、DB2 Enterprise Server Edition (DB2 Enterprise 9) の一部が含まれています。DB2 Enterprise 9 は、中規模から大規模の企業のデータ・サーバー要件を満たすように設計されています。これは、Linux[®]、UNIX[®]、または Windows サーバーにデプロイでき、1 個のプロセッサから 100 個のプロセッサまで、あらゆるサイズに対応可能です。DB2 Enterprise 9 は、エンタープライズ全体のオンデマンド・ソリューションを構築するのに理想的なファウンデーションです。広範な配列の自律型または自己管理機能により、管理者の時間が開放されてビジネス・バリューの推進に集中できます。使いやすい DB2 および自己管理特性のおかげで、小規模なインプリメンテーションでは専門管理者が不要な場合さえあります。</p> <p>DB2 が提供するクライアントは以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • DB2 Runtime Client。このクライアントは、アプリケーションが DB2 サーバーにアクセスできるようにするのに最適です。 • DB2 Client。このクライアントには、DB2 Runtime Client にあるすべての機能に加えて、クライアント/サーバー構成、データベース管理、アプリケーション開発の機能が組み込まれています。
IBM Tivoli [®] Directory Server	IBM Tivoli Directory Server 製品は、強力な Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) インフラストラクチャーです。Tivoli Directory Server は、包括的な ID管理アプリケーションと先進のソフトウェア・アーキテクチャーを展開するための基盤を提供します。詳しくは、IBM Tivoli Directory Server を参照してください。
IBM Tivoli Access Manager Servers	IBM Tivoli Access Manager Servers は、e-ビジネス・アプリケーションとすぐに統合して、機密保護機能のある、統一されたパーソナルな e-ビジネス体験を提供します。認証および許可の API を提供し、統合を行うことにより、Tivoli Access Manager Servers は、拡大する企業内に分散する可能性のあるビジネス上重要なアプリケーションおよびデータに対する機密保護機能のあるアクセスを支援します。詳しくは、IBM Tivoli Access Manager for e-business を参照してください。

表 1. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition	WebSphere Partner Gateway では、EDI およびインターネット標準をサポートする統合ゲートウェイ・ソリューションが提供され、エンタープライズ・プロセスを外部パートナーまで拡張することが可能になります。WebSphere ソフトウェア・プラットフォームとのプロセス統合を目的とする統合パートナー・サービスが提供されます。企業間 (B2B) のゲートウェイ統合は企業と取引先コミュニティとの B2B 通信の集中化を可能にし、複数の取引先との連絡の一元的な管理および企業の末端でのセキュリティの高い環境が実現します。WebSphere Partner Gateway Advanced Edition について詳しくは、WebSphere Partner Gateway Advanced Edition を参照してください。
IBM Installation Factory	Installation Factory は、特定のニーズに合うように調整された WebSphere 製品を、信頼性のある反復可能な方法でインストールするための、すぐに使用可能なインストール・パッケージを作成します。インストール・パッケージはカスタマイズされた WebSphere WebSphere Process Server インストール・イメージであり、1 つ以上の保守パッケージ、スクリプト、および作成されたインストールのカスタマイズに役立つその他のファイルを組み込むことができます。
マイグレーション・ツール	マイグレーション・ツールを使用すると、前のバージョンの WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus からのマイグレーションを実行できます。WebSphere Process Server 用および WebSphere Application Server 用のマイグレーション・ツールがあります。マイグレーション・ツールにより、マイグレーション・プロセスが一通り行われます。
Update Installer	Update Installer は、更新 (暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パック) を WebSphere ソフトウェア (WebSphere Enterprise Bus V6.1 リリース、WebSphereProcess Server V6.1 リリース、WebSphere Application Server V6.1 リリース、IBM HTTP Server、Web サーバー・プラグイン、および WebSphere Application Clients など) にインストールするために使用するツールです。
IBM Rational® Agent Controller	IBM Rational Agent Controller は、クライアント・アプリケーションが起動してローカルまたはリモートのアプリケーションを管理できるようにし、実行中のアプリケーションの情報を他のアプリケーションに提供するデーモンです。

表 1. WebSphere Process Server に付属するソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
IBM Support Assistant	<p>IBM Support Assistant (ISA) は、さまざまな IBM サポート・リソースの使用を支援するツールです。IBM Support Assistant は、ソフトウェアに関する疑問点の解決に役立つ次の 4 つのコンポーネントを備えています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 検索コンポーネント。複数の場所にある適切なサポート情報にアクセスする際に役立ちます。 • サポート・リンク・コンポーネント: 各種の IBM Web リソース (IBM 製品サイト、IBM サポート・サイト、IBM ニュース・グループへのリンクなど) にアクセスするために便利なロケーションを提供します。 • 教育コンポーネント: IBM 製品の教育 Web サイト (IBM Education Assistant モジュールなど) へのガイド付きアクセスを提供します。 • サービス・コンポーネント: 主要なシステム・データを含む詳細な問題報告書を IBM に送ることができません。 <p>IBM Support Assistant と WebSphere Process Server を一緒に使用する場合は、IBM Support Assistant バージョン 3.0 をインストールしてから、WebSphere Process Server 用のプラグインをインストールする必要があります。</p>

WebSphere Process Server に付属するメディア・パック

WebSphere Process Server には 8 つのメディア・パックがあります。各メディア・パックには、CD-ROM と、特定の稼働環境に適用される補足の DVD が含まれています。

注: メディア・パックにはそれぞれ、WebSphere Process Server 6.1 Quick Start CD が含まれています。この CD-ROM には、各国語版の「WebSphere Process Server クイック・スタート・ガイド」が収録されています。

プラットフォームごとの内容の詳細については、以下のセクションを参照してください。

- 9 ページの『AIX メディア・パック』
- 12 ページの『HP-UX メディア・パック』
- 15 ページの『i5/OS メディア・パック』
- 18 ページの『Linux x86 メディア・パック』
- 22 ページの『Linux POWER メディア・パック』
- 25 ページの『Linux on System z メディア・パック』
- 28 ページの『Solaris メディア・パック』
- 32 ページの『Windows メディア・パック』

AIX® メディア・パック

以下の表は、AIX 用 WebSphere Process Server に付属する 32 ビット・メディアを示します。

表 2. AIX メディア・パック (32 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール

表2. AIX メディア・パック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。 バージョン 6.1
Application Server Toolkit 6.1.1 for Windows CD	2 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for Linux on x86 CD	2 枚の CD-ROM。
Rational Agent Controller 6.1.5 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPv6 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Data Interchange Services 6.0 for Windows CD	1 枚の CD-ROM。

以下の表は、AIX 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 3. AIX メディア・パック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>バージョン 6.1</p>
DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 National Language Pack 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。

表3. AIX メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
DB2 Runtime Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。

HP-UX メディア・パック

以下の表は、HP-UX 用 WebSphere Process Server に付属する 32 ビット・メディアを示します。

表4. HP-UX メディア・パック (32 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>

表 4. HP-UX メディア・パック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。 バージョン 6.1
Application Server Toolkit 6.1.1 for Windows CD	2 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for Linux on x86 CD	2 枚の CD-ROM。
Rational Agent Controller 6.1.5 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPv6 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 National Language Pack 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Runtime Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。

以下の表は、HP-UX 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 5. HP-UX メディア・パック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>バージョン 6.1</p>
Edge Components 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPv6 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。

表 5. HP-UX メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 National Language Pack 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Runtime Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Data Interchange Services 6.0 for Windows CD	1 枚の CD-ROM。

i5/OS® メディア・パック

以下の表は、i5/OS 用 WebSphere Process Server に付属するメディアを示します。

表 6. i5/OS メディア・パックの内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>

表 6. i5/OS メディア・パックの内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。 バージョン 6.1
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements Windows CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements AIX CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements HP IA64 CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements Linux on Power CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements Linux on System z CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for Windows CD	2 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for Linux on x86 CD	2 枚の CD-ROM。
Rational Agent Controller 6.1.5 CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements for Windows CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements for AIX CD	1 枚の CD-ROM。

表 6. i5/OS メディア・パックの内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements for Solaris CD (32 ビット)	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements for Solaris on x86-64 CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements for Solaris on SPARC CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements for HP-UX CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements for Linux on x86-32 CD (32 ビット)	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements for Linux on x86-64 CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server Network Deployment 6.1 WorldType Fonts Supplements CD (32 ビット)	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements for Linux on POWER™ CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 Supplements for Linux on System z CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for Windows CD (32 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for Windows CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPV6 6.1 for Windows CD (32 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPV6 6.1 for Windows CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for AIX CD (32 ビット)	1 枚の CD-ROM。

表 6. i5/OS メディア・パックの内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
Edge Components for IPV6 6.1 for AIX CD (32 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for Solaris CD (32 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPV6 V6.1 for Solaris CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for Solaris on x86-64 CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for HP-UX CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for HP IA64 CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components IPV6 6.1 for HP-UX CD (32 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components IPV6 6.1 for HP-UX CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for Linux on x86-32 CD (32 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPV6 6.1 for Linux on x86-32 CD (32 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for Linux on x86-64 CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPV6 6.1 for Linux on x86-64 CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for Linux on POWER CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for Linux on POWER CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPV6 6.1 for Linux on POWER CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPV6 6.1 for Linux on POWER CD (64 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for Linux on System z CD (31 ビット)	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 for IPV6 for Linux on System z CD (64 ビット)	2 枚の CD-ROM。

Linux x86 メディア・パック

以下の表は、Linux x86 用 WebSphere Process Server に付属する 32 ビット・メディアを示します。

表 7. Linux x86 メディア・バック (32 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Process Server 6.1 WorldType Fonts Supplements CD	1 枚の CD-ROM。

表7. Linux x86 メディア・パック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。 バージョン 6.1
Application Server Toolkit 6.1.1 for Windows CD	2 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for Linux on x86 CD	2 枚の CD-ROM。
Rational Agent Controller 6.1.5 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPv6 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 National Language Pack 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Runtime Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Data Interchange Services 6.0 for Windows CD	1 枚の CD-ROM。

以下の表は、Linux x86 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 8. Linux x86 メディア・バック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>バージョン 6.1</p>
Edge Components 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPv6 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。

表 8. Linux x86 メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 National Language Pack 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Runtime Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。

Linux POWER メディア・パック

以下の表は、Linux POWER 用 WebSphere Process Server に付属する 32 ビット・メディアを示します。

表 9. Linux POWER メディア・パック (32 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。

表9. Linux POWER メディア・バック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 DVD	1 枚の DVD。 <i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、 <i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Process Server 6.1 WorldType Fonts Supplements CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。 バージョン 6.1
Application Server Toolkit 6.1.1 for Windows CD	2 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for Linux on x86 CD	2 枚の CD-ROM。
Rational Agent Controller 6.1.5 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPv6 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Data Interchange Services 6.0 for Windows CD	1 枚の CD-ROM。

以下の表は、Linux POWER 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 10. Linux POWER メディア・パック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>バージョン 6.1</p>
DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 National Language Pack 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。

表 10. Linux POWER メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
DB2 Runtime Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPv6 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。

Linux on System z™ メディア・パック

以下の表は、System z 上の Linux 用 WebSphere Process Server に付属する 31 ビット・メディアを示します。

表 11. Linux on System z メディア・パック (31 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>

表 11. Linux on System z メディア・パック (31 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Process Server 6.1 WorldType Fonts Supplements CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。 バージョン 6.1
Application Server Toolkit 6.1.1 for Windows CD	2 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for Linux on x86 CD	2 枚の CD-ROM。
Rational Agent Controller 6.1.5 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。

以下の表は、System z 上の Linux 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 12. Linux on System z メディア・パック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>バージョン 6.1</p>
DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 National Language Pack 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。

表 12. Linux on System z メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
DB2 Runtime Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPv6 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。

Solaris メディア・パック

以下の表は、Solaris 用 WebSphere Process Server に付属する 32 ビット・メディアを示します。

表 13. Solaris メディア・パック (32 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>

表 13. Solaris メディア・パック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。 バージョン 6.1
Application Server Toolkit 6.1.1 for Windows CD	2 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for Linux on x86 CD	2 枚の CD-ROM。
Rational Agent Controller 6.1.5 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPV6 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Data Interchange Services 6.0 for Windows CD	1 枚の CD-ROM。

以下の表は、Solaris SPARC 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 14. Solaris SPARC メディア・バック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>バージョン 6.1</p>
DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM。</p>
DB2 National Language Pack 9.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM。</p>
DB2 Runtime Client 9.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM。</p>

表 14. Solaris SPARC メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
DB2 Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。

以下の表は、Solaris x86 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 15. Solaris x86 メディア・パック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>

表 15. Solaris x86 メディア・パック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。 バージョン 6.1
Edge Components 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 National Language Pack 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Runtime Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。

Windows メディア・パック

以下の表は、Windows 用 WebSphere Process Server に付属する 32 ビット・メディアを示します。

表 16. Windows メディア・バック (32 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • メッセージング・クライアント (Message Service Client for C/C++ および Message Service Client for .NET) (MsgClients ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	<p>1 枚の DVD。</p> <p><i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、<i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server 用アプリケーション・クライアント • IBM HTTP Server • IBM Support Assistant • Web サーバー・プラグイン • マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	<p>1 枚の CD-ROM。</p> <p>バージョン 6.1</p>

表 16. Windows メディア・バック (32 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
Application Server Toolkit 6.1.1 for Windows CD	2 枚の CD-ROM。
Application Server Toolkit 6.1.1 for Linux on x86 CD	2 枚の CD-ROM。
Rational Agent Controller 6.1.5 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPv6 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Access Manager 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
Tivoli Directory Server 6.0 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Runtime Client 9.1 CD	3 枚の CD-ROM。
DB2 Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Partner Gateway Advanced Edition 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Data Interchange Services 6.0 for Windows CD	1 枚の CD-ROM。

以下の表は、Windows 用 WebSphere Process Server に付属する 64 ビット・メディアを示します。

表 17. Windows メディア・バック (64 ビット) の内容

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 1	<p>1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server (WBI ディレクトリー内) • Installation Factory (IF ディレクトリー内) • Update Installer (UpdateInstaller ディレクトリー内) • IBM User Interface ヘルプ・システム (IEHS ディレクトリー内) • マイグレーション・ツール (Migration ディレクトリー内) <p><i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i>、<i>WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD</i>、および <i>WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD</i> の任意のインストール可能コンポーネントをインストールし、その情報を表示するには、ルート・ディレクトリーの Launchpad アプリケーションを使用します。ただし、IBM Installation Factory は例外です。このコンポーネントは、279 ページの『IBM Installation Factory のインストール』に示す手順に従ってインストールする必要があります。</p>

表 17. Windows メディア・バック (64 ビット) の内容 (続き)

メディア・ラベル	供給形態
WebSphere Process Server V6.1 Disk 2	1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.1.0.13) (WAS ディレクトリー内)
WebSphere Application Server Network Deployment iFix CD	1 枚の CD-ROM。
WebSphere Process Server V6.1 DVD	1 枚の DVD。 <i>WebSphere Process Server V6.1 DVD</i> には、 <i>WebSphere Process Server V6.1 Disk 1</i> および <i>Disk 2</i> と同等の内容が収録されています。
WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD	1 枚の CD-ROM に、以下のインストール可能コンポーネントを収録しています。 <ul style="list-style-type: none"> IBM HTTP Server IBM Support Assistant Web サーバー・プラグイン マイグレーション・ツール
WebSphere Application Server Network Deployment 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。 バージョン 6.1
Edge Components 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
Edge Components for IPv6 6.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Restricted Enterprise Server Edition 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。
DB2 Runtime Client 9.1 CD	3 枚の CD-ROM。
DB2 Client 9.1 CD	1 枚の CD-ROM。

第 3 章 ドキュメンテーションのインストール

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムは、製品インストールのランチパッドからご使用のシステムにインストールすることができます。

始める前に

注: **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合 : WebSphere Process Server ヘルプ・システムは、Windows クライアント上にインストールする必要があります。

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードの作業を行うには、インターネットに接続してドキュメンテーションをダウンロードする必要があります。インターネットに接続できない場合はインストール・ウィザードが停止し、ご使用のコンピューターをインターネットに接続してからインストール・プロセスを再開するよう求められます。

このタスクについて

製品のドキュメンテーションは、製品インストールのランチパッドからインストール可能な IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム内で参照することができます。IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードでは、既存のヘルプ・システムがある場合にはその中にドキュメンテーションをインストールするまでの手順が示され、そうでない場合は新規にヘルプ・システムをインストールすることができます。

プロシージャ

1. インストール・ウィザードを開始します。そのためには、WebSphere Process Server ランチパッドの「ようこそ」ページで「**IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム**」をクリックし、次に IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・パネルで「**IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードの起動**」をクリックします。
2. IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードの「ようこそ」パネルで、「**次へ**」をクリックします。
3. ドキュメンテーションを既存のヘルプ・システムにインストールすることを確認するインストール・ウィザード・パネルで、次のいずれかのオプションを選択して「**次へ**」をクリックします。

オプション	説明
新しいインストールを作成する	インストール済みの IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムがない場合は、38 ページの『新しいヘルプ・システムのインストール』の説明に従ってください。

オプション	説明
既存のインストールを検索する	<p>IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムが既にインストールされている場合は、そのヘルプ・システム内にドキュメンテーションをドキュメント・プラグインとして一括でインストールすることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • インストール・ウィザードが既存のドキュメンテーションを検索するためのデフォルトのディレクトリーを確認し、「次へ」をクリックします。 • 既存のドキュメンテーションが検出された場合は、39 ページの『既存のヘルプ・システムへのドキュメンテーションのインストール』の説明に従って更新機能を使用し、新しいドキュメンテーションをインストールします。

次のタスク

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストールが完了すれば、ヘルプ・システムを始動して製品ドキュメンテーションを表示できます。

新しいヘルプ・システムのインストール

以前にインストールされた IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムがない場合は、WebSphere Process Server ランチパッドからインストールすることができます。

始める前に

37 ページの『第 3 章 ドキュメンテーションのインストール』の手順に従って、IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードを開始します。

プロシージャ

1. 「インストール・ロケーション」パネルで、IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム用のルート・ディレクトリーを選択します。

オプション	説明
デフォルトのロケーションを確認するには、「次へ」をクリックする。	root ユーザーによるインストール用のデフォルトのインストール・ロケーションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • AIX AIX プラットフォームの場合: /user/IBM/WebSphere/ProcServerDocs • HP-UX Solaris HP-UX および Solaris プラットフォームの場合: /opt/IBM/WebSphere/ProcServerDocs • Linux Linux プラットフォームの場合: /opt/ibm/WebSphere/ProcServerDocs • Windows Windows プラットフォームの場合: C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServerDocs
別のディレクトリーを指定するには、「参照」をクリックする。	インストール・ウィザードに表示されるファイル・ブラウザを使用して、ヘルプ・システムのインストール先とする別のディレクトリーを選択できます。

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードにより、IBM User Interface Help System Built on Eclipse のヘルプ・ビューアーがインストールされ、サーバーからインストール可能な資料のリストが表示されます。

2. インストールしたい資料のチェック・ボックスを選択し、「次へ」をクリックします。
3. 「次へ」をクリックして、インストールする項目のリストを確認します。「インストールの要約」パネルに、ヘルプ・システムが製品として、英語の資料と翻訳済み資料のセットが機能として、リストされます。英語版の資料は、別の言語版の資料を選択した場合でも、デフォルトで必ず一緒にインストールされます。インストール・ウィザードにより、ヘルプ・システムがインストールされます。
4. 「完了」をクリックすると、インストールが完了します。

次のタスク

ヘルプ・システムを始動すると、資料を表示できます。

既存のヘルプ・システムへのドキュメンテーションのインストール

IBM WebSphere Process Server のヘルプ・システムが既にインストールされている場合は、そのヘルプ・システム内で更新機能を使用して製品ドキュメンテーションをインストールすると、ドキュメンテーションを表示できます。

始める前に

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムにドキュメンテーションをインストールするには、インターネットに接続してドキュメンテーションをダウンロードする必要があります。また、IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのイ

インストール・ウィザードにより、ご使用のシステム内に互換性のあるヘルプ・システムが検出されていなければなりません。WebSphere Process Server ヘルプ・システム以外のヘルプ・ビューアーにドキュメンテーションをインストールする方法については、『Eclipse ベースの他のヘルプ・ビューアーへのドキュメンテーションのインストール』を参照してください。

このタスクについて

この作業に使用できるのは、以前にインストールされた IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのみです。旧バージョンの IBM User Interface Help System Built on Eclipse および Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーは、製品ドキュメンテーションのインストールを開始する更新機能を備えていないため、インストール・ウィザードでは検出されません。

プロシージャ

1. 既存のヘルプ・システム内から製品ドキュメンテーションをインストールするためにこのセクションに記載されている条件を満たしていない場合は、IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードの実行を取り消します。
2. 『ヘルプ・システム・ビューアーの始動』の説明に従って IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムを始動します。
3. ヘルプ・システムのツールバーで「更新」アイコンをクリックし、インストール済みドキュメンテーションのリストの下部にある「更新の検索 (Find Updates)」をクリックします。ヘルプ・システムにより IBM ヘルプ・システム・サーバーに自動接続され、インストール可能なドキュメンテーション・セットのリストが表示されます。このセットには各国語版の製品ドキュメンテーションが含まれており、別の製品に関するドキュメンテーション・セットが含まれる場合もあります。
4. インストールしたいドキュメンテーションのチェック・ボックスを選択します。
5. 「更新のインストール (Install Updates)」をクリックして、ドキュメンテーションのインストールを確定します。選択したドキュメンテーションが IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムにインストールされます。

次のタスク

ヘルプ・システムを終了してから再始動すると、新規にインストールされたドキュメンテーションを表示できます。

Eclipse ベースの他のヘルプ・ビューアーへのドキュメンテーションのインストール

Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーを使用していて、WebSphere Process Server のドキュメンテーションをそこで表示できるようにしたい場合は、ビューアーをそのドキュメンテーションを表示するように構成できます。

始める前に

Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーにドキュメンテーションをインストールするには、インターネットに接続してドキュメンテーションをダウンロードする必要があります。また、Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーのバージョンが 3.1.0 以上である必要があります。

このタスクについて


IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムは、特別に IBM ヘルプ・システム・サーバーからのドキュメンテーションに対して構成されています。しかし、Eclipse ベースの他のヘルプ・ビューアーがそのサーバーを処理するように構成することもできます。

プロシージャ

1. Eclipse ベースのヘルプ・ビューアーのプラグイン・ディレクトリーに移動します。
2. そのプラグイン・ディレクトリーで、Eclipse の「webapp」プラグイン・ディレクトリーを探します (通常は、org.eclipse.help.webapp_<version> のような名前です)。例えば、3.1.0 バージョンの Eclipse webapp プラグイン・フォルダーの名前は、org.eclipse.help.webapp_3.1.0 です。
3. そのプラグイン・フォルダーで、ファイル bookmarks.xml を編集のために開きます。
4. サイト・エレメント属性の値を追加するか、変更します。

オプション	説明
name (optional)	IBM Help System server
url	http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<bookmarks>
  <site name="IBM Help System server"
        url="http://publib.boulder.ibm.com/dmndhelp/downloads/" />
</bookmarks>
```

5. スタンドアロン・モードでヘルプ・システムを始動します。(ヘルプ・システムが既に稼働している場合は、停止してから再始動する必要があります。)
6. ブラウズ・ウィンドウ右上のツールバーの更新ボタン () をクリックします。ヘルプ・ビューアーに、現在インストールされているドキュメンテーションのリストが表示されます。以下に例を示します。

Installed documentation

- + IEHS information center document version 3.1.1
- + IEHS help system document version 3.1.1

[Find Updates]

7. 「更新の検索 (Find Updates)」をクリックすると、IBM ヘルプ・システム・サーバーにアクセスします。ヘルプ・ビューアーに、入手可能な更新のリストが表示されます。以下に例を示します。

Select updates you want to install

Updates for existing documentation

No updates for existing documentation

New documentation

- + WebSphere Process Server, English documentation version 6.1.0
- + WebSphere Enterprise Service Bus, English documentation version 6.1.0
- + WebSphere Integration Developer documentation in English version 6.1.0

[Install Updates]

8. インストールするドキュメンテーションを選択します。 WebSphere Process Server のドキュメンテーションがまだインストールされていない場合は、そのドキュメンテーション・セットが新規ドキュメンテーションのセクションにリストされます。
9. 「更新のインストール (Install Updates)」をクリックします。 サーバーからドキュメンテーション・セットをダウンロードすると、その進行状況がヘルプ・ビューアーに表示されます。 ヘルプ・ビューアーに、正常にインストールされたドキュメンテーションのリストが表示されます。
10. 「終了」をクリックしてインストール・プロセスを完了し、ヘルプ・ビューアーを再始動します。

次のタスク

ヘルプ・システムで、新規にインストールされたドキュメンテーションを表示できます。

ヘルプ・システム・ビューアーの開始

ヘルプ・システムを始動してヘルプの内容を Web ブラウザーに表示するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

プロシージャ

1. WebSphere ヘルプ・システムがインストールされているディレクトリーに移動します。
2. そのディレクトリーで、次のうち適切なスクリプトを開始します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:**
help_start.sh
 - **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** help_start.bat

初めて開始するときには、システムが始動し、ドキュメント・プラグインが表示されるまでに数分かかります。

結果

ご使用の Web ブラウザーに、ヘルプ・システムの製品資料が表示されます。

ヘルプ・システム・ビューアーの停止

ヘルプ・システムを始動または停止、およびヘルプの内容を Web ブラウザーに表示するには、ご使用のコンピューター上でコマンド・ファイルを使用します。

プロシージャ

1. WebSphere ヘルプ・システムがインストールされているディレクトリーに移動します。
2. そのディレクトリーで、次のうち適切なスクリプトを開始します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

help_end.sh

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: help_end.bat

システムによっては、終了するまでに少々時間がかかることもあります。

ドキュメンテーションのアンインストール

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム用のアンインストール・ウィザードを使用すると、ヘルプ・システムおよびその中に含まれているすべてのドキュメンテーションを、ご使用のローカル・システムから完全に削除できます。

始める前に

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのアンインストール・ウィザードの作業を行うには、インターネットに接続する必要があります。

プロシージャ

1. ヘルプ・システムがインストールされているディレクトリーに移動して `uninstall` サブディレクトリーを開き、アンインストーラー・スクリプトを起動します。
2. アンインストール・ウィザードの「ようこそ」パネルで「次へ」をクリックします。
3. 「要約」パネルで「次へ」をクリックして、表示されるヘルプ・システムが削除対象のものであることを確認します。 ヘルプ・システムの削除中は、アンインストール・ウィザードに進行パネルが表示されます。
4. アンインストール完了パネルで「終了」をクリックして、アンインストールを確認し、ウィザードを終了します。

第 4 章 WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件

WebSphere Process Server または WebSphere Process Server クライアントをインストールする前に、必ず一連の前提条件を満たす必要があります。

前提条件は以下のとおりです。

- インストールの計画を立てます。

インストールの計画、および WebSphere Process Server で必要とされるデータベースについて詳しくは、『WebSphere Process Server の計画』の各トピックを参照してください。

- 必ずすべてのハードウェア要件およびソフトウェア要件をシステムが満たすようにします。また、インストールのための十分なスペースをシステムに確保します (一時スペースを含む)。詳しくは、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> を参照してください。

注: WebSphere Application Server カスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) または WebSphere Application Server Network Deployment CIP の保守レベル 6.1.0.13 にインストールする際、6.1.0.13-WS-WAS-IFPK56164 暫定修正がインストールされていないと、エラー・メッセージが表示されます (あるいは、サイレント・インストールの場合はログ・ファイルに記録されます)。

この問題を解決するには、WebSphere ソフトウェア用の IBM Update Installer (本製品の CD 1、DVD、ESD イメージのいずれかに格納されています) を使用して、WebSphere Application Server V6.1.0.13、または WebSphere Application Server Network Deployment V6.1.0.13 のインストール済み環境に、6.1.0.13-WS-WAS-IFPK56164 暫定修正をインストールします。6.1.0.13-WS-WAS-IFPK56164 暫定修正は、本製品の追加の CD または ESD イメージに格納されています。

暫定修正の適用後は、WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client を、WebSphere Application Server または WebSphere Application Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールすることができます。

WebSphere Application Server インストールまたは WebSphere Application Server Network Deployment インストールの修正レベルがこれ以外である場合は、この追加ステップは不要です。

- インストール用のオペレーティング・システムを準備します。プラットフォーム固有の情報へのリンクについては、49 ページの『第 5 章 インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。
- パスポート・アドバンテージから取得したイメージからインストールする場合、401 ページの『パスポート・アドバンテージからインストールするときの特別な考慮事項』を参照し、ユーザー許可およびディレクトリー・セットアップに関するガイドラインを確認してください。

- DB2 Universal Database™ を使用する場合は、インストールの前に以下の手順を実行する必要があります。
 - インストール・ディスクにある DB2 ライセンス・ファイルを持っていることを確認します。DB2 製品のライセンス・キーを登録する必要があります。このキーの登録については、『db2licm コマンドによる DB2 製品ライセンス・キーの登録』を参照してください。
 - リモート・システム上にサーバーが置かれている場合、DB2 クライアントで DB2 データベースを構成するときは、クライアント・システムがサーバーと通信するように構成されていることと、DB2 ノードがカタログされていることを確認してください。詳しくは、DB2 Universal Database 資料を参照してください。
- Linux UNIX **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** Linux または UNIX システムで、DB2 データベースを構成する場合は、以下の操作を実行して、データベース環境を調達します。
 1. `/etc/group` を変更し、製品をインストールしたユーザー ID が `db2instance` と同じグループになるようにします。
 2. `db2instance/sqlllib/db2profile` スクリプトを実行してデータベース環境を調達します (`db2instance` は、使用するデータベース・インスタンスの名前に置き換えてください)。
- 機能の追加先または拡張の対象とするすべての製品で、サーバー、デプロイメント・マネージャー、およびノード・エージェントのすべてのプロセスを停止します。これらのタスクの実行方法については、77 ページの『第 6 章 サーバーおよびノードの停止』を参照してください。
- 機能の追加先または拡張の対象とする製品で、すべての保守パッケージをアンインストールします。`updi_root/update` コマンドを使用して Update Installer プログラムを開始し、すべての保守パッケージを検索してアンインストールします。これを行う理由は、製品を変換するために必要な機能およびコンポーネントには、保守が適用されていないためです。すべての保守パッケージを除去すると、製品全体が同じリリース・レベルになります。その後で、保守パッケージを再適用できます。
- Linux **Linux プラットフォームの場合:** WebSphere Process Server インストールに以下の項目があることを確認します。
 - カーネルおよび C ランタイム・ライブラリー
 - C++ ランタイム・ライブラリーの現在およびすべての互換性のあるバージョン
 - X Window ライブラリーおよびランタイム
 - GTK ランタイム・ライブラリー

前提条件が満たされたら、製品をインストールする準備は完了です。

db2licm コマンドによる DB2 製品ライセンス・キーの登録

WebSphere Process Server とともに提供される DB2 製品では、`nodelock` ファイルに含まれるライセンス・キー情報が使用されます。`nodelock` ファイルは、`db2licm` コマンドを実行して DB2 製品のライセンス・ファイルを指定することにより作成または更新されます。`nodelock` ファイルを作成または更新することは、DB2 製品ラ

イセンス・キーを登録することを意味します。DB2 製品ライセンス・キーは、DB2 がインストールされているコンピューターごとに `db2licm` コマンドを実行して登録する必要があります。

このタスクについて

重要: **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: DB2 製品 (DB2 UDB for iSeries® ではない) を i5/OS システム上でリモート・データベースとして使用する場合は、その常駐先のシステム上で DB2 製品ライセンス・キーを登録する必要があります。

ライセンス・ファイルは、*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD*、およびダウンロードしたインストール・イメージの `/db2/license` ディレクトリーに置かれている、`db2ese_o.lic` という名前のファイルです。DB2 のインストール時に製品ライセンス・キーが自動的に追加されるようにしたい場合は、DB2 セットアップ・ウィザードを起動する前に、インストール・イメージの `/db2/license` ディレクトリーにライセンス・キーをコピーする必要があります。

Linux **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: インスタンス所有者には、ライセンス・ファイルが置かれているディレクトリーに対する読み取り特権と書き込み特権が必要です。

DB2 製品ライセンス・キーをインスタンス所有者として登録するには、以下のステップを実行してください。

プロシージャ

1. インスタンス環境を作成し、自身のユーザー・アカウントをインスタンス所有者として定義します。
2. 適切なコマンドを使用して DB2 ライセンスを登録します。変数 `db2instance_path` には、DB2 インスタンスが作成された場所を、`fullpath` には、ライセンス・ファイルの絶対パスを指定します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
db2instance_path/adm/db2licm -a full_path/db2ese_o.lic
```

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `db2instance_path\bin\db2licm -a full_path\db2ese_o.lic`

結果

DB2 製品ライセンス・キーの情報は、以下のディレクトリーの `nodelock` ファイルに含まれています。

- **AIX** **AIX** プラットフォームの場合: `/var/ifor`
- **HP-UX** **Linux** **Solaris** **HP-UX**、**Linux**、および **Solaris** プラットフォームの場合: `/var/lum`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `DB2PATH/sql/lib/license`

第 5 章 インストールのためのオペレーティング・システムの準備

WebSphere Process Server のインストール要件はオペレーティング・システムによって異なることがあります。WebSphere Process Server をインストールするためのオペレーティング・システムを準備する必要があります。

オペレーティング・システムの準備には、ディスク・スペースの割り振りやオペレーティング・システムに対するパッチのインストールなどの変更が含まれます。IBM では、各オペレーティング・システム・プラットフォーム上で製品をテストしています。このテストにより、製品を正しく実行するためにオペレーティング・システムの変更が必要かどうかを検証します。必要な変更を加えなければ、製品は正しく実行されません。

インストール環境を準備する前に、『WebSphere Process Server の計画』のトピックを検討して、システムのセットアップ方法を決定してください。次に、このセクションで、ご使用のオペレーティング・システムに固有の手順を参照してください。

AIX システムのインストール準備

AIX システムで WebSphere Process Server のインストールの準備を行う方法について説明します。

始める前に

このインストールでは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) ウィザードが使用されます。製品はサイレント・インストールすることもできます。サイレント・モードは、コマンド行で、インストール前に編集した応答ファイルを示すパラメーターを指定して起動します。

制約事項: プロファイル管理ツールは Eclipse ベースのアプリケーションであり、Cygwin/X を使用したリモートの AIX マシン上での Eclipse ベースのアプリケーションの実行に関する既知の問題があります。これは、プロファイル管理ツールおよび Installation Factory の使用に影響を与えます。例えば、Cygwin/X をリモート AIX 上で使用する場合、プロファイル管理ツールのスプラッシュ画面が表示されますが、プロファイル管理ツールは実際には表示されません。こうした問題に関する既存の Bugzilla レポートの詳細については、https://bugs.eclipse.org/bugs/show_bug.cgi?id=36806 にある情報を参照してください。異なる X サーバー (Hummingbird Exceed など) が使用される場合、これらの問題は発生しません。

このタスクについて

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server をインストールするためにオペレーティング・システムを準備します。

プロシージャー

1. オプション: Mozilla ブラウザーがインストールされていない場合はインストールします。Mozilla ブラウザーは、ランチパッド・コンソールをサポートします。SMIT を使用して、Mozilla 1.4 または 1.7 以降のパッケージが既にインストールされているかどうかを確認します。まだインストールされていない場合、以下の手順を実行します。

a. AIX Toolbox for Linux アプリケーションから 2 つの前提条件
glib-1.2.10-2.aix4.3.ppc.rpm および gtkplus-1.2.10-4.aix5.1.ppc.rpm をダウンロードします。以下のロケーションからパッケージをダウンロードします。

- glib-1.2.10-2.aix4.3.ppc.rpm
- gtkplus-1.2.10-4.aix5.1.ppc.rpm

b. パッケージのダウンロード後に、それらをインストールします。次のコマンドを使用します。

```
rpm -Uvh glib-1.2.10-2.aix4.3.ppc.rpm gtkplus-1.2.10-4.aix5.1.ppc.rpm
```

c. サポートされる AIX 用 Mozilla (1.7.13 以降) の最新バージョンをダウンロードします。以下のロケーションから AIX 用 Mozilla をダウンロードします。

<http://www.ibm.com/servers/aix/browsers/>.

installp イメージをダウンロードし、SMIT からインストールします。

重要: <http://www.mozilla.org> Web サイトで配布されている Mozilla イメージについては、IBM ではテストもサポートも行っておりません。ダウンロード Web サイト (<http://www14.software.ibm.com/webapp/download/search.jsp?go=y&rs=mozilla>) からダウンロードした Mozilla イメージのバージョンは、テスト済みであり、サポートされています。

Mozilla 1.7.5 以前を使用すると、ISMP がインストール時の初期化に失敗することがあります。例えば、Launchpad リンクが失敗したように表示される場合があります。詳しくは、「V6.0.2: The WebSphere Application Server launchpad fails with Mozilla 1.7.5 (and earlier) on 64-bit AIX 5.2 or 5.3」を参照してください。

2. オプション: サポートされるブラウザのロケーションをエクスポートします。

ブラウザのロケーションを識別するコマンドを使用して、サポートされるブラウザのロケーションをエクスポートします。

例えば、Mozilla パッケージが /usr/bin/mozilla ディレクトリーにある場合、以下のコマンドを使用します。

```
export BROWSER=/usr/bin/mozilla
```

3. オプション: サイレント・インストールのみ: サイレント・インストール中に X Window サービスへの呼び出しの原因となる既知の ISMP 問題を許可します。

ご使用の AIX ワークステーションの DISPLAY 環境変数が、ログインされていない X サーバーを指すことがあります。これは、以下の 2 つの共通シナリオによって発生する可能性があります。

- ご使用の AIX ワークステーションで X サーバーは稼働しているが、ユーザーがログインしていないため、X サーバーがグラフィカル・ログイン画面で滞留しています。
- ご使用の AIX ワークステーションが、ログインされていないリモート X サーバーで X Window アプリケーションを表示するように構成されています。

ISMP が X Window サービスを呼び出すため、サイレント・インストールはいずれの場合も停止します。

以下の 2 つの解決策があります。

- サイレント・インストールを開始する前に、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを介してローカル X サーバーにログインします。
- 以下の例に示すように、ヌルまたはブランクを指すように DISPLAY 環境変数をエクスポートします。

```
export DISPLAY=null
```

4. システムにログオンします。ユーザー ID には root 権限がなくても構いません。
5. umask を選択します。これにより、所有者がファイルに対する読み取りおよび書き込みを行ったり、他のユーザーが一般的なシステム・ポリシーに従ってこれらのファイルにアクセスしたりできます。root ユーザーの場合は、022 の umask をお勧めします。root ユーザー以外の場合は、ユーザーがグループを共有するかどうかに応じて 002 または 022 の umask を使用できます。

umask 設定を確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask
```

umask 設定を 022 に設定するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask 022
```

6. 製品をインストールするワークステーションで、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus に関連したすべての Java プロセスを停止します。
7. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
8. System Management Interface Tool (SMIT) を使用して、インストールされるパッケージを表示し、以下のステップで説明するパッケージの更新が必要かどうかを判別します。
9. Info-ZIP 製品の最新バージョンをダウンロードし、ZIP ファイルの問題を回避します。 <http://www.info-zip.org> の Web サイトにある Info-ZIP パッケージの現行バージョンをダウンロードします。
10. AIX 5.2 保守レベル 10 に前提条件の x1C.rte 6.0 ランタイム・コードをインストールします。x1C.rte 6.0 ランタイム・コードは、Global Security Kit (GSKit) をインストールする前にインストールする必要があります。GSKit は、IBM HTTP Server のインストールまたは WebSphere Application Server の Web サーバー・プラグインのインストールの一環としてインストールされます。x1C.rte ランタイム・コードは、AIX サポート・サイト (AIX サポート・サイト) からフィックスとしてダウンロードしてください。AIX 5.2 の場合は、AIX 5.2 CD から x1C.rte 6.0 ランタイム・コードをインストールできます。

11. 十分なディスク・スペースを提供します。WebSphere Process Server およびその関連製品のインストールに必要なスペースについては、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、その製品のご使用のバージョンへのリンクを選択してください。

AIX 上の JFS ファイル・システムでは、ディレクトリーに拡張スペースを割り振ることができます。インストール・ウィザードに十分なスペースがない場合、ISMP は動的にスペース割り振りを増やすために、より多くのスペースを要求するシステム呼び出しを発行します。これが /usr ディレクトリーで発生したときに表示されるメッセージは、以下の例と類似しています。

注: 次のファイル・システムがインストール中に拡張されます:

```
/usr
(NOTE: The following file systems will be expanded during the installation:
/usr)
```

プロファイル作成のための必要スペースが AIX 上にあることを手動で確認します。基礎となる ISMP コードに既知の問題があったため、AIX システムでのスペース検査が正しく行われません。

12. java.lang.NullPointerException エラーを回避するため、リンク切れのあるファイル・システムをアンマウントします。

ファイル・システムへのリンクが切れている場合、インストールしようとする、以下のエラーが発生して失敗する可能性があります。

An error occurred during wizard bean change notification:

```
java.lang.NullPointerException
at com.ibm.wizard.platform.aix.AixFileUtils.
  getFileSystemData(AixFileUtils.java:388)
at com.ibm.wizard.platform.aix.AixFileUtils.
  getPartitionDataWithExecs(AixFileUtils.java:172)
at com.ibm.wizard.platform.aix.AixFileUtils.
  getPartitionData(AixFileUtils.java:104)
at com.ibm.wizard.platform.aix.AixFileServiceImpl.
  getPartitionNames(AixFileServiceImpl.java:397)
...
```

以下の手順を使用して、問題のあるファイル・システムを識別してアンマウントします。

- a. **df -k** コマンドを使用して、ファイル・システムへのリンク切れを検査します。1024-blocks 列にブランク値がリストされているファイル・システムを検索します。値が「-」(ダッシュ)になっているエントリーは問題ありません。以下の例は、iw031864:/cdrom/db2_v91_aix53 ファイル・システムと、(おそらく) /dev/lv00 ファイル・システムにも問題が存在することを示します。/proc ファイル・システムに問題はありません。

```
> df -k
Filesystem      1024-blocks      Free %Used    Iused %Iused Mounted on
/dev/hd4         1048576         447924   58%      2497    1% /
/dev/hd3         4259840         2835816  34%       484    1% /tmp
/proc            -                -        -        -      - /proc
/dev/lv01        2097152         229276   90%      3982    1% /storage
/dev/lv00
/dev/hd2         2097152         458632   79%      42910   9% /usr
iw031864:/cdrom/db2_v91_aix53
```

- b. 最初に、例の `iw031864:/cdrom/db2_v91_aix53` ファイル・システムのように、明確な問題を示しているファイル・システムをアンマウントします。これを行うには、次のコマンドのいずれかを使用します。

```
> umount /cdrom/db2_v91_aix53
> umount /cdrom
```
 - c. インストールを再開します。
 - d. 問題が解決しない場合は、ブランク値があるファイル・システム (この例の `/dev/lv00` ファイル・システムなど) をアンマウントしてください。
 - e. リンク切れのあるファイル・システムをアンマウントしても問題が解決しない場合は、ワークステーションをリブートして、再度インストールを開始してください。
13. 前提条件および相互前提条件が、必要なリリース・レベルであることを確認します。

インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチを検査しますが、前提条件をまだ確認していない場合は、WebSphere Process Server でサポートされる前提条件となるハードウェアとソフトウェアを確認してください。この情報にアクセスするには、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> のサイトで WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、ご使用のバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

14. `emacs` または他のフリーウェアで提供される `cp` コマンドではなく、システムの `cp` コマンドが使用されていることを確認します。

システムの `cp` コマンドではなく、フリーウェア・パッケージの一部である `cp` コマンドを使用して製品をインストールする場合、インストールが正常に完了したように見えても、製品によってインストールされる Java 2 SDK では、`install_root/java` ディレクトリー (`install_root` は WebSphere Process Server のインストール・ディレクトリーを表す) のファイルが欠落する可能性があります。

ファイルが欠落していると、必要なシンボリック・リンクが壊れる可能性があります。WebSphere Process Server 製品を正常にインストールするには、PATH からフリーウェアの `cp` コマンドを除去する必要があります。

オペレーティング・システムに `emacs` または他のフリーウェアをインストールしている場合は、以下のステップを実行して、システムで使用されている `cp` コマンドを識別し、フリーウェアの `cp` コマンドが使用されている場合には、それを非活動化します。

- a. WebSphere Process Server 製品用のインストール・プログラムを実行する前に、コマンド・プロンプトで `which cp` と入力します。
- b. その結果のディレクトリー出力に `freeware` が含まれている場合、PATH から `freeware` ディレクトリーを除去します。例えば、出力が `.../freeware/bin/cp` のような場合は、PATH からこのディレクトリーを除去します。

- c. WebSphere Process Server のインストール後、freeware ディレクトリーを PATH に戻します。
15. 製品ディスクのご使用のコピー上の Java 2 SDK が正常に動作していることを確認します。

お客様用の製品 CD を 製品 CD または DVD のコピーによって作成したか、お客様用の DVD を電子ダウンロード・イメージから作成した場合は、以下のステップを実行して、Java 2 SDK が正常に動作することを確認します。

- a. *WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* としてお客様が作成した製品ディスクで、/JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin ディレクトリーに移動します。 これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
cd /JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin
```

- b. Java 2 SDK のバージョンを確認します。 これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
./java -version
```

Java 2 SDK が完全であれば、コマンドはエラーを伴わずに正常に完了します。

- c. 作成したその他すべての製品ディスクについて、この手順を繰り返します。

結果

この手順によって、WebSphere Process Server をインストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。

次のタスク

オペレーティング・システムの準備が完了すると、WebSphere Process Server をインストールできます。別の選択可能なさまざまなインストール手段についての説明は、79 ページの『第 7 章 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

HP-UX システムのインストール準備

HP-UX システムで WebSphere Process Server のインストールの準備を行う方法を学習します。

始める前に

このインストールでは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) ウィザードが使用されません。製品はサイレント・インストールすることもできます。サイレント・モードは、コマンド行で、インストール前に編集した応答ファイルを示すパラメーターを指定して起動します。

制約事項: プロファイル管理ツールは Eclipse ベースのアプリケーションで、Cygwin/X を使用したリモート HP-UX マシン上での Eclipse ベースのアプリケーションの実行に関する既知の問題があります。これは、プロファイル管理ツールおよび Installation Factory の使用に影響を与えます。こうした問題に関する既存の Bugzilla レポートの詳細については、<https://bugs.eclipse.org/bugs/>

show_bug.cgi?id=36806 にある情報を参照してください。異なる X サーバー (Hummingbird Exceed など) が使用される場合、これらの問題は発生しません。

このタスクについて

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server をインストールするためにオペレーティング・システムを準備します。

プロシージャ

1. システムにログオンします。ユーザー ID には root 権限がなくても構いません。
2. umask を選択します。これにより、所有者がファイルに対する読み取りおよび書き込みを行ったり、他のユーザーが一般的なシステム・ポリシーに従ってこれらのファイルにアクセスしたりできます。root ユーザーの場合は、022 の umask をお勧めします。root ユーザー以外の場合は、ユーザーがグループを共用するかどうかに応じて 002 または 022 の umask を使用できます。

umask 設定を確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask
```

umask 設定を 022 に設定するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask 022
```

3. オプション: Mozilla ブラウザーがインストールされていない場合はインストールします。Mozilla ブラウザーは、ランチパッド・コンソールをサポートしません。

Mozilla ブラウザーは、<http://www.mozilla.org> からダウンロードしてインストールします。

4. オプション: サポートされるブラウザのロケーションをエクスポートします。

ブラウザのロケーションを識別するコマンドを使用して、サポートされるブラウザのロケーションをエクスポートします。

例えば、Mozilla パッケージが /usr/bin/mozilla ディレクトリーにある場合、以下のコマンドを使用します。

```
export BROWSER=/usr/bin/mozilla
```

5. 製品をインストールするワークステーションで、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus に関連したすべての Java プロセスを停止します。
6. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
7. 十分なディスク・スペースを提供します。WebSphere Process Server およびその関連製品のインストールに必要なスペースについては、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、その製品のご使用のバージョンへのリンクを選択してください。
8. WebSphere Process Server をサポートするように、カーネル値を設定します。

HP-UX のカーネル値の一部は、製品にとって通常は小さすぎます。カーネル値の設定方法については、57 ページの『HP-UX システムでのカーネル値の設定』を参照してください。

9. 前提条件および相互前提条件が、必要なリリース・レベルであることを確認します。

インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチを検査しますが、前提条件をまだ確認していない場合は、WebSphere Process Server でサポートされる前提条件となるハードウェアとソフトウェアを確認してください。この情報にアクセスするには、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> のサイトで WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、ご使用のバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

10. `emacs` または他のフリーウェアで提供される `cp` コマンドではなく、システムの `cp` コマンドが使用されていることを確認します。

システムの `cp` コマンドではなく、フリーウェア・パッケージの一部である `cp` コマンドを使用して製品をインストールする場合、インストールが正常に完了したように見えても、製品によってインストールされる Java 2 SDK では、`install_root/java` ディレクトリー (`install_root` は WebSphere Process Server のインストール・ディレクトリーを表す) のファイルが欠落する可能性があります。

ファイルが欠落していると、必要なシンボリック・リンクが壊れる可能性があります。WebSphere Process Server 製品を正常にインストールするには、PATH からフリーウェアの `cp` コマンドを除去する必要があります。

オペレーティング・システムに `emacs` または他のフリーウェアをインストールしている場合は、以下のステップを実行して、システムで使用されている `cp` コマンドを識別し、フリーウェアの `cp` コマンドが使用されている場合には、それを非活動化します。

- a. WebSphere Process Server 製品用のインストール・プログラムを実行する前に、コマンド・プロンプトで `which cp` と入力します。
 - b. その結果のディレクトリー出力に `freeware` が含まれている場合、PATH から `freeware` ディレクトリーを除去します。例えば、出力が `.../freeware/bin/cp` のような場合は、PATH からこのディレクトリーを除去します。
 - c. WebSphere Process Server のインストール後、`freeware` ディレクトリーを PATH に戻します。
11. 製品ディスクのご使用のコピー上の Java 2 SDK が正常に動作していることを確認します。

お客様用の製品 CD を製品 CD または DVD のコピーによって作成したか、お客様用の DVD を電子ダウンロード・イメージから作成した場合は、以下のステップを実行して、Java 2 SDK が正常に動作することを確認します。

- a. *WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* としてお客様が作成した製品ディスクで、`/JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin` ディレクトリーに移動します。 これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
cd /JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin
```
- b. Java 2 SDK のバージョンを確認します。 これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
./java -version
```

Java 2 SDK が完全であれば、コマンドはエラーを伴わずに正常に完了します。
- c. 作成したその他すべての製品ディスクについて、この手順を繰り返します。

結果

この手順によって、WebSphere Process Server をインストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。

次のタスク

オペレーティング・システムの準備が完了すると、WebSphere Process Server をインストールできます。別の選択可能なさまざまなインストール手段についての説明は、79 ページの『第 7 章 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

HP-UX システムでのカーネル値の設定

HP-UX のカーネル値の一部は、WebSphere Process Server インストールにとって通常は小さすぎます。特定のカーネル・パラメーターをより高い値に設定する必要があります。

このタスクについて

以下の手順を使用して、カーネル・パラメーターを設定します。

プロシージャ

1. ホスト・ワークステーションに `root` としてログインします (まだログインしていない場合)。
2. 物理メモリーを決定する。特定のカーネル・パラメーターを物理容量より大きく設定するのを避けるために、物理メモリーを確認しておく必要があります。物理メモリーを決定するには、以下のステップを実行します。
 - a. `/usr/sbin/sam` コマンドを使用して HP-UX System Administration Manager (SAM) ユーティリティーを開始します。
 - b. 「パフォーマンス・モニター (Performance Monitors)」 > 「システム・プロパティ (System Properties)」 > 「メモリー (Memory)」を選択します。
 - c. 「Physical Memory」の値をメモし、「OK」を選択します。
 - d. SAM ユーティリティーを終了します。
3. `maxfiles` および `maxfiles_lim` などの特定のパラメーターを 4096 より高く設定する必要があるため、最初に `/usr/conf/master.d/core-hpux` ファイルを編集

して、SAM ユーティリティーが 2048 より大きい値を設定できるようにする必要があります。このファイルを編集するには、以下のステップを実行します。

- a. テキスト・エディターで `/usr/conf/master.d/core-hpux` ファイルを開きます。
 - b. `"*range maxfiles<=2048"` という行を `"*range maxfiles<=60000"` に変更します。
 - c. `"*range maxfiles_lim<=2048"` という行を `"*range maxfiles_lim<=60000"` に変更します。
 - d. ファイルを保管してクローズします。
4. 古い値が `/var/sam/boot.config` ファイルに保管されている可能性があるため、以下のステップを実行して、SAM ユーティリティーで強制的に `boot.config` ファイルを新規作成する必要があります。
- a. 既存バージョンの `/var/sam/boot.config` ファイルを `/tmp` ディレクトリーなどの別のロケーションに移動します。
 - b. SAM ユーティリティーを開始します。
 - c. 「**カーネル構成 (Kernel Configuration)**」 > 「**構成可能パラメーター (Configurable Parameters)**」を選択します。「**カーネル構成 (Kernel Configuration)**」ウィンドウが開き、新しい `boot.config` ファイルが表示されます。

または、次のコマンドを使用して、`boot.config` ファイルを再ビルドします。

```
# /usr/sam/lbin/getkinfo -b
```

5. 以下のようにして、新規カーネル・パラメーター値を設定します。
 - a. `/usr/sbin/sam` コマンドを使用して SAM ユーティリティーを開始します。
 - b. SAM ユーティリティーで、「**カーネル構成 (Kernel Configuration)**」 > 「**構成可能パラメーター (Configurable Parameters)**」を選択します。
 - c. 次の表に示す各パラメーターについて、以下の手順を実行します。
 - 1) 変更するパラメーターを強調表示します。
 - 2) 「**アクション (Actions)**」 > 「**構成可能パラメーターの変更 (Modify Configurable Parameter)**」を選択します。
 - 3) 「**Formula/Value**」フィールドに新しい値を入力します。
 - 4) 「**OK**」を選択します。

WebSphere Process Server を実行するための標準的なカーネル設定を 表 18 で示される順序で変更します。

表 18. *WebSphere Process Server* の推奨カーネル設定

パラメーター	値
STRMSGSZ	65535
dbc_max_pct	25
maxdsiz	805306358 (0x30000000) 2048000000 (同じシステムで複数のプロファイルを実行している場合)
maxfiles_lim	8196 (maxfiles の前にこの値を変更する)

表 18. WebSphere Process Server の推奨カーネル設定 (続き)

パラメーター	値
maxfiles	8000
maxssiz	8388608
maxswapchunks	8192
maxusers	512
nkthread	7219
max_thread_proc	3000
nproc	4116 (maxuprc の前にこの値を変更する)
maxuprc	512
msgtql	2046
msgmap	2048
msgssz	32 (msgmax の前にこの値を変更する)
msgseg	32767 (msgmax の前にこの値を変更する)
msgmnb	65535 (0x10000) (msgmax の前にこの値を変更する) 131070 (同じシステムで複数のプロファイルを実行している場合)
msgmax	65535 (0x10000) 131070 (同じシステムで複数のプロファイルを実行している場合)
msgmni	50
nfile	58145
nflocks	3000
ninode	60000
npty	2024
nstrpty	1024
nstrtel	60
sema	1
semaem	16384 (0x4000)
semmns	16384 (0x4000) (semmap の前にこの値を変更する)
semmni	2048 (semmap の前にこの値を変更する)
semmap	514

表 18. WebSphere Process Server の推奨カーネル設定 (続き)

パラメーター	値
semmnu	1024
semume	200
semvmx	32767
shmем	1
shmmax	2147483647 (0x7FFFFFFF)
shmmni	1024
shmseg	1024

WebSphere Process Server と IBM DB2 が同じワークステーション上にあると、カーネル値が 58 ページの表 18 に示した値より大きくなる場合があります。

DB2 Universal Database バージョン 8.x の推奨 HP-UX カーネル構成パラメーターについては、DB2 インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/index.jsp>) を参照してください。

6. 「アクション (Actions)」 > 「新規カーネルの処理 (Process New Kernel)」を選択します。
7. 情報ウィンドウで「はい」を選択して、ワークステーションを再始動する決定を確認します。

スクリーン内の指示に従ってワークステーションを再始動し、新しい設定値を有効にします。

8. 表示を HP 以外のワークステーションにリダイレクトする場合は、WebSphere Process Server インストール・ウィザードを実行する前に以下のステップを実行します。
 - a. 次のコマンドを実行して、アプリケーションにアクセス可能なすべての public ロケールに関する情報を取得する。


```
# locale -a
```
 - b. 表示される出力からシステムに応じた値を選択し、LANG 環境変数にこの値を設定する。LANG の値を en_US.iso88591 に設定するコマンドの例を示します。


```
# export LANG=en_US.iso88591
```

i5/OS システムのインストール準備

i5/OS システムで WebSphere Process Server のインストールの準備を行う方法を学習します。

始める前に

このインストールでは、InstallShield Multiplatform (ISMP) ウィザードが使用されます。i5/OS でのインストールを実行するには、次の 3 とおりの方法があります。

- i5/OS システムに接続されている Windows クライアントでの、対話式インストール
- i5/OS システムに接続されている Windows クライアントでの、サイレント・インストールによる非対話式インストール
- i5/OS システムでの、サイレント・インストールによる非対話式インストール

サイレント・モードは、コマンド行で、インストール前に編集した応答ファイルを示すパラメーターを指定して起動します。

このタスクについて

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server をインストールするためにオペレーティング・システムを準備します。

プロシージャ

1. bin ディレクトリで stopServer スクリプトを使用して、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus 上のすべてのサーバー・アクティビティを停止します。
2. wrksbs コマンドを使用して、QWAS61 サブシステムが終了していることを確認します。サブシステムがまだアクティブな場合は、endsbs コマンドを使用して終了させてください。
3. 十分なディスク・スペースを提供します。WebSphere Process Server およびその関連製品のインストールに必要なスペースについては、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、その製品のご使用のバージョンへのリンクを選択してください。
4. 使用するシステムがハードウェア前提条件およびソフトウェア前提条件をすべて満たしていることを確認します。必要な場合は前提ソフトウェアをインストールします。<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、その製品のご使用のバージョンへのリンクを選択してください。

WebSphere Process Server に推奨される最小限のハードウェア要件を満たさない i5/OS システムで System i サーバーが稼働している場合でも、製品をインストールして実行することは可能です。ただし、WebSphere Process Server 環境の動作が遅くなるほか、アプリケーションが正常に実行されない可能性があります。

5. 適切な i5/OS 累積 PTF パッケージを入手してインストールします。詳しくは、『System i の累積 PTF』を参照してください。

結果

この手順によって、WebSphere Process Server をインストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。

次のタスク

オペレーティング・システムの準備が完了すると、WebSphere Process Server をインストールできます。別の選択可能なさまざまなインストール手段についての説明は、79 ページの『第 7 章 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

製品ライブラリー、ディレクトリー、サブシステム、ジョブ・キュー、ジョブ記述、および出力キュー

i5/OS プラットフォームでは、WebSphere Process Server を他のプラットフォームにインストールする場合とは異なる構成を使用します。このトピックでは、WebSphere Process Server が i5/OS プラットフォーム上で使用する、製品ライブラリー、ディレクトリー、サブシステム、ジョブ・キュー、ジョブ記述、および出力キューについて説明します。

製品ライブラリーおよびディレクトリー

デフォルトのインストールでは、i5/OS 用の WebSphere Process Server は、以下のライブラリーとディレクトリーを使用します。

QWBI61

製品ライブラリー。

/QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer

デフォルトのルート・ディレクトリー。すべての WebSphere Process Server プロファイルで共有される製品データが含まれます。

/QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer

デフォルトの WebSphere Process Server ユーザー・データ・ルート・ディレクトリー。すべての WebSphere Process Server プロファイルおよび profileRegistry サブディレクトリーは、このディレクトリーの下に作成されます。

サブシステム

i5/OS 用の WebSphere Process Server のインストール済み環境では、以下のサブシステムのいずれか 1 つを使用できます。

QWAS61

WebSphere Application Server によって提供および構成されたサブシステム。デフォルトでは、サーバーはこのサブシステム内で稼働します。

QWBI61

WebSphere Process Server 固有のサブシステム。QWBI61 サブシステム内でサーバーを稼働させるには、startServer スクリプトを変更し、サーバーを再始動する必要があります。

以下のパラメーターを指定して startServer スクリプトを実行します。

- **-sbs** *QWBI61/QWBI61*
- **-jobq** *QWBI61/QWBIJOBQ*
- **-jobd** *QWBI61/QWBIJOB*
- **-outq** *QWBI61/QWBIJOB*

詳しくは、『i5/OS でのサブシステムの構成』を参照してください。

ジョブ・キュー

i5/OS 用の WebSphere Process Server は、使用されるサブシステムに基づいて、サーバー、ノード・エージェント、およびデプロイメント・マネージャー・プロセス用の以下のいずれかのジョブ・キューを使用します。

- QWASJOBQ キューは QWAS61 サブシステムで使用します。
- QWBIJOBQ キューは QWBI61 サブシステムで使用します。

ジョブ記述

i5/OS 用の WebSphere Process Server は、使用されるサブシステムに基づいて、サーバー、ノード・エージェント、およびデプロイメント・マネージャー・プロセス用の以下のいずれかのジョブ記述を使用します。

- QWASJOBQ 記述は QWAS61 サブシステムで使用します。
- QWBIJOBQ 記述は QWBI61 サブシステムで使用します。

出力キュー

i5/OS 用の WebSphere Process Server は、使用されるサブシステムに基づいて、サーバー、ノード・エージェント、およびデプロイメント・マネージャー・プロセス用の以下のいずれかの出力キューを使用します。

- QWASOUTQ キューは QWAS61 サブシステムで使用します。
- QWBIOUTQ キューは QWBI61 サブシステムで使用します。

i5/OSでのサブシステムの構成

startServer コマンドを使用すると、デフォルトの WebSphere Application Server サブシステムおよびネイティブ・オブジェクトを WebSphere Business Integration (WBI) サブシステムおよびネイティブ・オブジェクトに変更できます。

このタスクについて

デフォルトでは、WebSphere Process Server は、WebSphere Application Server により提供されるサブシステム内で動作します。そのサブシステムは QWAS61 という名前であり、WebSphere Application Server によってあらかじめ提供され、構成されています。さらに、WBI ネイティブ・オブジェクトは QWBIJOBQ、QWBIOUTQ、QWBIJOBQ、および QWBI61 です。デフォルトでは、WebSphere Process Server は WebSphere Process Server サーバーがそれらを使用するようには構成されていません。

ただし、このサーバーは、必要に応じて QWBI61 サブシステムを使用するように切り替えることができます。例えば、以下の手順を実行すると、WebSphere Business Integration のネイティブ・オブジェクトを使用して、WebSphere Business Integration サブシステムで WebSphere Business Integration アプリケーション・サーバーを始動できます。

プロシージャ

1. i5/OS コマンド行に移動して Qshell を開始します。
2. Qshell から、以下のコマンドを入力します。

```
startServer - profileName ProcSrv01 -jobd QWBI61/QWBIJOBQ -jobq
/QWBI61/QWBIJOBQ -outq /QWBI61/QWBIOUTQ -sbs /QWBI61/QWBI61
```

Linux システムのインストール準備

Linux システムでの WebSphere Process Server のインストールを準備する方法について説明します。

始める前に

このインストールでは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) ウィザードが使用されます。製品はサイレント・インストールすることもできます。サイレント・モードは、コマンド行で、インストール前に編集した応答ファイルを示すパラメーターを指定して起動します。

このタスクについて

このトピックで説明するステップの多くは、すべての Linux ディストリビューションに共通ですが、中には追加のステップが必要な Linux ディストリビューションもあります。すべての共通ステップを実行し、ご使用のディストリビューションに必要な追加ステップがあればそれらも完了してください。ご使用のディストリビューションが WebSphere Process Server でサポートされているにもかかわらずこのトピック内に記載されていない場合は、製品サポート・サイト (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) にアクセスして、製品リリース後の技術情報のうち、ご使用のオペレーティング・システムに該当する情報を確認してください。該当の技術情報がない場合、追加ステップは不要な可能性があります。通常、追加のステップが必要となるのは、ディストリビューションのデフォルト・インストールを実行しても必要なライブラリー機能やオペレーティング・システム機能が提供されない場合です。WebSphere Process Server のインストール先となるのが、カスタマイズされた Linux システムであり、ご使用ディストリビューションのデフォルト・インストールによって提供されるパッケージとは著しく異なるパッケージがインストールされている場合は、WebSphere Process Server の実行に必要なパッケージをそのカスタマイズされた環境に確実にインストールしておいてください。WebSphere Process Server は、各 Linux ディストリビューションおよびその更新に必要なパッケージのリストを保持していません。

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server をインストールするためにオペレーティング・システムを準備します。

プロシージャ

1. システムにログオンします。ユーザー ID には root 権限がなくても構いません。
2. `umask` を選択します。これにより、所有者がファイルに対する読み取りおよび書き込みを行ったり、他のユーザーが一般的なシステム・ポリシーに従ってこれらのファイルにアクセスしたりできます。root ユーザーの場合は、022 の `umask` をお勧めします。root ユーザー以外の場合は、ユーザーがグループを共用するかどうかに応じて 002 または 022 の `umask` を使用できます。

`umask` 設定を確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask
```

umask 設定を 022 に設定するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask 022
```

3. オプション: Mozilla Firefox Web ブラウザーをダウンロードしてインストールし、製品ディスク上のランチパッド・アプリケーションを使用できるようにします。Firefox ブラウザーがない場合は、<http://www.mozilla.com/en-US/firefox/> からそのブラウザーをダウンロードしてインストールします。

重要: Firefox をインストールしたディレクトリー以外のディレクトリーから ">firefoxURL" を開始する必要がある場合があるため、Firefox がパスに入っているか確認してください。 ">ln -s /locationToFirefox/firefox firefox" とタイプ入力することにより、/opt/bin ディレクトリーへのシンボリック・リンクを追加できます。

4. オプション: サポートされるブラウザーのロケーションをエクスポートします。

ブラウザーのロケーションを識別するコマンドを使用して、サポートされるブラウザーのロケーションをエクスポートします。

例えば、Firefox のパッケージが /opt/bin/firefox ディレクトリーにある場合は、次のコマンドを使用します。

```
export BROWSER=/opt/bin/firefox
```

5. 製品をインストールするワークステーションで、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus に関連したすべての Java プロセスを停止します。
6. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
7. 十分なディスク・スペースを提供します。WebSphere Process Server およびその関連製品のインストールに必要なスペースについては、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、その製品のご使用のバージョンへのリンクを選択してください。
8. 前提条件および相互前提条件が、必要なりリース・レベルであることを確認します。

インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチを検査しますが、前提条件をまだ確認していない場合は、WebSphere Process Server でサポートされる前提条件となるハードウェアとソフトウェアを確認してください。この情報にアクセスするには、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> のサイトで WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、ご使用のバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

9. **addNode** および **importWasprofile** コマンドで発生する問題を回避するには、bash コマンド・シェル・プロファイルの ulimit 設定値を増やします。**addNode** コマンド・スクリプトは、ノードを追加すると失敗することがあります。また、**importWasprofile** コマンドは、構成アーカイブをインポートすると失敗する場合があります。セッションのログイン時にロードされる bash シェ

ル・プロファイル・スクリプトで、カーネルの `ulimit` 設定値に高い値を設定してください。`ulimit` の設定は、シェル・プロファイル・スクリプトにコマンドを追加して、Linux コマンド・シェル上で行ってください。シェル・プロファイル・スクリプトは、通常、次のホーム・ディレクトリにあります。`ulimit` の値を 8192 に設定するには、次のコマンドを発行します。

- a. `cd ~`
- b. `vi .bashrc`
- c. `ulimit -n 8192`

注: `ulimit` コマンドを実行するには、`root` 特権が必要です。

`addNode` コマンドの詳細は、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21223909> を参照してください。

10. ファイルを修正した場合は、`etc/issue` ファイルのオリジナル・コピーを復元します。インストール・ウィザードの `prereqChecker` プログラムは、このファイルを使用して、オペレーティング・システムのバージョンを検査します。オリジナル・バージョンを復元できない場合は、サポートされていないオペレーティング・システムについての「オペレーティング・システム・レベル・チェック (Operating System Level Check)」メッセージを無視してください。警告が出てもインストールは正常に続行できます。
11. `emacs` または他のフリーウェアで提供される `cp` コマンドではなく、システムの `cp` コマンドが使用されていることを確認します。

システムの `cp` コマンドではなく、フリーウェア・パッケージの一部である `cp` コマンドを使用して製品をインストールする場合、インストールが正常に完了したように見えても、製品によってインストールされる Java 2 SDK では、`install_root/java` ディレクトリ (`install_root` は WebSphere Process Server のインストール・ディレクトリを表す) のファイルが欠落する可能性があります。

ファイルが欠落していると、必要なシンボリック・リンクが壊れる可能性があります。WebSphere Process Server 製品を正常にインストールするには、`PATH` からフリーウェアの `cp` コマンドを除去する必要があります。

オペレーティング・システムに `emacs` または他のフリーウェアをインストールしている場合は、以下のステップを実行して、システムで使用されている `cp` コマンドを識別し、フリーウェアの `cp` コマンドが使用されている場合には、それを非活動化します。

- a. WebSphere Process Server 製品用のインストール・プログラムを実行する前に、コマンド・プロンプトで `which cp` と入力します。
 - b. その結果のディレクトリ出力に `freeware` が含まれている場合、`PATH` から `freeware` ディレクトリを除去します。例えば、出力が `.../freeware/bin/cp` のような場合は、`PATH` からこのディレクトリを除去します。
 - c. WebSphere Process Server のインストール後、`freeware` ディレクトリを `PATH` に戻します。
12. ディストリビューション固有のセットアップ作業がある場合は、それを完了します。

ご使用のディストリビューションに必要なステップをすべて実行してください。詳しくは、以下の WebSphere Application Server 固有のトピックを参照してください。

- Red Hat Enterprise Linux 5
- Red Hat Enterprise Linux 4
- SuSE Linux Enterprise Server 9.0 SP2 または 3

上記以外のサポートされているディストリビューションを使用している場合は、WebSphere Application Server のサポート・サイトにアクセスして、ご使用のディストリビューションに関する技術情報が公表されているかどうかを確認します。技術情報が公表されている場合は、該当のフィックスを適用します。

13. 製品ディスクのご使用のコピー上の Java 2 SDK が正常に動作していることを確認します。

お客様用の製品 CD を 製品 CD または DVD のコピーによって作成したか、お客様用の DVD を電子ダウンロード・イメージから作成した場合は、以下のステップを実行して、Java 2 SDK が正常に動作することを確認します。

- a. *WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* としてお客様が作成した製品ディスクで、`/JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin` ディレクトリーに移動します。 これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
cd /JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin
```

- b. Java 2 SDK のバージョンを確認します。 これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
./java -version
```

Java 2 SDK が完全であれば、コマンドはエラーを伴わずに正常に完了します。

- c. 作成したその他すべての製品ディスクについて、この手順を繰り返します。

結果

この手順によって、WebSphere Process Server をインストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。

次のタスク

オペレーティング・システムの準備が完了すると、WebSphere Process Server をインストールできます。別の選択可能なさまざまなインストール手段についての説明は、79 ページの『第 7 章 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

Linux パッケージのインストールと検証

Linux システム上で WebSphere Process Server 製品が必要とする前提条件ライブラリー (パッケージ) をインストールおよび検証する方法について説明します。

始める前に

次の手順を実行する前に、Linux オペレーティング・システムをインストールします。

このタスクについて

Linux オペレーティング・システムで `compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3` パッケージが必要であること、およびパッケージに 2 つのバージョンがあることを前提としています。1 つ目のバージョンは、32 ビット・プラットフォーム用であり、もう 1 つのバージョンは、64 ビット・プラットフォーム用です。この手順では、パッケージがインストールされているかどうかを確認するためにオペレーティング・システムを照会する方法、オペレーティング・システムのディスクに欠落しているパッケージを見つける方法、およびパッケージをインストールする方法を示しています。

この例では、PowerPC® 64 ビット・ハードウェア・プラットフォームで、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) を使用します。また、この例では、RHEL で、`compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3` パッケージの 32 ビット・バージョンおよび 64 ビット・バージョンの両方が必要であるものとします。

プロシージャ

1. パッケージがすでにインストールされているかどうかを判別するために、次のコマンドを実行してオペレーティング・システムを照会します。

```
rpm -qa | grep compat-libstdc++-33-3.2.3-
```

この例では、オペレーティング・システムで一致するパッケージが見つからなかったため、ブランク行が表示されます。

また、`grep` 引数を指定せずに次のコマンドを実行して検索すると、ファイルについての明示的メッセージを表示することができます。

```
rpm -q compat-libstdc++-33-3.2.3-
```

オペレーティング・システムより、次のメッセージが返されます。

```
パッケージ compat-libstdc++-33-3.2.3- がインストールされていません  
(package compat-libstdc++-33-3.2.3- is not installed)
```

2. オペレーティング・システムのメディア上で、関連するすべてのパッケージを見つけ、それらの完全修飾位置を取得します。

この例では、オペレーティング・システムのメディアは、`/media/cdrom` にマウントされている CD であると仮定しています。ご使用の CD-ROM 装置は、例えば、`/media/cdrecorder` などの別の位置にある場合があります。

```
find /media/cdrom -name compat-libstdc++-33-3.2.3-*
```

この例では、オペレーティング・システムで 2 つの一致するパッケージ名が見つかります。1 つ目のパッケージは 32 ビット・バージョンであり、もう 1 つのパッケージは 64 ビット・バージョンです。

```
/media/cdrom/RedHat/RPMS/compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3.ppc.rpm  
/media/cdrom/RedHat/RPMS/compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3.ppc64.rpm
```

3. 次のコマンドを実行して最初の欠落しているパッケージをインストールします。

```
rpm -ivh /media/cdrom/RedHat/RPMS/compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3.ppc.rpm
```

4. 次のコマンドを実行して 2 番目の欠落しているパッケージをインストールします。

```
rpm -ivh /media/cdrom/RedHat/RPMS/compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3.ppc64.rpm
```

5. オプション: **1 つのコマンドでパッケージを検索およびインストールする代替方式:** 次のコマンドを使用してパッケージを検出し、検出したすべてのパッケージをインストールします。

前のステップで説明した手順でパッケージを検出し、インストールしようとしたパッケージのみが次のコマンドによってインストールされていることを確認します。

```
find /media/cdrom -name compat-libstdc++-33-3.2.3-* | xargs rpm -ivh
```

この単一のコマンドにより両方のパッケージがインストールされます。

6. オプション: **既存のパッケージを更新する代替コマンド:** 次のコマンドを使用して、欠落しているパッケージを検出しインストールするか、既存のパッケージを検出し更新します。

```
find /media/cdrom -name compat-libstdc++-33-3.2.3-* | xargs rpm -Uvh
```

この単一のコマンドを実行すると、パッケージがインストールされていない場合はそのパッケージがインストールされます。パッケージがインストールされている場合、このコマンドを実行すると、パッケージが新しいバージョンに更新されます。

次のタスク

必須パッケージは、オペレーティング・システムごとに異なります。各 Linux オペレーティング・システムで必要なパッケージのリストについては、64 ページの『Linux システムのインストール準備』を参照してください。

Solaris システムのインストール準備

Solaris システムでの WebSphere Process Server のインストールを準備する方法について説明します。

始める前に

このインストールでは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) ウィザードが使用されます。製品はサイレント・インストールすることもできます。サイレント・モードは、コマンド行で、インストール前に編集した応答ファイルを示すパラメーターを指定して起動します。

このタスクについて

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server をインストールするためにオペレーティング・システムを準備します。

プロシージャ

1. システムにログオンします。ユーザー ID には root 権限がなくても構いません。
2. umask を選択します。これにより、所有者がファイルに対する読み取りおよび書き込みを行ったり、他のユーザーが一般的なシステム・ポリシーに従ってそれらのファイルにアクセスしたりできます。root ユーザーの場合は、022 の

umask をお勧めします。 root ユーザー以外の場合は、ユーザーがグループを共有するかどうかに応じて 002 または 022 の umask を使用できます。

umask 設定を確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask
```

umask 設定を 022 に設定するには、以下のコマンドを実行します。

```
umask 022
```

3. 「Solaris ソフトウェア・グループの選択 (Select Solaris Software Group)」パネルで「**グループ全体 (Entire Group)**」オプションを選択します。
4. オプション: Mozilla ブラウザーがインストールされていない場合はインストールします。 Mozilla ブラウザーは、ランチパッド・コンソールをサポートします。 Mozilla ブラウザーは、<http://www.mozilla.org> からダウンロードしてインストールします。
5. オプション: サポートされるブラウザのロケーションをエクスポートします。

ブラウザのロケーションを識別するコマンドを使用して、サポートされるブラウザのロケーションをエクスポートします。

例えば、Mozilla パッケージが /usr/bin/mozilla ディレクトリーにある場合、以下のコマンドを使用します。

```
BROWSER=/usr/bin/mozilla  
export BROWSER
```

6. オプション: Exceed を構成して Automatic Font Substitution を使用不可に設定します。 Hummingbird Exceed パッケージを使用して Solaris オペレーティング・システムが稼動しているワークステーションに接続してから、プロファイル管理ツールを起動すると、一部のフォント・サイズとスタイルが、ネイティブの Solaris の表示から同一操作を実行したときとは異なって表示されます。フォント・サイズとスタイルは、バンドルされている Java ランタイム環境 (JRE) でのフォント選択に基づいて変化します。フォントをさまざまに変化させないようにするには、以下の手順で Hummingbird Exceed を構成して Automatic Font Substitution を使用不可に設定します。
 - a. Hummingbird Exceed のユーザー・インターフェースから、「**Xconfig**」 > 「**Font**」 > 「**Font Database**」 > 「**Disable (Automatic Font Substitution)**」を選択します。
 - b. 「**OK**」を選択します。
 - c. Hummingbird Exceed パッケージを再始動します。
7. 製品をインストールするワークステーションで、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus に関連したすべての Java プロセスを停止します。
8. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
9. 十分なディスク・スペースを提供します。WebSphere Process Server およびその関連製品のインストールに必要なスペースについては、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、その製品のご使用のバージョンへのリンクを選択してください。

10. WebSphere Process Server をサポートするように、カーネル値を設定します。

Solaris のカーネル値の一部は、製品にとって通常は小さすぎます。カーネル値の設定方法については、72 ページの『Solaris システムでのカーネル値の設定』を参照してください。

11. 前提条件および相互前提条件が、必要なリリース・レベルであることを確認します。

インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチを検査しますが、前提条件をまだ確認していない場合は、WebSphere Process Server でサポートされる前提条件となるハードウェアとソフトウェアを確認してください。この情報にアクセスするには、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> のサイトで WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、ご使用のバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

12. emacs または他のフリーウェアで提供される **cp** コマンドではなく、システムの **cp** コマンドが使用されていることを確認します。

システムの **cp** コマンドではなく、フリーウェア・パッケージの一部である **cp** コマンドを使用して製品をインストールする場合、インストールが正常に完了したように見えても、製品によってインストールされる Java 2 SDK では、*install_root/java* ディレクトリー (*install_root* は WebSphere Process Server のインストール・ディレクトリーを表す) のファイルが欠落する可能性があります。

ファイルが欠落していると、必要なシンボリック・リンクが壊れる可能性があります。WebSphere Process Server 製品を正常にインストールするには、PATH からフリーウェアの **cp** コマンドを除去する必要があります。

オペレーティング・システムに emacs または他のフリーウェアをインストールしている場合は、以下のステップを実行して、システムで使用されている **cp** コマンドを識別し、フリーウェアの **cp** コマンドが使用されている場合には、それを非活動化します。

- a. WebSphere Process Server 製品用のインストール・プログラムを実行する前に、コマンド・プロンプトで `which cp` と入力します。
 - b. その結果のディレクトリー出力に `freeware` が含まれている場合、PATH から `freeware` ディレクトリーを除去します。例えば、出力が `.../freeware/bin/cp` のような場合は、PATH からこのディレクトリーを除去します。
 - c. WebSphere Process Server のインストール後、`freeware` ディレクトリーを PATH に戻します。
13. 製品ディスクのご使用のコピー上の Java 2 SDK が正常に動作していることを確認します。

お客様用の製品 CD を 製品 CD または DVD のコピーによって作成したか、お客様用の DVD を電子ダウンロード・イメージから作成した場合は、以下のステップを実行して、Java 2 SDK が正常に動作することを確認します。

- a. *WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* としてお客様が作成した製品ディスクで、`/JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin` ディレクトリーに移動します。 これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
cd /JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin
```

- b. Java 2 SDK のバージョンを確認します。 これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
./java -version
```

Java 2 SDK が完全であれば、コマンドはエラーを伴わずに正常に完了します。

- c. 作成したその他すべての製品ディスクについて、この手順を繰り返します。

結果

この手順によって、WebSphere Process Server をインストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。

次のタスク

オペレーティング・システムの準備が完了すると、WebSphere Process Server をインストールできます。別の選択可能なさまざまなインストール手段についての説明は、79 ページの『第 7 章 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

Solaris システムでのカーネル値の設定

Solaris のカーネル値の一部は、通常、WebSphere Process Server インストール済み環境にとっては小さすぎます。特定のカーネル・パラメーターをより高い値に設定する方法について説明します。

このタスクについて

以下の手順を使用して、カーネル・パラメーターを設定します。

プロシージャ

1. ホスト・ワークステーションに `root` としてログインします (まだログインしていない場合)。
2. ワークステーション構成を確認します。

これを実行するには、以下のコマンドを入力します。

```
sysdef -i
```

3. カーネル値を設定します。 変更する必要があるカーネルのパラメーターおよびその変更方法は、インストールした Solaris のバージョンにより異なります。

• Solaris 9 がインストールされている場合は、次の操作を実行します。

- a. `/etc/system` ファイルを編集します。以下の例に示されている値を使用します。

```
set shmsys:shminfo_shmmax = 4294967295
set shmsys:shminfo_shmseg = 1024
set shmsys:shminfo_shmmni = 1024
set semsys:seminfo_semaem = 16384
set semsys:seminfo_semni = 1024
set semsys:seminfo_semmap = 1026
set semsys:seminfo_semmsl = 100
set semsys:seminfo_semopm = 100
set semsys:seminfo_semnu = 2048
set semsys:seminfo_semume = 256
set msgsys:msginfo_msgmap = 1026
set msgsys:msginfo_msgmax = 65535
set rlim_fd_cur = 1024
```

- b. オペレーティング・システムをリブートします。
- Solaris 10 がインストールされている場合は、次の操作を実行します。
 - a. etc/project ファイルの shmmax の値を、**projmod** コマンドを使用して次のように変更します。

```
# projmod -a -K "project.max-shm-memory=(priv,4G,deny)" default
```
 - b. オペレーティング・システムをリブートします。

次のタスク

Solaris システムの設定の詳細については、Sun Web サイト (<http://docs.sun.com>) の管理資料を参照してください。

Windows システムのインストール準備

Windows システムでの WebSphere Process Server のインストールを準備する方法について説明します。

始める前に

このインストールでは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) ウィザードが使用されます。製品はサイレント・インストールすることもできます。サイレント・モードは、コマンド行で、インストール前に編集した応答ファイルを示すパラメーターを指定して起動します。

マップされていないネットワーク・ドライブ (Windows エクスプローラーでは `¥¥hostname¥sharename` など) または仮想ドライブからの WebSphere Process Server のインストールはサポートされていません。最初にネットワーク・ドライブを Windows ドライブ名 (Z: など) にマップしてから、WebSphere Process Server をインストールする必要があります。

このタスクについて

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server をインストールするためにオペレーティング・システムを準備します。

プロシージャ

1. システムにログオンします。

ユーザー ID には管理者特権がなくても構いません。ただし、管理者以外のユーザーとして製品をインストールする場合、いくつかの制約があります。例えば、WebSphere Process Server 用の Windows サービスを作成することはできません。また、プログラムはオペレーティング・システムへの登録を行いません。制約の詳細については、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x のインフォメーション・センターにある次のトピックを参照してください。 http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_nonroot.html

i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** ランチパッドを使用して i5/OS システム上で WebSphere Process Server をインストールする場合には、Windows システムにサインオンします。Windows システムは、System i サーバーに接続して対話式インストールを実行するためのクライアント・マシンとして使用します。ランチパッドは、Windows クライアント上で稼働します。i5/OS システムでインストールを実行するには、そのシステムに有効な i5/OS ユーザー・プロファイルを使用する必要があります。ユーザー・プロファイルには *ALLOBJ 権限と *SECADM 権限が必要です。これらの権限がなければ、インストールは失敗します。

ユーザー ID が管理者グループに属している場合、インストール・ウィザードは Windows ユーザー ID に拡張ユーザー権限を付与します。サイレント・インストールでは、これらの権限は与えられません。Windows プラットフォームで新規ユーザー ID を作成してサイレント・インストールを行う場合、正しくサイレント・インストールを実行できるようにするには、その前に、システムを再始動して、そのユーザー ID の適切な権限をアクティブにする必要があります。

WebSphere Process Server を Windows サービスとしてインストールする場合は、スペースを含むユーザー ID を使用しないでください。ユーザー ID にスペースが含まれていると妥当性検査ができず、インストールを続行できません。

ヒント: Windows サービスの作成は、コマンド行から次のオプションを追加してグラフィカル・インターフェースを起動することにより、無効にすることができます。install.bat -OPT PROF_winserviceCheck="false"

2. オプション: ランチパッドを使用できるようにするため、サポートされている最新のバージョンの Internet Explorer を以下のロケーションからダウンロードします。

<http://www.microsoft.com/windows/ie/ie6/downloads/critical/ie6sp1/default.mspx>

3. オプション: Mozilla 1.7.13 以降をダウンロードしてインストールします。
4. 製品をインストールするワークステーションで、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus に関連したすべての Java プロセスを停止します。
5. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
6. process_spawner.exe プログラムのインスタンスをすべて停止します。

7. 十分なディスク・スペースを提供します。WebSphere Process Server およびその関連製品のインストールに必要なスペースについては、
<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> にある WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、その製品のご使用のバージョンへのリンクを選択してください。
8. 前提条件および相互前提条件が、必要なリリース・レベルであることを確認します。インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチを検査しますが、前提条件をまだ確認していない場合は、WebSphere Process Server でサポートされる前提条件となるハードウェアとソフトウェアを確認してください。この情報にアクセスするには、
<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> のサイトで WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、ご使用のバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

9. 必要であれば、Microsoft Windows Script Host バージョン 5.6 をダウンロードして、Windows オペレーティング・システム上に「スタート」メニュー項目を適切に作成します。

このコンポーネントが既にインストールされているかどうかを確認して、インストールされていない場合にインストールするには、コマンド・ウィンドウを開いて、`cscript` と入力します。

- このコンポーネントがインストールされている場合は、コンポーネントの使用法とオプションの情報が表示されます。ステップ 10 に進んでください。
- このコンポーネントがインストールされていない場合は、以下のいずれかの Microsoft Web ページからダウンロードしてインストールする必要があります。

- Windows XP の場合: <http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?FamilyID=c717d943-7e4b-4622-86eb-95a22b832caa&DisplayLang=en>

- Windows Server 2003 の場合: <http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?FamilyID=887fce82-e3f5-4289-a5e3-6cbb818623aa&DisplayLang=en>

10. 製品ディスクのご使用のコピー上の Java 2 SDK が正常に動作していることを確認します。

お客様用の製品 CD を製品 CD または DVD のコピーによって作成したか、お客様用の DVD を電子ダウンロード・イメージから作成した場合は、以下のステップを実行して、Java 2 SDK が正常に動作することを確認します。

- a. *WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* としてお客様が作成した製品ディスクで、
`¥JDK¥jre.pak¥repository¥package.java.jre¥java¥jre¥bin` ディレクトリに移動します。これを実行するには、以下のコマンドを発行します。
`cd ¥JDK¥jre.pak¥repository¥package.java.jre¥java¥jre¥bin`
- b. Java 2 SDK のバージョンを確認します。これを実行するには、以下のコマンドを発行します。

```
java -version
```

Java 2 SDK が完全であれば、コマンドはエラーを伴わずに正常に完了します。

- c. 作成したその他すべての製品ディスクについて、この手順を繰り返します。

結果

この手順によって、WebSphere Process Server をインストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。

次のタスク

オペレーティング・システムの準備が完了すると、WebSphere Process Server をインストールできます。別の選択可能なさまざまなインストール手段についての説明は、79 ページの『第 7 章 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

第 6 章 サーバーおよびノードの停止

機能の追加先とする製品、または拡張あるいはアンインストールを行う製品のすべてで、サーバー、デプロイメント・マネージャー、ノード・エージェントのすべてのプロセスを停止します。

このタスクについて

以下の手順を実行します。

プロシージャ

- 1 つ以上のデプロイメント・マネージャーがインストールされている場合は、**stopManager** コマンドを使用して各 *dmgr* プロセスを停止します。例えば、プラットフォームに応じて、以下のコマンドのいずれかを実行します (ここで、*profile_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール・ディレクトリーを表します)。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: *profile_root/bin/stopManager*
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
profile_root/bin/stopManager.sh
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
profile_root¥bin¥stopManager.bat

セキュリティが有効な場合は、代わりに以下のコマンドのいずれかを使用します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: *profile_root/bin/stopManager -user user_ID -password password*
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
profile_root/bin/stopManager.sh -user user_ID -password password
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
profile_root¥bin¥stopManager.bat -user user_ID -password password
2. **stopNode** コマンドを使用して、ノード・エージェント・プロセスを停止します。システムのデプロイメント・マネージャーに統合されているノードがある場合は、統合されたノードと共に各サーバーで実行されている可能性のある個々のノード・エージェント・プロセスを停止します。例えば、プラットフォームに応じて、以下のいずれかのコマンドを実行し、ノード・エージェント・プロセスを停止します (ここで、*profile_root* は統合ノードのインストール・ディレクトリーを表します)。
- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: *profile_root/bin/stopNode*
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
profile_root/bin/stopNode.sh

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

`profile_root%bin%stopNode.bat`

サーバーが稼働中で、セキュリティが使用可能な場合は、代わりに以下のコマンドのいずれかを使用します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopNode -user user_ID -password password`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/bin/stopNode.sh -user user_ID -password password`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`profile_root%bin%stopNode.bat -user user_ID -password password`

3. **stopServer** コマンドを使用して、稼働しているスタンドアロン・サーバーをそれぞれ停止します。サーバー上のすべてのプロファイルのサーバー・プロセスをすべて停止します。例えば、プラットフォームに応じて、以下のいずれかのコマンドを実行し、プロファイル内のサーバーを停止します。この例では、`profile_root` は、以下のようなプロファイルのインストール・ロケーションを表します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopServer serverName`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/bin/stopServer.sh server1`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`profile_root%bin%stopServer.bat server1`

サーバーが稼働中で、セキュリティが使用可能な場合は、代わりに以下のコマンドのいずれかを使用します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/stopServer serverName -user user_ID -password password`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/bin/stopServer.sh server1 -user user_ID -password password`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`profile_root%bin%stopServer.bat server1 -user user_ID -password password`

次のタスク

これで、WebSphere 製品に機能を追加したり、この製品を拡張またはアンインストールできるようになりました。

第 7 章 ソフトウェアのインストール

WebSphere Process Server 製品ファイルの入手には 2 とおりの方法があります。1 つは製品パッケージのディスクを使用する方法です。もう 1 つは、パスポート・アドバンテージ・サイトからインストール・イメージをダウンロードする方法です (ダウンロードのライセンス交付を受けた場合)。ソフトウェアをインストールするには、グラフィカル・インターフェース・モードまたはサイレント・モードでインストール・ウィザードを使用します。サイレント・モードでは、インストール・ウィザードはグラフィカル・インターフェースを表示せずに、応答ファイルから応答を読み取ります。

WebSphere Process Server のソフトウェアをインストールする前に、現在の環境およびビジネス要件を評価して、実装するシステムがニーズを満たしていることを確認する必要があります。WebSphere Process Server のようなミドルウェアの場合、ご使用のエンタープライズ情報システム (EIS) のさまざまな面 (容量やセキュリティなど) を評価する必要があります。

インストールの計画、および WebSphere Process Server で必要とされるデータベースについては、『WebSphere Process Server の計画』の各トピックを参照してください。

次に、45 ページの『第 4 章 WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』にあるインストール前提条件を確認します。

インストールを計画して前提条件を検討したら、該当するディスクまたは配布メディアからソフトウェアをインストールします。応答ファイルを使用してソフトウェアをサイレント・インストールするか、インストール・ウィザードを使用して対話式にインストールするかを選択できます。

すべてのプラットフォームで対話式にインストールするには、94 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』を参照してください。

- **Linux** **UNIX** **Windows** Linux、UNIX、および Windows プラットフォームにサイレント・インストールするには、131 ページの『Linux、UNIX、および Windows へのサイレント・インストール』を参照してください。
- **i5/OS** Windows ワークステーションのコマンド行から i5/OS プラットフォームにサイレント・インストールするには、138 ページの『Windows ワークステーションのコマンド行から i5/OS をサイレント・インストールする』を参照してください。
- **i5/OS** System i サーバーから i5/OS プラットフォームにサイレント・インストールするには、135 ページの『i5/OS での System i サーバーからのサイレント・インストール』を参照してください。

ソフトウェアをインストールすると、製品の中核のファイル一式がワークステーション上に作成されます。これらのファイルは、スタンドアロン・サーバーおよびデプロイメント環境を構成する場合に必要です。

インストール中には、以下のオプションを選択できます。

- 既に WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment がインストールされている場合は、以下のいずれかのオプションを選択できます。
 - WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client を、同じワークステーション上の WebSphere Application Server のインストールと共存する別個のインストールとしてインストールする。このオプションは、初めて WebSphere Process Server をインストールする場合に最適です。
 - WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x を拡張して WebSphere Process Server 機能に対応させる。
- 既にバージョン 6.1.x の WebSphere Process Server、WebSphere Process Server Client、または WebSphere Enterprise Service Bus がインストールされている場合は、以下のいずれかのオプションを選択できます。
 - WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client を、同じワークステーションで既存のインストールと共存する別個のインストールとしてインストールする。
 - 既存の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client インストールを WebSphere Process Server インストールに変換する。
 - 既存の WebSphere Process Server のインストールに追加機能をインストールする。

制約事項: Linux UNIX Windows **Linux、UNIX、および Windows**
プラットフォームの場合: バージョン 6.1.x の WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client を、既存のバージョン 6.0.x の WebSphere Process Server、WebSphere Process Server Client、または WebSphere Enterprise Service Bus に上書きインストールすることはできません。既存のインストールをバージョン 6.1 にマイグレーションする必要があります。

詳しくは、『WebSphere Process Server へのマイグレーション (Migrating to WebSphere Process Server)』を参照してください。

- 実行するインストールのタイプは、以下のオプションから選択できます。
 - **標準的インストール** (デフォルト)。デフォルトのインストール選択項目および構成を使用して、必要に応じて WebSphere Process Server をインストールし、WebSphere Application Server Network Deployment もインストールします。また、WebSphere Process Server サンプルもインストールできます。さらに、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。またはこのオプションを省略して、後でプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成することも可能です。
 - **デプロイメント環境インストール**。必要に応じて WebSphere Process Server をインストールし、WebSphere Application Server Network Deployment もインストールし、さらにデプロイメント環境のセットアップについてガイドします。デプロイメント・マネージャーを作成して、そのデプロイメント・マネージャーにデプロイメント環境パターンを選択するか、あるいは管理対象ノードに適用する 1 つまたは複数のクラスターを選択できます。

- クライアント・インストール。デフォルトのインストール選択項目および構成を使用して WebSphere Process Server Client をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment をインストールします。これにより、WebSphere Process Server と対話するクライアント・アプリケーションの実行が可能になります。

該当するディスクまたは配布メディアからソフトウェアをインストールした後に、最新のフィックスパックを上書きインストールします。WebSphere Process Server へのフィックスパックのインストールについて詳しくは、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) の『*Recommended fixes*』に記載されている説明を参照してください。

標準的インストールまたはデプロイメント環境インストールのいずれかを実行したら、プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、カスタム・プロファイル、またはデプロイメント環境構成を作成することができます。また、ファースト・ステップ・コンソールを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルが正常に作成されたことを検証したり、サーバーを始動または停止したり、その他のタスクを実行したりすることもできます。

Launchpad の開始

WebSphere Process Server の Launchpad は、サーバー環境全体のインストールを一元的に実行するための参照ポイントであり、この環境には、WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client、WebSphere Application Server Network Deployment、一連の Web 開発ツール、Web サーバー、メッセージ・サービス・クライアント、および追加のサポート・ソフトウェアや資料を組み込むことができます。

始める前に

Launchpad アプリケーションは、*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD*、およびダウンロード済みインストール・イメージに収録されています。開始する前に、以下を実行してください。

- 45 ページの『第 4 章 WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』のトピックを参照して、製品をインストールするための前提条件を確認します。
- Launchpad は Web アプリケーションなので、サポートされるバージョンの Web ブラウザーがインストールされている必要があります。

Linux

UNIX

Windows

Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合: 各プラットフォームでサポートされる Web ブラウザーのインストール方法の詳細は、49 ページの『第 5 章 インストールのためのオペレーティング・システムの準備』のプラットフォーム固有のトピックを参照してください。

このタスクについて

以下の手順を実行して、Launchpad を使用します。

プロシージャ

1. まだログオンしていない場合は、システムにログオンします。

Linux **UNIX** **Windows** **Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:** 使用するユーザー ID に root 特権や管理者特権は必要ありません。しかし、製品を非ルート・ユーザーまたは非管理者ユーザーとしてインストールする場合、いくつかの制約があります。例えば、WebSphere Process Server 用の Windows または Linux サービスを作成することはできません。また、プログラムはオペレーティング・システムへの登録を行いません。非 root ユーザーとしてインストールを実行する場合の制約の詳細は、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x のインフォメーション・センターにあるトピック『Limitations of non-root installer』を参照してください。

i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** ランチパッドを使用して i5/OS システム上で WebSphere Process Server をインストールする場合には、Windows システムにサインオンします。Windows システムは、System i サーバーに接続して対話式インストールを実行するためのクライアント・マシンとして使用します。Launchpad は、Windows クライアント上で稼働します。i5/OS システムでインストールを実行するには、そのシステムに有効な i5/OS ユーザー・プロファイルを使用する必要があります。ユーザー・プロファイルには *ALLOBJ 権限と *SECADM 権限が必要です。これらの権限がなければ、インストールは失敗します。

2. まだメディアにアクセスしていない場合は、製品 CD または DVD からインストールするか、パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。
 - 製品 CD または DVD からインストールする場合は、「WebSphere Process Server V6.1 Disk 1」または「WebSphere Process Server V6.1 DVD」というラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします (詳しくは、385 ページの『Linux および UNIX オペレーティング・システムでのディスク・ドライブのマウント』を参照してください)。
 - パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールする場合は、イメージを抽出したディレクトリーにナビゲートします。
3. 製品 CD または DVD からインストールするか、パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法で Launchpad を開始します。
 - 製品 CD または DVD からインストールする場合:
 - **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** (Windows システムのクライアント・マシンを使用して i5/OS システムに接続します。) ディスク・ドライブのルート・ディレクトリーで、コマンド行からコマンド `launchpad.exe` を入力します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** コマンド `mount_point/launchpad.sh` を入力します。ここで、`mount_point` は Linux または UNIX システムのマウント・ポイントを表します。

- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** ディスク・ドライブのルート・ディレクトリで、コマンド行からコマンド `launchpad.exe` を入力します。
- パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールする場合は、以下のようにコマンドを入力します。ここで、`extract_directory` は電子的イメージを抽出したディレクトリを表します。
 - **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** (Windows システムのクライアント・マシンを使用して i5/OS システムに接続します。) コマンド行から `extract_directory%1launchpad.exe` と入力します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `extract_directory/launchpad.sh`
 - **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** コマンド行から `extract_directory%1launchpad.exe` と入力します。

Launchpad が表示されます。Launchpad の開始に関する問題が発生した場合は、349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』に記載されているトラブルシューティング情報を使用して問題を修正してください。

4. オプション: Launchpad がご使用のシステムの言語で初期化されていない場合は、「言語選択:」フィールドで適切な言語を選択します。

結果

Launchpad を使用して、WebSphere Process Server および関連製品のインストールを開始できます。Launchpad によってインストール可能なコンポーネントの説明については、『Launchpad のオプション』を参照してください。

次のタスク

このトピックにアクセスした元のインストール手順に戻って、手順を継続してください。

Launchpad のオプション

Launchpad for WebSphere Process Server には、サーバー環境全体をインストールするときに選択可能ないくつかのオプションがあります。この環境には、WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client、WebSphere Application Server Network Deployment、一連の Web 開発ツール、Web サーバー、メッセージ・サービス・クライアント、およびその他のサポート・ソフトウェアや資料を組み込むことができます。

重要: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** Launchpad を使用して WebSphere Process Server を i5/OS システムにインストールする場合は、Windows システムにサインオンします。対話式インストールの実行時に、Windows システムをクライアント・マシンとして使用して System i サーバーに接続します。Launchpad は Windows クライアント上で実行し、Launchpad オプション用にリストされるすべての Windows コマンドを使用します。

Launchpad には、*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1 CD* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD*、*WebSphere Application Server Network Deployment*

Supplements V6.1 CD、および WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1 CD (Linux IA32 および Windows IA32 メディアにのみ収録されています) のインストール可能コンポーネントごとに、リンクがあります。

このトピック内の以下のセクションでは、さまざまな Launchpad パネルについて詳細に説明しています。

- 『「ようこそ」パネル』
- 85 ページの『WebSphere Process Server for Multiplatforms インストール・パネル』
- **i5/OS** 85 ページの『IBM WebSphere Profile Management Tool Client for i5/OS のインストール・パネル』
- **AIX** **Linux** **Solaris** **Windows** 86 ページの『「メッセージ・サービス・クライアントのインストール」パネル』
- **AIX** **Linux** **Solaris** **Windows** 86 ページの『「Message Service Client for C/C++ のインストール」パネル』
- **Windows** 87 ページの『「Message Service Client for .NET のインストール」パネル』
- 87 ページの『「追加ソフトウェアのインストール」パネル』
- **Linux** **UNIX** **Windows** 88 ページの『「IBM HTTP Server のインストール」パネル』
- 89 ページの『「Web サーバー・プラグインのインストール」パネル』
- 90 ページの『Application Client のインストール・パネル』
- **Linux** **Windows** 91 ページの『「Application Server Toolkit のインストール」パネル』
- 92 ページの『「WebSphere ソフトウェアのインストール用の IBM Update Installer」パネル』
- 92 ページの『「WebSphere Process Server 用の IBM Installation Factory」パネル』
- 93 ページの『「IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール」パネル』
- **Linux** **UNIX** **Windows** 93 ページの『「IBM Support Assistant のインストール」パネル』

「ようこそ」パネル

「ようこそ」パネルは、Launchpad の開始時に最初に表示されるパネルです。右または左のペインで項目を選択すると、個々の Launchpad パネルが表示されます。ここでは、コンポーネントのインストール・プログラムへのリンクと、(ほとんどのコンポーネントの場合) 製品について、製品のインストール方法、および製品を構成して使用する方法が説明されている資料へのリンクが含まれます。

WebSphere Process Server for Multiplatforms インストール・パネル

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインから「**WebSphere Process Server のインストール**」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

WebSphere Process Server for Multiplatforms のインストール・ウィザードの起動
WebSphere Process Server for Multiplatforms をインストールするには、インストール・ウィザードを開始します。このプログラムは、*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:**
/WBI/install
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** %WBI%\install.bat

インフォメーション・センターのオープン

オンラインで利用可能な、PDF ブック形式や Eclipse 文書プラグイン形式の、(ローカル・システムにダウンロードしてインストールできる) 完全な技術的製品情報にリンクします。

製品の概要およびインストール情報の読み取り

WebSphere Process Server for Multiplatforms とそのコンポーネント、および段階的な製品インストール手順に関する概要情報を提供します。このリンクから、WebSphere Process Server ライブラリー Web サイト <http://www.ibm.com/software/integration/wps/library/infocenter/doc> にアクセスできます。

重要な情報の表示

このリリースに関する最新の重要フィックスや情報へのリンクを示します。

IBM WebSphere Profile Management Tool Client for i5/OS のインストール・パネル

制約事項: **i5/OS** この選択項目が表示されるのは、i5/OS プラットフォーム用 Launchpad の場合のみです。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインから「**IBM WebSphere Profile Management Tool Client for i5/OS のインストール**」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

IBM Profile Management Tool Client for i5/OS のインストール・ウィザードの起動
インストール・ウィザードを使用して IBM WebSphere Profile Management Tool Client for i5/OS をインストールします。このツールは、i5/OS システム上の WebSphere Process Server インストールでプロファイルを作成したり拡張したりするのに使用します。

「メッセージ・サービス・クライアントのインストール」パネル

制約事項: AIX Linux Solaris Windows この選択項目が表示されるのは、AIX PPC32、AIX PPC64、Linux IA32、Linux IA64、Solaris SPARC、Solaris SPARC64、および Windows IA32 プラットフォーム用の Launchpad の場合のみです。

メッセージ・サービス・クライアントは、WebSphere Process Server のメッセージング機能を非 Java 環境に拡張します。これらの機能は、TCP/IP、SSL、HTTP、および HTTPS を利用して、WebSphere ファミリー (WebSphere Application Server、WebSphere MQ、および WebSphere Message Broker など) との相互協調処理をサポートします。要求/応答、Point-to-Point、パブリッシュ/サブスクライブなど、広い範囲の対話モデルを使用できます。これらのクライアントを使用するには、関連するアプリケーションが実行されているシステム上にクライアントをインストールする必要があります。このソフトウェアは、WebSphere Process Server の使用には不要です。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインから「メッセージ・サービス・クライアントのインストール」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

インフォメーション・センターのオープン

オンラインで利用可能な、PDF ブック形式や Eclipse 文書プラグイン形式の、(ローカル・システムにダウンロードしてインストールできる) 完全な技術的製品情報にリンクします。

IBM Message Service Client for C/C++

IBM Message Service Client for C/C++ のインストール・ウィザードを開始するとき使用する Launchpad パネルを開きます。このパネルの詳細については、『「Message Service Client for C/C++ のインストール」パネル』を参照してください。

IBM Message Service Client for .NET

IBM Message Service Client for .NET のインストール・ウィザードを開始するとき使用する Launchpad パネルを開きます。このパネルの詳細については、87 ページの『「Message Service Client for .NET のインストール」パネル』を参照してください。

「Message Service Client for C/C++ のインストール」パネル

制約事項: AIX Linux Solaris Windows この選択項目が表示されるのは、AIX PPC32、AIX PPC64、Linux IA32、Linux IA64、Solaris SPARC、Solaris SPARC64、および Windows IA32 プラットフォーム用の Launchpad の場合のみです。

「メッセージ・サービス・クライアントのインストール」パネルで「IBM Message Service Client for C/C++」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

IBM Message Service Client for C/C++ のインストール・ウィザードの起動

IBM Message Service Client for C/C++ をインストールするためのインスト

ール・ウィザードを開始します。このプログラムは、*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* の次のロケーションにあります。

- **AIX** **AIX** プラットフォームの場合: /MsgClients/XMSCC/setupAix.bin
- **Linux** **Linux IA32** プラットフォームの場合: /MsgClients/XMSCC/setuplinuxia32
- **Linux** **Linux IA64** プラットフォームの場合: /MsgClients/XMSCC/setuplinux-86_64
- **Solaris** **Solaris** プラットフォームの場合: /MsgClients/XMSCC/setupSolaris
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
¥MsgClients¥XMSCC¥setup.exe

インフォメーション・センターのオープン

オンラインで利用可能な、PDF ブック形式や Eclipse 文書プラグイン形式の、(ローカル・システムにダウンロードしてインストールできる) 完全な技術的製品情報にリンクします。

「Message Service Client for .NET のインストール」パネル

制約事項: **Windows** この選択項目が表示されるのは、Windows IA32 プラットフォーム用 Launchpad の場合のみです。

このクライアントは、.NET メッセージング・アプリケーションをサポートします。

「メッセージ・サービス・クライアントのインストール」パネルで「IBM Message Service Client for .NET」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

IBM Message Service Client for .NET のインストール・ウィザードの起動

IBM Message Service Client for .NET をインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。このプログラムは、*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* の次のロケーションにあります。

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
¥MsgClients¥XMSNET¥dotNETClientsetup.exe

インフォメーション・センターのオープン

オンラインで利用可能な、PDF ブック形式や Eclipse 文書プラグイン形式の、(ローカル・システムにダウンロードしてインストールできる) 完全な技術的製品情報にリンクします。

「追加ソフトウェアのインストール」パネル

WebSphere Process Server および WebSphere Application Server Network Deployment の他に、製品パッケージにはランタイム環境をサポートする追加ソフトウェア (Web

開発ツール、Web サーバー、およびその他のサポートするソフトウェアおよび資料) も含まれます。このソフトウェアは、WebSphere Process Server の使用には不要です。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインか「追加ソフトウェアのインストール」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

IBM HTTP Server

IBM HTTP Server のインストール・ウィザードを開始するときに使用する Launchpad パネルを開きます。このパネルの詳細については、『「IBM HTTP Server のインストール」パネル』を参照してください。

Web サーバー・プラグイン

Web サーバー・プラグインのインストール・ウィザードを開始するときに使用する Launchpad パネルを開きます。このパネルの詳細については、89 ページの『「Web サーバー・プラグインのインストール」パネル』を参照してください。

Application Client

Application Client のインストール・ウィザードを開始するときに使用する Launchpad パネルを開きます。このパネルの詳細については、90 ページの『Application Client のインストール・パネル』を参照してください。

Application Server Toolkit

Application Server Toolkit のインストール・ウィザードを開始するときに使用する Launchpad パネルを開きます。このパネルの詳細については、91 ページの『「Application Server Toolkit のインストール」パネル』を参照してください。

「IBM HTTP Server のインストール」パネル

制約事項: i5/OS この選択項目は、i5/OS プラットフォームの Launchpad の場合は表示されません。

IBM HTTP Server は、Apache™ HTTP Server をベースにした Web サーバーです。

「追加ソフトウェアのインストール」パネルから「IBM HTTP Server」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

IBM HTTP Server のインストール・ウィザードの起動

IBM HTTP Server をインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。このプログラムは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1* CD の次のロケーションにあります。

- Linux UNIX **Linux および UNIX プラットフォームの場合:**
/IHS/install
- Windows **Windows プラットフォームの場合:** %IHS%\install.exe

IBM HTTP Server のインストール・ガイドの表示

IBM HTTP Server のインストール資料への直接リンクを提供します。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1* CD の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/IHS/docs/InstallGuide_en.html
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
¥IHS¥docs¥InstallGuide_en.html

IBM HTTP Server の README ファイルの表示

IBM HTTP Server の README ファイルへの直接リンクを提供します。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/IHS/readme/readme_en.html
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
¥IHS¥readme¥readme_en.html

「Web サーバー・プラグインのインストール」パネル

Web サーバー・プラグインにより、HTTP 要求を Web サーバーからアプリケーション・サーバーに転送するソフトウェアが提供されます。

「追加ソフトウェアのインストール」パネルから「Web サーバー・プラグイン」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

Web サーバー・プラグインのインストール・ウィザードの起動

1 つ以上の Web サーバー・プラグインをインストールおよび構成するには、インストール・ウィザードを開始します。このプログラムは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/plugin/install
- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:
¥plugin¥install.exe

Web サーバー・プラグインのインストール・ロードマップの表示

Web サーバー・プラグインのインストールおよび構成手順への直接リンクを提供します。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/plugin/index_roadmap_en.html
- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:
¥plugin¥index_roadmap_en.html

Web サーバー・プラグインのインストール・ガイドの表示

Web サーバー・プラグインのインストール資料への直接リンクを提供します。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/plugin/docs/InstallGuide_en.html

- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:
¥plugin¥docs¥InstallGuide_en.html

Web サーバー・プラグインの README ファイルの表示

Web サーバー・プラグインの README ファイルへの直接リンクを提供します。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/plugin/readme/readme_en.html
- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:
¥plugin¥readme¥readme_en.html

Application Client のインストール・パネル

制約事項: Application Client は、Linux on System z または 64 ビット・プラットフォーム (i5/OS 以外) では提供されません。

Application Client は、ご使用のアプリケーション・サーバーの各種アプリケーション・プログラミング・モデルを提供します。

「追加ソフトウェアのインストール」パネルから「**Application Clients**」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

アプリケーション・クライアントのインストール・ウィザードの起動

WebSphere Application Server アプリケーション・クライアントをインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。アプリケーション・クライアントのインストール・ウィザードにより、クライアント・システムでクライアント・アプリケーションを稼働させるための環境がインストールされます。クライアント・アプリケーションは、分散クライアント・システムおよびホスト WebSphere Application Server システムで処理を実行します。例えば、クライアントでは GUI が提供されますが、データはホスト上で処理します。環境によっては、必要なすべてのハンドシェイクおよびプロトコルを実行します。シン・クライアント環境では、クライアント・アプリケーションに、JNDI 検索などの独自のプロトコルが必要です。このプログラムは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/AppClient/install
- **i5/OS** **Windows** **iSeries** および **Windows** プラットフォームの場合:
¥AppClient¥install.exe

アプリケーション・クライアントのインストール・ガイドの表示

WebSphere Application Server アプリケーション・クライアントのインストール資料への直接リンクを提供します。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/AppClient/docs/InstallGuide_en.html

- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:
¥AppClient¥docs¥InstallGuide_en.html

アプリケーション・クライアントの README ファイルの表示

WebSphere Application Server アプリケーション・クライアントの README ファイルへの直接リンクを提供します。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/AppClient/readme/readme_en.html
- **i5/OS** **Windows** **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:
¥AppClient¥readme¥readme_en.html

「Application Server Toolkit のインストール」パネル

制約事項: この選択項目が表示されるのは、Linux IA32 および Windows IA32 プラットフォーム用 Launchpad の場合のみです。

Application Server Toolkit は、アプリケーション・サーバーに公開するための基本的なアセンブリ・ツールおよびデプロイメント・ツールを提供します。

「追加ソフトウェアのインストール」パネルから「**Application Server Toolkit**」を選択すると、以下のオプションが右側のペインに表示されます。

Application Server Toolkit のインストール・ウィザードの起動

WebSphere Application Server Toolkit を Windows および Linux (Intel®) システムのみにインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。このプログラムは *WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **Linux** プラットフォームの場合: /install
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: ¥install.exe

Application Server Toolkit のインストール・ガイドの表示

WebSphere Application Server Toolkit のインストール資料への直接リンクを提供します。このファイルは *WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **Linux** プラットフォームの場合: /readme/readme_install_ast.html
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
¥readme¥readme_install_ast.html

Application Server Toolkit の README ファイルの表示

WebSphere Application Server Toolkit の README ファイルへの直接リンクを提供します。このファイルは *WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **Linux** プラットフォームの場合: /readme/readme_ast.html
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: ¥readme¥readme_ast.html





「WebSphere ソフトウェアのインストール用の IBM Update Installer」パネル

このツールを使用して、更新（暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パック）を WebSphere ソフトウェア（WebSphere Enterprise Service Bus リリース、WebSphere Process Server リリース、WebSphere Application Server リリース、IBM HTTP Server、Web サーバー・プラグイン、および WebSphere Application Client など）にインストールします。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインから「**WebSphere ソフトウェアのインストール用の IBM Update Installer**」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

IBM Update Installer のインストール・ウィザードの起動

IBM Update Installer をインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。このプログラムは、*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* の次のロケーションにあります。





-   **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/UpdateInstaller/install
-   **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:
¥UpdateInstaller¥install.exe

「WebSphere Process Server 用の IBM Installation Factory」パネル

このツールを使用して、カスタマイズした WebSphere Process Server インストール・パッケージを作成します。インストール・パッケージは、更新（暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パック）の組み込み、カスタマイズのプロファイル作成、スクリプトの実行、または他のユーザー定義ファイルをインストールするようにカスタマイズできます。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインから「**WebSphere Process Server 用の IBM Installation Factory**」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

WebSphere Process Server 用の IBM Installation Factory の README ファイルの表示 WebSphere Process Server 用の IBM Installation Factory の README ファイルへの直接リンクを提供します。このファイルは、*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* の次のロケーションにあります。





-   **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/IF/readme/readme_en.html
-   **i5/OS** および **Windows** プラットフォームの場合:
¥IF¥readme¥readme_en.html

「IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール」パネル





このツールを使用して Eclipse ビューアーをインストールし、WebSphere Process Server のインフォメーション・センターをローカル・コンピューター上に置くようにします。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインから「**IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール**」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムのインストール・ウィザードの起動 IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムをインストールするためのインストール・ウィザードを開始します。このプログラムは、*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* の次のロケーションにあります。

-   **Linux および UNIX プラットフォームの場合:**
/IEHS/install
-   **i5/OS および Windows プラットフォームの場合:**
¥IEHS¥install.exe

IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムの README ファイルの表示 IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システムの README ファイルへの直接リンクを提供します。このファイルは、*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* の次のロケーションにあります。

-   **Linux および UNIX プラットフォームの場合:**
/IEHS/readme/readme_en.html
-   **i5/OS および Windows プラットフォームの場合:**
¥IEHS¥readme¥readme_en.html

「IBM Support Assistant のインストール」パネル

制約事項: この選択項目は、i5/OS、Linux PPC32、Linux on System z、または 64 ビット・プラットフォームの Launchpad の場合は表示されません。

このツールを使用して、IBM ソフトウェア製品に関する疑問および問題を解決します。このツールには、複数のソースにまたがった検索、重大な問題情報へのアクセス、トラブルシューティングと診断ツール、および自動データ収集および問題送信ツールが含まれます。ISA のインストール後、ISA を起動して「ようこそ」画面で「**アップデーター**」アイコンをクリックすることにより、WebSphere Process Server およびその他の IBM 製品の製品固有のプラグインをインストールできます。

Launchpad の「ようこそ」パネルの左側のペインか「**IBM Support Assistant のインストール**」を選択すると、右側のペインに以下のオプションが表示されます。

IBM Support Assistant のインストール・ウィザードの起動

IBM Support Assistant をインストールするためのインストール・ウィザード

ドを開始します。このプログラムは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/ISA/install.bin
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: %ISA%\install.exe

IBM Support Assistant の README ファイルの表示

IBM Support Assistant の README ファイルへの直接リンクを提供します。このファイルは *WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD* の次のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
/ISA/readme.txt
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: %ISA%\readme.txt

IBM Support Assistant の Web サイト

IBM Support Assistant に関する追加情報へのリンクです。

WebSphere Process Server の対話式インストール

インストール・ウィザードを使用して、WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client をインストールできます。標準的インストールでは WebSphere Process Server がインストールされます。また、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 をインストールでき、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。デプロイメント環境のインストールでは、新しいデプロイメント環境のセットアップまたは既存のデプロイメント環境の改善までのステップを、ウィザードのガイドに従って完了できます。クライアント・インストールでは、WebSphere Process Server Client がインストールされます。

始める前に

45 ページの『第 4 章 WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』で、製品をインストールするための前提条件のリストを確認してください。

このタスクについて

パスポート・アドバンテージでダウンロードしたイメージからインストールすることを計画している場合、401 ページの『パスポート・アドバンテージからインストールするときの特別な考慮事項』の重要な情報を参照してください。

インストール・ウィザードの言語は、システムのデフォルト言語によって決まります。システムのデフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語が使用されます。システムのデフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からインストール・ウィザードを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。次のコマンドを使用します。このコマンドは、「*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1*」の CD、「*WebSphere Process Server V6.1 DVD*」、または電子的なインストール・イメージの WBI ディレクトリーから実行できます。この例では、変数 `lang` は言語を表します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
../JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/java/jre/bin/java
-Duser.language=*lang* -cp setup.jar run

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
..¥JDK¥jre.pak¥repository¥package.java.jre¥java¥jre¥bin¥java
-Duser.language=*lang* -cp setup.jar run

注: **i5/OS** **Windows** クライアントを使用してリモート側で **i5/OS** プラットフォームに WebSphere Process Server をインストールする場合は、`-os400was` パラメーターを使用します。

例えば、**Windows** システム上でドイツ語のインストール・ウィザードを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
..¥JDK¥jre.pak¥repository¥package.java.jre¥java¥jre¥bin¥java  
-Duser.language=de -cp setup.jar run
```

制約事項: インストール・ウィザードの 2 つのインスタンスを同時に実行しないでください。そのようにすると、インストールがすでに進行しているという趣旨の警告が表示されます。

インストーラー・プログラムは、コンソール・モード・インストールをサポートしていません。

重要: インストール済みの WebSphere Application Server Network Deployment がない環境で、この製品を「*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1*」という CD からインストールする場合は、インストール中にこの製品イメージのロケーションを指定するよう求めるプロンプトが出されることがあります。プロンプトが出された場合は、WebSphere Application Server Network Deployment のインストール・ディレクトリーのロケーションを指定するか「*WebSphere Process Server V6.1 Disk 2*」という CD を挿入してから、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードを使用して WebSphere Process Server をインストールするには、以下の手順を実行します。

プロシージャ

1. システムにログオンします。

Linux **UNIX** **Windows** **Linux**、**UNIX**、および **Windows** プラットフォームの場合: 使用するユーザー ID に root 特権や管理者特権は必要ありません。しかし、製品を非ルート・ユーザーまたは非管理者ユーザーとしてインストールする場合、いくつかの制約があります。例えば、WebSphere Process Server 用の **Windows** または **Linux** サービスを作成することはできません。また、プログラムはオペレーティング・システムへの登録を行いません。非 root ユーザーとしてインストールを実行する場合の制約の詳細は、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x のインフォメーション・センターにあるトピック『Limitations of non-root installer』を参照してください。

i5/OS **i5/OS** プラットフォームの場合: ランチパッドを使用して **i5/OS** システム上で WebSphere Process Server をインストールする場合には、**Windows** シ

システムにサインオンします。Windows システムは、System i サーバーに接続して対話式インストールを実行するためのクライアント・マシンとして使用します。ランチパッドは、Windows クライアント上で稼働します。i5/OS システムでインストールを実行するには、そのシステムに有効な i5/OS ユーザー・プロファイルを使用する必要があります。ユーザー・プロファイルには *ALLOBJ 権限と *SECADM 権限が必要です。これらの権限がなければ、インストールは失敗します。

2. 製品 CD または DVD からインストールするか、パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。
 - 製品 CD または DVD からインストールする場合は、「WebSphere Process Server V6.1 Disk 1」または「WebSphere Process Server V6.1 DVD」というラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします（詳しくは、385 ページの『Linux および UNIX オペレーティング・システムでのディスク・ドライブのマウント』を参照してください）。
 - パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールする場合は、イメージを抽出したディレクトリーにナビゲートします。
3. ランチパッドまたはコマンド行からインストール・ウィザードを開始します。
 - ランチパッドからインストールを開始する方法は、以下のとおりです。
 - a. 81 ページの『Launchpad の開始』の手順を実行してランチパッドを開始します。
 - b. 「WebSphere Process Server のインストール」をクリックします。
 - c. 「WebSphere Process Server for Multiplatforms のインストール・ウィザードの起動」をクリックします。
 - コマンド行からインストールを開始するには、インストールを製品 CD または DVD から行うか、パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージから行うかに応じて、コマンド `install` を次の方法で実行します。

製品 CD または DVD からインストールする場合は、次のコマンドを入力します。

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** (Windows システムのクライアント・マシンを使用して i5/OS システムに接続します。) ディスク・ドライブのルート・ディレクトリーから、`WBI\install.bat` と入力します。
- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `mount_point/WBI/install` と入力します。ここで、`mount_point` は Linux または UNIX システムのマウント・ポイントを表します。
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** ディスク・ドライブのルート・ディレクトリーから、`WBI\install.bat` と入力します。

パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールする場合は、以下のようにコマンドを入力します。ここで、`extract_directory` は電子的イメージを抽出したディレクトリーを表します。

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** (Windows システムのクライアント・マシンを使用して i5/OS システムに接続します。)
`extract_directory%WBI%install.bat`
- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:**
`extract_directory/WBI/install`
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:**
`extract_directory%WBI%install.bat`

次のステップは、ご使用のプラットフォームに応じて異なります。

インストール先プラットフォーム	次のステップ
i5/OS	i5/OS サインオン・パネルが表示されます。ステップ 4 に進んでください。
Linux および UNIX	「ようこそ」パネルが表示されます。ステップ 5 に進んでください。

4. **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS サインオン・パネルで、以下の情報を入力します。
 - ターゲットの i5/OS システムのシステム名または IP アドレス
 - ターゲット・システムで有効な i5/OS ユーザー・プロファイル。このユーザー・プロファイルには *ALLOBJ と *SECADM の特殊権限が必要です。
 - 指定した i5/OS ユーザー・プロファイルのパスワード
 「次へ」をクリックします。「ようこそ」パネルが表示されます。
5. 「ようこそ」パネルで「次へ」をクリックします。「ご使用条件」パネルが表示されます。
6. 「ご使用条件」パネルで、IBM および IBM 以外のライセンス条項を確認し、同意する場合は「**IBM および IBM 以外の両方の条件を受諾します (I accept both the IBM and the non-IBM terms)**」を選択して、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードは、前提条件のパッチでサポートされるオペレーティング・システムを検査します。処理が終了すると、「システム前提条件の検査」パネルが表示され、システムが検査に合格したかどうかを示されます。

システムが合格しなかった場合は、インストールをキャンセルして必要な変更を行ってから、インストールを再始動します。

重要: 製品のより新しいバージョンのインストール、またはサポートされるオペレーティング・システムのより新しいバージョンへの製品のインストールを試みると、警告メッセージが表示される場合があります。警告を無視して、インストールを続けることはできますが、そうするとインストール結果がサポートされなくなる場合があります。

7. 「システム前提条件の検査」パネルで、「次へ」をクリックします。

制約事項: ユーザー ID に root 特権または管理者特権がない場合、警告パネルが表示され、製品のインストール時に適用される制限が示されます。例えば、

WebSphere Process Server 用の Windows または Linux サービスを作成することはできません。また、プログラムはオペレーティング・システムへの登録を行いません。インストールを続行するには、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードは、以下の製品が既にインストールされているかどうかを調べます。

- WebSphere Application Server バージョン 6.1.x
- WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x
- WebSphere Process Server バージョン 6.1.x
- WebSphere Process Server Client バージョン 6.1.x
- WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.1.x

重要: .nifregistry ファイルに WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の項目がある場合、インストール・ウィザードはこれらの未登録のインスタンスも検出します。root ユーザー、管理者ユーザー、または非 root ユーザーの場合のプラットフォーム別のファイル・ロケーションについては、373 ページの『.nifregistry ファイルおよび vpd.properties ファイル』を参照してください。これらの製品のいずれかの未登録インストールを WebSphere Process Server のインストールと共に使用することはサポートされていません。

インストール・ウィザードが WebSphere 製品の既存のインストールを検出した場合、ウィザードにより、どの製品が見つかったかが報告されます。その場合は、新規インストールについて選択する必要があります。WebSphere 製品の既存のインストールがシステム上にあるかどうかによって、以下のいずれかを行います。

- ご使用のシステムに既にインストールされている他の WebSphere 製品がない場合は、「インストール・タイプ」パネルが表示されます。ステップ 9 (99 ページ) に進んでください。
 - ご使用のシステムに既にインストールされている他の WebSphere 製品がある場合は、ステップ 8 に進んでください。
8. 表示されるパネルおよび後続ステップは、ご使用のシステムで検出された WebSphere 製品によって異なります。ご使用のシステムで表示されるパネルに応じ、次のステップを 表 19 で確認してください。

表 19. WebSphere 製品の既存のインストールに基づく次のステップ

表示されたパネル	検出された製品および次のステップ
IBM WebSphere Process Server が検出されました	WebSphere Process Server の既存のインストール (単独またはその他の WebSphere 製品のインストールとともに) があります。インストールを完了するための手順については、376 ページの『既存の WebSphere Process Server のインストール済み環境でのインストール』のトピックを参照してください。

表 19. WebSphere 製品の既存のインストールに基づく次のステップ (続き)

表示されたパネル	検出された製品および次のステップ
既存の製品またはコンポーネントのインストールが検出されました	WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client の既存のインストールがあり、WebSphere Process Server の既存のインストールがありません。インストールを完了するための手順については、380 ページの『既存の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール済み環境でのインストール』のトピックを参照してください。
検出された WebSphere Application Server	WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストールがあり、WebSphere Process Server、WebSphere Process Server Client、または WebSphere Enterprise Service Bus の既存のインストールがありません。インストールを完了するための手順については、383 ページの『既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境でのインストール』のトピックを参照してください。

9. 「インストール・タイプ」パネルで、実行するインストールのタイプを選択して、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードでは、インストール・パスを選択することができます (前のパネルの選択内容によっては、すべてが表示されるとは限りません)。次のステップは、実行するインストールのタイプによって異なります。

インストール・タイプ	次のステップ
<p>標準的インストール (デフォルト): WebSphere Process Server (および必要に応じて WebSphere Application Server Network Deployment) のインストールは、デフォルトのインストール・オプションと構成によって実行されます。また、WebSphere Process Server サンプルもインストールできます。さらに、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。またはこのオプションを省略して、後でプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成することも可能です。</p> <p>重要: 標準的インストール中にスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成を選択し、セキュリティーを有効にした場合、インストーラーによりそのプロファイルにサンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。101 ページの『WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行』のトピックに進んでください。</p>
<p>デプロイメント環境インストール: WebSphere Process Server をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment をインストールし、デプロイメント環境のセットアップを支援します。デプロイメント・マネージャーを作成して、そのデプロイメント・マネージャーにデプロイメント環境パターンを選択するか、あるいは管理対象ノードに適用する 1 つまたは複数のクラスターを選択できます。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。109 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックに進んでください。</p>
<p>クライアント・インストール: デフォルトのインストール選択項目および構成を使用して、WebSphere Process Server Client をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment をインストールします。これにより、WebSphere Process Server と対話するクライアント・アプリケーションの実行が可能になります。</p>	<p>「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。121 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。</p>

結果

これで、インストール・ウィザードの開始、使用条件への同意、前提条件の確認、インストールに影響を与える可能性のある WebSphere 製品の既存のインストールの

識別が終わりました。また、実行するインストールのタイプ (標準的、デプロイメント環境、またはクライアント) も選択しました。

次のタスク

行った選択に応じて該当するリンクの説明に従い、インストールを続行します。

WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行

この手順を使用して、インストール・ウィザード・グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用した WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成を実行します。このインストールの一部として WebSphere Application Server Network Deployment をインストールできます。WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server をインストールすることも可能です。

このタスクについて

以下の手順に従って、これらの選択を実行します。このトピックでは、94 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを開始し、前提条件と既存の WebSphere インストール環境を確認済みで、標準的インストールの実行を選択したことを前提としています。「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「フィーチャーの選択」パネルで、インストールするフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックします。

このパネルで選択できるフィーチャーの説明については、395 ページの『製品コンポーネント』を参照してください。

次のステップは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールするかどうかによって異なります。

インストール状況	次のステップ
WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしている。	「WebSphere Process Server 環境」パネルが表示されます。ステップ 3 (102 ページ) に進んでください。
WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしていない。	「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「インストール・ロケーション」パネルで、製品のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを受け入れるか、または別のディレクトリーを指定して、「次へ」をクリックします。

i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS システムの「インストール・ロケーション」パネルでは、プロファイル・インストール・ディレクトリーも指定できます。

Linux **UNIX** **Windows** **Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:** インストール・ウィザードに、システムが所有する root ユーザーまたは管理者のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリーが表示されます。ここには、非 root ユーザー用の、ユーザーが所有する別のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリーが表示されます。

デフォルト・インストール・ディレクトリーと、インストール・ウィザードによるデフォルト・インストール・ディレクトリーの決定方法については、388ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードは、インストール・ロケーションが完全修飾されており、正しい形式であること、インストールを実行するユーザー ID によって書き込み可能であること、およびインストールを正常に実行するための十分なディスク・スペース (必要な一時スペースを含む) があることを確認します。十分なスペースがない場合は、インストール・プログラムを停止して、使用していないファイルを削除し、ごみ箱を空にすることでスペースを解放し、再度インストールを開始してください。

重要:

- インストール・ルート・ディレクトリーの値を指定しなければ、処理を続行することができません。
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** パス名の中の各コンポーネントの最大長は 255 文字です。パス名の最大長は 16 MB です。
- **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** インストール・ルート・ディレクトリーにシンボリック・リンクを使用しないでください。シンボリック・リンクはサポートされていません。また、ディレクトリー・パスにはスペースを使用しないでください。
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** Windows システムではディレクトリー名にセミコロンを使用しないでください (セミコロンは、Windows システム上のクラス・パスを構成するために使用される文字です)。ターゲット・ディレクトリーにセミコロンが含まれる場合、WebSphere Process Server は Windows プラットフォーム上に正しくインストールできません。

このステップが完了すると、「WebSphere Process Server 環境」パネルが表示されます。

3. 「WebSphere Process Server 環境」パネルで、作成するプロファイルのタイプを選択し (またはこの時点でプロファイルを作成しない場合は「なし」を選択し)、「次へ」をクリックします。次のステップは、選択内容によって異なります。

プロファイル・タイプ	次のステップ
スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー	「管理セキュリティ」パネルが表示されます。ステップ 5 (105 ページ) に進んでください。
カスタム	「フェデレーション (Federation)」パネルが表示されます。(カスタム・プロファイルには空のノードがあり、それを使用するには統合する必要があります。) ステップ 4 に進んでください。
なし	警告パネルにより、使用するインストール済み環境は、少なくとも 1 つのプロファイルがなければ機能できないことを示す警告が出されます。以下のいずれかを行います。 <ul style="list-style-type: none"> 「はい」をクリックして、プロファイルを作成しないで続行します。「インストールの要約」パネルが表示されます。ステップ 6 (105 ページ) に進んでください。インストールが完了した後、インストール・ウィザードの最後のパネルに、プロファイル管理ツールを開くためにリンクが示されます。ここには、新規プロファイルを作成または拡張するためのオプションがいくつかあります。 「いいえ」をクリックして、「WebSphere Process Server 環境」パネルに戻ります。

4. **カスタム・プロファイルの場合のみ:** 「フェデレーション」パネルで、ノードをプロファイル作成の一部としてデプロイメント・マネージャーに即時統合するか、または後で統合してプロファイル作成とは切り離すかを選択します。

重要: この時点では、以下の項目すべてに該当する場合にのみ、カスタム・ノードを統合してください。

- ほかのノードを同時に統合しない。(ノードの統合はシリアルライズする必要があります。)
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。
- デプロイメント・マネージャーが、作成するカスタム・プロファイルと同じかそれより高いバージョン・レベルの WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーである。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

以下の項目のいずれかに該当する場合は、この時点ではカスタム・ノードを統合しないでください。

- 別のプロファイルが統合されている。(ノードの統合はシリアルライズする必要があります。)
- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか不明。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」を選択します。)
- プロファイルをマイグレーション・ターゲット・プロファイルとして使用する予定がある。

ノードをプロファイル作成の一環としてすぐに統合するには、以下のステップを実行します。

- a. デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポートを指定し、管理セキュリティーがデプロイメント・マネージャーで有効にされている場合は認証ユーザー ID とパスワードも指定します。SOAP ポート番号を検索するには、*profile_root/logs/*にあるデプロイメント・マネージャー用の *AboutThisProfile.txt* ファイルを開き、「SOAP コネクタ・ポート」の値を確認します。
- b. 「**addNode** コマンドを使用して、後でこの管理対象ノードをフェデレートしてください。」チェック・ボックスは選択解除したままにします。
- c. 「次へ」をクリックします。インストール・ウィザードは、デプロイメント・マネージャーが存在しており通信が可能であること、およびそのデプロイメント・マネージャーの認証ユーザー ID とパスワードが有効であること(機密保護機能がある場合)を確認します。「インストールの要約」パネルが表示されます。
- d. ステップ 6 (105 ページ) に進んでください。

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由で使用できないときにカスタム・ノードを統合しようとする、警告パネルが表示されて、続行できなくなります。この警告パネルが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」パネルで別の選択を行ってください。

ノードを後で、プロファイル作成とは別に統合するには、以下のステップを実行します。

- a. 「**addNode** コマンドを使用して、後でこの管理対象ノードをフェデレートしてください。」チェック・ボックスを選択します。
- b. 「次へ」をクリックします。「インストールの要約」パネルが表示されません。
- c. ステップ 6 (105 ページ) に進んでください。

addNode コマンドを使用してノードを統合する方法については、516 ページの『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。このコマンドについては、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにあるトピック『addNode コマンド』を参照してください。

5. **WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバーおよびデプロイメント・マネージャー・プロファイルの場合のみ:** 「管理セキュリティ」パネルで、インストール済み環境に合わせて管理セキュリティを構成します。「**管理セキュリティを使用可能にする**」チェック・ボックスは選択したまま管理 ID およびパスワードを入力してセキュリティを使用可能にするか、またはこのチェック・ボックスをクリアしてセキュリティを使用不可にします。次に、「**次へ**」をクリックします。

WebSphere Process Server スタンドアロン・プロファイルの場合のみ:

WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションのインストールを選択した場合、ユーザー・アカウントのパスワードを入力する必要があります。また、セキュリティを有効にすると、インストーラーによってプロファイルに対して Business Process Choreographer のサンプル構成が作成されます。セキュリティを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。

ヒント: 管理 ID およびパスワードを記録し、保護された領域に保管します。これらの値がわからなければ、管理コンソールにログオンしたり、WebSphere Process Server を使用することはできません。

複数のスタンドアロン・サーバーを使用する環境では、各サーバー・プロファイルのセキュリティ・ポリシーは他のサーバー・プロファイルとは切り離されています。あるサーバー・プロファイルのセキュリティ・ポリシーを変更しても、他のプロファイルとは同期されません。

「インストールの要約」パネルが表示されます。

6. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、コンポーネントが消費するスペース量、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認し、製品をインストールする場合は「**次へ**」を、指定内容を変更する場合は「**戻る**」をクリックします。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、コンポーネントがインストール中であることを示す進行状況表示パネルを表示します。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のバージョンに WebSphere Process Server をインストールすることを選択した場合、インストール・ウィザードはそのインストール済み環境を検査し、以下のいずれかのアクションを実行します。

- インストール済み環境のサービス・レベルが適切な場合は、インストール・ウィザードは何も行いません。

- インストール済み環境が古いサービス・レベルである場合は、インストール・ウィザードは必要なフィックスを適用してそのインストール済み環境を適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。
- WebSphere Process Server Samples フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境上へのインストールを試みると、その WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境に、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがサイレントに追加されません。

制約事項: WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーは、WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境上にはのみ増分インストールすることができます。WebSphere Application Server のインストール済み環境にはインストールできません。したがって、WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを選択し、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server のインストール済み環境に WebSphere Process Server をインストールしても、サンプル・アプリケーション・ギャラリー・フィーチャーは WebSphere Application Server のインストール済み環境にはサイレントに追加されません。

制約事項: i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境が古いサービス・レベルで、WebSphere Process Server のインストールが Windows クライアントからリモートで行われる場合、このインストールを続行する前に、i5/OS システムからローカル・サイレント・インストールを使用して、WebSphere Application Server Network Deployment を更新する必要があります。WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境に上書きインストールする場合、このインストールを続行する前に、i5/OS システムからローカル・サイレント・インストールを使用して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーを WebSphere Application Server Network Deployment に追加する必要があります。

インストールが終了すると、「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されます。

重要:

インストール中にエラーが検出されると、「成功」の代わりに他のメッセージが表示されます。その例と意味は次のとおりです。

- **部分的な成功。** インストールは完了したがエラーが生成されたことを示します。
- **失敗。** インストールがすべて失敗したことを示します。

インストールが正常に完了しなかった場合は、「インストールの結果」パネルで、問題のトラブルシューティングを行うために必要なログ・ファイルを確認できます。361 ページの『ログ・ファイル』で、該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
 - 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
 - 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
 - 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
 - **i5/OS** 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
 - 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
 - 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
7. インストールを完了します。 インストールを実行するために行う操作は、インストール中にプロファイルを作成したかどうかによって異なります。「インストールの結果」パネルで、インストール中にプロファイルを作成したかどうかに基づいて、以下のいずれかのアクションを実行します。

プロファイルの状況	次のステップ
プロファイルを作成した場合	「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスが選択されていることを確認し、「終了」をクリックしてインストール・ウィザードを閉じ、ファースト・ステップ・コンソールを開始します。

プロファイルの状況	次のステップ
プロファイルを作成していない 場合	<p>次のステップは、新規プロファイルをすぐに作成するかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 新規プロファイルを作成する場合は、「プロファイル管理ツールを使用して、新しい WebSphere Process Server プロファイルを作成します」の横にあるチェック・ボックスを選択したまま、「終了」をクリックします。インストール・ウィザードが閉じて、プロファイル管理ツールが開始されます。このツールを使用して新規 WebSphere Process Server プロファイルを作成する方法、または既存のプロファイルの WebSphere Process Server プロファイルに拡張する方法については、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。 新規プロファイルを作成しない 場合は、「プロファイル管理ツールを使用して、新しい WebSphere Process Server プロファイルを作成します」の横にあるチェック・ボックスをクリアし、「終了」をクリックします。 <p>重要: 動作環境を保持するには、管理対象ノードを持つ WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル、またはデプロイメント・マネージャー・プロファイルが存在している必要があります。</p>

結果

「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されたら、選択したコンポーネントは正常にインストールされていて、プロファイルを作成した場合はプロファイルが正常に作成されています。

インストール時点で最新の WebSphere Process Server フィックスパックがあれば、インストール環境に上書きインストールします。WebSphere Process Server へのフィックスパックのインストールについては、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) の『*Recommended fixes*』に記載されている説明を参照してください。

ファースト・ステップ・コンソールから WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを開始して、インストール済み環境が適切に作動していることを確認します。詳しくは、144 ページの『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。

インストール検査ツールを使用してインストールの検査を行うこともできます。詳しくは、151 ページの『第 8 章 製品のインストールの検査』を参照してください。

デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール

この手順を使用して、インストール・ウィザードのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用した WebSphere Process Server のインストールを実行します。この手順では、製品のインストールに加えて、デプロイメント環境のセットアップについても説明します。デプロイメント・マネージャーを作成し、適切なデプロイメント環境パターンを選択するか、またはカスタム・プロファイルを作成して、デプロイメント環境内のクラスター・メンバーを選択することができます。このインストールの一部として WebSphere Application Server Network Deployment をインストールできます。WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server をインストールすることも可能です。

このタスクについて

以下の手順に従って、これらの選択を実行します。このトピックでは、94 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従ってインストール・ウィザードを開始し、前提条件と既存の WebSphere インストール環境を調べ、デプロイメント環境のインストールの実行を選択済みであることを想定しています。「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「フィーチャーの選択」パネルで、インストールするフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックします。

このパネルで選択できるフィーチャーの説明については、395 ページの『製品コンポーネント』を参照してください。

次のステップは、WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境上にインストールするかどうかによって異なります。

インストール状況	次のステップ
WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境上へのインストールを試みている。	「デプロイメント環境インストール」パネルが表示されます。ステップ 3 (110 ページ) に進んでください。
WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境上へのインストールを試みていない。	「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「インストール・ロケーション」パネルで、製品のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリを受け入れるか、または別のディレクトリを指定して、「次へ」をクリックします。

i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS システムの「インストール・ロケーション」パネルでは、プロファイル・インストール・ディレクトリーも指定できます。

Linux **UNIX** **Windows** **Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:** インストール・ウィザードに、システムが所有する root ユーザーまたは管理者のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリーが表示されます。ここには、非 root ユーザー用の、ユーザーが所有する別のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリーが表示されます。

デフォルト・インストール・ディレクトリーと、インストール・ウィザードによるデフォルト・インストール・ディレクトリーの決定方法については、388ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードは、インストール・ロケーションが完全修飾されており、正しい形式であること、インストールを実行するユーザー ID によって書き込み可能であること、およびインストールを正常に実行するための十分なディスク・スペース (必要な一時スペースを含む) があることを確認します。十分なスペースがない場合は、インストール・プログラムを停止して、使用していないファイルを削除し、ごみ箱を空にすることでスペースを解放し、再度インストールを開始してください。

重要:

- インストール・ルート・ディレクトリーの値を指定しなければ、処理を続行することができません。
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** パス名の中の各コンポーネントの最大長は 255 文字です。パス名の最大長は 16 MB です。
- **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** インストール・ルート・ディレクトリーにシンボリック・リンクを使用しないでください。シンボリック・リンクはサポートされていません。また、ディレクトリー・パスにはスペースを使用しないでください。
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** Windows システムではディレクトリー名にセミコロンを使用しないでください (セミコロンは、Windows システム上のクラス・パスを構成するために使用される文字です)。ターゲット・ディレクトリーにセミコロンが含まれる場合、WebSphere Process Server は Windows プラットフォーム上に正しくインストールできません。

このステップが完了すると、「デプロイメント環境インストール」パネルが表示されます。

3. 「デプロイメント環境インストール」パネルでは、デプロイメント・マネージャーを作成し、適切なデプロイメント環境パターンを選択するか、またはカスタム・プロファイルを作成して、デプロイメント環境内のクラスター・メンバーを選択することを決定します。次に、「次へ」をクリックします。既存のデプロイメント・マネージャーやデプロイメント環境パターンがない場合は、最初のワークステーションでのインストール時に、「デプロイメント・マネージャーを作成し、デプロイメント環境パターンを選択してください。」というオプションを

選択する必要があります。後続のワークステーションでのインストール時に、それらのインストール済み環境を、既にデプロイメント・マネージャーを持つデプロイメント環境内に組み込む必要がある場合は、「**カスタム・プロファイルを作成し、デプロイメント環境内のクラスター・メンバーを選択してください。**」というオプションを選択します。次のステップは選択内容によって異なります。

選択したプロファイル・タイプ	次のステップ
デプロイメント・マネージャーを作成し、デプロイメント環境パターンを選択してください: このインストールの後続ステップで選択するデプロイメント環境パターンに基づき、新規のデプロイメント環境を作成するステップまでを、ウィザードのガイドに従って行います。	「管理セキュリティ」パネルが表示されます。『デプロイメント・マネージャーの作成とデプロイメント環境パターンの選択』のトピックに進んでください。
カスタム・プロファイルを作成し、デプロイメント環境内のクラスター・メンバーを選択してください: 定義したデプロイメント環境についてのカスタム・プロファイルを、ウィザードのガイドに従って作成します。このカスタム・プロファイルを作成するために、クラスター・メンバーを選択します。そのデプロイメント環境で稼動しているデプロイメント・マネージャーに接続できる必要があります。	「デプロイメント・マネージャー接続」パネルが表示されます。117 ページの『デプロイメント環境でのカスタム・プロファイルの作成とクラスター・メンバーの選択』のトピックに進んでください。

結果

以上のステップにより、インストールするフィーチャーを選択し、(WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境上へのインストールを行っていない場合は) インストール・ディレクトリーを指定しました。さらに、デプロイメント・マネージャーを作成してデプロイメント環境パターンを選択するのか、カスタム・プロファイルを作成して既存のデプロイメント環境内のクラスター・メンバーを選択するのかを選択しました。

次のタスク

行った選択に応じて該当するリンクの説明に従い、インストールを続行します。

デプロイメント・マネージャーの作成とデプロイメント環境パターンの選択

新しいデプロイメント・マネージャーの作成方法とデプロイメント環境パターンの選択方法について説明します。

このタスクについて

この手順は、新規のデプロイメント・マネージャーを作成し、デプロイメント環境パターンを選択する必要があることを前提としています。109 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「管理セキュリティ」パネルが表示されます。以下のステップを実行して、インストールを完了してください。

プロシージャ

1. 「管理セキュリティ」パネルで、インストール環境の管理セキュリティを構成します。いずれかのデプロイメント環境インストールの管理セキュリティを使用する必要があります。管理 ID およびパスワードを指定して管理ツールにログインし、「次へ」をクリックします。管理ユーザーが WebSphere Process Server 内のリポジトリに作成されます。インストールが完了した後に、さらにユーザー、グループ、または外部リポジトリを追加できます。

「デプロイメント・マネージャーおよびデプロイメント環境パターン」パネルが表示されます。

2. 「デプロイメント・マネージャーおよびデプロイメント環境パターン」パネルで、インストール環境に使用するデプロイメント環境パターンを選択します。

以下の手順を実行します。

- a. インストール環境で使用するデプロイメント環境パターンの横にある以下のラジオ・ボタンから選択します。
 - **リモート・メッセージングおよびリモート・サポート:** アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、メッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスター、および Common Event Infrastructure やその他のサポート・アプリケーション用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。このパターンでは、大半のビジネス統合のニーズに適合するセットアップが構成されます。迷う場合は、このパターンを選択してください。
 - **リモート・メッセージング:** アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、およびメッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。Common Event Infrastructure とその他のサポート・アプリケーションは、アプリケーション・デプロイメント・クラスター上に構成されます。
 - **単一クラスター:** アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスターを定義します。メッセージング・インフラストラクチャーおよび Common Event Infrastructure とサポート・アプリケーションは、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター上に構成されます。

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- **デプロイメント環境パターン - デプロイメント環境パターンは、デプロイメント環境に含まれるコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。** デプロイメント環境パターンは、お客様がデプロイメント環境を最も簡単な方法で作成できるよう支援することを目的とし、大半のビジネス要件を満たせるように設計されています。
 - **デプロイメント・パターン内のデプロイメント環境機能 - 堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが特定の IBM 提供のデプロイメント環境パターンまたはカスタム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。** この知識は、ニーズに最も合うデプロイメント環境パターンを正しく判別するのに役立ちます。
- b. 「次へ」をクリックします。「デプロイメント・マネージャー・データベース構成」パターン・パネルが表示されます。

3. 「デプロイメント・マネージャー・データベース構成」パターン・パネルで、インストール環境で使用するデータベースを選択します。

以下の手順を実行します。

- a. ステップ 3c で選択したデータベース製品に基づいて、「**新規データベースの作成**」の隣にあるチェック・ボックスを選択またはクリアします。

- Derby Network Server を使用する場合は、新規のローカル・データベースを作成する必要があります。この場合、チェック・ボックスはデフォルトで選択されており、選択の解除はできません。
- DB2 Universal Database を使用する場合は、このチェック・ボックスを選択すると、インストール時に新規のローカル・データベースが作成および構成されます。このチェック・ボックスの選択を解除すると、データベースの作成と構成はインストールの終了後まで延期されます。

制約事項: i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS システムでは、ローカルの i5/OS システム上の DB2 Universal Database 製品によって作成されたデータベースは使用できません。DB2 Universal Database 製品は、i5/OS 以外のシステムに常駐するリモート・サーバー上でのみ使用できます。この製品を使用するには JDBC ドライバー・タイプ 4 が必要です。

- Oracle 9i または 10 を使用する場合は、新規のローカル・データベースを作成することはできません。この場合、チェック・ボックスはデフォルトで選択解除されており、選択できません。
- b. Derby Network Server 以外のデータベースを使用する場合は、「**データベース・スクリプトの実行の遅延**」チェック・ボックスを選択し、インストールが終了するまでデータベースの作成と構成を延期します。データベース・スクリプトは、インストール・ウィザードによって作成され、インストール実行者またはデータベース管理者がデータベースの作成と構成時に使用することができます。ウィザードによって作成されたスクリプトは、以下のディレクトリにコピーされます。この例の *db_type* はデータベース製品の名前、*db_name* は共通データベースの名前を表します。

- i5/OS Linux UNIX **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** *profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name*

- Windows **Windows プラットフォームの場合:**
profile_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type¥db_name

- c. インストール環境で使用するデータベース製品をドロップダウン・リストから選択します。

重要: インストール・ウィザードでデプロイメント環境インストールを実行する場合は、WebSphere Process Server でサポートされるデータベース製品のうち、下記のとおり一部のみを使用できます。

- Derby Network Server
- DB2 Universal Database
- Oracle 9i または 10g

このリストの製品以外にも、サポートされるデータベース製品を使用できません (Informix® および Microsoft SQL Server は除外。これらはデプロイメント環境の構成ではサポートされません)。ただし、サポートされるその他のデータベース製品を使用するには、プロファイル管理ツールを使用してデプロイメント・マネージャーを作成する必要があります。詳しくは、198 ページの『プロファイルの作成』を参照してください。

- d. 「データベース名」フィールドで、デフォルト値 WPRCSDB を受け入れるか、インストール環境で使用する共通データベースの名前を入力します。
 - e. 「次へ」をクリックします。「追加のデータベース構成」パネルに、選択したデータベース製品に固有のフィールドが表示されます。
 - f. このパネルでの入力方法については、116 ページの『「追加のデータベース構成」パネル』のトピックを参照してください。「追加のデータベース構成」パネルに情報を入力したら、「次へ」をクリックします。「インストールの要約」パネルが表示されます。
4. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、コンポーネントが消費するスペース量、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認し、製品をインストールする場合は「次へ」を、指定内容を変更する場合は「戻る」をクリックします。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、コンポーネントがインストール中であることを示す進行状況表示パネルを表示します。

既存のバージョンの WebSphere Application Server Network Deployment 上に WebSphere Process Server をインストールすることを選択した場合、インストール・ウィザードはその既存バージョンを調べて以下のいずれかを実行します。

- インストール済み環境のサービス・レベルが適切な場合は、インストール・ウィザードは何も行いません。
- インストール済み環境が古いサービス・レベルである場合は、インストール・ウィザードは必要なフィックスを適用してそのインストール済み環境を適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

制約事項: i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境が古いサービス・レベルで、WebSphere Process Server のインストールを Windows クライアントからリモートで実行している場合は、このインストールを続行する前に、i5/OS システムでローカルのサイレント・インストールを使用して、WebSphere Application Server Network Deployment を更新する必要があります。

- WebSphere Process Server Samples フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境上へのインストールを試みると、その WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境に、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがサイレントに追加されません。

制約事項: i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャー

ャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境上にインストールするには、その前に i5/OS システムからのローカル・サイレント・インストールによって、WebSphere Application Server Network Deployment にサンプル・ギャラリー・フィーチャーを追加する必要があります。

インストールが終了すると、「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されます。

重要:

インストール中にエラーが検出されると、「成功」の代わりに他のメッセージが表示されます。その例と意味は次のとおりです。

- **部分的な成功。** インストールは完了しましたがエラーが生成されたことを示します。
- **失敗。** インストールがすべて失敗したことを示します。

インストールが正常に完了しなかった場合は、「インストールの結果」パネルで、問題のトラブルシューティングを行うために必要なログ・ファイルを確認できます。361 ページの『ログ・ファイル』で、該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
 - 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
 - 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
 - 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
 - **i5/OS** 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
 - 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
 - 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
5. 「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスが選択されていることを確認し、「終了」をクリックしてインストール・ウィザードを閉じ、ファースト・ステップ・コンソールを開始します。

結果

「インストールの結果」パネルに「成功」と表示された場合は、選択したコンポーネントが正常にインストールされ、デプロイメント環境が正常に作成されています。

インストール時点で最新の WebSphere Process Server フィックスパックがあれば、インストール環境に上書きインストールします。WebSphere Process Server へのフィックスパックのインストールについては、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) の『Recommended Fixes』に記載されている説明を参照してください。

データベースがアクティブでない場合は、データベースを始動してください。次に、ファースト・ステップ・コンソールから WebSphere Process Server Deployment Manager を開始し、インストールした環境が正常に作動していることを確認します。詳しくは、144 ページの『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。ファースト・ステップ・コンソールには、検証テストを実行するためのリンクと、プロファイル管理ツールを開始するためのリンクも表示されます。このツールで WebSphere Process Server カスタム・プロファイルを作成してデプロイメント環境に追加のクラスター・メンバーを定義できます。

「追加のデータベース構成」パネル:

インストール・ウィザードの「デプロイメント・マネージャー・データベース構成」パネルでデータベース製品を選択すると、後続のパネルにより、データベース固有の情報を入力するよう求められます。この「追加のデータベース構成」パネルのフィールドやデフォルト値は、選択したデータベース製品に応じて若干異なります。

「追加のデータベース構成」パネルに情報を入力したら、111 ページの『デプロイメント・マネージャーの作成とデプロイメント環境パターンの選択』に戻ります。

Derby Network Server

フィールド「データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)」と「サーバー・ポート」に値を入力します (またはデフォルト値の localhost と 1527 をそれぞれ受け入れます)。

DB2 Universal Database

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS システムでは、ローカルの i5/OS システム上の DB2 Universal Database 製品によって作成されたデータベースは使用できません。DB2 Universal Database 製品は、i5/OS 以外のシステムに常駐するリモート・サーバーでのみ 使用できます。この製品を使用するには JDBC ドライバー・タイプ 4 が必要です。

「データベースで認証するユーザー名」、「データベース認証用のパスワード」、「パスワードの確認」、「JDBC ドライバーのクラスパスのロケーション (ディレクトリー)」のそれぞれのフィールドに値を入力します。

「JDBC ドライバーのクラスパスのロケーション (ディレクトリー)」フィールドでは、次のファイルを含むシステム上のロケーションを指定する必要があります。

- db2jcc.jar
- db2jcc_license_cu.jarまたはdb2jcc_license_cisuz.jar
- **i5/OS** jt400.jar

指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

ご使用の JDBC ドライバーのタイプに応じて、**2** または **4** の横にあるラジオ・ボタンを選択します。

フィールド「データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)」と「サーバー・ポート」に値を入力します (またはデフォルト値の localhost と 50000 をそれぞれ受け入れます)。

Oracle 9i および 10g

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS システムは、Oracle データベース製品で作成されたデータベースをローカル i5/OS システム上で使用できません。Oracle データベース製品はリモート・サーバー上で使用できますが、Thin JDBC ドライバーとともに使用される場合に限られます。Oracle Call Interface (oci) JDBC ドライバーはローカル・サーバー専用であるため、i5/OS は Oracle をローカルでは使用できません。

「データベースで認証するユーザー名」 (この ID は、Oracle データベースでの SYSDBA 特権およびスキーマ作成権限を持っている必要があります)、「データベース認証用のパスワード」、「パスワードの確認」、および「JDBC ドライバーのクラスパスのロケーション (ディレクトリー)」のフィールドに値を入力します。

「JDBC ドライバーのクラスパスのロケーション (ディレクトリー)」フィールドは、ojdbc14.jar ファイルを含むディレクトリーを指していなければなりません。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

ご使用の JDBC ドライバーのタイプに応じて、oci または thin の横にあるラジオ・ボタンを選択します。

フィールド「データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)」と「サーバー・ポート」に値を入力します。「データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)」には、Oracle をローカルで実行している場合でも、Oracle インスタンス上で構成された値を使用します。「サーバー・ポート」には、デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、値が異なる場合はポート番号を指定します。

デプロイメント環境でのカスタム・プロファイルの作成とクラスター・メンバーの選択

既存のデプロイメント環境内でのカスタム・プロファイルの作成方法とクラスター・メンバーの選択方法について説明します。

このタスクについて

このトピックは、既存のデプロイメント環境内でカスタム・プロファイルを作成し、クラスター・メンバーを選択する必要があることを前提としています。109 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストーラ』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「デプロイメント・マネージャー接続」パネルが表示されます。以下のステップを実行して、インストーラを完了してください。

プロシージャ

1. 「デプロイメント・マネージャー接続」パネルで、クラスターを追加するデプロイメント環境を持つデプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポートを指定します。認証ユーザー ID およびパスワードも指定し

ます (デプロイメン環境のデプロイメント・マネージャーでは管理セキュリティが常に有効です)。次に、「次へ」をクリックします。このデプロイメント・マネージャーは、作成するカスタム・プロファイルのバージョンと同レベルか、それよりも上位レベルの WebSphere Process Server Deployment Manager でなければなりません。

WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。

デプロイメント・マネージャーの SOAP ポート番号を確認するには、`profile_root/logs/` 下でそのデプロイメント・マネージャーの `AboutThisProfile.txt` ファイルを開き、「SOAP connector port」の値を調べます。

デプロイメント・マネージャーが存在し、接続可能であり、認証ユーザー ID およびパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに対して有効であり、デプロイメント環境が定義されていることをインストール・ウィザードが検証します。

「クラスターおよびデータベースの構成 (パート 1)」パネルが開き、デプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターンの情報が表示されます。

- 「クラスターおよびデータベースの構成 (パート 1)」パネルのデプロイメント環境パターンで、このノードを割り当てるクラスターを 1 つまたは複数選択し、「次へ」をクリックします。インストール・ウィザードがデプロイメント・マネージャーで認識したデプロイメント環境パターンに基づいて、以下のように 1 つから 3 つのクラスターがパネルに表示されます。

表 20. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデプロイメント環境パターンによって提供されるクラスター

デプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターン	提供されるクラスター
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	<ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメントのターゲット: ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要のあるクラスター 1 つで構成されます。 • メッセージング・インフラストラクチャー: メッセージング・エンジンが配置されるクラスター 1 つで構成されます。 • サポート・インフラストラクチャー: ご使用のシステムの管理に使用される Common Event Infrastructure サーバーおよびその他のインフラストラクチャー・サービスをホスティングするクラスター 1 つで構成されます。

表 20. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデプロイメント環境パターンによって提供されるクラスター (続き)

デプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターン	提供されるクラスター
リモート・メッセージング	<ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメントのターゲット: ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要のあるクラスター 1 つで構成されます。リモート・メッセージングのデプロイメント環境パターンを使用すると、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスターは、サポート・インフラストラクチャー・クラスターの機能も果たします。 • メッセージング・インフラストラクチャー: メッセージング・エンジンが配置されるクラスター 1 つで構成されます。
単一クラスター	<ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメントのターゲット: ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要のあるクラスター 1 つで構成されます。単一クラスターのデプロイメント環境パターンを使用すると、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスターは、メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターおよびサポート・インフラストラクチャー・クラスターの機能も果たします。

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

「クラスターおよびデータベースの構成 (パート 2)」パネルが開き、そのデプロイメント・マネージャーによって使用されるデータベースの情報が表示されません。

3. 「クラスターおよびデータベースの構成 (パート 2)」パネルで、JDBC ドライバー・クラスパス・ファイルのロケーションを指定し (またはデフォルトを受け入れ)、**「次へ」** をクリックします。

「インストールの要約」パネルが表示されます。

4. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、コンポーネントが消費するスペース量、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認し、製品をインストールする場合は**「次へ」** を、指定内容を変更する場合は**「戻る」** をクリックします。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、コンポーネントがインストール中であることを示す進行状況表示パネルを表示しません。

既存のバージョンの WebSphere Application Server Network Deployment 上に WebSphere Process Server をインストールすることを選択した場合、インストール・ウィザードはその既存バージョンを調べて以下のいずれかを実行します。

- インストール済み環境のサービス・レベルが適切な場合は、インストール・ウィザードは何も行いません。
- インストール済み環境が古いサービス・レベルである場合は、インストール・ウィザードは必要なフィックスを適用してそのインストール済み環境を適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

制約事項: **i5/OS** 既存の WebSphere Application Server Network Deployment が以前のサービス・レベルでインストールされており、WebSphere Process Server のインストールを Windows クライアントからリモートに実行している場合は、インストールを続行する前に、i5/OS システムからのローカル・サイレント・インストールによって WebSphere Application Server Network Deployment を更新する必要があります。

- WebSphere Process Server Samples フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境上へのインストールを試みると、その WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境に、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがサイレントに追加されます。

制約事項: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Process Server Samples フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境上にインストールするには、その前に i5/OS システムからのローカル・サイレント・インストールによって、WebSphere Application Server Network Deployment にサンプル・ギャラリー・フィーチャーを追加する必要があります。

インストールが終了すると、「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されます。

重要:

インストール中にエラーが検出されると、「成功」の代わりに他のメッセージが表示されます。その例と意味は次のとおりです。

- **部分的な成功。** インストールは完了したがエラーが生成されたことを示します。
- **失敗。** インストールがすべて失敗したことを示します。

インストールが正常に完了しなかった場合は、「インストールの結果」パネルで、問題のトラブルシューティングを行うために必要なログ・ファイルを確認できます。361 ページの『ログ・ファイル』で、該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
 - 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
 - 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
 - 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
 - **i5/OS** 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
 - 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
 - 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
5. 「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスが選択されていることを確認し、「終了」をクリックしてインストール・ウィザードを閉じ、ファースト・ステップ・コンソールを開始します。

結果

「インストールの結果」パネルに「成功」と表示された場合は、選択したコンポーネントが正常にインストールされ、デプロイメント環境が正常に更新されています。デプロイメント環境で稼働中のデプロイメント・マネージャーには、カスタム・プロファイルが統合されています。

インストール時点で最新の WebSphere Process Server フィックスパックがあれば、インストール環境に上書きインストールします。WebSphere Process Server へのフィックスパックのインストールについては、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) の『*Recommended fixes*』に記載されている説明を参照してください。

WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーがまだ実行されていない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから開始し、クラスターをデプロイメント環境に追加できるようにします。デプロイメント・マネージャーが開始すると、そのセルに属するノードを管理できるようになります。

WebSphere Process Server Client の対話式インストール

この手順を使用して、インストール・ウィザード・グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用した WebSphere Process Server Client のインストールを

実行します。このインストールの一部として WebSphere Application Server Network Deployment をインストールできます。WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server Client をインストールすることも可能です。

このタスクについて

このトピックでは、94 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを開始し、前提条件と既存の WebSphere インストール済み環境を確認し、Client インストールの実行を選択したことを前提としています。WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server Client をインストールしているかどうかによって、「インストールの要約」パネルと「インストール・ロケーション」パネルのいずれかが表示されています。

プロシージャ

1. インストールを完了します。次のステップは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境に WebSphere Process Server Client をインストールしているかどうかによって異なります。

インストール状況	次のステップ
WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしている。 重要: WebSphere Process Server をインストールするユーザーは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment をインストールしたユーザーと同じである必要があります。	「インストールの要約」パネルが表示されます。ステップ 3 (123 ページ) に進んでください。
WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしていない。	「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「インストール・ロケーション」パネルで、製品のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリを受け入れるか、または別のディレクトリを指定して、「次へ」をクリックします。

i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS システムの「インストール・ロケーション」パネルでは、プロファイル・インストール・ディレクトリも指定できます。

Linux **UNIX** **Windows** **Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:** インストール・ウィザードに、システムが所有する root ユーザーまたは管理者のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリが表示され

ます。ここには、非 root ユーザー用の、ユーザーが所有する別のデフォルト・インストール・ルート・ディレクトリが表示されます。

デフォルト・インストール・ディレクトリと、インストール・ウィザードによるデフォルト・インストール・ディレクトリの決定方法については、388 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリ』を参照してください。

インストール・ウィザードは、インストール・ロケーションが完全修飾されており、正しい形式であること、インストールを実行するユーザー ID によって書き込み可能であること、およびインストールを正常に実行するための十分なディスク・スペース (必要な一時スペースを含む) があることを確認します。十分なスペースがない場合は、インストール・プログラムを停止して、使用していないファイルを削除し、ごみ箱を空にすることでスペースを解放し、再度インストールを開始してください。

重要:

- インストール・ルート・ディレクトリの値を指定しなければ、処理を続行することができません。
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** パス名の中の各コンポーネントの最大長は 255 文字です。パス名の最大長は 16 MB です。
- **i5/OS** **Linux** **UNIX** **i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合:** インストール・ルート・ディレクトリにシンボリック・リンクを使用しないでください。シンボリック・リンクはサポートされていません。また、ディレクトリ・パスにはスペースを使用しないでください。
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** Windows システムではディレクトリ名にセミコロンを使用しないでください (セミコロンは、Windows システム上のクラス・パスを構成するために使用される文字です)。ターゲット・ディレクトリにセミコロンが含まれる場合、WebSphere Process Server は Windows プラットフォーム上に正しくインストールできません。

このステップの完了時に、「インストールの要約」パネルが表示されます。

3. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、コンポーネントが消費するスペース量、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認してから、製品をインストールする場合は「次へ」を、指定内容を変更する場合は「戻る」を選択します。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、コンポーネントがインストール中であることを示す進行状況表示パネルを表示します。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のバージョンに WebSphere Process Server Client をインストールすることを選択した場合、インストール・ウィザードによりそのインストール済み環境が検査され、以下のいずれかのアクションが実行されます。

- インストール済み環境のサービス・レベルが適切な場合は、インストール・ウィザードは何も行いません。

- インストール済み環境が古いサービス・レベルである場合は、インストール・ウィザードは必要なフィックスを適用してそのインストール済み環境を適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

制約事項: i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境が古いサービス・レベルで、WebSphere Process Server のインストールを Windows クライアントからリモートで実行している場合は、このインストールを続行する前に、i5/OS システムでローカルのサイレント・インストールを使用して、WebSphere Application Server Network Deployment を更新する必要があります。

インストールが終了すると、「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されます。

重要:

インストール中にエラーが検出されると、「成功」の代わりに他のメッセージが表示されます。その例と意味は次のとおりです。

- **部分的な成功。** インストールは完了したがエラーが生成されたことを示します。
- **失敗。** インストールがすべて失敗したことを示します。

インストールが正常に完了しなかった場合は、「インストールの結果」パネルで、問題のトラブルシューティングを行うために必要なログ・ファイルを確認できます。361 ページの『ログ・ファイル』で、該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
 - 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
 - 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
 - 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
 - i5/OS 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
 - 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
 - 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
4. 「終了」を選択して、インストール・ウィザードを閉じます。

結果

「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されている場合、WebSphere Process Server Client のインストールは成功しています。

インストール時点で最新の WebSphere Process Server フィックスパックがあれば、インストール環境に上書きインストールします。WebSphere Process Server へのフ

イックスパックのインストールについて詳しくは、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) の『*Recommended fixes*』に記載されている説明を参照してください。

すべての WebSphere Process Server Client ファイルが正しくインストールされているかどうか検査するには、installver_wbi コマンドを実行します。詳しくは、152 ページの『インストール済みファイルの検査合計の検証』を参照してください。

既存のインストール済み環境への追加フィーチャーのインストール

この手順を使用して、インストール・ウィザード・グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して WebSphere Process Server の既存のインストール済み環境に追加フィーチャーをインストールします。

このタスクについて

このトピックでは、94 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを開始し、前提条件と既存の WebSphere のインストール環境を確認済みであることを前提としています。WebSphere Process Server がシステムにインストール済みであり、対話式インターフェースを使用してシステムにフィーチャーを追加するとします。WebSphere Process Server の既存のプロファイルは必要ありません。この手順を実行しても、既にインストールされているフィーチャーまたはプロファイルは変更されず、元のインストール済み環境に加えられた更新にも影響しません。「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「フィーチャーの選択」パネルで、インストールするフィーチャーを選択し、「次へ」をクリックします。既にインストールされているフィーチャーは選択項目として表示されません。このパネルで選択できるフィーチャーの説明については、395 ページの『製品コンポーネント』を参照してください。

ヒント: WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを追加しても、サンプルは、既存のプロファイルに自動的にデプロイされません。新しいプロファイルを作成して、サンプルをデプロイする必要があります。「インストールの要約」パネルが表示されます。

2. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、コンポーネントが消費するスペース量、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認し、製品をインストールする場合は「次へ」を、指定内容を変更する場合は「戻る」をクリックします。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、コンポーネントがインストール中であることを示す進行状況表示パネルを表示します。

インストール・ウィザードは、基盤となる WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境を検査し、以下のアクションのいずれかを実行します。

- インストール済み環境のサービス・レベルが適切な場合は、インストール・ウィザードは何も行いません。

- インストール済み環境が古いサービス・レベルである場合は、インストール・ウィザードは必要なフィックスを適用してそのインストール済み環境を適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

制約事項: i5/OS WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境が古いサービス・レベルであり、WebSphere Process Server のインストールが Windows クライアントからリモートで行われる場合、このインストールを続行する前に、i5/OS システムからローカル・サイレント・インストールを使用して、WebSphere Application Server Network Deployment を更新する必要があります。

- WebSphere Process Server Samples フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境上へのインストールを試みると、その WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境に、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがサイレントに追加されません。

制約事項: WebSphere Process Server のサンプルの増分インストールは、WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境にのみ実行できます (WebSphere Application Server のインストール済み環境には増分インストールできません)。したがって、WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを選択し、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server のインストール済み環境に WebSphere Process Server をインストールしても、サンプル・アプリケーション・ギャラリー・フィーチャーは WebSphere Application Server のインストール済み環境にはサイレントに追加されません。

制約事項: i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境上にインストールするには、その前に i5/OS システムからのローカル・サイレント・インストールによって、WebSphere Application Server Network Deployment にサンプル・ギャラリー・フィーチャーを追加する必要があります。

インストールが終了すると、「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されます。

重要:

インストール中にエラーが検出されると、「成功」の代わりに他のメッセージが表示されます。その例と意味は次のとおりです。

- **部分的な成功。** インストールは完了したがエラーが生成されたことを示します。
- **失敗。** インストールがすべて失敗したことを示します。

インストールが正常に完了しなかった場合は、「インストールの結果」パネルで、問題のトラブルシューティングを行うために必要なログ・ファイルを確認できます。361 ページの『ログ・ファイル』で、該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
 - 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
 - 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
 - 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
 - **i5/OS** 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
 - 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
 - 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
3. 「インストールの結果」パネルで、新規のプロファイルをすぐに作成するかどうかによって、以下のいずれかのアクションを実行します。

プロファイルの状況	次のステップ
プロファイルを作成する	「プロファイル管理ツールを使用して、新しい WebSphere Process Server プロファイルを作成します」の横にあるチェック・ボックスを選択したまま、「終了」をクリックします。インストール・ウィザードが閉じて、プロファイル管理ツールが開始されます。このツールを使用して、新規 WebSphere Process Server プロファイルを作成する方法、あるいは既存のアプリケーション・サーバー・プロファイルまたは WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張する方法については、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』および 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。

プロファイルの状況	次のステップ
プロファイルを作成しない	<p>「プロファイル管理ツールを使用して、新しい WebSphere Process Server プロファイルを作成します」の横にあるチェック・ボックスをクリアして、「終了」をクリックし、インストール・ウィザードを閉じます。</p> <p>重要: 動作環境を保持するには、管理対象ノードを持つ WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル、またはデプロイメント・マネージャー・プロファイルが存在している必要があります。</p>

結果

「インストールの結果」パネルに「**成功**」と表示される場合、追加のフィーチャーのインストールは成功しています。

インストール時点で最新の **WebSphere Process Server** フィックスパックがあれば、インストール環境に上書きインストールします。**WebSphere Process Server** へのフィックスパックのインストールについては、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) の『*Recommended fixes*』に記載されている説明を参照してください。

プロファイルを作成しなかった場合は、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』を参照し、プロファイル管理ツールを使用して新規の **WebSphere Process Server** プロファイルを作成したり、既存のアプリケーション・サーバーまたは **WebSphere Enterprise Service Bus** のプロファイルを **WebSphere Process Server** プロファイルに拡張したりするための手順に従ってください。

WebSphere Process Server のサンプル・ギャラリーについては、『サンプル (サンプル・ギャラリー) へのアクセス』を参照してください。

WebSphere Process Server インストール済み環境への WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client インストール済み環境の変換

インストール・ウィザードのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して **WebSphere Enterprise Service Bus** または **WebSphere Process Server Client** バージョン 6.1.x インストール環境を **WebSphere Process Server** バージョン 6.1.x のインストール環境に変換するには、この手順を使用します。

このタスクについて

このトピックでは、94 ページの『**WebSphere Process Server** の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを開始し、前提条件と既存の **WebSphere** のインストール環境を確認済みであることを前提としています。**WebSphere Process Server** を既存の **WebSphere Enterprise Service Bus** または

WebSphere Process Server Client のインストール環境の上に対話式にインストールする必要があることも前提です。「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「フィーチャーの選択」パネルで、インストールするフィーチャーを選択し、「次へ」を選択します。既にインストールされているフィーチャーは選択項目として表示されません。

このパネルで選択できるフィーチャーの説明については、395 ページの『製品コンポーネント』を参照してください。「インストールの要約」パネルが表示されます。

2. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、コンポーネントが消費するスペース量、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認してから、製品をインストールする場合は「次へ」を、指定内容を変更する場合は「戻る」を選択します。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、コンポーネントがインストール中であることを示す進行状況表示パネルを表示します。

インストール・ウィザードは、基盤となる WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境を検査し、以下のアクションのいずれかを実行します。

- インストール済み環境のサービス・レベルが適切な場合は、インストール・ウィザードは何も行いません。
- インストール済み環境が古いサービス・レベルである場合は、インストール・ウィザードは必要なフィックスを適用してそのインストール済み環境を適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

制約事項: i5/OS 既存の WebSphere Application Server Network Deployment が以前のサービス・レベルでインストールされており、WebSphere Process Server のインストールを Windows クライアントからリモートに実行している場合は、インストールを続行する前に、i5/OS システムからのローカル・サイレント・インストールによって WebSphere Application Server Network Deployment を更新する必要があります。

- WebSphere Process Server Samples フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境上へのインストールを試みると、その WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境に、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがサイレントに追加されません。

制約事項: WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーは、WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境上でのみ増分インストールすることができます。WebSphere Application Server のインストール済み環境にはインストールできません。したがって、WebSphere Process Server のサンプル・フィーチャーを選択し、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server のインストー

ル済み環境に WebSphere Process Server をインストールしても、サンプル・アプリケーション・ギャラリー・フィーチャーは WebSphere Application Server のインストール済み環境にはサイレントに追加されません。

制約事項: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Process Server サンプル・フィーチャーを選択して、サンプル・ギャラリー・フィーチャーがインストールされていない WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境上にインストールするには、その前に i5/OS システムからのローカル・サイレント・インストールによって、WebSphere Application Server Network Deployment にサンプル・ギャラリー・フィーチャーを追加する必要があります。

インストールが終了すると、「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されます。

重要:

インストール中にエラーが検出されると、「成功」の代わりに他のメッセージが表示されます。その例と意味は次のとおりです。

- **部分的な成功。** インストールは完了したがエラーが生成されたことを示します。
- **失敗。** インストールがすべて失敗したことを示します。

インストールが正常に完了しなかった場合は、「インストールの結果」パネルで、問題のトラブルシューティングを行うために必要なログ・ファイルを確認できます。361 ページの『ログ・ファイル』で、該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
- 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
- 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
- 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
- **i5/OS** 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
- 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
- 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』

3. 「終了」をクリックして、インストール・ウィザードを閉じます。

結果

「インストールの結果」パネルに「成功」と表示された場合は、製品が正常にインストールされています。

インストール時点で最新の WebSphere Process Server フィックスパックがあれば、インストール環境に上書きインストールします。WebSphere Process Server へのフ

バックアップのインストールについて詳しくは、サポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/support/>) の『*Recommended fixes*』に記載されている説明を参照してください。

プロファイルを作成しなかった場合は、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』を参照し、プロファイル管理ツールを使用して新規の WebSphere Process Server プロファイルを作成したり、既存のアプリケーション・サーバーまたは WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張したりするための手順に従ってください。

次に、ファースト・ステップ・コンソールから作成するサーバーまたはデプロイメント・マネージャーを開始すると、インストールした環境が正常に作動していることを確認できます。詳しくは、144 ページの『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。

Linux、UNIX、および Windows へのサイレント・インストール

WebSphere Process Server のインストールにグラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用しない場合は、応答ファイルというファイルを使用して、分散システムでサイレント・インストール (バックグラウンド・インストール) を実行できます。サイレント・インストールでは、グラフィカル・ユーザー・インターフェースまたは「ウィザード」は表示されず、インストール・プログラムが指定されたファイルからすべての応答を読み取ります。応答ファイルの例として `responsefile.wbis.txt` が付属しており、デフォルト値が設定されています。この応答ファイルは、WebSphere Process Server のサイレント・インストールに使用できます。

応答ファイル (オプション・ファイルとも呼ばれる) は、コマンド行オプションをインストール・プログラムに渡すために使用されます。

始める前に

- 45 ページの『第 4 章 WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』で、製品をインストールするための前提条件のリストを確認してください。
- セキュリティーおよび役割ベースの許可を有効にする場合は、必ず管理者としてログインしてください。サイレント・インストール中には、デフォルトでセキュリティが有効になります。セキュリティを無効にするには、応答ファイルの **PROF_enableAdminSecurity** 値を "false" に変更します。

注: 標準的インストール中にスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成を選択し、セキュリティを有効にした場合、インストーラーによりそのプロファイルにサンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。セキュリティを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。

重要: **AIX** プラットフォームの場合: AIX でのサイレント・インストール用のファイルを準備する場合は、UNIX 行終了文字 (0x0D0A) を応答ファイルの各行の末尾に使用します。ファイルを作成する最も安全な方法は、ターゲット・オペレーティング・システム上でファイルを編集することです。



注: 応答ファイルを使用して、製品のインストール CD からインストールすることはできません。これは、インストール・ファイルが複数の CD に含まれているためです。サイレント・インストールを実行するには、以下のいずれかの方法を使用できます。

- パスポート・アドバンテージからダウンロードした電子イメージのコンテンツをご使用のシステム上の一時的な場所に保存して、そこからサイレント・インストールを実行する。
- *WebSphere Process Server V6.1 DVD* を使用してサイレント・インストールを実行する。
- *WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* および *WebSphere Process Server V6.1 Disk 2* の両方のコンテンツをご使用のシステム上の一時的な場所にコピーして、そこからサイレント・インストールを実行する。

コマンド行からのインストールについては、WebSphere Process Server の技術情報の「Additional Information for Silent Installation of WebSphere Process Server」を参照してください。

手順

応答ファイルを使用してサイレント・インストールを行うには、以下のステップを実行します。

1. オペレーティング・システムにログオンします。
2.   **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** ドライブに DVD を挿入後、一部の Linux および UNIX オペレーティング・システムではドライブをマウントする必要があります。
3. サンプルの応答ファイル `responsefile.wbis.txt` を *WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* というラベルが付いたディスク上の WBI ディレクトリーからご使用のシステム上の見つけやすい場所へコピーし、新しい名前 (`myoptionsfile.txt` など) で保存します。
4. ターゲット・オペレーティング・システム上で、選択したフラット・ファイル・エディターを使用してファイルを編集し、ご使用のシステム用のパラメーターを使用してカスタマイズします。応答ファイル内の指示を読み、今回のサイレント・インストールのために設定するすべてのオプションに適切な値を選択します。

応答ファイル内のすべてのパラメーターを変更できますが、以下のオプションと値に注意してください。

重要: 必ず、ファイル内のご使用条件への同意に関する記述において、値を "true" に変更してください。値を "false" のままにすると、インストールが失敗します。

例えば、ご使用条件への同意として `-OPT`

`silentInstallLicenseAcceptance="true"` にしてください。

- `wpsInstallType` オプションの値を変更して、以下のいずれかのインストール・タイプを指定します。

- "typical" - WebSphere Process Server をフルインストールします。このインストールでは、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、カスタムの初期 WebSphere Process Server 環境を定義できます (環境を定義しないことも選択できます)。

デフォルトでは、responsefile.wbis.txt のインストール・タイプ設定は標準的インストール、つまり `-OPT wpsInstallType="typical"` です。

- "client" - WebSphere Process Server の部分インストールです。同一セル内でプロセス・サーバーと対話するクライアント・アプリケーションを実行できます。

運用できる WebSphere Process Server クライアント環境を作成するには、オプション機能 (サンプルなど) を選択したり、インストールの一部としてプロファイルを作成したりしないでください。これを行うと、インストールが失敗する可能性があります。クライアント・インストールを作成する方法の例については、サンプル応答ファイルを参照してください。

- "ndGuided" - WebSphere Process Server のフルインストールです。デプロイメント環境をセットアップしたり、デプロイメント環境パターンに基づいてデプロイメント・マネージャーを作成したり、前に作成したデプロイメント環境を定義したりするためのガイドが表示されます。
- 標準的インストールの場合は、操作可能な WebSphere Process Server 環境を作成するためにプロファイルが必要です。インストール処理中にプロファイルを作成するように応答ファイルで値を指定することにより、プロファイルをサイレントに作成できます。オプション `profileType` の値を以下のいずれかの値に変更します。
 - `deploymentManager` - デプロイメント・マネージャーでプロファイルを作成します。以下に例を示します。
`-OPT profileType="deploymentManager"`
 - `standAlone` - スタンドアロン・サーバーでプロファイルを作成します。以下に例を示します。
`-OPT profileType="standAlone"`
 - `custom` - 空のノードでプロファイルを作成します。この空のノードは、インストール後に構成できます。
`-OPT profileType="custom"`
 - `none` - インストール中にプロファイルを作成しません。この値は、サイレント・インストール・プロセス中にプロファイルを作成しない場合に使用します。インストール後にプロファイル管理ツールを実行してプロファイルを作成する必要があります。
`-OPT profileType="none"`

注: 既存のインストールのための新しいプロファイルを作成する場合は、応答ファイルの `-OPT installType="installNew"` セクションをコメント化し、応答ファイルの `-OPT createProfile` セクションからコメントを外し、オプション `-createProfile` の値を `true` に変更します。以下に例を示します。

```
#-OPT installType="installNew"
-OPT createProfile="true"
```

プロファイルのサイレント作成について詳しくは、203 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成』を参照してください。

- デプロイメント環境のインストール (-OPT wpsInstallType="ndGuided") を指定した場合は、追加のオプションも指定して、インストールを定義する必要があります。ndGuidedInstallType オプションの値を以下のいずれかの値に変更します。

- deploymentManager - デプロイメント・マネージャーを作成するためのガイドを表示します。このガイドでは、選択したパターンに基づく新しいデプロイメント環境を作成します。以下に例を示します。

```
-OPT ndGuidedInstallType="deploymentManager"
```

deploymentManager の値を使用する場合は、応答ファイルの他の値も変更して、サイレント・インストール中のデプロイメント・マネージャー・サーバーの作成を詳細に定義する必要があります。

- additionalRoles - 既に定義したデプロイメント環境用のカスタム・プロファイルを作成するためのガイドを表示します。そのデプロイメント環境で稼動しているデプロイメント・マネージャーに接続できる必要があります。以下に例を示します。

```
-OPT ndGuidedInstallType="additionalRoles"
```

デプロイメント環境について詳しくは、『WebSphere Process Server の計画』および『デプロイメント環境の実装』を参照してください。

注: どの時点でも *WebSphere Process Server V6.1 Disk 1 CD* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* の WBI ディレクトリーに戻って応答ファイル例 responsefile.wbis.txt を参照し、デフォルトのオプションと値を確認できます。

5. コピーした応答ファイルに変更内容を保存します。
6. コマンドを実行し、カスタム応答ファイルを使用して WebSphere Process Server をインストールします。ここに示すコマンドでは、応答ファイルを一時ディレクトリーにコピーし、myoptions.txt に名前変更した後にファイルをカスタマイズしたと想定します。

次のコマンドを *WebSphere Process Server V6.1 DVD*、あるいはパスポート・アドバンテージまたは *WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* および *WebSphere Process Server V6.1 Disk 2* からの電子イメージのコンテンツを保存した一時的な場所のいずれかから実行します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `install -options /tmp/WBI/myoptions.txt -silent`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install.bat -options "C:¥temp¥WBI¥myoptions.txt" -silent`

次の作業

log.txt のログ・ファイルを調べて、インストールが正常に終了していることを確認します。ログ・ファイルの場所は以下のとおりです。ここで、*install_root* は WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client インストールの場所を表します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

install_root/logs/wbi/install/log.txt

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: *install_root*\logs\wbi\install\log.txt

このログ・ファイルの最後の行に INSTCONFSUCCESS というストリングが含まれている場合、インストールは正常に終了しています。INSTCONFPARTIALSUCCESS や INSTCONFFAILED などの用語がファイル内の別の行に (あるいは最後の行にも) 出現する場合がありますが、INSTCONFSUCCESS が最後の行に含まれていれば、インストールは正常に終了しています。

インストールが正常終了しなかった場合は、他のログ・ファイルを調べて原因を判別してください。『ログ・ファイル』にリストされた関連するログ・ファイルの説明、『エラー・メッセージ: インストールおよびプロファイルの作成と拡張』のエラー・メッセージの説明を参照し、『サイレント・インストールのトラブルシューティング』を確認してください。インストールのトラブルシューティングに関するヒントについては、『インストールおよび構成のトラブルシューティング』を参照してください。プロファイルが正常に作成されなかった場合は、『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』を参照してください。

スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成を選択した場合は、インストールが正常に終了したら、ファースト・ステップ・コンソールからサーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動し、インストールした環境が作動することを確認します。詳細については、『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。インストール検査ツールを使用してインストールの検査を行うこともできます。詳しくは、『インストールの検査』を参照してください。

i5/OS での System i サーバーからのサイレント・インストール

WebSphere Process Server のインストールにグラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用しない場合は、応答ファイルというファイルを使用して System i サーバーでサイレント・インストール (バックグラウンド・インストール) を実行できます。サイレント・インストールでは、グラフィカル・ユーザー・インターフェースまたは「ウィザード」は表示されず、インストール・プログラムが指定されたファイルからすべての応答を読み取ります。応答ファイルの例として responsefile.wbis.txt が付属しており、デフォルト値が設定されています。この応答ファイルは、WebSphere Process Server のサイレント・インストールに使用できます。

始める前に

この手順を実行する前に、インストールの準備を行ってください。詳しくは、60 ページの『i5/OS システムのインストール準備』を参照してください。

WebSphere Process Server をインストールする前に、ユーザー・プロファイルに *ALLOBJ と *SECADM の特殊権限が指定されていることを確認してください。

このタスクについて

WebSphere Process Server は、Qshell から **INSTALL** コマンドを使用してインストールできます。また、**RUNJVA** コマンドを使用して、インストール・ウィザードを起動することもできます。

応答ファイル (オプション・ファイルともいいます) は、コマンド行オプションをインストール・プログラムまたはアンインストール・プログラムに受け渡すために使用されます。

プロシージャ

1. *ALLOBJ と *SECADM の特殊権限を持つユーザー・プロファイルで System i サーバーにサインオンします。
2. WebSphere Process Server for i5/OS のディスクを、System i サーバーのディスク・ドライブにセットします。

WebSphere Process Server for Windows バージョン 6.1 のディスクなど、i5/OS 用のディスク以外の他のオペレーティング・システム用のディスクは使用しないでください。

3. Copy (CPY) コマンドを使用して、ディスクから responsefile.wbis.txt ファイルのコピーを作成します。

以下に例を示します。

```
CPY OBJ('/QOPT/WEBSHERE') TOOBJ('/my_dir/new_dir') SUBTREE(*ALL) REPLACE(*YES)
```

QOPT は、ディスクのマウント・ポイントです。

WEBSHERE は、ディスク・ボリュームのラベルです。

/WBI は、ディスク上の製品ディレクトリーです。これは後の手順で参照されます。

4. /WBI/lafiles ディレクトリーにある「IBM プログラムのご使用条件」をまだ読んでいない場合は、お読みください。

ご使用条件に同意される場合は、インストール・プロセスを続行します。

5. /MYDIR/responsefile.base.txt ファイルを編集します。
 - a. -OPT silentInstallLicenseAcceptance の値を false から true に変更します。

値 true は、ご使用条件を読んだ上で同意することを意味します。この変更は、インストールを実行するために必要です。

- b. デフォルトでは、PROF_enableAdminSecurity オプションは true に設定されています。インストール時に作成されるデフォルト・プロファイルの管理セキュリティを有効にする場合は、PROF_adminUserName オプションと PROF_adminPassword オプションの値を指定する必要があります。

ユーザー ID とパスワードは、システム・ユーザーの ID とパスワード、または LDAP のユーザー ID とパスワードである必要はありません。指定した

ID とパスワードのペアは、ユーザー・レジストリーに保管され、デフォルト・プロファイルの管理セキュリティで使われます。ユーザー ID とパスワードを書き留めておいてください。

デフォルト・プロファイルの管理セキュリティを有効にしない場合は、`PROF_enableAdminSecurity` オプションの値を `true` から `false` に変更します。

注: Samples フィーチャーは、この製品ではデフォルトでインストールされません。これらのサンプルを使用する場合は、以下のアクションを実行してください。

- `-OPT addFeature` オプションに `sampleSelected` を指定します。
- セキュリティを有効にする場合は、`-OPT samplesPassword` オプションの値を指定します。

6. WebSphere Process Server for i5/OS のインストール・プログラムを起動します。

WebSphere Process Server for i5/OS のインストール・プログラムを起動するには、Qshell から **INSTALL** コマンドを実行するか、または CL コマンド行から **RUNJVA** コマンドを実行します。

下の例のコマンドの *pathresponsefile* は、編集した `responsefile.wbis.txt` ファイルの完全修飾パスを表します。

- Qshell から **INSTALL** コマンドを実行します。
 - a. CL コマンド行で、**STRQSH** コマンドを発行して、Qshell コマンド・シェルを開始します。
 - b. /WBI ディレクトリーから **INSTALL** コマンドを発行して、インストール・プログラムを開始します。

```
INSTALL -options path/responsefile -silent
```

重要: インストールが完了するまで、Qshell セッションを終了 (PF3) しないでください。この終了を行うと、インストールが途中で停止する場合があります。

- 次のように、CL コマンド行から **RUNJVA** コマンドを発行します。

CL コマンド行で、*lmy_dir/new_dir/WBI/install* ディレクトリーに移動してから、以下のコマンドを発行します。RUNJVA コマンドを 1 行で入力します。コマンドの形式を分かりやすくするために複数の行に分けて示します。

```
RUNJVA
CLASS(run) PARM('-options' 'path/responsefile')
CLASSPATH('setup.jar')
PROP(
  ('Xbootclasspath/p' '../JDK/jre.pak/repository/package.java.jre/
  java/jre/lib/xml.jar')
  (java.version 1.5)
  (is.debug 1)
)
```

結果

インストールを起動すると、インストール・プロセスの進行を表すメッセージが表示されます。セットアップ・プログラムが完了したら、**F3** を押して終了します。

Windows ワークステーションのコマンド行から i5/OS をサイレント・インストールする

インストールのもう 1 つの方法として、WebSphere Process Server for i5/OS を Windows ワークステーションのコマンド行からインストールする方法があります。

このタスクについて

リモート・サイレント・モードを使用すると、リモートの Windows ワークステーションから 1 つのコマンドを実行するだけでこの製品をインストールすることができます。インストール・オプションは応答ファイル内に指定する必要があります。インストール中はインストール・オプションを変更することはできません。パラメーターとデフォルト値については、コマンド行インストール用の `responsefile.wbis.txt` に説明されています。

プロシージャ

1. ご使用の System i サーバー上で TCP/IP が開始されていない場合は、制御言語 (CL) コマンド行に TCP/IP の開始 (STRTCP) コマンドを入力します。
2. ホスト・サーバーのジョブが、使用する System i サーバー上で開始されていることを確認します。ホスト・サーバーのジョブにより、インストール・コードが i5/OS 上で実行可能になります。

CL コマンド行で、次のコマンドを入力します。

```
STRHOSTSVR SERVER(*ALL)
```

3. ユーザー・プロファイルに *ALLOBJ と *SECADM の特殊権限が指定されていることを確認してください。
4. WebSphere Process Server for i5/OS のディスクを、Windows ワークステーションのディスク・ドライブにセットします。自動実行機能により GUI が起動されます。GUI を終了するには、「取り消し」をクリックします。

WebSphere Process Server for Windows バージョン 6.1 のディスクなど、i5/OS 用のディスク以外の他のオペレーティング・システム用のディスクは使用しないでください。

5. Windows ワークステーションでコマンド・プロンプトを開きます。
6. ディスク・ドライブに切り替えて、Windows ワークステーションのディスク・ドライブにアクセスします。例えば、`e:` と入力します。この場合、`e:` は DVD ドライブに割り当てられている文字です。
7. 応答ファイルをディスク・ディレクトリーから Windows ワークステーション上のディレクトリー (`C:\temp` ディレクトリーなど) にコピーします。

以下に例を示します。

```
copy responsefile.wbis.txt C:\temp\%RESPONSEFILE
```

8. `%LICENSES` ディレクトリーにある「IBM プログラムのご使用条件」をまだお読みでない場合は、お読みください。

ご使用条件に同意される場合は、インストール・プロセスを続行します。

9. `RESPONSEFILE` ファイルを編集します。
 - a. `-OPT silentInstallLicenseAcceptance` の値を `false` から `true` に変更します。

値 `true` は、ご使用条件を読んだ上で同意することを意味します。この変更は、インストールを実行するために必要です。

- b. デフォルトでは、`PROF_enableAdminSecurity` オプションは `true` に設定されています。インストール時に作成されるデフォルト・プロファイルの管理セキュリティを有効にする場合は、`PROF_adminUserName` オプションと `PROF_adminPassword` オプションの値を指定する必要があります。

ユーザー ID とパスワードは、システム・ユーザーの ID とパスワード、または LDAP のユーザー ID とパスワードである必要はありません。指定した ID とパスワードのペアは、ユーザー・レジストリーに保管され、デフォルト・プロファイルの管理セキュリティに使用されます。WebSphere ローカル・セキュリティを指定する場合は、ユーザー ID に有効なユーザー・プロファイルを使用する必要があります。LDAP レジストリーを指定する場合は、そのレジストリーのメンバーのユーザー ID を使用する必要があります。ユーザー ID とパスワードを書き留めておいてください。

デフォルト・プロファイルの管理セキュリティを有効にしない場合は、`PROF_enableAdminSecurity` オプションの値を `true` から `false` に変更します。

注: Samples フィーチャーは、この製品ではデフォルトでインストールされません。これらのサンプルを使用する場合は、以下のアクションを実行してください。

- `-OPT addFeature` オプションに `sampleSelected` を指定します。
 - セキュリティを有効にする場合は、`-OPT samplesPassword` オプションの値を指定します。
10. `install.bat` コマンドを実行します。インストール時に使用する応答ファイルを指定します。このコマンドの実行時に、`i5/OS` システム名および有効な `i5/OS` ユーザー・プロファイルとパスワードを指定します。

このステップでは、ユーザー・プロファイルに `*ALLOBJ` と `*SECADM` の特殊権限が必要です。

```
install.bat system_name user_name password -options response_file -silent
```

`system_name` 変数は、System i サーバーの名前です。 `user_name` 変数と `password` 変数は、ユーザー・プロファイルのログイン資格情報で、 `response_file` 変数は、応答ファイルの名前です。

このコマンドで使用されるパスワードは、コマンド行に平文で表示されます。以下に例を示します。

```
install.bat MYISERIES myUserName myPassword  
-options C:%temp%RESPONSEFILE -silent
```

このコマンドの発行すると、インストール・プロセスの実行中は制御がコマンド・プロンプトに戻ります。

11. `install_root/logs/install/log.txt` ログ・ファイルを調べて、インストールが完了したことを確認します。

結果

この手順によって、Windows ワークステーションのコマンド行から WebSphere Process Server がインストールされます。

i5/OS でのスクリプトの実行

i5/OS プラットフォームでは、スクリプトは *Qshell* コマンド環境で実行します。

始める前に

多くの場合、i5/OS にあらかじめ組み込まれているスクリプトを実行するには、ユーザー・プロファイルに *ALLOBJ 特殊権限または明示的な権限が定義されている必要があります。これは、UNIX プラットフォームの root 権限に似た権限です。

このタスクについて

スクリプトを i5/OS で実行するには、以下のステップを実行します。

プロシージャ

1. i5/OS コマンド行に移動します。
2. コマンド行で Qshell を開始します。STRQSH と入力します。
3. Qshell が起動したら、適切なスクリプトが含まれているディレクトリーに移動して、スクリプトを実行します。例えば、`cd /QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer/bin` と指定してディレクトリーを変更します。

ファースト・ステップ・コンソールの開始

WebSphere Process Server をインストールしたら、ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品ツールの開始、製品資料へのアクセス、個別プロファイルに関連するサーバーおよび管理コンソールなどのエレメントへの指示を行います。汎用バージョンのコンソールと、インストール内のプロファイルごとのバージョンが使用可能です。

各コンソールのオプションは、インストールした機能と、当該オペレーティング・システムで使用可能なエレメントに応じて動的に表示されます。オプションには、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始と停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、サンプル・ギャラリーへのアクセス、製品資料へのアクセス、マイグレーション・ウィザードの開始などがあります。ファースト・ステップ・コンソールの開始方法は、汎用バージョンかプロファイル固有バージョンかに応じて異なります。

以下のセクションでは、ファースト・ステップ・コンソールの開始手順を、そのバージョンおよびシステムで使用されているプラットフォームごとに詳しく説明します。

- 141 ページの『汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールの開始』
- 142 ページの『i5/OS プラットフォームのプロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールの開始』
- 143 ページの『Linux、UNIX、および Windows プラットフォームのプロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールの開始』

制約事項:

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS バージョンのファースト・ステップ・コンソールには、マイグレーション・ウィザード・オプションがありません。
- WebSphere Process Server Client には関連するファースト・ステップ・コンソールがありません。基盤となる WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境には、独自のファースト・ステップ・コンソールが用意されています。
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** デフォルトのブラウザとして Mozilla 2.x を使用し、そのインストール・ロケーションのパス名にスペースが含まれていると、ファースト・ステップ・コンソールが起動しない場合があります。この問題を解消するには、以下のいずれかのアクションを実行してください。
 - Mozilla を、パス名にスペースを含まないロケーションにインストールする。
 - レジストリ・キーを変更してスペースを削除する。
 - 一時的なデフォルト・ブラウザとして Internet Explorer を指定してから、Mozilla をデフォルト・ブラウザに設定する。この操作により、レジストリ・キーからスペースが自動的に削除されます。

汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールの開始

以下のステップを実行し、汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールを開始します。i5/OS システムはグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を備えていないため、このプラットフォームのファースト・ステップ・コンソールは Windows ワークステーションから開始する必要があります。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. 以下のディレクトリーに移動します。

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:**
`first_steps_location%firststeps%wbi%noprfile`
- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:**
`install_root/firststeps/wbi`
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `install_root%firststeps%wbi`

変数 `install_root` は、Linux、UNIX、および Windows システム上での WebSphere Process Server のインストール・ロケーションを表し、`first_steps_location` は、Windows ワークステーションでの i5/OS ファースト・ステップ・コンソールのロケーションを表します。`first_steps_location` は以下のいずれかのロケーションに含まれます。

- `install_image_location%WBI%iSeries`。`install_image_location` は、ディスク・メディアへのパスまたはパスポート・アドバンテージ・イメージのロケーションです。
- `pmt_client_installation`。デフォルトでは `C:%Program Files%IBM%WebSphere%PMTClient` です。

3. プラットフォームに応じ、firststeps または run コマンドを以下のようにして発行し、コンソールを開始します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: run.bat
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
./firststeps.sh
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: firststeps.bat

ファースト・パス:

Windows **Windows** プラットフォームの場合: 「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM WebSphere」 → 「Process Server 6.1」 → 「ファースト・ステップ」を選択する方法で、Windows プラットフォームで汎用バージョンのコンソールを開始することもできます。

i5/OS プラットフォームのプロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールの開始

i5/OS 以下のステップを実行し、プロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールを開始します。i5/OS システムはグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を備えていないため、このプラットフォームのファースト・ステップ・コンソールは Windows ワークステーションから開始する必要があります。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. ファースト・ステップ・コンソールが含まれるディレクトリーに移動します。ディレクトリーのロケーションは、ファースト・ステップ・コンソールのロケーションおよび使用するプロファイル・タイプの両方に応じて異なります。ファースト・ステップ・コンソールのパスは

first_steps_location¥*firststeps*¥*product_type*¥*profile_type*、このパスの変数の詳細は以下のとおりです。

- *first_steps_location* は以下のいずれかのロケーションに含まれます。
 - *install_image_location*¥*WBI*¥*iSeries*。 *install_image_location* は、ディスク・メディアへのパスまたはパスポート・アドバンテージ・イメージのダウンロード先ロケーションです。
 - *pmt_client_installation*。デフォルトでは C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥PMTClient です。
- *product_type* は以下のいずれかになります。
 - wbi -- WebSphere Process Server
 - esb -- WebSphere Enterprise Service Bus
- *profile_type* は以下のいずれかになります。
 - default -- スタンドアロン・サーバー・プロファイル
 - dmgr -- デプロイメント・マネージャー・プロファイル
 - managed -- 管理対象プロファイルおよびカスタム・プロファイル
 - noprofile -- 既存のプロファイルがない場合に指定する値

3. 以下のコマンドを実行して、コンソールを開始します。

```
run.bat --installRoot install_root --profilePath profile_root --hostname
hostname --username username --password password
```

注: ファースト・ステップ・コンソールを Windows ワークステーション上で開始する場合でも、*hostname* には i5/OS システムを指定し、*username* と *password* には、有効な i5/OS ユーザー・プロファイルの値を指定する必要があります。i5/OS ユーザー・プロファイルには *ALLOBJ および *SECADM の特殊権限が必要です。

例: run.bat --installRoot /QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer --profilePath /QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer/profiles/ProcSrv01 --hostname myi5.x.com --username *username1* --password *acb11abc*

Linux、UNIX、および Windows プラットフォームのプロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールの開始

Linux **UNIX** **Windows** 以下のステップを実行し、プロファイルに関連付けられたファースト・ステップ・コンソールを開始します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. 以下のディレクトリーに移動します。(*profile_root* は WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルのインストール場所を表します)
 - WebSphere Process Server プロファイルの場合:
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:
profile_root/firststeps/wbi
 - **Windows** **Windows** プラットフォーム: *profile_root*%firststeps%wbi
 - WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの場合:
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:
profile_root/firststeps/esb
 - **Windows** **Windows** プラットフォーム: *profile_root*%firststeps%esb
3. **firststeps** コマンドを実行して、コンソールを開始します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
./firststeps.sh
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: firststeps.bat

ファースト・パス:

以下のいずれかを実行して、ファースト・ステップ・コンソールのプロファイルに関連付けられているバージョンを開始することもできます。

- 選択したインストール手順を実行するとき、インストール処理の終了時に「インストールが完了しました」パネルの「ファースト・ステップ・コンソール」チェック・ボックスにチェック・マークを付ける。

- プロファイルの作成または拡張処理の終了時に「プロファイル作成の完了」または「プロファイル拡張の完了」パネルの「ファースト・ステップ・コンソール」チェック・ボックスにチェック・マークを付ける。
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** WebSphere Process Serverまたは WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始する場合は、「スタート」→「プログラム」→「IBM WebSphere」→「Process Server 6.1」→「*profile_name*」→「ファースト・ステップ」を選択します。

ファースト・ステップ・コンソールで選択できるオプションの説明については、『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。

ファースト・ステップ・コンソールのオプション

WebSphere Process Server をインストールしたら、ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品ツールの開始、製品資料へのアクセス、個別プロファイルに関連するサーバーおよび管理コンソールなどのエレメントへの指示を行います。汎用バージョンのコンソールと、インストール内のプロファイルごとのバージョンが使用可能です。各コンソールのオプションは、インストールした機能と、当該オペレーティング・システムで使用可能なエレメントに応じて動的に表示されます。オプションには、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始と停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、サンプル・ギャラリーへのアクセス、製品資料へのアクセス、マイグレーション・ウィザードの開始などがあります。

制約事項:

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS バージョンのファースト・ステップ・コンソールには、マイグレーション・ウィザード・オプションがありません。
- WebSphere Process Server Client には関連するファースト・ステップ・コンソールがありません。基礎となる WebSphere Application Server インストールには、専用のファースト・ステップ・コンソールがあります。

さまざまなタイプのファースト・ステップ・コンソールに表示されるオプションを、表 21 に要約します。各オプションは、145 ページの『オプションの説明』で定義します。148 ページの『使用のヒント』では、各オプションで呼び出すコマンドについて説明します。

表 21. ファースト・ステップ・コンソールで使用可能なオプション

オプション	汎用バージョン	スタンドアロン・サーバーのプロファイル・バージョン	デプロイメント・マネージャーのプロファイル・バージョン	カスタム・プロファイル・バージョン
インストール検査	使用不可	使用可能	使用可能	使用不可
サーバーの始動および停止	使用不可	使用可能	使用不可	使用不可

表 21. ファースト・ステップ・コンソールで使用可能なオプション (続き)

オプション	汎用バージョン	スタンドアロン・サーバーのプロファイル・バージョン	デプロイメント・マネージャーのプロファイル・バージョン	カスタム・プロファイル・バージョン
デプロイメント・マネージャーの開始および停止	使用不可	使用不可	使用可能	使用不可
管理コンソール	使用不可	使用可能	使用可能	使用不可
プロファイル管理ツール	使用可能	使用可能	使用可能	使用可能
サンプル・ギャラリー	使用不可	使用可能	使用不可	使用不可
インフォメーション・センター	使用可能	使用可能	使用可能	使用可能
マイグレーション・ウィザード	はい (i5/OS 以外)	はい (i5/OS 以外)	はい (i5/OS 以外)	はい (i5/OS 以外)
著作権および商標	使用可能	使用不可	使用不可	使用不可
終了	使用可能	使用可能	使用可能	使用可能

オプションの説明

さまざまなバージョンのファースト・ステップ・コンソールで表示されるオプションについて、以下に説明します。

インストール検査

インストール検査テストを開始します。このテストでは、そのスタートアップの間に、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動し、モニターします。

スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーのプロファイルを作成して以来初めてファースト・ステップ・コンソールを使用した場合、「インストール検査」を選択してインストールを確認します。検査プロセスにより、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーが始動されます。

インストール検査ツール (IVT) が稼働している間は、「サーバーの起動」および「デプロイメント・マネージャーの開始」オプションは選択できません。

IVT では、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーに関する以下の有用な情報を提供します。

- サーバー・プロセスの名前
- プロファイルの名前
- プロファイル・パス (プロファイルのファイル・パスおよび名前)
- プロファイルのタイプ
- セル名

- ノード名
- 現行のエンコード
- 管理コンソールのポート番号
- SystemOut.log ファイルのロケーションおよびファイル内にリストされたエラーの数を含むさまざまな通知メッセージ
- 完了メッセージ

インストールの検査について詳しくは、151 ページの『第 8 章 製品のインストールの検査』およびその子トピックを参照してください。

サーバーの始動

サーバーが稼働している場合に「**サーバーの停止**」に切り替えます。

「**サーバーの始動**」オプションを選択すると、出力画面に状況メッセージが表示されます。成功メッセージは、サーバーが e-ビジネス用に開いていることを通知します。次に、メニュー項目が「**サーバーの停止**」に変わり、「**管理コンソール**」および「**サンプル・ギャラリー**」オプションの両方が使用可能になります (それらがインストールされている場合)。

「**サーバーの起動**」オプションを選択した場合、サーバーの起動中に「**インストール検査**」オプションを選択することはできません。

デプロイメント・マネージャーの始動

デプロイメント・マネージャーが稼働している場合に「**デプロイメント・マネージャーの停止**」に切り替えます。

「**デプロイメント・マネージャーの始動**」オプションを選択すると、出力画面に状況メッセージが表示されます。成功メッセージは、デプロイメント・マネージャーが e-ビジネス用に開いていることを通知します。次に、メニュー項目が「**デプロイメント・マネージャーの停止**」に変わり、「**管理コンソール**」オプションが使用可能になります (インストールされている場合)。

「**デプロイメント・マネージャーの開始**」オプションを選択した場合、デプロイメント・マネージャーの実行中に「**インストール検査**」オプションを選択することはできません。

管理コンソール

プロファイルの作成時または拡張時に管理コンソールをデプロイした場合のみ表示されます。このオプションは、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャーが始動されない限り選択できません。

管理コンソールは、Web ブラウザー内で実行される構成エディターです。管理コンソールを使用することによって、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー、およびセル内にあるすべてのアプリケーション用の XML 構成ファイルで作業することが可能になります。

管理コンソールを起動するには、「**管理コンソール**」を選択します。

管理コンソールにより、ログイン名を求めるプロンプトが出されます。このプロンプトはセキュリティーのために出されるのではなく、セッション中に行った構成変更を識別するためのタグにすぎません。管理セキュリティーが使用可能な場合、セキュア・サインオンも使用できます。

インフォメーション・センターのインストール手順では、インストール時にセキュリティーを使用可能にした場合、管理ユーザー ID とパスワードを書

き留めておくよう忠告しています。ID とパスワードがないと、管理コンソールまたはスクリプトを使用できません。

プロファイル管理ツール

64 ビット Linux または Linux on System z プラットフォームでは使用できません。プロファイル管理ツールを開始します。このツールを使用すると、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム・プロファイルを作成できます。

プロファイル は、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー用のランタイム環境を定義するファイルから構成されます。各プロファイルには、独自の管理インターフェースがあります。カスタム・プロファイルは例外です。カスタム・プロファイルは、ユーザーがデプロイメント・マネージャー・セルに統合したりカスタマイズしたりする空のノードです。カスタム・プロファイル用には、デフォルトのサーバー・プロセスまたはアプリケーションは作成されません。

各プロファイルには、独自のファースト・ステップ・コンソールがあります。ファースト・ステップ・コンソールを開始するコマンドは、プロファイルのファイル・セット内にあります。プロファイルに関連したファースト・ステップ・コンソールの開始プロンプトが、プロファイル管理ツールの最後のパネルに表示されます。

サンプル・ギャラリー

プロファイルの作成時または拡張時に WebSphere Process Server サンプルをインストールした場合のみ表示されます。このオプションにより、管理コンソールで WebSphere Process Server サンプル・ギャラリーが開始されます。このオプションは、サーバーが始動されない限り選択できません。

サンプル・ギャラリーを開始するには、「**サンプル・ギャラリー**」を選択します。

製品の初期インストール時に WebSphere Process Server サンプルをインストールしていない場合、ファースト・ステップ・コンソール上にオプションは表示されません。増分インストールを実行して、サンプル機能を追加することができます。サンプルを追加すると、ファースト・ステップ・コンソール上にオプションが表示されます。

インフォメーション・センター

オンライン・インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r1mx/>) にリンクします。

マイグレーション・ウィザード

マイグレーション・ツールへのグラフィカル・インターフェースである、WebSphere Process Server のバージョン間マイグレーション・ウィザードを開始します。バージョン間マイグレーション・ウィザードは、WebSphere Process Server の旧バージョンから新バージョンへのマイグレーションを支援するグラフィカル・インターフェースです。このインターフェースについて詳しくは、『マイグレーション・ウィザード』のトピックを参照してください。

著作権および商標

WebSphere Process Serverの著作権および商標を示します。

終了 ファースト・ステップ・コンソールを閉じます。

使用のヒント

表 22 に、WebSphere Process Server ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンドを示します。以下の個々のコマンドの詳細については、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x インフォメーション・センターの『Command-line utilities』セクションで、コマンドを検索してください。

- ivt コマンド
- startServer コマンド
- stopServer コマンド
- startManager コマンド
- stopManager コマンド

WebSphere Process Server 製品に組み込まれている firststeps、pmt、および migration コマンドは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x における同じコマンドとは異なるディレクトリー・ロケーションに存在し、異なる機能を実行します。そのため、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x のインフォメーション・センターにあるこれらのコマンドへのリンクは、ここでは示しません。

表 22. ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンド

オプション	リンク
インストール検査	<p>ivt コマンドを呼び出します。</p> <p>インストール検査テスト・コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/ivt</code> • Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/ivt.sh</code> • Windows Windows プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%ivt.bat</code>
サーバーの始動	<p>startServer コマンドを呼び出します。</p> <p>startServer コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/startServer</code> • Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/startServer.sh</code> • Windows Windows プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%startServer.bat</code> <p>同一ワークステーション上に複数のスタンドアロン・サーバーがある場合、コマンドにより、ファースト・ステップ・コンソール内のプロファイルと同じプロファイルに関連付けられたスタンドアロン・サーバーが始動されません。</p>

表 22. ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンド (続き)

オプション	リンク
サーバーの停止	<p>stopServer コマンドを呼び出します。</p> <p>stopServer コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/stopServer</code> • Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/stopServer.sh</code> • Windows Windows プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%stopServer.bat</code>
デプロイメント・マネージャーの始動	<p>startManager コマンドを呼び出します。</p> <p>startManager コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/startManager</code> • Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/startManager.sh</code> • Windows Windows プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%startManager.bat</code> <p>同一ワークステーション上に複数のデプロイメント・マネージャーがある場合、コマンドにより、ファースト・ステップ・コンソール内のプロファイルと同じプロファイルに関連付けられたデプロイメント・マネージャーが始動されます。</p>
デプロイメント・マネージャーの停止	<p>stopManager コマンドを呼び出します。</p> <p>stopManager コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/stopManager</code> • Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>profile_root/bin/stopManager.sh</code> • Windows Windows プラットフォームの場合: <code>profile_root%bin%stopManager.bat</code>
管理コンソール	<p>デフォルトのブラウザを開いて管理コンソールの Web アドレスを指定します。</p> <p>同一ワークステーション上に (または i5/OS の同一論理区画上に) 複数のサーバーがある場合、ポートは異なります。ファースト・ステップ・コンソールにより、ファースト・ステップ・コンソール内のプロファイルと同じプロファイルに関連付けられた管理コンソールが開始されます。</p>

表 22. ファースト・ステップ・コンソールのオプションが呼び出すコマンド (続き)

オプション	リンク
プロファイル管理ツール	<p>pmt コマンドを呼び出します。</p> <p>pmt コマンドがある場所は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: Windows ワークステーションから pmt コマンドが実行されます。このコマンドは、以下の 2 つの場所のいずれかにあります。 <ul style="list-style-type: none"> - <code>install_image_location%WBI%iSeries%PMT%pmt.bat</code>。ここで、<code>install_image_location</code> はディスク・メディアのパス、またはパスポート・アドバンテージ・イメージのダウンロード先の場所のパスです。 - <code>pmt_client_installation%PMT%pmt.bat</code>。デフォルトでは <code>C:%ProgramFiles%IBM%WebSphere%PMTClient</code>。 • Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh</code> • Windows プラットフォームの場合: <code>install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat</code>
サンプル・ギャラリー	デフォルト・ブラウザを開いてサンプル Web アドレスを指定します。
インフォメーション・センター	デフォルト・ブラウザを開いてオンライン・インフォメーション・センターの Web アドレス (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r1mx/) を指定します。
マイグレーション・ウィザード	<p>WebSphere Process Server のバージョン間マイグレーション・スクリプトを呼び出して、マイグレーション・ウィザードを開始します。</p> <p>バージョン間マイグレーション・スクリプトのロケーションは、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>install_root/bin/wbi_migration.sh</code> • Windows Windows プラットフォームの場合: <code>install_root%bin%wbi_migration.bat</code>

第 8 章 製品のインストールの検査

WebSphere Process Server が正常にインストールされ、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルが正常に作成されていることを確認するには、インストール検査ツールを使用します。プロファイルは、デプロイメント・マネージャーまたはサーバー用のランタイム環境を定義するファイルから構成されます。installver_wbi 検査合計ツールを使用してコア製品ファイルを検査します。インストール検査テスト (IVT) ツールを使用して、各プロファイルを検査します。

始める前に

インストール検査ツールは、WebSphere Process Server をインストールし、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成した後に使用することができます。

このタスクについて

インストール検査ツールを使用して、製品が正常にインストールされたことを確認できます。WebSphere Process Server には、次の 2 つのインストール検査ツールが含まれています。

- installver_wbi 検査合計ツール。システムにインストールされた WebSphere Process Server ファイルが完全にインストールされたかどうかを検査します。installver_wbi ツールは、各インストール済み WebSphere Process Server ファイルの検査合計をファイルごとの正しい検査合計と比較して相違点を報告します。
- WebSphere Application Server インストール検査テスト (IVT) ツール。デプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびスタンドアロン・サーバー・プロファイルをテストして、サーバー・プロセスを開始できることを確認します。IVT プログラムは、製品のログ・ファイルをスキャンしてエラーの有無を調べ、製品のコア機能を検証します。

検査ツールを使用するには、以下のステップを実行します。

プロシージャ

1. すべての WebSphere Process Server ファイルが正しくインストールされているかどうか検査するには、installver_wbi コマンドを実行します。

詳しくは、152 ページの『インストール済みファイルの検査合計の検証』を参照してください。

2. プロファイルが適切に作成されているかどうか検査するには、WebSphere Application Server インストール検査テスト (IVT) ツールを使用します。ファースト・ステップ・コンソールで「インストール検査」をクリックします。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『Command-line utilities』セクションにある『ivt command』、および 144 ページの『ファースト・ステップ・コンソールのオプション』を参照してください。

次のタスク

製品をインストールし、インストールを検査した後、さらにプロファイルを作成してインストールを構成することができます。

インストール済みファイルの検査合計の検証

製品をインストールした後、または保守パッケージのインストール後には、インストール検査ユーティリティを使用して検査合計を計算し、インストール済みファイル・セットの検査合計を製品の部品表の検査合計と照合します。

始める前に

製品をインストールすると、インストール検査ユーティリティもインストールされます。これは、`installver_wbi` コマンド行ツールです。

このタスクについて

`installver_wbi` コマンドを使用して、インストール済みファイルの検査合計を計算し、その検査合計を製品の部品表と照合します。

インストール検査ユーティリティ・ツールは、WebSphere Process Server のインストール中にインストールされます。

また、重要な構成変更を行った後で、インストール検査ユーティリティを使用して、システムの新しい検査合計を計算することもできます。`installver_wbi` ツールは、構成済みのシステムの品目内にある各ファイルごとに新しいベースライン検査合計を計算して、その後の比較処理でファイルの変更点を示すために使用することができます。このような比較は、構成済みのシステムでのファイルの不正変更などを検出するのに役立ちます。新しい検査合計を使用して、複数システム上のインストールを比較することができます。

このツールの最も一般的な使用法は、製品の部品表をインストール済みのファイル・セットと比較することですが、その他のタスクも可能です。

インストール済みのファイルの検査合計を確認するには、以下のステップを実行します。

- インストール済みのファイルを部品表と照合します。

詳しくは、153 ページの『部品表との照合』を参照してください。

- 新しいベースライン検査合計を作成し、使用します。

詳しくは、158 ページの『構成済みファイルの品目に対する新しいベースライン検査合計の計算』を参照してください。

- ファイルやコンポーネントを比較から除外します。

詳しくは、161 ページの『検査合計の比較からのファイルの除外』を参照してください。

- 特定のファイルやコンポーネントのみを比較の対象に含めます。

詳しくは、165 ページの『特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較』を参照してください。

- 検査合計を計算するためのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを変更します。

詳しくは、168 ページの『installver_wbi コマンドのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムの変更』を参照してください。

- メモリー不足状態を処理します。

詳しくは、170 ページの『installver_wbi コマンドを使用したメモリー不足の状態の処理』を参照してください。

結果

インストール済みまたは更新済みのファイル・セットが製品の部品表と一致するという条件が満たされると、製品ファイルの検証が終了したことになります。

問題が検出された場合は、WebSphere Process Server Product Support Web サイトをチェックして、その問題が既知の問題であるかどうかを確認してください。

プロファイルが適切に作成されているかどうかを検査するには、WebSphere Application Server インストール検査テスト (IVT) ツールを使用します。ファースト・ステップ・コンソールで「**インストール検査**」をクリックします。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『Command-line utilities』セクションにある『ivt command』を参照してください。

インストールの検査が終了したら、プロファイルを作成するか、または既存の WebSphere Process Server プロファイルでアプリケーションをデプロイすることができます。

インストール、更新、および検証後の次のステップは、製品を使用することです。詳しくは、140 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』を参照してください。

まだ WebSphere Process Server のプロファイルを作成していない場合は、198 ページの『プロファイルの作成』に進んでください。

部品表との照合

製品のインストール後、インストール済みファイルの実際の検査合計を、製品に付属している部品表と照合します。検査合計が一致すれば、インストールされた製品のインストールが適切であることになります。検査合計が異なる場合は、相違点を調べて、問題があるかどうかを判断します。

始める前に

インストール済みファイルの検査合計と付属する部品表の比較を行う前に、製品をインストールしてください。

このタスクについて

installver_wbi コマンドを使用して、部品表ファイル・セットとインストール済みファイルの検査合計を照合し、すべてのインストール済みファイルが正しいかどうか

確認します。このインストール・ファイルの検査システム機能を提供するために、製品にはコンポーネントごとの部品表ファイルが付属しています。

installver_wbi ツールは、インストール済み環境内で検出された全コンポーネントのリストを動的に生成します。

installver_wbi コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の bin ディレクトリー内にあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root\bin\installver_wbi.bat`

コマンド行から installver_wbi ツールを開始するには、ディレクトリーを bin ディレクトリーに移動します。

部品表をインストール済みファイル・システムと照合するには、以下のステップを実行します。

- 製品ファイルの検査合計を、部品表ファイル内の正しい検査合計と比較するには、以下のコマンドを入力します。
 - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root\bin\installver_wbi.bat`
- 検査合計を比較してトレース結果を表示するには、以下のコマンドを入力します。
 - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -trace`
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -trace`
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -trace`
- installver_wbi コマンドの使用方法に関する情報を表示するには、以下のコマンドを入力します。
 - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -help`
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -help`
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -help`
- 検査合計を比較して、特定のファイルおよびコンポーネントのみを比較の対象として含める場合は、165 ページの『特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較』を参照してください。コマンドでリストしたファイルおよびコンポーネントのみを比較することができます。

- 検査合計を比較し、除外するファイルのリストを無視するには、以下のコマンドを入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -ignoreuserexclude`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -ignoreuserexclude`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -ignoreuserexclude`

部品表の検査合計から除外するファイルのリストを指定する方法については、161 ページの『検査合計の比較からのファイルの除外』を参照してください。

- 検査合計を比較し、すべての IBM 除外ファイルは無視するには、以下のコマンドを入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -ignoreibmexclude`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -ignoreibmexclude`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -ignoreibmexclude`

結果

`install_root/bin` ディレクトリーから検査合計のコマンドのうちの実行すると、端末コンソールにコマンドの状況が表示されます。

ロギングの結果: `installver_wbi` ユーティリティーで、コンポーネントごとにメッセージが作成されます。また、部品表にあるすべてのコンポーネントの検査に基づいた、全体としての成功も報告します。以下のメッセージは完了を示します。

- I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 625
- I CWNVU0340I: [ivu] Done.

これらのメッセージでは、検出された問題の合計数を報告します。問題の数がゼロの場合は、すべてのコンポーネントが存在しており、問題はありません。

`installver_wbi` ユーティリティーでは、ログ用のファイル名を指定せずに **-log** パラメーターを使用した場合、コマンドの結果を `install_root/logs/installver.log` ファイルに記録します。

-log パラメーターと引数を使用して、出力をリダイレクトすることができます。存在しているディレクトリーを指定する必要があります。例: `./installver_wbi.sh -log /tmp/waslogs/my_installver.log`

以下のコマンドでは、この例を生成し、インストール済みの製品を製品の部品表と比較した結果を表示します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
./installver_wbi.sh
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: installver_wbi.bat

エラーのあるコンポーネントからの出力例

この例では、比較によって検出されたエラーを示しています。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is E:\WPS61¥
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found is 38.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 441
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
W CWNVU0280W: [ivu] Component mismatch: expected mismatchcomponentname
but found mismatchingname
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample: Hash must not be null or an empty string.
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample: Name must not be null or an empty string.
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample: Hash must not be null or an empty string.
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample: Permission must not be null or an empty string.
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
symlinksample: Hash must not be null or an empty string.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 6 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: _binarycomponentsample
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: _binarycomponentsample

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: nullvaluesample
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing: testpath
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: nullvaluesample

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: overlapbinarycomponentsample
W CWNVU0422W: [ivu] The following file is overlapped: lib/binaryTest.jar
W CWNVU0425W: [ivu] The overlap is caused by: _binarycomponentsample
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: overlapbinarycomponentsample

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: regularcomponentsample
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: lib/different.jar
I CWNVU0410I: [ivu] fc19318dd13128ce14344d066510a982269c241b is the
checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] 517d5a7240861ec297fa07542a7bf7470bb604fe is the
checksum on the file system.
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: lib/ibmtemplateexclude.jar
I CWNVU0410I: [ivu] d3ac7a4ef1a8ffb4134f2f6e7f3c0d249d74b674 is the
checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] d3ac7a4ef1a838b4134f2f6e7f3c0d249d74b674 is the
checksum on the file system.
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing: lib/missing.jar
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: lib/usertemplateexclude.jar
I CWNVU0410I: [ivu] 12dea96fec20593566ab75ff2c9949596833adc9 is the
checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] 12dea96fec20593566ab75692c9949596833adc9 is the
checksum on the file system.
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing: missingfilebutwithbaddirectory/
missingBadDirectory.jar
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 5
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: regularcomponentsample
```

```
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: symlinksample
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: symlinksample

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 7
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

標準的な正常インストールの出力例

この例では、正常なインストールの検査の標準的な結果を示しています。

実際上の問題と判断する前に、その問題をよく調べてください。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is E:\WPS61¥
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found is 38.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 441
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 439 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: ArtifactLoaderImpl
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: ArtifactLoaderImpl

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity.impl
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity.impl

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity.session.impl
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity.session.impl

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: acwa
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: acwa

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: adapter
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: adapter
...

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: workspace
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: workspace

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: workspace.query
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: workspace.query

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wps.rt.bundle
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wps.rt.bundle

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wps.wccm.bundle
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wps.wccm.bundle

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wpsnd
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wpsnd

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wsadie.bundle
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wsadie.bundle

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: wsba.impl
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: wsba.impl

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 0
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

構成済みファイルの品目に対する新しいベースライン検査合計の計算

インストールの後、インストール済みファイルの実際の検査合計を、製品に付属している部品表と照合することができます。システムを構成した後に、検査合計を作成して、システムを定期的に検査合計と比較できるようにできます。その結果を使用して、構成済みのシステムに対する変更を分析します。

始める前に

製品を構成した後、新しいベースライン検査合計を保管して、システムに対する新しい検査合計の標準を設定します。

このタスクについて

`installver_wbi` コマンドを使用すると、構成済みファイルの品目を作成し、これを現在インストールされているファイルと比較することができます。

`installver_wbi` コマンドは、インストール・ルート・ディレクトリー内のすべてのファイルの品目に対するベースライン検査合計を新たに計算することができます。コマンドを実行すると、デフォルトで、現行作業ディレクトリー内の `sys.inv` ファイルに新しい検査合計が格納されます。別のファイル・パスとファイル名を指定することができます。インストール・ルート・ディレクトリーの外部にファイルを作成したり、比較からファイルを除外したりします。

後で、`sys.inv` ファイル (または、品目の作成時に指定したファイル) にある検査合計を、現在インストールされているファイルの検査合計と比較して、どのファイルが変更になっているかを確認します。

ベースライン検査合計レポートにより、欠落ファイル、追加されたファイル、変更されたファイルが示されます。

`installver_wbi` コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の `bin` ディレクトリー内にあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root\bin\installver_wbi.bat`

コマンド行から `installver_wbi` ツールを開始するには、ディレクトリーを `bin` ディレクトリーに移動します。

構成済みファイルの品目に対する新規ベースライン検査合計を計算するには、以下の手順を実行してください。

- インストール・ルート・ディレクトリーに現在インストールされているファイルの品目リストを作成するには、以下のように入力します。

```
- i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: ./installver_wbi  
-createinventory
```


- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
./installver_wbi.sh -createinventory
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: installver_wbi.bat
-createinventory

Windows 例えば、installver_wbi.bat -createinventory コマンドを実行して、デフォルトの *install_root\bin\sys.inv* ファイルを作成すると、Windows システムに次のメッセージが表示される場合があります。

```
W CWNVU0320W: [ivu] The
C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥bin¥sys.inv
inventory file is within the product installation root directory:
C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer.
```

Create the file outside of the installation root directory to omit the file from the verification.

```
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 2.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 78.
I CWNVU0310I: [ivu] Creating the following inventory file:
C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥bin¥sys.inv
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
```

例えば、installver_wbi -createinventory コマンドを実行して、デフォルトの *install_root\bin\sys.inv* ファイルを作成すると、i5/OS システムに次のメッセージが表示される場合があります。

注: このコマンドは i5/OS プラットフォーム上の Qshell 環境内で機能します。

```
W CWNVU0320W: [ivu] The
/QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer/bin/sys.inventory file is within the product installation
root directory: /QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer.
```

Create the file outside of the installation root directory to omit the file from the verification.

```
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 2.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 78.
I CWNVU0310I: [ivu] Creating the following inventory file:
/QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer/bin/sys.inv
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
```

コマンドの実行が終了すると、次の完了メッセージが表示されます。

```
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

sys.inv には、この Windows システムの例に示すような新しい品目が格納されています。

```
#C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥
#2005.10.10_06.24.06PM_EDT
#user_ID
#-createinventory -log
241fe4e309abfd8f2c5911216dbabd61dd4751a6
|_jvm¥bin¥appletviewer.exe
|42032
|2004.10.28 05.37.02AM EDT
e00c6ea688ab67e004ec6cfac26ec48541a5b9ff
|_jvm¥bin¥dbghe1p.dll
|712192
|2004.10.28 05.36.50AM EDT
916e244deeb44b9d3218aafa3b56c8680aa31f2f
|_jvm¥bin¥extcheck.exe
|42040
```



```

|2004.10.28 05.37.02AM EDT
...
7fc3bb38e8b90fed05cd0440953000c2cc965b44
|web¥spidocs¥stylesheet.css
|1240
|2005.10.09 12.14.17AM EDT
22706a0d900c52f1c015c870ddee25581c5d57b
|web¥spidocs¥toHTML¥index.html
|867
|2005.10.09 12.14.17AM EDT

```

- 品目ファイルをインストール・ルート・ディレクトリーの外部のディレクトリーに作成して、品目ファイルを比較から除外するには、以下のように入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -createinventory /tmp/system.inv`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -createinventory /tmp/system.inv`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -createinventory "C:¥temp¥system.inv"`

- 品目リストを、インストール・ルート・ディレクトリーに現在インストールされているファイルと比較するには、以下のように入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare`

品目ファイルをデフォルトのロケーション以外の場所で作成した場合は、以下の構文を使用します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare /tmp/system.inv`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare /tmp/system.inv`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare "C:¥temp¥system.inv"`

- 比較してトレースの結果を表示するには、以下のように入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare -trace`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare -trace`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare -trace`

- 比較するときに、品目の比較から指定したファイルを除外するには、以下のように入力します。

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare -exclude fn1;fn2;fn3;...`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare -exclude fn1;fn2;fn3;...`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare -exclude fn1;fn2;fn3;...`
- 比較するときに、品目の比較に指定したファイルのみを対象として含めるには、以下のように入力します。
 - **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare -include fn1;fn2;fn3;...`
 - **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare -include fn1;fn2;fn3;...`
 - **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare -include fn1;fn2;fn3;...`

結果

`install_root/bin` ディレクトリーから `installver_wbi` コマンドを実行すると、端末コンソールにコマンドの状況が表示されます。ログを作成する場合は、`-log` パラメーターを使用します。

検査合計の比較からのファイルの除外

比較から除外する個々のファイルを指定するか、または除外する個々のコンポーネントを指定します。あるいは、1つの構成可能なプロパティー・ファイルを作成して、部品表の検査から除外するファイルのリストを指定します。

始める前に

検査合計を比較し、除外プロパティーを使用する前に、製品をインストールしてください。

このタスクについて

`installver_wbi` コマンドの除外プロパティーを使用して、ファイルを検査合計の比較から除外することができます。

IBM では、デフォルトでいくつかのファイルを検査合計の比較から除外しています。ユーザーがファイルを除外することもできます。除外されたファイルの数は、最初のいくつかのメッセージの中で報告されます。例:

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is ...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
...
```

ファイルを比較から除外するには、いくつかの方法があります。

installver_wbi コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の bin ディレクトリー内にあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root\bin\installver_wbi.bat`

コマンド行から installver_wbi ツールを開始するには、ディレクトリーを bin ディレクトリーに移動します。

ファイルを検査合計の比較から除外するには、以下の手順を実行します。

- 1 つ以上のコンポーネント内の全ファイルをその比較対象から除外するには、以下のコマンドを入力してください。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -excludecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -excludecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -excludecomponent comp1;comp2;comp3;...`

Linux **UNIX** 例えば、コンポーネント内にある、既知の許容可能な問題を回避するために、prereq.wccm コンポーネントを除外する場合は、以下のように入力します。

```
./installver_wbi.sh -log -excludecomponent prereq.wccm
```

結果として出力されるメッセージに、以下のような除外が示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is E:\WPS61\
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found is 38.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 441
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 439 components.
...
I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 0
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

- 比較対象から特定のファイルを除外するには、以下のコマンドを入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi -exclude fn1;fn2;fn3`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh -exclude fn1;fn2;fn3`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root\bin\installver_wbi.bat -exclude fn1;fn2;fn3`

例えば、比較の対象として `prereq.wccm` コンポーネントのみを含め、前回の比較実行時に欠落していたファイルを除外するには、以下のように入力します。

```
...
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: prereq.wccm
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ActivitySessionEJBJarExtension.html
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ActivitySessionEnterpriseBeanExtension.html
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ContainerActivitySession.html
...
```

Windows 以下は、前の例で強調表示された欠落ファイルを除外するための入力例です。

```
installver_wbi.bat -log -includecomponent prereq.wccm -exclude web¥configDocs¥activitysessionejbext¥
ActivitySessionEJBJarExtension.html;web¥configDocs¥activitysessionejbext¥
ActivitySessionEnterpriseBeanExtension.html
```

ヒント: **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: ディレクトリーの区切りには、Windows 形式のスラッシュ、または UNIX 形式のスラッシュを使用してください。

結果として、以下のように、除外されたファイルは比較されなかったことが示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is ...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 1 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: prereq.wccm
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ContainerActivitySession.html
...
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 623
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: prereq.wccm

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 623
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

2 つのファイルが比較に入れられたとすると、その 2 つがリストに入っており、問題の数は前の例のように 625 となるはずですが。

ヒント: この例の強調表示された行は、次のステップで説明するユーザー・テンプレート・ファイルにリストされた除外ファイルのための予約行です。強調表示された行では、`-exclude` パラメーターを指定した `installver_wbi` コマンド行でリストしたファイルはカウントされません。

- ユーザー・テンプレートを作成および使用して、検査合計を比較するとき、その比較から特定のファイルを除外するには、以下のステップを実行します。部品表の検査から除外するファイルのリストを指定するために、構成可能なプロパティ・ファイルを使用することができます。
 1. 以下のコマンドを入力して、空のテンプレート・ファイルを作成します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi template_name -createtemplate`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi.sh template_name -createtemplate`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root¥bin¥installver_wbi.bat template_name -createtemplate`

Windows 例えば、Windows システム上にデフォルトのユーザー・テンプレート・ファイル作成するには、以下のように入力します。

```
installver_wbi.bat -createtemplate
I CWNVU0200I: [ivu] Creating template:
C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥profiles¥
Dmgr01¥properties¥ivu_user.template
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

i5/OS 例えば、i5/OS システム上にデフォルトのユーザー・テンプレート・ファイル作成するには、以下のように入力します。

```
installver_wbi -createtemplate
I CWNVU0200I: [ivu] Creating template:
/QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer/profiles/
Dmgr01/properties/ivu_user.template
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

デフォルト・プロファイルの `properties` ディレクトリーに、`ivu_user.template` ファイルが作成されます。この例では、デプロイメント・マネージャー・プロファイルです。

`-template_name` パラメーターはオプションです。ただし、テンプレート・ファイルは、`install_root/profiles/Dmgr01/properties` ディレクトリーのような、デフォルト・プロファイルの `properties` ディレクトリー内に存在していなければなりません。

2. テンプレート・ファイル内に、除外するファイルをリストします。

プロパティー・ファイルの形式は、以下ようになります。

```
<template>
  <componentfiles componentname="name_of_component">
    <file>
      <relativepath action="exclude">file_name</relativepath>
    </file>
  </componentfiles>
</template>
```

例えば、以下のように、前の例に示したコンポーネントとファイルをリストします。

```
<template>
  <componentfiles componentname="prereq.wccm">
    <file>
      <relativepath action="exclude">
web/configDocs/activitysessionejbext/ ¥
ActivitySessionEnterpriseBeanExtension.html
      </relativepath>
    </file>
  </componentfiles>
```

```
<relativepath action="exclude">
web/configDocs/activitysessionejbext/ ¥
ActivitySessionEJBJarExtension.html
</relativepath>
</file>
</componentfiles>
</template>
```

ヒント: 引用符や二重引用符を使用して、ファイル名を区切らないでください。

3. テンプレート・ファイルを使用して、以下のように比較からファイルを除外します。

以下に例を示します。

```
installver_wbi.bat -log
```

ivu_user.template ファイルが、デフォルト・プロファイルの properties ディレクトリに存在する場合は、installver_wbi コマンドがこのファイルを使用します。

結果として、いくつかのユーザー・ファイルが除外されたことが示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is ...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 2.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 1 components.
```

```
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: prereq.wccm
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/activitysessionejbext/ContainerActivitySession.html
```

```
...
I CWNVU0430I: [ivu] The following file is missing:
web/configDocs/wssecurity/generator-binding.html
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 623
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: prereq.wccm
```

```
I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 623
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

結果

install_root/bin ディレクトリからいずれかの検査合計コマンドを実行すると、端末コンソールまたはログ・ファイルにコマンドの状況が示されます。

特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較

部品表の検査の対象に含める個々のファイルまたはコンポーネントを指定します。

始める前に

個々のファイルおよびコンポーネントの検査合計を比較する前に、製品のインストールを完了してください。

このタスクについて

包含プロパティを使用して、個別のファイルおよびコンポーネントを指定することができます。

デフォルトでは、IBM が除外するファイルを除く全ファイルが検査合計の比較の対象に含まれます。以下のような出力が示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is E:¥WPS61¥
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 441
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 441 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity
```

...

特定のファイルのみを比較の対象に含めるには、いくつかの方法があります。

installver_wbi コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の bin ディレクトリー内にあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root¥bin¥installver_wbi.bat`

コマンド行から installver_wbi ツールを開始するには、ディレクトリーを bin ディレクトリーに移動します。

特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計を比較するには、以下の手順を実行します。

- 検査合計の比較対象として特定のコンポーネントのみを指定するには、以下のコマンドを入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -includecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -includecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -includecomponent comp1;comp2;comp3;...`

例えば、activity コンポーネントを対象に含める場合は、以下のように入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -log -includecomponent activity`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
./installver_wbi.sh -log -includecomponent activity
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: installver_wbi.bat -log
-includecomponent activity

結果として出力されるメッセージに、包含が示されます。以下のような出力が示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
I CWNVU0170I: [ivu] The installation root directory is ...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found are 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 1 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 0
I CWNVU0340I: [ivu] Done.
```

- 検査合計の比較対象として特定のファイルのみを指定するには、以下のコマンドを入力します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: *install_root/bin/installver_wbi*
-include fn1;fn2;fn3
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
install_root/bin/installver_wbi.sh -include fn1;fn2;fn3
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
install_root%bin%installver_wbi.bat -include fn1;fn2;fn3

例えば、`properties/version/proxy.server.component` ファイルのみを対象に含めることができます。この例では、検査合計の相違点を生成するように変更になります。

- **Windows**
installver_wbi.bat -log -include properties%version%proxy.server.component
- **i5/OS**
installver_wbi -log -include properties/version/proxy.server.component

結果として、対象に含められたファイルが比較され、このファイルを参照するすべてのコンポーネントを探して、285 個のコンポーネントがスキャンされたことが示されます。以下のような出力が示されます。

```
I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 285 components.
```

```

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: activity
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: activity
...
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: proxy.server
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: properties/version/proxy.server.component
I CWNVU0410I: [ivu] f385fc95977092e0482d52f9d1d5bebbc39fbb10 is the checksum in the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] b43bda7f1e7202d1f9495fc74ac14b8d85830aab is the checksum on the file system.
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: proxy.server
...
I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 1
I CWNVU0340I: [ivu] Done.

```

ファイルが 1 つのコンポーネント内のみにあることが分かっている場合は、以下のように入力して、ファイルの比較を該当するコンポーネントに限定することで、比較を高速化することができます。以下に例を示します。

– Windows

```
installver_wbi.bat -log -includecomponent proxy.server -include properties%version%proxy.server.component
```

– i5/OS

```
installver_wbi -log -includecomponent proxy.server -include properties/version/proxy.server.component
```

結果として、比較が 1 つのコンポーネントに限定されたことが示されます。以下のような出力が示されます。

```

I CWNVU0160I: [ivu] Verifying.
...
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of user excluded files found are 0.
I CWNVU0300I: [ivu] The total number of IBM excluded files found is 82.
I CWNVU0185I: [ivu] Searching component directory for file listing: files.list
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0260I: [ivu] The total number of components found is: 285
I CWNVU0270I: [ivu] Gathering installation root data.
I CWNVU0460I: [ivu] The utility is running.
I CWNVU0290I: [ivu] Starting the verification for 1 components.

I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: proxy.server
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: properties/version/proxy.server.component
I CWNVU0410I: [ivu] f385fc95977092e0482d52f9d1d5bebbc39fbb10 is the checksum in the bill
of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] b43bda7f1e7202d1f9495fc74ac14b8d85830aab is the checksum on the file
system.
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: proxy.server

I CWNVU0400I: [ivu] Total issues found : 1
I CWNVU0340I: [ivu] Done.

```

結果

install_root/bin ディレクトリーからいずれかの検査合計コマンドを実行すると、端末コンソールまたはログ・ファイルにコマンドの状況が示されます。

installver_wbi コマンドのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムの変更

インストールされたファイルの検査合計を比較するためのデフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムは、変更することができます。アルゴリズムを変更するには、*installver_wbi* コマンド・スクリプトを編集する必要があります。

始める前に

デフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを SHA から MD5 へ変更する前に、製品をインストールしてください。

また、コマンド・ファイルを変更する前に、`installver_wbi` コマンドを使用して製品ファイルを検査します。

このタスクについて

デフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムは、米国連邦標準技術局 (NIST) の Secure Hash Standard (SHS) に含まれるセキュア・ハッシュ・アルゴリズム (SHA) のうちの 1 つです。SHA-1 は、米国政府の標準ハッシュ関数です。詳細については、連邦情報処理標準 (FIPS) Web ページ (<http://csrc.nist.gov/publications/fips/index.html>) の資料 FIPS 180-2 を参照してください。

WebSphere Process Server の FIPS への準拠について詳しくは、『連邦情報処理標準』を参照してください。

これより古い MD5 メッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムも使用することができます。MD5 は、SHA ほど安全ではなく、後方互換性を確保する目的でのみ提供されているため、推奨されないメッセージ・アルゴリズムのタイプです。

どうしても必要な場合に限って、デフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを SHA から MD5 に変更します。この変更を行うには、`installver_wbi.bat` ファイルまたは `installver_wbi.sh` ファイルを編集します。アルゴリズムを変更すると、製品の部品表の SHA ベースの検査合計が無効になります。このため、メッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを変更する前に、製品ファイルを確認します。

デフォルトのメッセージ・ダイジェスト・アルゴリズムを変更するには、以下の手順を実行します。

プロシージャ

1. `installver_wbi` コマンド・スクリプトを編集する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi` ファイルを編集します。
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi.sh` ファイルを編集します。
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi.bat` ファイルを編集します。

2. スクリプト・ファイルに以下の環境プロパティを追加します。

```
-Dchecksum.type=MD5
```

デフォルト値は以下のとおりです。

```
-Dchecksum.type=SHA
```

3. 変更を保存します。

結果

アルゴリズムを変更した後、installver_wbi コマンドを実行してそれが正しく機能することを確認してください。

installver_wbi コマンドを使用したメモリー不足の状態の処理

installver_wbi コマンドの使用時のメモリー要件は、その製品のインストール済みファイル・セットのサイズと関係しています。基本的な検査シナリオでは、インストール済みファイル・セットと、提供されている部品表とを比較するために、最大で 128 MB から 256 MB のヒープ・サイズが必要な場合があります。

このタスクについて

製品の検査またはベースライン検査合計の検査用にさらにメモリーが必要な場合は、installver_wbi コマンド・スクリプトに設定値を挿入して、Java 仮想マシン (JVM) の最大ヒープ・サイズの設定を増やしてください。

注: **i5/OS** i5/OS システムでは、デフォルトの Java 最大ヒープ・サイズは *NOMAX であるため、サイズを増加させる必要はありません。

メモリー不足の状態を処理するには、以下の手順を実行します。

プロシージャ

1. installver_wbi コマンド・スクリプトを編集する場合:

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh` ファイルを編集します。
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root\bin\installver_wbi.bat` ファイルを編集します。

2. 最大ヒープ・サイズの設定を追加または増加させる場合:

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: 以下の行を変更します。

```
"$JAVA_HOME"/bin/java ¥
```

次のように変更:

```
"$JAVA_HOME"/bin/java -Xmx256M ¥
```

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: 以下の行を変更します。

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" "-Dproduct.home=%WAS_HOME%"
```

次のように変更:

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -Xmx256M "-Dproduct.home=%WAS_HOME%"
```

3. 変更を保存します。

結果

設定を変更した後、installver_wbi コマンドが正しく機能することを確認するため、コマンドを実行してください。

installver_wbi コマンド

インストール済みのファイルについて検査合計を計算し、その検査合計と提供されている製品の部品表とを比較する場合に、installver_wbi コマンドを使用します。

目的

installver_wbi コマンドは、2 つの主要な機能を実行します。このコマンドは、インストール済みのファイルの検査合計を計算して、その検査合計を提供されている製品の部品表と比較します。また、installver_wbi コマンドを使用して構成済みのシステムの品目内にある各ファイルごとに新しいベースライン検査合計を計算し、その後の比較処理でファイルの変更点を示すために使用することができます。

デフォルトのログ・ファイルは、*install_root/logs/installver.log* ファイルです。-log パラメーターと引数を使用して、出力をリダイレクトすることができます。デフォルトのログ・ファイルを生成する場合は、-log パラメーターをファイル引数なしで使用してください。

検査合計の計算: installver_wbi コマンドは、製品のインストール済みのファイルごとに検査合計を計算します。このコマンドは、計算した各検査合計をファイルの正しい検査合計と比較します。正しい検査合計は、部品表ファイルとして提供されています。各コンポーネントごとに、部品表ファイルが 1 つずつ存在します。

このツールは、各コンポーネントの部品表ファイルを解析して、コンポーネントのファイルごとの正しい検査合計値を求めます。どの製品ファイルも、いずれかの部品表ファイルにエントリーされています。1 つの製品ファイルのエントリーでは、その製品のファイル・パスと正しい検査合計値を示しています。

提供されている部品表ファイル: 各部品表ファイルには、files.list という名前が付いています。各コンポーネントに、files.list ファイルが 1 つずつ提供されています。それぞれの files.list ファイルは、いずれかの *install_root/properties/version/nif/backup/component_name* ディレクトリーの中にあります。コンポーネントごとに *component_name* ディレクトリーが存在します。

例えば、activity コンポーネント用の files.list ファイルは *install_root/properties/version/nif/backup/component_name* ディレクトリー内にあります。このファイルの例を以下に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<componentfiles componentname="activity">
  <file>
    <relativepath>properties/version/activity.component</relativepath>
    <checksum>1a20dc54694e81fccd16c80f7c1bb6b46bba8768</checksum>
    <permissions>644</permissions>
    <installoperation>remove</installoperation>
  </file>
  <file>
    <relativepath>lib/activity.jar</relativepath>
    <checksum>2f056cc01be7ff42bb343e962d26328d5332c88c</checksum>
    <permissions>644</permissions>
    <installoperation>remove</installoperation>
  </file>
</componentfiles>
```

計算した検査合計を正しい検査合計と比較: ツールは、各部品表ファイル内の各製品ファイルの処理中に、それに対応するインストール済みの製品ファイルの実際の検査合計値も計算します。この後ツールは、製品ファイルの検査合計を、部品表ファイル内の正しい検査合計値と比較します。ツールは、これに相違点があれば、その相違点を報告します。

コマンド・ファイルのロケーション:

installver_wbi コマンド・ファイルは、インストール・ルート・ディレクトリーの次の bin ディレクトリー内にあります。

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `install_root¥bin¥installver_wbi.bat`

コマンド行から installver_wbi ツールを開始するには、ディレクトリーを bin ディレクトリーに移動します。このツールは、z/OS® を除く、サポートされるすべてのオペレーティング・システム上で稼働します。例えば、Linux システムまたは UNIX システム上でツールを開始する場合は、以下のコマンドを使用します。

```
./installver_wbi.sh
```

コマンドの使用方法についての情報を表示するための構文

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -help`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -help`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -help`

全コンポーネントをリストするための構文

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -listcomponents`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -listcomponents`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -listcomponents`

製品ファイルを部品表ファイルと比較するための構文

部品表を自動的にインストール済みのファイル・システムと照合する場合は、以下のコマンド構文を使用します。

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `install_root/bin/installver_wbi`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:
`install_root/bin/installver_wbi.sh`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合:
`install_root¥bin¥installver_wbi.bat`

インストール済みファイルを製品の部品表ファイルと比較する場合のコマンドの使用例については、153ページの『部品表との照合』を参照してください。

比較およびコマンド使用法の例

検査合計を比較するときに、比較の対象に指定のファイルのみを含める場合:

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -include fn1;fn2;fn3`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -include fn1;fn2;fn3`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -include fn1;fn2;fn3`

指定したファイルまたはコンポーネントのみを比較する場合のコマンドの使用例については、『特定のファイルおよびコンポーネントの検査合計の比較』を参照してください。

検査合計を比較するときに、比較の対象に指定のコンポーネントのみを含める場合:

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -includecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -includecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -includecomponent comp1;comp2;comp3;...`

検査合計を比較するときに、比較から特定のコンポーネントを除外する場合:

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -excludecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -excludecomponent comp1;comp2;comp3;...`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -excludecomponent comp1;comp2;comp3;...`

比較からファイルを除外する場合のコマンドの使用例については、161ページの『検査合計の比較からのファイルの除外』を参照してください。

検査合計を比較するときに、ユーザーが除外したファイルは無視する場合:

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -ignoreuserexclude`
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -ignoreuserexclude`
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -ignoreuserexclude`

検査合計を比較するときに、IBM が除外したファイルが無視する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -ignoreibmexclude`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -ignoreibmexclude`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -ignoreibmexclude`

全コンポーネントのリストのみをする場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -listcomponents`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -listcomponents`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -listcomponents`

テンプレート (除外されたファイルのリスト用) のみを作成する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -createtemplate`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./installver_wbi.sh -createtemplate`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -createtemplate`

検査合計を部品表と照合するためのパラメーター

製品ファイルの検査合計を部品表ファイルの正しい検査合計と比較する際に、コマンドに関連付けられるパラメーターを以下に示します。

-componentdir *directory_1;directory_2;directory_n*

WebSphere Application Server 製品がコンポーネントごとの個々の部品表リストを格納するディレクトリーの名前を示すオプション・パラメーター。

デフォルト値は `install_root/properties/version/nif/backup` ディレクトリーです。

-createtemplate [*file_name*]

検査合計の比較からファイルを除外するためのテンプレート・プロパティ・ファイルを作成します。テンプレート・プロパティ・ファイルを編集して、検査から除外したい各ファイルごとに 1 行ずつ追加します。

ファイル指定引数がない場合、`installver_wbi` ツールは、`install_root/properties/ivu_user.template` ファイルを作成します。

ファイル名を指定した場合、`installver_wbi` ツールは、作業ディレクトリー (デフォルトでは `install_root/profiles/profile_name/bin` ディレクトリー) 内にそのファイルを作成します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: コマンド行で以下を入力します。
 1. `cdinstall_root/bin`
 2. `./installver_wbi -createtemplate`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: コマンド行で以下を入力します。

1. `cd install_root/bin`
2. `./installver_wbi.sh -createtemplate`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: コマンド行で以下を入力します。

1. `cd install_root%bin`
2. `installver_wbi.bat -createtemplate`

`installver_wbi` ツールは、デフォルト・プロファイルの `properties` ディレクトリ一内に、テンプレート・プロパティ・ファイルを作成します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `default_profile_root/properties/ivu.user.template`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `default_profile_root/properties/ivu.user.template`

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `default_profile_root%properties%ivu.user.template`

-exclude *file1;file2;file3; ...*

複数のファイルを検査から除外します。

セミコロン (;) またはコロン (:) を使用して、ファイル名とファイル名を区切ります。

-excludecomponent *component1;component2;component3; ...*

複数のコンポーネントを検査から除外します。

セミコロン (;) またはコロン (:) を使用して、コンポーネント名とコンポーネント名を区切ります。

-filelist *file_name*

IBM が特定の製品コンポーネント内の製品ファイルの正しい検査合計を識別するために使用するファイルの名前を示すオプション・パラメーター。

デフォルト値は `files.list` です。

-help

使用法の情報を表示します。

-ignoreuserexclude

デフォルトの `install_root/properties/ivu_user.template` ファイルが存在しているときに、このデフォルトのファイルを無視し、テンプレートにリストされているファイルを比較します。

ファイル指定で `-createtemplate` パラメーターを使用して、別のロケーションにテンプレート・ファイルを作成する場合は、`-ignoreusertemplate` パラメーターを指定しても効果はありません。

-ignoreibmexclude

インストール・ルート・ディレクトリ一内にあるすべてのファイルの検査合計を比較します。IBM は、デフォルトで検査から特定のファイルを除外するように

指定しています。-ignoreibmexclude パラメーターを使用すると、installver_wbi ツールで、これらのファイルも含めて検査を行うことができます。

-include *file1;file2;file3; ...*

指定するファイルを検査の対象に含めて、その他のファイルすべてを除外します。

セミコロン (;) またはコロン (:) を使用して、ファイル名とファイル名を区切ります。

-includecomponent *component1;component2;component3; ...*

指定するコンポーネントを検査の対象に含めて、その他のコンポーネントすべてを除外します。

セミコロン (;) またはコロン (:) を使用して、コンポーネント名とコンポーネント名を区切ります。

-installroot *directory_name*

デフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを指定変更します。

-listcomponents

製品のコンポーネントのリストを表示します。コンポーネントごとに 1 つずつ files.list ファイルがあります。

-log [*file_path_and_file_name_of_log_file*]

デフォルトのログ・ファイルは、*install_root/logs/installver.log* ファイルです。-log パラメーターと引数を使用して、出力をリダイレクトすることができます。

-profilehome *directory_name*

インストール・ルート・ディレクトリー内のデフォルト・プロファイル・ディレクトリーを指定変更します。

-trace

ツールの検査対象とツールが発見した内容のトレース出力を提供します。

構成済みファイルの品目に対する新しいベースライン検査合計を作成および使用するための構文

構成済みファイルの品目を作成し、これを現在インストールされているファイルと比較するには、以下の構文を使用します。

インストール・ルート・ディレクトリーに現在インストールされているファイルの品目リストを作成する場合:

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `./installver_wbi -createinventory [path/file_name]` (例えば `./installver_wbi -createinventory /tmp/system.inv`)
- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -createinventory [path/file_name]` (例えば `./installver_wbi.sh -createinventory /tmp/system.inv`)
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -createinventory [path%file_name]` (例えば `installver_wbi.bat -createinventory C:%temp%system.inv`)

品目リストを、インストール・ルート・ディレクトリーに現在インストールされているファイルと比較する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare /path/file_name`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare /path/file_name`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare path\file_name`

比較してトレースの結果を表示する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare /path/file_name -trace`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare /path/file_name -trace`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare /path/file_name -trace`

使用法の情報を表示する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -help`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -help`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -help`

比較するときに、品目の比較から指定したファイルを除外する場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare /path/file_name -exclude fn1;fn2;fn3;...`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare /path/file_name -exclude fn1;fn2;fn3;...`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare %path%file_name -exclude fn1;fn2;fn3;...`

比較するときに、品目の比較に指定したファイルのみを対象として含める場合:

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `./installver_wbi -compare /path/file_name -include fn1;fn2;fn3;...`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `./installver_wbi.sh -compare /path/file_name -include fn1;fn2;fn3;...`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `installver_wbi.bat -compare /path/file_name -include fn1;fn2;fn3;...`

ファイル品目の検査合計を作成および使用するためのパラメーター

このコマンドに関連付けられるパラメーターを以下に示します。

-compare *file_path_and_file_name_of_existing_inventory_file*

既存の品目リストを既存ファイルと比較して、相違点を調べます。

最初に `-createinventory` パラメーターを使用して、品目リストを作成します。次に、`-compare` パラメーターを使用して、この品目リストを、比較時にシステム内に存在する実際のファイルと比較します。

比較の結果として、変更されたクラス、変更されたファイル、欠落ファイル、追加されたファイルが示されます。このような比較は、ウィルス・ファイルがないかどうかの検査などに非常に役に立ちます。

-createinventory *directory_name*

`profile_root/bin` ディレクトリーなどの現行作業ディレクトリー内の `sys.inv` ファイルに、デフォルトで新しい検査合計を作成します。ファイル・パスとファイル名を指定することができます。インストール・ルート・ディレクトリーの外部にファイルを作成したり、比較からファイルを除外したりします。

`installver_wbi` ツールは、どのディレクトリーでも指示することができます。デフォルト・ディレクトリーは、インストール・ルート・ディレクトリーです。

品目からファイルまたはコンポーネントを除外することができます。

`installver_wbi` ツールは、ファイルごとに検査合計を計算します。品目内の各ファイルのエントリーには、以下の一般的なパターンがあります。

```
checksum|relativepath/file_name|file_size|last_modified_time
```

品目リストを作成したら、`-compare` パラメーターを使用して、このリストを比較時にシステム内に存在する実際のファイルと比較します。

-exclude *file1;file2;file3;...*

複数のファイルを比較から除外します。

セミコロン (;) またはコロン (:) を使用して、ファイル名とファイル名を区切ります。

-help

使用法の情報を表示します。

-include *file1;file2;file3; ...*

ファイルを比較の対象に含めて、その他のファイルすべてを除外します。

セミコロン (;) またはコロン (:) を使用して、ファイル名とファイル名を区切ります。

-installroot *directory_name*

デフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを指定変更します。

-log [*file_path_and_file_name_of_log_file*]

デフォルトのログ・ファイルは、`install_root/logs/installver.log` ファイルです。`-log` パラメーターと引数を使用して、出力をリダイレクトすることができます。

-trace

ツールの検査対象とツールが発見した内容のトレース出力を提供します。

例

以下の例は、installver_wbi コマンドを実行して検査合計を比較したときに発生する可能性のある問題を示しています。

コンポーネントの拡張時に発生するような、意図的に生じた検査合計の不一致のエントリは無視してください

変更した各ファイルごとに検査合計は異なります。

```
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: regularcomponentsample
I CWNVU0440I: [ivu] The following file is different: lib/different.jar
I CWNVU0410I: [ivu] fc19318dd13128ce14344d066510a982269c241b is the checksum in
the bill of materials.
I CWNVU0420I: [ivu] 517d5a7240861ec297fa07542a7bf7470bb604fe is the checksum on
the file system.
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: regularcomponentsample
```

明らかな通知 (I) メッセージは無視してください

いくつかのメッセージは、通常期待される結果からの逸脱を示しますが、重大な問題を示してはいません。

```
I CWNVU0360I: [ivu] The following bill of materials issue is found for component
nullvaluesample:
Hash must not be null or an empty string.
```

ファイルが重複している場合は、潜在的な製品の問題または IBM 提供の部品表の不正変更の可能性があります。

```
I CWNVU0470I: [ivu] Starting to analyze: overlapbinarycomponentsample
W CWNVU0422W: [ivu] The following file is overlapped: lib/binaryTest.jar
W CWNVU0425W: [ivu] The overlap is caused by: _binarycomponentsample
I CWNVU0390I: [ivu] Component issues found : 1
I CWNVU0480I: [ivu] Done analyzing: overlapbinarycomponentsample
```

以下の問題については、IBM サポートにお問い合わせください

次の形式のメッセージが表示された場合は、IBM サポートに連絡してください。

```
W CWNVU0280W: [ivu] Component mismatch: expected ... but found ...
```

既知の問題とその解決策についての IBM サポートの有効な現行情報については、この IBM サポート・ページを参照してください。

IBM サポートが提供する資料を参照すれば、この問題を解決するために必要な情報を集めるための時間を節減することができます。PMR を開く前に、この IBM サポート・ページを参照してください。

類似したインストールの既知の問題が見つからない場合、または提供されている情報では問題が解決しない場合は、IBM サポートに連絡してください。




次の手順

インストールの検査が終了したら、プロファイルを作成するか、または既存プロファイルでアプリケーションをデプロイすることができます。

第 9 章 ほかの WebSphere 製品のインストール済み環境との共存

WebSphere Process Server バージョン 6.1 のインストール済み環境は、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のすべてのバージョンのインストール済み環境、および特定の WebSphere 製品の一部のバージョンと同じシステム上で共存することができます。

WebSphere Process Server バージョン 6.1 のインストール済み環境は、以下のサポートされている製品とバージョンの 1 つ以上のインストール済み環境と同じシステム上で同時に稼働させることができます。

- IBM WebSphere Process Server バージョン 6.1 および 6.0.x
- IBM WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.1 および 6.0.x
- IBM WebSphere Application Server バージョン 6.1、6.0.x、および 5.x
- IBM WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1、6.0.x、および 5.x
- IBM WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.x
-    IBM WebSphere Application Server Enterprise バージョン 5.0.x

共存を構成する際、通信エラーを防ぐために発生したすべてのポートの競合を解決する必要があります。サーバーの各バージョンには、異なるデータベースがインストールされている必要があります。

共存と、以下に説明するマイグレーション、更新、または相互協調処理 とを混同しないようにしてください。

- **マイグレーション** とは、WebSphere Process Server の前のリリースから新しいリリースに構成をコピーすることです。WebSphere Process Server または WebSphere ESB の前のバージョンを既にインストールしているシステムに WebSphere Process Server バージョン 6.1 をインストールして、WebSphere Process Server または WebSphere ESB のより新しいバージョンにマイグレーションする場合、詳しくは、WebSphere Process Server へのマイグレーションを参照してください。
- **更新** とは、既存のインストール済み環境にある古いファイルまたはデータを現行情報で置き換えることです。リフレッシュ・パック、暫定修正、フィックスパックなどが更新の例として挙げられます。更新の方法について詳しくは、237 ページの『第 12 章 Update Installer を使用したフィックスパックおよびリフレッシュ・パックのインストール』を参照してください。
- **相互協調処理** とは、共存する複数の製品インストール済み環境などの 2 つの異なるシステム間でデータを交換することです。通常、WebSphere Process Server のこのバージョンは、多数の前のバージョンと相互協調処理が可能です。インターオペラビリティ (相互運用性) をサポートするには、最新の修正レベルを適用

する必要があります。詳しくは、『WebSphere Process Server と他の WebSphere Application Server 製品との間のインターオペラビリティの計画』を参照してください。

各種 WebSphere 製品の既存のインストール済み環境と共存する WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client のインストール

この手順を使用して、WebSphere Process Server、WebSphere Process Server Client、WebSphere Enterprise Service Bus、または WebSphere Application Server あるいは WebSphere Application Server Network Deployment のサポートされているバージョンのいずれかが既にインストールされているシステムに WebSphere Process Server または WebSphere Process Server Client をインストールします。この手順では、インストール・ウィザードのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用します。

始める前に

45 ページの『第 4 章 WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』で、製品をインストールするための前提条件リストを確認します。

リリースの混在したセルの使用に関する制限:

- セル内のノードの一部を、ほかのノードを古いリリース・レベルにしたままで WebSphere Process Server バージョン 6.1 にアップグレードすることができます。これは、同一のセル内で、現行リリース・レベルにあるサーバーとより新しいリリース・レベルが実行されているサーバーを一定期間管理する場合があります。ことを意味しています。
- WebSphere Process Server バージョン 6.1 のデプロイメント・セルには、バージョン 6.0.1.x ノードまたは 6.0.2.x ノードの混在したリリースを含めることができますが、バージョン 6.0.0.x に対しては混在したノードの管理のサポートはありません。バージョン 6.0.1.x ノードについては、それらに WebSphere Process Server 6.0.2 フィックスパック 9 以上がインストールされている必要があります。

バージョン 6.1 マイグレーション・ツールは、デプロイメント・マネージャーのマイグレーション時にこれらのノードをマイグレーションしますが、バージョン 6.1 のデプロイメント・マネージャーではそれらのノードを管理できないことを示す警告メッセージを発行します。この場合は、必要に応じて以下のいずれかの操作を実行できます。

- バージョン 6.0.0.x ノードのすべてを少なくともバージョン 6.0.1 にアップグレードし、WebSphere Application Server 6.0.2 フィックスパック 9 以上をインストールする。これにより、バージョン 6.1 のデプロイメント・マネージャーでそれらのノードを管理できます。
- これらのノードをバージョン 6.1 に直接マイグレーションする。
- 6.1 デプロイメント・マネージャーがあるデプロイメント・セルの場合、6.0.x 管理対象ノードで実行されているビジネス・プロセス実行言語 (BPEL) プロセスが含まれたアプリケーションは変更できません。6.0.x 管理対象ノードに既にインストールされているアプリケーションは、中断されずに実行されます。ただし、

このような実行中のアプリケーションについては、アプリケーションの更新およびアンインストールはできません。また、6.1 デプロイメント・マネージャーによって管理される 6.0.x ノードに新規アプリケーションをインストールすることもできません。

- クラスター内では、バージョン 6.0.x メンバーとバージョン 6.1 メンバーを同時に実行しないでください。最初のバージョン 6.1 クラスター・メンバーを開始する前に、バージョン 6.0.x クラスター・メンバーをすべて停止する必要があります。また、バージョン 6.1 クラスター・メンバーを開始した後は、そのクラスター内で 6.0.x クラスター・メンバーを開始しないでください。

このタスクについて

この手順では、WebSphere Process Server、WebSphere Process Server Client、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、または WebSphere Application Server Network Deployment のバージョン 6.0.x または 6.1 のインストール済み環境がシステムにあることを前提としています。既存のプロファイルは必要ありません。また、対話式インターフェースを使用してインストールすることも前提になっています。以下の手順を使用して、製品をインストールします。

プロシージャ

1. 94 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックに進んでステップに従ってインストール・ウィザードを開始し、ご使用条件を受け入れて前提条件を確認します。

この手順では、システム上の WebSphere Process Server、WebSphere Process Server Client、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server バージョン 6.1、または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の既存のインストール済み環境を特定します。

2. システム上の既存のインストール済み環境を確認するパネルを表示したら、WebSphere Process Server の新規コピーをインストールして既存のバージョンと共存させることを選択します。
3. インストール・ウィザードの各パネルの手順を実行して進み、製品をインストールします。「インストールの結果」パネルに「成功」と表示されている場合、製品は正常にインストールされています。インストール時にプロファイルを作成した場合は、プロファイルが正常に作成されています。
4. 必要に応じて、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドを使用して、プロファイルを作成します。

プロファイル作成時に、`manageprofiles` コマンドでは、デフォルトのポート値の代わりに指定したポート値を使用できます。ポート・ファイルを使用することも、開始ポートを指定することも、デフォルトのポート値を受け入れることもできます。詳しくは、406 ページの『`manageprofiles` コマンド』を参照してください。

5. インストールが正常に終了したら、スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成した後に、ファースト・ステップ・コンソールから製品を始動し、インストール済み環境が適切に作動していることを確認します。詳しくは、144 ページの『ファースト・ステッ

プ・コンソールのオプション』を参照してください。インストール検査ツールを使用してインストールの検査を行うこともできます。詳しくは、151 ページの『第 8 章 製品のインストールの検査』を参照してください。

6. ポートの競合のために始動できないノードがある場合は、構成ファイル内のポートの割り当てを競合しないポートに変更します。以下の方法のいずれかを使用します。
 - updatePorts ツールを実行します。『Updating ports in an existing profile』を参照してください。
 - `profile_root/config/cells/cell_name/nodes/node_name/serverindex.xml` ファイルを編集します。『スクリプトによる serverindex.xml ファイルに保持されているポート番号の設定』を参照してください。
 - スクリプトを実行します。詳しくは、『アプリケーション・サービス提供環境のスクリプト記述 (wsadmin)』を参照してください。

結果

これで、WebSphere Process Server の 2 つのインストール済み環境を同一のシステム上に共存させることができました。

WebSphere Business Integration Server Foundation 製品および WebSphere Application Server 製品の構成インスタンスと共存する新規 WebSphere Process Server プロファイルの作成

この手順を使用して、単一のシステム上で WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.x、WebSphere Application Server バージョン 5.x、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 5.x、または WebSphere Application Server Enterprise バージョン 5.0.x の構成インスタンスと共存するように WebSphere Process Server バージョン 6.1 プロファイルを作成します。この手順では、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用します。

始める前に

プロファイルの作成または拡張に関する一般的な前提条件を 190 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で確認してください。また、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に特有の前提条件についても検討してください。これらの前提条件に加えて、以下のいずれかの既存のインストール済み環境が存在している必要もあります。

- 既存の構成インスタンスを持つ WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.x。
- 既存の構成インスタンスを持つ WebSphere Application Server バージョン 5.x、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 5.x、または WebSphere Application Server Enterprise バージョン 5.0.x。WebSphere Application Server Enterprise バージョン 5.0.x との共存は、Linux、UNIX、および Windows プラットフォームでのみサポートされます。

リリースの混在したセルの使用に関する制限:

- セル内のノードの一部を、ほかのノードを古いリリース・レベルにしたままで WebSphere Process Server バージョン 6.1 にアップグレードすることができます。これは、同一のセル内で、現行リリース・レベルにあるサーバーとより新しいリリース・レベルが実行されているサーバーを一定期間管理する場合がありますことを意味しています。
- WebSphere Process Server バージョン 6.1 のデプロイメント・セルには、バージョン 6.0.1.x ノードまたは 6.0.2.x ノードの混在したリリースを含めることができますが、バージョン 6.0.0.x に対しては混在したノードの管理のサポートはありません。バージョン 6.0.1.x ノードについては、それらに WebSphere Process Server 6.0.2 フィックスパック 9 以上がインストールされている必要があります。

バージョン 6.1 マイグレーション・ツールは、デプロイメント・マネージャーのマイグレーション時にこれらのノードをマイグレーションしますが、バージョン 6.1 のデプロイメント・マネージャーではそれらのノードを管理できないことを示す警告メッセージを発行します。この場合は、必要に応じて以下のいずれかの操作を実行できます。

- バージョン 6.0.0.x ノードのすべてを少なくともバージョン 6.0.1 にアップグレードし、WebSphere Application Server 6.0.2 フィックスパック 9 以上をインストールする。これにより、バージョン 6.1 のデプロイメント・マネージャーでそれらのノードを管理できます。
- これらのノードをバージョン 6.1 に直接マイグレーションする。
- 6.1 デプロイメント・マネージャーがあるデプロイメント・セルの場合、6.0.x 管理対象ノードで実行されているビジネス・プロセス実行言語 (BPEL) プロセスが含まれたアプリケーションは変更できません。6.0.x 管理対象ノードに既にインストールされているアプリケーションは、中断されずに実行されます。ただし、このような実行中のアプリケーションについては、アプリケーションの更新およびアンインストールはできません。また、6.1 デプロイメント・マネージャーによって管理される 6.0.x ノードに新規アプリケーションをインストールすることもできません。
- クラスター内では、バージョン 6.0.x メンバーとバージョン 6.1 メンバーを同時に実行しないでください。最初のバージョン 6.1 クラスター・メンバーを開始する前に、バージョン 6.0.x クラスター・メンバーをすべて停止する必要があります。また、バージョン 6.1 クラスター・メンバーを開始した後は、そのクラスター内で 6.0.x クラスター・メンバーを開始しないでください。

このタスクについて

新規プロファイルを作成するには、以下の手順を実行します。

プロシージャ

1. 新規 WebSphere Process Server プロファイルを作成します。

そのためには、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順を実行します。

プロファイル管理ツールを使用して処理を進めるときには、「ポート値割り当て」パネル上で、新規プロファイル用に指定されたポートが、既存の構成インスタンスに割り当てられたポートとは異なる固有のポートであることを確認してください。

2. スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成した場合は、そのプロファイルが共存するインスタンスと共に正しく動作していることを確認します。プロファイルが正しく動作していることを確認するには、共存するインスタンスの稼働中にファースト・ステップ・コンソールからプロファイルを開始します。正常に開始された場合、プロファイルは正しく動作しています。

結果

新しい WebSphere Process Server プロファイルが存在します。

WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルと共存する新規 WebSphere Process Server プロファイルの作成

1 つのワークステーション上で WebSphere Process Server プロファイルを新規作成して、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルと共存させるには、以下の手順を使用します。この手順では、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用します。

始める前に

プロファイルの作成または拡張に関する一般的な前提条件を 190 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で確認してください。また、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に特有の前提条件についても検討してください。それらの前提条件に加えて、WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.1 または 6.0.x がすでにインストールされていて、既存のプロファイルが存在していることも必要です。

リリースの混在したセルの使用に関する制限:

- セル内のノードの一部を、ほかのノードを古いリリース・レベルにしたままで WebSphere Process Server バージョン 6.1 にアップグレードすることができます。これは、同一のセル内で、現行リリース・レベルにあるサーバーとより新しいリリース・レベルが実行されているサーバーを一定期間管理する場合がありますことを意味しています。
- WebSphere Process Server バージョン 6.1 のデプロイメント・セルには、バージョン 6.0.1.x ノードまたは 6.0.2.x ノードの混在したリリースを含めることができますが、バージョン 6.0.0.x に対しては混在したノードの管理のサポートはありません。バージョン 6.0.1.x ノードについては、それらに WebSphere Process Server 6.0.2 フィックスパック 9 以上がインストールされている必要があります。

バージョン 6.1 マイグレーション・ツールは、デプロイメント・マネージャーのマイグレーション時にこれらのノードをマイグレーションしますが、バージョン

6.1 のデプロイメント・マネージャーではそれらのノードを管理できないことを示す警告メッセージを発行します。この場合は、必要に応じて以下のいずれかの操作を実行できます。

- バージョン 6.0.0.x ノードのすべてを少なくともバージョン 6.0.1 にアップグレードし、WebSphere Application Server 6.0.2 フィックスパック 9 以上をインストールする。これにより、バージョン 6.1 のデプロイメント・マネージャーでそれらのノードを管理できます。
- これらのノードをバージョン 6.1 に直接マイグレーションする。
- 6.1 デプロイメント・マネージャーがあるデプロイメント・セルの場合、6.0.x 管理対象ノードで実行されているビジネス・プロセス実行言語 (BPEL) プロセスが含まれたアプリケーションは変更できません。6.0.x 管理対象ノードに既にインストールされているアプリケーションは、中断されずに実行されます。ただし、このような実行中のアプリケーションについては、アプリケーションの更新およびアンインストールはできません。また、6.1 デプロイメント・マネージャーによって管理される 6.0.x ノードに新規アプリケーションをインストールすることもできません。
- クラスタ内では、バージョン 6.0.x メンバーとバージョン 6.1 メンバーを同時に実行しないでください。最初のバージョン 6.1 クラスタ・メンバーを開始する前に、バージョン 6.0.x クラスタ・メンバーをすべて停止する必要があります。また、バージョン 6.1 クラスタ・メンバーを開始した後は、そのクラスタ内で 6.0.x クラスタ・メンバーを開始しないでください。

このタスクについて

新規プロファイルを作成するには、以下の手順を実行します。

プロシージャ

1. 新規 WebSphere Process Server プロファイルを作成します。

そのためには、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順を実行します。

プロファイル管理ツールを使用して処理を進めるときには、「ポート値割り当て」パネル上で、新規プロファイル用に指定されたポートが、既存の WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに割り当てられたポートとは異なる固有のポートであることを確認してください。

2. スタンドアロン・サーバー・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成した場合、そのプロファイルが共存する WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルと共に正しく動作していることを確認します。プロファイルが正しく動作していることを確認するには、共存するプロファイルの稼働中にファースト・ステップ・コンソールからそのプロファイルを開始します。正常に開始された場合、プロファイルは正しく動作しています。

結果

新しい WebSphere Process Server プロファイルが存在します。

第 10 章 プロファイルの使用

スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム・プロファイル (管理対象ノード) という 3 つの種類のプロファイルがあります。各プロファイルは、別々のファイル (コマンド、構成ファイル、およびログ・ファイル) を使用して、別々のランタイム環境を定義します。このセクションの各トピックでは、WebSphere Process Server のインストール後にこれらのプロファイルを使用するために実行が必要になる場合があるタスクについて、詳細に説明しています。

プロファイル

プロファイルでは、個別のコマンド・ファイル、構成ファイル、ログ・ファイルを持つ固有のランタイム環境を定義します。プロファイルでは、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、および管理対象ノードの 3 つのタイプの環境を定義します。

プロファイルを使用すると、WebSphere Process Server バイナリー・ファイルの複数のコピーをインストールしなくても、1 つのシステムに複数のランタイム環境を保持することができます。

最初のプロファイルは、WebSphere Process Server のインストール時に自動的に作成されます。後で、バイナリー・ファイルの 2 つめのコピーをインストールしなくても、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドを使用して、同じシステム上に追加のプロファイルを作成することができます。

注: 分散プラットフォームでは、各プロファイルには固有の名前があります。z/OS では、すべてのプロファイルに「default」という名前が付けられます。

プロファイル・ディレクトリー

システム内の各プロファイルには、それぞれのファイルをすべて収容するための独自のディレクトリーがあります。プロファイルの作成時に、プロファイル・ディレクトリーの場所を指定します。デフォルトでは、WebSphere Process Server がインストールされたディレクトリーの `profiles` ディレクトリーになります。例: `Dmgr01` プロファイルは `C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer\profiles\Dmgr01` です。

ファースト・ステップ・コンソール

Linux **UNIX** **Windows** システム内のすべてのプロファイルには、ファースト・ステップ・コンソールがあります。このコンソールは、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、または管理対象ノードを熟知するためのユーザー・インターフェースです。

デフォルト・プロファイル

WebSphere Process Server の 1 つのインストール環境内に作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、WebSphere Process Server がインストールされたディレクトリー内の `bin` ディレクトリーから出されるコマンドのデフォルトのターゲットです。システム上にプロファイルが 1 つしかない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに対して作用します。プロファイルをもう 1 つ作成すると、そのプロファイルをデフォルトにすることができます。デフォルト以外のプロファイルをコマンドのターゲットとする方法については、435 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

注: デフォルト・プロファイルは、必ずしも「default」という名前のプロファイルではあるとは限りません。

プロファイルの拡張

WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6 または WebSphere ESB 用に作成されたデプロイメント・マネージャー、カスタム・プロファイル、またはスタンドアロン・サーバーが既にある場合は、既存の機能のほかに WebSphere Process Server をサポートするように、そのプロファイルを拡張できます。プロファイルを拡張するには、最初に WebSphere Process Server をインストールします。次にプロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドを使用します。

制約事項: プロファイルが、既にデプロイメント・マネージャーに統合済みの管理対象ノードを定義する場合は、そのプロファイルを拡張できません。

プロファイルの作成または拡張に関する前提条件

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件を満たしていることを確認する必要があります。

- WebSphere Process Server が既にインストールされている。インストールされていない場合は、79 ページの『第 7 章 ソフトウェアのインストール』にあるインストール手順を参照してください。
- 製品をインストールしたユーザー ID でない場合は、WebSphere Process Server インストール内の特定のディレクトリーに対する書き込み権限が付与されている。それらの権限を取得する方法については、193 ページの『非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与』を参照してください。プロファイルは、`install_root/profiles` 以外のディレクトリーに作成する必要があります。
- 作成または拡張するプロファイルのタイプがわかっている。プロファイルについて詳しくは、189 ページの『プロファイル』を参照してください。
- プロファイルを作成または拡張する場合は、以下の正しい手順に従う必要がある。
 - 既存のプロファイルを拡張するのではなく新しいプロファイルを作成する場合は、以下のトピックのいずれかを参照してください。
 - 対話式インターフェースを使用してプロファイルを作成する場合: 199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』

- manageprofiles コマンドを使用してプロファイルを作成する場合: 203 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成』
- 既存の WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張する場合は、以下のいずれかのトピックを参照してください。
 - 対話式インターフェースを使用してプロファイルを拡張する場合: 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』
 - manageprofiles コマンドを使用してプロファイルを拡張する場合: 212 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの拡張』

重要: プロファイル管理ツールまたは manageprofiles コマンドを使用して拡張しようとしているプロファイルは、既に統合済みの管理対象ノードを定義できません。管理対象ノードが既に統合済みの場合、215 ページの『統合されたプロファイルの手動での拡張』で説明するように、手動で拡張する必要があります。

- 64 ビット・プラットフォーム (i5/OS 以外) または Linux on System z プラットフォーム上で、プロファイルを作成または拡張するためにプロファイル管理ツールを使用していないこと。これらのプラットフォーム上でプロファイルを作成または拡張するには、manageprofiles コマンドを使用する必要があります。詳しくは、203 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成』を参照してください。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンする。
- プロファイル、ノード、ホスト、およびセル (該当する場合) の名前を設定するときに考慮しなければならない予約語や問題点について、427 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』の情報を確認している。
- 新しいプロファイルの作成または拡張に十分なディスク・スペースと一時スペースがある。スペース所要量について詳しくは、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> で WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を確認し、ご使用のバージョンの WebSphere Process Server のリンクを選択してください。

以下は、製品データベースに関連する前提条件です。

- プロファイルの作成と拡張のプロセスで、Common Event Infrastructure コンポーネントで使用するデータベースと、他の選択したコンポーネントで使用する共通データベースを構成することを確認します。新しいデータベースとテーブルを作成する場合も、既存のデータベースに新しいテーブルを追加する場合も、ユーザーやデータベース管理者 (DBA) が手動で実行する必要があるスクリプトを生成して実際のデータベース構成を先送りする場合も、以下のデータベースの詳細を確認しなければなりません。
 - Common Event Infrastructure データベースの場合:
 - データベース名
 - データベース認証用のユーザー ID とパスワード
 - JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリ場所 (Derby Embedded または Derby Network Server の場合は不要)
 - データベース・サーバー・ホスト名 (Derby Embedded の場合は不要)

- サーバー・ポート (Derby Embedded、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)、または DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) の場合は不要)
- イベント・サービス・インスタンス名 (Informix、Oracle、および Microsoft SQL Server の場合のみ必須)
- データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー (Informix および Oracle の場合のみ必須)
- 管理者のユーザー ID およびパスワード (Oracle および Microsoft SQL Server の場合のみ必須)
- データベース・サーバー名 (Informix および Microsoft SQL Server の場合のみ必須)
- データベース・ノード名 (DB2 サーバーがリモートの場合) (DB2 Universal の場合のみ必須)
- データベース別名 (DB2 UDB for z/OS の場合のみ必須)
- データベース・ストレージ・グループ名 (DB2 UDB for z/OS の場合のみ必須)
- データベース・サブシステム名 (DB2 UDB for z/OS の場合のみ必須)
- 4K、8K、および 16K のバッファ・プール名 (DB2 UDB for z/OS の場合のみ必須)
- イベント・サービス・データベースのディスク・サイズ (DB2 UDB for z/OS の場合のみ必須)
- データベース・コレクション名 (DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) および DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) の場合のみ必須)
- 共通データベースの場合:
 - データベース名
 - データベース認証用のユーザー ID およびパスワード (Derby Embedded の場合は不要)
 - JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリーの場所 (Derby Embedded、Derby Network Server、または Microsoft SQL Server Embedded の場合は不要)
 - データベース・サーバー・ホスト名 (Derby Embedded または DB2 CLI の場合は不要)
 - サーバー・ポート (Derby Embedded、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)、DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)、または DB2 CLI の場合は不要)
 - JDBC ドライバー・タイプ (DB2 Universal、Oracle 9i、および Oracle 10g の場合のみ必須)
 - データベース別名 (DB2 UDB for z/OS、OS/390® V7、および DB2 UDB for z/OS V8 の場合のみ必須)
 - 接続位置 (DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7、および DB2 UDB for z/OS V8 の場合のみ必須)
 - ストレージ・グループ名 (DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7、および DB2 UDB for z/OS V8 の場合のみ必須)
 - データベース・コレクション名 (DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) および DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) の場合のみ必須)
 - イベント・サービス・インスタンス名 (Informix の場合のみ必須)
- リポジトリに DB2 Universal Database を使用する場合は、必ず以下のステップを実行してから、プロファイルを作成または拡張してください。

- リモート・システム上にサーバーが置かれている場合、DB2 クライアントで DB2 データベースを構成するときは、クライアント・システムがサーバーと通信するように構成されていることと、DB2 ノードがカタログされていることを確認してください。詳しくは、DB2 Universal Database 資料を参照してください。
- **Linux** **UNIX** Linux または UNIX システムで、DB2 データベースを構成する場合は、以下の操作を実行して、データベース環境を調達します。
 1. /etc/group を変更し、製品をインストールしたユーザー ID が db2instance と同じグループになるようにします。
 2. db2instance/sqllib/db2profile スクリプトを実行してデータベース環境を調達します (db2instance は、使用するデータベース・インスタンスの名前に置き換えてください)。
- 共通データベース・リポジトリをリモート・サーバー上に配置する場合は、プロファイルの作成または拡張を開始する前にリポジトリを作成する必要があります。ローカル・サーバーにリポジトリを作成することも、リモート・サーバーの既存のリポジトリを使用することも可能です。このデータベースを作成するために使用できるデフォルトのスクリプトの場所については、『共通データベースの仕様』を参照してください。
- Common Event Infrastructure および共通データベースのリポジトリとして、リモート z/OS マシン上の DB2 を使用する場合は、DBA が z/OS サーバー上に 3 つのデータベース (event、eventcat、および WPRCSDB) を作成し、それぞれに対して正しいストレージ・グループ (デフォルトは EVTST0) を作成する必要があります。DBA は、サイトの標準的なデータベース定義ツールや手順を使用できます。
- event および eventcat データベースと、関連するストレージ・グループを作成するには、DBA は『イベント・データベースの構成』およびそのサブトピックを参照します。
- WPRCSDB データベースと関連するストレージ・グループを作成するには、DBA は以下のディレクトリーにあるデフォルト・スクリプトを編集して実行します。
 - **Linux** **UNIX** `install_root/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV7/` または `install_root/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV8/`
 - **Windows** `install_root%dbscripts%CommonDB%DB2zOSV7%` または `install_root%dbscripts%CommonDB%DB2zOSV8%`

これらの前提条件について検討したら、このトピックにアクセスする前に参照していた元のトピックに戻ります。

非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与

製品のインストール・ユーザー (root または管理者の場合と非 root ユーザーの場合がある) は、該当する WebSphere Process Server のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を他の非 root ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非 root ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。製品インストーラーは、プロファイル作成の権限を持つユーザーのグループを作成することもで

き、また個々のユーザーにプロファイル作成の権限を付与することもできます。以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。

制約事項: i5/OS このトピックで説明されているタスクは、i5/OS ではサポートされていません。

この説明全体にわたり、「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、WebSphere Process Server をインストールしたユーザー ID のことを指しています。

制約事項: WebSphere Process Server では、製品インストール・ユーザーから他の非 root ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。このため、非 root ユーザーによるプロファイルの拡張はサポートされません。

非 root ユーザーは、自分の環境を管理できるように、独自のプロファイルを作成します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非 root ユーザーは、製品の `install_root/profiles` ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

制約事項: プロファイルを作成する非 root ユーザーには、操作性の制限があります。固有の名前とポート値を提案するプロファイル管理ツール内の仕組みは、非 root ユーザーには使用不可になります。さらに非 root ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値も変更する必要があります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非 root ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任を非 root ユーザーに割り当てることができます。

製品インストール・ユーザーが適切な権限を付与するために実行する必要がある手順

インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、`profilers` グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、WebSphere Process Server システムにログオンします。(製品インストール・ユーザーは、root または管理者の場合と非 root ユーザーの場合があります。)
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のようになります。
 - プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は `profiles`) を作成します。
 - プロファイルの作成を実行できるユーザー (名前は `user1`) を作成します。
 - ユーザー `product_installer` と `user1` を `profilers` グループに追加します。
3. Linux UNIX ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。
4. インストール・ユーザーとして、以下のディレクトリーを作成します。

- **Linux** **UNIX** 次のように入力して、`install_root/logs/manageprofiles` ディレクトリーを作成します。
`mkdir install_root/logs/manageprofiles`

Windows Windows の資料の説明に従って、`install_root¥logs¥manageprofiles` ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。
`install_root¥logs¥manageprofiles`

- **Linux** **UNIX** 次のように入力して、`install_root/properties/fsdb` ディレクトリーを作成します。
`mkdir install_root/properties/fsdb`

Windows Windows の資料の説明に従って、`install_root¥properties¥fsdb` ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。
`install_root¥properties¥fsdb`

5. インストール・ユーザーとして、ご使用のオペレーティング・システムの方法に従って、`profileRegistry.xml` ファイルを作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

Linux **UNIX**
`install_root/properties/profileRegistry.xml`

Windows
`install_root¥properties¥profileRegistry.xml`

ご使用のオペレーティング・システムの説明に従って、次の情報を `profileRegistry.xml` ファイルに追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。

Linux **UNIX** 次の例では、変数 `$WASHOME` が WebSphere Process Server のルート・インストール・ディレクトリーの `/opt/IBM/WebSphere/ProcServer` であると想定しています。

```
export WASHOME=/opt/IBM/WebSphere/ProcServer
echo $WASHOME
echo "Performing chgrp/chmod per WAS directions..."
chgrp profilers $WASHOME/logs/manageprofiles
chmod g+wr $WASHOME/logs/manageprofiles
chgrp profilers $WASHOME/properties
chmod g+wr $WASHOME/properties
chgrp profilers $WASHOME/properties/fsdb
chmod g+wr $WASHOME/properties/fsdb
chgrp profilers $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chmod g+wr $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chgrp -R profilers $WASHOME/profileTemplates
```

HP-UX 次のコマンドをさらに実行します。ここで *profile_template_name* は、それぞれ default、dmgr、または managed です。

```
chmod -R g+wr $WASHOME/profileTemplates/profile_template_name/documents
```

プロファイルの作成時にファイルがプロファイル・ディレクトリーにコピーされる際、ファイルの所有権は保持されます。プロファイル・ディレクトリーにコピーされたファイルがプロファイル作成プロセスの一環で変更できるように、プロファイル・ディレクトリーに対する書き込み権限を付与しました。プロファイルの作成を開始する前に、既に profileTemplate ディレクトリー構造に存在していたファイルは、プロファイルの作成時には変更されません。

Linux 以下の追加コマンドを発行します。

```
chgrp profilers $WASHOME/properties/Profiles.menu  
chmod g+wr $WASHOME/properties/Profiles.menu
```

Windows 次の例では、変数 \$WASHOME が WebSphere Process Server のルート・インストール・ディレクトリーの C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer であると想定しています。Windows の資料の説明に従って、profilers グループに以下のディレクトリーとそれらのファイルに対する読み取り権限および書き込み権限を付与します。

```
@WASHOME\logs\manageprofiles  
@WASHOME\properties  
@WASHOME\properties\fsdb  
@WASHOME\properties\profileRegistry.xml
```

非 root ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非 root ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

Linux **UNIX** *install_root/properties/profileRegistry.xml_LOCK*

Windows *install_root\properties\profileRegistry.xml_LOCK*

このファイルを削除する権限を非 root ユーザーに付与するには、そのユーザーにこのファイルへの書き込み権限を付与します。それでも非 root ユーザーがこのプロファイルを削除できない場合は、製品インストール・ユーザーがこのプロファイルを削除することができます。

結果

インストール・ユーザーが profilers グループを作成し、特定のディレクトリーとファイルに対する適切な、プロファイル作成のための権限をこのグループに付与しました。非 root ユーザーがプロファイルの作成のために書き込む必要がある、WebSphere Process Server のインストール・ルートに存在するディレクトリーとファイルはこれらだけです。

次の作業

profilers グループに属している非 root ユーザーは、この非 root ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリーにプロファイルを作成することができます。ただし、非 root ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリーにプロファイルを作成することはできません。

root 以外の 1 つのユーザー ID で、複数のプロファイルを管理することができます。同じ root 以外のユーザー ID で、プロファイルがサーバーとノード・エージェントが含まれたプロファイルであるデプロイメント・マネージャー・プロファイルであるか、カスタム・プロファイルであるかに関係なく 1 つのプロファイル全体を管理することができます。グローバル・セキュリティーまたは管理セキュリティーが使用可能か使用不可かに関係なく、セル内のプロファイルごとに異なるユーザー ID を使用することができます。ユーザー ID には、root と root 以外のユーザー ID を混用することができます。例えば、root ユーザーでデプロイメント・マネージャー・プロファイルを管理する一方で、非 root ユーザーでサーバーとノード・エージェントが含まれたプロファイルを管理することができ、またこの逆も可能です。ただし、通常は 1 root ユーザーまたは 1 非 root ユーザーがセル内のすべてのプロファイルを管理することができます。

非 root ユーザーは、root ユーザーがプロファイルを管理するために使用するのと同じタスクを使用できます。

プロファイルの作成または拡張前の共通データベースの手動作成

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、共通データベースを手動で作成する方法について説明します。

このタスクについて

プロファイル管理ツールは、共通データベースとその必須テーブルを自動的に作成および構成します。しかし、組織で、データベースを別々のデータベース管理者によって作成することが必要な場合があります。そのため、ユーザーまたはユーザーのデータベース管理者がプロファイルを作成または拡張する前に WebSphere Process Server 共通データベースを作成することが必要な場合があります。WebSphere Process Server は、データベースの作成に使用できるデフォルト・スクリプトを提供しています。

プロシージャー

1. プロファイル作成スクリプトを含むディレクトリーに移動します。デフォルトの場所はプラットフォームによって異なります。

- **i5/OS** `install_root/dbscripts/CommonDB/db_type`
- **Linux** **UNIX** `install_root/dbscripts/CommonDB/db_type`
- **Windows** `install_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type`

変数 `db_type` はサポートされているデータベース製品を表します。

2. 標準的なデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、および手順を使用して、適切なスクリプトを編集および実行することにより、データベースを作成し

ます。 スクリプトには、データベース、テーブル、および索引を作成するための基本的なステートメントのみが含まれています。

次のタスク

データベースの作成が正常に完了した後、プロファイル管理ツールを開始してプロファイルを作成または拡張します。

プロファイルの作成

新規の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server プロファイルを作成する方法について説明します。プロファイルの作成は、`manageprofiles` コマンドを使用してコマンド行から行うことも、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して対話式に行うこともできます。

始める前に

作成するプロファイルのタイプを選択します。プロファイルについて詳しくは、189 ページの『プロファイル』を参照してください。190 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』のトピックで、プロファイルを作成または拡張するための前提条件のリストを調べます。

このタスクについて

デプロイメント・マネージャー、スタンドアロン・サーバー、またはカスタム・プロファイルの任意の組み合わせを作成できます。プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドを使用するたびに、プロファイルが 1 つ作成されます。

制約事項: 64 ビット・プラットフォーム (i5/OS を除く) または Linux on System z プラットフォーム上では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張することはできません。これらのプラットフォーム上でプロファイルを作成するには、`manageprofiles` コマンドを使用する必要があります。詳しくは、203 ページの『`manageprofiles` コマンドを使用したプロファイルの作成』を参照してください。

プロシージャー

プロファイルの作成を、`manageprofiles` コマンドを使用してコマンド行から行うか、プロファイル管理ツールを使用して対話式に行うかを決定します。高速で行う場合、または類似したプロファイルを作成するためにコマンド行 (またはプロパティ・ファイル) を再利用する場合は、コマンド行を使用します。ウィザードに手順を表示する場合は、プロファイル管理ツールを使用します。

- `manageprofiles` コマンドを使用してプロファイルを作成するには、203 ページの『`manageprofiles` コマンドを使用したプロファイルの作成』のトピックを参照してください。
- プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するには、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』のトピックを参照してください。ここでは、以下の作業を実行します。
 - プロファイル管理ツールを開始します。

- WebSphere Process Server と WebSphere Enterprise Service Bus のいずれのプロファイルを作成するかを選択します。
- 作成するプロファイルのタイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) を選択します。
- 実行するプロファイル作成のタイプを以下から選択します。
 - **標準的** (デフォルト)。デフォルトの構成設定でプロファイルが作成されません。
 - **高度**。プロファイルに独自の構成値を指定できます。
 - **デプロイメント環境** (デプロイメント・マネージャーまたはカスタム・プロファイルのみ)。デプロイメント・マネージャーを作成し、そのデプロイメント環境パターンを選択するか、管理対象ノードに適用するクラスター (複数可) を選択します。プロファイルの独自の構成値を指定します。
- 選択したプロファイル作成のタイプに基づいて、トピック『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』内のリンクにより適切な対話式手順を表示し、必要なプロファイル作成を実行できるようになります。

プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成する方法を学習します。

始める前に

190 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。

このタスクについて

次のステップを実行して、プロファイルを作成します。

プロシージャ

1. WebSphere Process Server プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat`

このツールを開始するための各種の方法について詳しくは、202 ページの『プロファイル管理ツールの開始』のトピックを参照してください。

システム上に既に WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルが存在するかどうかを判断します。次のステップは、プロファイルが存在するかどうかによって異なります。

システムに既存のプロファイルがありますか。	次のステップ
いいえ	「ようこそ」パネルが表示されます。ステップ 3 に進んでください。
はい	「プロファイルの作成または拡張 (Create or augment profile)」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

- 「プロファイルの作成または拡張 (Create or augment profile)」パネルで「作成」をクリックします。

プロファイル管理ツールが別のウィンドウで開き、「ようこそ」パネルが表示されます。

- 「ようこそ」パネルで「次へ」をクリックします。

「環境の選択」パネルが表示されます。

- 「環境の選択」パネルで、「**WebSphere Process Server**」または「**WebSphere Enterprise Service Bus**」を選択し、「次へ」をクリックします。

重要: このパネルで「セル」、「デプロイメント・マネージャー」、「アプリケーション・サーバー」、「カスタム・プロファイル」の項目を選択しないでください。これらの項目は、WebSphere Application Server プロファイル・タイプを表します。このパネルで「**WebSphere Process Server**」または「**WebSphere Enterprise Service Bus**」を選択することにより、作成されるプロファイルがその製品タイプのものになります。作成するプロファイルのタイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) は、後のステップで指定します。

次のステップは、WebSphere Process Server を WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のいずれに上書きインストールしたかによって異なり、以下ようになります (WebSphere Process Server プロファイル管理ツールでは WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを作成できますが、ここに示す手順では WebSphere Process Server がインストールされているとします)。

WebSphere Process Server の基盤となっている WebSphere Application Server 製品	次のステップ
WebSphere Application Server	スタンドアロン・サーバー・プロファイルのみを作成できます。したがって、「プロファイル作成オプション」パネルが表示されます。ステップ 6 (201 ページ) に進んでください。
WebSphere Application Server Network Deployment	「プロファイル・タイプの選択」パネルから、作成するプロファイルのタイプを選択する必要があります。ステップ 5 に進んでください。

- 「プロファイル・タイプの選択」パネルで、作成するプロファイルのタイプを選択し、「次へ」をクリックします。

「プロファイル作成オプション」パネルが表示されます。

6. 「プロファイル作成オプション」パネルで、実行するプロファイル作成のタイプとして「標準」、「拡張」、(デプロイメント・マネージャーまたはカスタム・プロファイルの場合は)「**デプロイメント環境**」のいずれかを選択し、「次へ」をクリックします。「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが作成されます。「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。「**デプロイメント環境**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。さらに、デプロイメント・マネージャーを作成してデプロイメント環境パターンを選択したり、1 つまたは複数のクラスターを選択して管理対象ノードに適用したりすることができます。
7. プロファイル管理ツールの次のパネルに進む前に、以下のいずれかのトピックに記載されている手順を行い、プロファイルを構成して作成を完了してください。

選択したプロファイル作成のタイプ	選択したプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) に基づいてプロファイルの作成を完了するための手順
標準的	<ul style="list-style-type: none"> • 436 ページの『デフォルト値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』 • 439 ページの『デフォルト値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』 • 442 ページの『デフォルト値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』
高度	<ul style="list-style-type: none"> • 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』 • 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』 • 509 ページの『カスタマイズした値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』
デプロイメント環境 重要: 既存のデプロイメント・マネージャーやデプロイメント環境パターンがない場合は、最初のワークステーションでのプロファイル作成時に、520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』の説明に従って作業する必要があります。後続のワークステーションでのプロファイル作成時には、542 ページの『デプロイメント環境用のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』の説明に従ってください。	<ul style="list-style-type: none"> • 520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』 • 542 ページの『デプロイメント環境用のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』

結果

これで、指定したタイプの新規稼働環境 (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) を定義するプロファイルを構成する準備ができました。

プロファイル管理ツールの開始

プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張する方法について説明します。プロファイル管理ツールはいくつかの方法で開始できます。

前提条件

制約事項:

- 64 ビット・プラットフォーム (i5/OS を除く) または Linux on System z プラットフォーム上では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張することはできません。
- **i5/OS** WebSphere Process Server が i5/OS システムにインストールされると、プロファイル管理ツールはスタンドアロン・モードでのみ実行されます。Application Server Toolkit (AST) のツールからこのツールを起動できません。
- **i5/OS** プロファイル管理ツールのパネル上の「参照」ボタンが使用不可になります。

Linux **UNIX** **Windows** プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語によって決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。システムのデフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。次のコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar`
- **Windows** `install_root¥java¥bin¥java -Duser.language=locale install_root¥bin¥ProfileManagement¥startup.jar`

例えば、Linux システム上でドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/ ¥  
bin/ProfileManagement/startup.jar
```

すべてのプラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

プロファイル管理ツールを任意のプラットフォームで開始するには、以下のいずれかの方法を使用します。

- ファースト・ステップ・コンソールから。ファースト・ステップ・コンソールを開始する方法については、140 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』を参照してください。
- インストールの最後に、プロファイル管理ツールを開始するためのチェック・ボックスを選択する。

i5/OS プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

i5/OS プロファイル管理ツール・クライアントを Windows ワークステーションにインストールしている場合は、その Windows ワークステーションからプロファイル管理ツールを開始できます。プロファイル管理ツール・クライアントは Launchpad からインストールできます。

プロファイル管理ツールを開始すると、System i サーバーにサインオンするためのパネルが表示されます。

1. システム名、使用している i5/OS ユーザー・プロファイル、およびパスワードを入力します。
2. 使用するインストール済み環境 (WebSphere Process Server の複数のインストール済み環境が存在する場合) およびポート番号を選択します。
3. 「プロファイル管理ツールの起動」をクリックします。

注: デフォルトのポート番号は 1099 です。これは別のポートに変更できます。そのポート番号が使用中の場合は、エラー・メッセージが表示されます。その場合は、引き続き別のポート番号を選択できます。

Linux および UNIX プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

Linux **UNIX** このツールは、Linux および UNIX プラットフォーム上で、コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行して開始することもできます。

Windows プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

Windows Windows プラットフォームでは、以下の方法でもプロファイル管理ツールを開始できます。

- Windows の「スタート」メニューから。例えば、「スタート」>「プログラム」または「すべてのプログラム」>「IBM WebSphere」>「Process Server 6.1」>「プロファイル管理ツール」を選択します。
- `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。

manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの作成

`manageprofiles` コマンドおよびプロパティ・ファイルを使用してコマンド行からプロファイルを作成する方法について説明します。

始める前に

`manageprofiles` コマンドについて詳しくは、406 ページの『`manageprofiles` コマンド』を参照してください。

`manageprofiles` コマンドを実行する前に、以下のことを確認してください。

- 190 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認している。

- `manageprofiles` コマンドを同じプロファイルでまだ実行していない。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

この作業に必要なセキュリティのロール: 193 ページの『非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与』を参照してください。

注: i5/OS **i5/OS プラットフォーム:** `user_data_root/profiles` ディレクトリーで、読み取り、書き込み、およびコマンドを実行するためのオペレーティング・システムの許可が必要です。

プロシージャー

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。以下のテンプレートを使用できます。
 - `default.wbiserver`: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
 - `dmgr.wbiserver`: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用。デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のマシン上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
 - `managed.wbiserver`: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーと統合すると、管理対象ノードを定義します。デプロイメント環境を必要とするソリューションを使用する場合は、ランタイム環境に 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、作動可能にするためにデプロイメント・マネージャー・セル内に統合する必要のある空のノードが含まれています。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。また、WebSphere Process Server プロファイルの場合は WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルでは、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
 - `default.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
 - `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
 - `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーと統合すると、管理対象ノードを定義します。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー使用できます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates` ディレクトリー内にあります。

2. 選択したプロファイルのタイプに必要なパラメーターを決定します。パラメーターについて詳しくは、408 ページの『`manageprofiles` コマンド・パラメーター』を参照してください。
3. プロファイルに指定する値を決定し、テンプレートのデフォルト値を確認して、プロファイルに適した値かどうかを調べます。
4. コマンド行からファイルを実行します。以下に例を示します。

- **i5/OS** `manageprofiles -create -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver`
- **Linux** **UNIX** `manageprofiles.sh -create -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver`
- **Windows** **Windows プラットフォーム:** `manageprofiles.bat -create -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver`

応答ファイルを作成した場合は、**-response** パラメーターを使用して `-response myResponseFile` と指定します。

以下に、`create` 命令に対する応答ファイルの例を示します。

```
create
profileName=testResponseFileCreate
profilePath=profile_root
templatePath=install_root/profileTemplates/default.wbiserver
nodeName=myNodeName
cellName=myCellName
hostName=myHostName
omitAction=myOptionalAction1, myOptionalAction2
```

コマンドが、実行中に状況を表示します。完了するまで待ってください。プロパティー・ファイルに通常の構文検査が適用され、ファイルが他の Java プロパティー・ファイルと同様に構文解析されます。プロパティー・ファイルにある個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

次のタスク

以下のいずれかのステップを実行することにより、プロファイルの作成が完了したことを確認できます。

- `install_root/logs/manageprofiles` ディレクトリーにある `profile_name_create.log` ファイルを確認する。

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** `profile_name_create.log` は、`userdata_root/profileRegistry/logs/manageprofiles` ディレクトリー内にあります。

- インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に作成されたことを確認する。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 インフォメーション・センターの『`Command-line utilities`』セクションにある『`ivt command`』を参照してください。

既存のプロファイルの拡張

既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のプロファイルを WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server のプロファイルに拡張するか、または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルを WebSphere Process Server のプロファイルに拡張する方法について説明します。プロファイルは、`manageprofiles` コマンドを使用してコマンド行から拡張することも、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して対話的に拡張することもできます。

始める前に

拡張対象のプロファイルが以下のようにになっていることを確認してください。

- WebSphere Process Server のインストール済み環境を持つシステム上に存在していること。
- デプロイメント・マネージャーに統合されていないこと。プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドを使用して、統合済みのプロファイルを拡張することはできません。215 ページの『統合されたプロファイルの手動での拡張』の指示に従って、手動でそのプロファイルを拡張する必要があります。
- 稼働中のサーバーがないこと。

このタスクについて

ご使用のシステムに WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のプロファイルが既に存在している場合は、それらのプロファイルで定義されている稼働環境で WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server の機能を使用できるようになります。同様に、WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルが既に存在している場合は、それらで WebSphere Process Server の機能を使用できるようになります。

制約事項:

- 「**デプロイメント環境**」プロファイル拡張オプションを選択している場合は、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを拡張することはできません。
- 64 ビット・プラットフォーム (i5/OS を除く) または Linux on System z プラットフォーム上では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張することはできません。これらのプラットフォーム上でプロファイルを拡張するには、`manageprofiles` コマンドを使用する必要があります。詳しくは、212 ページの『`manageprofiles` コマンドを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。

以下でタスクの概要を確認して、プロファイルの拡張についての理解を深めてください。

プロシージャー

1. 190 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』のトピックで、プロファイルを作成または拡張するための前提条件のリストを調べます。
2. プロファイルを `manageprofiles` コマンドを使用してコマンド行から拡張するか、プロファイル管理ツールを使用して対話的に拡張するかを決定します。

- manageprofiles コマンドを使用して拡張するには、212 ページの『manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの拡張』のトピックを参照してください。
- プロファイル管理ツールを使用して拡張するには、トピック『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』を参照して、以下のことを行います。
 - プロファイル管理ツールを開始します。
 - 拡張するプロファイルを選択します。
 - プロファイルの拡張を WebSphere Enterprise Service Bus の機能と WebSphere Process Server の機能のいずれを追加して行うかを選択します。
 - 実行する以下のプロファイル拡張のタイプを選択します。
 - **標準的** (デフォルト)。デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。
 - **高度**。プロファイルに独自の構成値を指定できます。
 - **デプロイメント環境** (カスタム・プロファイルに対してのみ)。管理対象ノードに適用する 1 つまたは複数のクラスターを選択できます。プロファイルの独自の構成値を指定します。
 - 選択したプロファイル拡張のタイプに基づいて、トピック『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』内のリンクによって適切な対話式手順が表示され、必要なプロファイルの拡張を実行できるようになります。

プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイル WebSphere Process Server プロファイルに拡張する方法について説明します。

始める前に

以下のことを確認してください。

- 拡張後のプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) が、拡張前のタイプと同じである。
- 190 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンします。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーにすでに統合されているかどうかを次の手順で判別します。
 - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、プロファイル管理ツールを使用して WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張することはできません。215 ページの『統合されたプロファイルの手動での拡張』で説明している手順に従って、手動で拡張する必要があります。

- 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されていない場合は、後から **addNode** コマンドを介してそのノードを統合するとき、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
 - 実行されていないければなりません。
 - 使用可能な JMX 管理ポートが必要です。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
 - インストールした製品に応じて、事前に WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルに拡張しておかなければなりません。

このタスクについて

次のステップを実行してプロファイルを拡張します。

プロシージャ

1. WebSphere Process Server プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh。`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat。`

このツールを開始するための各種の方法については、202 ページの『プロファイル管理ツールの開始』のトピックを参照してください。

次のステップは、システム上に既に WebSphere Application Server、 WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルが存在するかどうかによって異なります。

システムに既にプロファイルが存在しますか?	次のステップ
いいえ	「ようこそ」パネルが表示されます。この場合は、この手順を実行しないでください。199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』に記載された手順に従ってください。
はい	「プロファイルの作成または拡張 (Create or augment profile)」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「プロファイルの作成または拡張 (Create or augment profile)」パネルで「**拡張**」を選択します。

この手順では、以下のいずれかを行うと想定しています。

- 既存の WebSphere Application Server プロファイルまたは WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張する。

- 既存の WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張する。

プロファイル管理ツールが別のウィンドウで開き、「ようこそ」パネルが表示されます。

3. 「ようこそ」パネルで「次へ」を選択します。

「プロファイルの選択」パネルが表示されます。

4. 「プロファイルの選択」パネルで、拡張するプロファイルをドロップダウン・リストで強調表示させ、「次へ」を選択します。

すべてのプロファイルが選択項目として表示されます。WebSphere Application Server プロファイルまたは WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの拡張を選択した場合は、WebSphere Process Server がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンから行う必要があります。「拡張の選択」パネルが表示されます。

注: 統合されているプロファイルを選択すると、エラー・メッセージが表示されます。拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、プロファイル管理ツールを使用して WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張することはできません。215 ページの『統合されたプロファイルの手動での拡張』で説明している手順に従って、手動で拡張する必要があります。

5. 「拡張の選択」パネルで、該当する製品を強調表示させることでプロファイルを WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server プロファイルのいずれに拡張するかを選択し、「次へ」を選択します。

拡張を選択したプロファイルが以下に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告を表示します。

- 実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「戻る」を選択して、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 統合されている。統合されたプロファイルは拡張できません。事前にプロファイルの統合を解除しておくか、「戻る」を選択して未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
- 選択した製品で既に拡張されている。「戻る」を選択して、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
- 選択した製品では拡張できない。例えば、WebSphere Process Server プロファイルを WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張することはできません。互換性のある製品のプロファイルを拡張するか、「戻る」を選択して、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。

「プロファイル拡張オプション」パネルが表示されます。

6. 「プロファイル拡張オプション」パネルで、実行するプロファイル拡張のタイプとして「標準」、「拡張」、(カスタム・プロファイルの場合は)「デプロイメント環境」のいずれかを選択し、「次へ」をクリックします。「標準的」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。「高度」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。「デプロイメント環

境」オプションでは、カスタム・プロファイルに独自の構成値を指定し、1 つまたは複数のクラスターを選択して管理対象ノードに適用することができます。

7. プロファイル管理ツールの次のパネルに進む前に、以下のいずれかのトピックに記載されている手順を行って、プロファイルの拡張を構成および完了してください。

選択したプロファイル拡張のタイプ	選択したプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) に基づいてプロファイルの拡張を完了するための手順
標準的	<ul style="list-style-type: none"> • 436 ページの『デフォルト値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』 • 439 ページの『デフォルト値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』 • 442 ページの『デフォルト値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』
高度	<ul style="list-style-type: none"> • 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』 • 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』 • 509 ページの『カスタマイズした値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』
デプロイメント環境	<ul style="list-style-type: none"> • 542 ページの『デプロイメント環境用のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』

結果

これで、指定したタイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) で拡張された稼働環境を定義するプロファイルの構成準備ができました。

プロファイル管理ツールの開始

プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張する方法について説明します。プロファイル管理ツールはいくつかの方法で開始できます。

前提条件

制約事項:

- 64 ビット・プラットフォーム (i5/OS を除く) または Linux on System z プラットフォーム上では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張することはできません。

- **i5/OS** WebSphere Process Server が i5/OS システムにインストールされると、プロファイル管理ツールはスタンドアロン・モードでのみ実行されます。Application Server Toolkit (AST) のツールからこのツールを起動できません。
- **i5/OS** プロファイル管理ツールのパネル上の「参照」ボタンが使用不可になります。

Linux **UNIX** **Windows** プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語によって決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。システムのデフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。次のコマンドを使用します。

- **Linux** **UNIX** `install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar`

- **Windows** `install_root%java%bin%java -Duser.language=locale install_root%bin%ProfileManagement%startup.jar`

例えば、Linux システム上でドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/ %
bin/ProfileManagement/startup.jar
```

すべてのプラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

プロファイル管理ツールを任意のプラットフォームで開始するには、以下のいずれかの方法を使用します。

- ファースト・ステップ・コンソールから。ファースト・ステップ・コンソールを開始する方法については、140 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』を参照してください。
- インストールの最後に、プロファイル管理ツールを開始するためのチェック・ボックスを選択する。

i5/OS プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

i5/OS プロファイル管理ツール・クライアントを Windows ワークステーションにインストールしている場合は、その Windows ワークステーションからプロファイル管理ツールを開始できます。プロファイル管理ツール・クライアントは Launchpad からインストールできます。

プロファイル管理ツールを開始すると、System i サーバーにサインオンするためのパネルが表示されます。

1. システム名、使用している i5/OS ユーザー・プロファイル、およびパスワードを入力します。
2. 使用するインストール済み環境 (WebSphere Process Server の複数のインストール済み環境が存在する場合) およびポート番号を選択します。
3. 「プロファイル管理ツールの起動」をクリックします。

注: デフォルトのポート番号は 1099 です。これは別のポートに変更できます。そのポート番号が使用中の場合は、エラー・メッセージが表示されます。その場合は、引き続き別のポート番号を選択できます。

Linux および UNIX プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

Linux **UNIX** このツールは、Linux および UNIX プラットフォーム上で、コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行して開始することもできます。

Windows プラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

Windows Windows プラットフォームでは、以下の方法でもプロファイル管理ツールを開始できます。

- Windows の「スタート」メニューから。例えば、「スタート」>「プログラム」または「すべてのプログラム」>「IBM WebSphere」>「Process Server 6.1」>「プロファイル管理ツール」を選択します。
- `install_root%bin%ProfileManagement%pmt.bat` コマンドを実行します。

manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの拡張

拡張は、拡張テンプレートで既存のプロファイルを変更する機能です。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のプロファイルを、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server のプロファイルに拡張できます。あるいは、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張することもできます。プロファイルは、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを使用して拡張することができます。

始める前に

この手順を実行する前に、以下の作業が完了していることを確認してください。

- 190 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーにすでに統合されているかどうかを次の手順で判別します。
 - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを `manageprofiles` コマンドを使用して拡張することはできません。『統合されたプロファイルの手動での拡張』で説明している手順に従って、手動で拡張する必要があります。
 - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されていない場合は、後から `addNode` コマンドを介してそのノードを統合するとき、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
 - 実行されていなければなりません。

- 拡張するプロファイルのリリースと同レベルか、それよりも上位レベルでなければなりません。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー使用できます。
- 使用可能な JMX 管理ポートが必要です。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- インストールした製品に応じて、事前に WebSphere Process Server プロファイルに拡張しておかなければなりません。

重要: 同時に複数のプロファイルの作成または拡張を実行することはできません。エラー・メッセージが表示された場合、別プロファイルの作成または拡張が進行中かどうか確認します。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクについて

この作業に必要なセキュリティのロール: 193 ページの『非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与』を参照してください。

manageprofiles コマンドを使用してプロファイルを拡張するには、以下のステップを実行します。

プロシージャ

1. 既存のプロファイルの作成に使用された WebSphere Application Server テンプレート (deployment manager、stand-alone または managed) を判別します。プロファイルの作成に使用したテンプレートは、*install_root/properties/profileRegistry.xml* のプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。
2. 拡張先のテンプレートを探します。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを、WebSphere Process Server または WebSphere ESB プロファイルに拡張できます。既存の WebSphere ESB プロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張できます。使用可能なプロファイル・テンプレートは次のとおりです。
 - default.wbiserver: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
 - dmgr.wbiserver: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用。デプロイメント・マネージャーを定義します。デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のマシン上にあるサーバーの論理グループに、1 つの管理インターフェースを提供します。
 - managed.wbiserver: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーと統合すると、管理対象ノードを定義します。デプロイメント環境を必要とするソリューションを使用する場合は、ランタイム環境に 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには、作動可能にするためにデプロイメント・マネージャー・セル内に

統合する必要のある空のノードが含まれています。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。

- **default.esbserver:** WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- **dmgr.esbserver:** WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- **managed.esbserver:** WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーと統合すると、管理対象ノードを定義します。

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンドは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: *install_dir/profileTemplates* ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

3. コマンド行からファイルを実行します。**-profilePath** パラメーターは使用しないでください。以下に例を示します。

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォーム:** `manageprofiles -augment -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver -profileName MyProfileName`
- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォーム:**
`manageprofiles.sh -augment -templatePath install_root/profileTemplates/default.wbiserver -profileName MyProfileName`
- **Windows** **Windows プラットフォーム:** `manageprofiles.bat -augment -templatePath install_root%profileTemplates%default.wbiserver -profileName MyProfileName`

注: Java プロパティー・ファイルを作成した場合は、**-response** パラメーターを使用してください。

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。完了するまで待ってください。ファイルが他の Java プロパティー・ファイルのように構文解析されるとき、プロパティー・ファイルについての通常の構文検査が適用されます。プロパティー・ファイルにある個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

以下の例は、Java プロパティー・ファイルを示しています。

```
augment
profileName=testResponseFileAugment
templatePath=install_root/profileTemplates/default.wbiserver

nodeName=myNodeName
```

```
cellName=myCellName
hostName=myHostName
omitAction=myOptionalAction1, myOptionalAction2
```

プロファイルの拡張が正常に終了したことは、「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの拡張は正常に終了しました。」というメッセージまたは次のログ・ファイルで確認できます。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム:
`install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`
- **Windows** **Windows** プラットフォーム:
`install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_augment.log`
- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム: `user_data_root/profileRegistry/logs/`
`manageprofiles/profile_name_augment.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に変更されたことを確認します。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 インフォメーション・センターの『Command-line utilities』セクションにある『ivt command』を参照してください。

統合されたプロファイルの手動での拡張

統合されたプロファイルは手動で管理する必要があります。

このタスクについて

統合されたプロファイルを手動で拡張するには、以下のステップを実行します。

プロシージャ

1. `removeNode.sh` コマンド (Linux および UNIX プラットフォームの場合)、`removeNode.bat` コマンド (Windows プラットフォームの場合)、または `removeNode` コマンド (i5/OS プラットフォームの場合) を使用して、デプロイメント・マネージャーからノードを削除します。

重要: `removeNode` コマンドを使用すると、構成は `addNode` コマンドを使用する前の状態に復元されます。ただし、データは失われる可能性があります。

WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『`removeNode` command』の資料を参照してください。

2. プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルを WebSphere Process Server プロファイルに拡張します。

プロファイルの拡張方法については、207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。

3. 元のプロファイルが統合されているデプロイメント・マネージャーが、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルに拡張されていることを確認します。

詳しくは、207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。

4. addNode.sh コマンド (Linux および UNIX プラットフォームの場合)、addNode.bat コマンド (Windows プラットフォームの場合)、または addNode コマンド (i5/OS プラットフォームの場合) を使用して、拡張されたノードをデプロイメント・マネージャーに再統合します。

WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『addNode command』の資料を参照してください。

manageprofiles コマンドを使用したプロファイルの削除

manageprofiles コマンドを使用することによって、コマンド行からプロファイルを削除できます。

このタスクについて

manageprofiles コマンドについて詳しくは、406 ページの『manageprofiles コマンド』を参照してください。

この作業に必要なセキュリティのロール: 193 ページの『非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の、プロファイル作成のための付与』を参照してください。

注: **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム: `user_data_root/profiles` ディレクトリーで、読み取り、書き込み、およびコマンドを実行するためのオペレーティング・システムの許可が必要です。

manageprofiles コマンドを使用してプロファイルを削除するには、以下のステップを実行します。

プロシージャー

1. コマンド・プロンプトを開き、使用するオペレーティング・システムに基づいて以下のいずれかのコマンドを実行します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム: `manageprofiles -delete -profileName profile_name`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム: `manageprofiles.sh -delete -profileName profile_name`

- **Windows** **Windows** プラットフォーム: `manageprofiles.bat -delete -profileName profile_name`

変数 `profile_name` は削除するプロファイルの名前を示します。

2. 以下のログ・ファイルを調べて、プロファイルの削除が完了したことを確認します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム: `user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log`

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム: `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log`

- **Windows** Windows プラットフォーム:
`install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_delete.log`

プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成

プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせます。」チェック・ボックスを選択して、共通データベースとテーブルの作成を延期した場合は、インストール実行者またはデータベース管理者がデータベースとテーブルを手動で作成する必要があります。これらは、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用すると作成できます。

始める前に

このトピックは、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを、次のいずれかのトピックの手順に従って作成または拡張済みであることを前提としています。

- 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』

また、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「新規ローカル・データベースの作成」ラジオ・ボタンを選択し、さらに「新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせます。」チェック・ボックスを選択して、共通データベースの作成を延期してあることも前提条件です。

このタスクについて

WebSphere Process Server のインストール済み環境では、共通データベースが機能することが不可欠であるため、プロファイル管理ツールによる共通データベースの自動作成を許可しなかった場合は、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用して、インストール実行者またはデータベース管理者が、この段階でデータベースとテーブルを手動で作成する必要があります。

プロシージャ

1. i5/OS プラットフォームの場合は `configCommonDB` スクリプト、Linux および UNIX プラットフォームの場合は `configCommonDB.sh` スクリプト、Windows プラットフォームの場合は `configCommonDB.bat` スクリプトが含まれるディレクトリに移動します。これは、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルの「データベース・スクリプト出力ディレクトリ」フィールドで指定したロケーションです。デフォルトのロケーションは以下のとおりです。

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:

`profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`

- **Windows** Windows プラットフォームの場合:

`profile_root%dbscripts%CommonDB%db_type%db_name`

変数 `db_type` はサポートされるデータベース製品、`db_name` はデータベースの名前です。

2. このスクリプトを実行してデータベースおよび必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシージャーを使用します。このスクリプトには、データベース、テーブル、および索引を作成するための基本的なステートメントのみが含まれています。

次のタスク

データベースの作成が正しく完了したら、そのデータベースのインストール先がローカルかどうかにかかわらず、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動する前に、データベースが稼働していることを必ず確認してください。次に、プロファイルのファースト・ステップ・コンソールからサーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動し、エラーがないことを確認してください。

プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成

プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせます。」チェック・ボックスを選択して、既存の共通データベースに必要なテーブルの作成を延期した場合は、インストール実行者またはデータベース管理者がテーブルを手動で作成する必要があります。これらは、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用すると作成できます。

始める前に

このトピックは、スタンドアロン・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを、次のいずれかのトピックの手順に従って作成または拡張済みであることを前提としています。

- 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』

また、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルで「既存のデータベースの使用」ラジオ・ボタンを選択し、さらに「新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせます。」チェック・ボックスを選択して、データベース・テーブルの作成を延期してあることも前提条件です。

このタスクについて

WebSphere Process Server のインストール済み環境では、共通データベースとテーブルが機能することが不可欠であるため、プロファイル管理ツールによるテーブルの自動作成を許可しなかった場合は、プロファイルの作成時または拡張時にプロファイル管理ツールによって生成されるスクリプトを使用して、インストール実行者またはデータベース管理者が、この段階でテーブルを手動で作成する必要があります。

プロシージャー

1. テーブル作成スクリプトが含まれるディレクトリーに移動します。i5/OS プラットフォームの場合は createDBTables、Linux および UNIX プラットフォームの場合は createDBTables.sh、Windows プラットフォームの場合は createDBTables.bat というスクリプトです。これは、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルの「データベース・スクリプト出力ディレクトリー」フィールドで指定したロケーションです。デフォルトのロケーションは以下のとおりです。

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `profile_root/dbscripts/CommonDB/db_type/db_name`

- **Windows** Windows プラットフォームの場合: `profile_root%dbscripts%CommonDB%db_type%db_name`

変数 `db_type` はサポートされるデータベース製品、`db_name` はデータベースの名前です。

2. このスクリプトを実行して必要なテーブルを作成するには、標準のデータベース定義ツール、ネイティブ・コマンド、およびプロシージャーを使用します。このスクリプトには、データベース、テーブル、および索引を作成するための基本的なステートメントのみが含まれています。

次のタスク

テーブルの作成が正しく完了したら、データベースのインストール先がローカルかどうかにかかわらず、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動する前に、データベースが稼働していることを必ず確認してください。次に、プロファイルのファースト・ステップ・コンソールからサーバーまたはデプロイメント・マネージャーを始動し、エラーがないことを確認してください。

i5/OS でのリモート・データベース・サポートの構成

WebSphere Process Server では、DB2 Universal Database™ for iSeries™ (DB2® UDB for iSeries) を i5/OS に常駐するリモート・データベースとして使用するよう構成できます。DB2 UDB for iSeries が製品リポジトリーのリモート・データベースとして使用される場合、WebSphere Process Server は i5/OS または z/OS だけでなくマルチプラットフォームで実行することが可能です。

このタスクについて

DB2 UDB for iSeries の構成は、スタンドアロン・プロファイルおよびデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張ごとに固有となります。データベース構成は、カスタム・プロファイルの作成または拡張時にプロファイル管理ツール (PMT) を使用して実行されますが、このようなプロファイルでは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルに既に構成されているデータベース製品と同じものを使用する必要があります。

PMT の最終的な目的は、一連の PMT パネルでユーザーが指定する引数を指定して `manageprofiles` スクリプトを実行することです。PMT を使用する代わりに、パイパスし、`manageprofiles Qshell` コマンド行スクリプトを使用してプロファイルを作成または拡張することができます。この際、Java プロパティ・ファイル形式の応答ファイルを使用する場合と使用しない場合があります。PMT はグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を備えているため、非常に使いやすくなっています。

プロファイルの拡張中に、拡張プロセスを完了するために、データベースとその表の作成またはそれらへのアクセスが必要です。拡張プロセスでは、多くのコンポーネントがデータベース接続を必要とします。オプションで、最初にデータベース定義スクリプトのみを生成し、後で管理者にそれを実行して DB2 コレクションおよび表を作成してもらうように選択することもできます。

プロファイルの作成および拡張処理中にリモート DB2 UDB for iSeries で構成できるコンポーネントは以下のとおりです。

- 失敗イベント管理
- Common Event Infrastructure
- リレーションシップ
- リカバリー
- ビジネス・ルール
- セレクター
- ロック・マネージャー
- Application Scheduler
- サービス統合 (SI) バス (メッセージング・エンジン)
- エンタープライズ・サービス・バス (ESB) のメッセージ・ロガー

次のタスク

これで、リモート・データベースに接続するためのスタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成することができます。

i5/OS データベースおよびコレクション

分散プラットフォームとは異なり、i5/OS システム (または論理区画) にはシステム共通の DB2[®] データベースが 1 つのみ存在します。DB2 Universal Database[™] for iSeries[™] (DB2[®] UDB for iSeries) は i5/OS オペレーティング・システムに統合されており、インストールの必要な別個の製品ではありません。

DB2 UDB for iSeries は、i5/OS オペレーティング・システムと完全に統合されたリレーショナル・データベースであり、統合されることによって使用と管理が容易になっています。

また、DB2 UDB for iSeries にはトリガー、ストアド・プロシージャー、および動的ビットマップ索引付けなどの豊富な機能があり、さまざまなアプリケーション・タイプに対応します。こうしたアプリケーションの範囲は、クライアント/サーバー・ソリューションに対応する従来のホスト・ベース・アプリケーションからビジネス・インテリジェンス・アプリケーションにまで及びます。

データベース階層は次のようになります。

(単一データベース) > スキーマ名 > テーブル名

このデータベースへのアクセスには以下の 2 つの JDBC ドライバーを使用できます。

- ネイティブ JDBC ドライバー: タイプ 2。DB2 UDB for iSeries が WebSphere Application Server ベースのサーバーに対してローカルである場合に使用します。このドライバーは WebSphere Process Server に対してローカルであり、リモート i5/OS マシン上のデータベースにアクセスするためには使用できません。
- ツールボックス JDBC ドライバー: タイプ 4。通常、アクセスされるデータベースが、WebSphere Process Server をホスティングするマシンに対してリモートである場合に使用します。ツールボックス・ドライバーは、データベースがサーバーに対してローカルである場合に使用できますが、ローカル・データベースへのアクセスにはネイティブ・ドライバーが最適であるため、ネイティブ・ドライバーをお勧めします。

ツールボックス JDBC ドライバー・ファイルは、i5/OS 上の単一の固定の場所に格納されます。i5/OS マシンでは、Toolbox for Java JDBC ドライバー・ファイル jt400.jar は、ファイル・システム内の以下の固定の場所に格納されています。

/QIBM/ProdData/Http/Public/jt400/lib/jt400.jar

WebSphere Process Server が分散プラットフォームで実行されているが、i5/OS マシン上の共通データベースにアクセスしている異機種混合環境で最適な JDBC ドライバーは、Toolbox for Java JDBC ドライバーです。ツールボックス JDBC ドライバーのドライバー・ファイルは jt400.jar であり、WebSphere Process Server をホスティングするマシン上で使用できる必要があります。ドライバーは、分散マシン上で、以下の 2 つの方法のいずれかで取得できます。

- i5/OS データベース・マシンから分散マシン上のディレクトリーにドライバーをコピーする。
- jtopen Web サイトから分散マシン上のディレクトリーにドライバーをダウンロードする。jtopen Web サイトの URL は <https://sourceforge.net/projects/jt400> です。

リモート・データベースに接続するためのスタンドアロン・プロファイルの作成

プロファイル管理ツールでは、リモート i5/OS サーバー上の DB2 Universal Database™ for iSeries™ (DB2® UDB for iSeries) を使用して構成された 1 つ以上の WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成を作成または拡張できます。DB2 UDB for iSeries データベースをホスティングするリモート i5/OS サーバー上には、WebSphere Process Server 製品はインストールされていません。

プロシージャー

1. プロファイル管理ツールの「ようこそ」パネルで、「次へ」を選択します。

注: WebSphere Process Server プロファイルに拡張できる WebSphere Application Server プロファイルが見つかった場合、「既存プロファイルの検出」パネルが表示されます。既存のプロファイルは拡張しないでください。代わりに新規プロファイルを作成することを選択します。

2. 「環境の選択」パネルで、「**WebSphere Process Server タイプの環境 (WebSphere Process Server type environment)**」を作成するオプションを選択します。「次へ」を選択します。
3. 「プロファイル・タイプの選択」パネルで、「**スタンドアロン・サーバーのプロファイル (Stand-alone server profile)**」を作成するオプションを選択します。「次へ」を選択します。
4. 「プロファイル作成オプション」パネルで、デフォルト設定を使用した標準的なプロファイルを作成するか、または高度なプロファイルを作成するかを指定できます。「**高度なプロファイル作成**」を選択します。「次へ」を選択します。
5. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルで、管理コンソールのデプロイメント用のチェック・ボックスが選択されていることを確認し、デフォルト・アプリケーションおよびサンプル・アプリケーションのデプロイメント用のデフォルトを受け入れます。「次へ」を選択します。
6. 「名前とロケーション」パネルで、このプロファイルの固有の名前および固有のロケーションを入力する必要があります。最初にデフォルトの名前およびロケーションが表示されます。デフォルト・ディレクトリーは `$user_data_root/profiles/profile_name` の下に表示されます。他のプロファイルが存在する場合は、この新規プロファイルをデフォルト・プロファイルにするというオプションも表示されます。また、デプロイメント・テンプレートを使用してサーバーを作成することも選択できます。「次へ」を選択します。
7. 「ノード名およびホスト名」パネルでは、固有のノード名が必須で、デフォルトのノード名が提供されます。「次へ」を選択します。

注: ノード名は、固有である限り、必要に応じてデフォルト・ノード名から変更できます。

8. 「管理セキュリティー」パネルで、チェック・ボックスを選択解除するか、ユーザー ID およびパスワード情報を入力します。「次へ」を選択します。
9. 「ポート値割り当て」パネルで、デフォルトのポート値が提供されます。必要であれば、別のポート値を指定できます。「次へ」を選択します。
10. この WebSphere Process Server プロファイル作成が Windows (または Linux) 上で行われている場合、Windows (または Linux) サービス定義パネルが表示され、オプションでこのプロファイルを Windows (または Linux) サービスとして実行するようにセットアップできます。「次へ」を選択します。
11. オプション: 「Web サーバー定義」パネルで、Web サーバー定義を作成するオプションを選択します。「次へ」を選択します。
12. 「Common Event Infrastructure」パネルで、新規データベースの作成を選択できます。「**データ・ソースのオーバーライド (Override the data source)**」を選択する必要があります。Common Event Infrastructure データベース・スクリプト

が、提供されている出力ディレクトリーに生成されます。データベース製品のプルダウン・リストから「**DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)**」メニュー項目を選択します。このアクションにより、*SYSBAS がデフォルトのデータベース名として挿入されます。

注: WebSphere Process Server をホスティングするサーバーおよびリモート・データベースをホスティングするサーバーがどちらも i5/OS プラットフォームである場合、データベース・スクリプトの実行の遅延を選択していなければ、リモート・データベースのコレクションが自動的に作成されます。これは、i5/OS の場合にのみ該当します。

13. 「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルで、リモート i5/OS DB2 データベースに対して認証を行うための有効なユーザー名とパスワードを入力します。
 - a. ツールボックス JDBC ドライバーのクラスパス・ファイル (jt400.jar) のロケーション (ディレクトリー) を入力します。
 - プロファイルを i5/OS 上に作成している場合、このディレクトリーは /QIBM/ProdData/Http/Public/jt400/lib です。
 - プロファイルを i5/OS 上に作成していない場合、この jar ファイルを含むローカル・ディレクトリーを入力します。
 - b. リモート DB2 UDB for iSeries データベースが存在する i5/OS サーバーのホスト名を入力します。
 - c. SQL コレクション名 EVENT (デフォルト) を入力します。これは、リモート i5/OS システム上で一意的に命名されたコレクション名である必要があります。「次へ」を選択します。
14. 「Business Process Choreographer の構成」パネルで、サンプルの Business Process Choreographer を構成しないことを選択します。(このパネルで Business Process Choreographer を構成すると、DB2 UDB for iSeries データベースではなく Derby が構成されます。)「次へ」を選択します。
15. 「データベース構成」パネルで、新規データベースの作成を選択します。
 - a. 生成されたデータベース・スクリプトの保管場所を指定します。
 - b. 「データベース・スクリプトを実行する (Execute database scripts)」の隣のチェック・ボックスを選択解除します。
 - c. 「データベース製品の選択」の下の「**DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)**」メニュー項目を選択します。これにより、「データベース名」フィールドに *SYSBAS が表示されます。
 - d. 「**SCA メッセージング・エンジンでこのデータベースを使用する (Use this database for SCA messaging engines)**」を選択します。「次へ」を選択します。
16. 「データベース構成 (第 2 部)」パネルで、リモート i5/OS DB2 データベースに対して認証を行うための有効なユーザー名とパスワードを入力します。
 - a. ツールボックス JDBC ドライバーのクラスパス・ファイル (jt400.jar) のロケーション (ディレクトリー) を入力します。
 - プロファイルを i5/OS 上に作成している場合、このディレクトリーは /QIBM/ProdData/Http/Public/jt400/lib です。

注: WebSphere Process Server をホスティングするサーバーおよびリモート・データベースをホスティングするサーバーがどちらも i5/OS プラットフォームである場合、スクリプトを自動的に実行して共通データベースを作成できます。

- プロファイルを i5/OS 上に作成していない場合、この jar ファイルを含むローカル・ディレクトリを入力します。
 - b. リモート DB2 UDB for iSeries データベースが存在する i5/OS サーバーのホスト名を入力します。
 - c. スキーマ名、WPRCSDB (デフォルト) を入力します。スキーマ名の最初の 3 文字は、リモート i5/OS サーバー上でホスティングされているデータベースに対して固有である必要があります。「次へ」を選択します。
17. 「プロファイルの要約」パネルが表示されます。「次へ」を選択します。
 18. プロファイル作成が完了し、ファースト・ステップの起動オプションが選択解除されます。「終了」を選択します。
 19. i5/OS システム (リモート) 上で、CEI と commonDB の両方の DDL をエクスポートします。生成されたデータベース・スクリプトを含む指定されたロケーション (前述の「CEI/データベース構成」パネルを参照) から CEI および commonDB の DDL を取得します。さまざまな方法によって、スクリプトを管理者に提供できます。
 20. 管理者は、リモート i5/OS で EVENT および WPRCSDB 用のリモート DB2 データベース・テーブルをセットアップするためのスクリプトを実行する必要があります。
 21. 管理コンソールを使用して、i5/OS 上でリモート DB2 を使用するように構成された Business Process Choreographer を構成します。
 - a. Qshell を開始します。
 - b. 生成済みスクリプトがコピーされるデータベース・サーバー上のディレクトリの場所に移動します。
 - c. コマンド db2 -tvf を実行します。必要に応じて、スクリプトごとに繰り返します。
 22. Business Process Choreographer 要約ステップにより、Business Process Choreographer データベース・コレクションおよびテーブルをセットアップするための DDL スクリプトのロケーションが提供されます。管理者は DDL スクリプトを実行して、i5/OS 上で Business Process Choreographer データベースを作成します。

以下の作業が完了しました。

- WebSphere Process Server プロファイルを作成しました。
- WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6 プロファイルを作成し、WebSphere Process Server プロファイルに拡張しました。

CEI (EVENT)、Business Process Choreographer、CommonDB、Service Integration Bus、および WebSphere Enterprise Service Bus Message Logger では、リモート i5/OS システム上に DB2 UDB for iSeries のテーブルおよびコレクションが生成されます。

リモート・データベースに接続するための Network Deployment プロファイルの作成

プロファイル管理ツールでは、リモート i5/OS サーバー上の DB2 Universal Database™ for iSeries™ (DB2® UDB for iSeries) を指定して構成された WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。同様に、プロファイル管理ツールでは、WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャー・プロファイルを、リモート・データベース接続用に構成された WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルに拡張できます。DB2 UDB for iSeries データベースをホスティングするリモート i5/OS サーバー上には、WebSphere Process Server 製品はインストールされていません。

このタスクについて

プロファイル管理ツールを使用して以下の手順を実行し、リモート・サーバー上で DB2 UDB for iSeries をサポートする新しいデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成します。

プロシージャ

1. プロファイル管理ツールの「ようこそ」パネルで、「次へ」を選択します。

注: WebSphere Process Server プロファイルに拡張できる WebSphere Application Server プロファイルが見つかった場合、「既存プロファイルの検出」パネルが表示されます。既存のプロファイルは拡張しないでください。代わりに新規プロファイルを作成することを選択します。

2. 「環境の選択」パネルで、「**WebSphere Process Server タイプの環境 (WebSphere Process Server type environment)**」を作成するオプションを選択します。「次へ」を選択します。
3. 「プロファイル・タイプの選択」パネルで、「**デプロイメント・マネージャー・プロファイル**」を作成するオプションを選択します。「次へ」を選択します。
4. 「プロファイル作成オプション」パネルで、デフォルト設定を使用した標準的なプロファイルを作成するか、または高度なプロファイルを作成するかを指定できます。「**高度なプロファイル作成**」を選択します。「次へ」を選択します。
5. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルで、管理コンソールのデプロイメント用のチェック・ボックスが選択されていることを確認します。「次へ」を選択します。
6. 「名前とロケーション」パネルで、このプロファイルの固有の名前および固有のロケーションを入力する必要があります。最初にデフォルトの名前およびロケーションが表示されます。デフォルト・ディレクトリは `$user_data_root/profiles/profile_name` の下に表示されます。他のプロファイルが存在する場合は、この新規プロファイルをデフォルト・プロファイルにするというオプションも表示されます。また、デプロイメント・テンプレートを使用してサーバーを作成することも選択できます。「次へ」を選択します。

7. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルで、セル内で固有のノード名およびセル名を指定します。デフォルトのノード名およびセル名が提供されません。「次へ」を選択します。
8. 「管理セキュリティー」パネルで、管理セキュリティーを使用不可にします。「次へ」を選択します。
9. 「ポート値割り当て」パネルで、デフォルトのポート値が提供されます。必要であれば、別のポート値を指定できます。「次へ」を選択します。
10. この WebSphere Process Server プロファイル作成が Windows (または Linux) 上で行われている場合、Windows (または Linux) サービス定義パネルが表示され、オプションでこのプロファイルを Windows (または Linux) サービスとして実行するようにセットアップできます。「次へ」を選択します。
11. オプション: 「Web サーバー定義」パネルで、Web サーバー定義を作成するオプションを選択します。「次へ」を選択します。
12. 「データベース構成」パネルで、新規データベースの作成を選択します。
 - a. 生成されたデータベース・スクリプトの保管場所を指定します。
 - b. 「データベース・スクリプトを実行する (Execute database scripts)」の隣のチェック・ボックスを選択解除します。
 - c. 「データベース製品の選択」の下の「**DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)**」メニュー項目を選択します。これにより、「データベース名」フィールドに *SYSBAS が表示されます。
 - d. 「**SCA メッセージング・エンジンでこのデータベースを使用する (Use this database for SCA messaging engines)**」を選択します。「次へ」を選択します。
13. 「データベース構成 (第 2 部)」パネルで、リモート i5/OS DB2 データベースに対して認証を行うための有効なユーザー名とパスワードを入力します。
 - a. ツールボックス JDBC ドライバーのクラスパス・ファイル (jt400.jar) のロケーション (ディレクトリー) を入力します。
 - プロファイルを i5/OS 上に作成している場合、このディレクトリーは /QIBM/ProdData/Http/Public/jt400/lib です。

注: WebSphere Process Server をホスティングするサーバーおよびリモート・データベースをホスティングするサーバーがどちらも i5/OS プラットフォームである場合、スクリプトを自動的に実行して共通データベースを作成できます。

 - プロファイルを i5/OS 上に作成していない場合、この jar ファイルを含むローカル・ディレクトリーを入力します。
 - b. リモート DB2 UDB for iSeries データベースが存在する i5/OS サーバーのホスト名を入力します。
 - c. スキーマ名、WPRCSDB (デフォルト) を入力します。スキーマ名はリモート・サーバー上で固有でなければなりません。「次へ」を選択します。
14. 「プロファイルの要約」パネルが表示されます。「次へ」を選択します。
15. 新しいデプロイメント・マネージャー・プロファイルが作成および拡張されます。プロファイル作成が完了し、ファースト・ステップの起動オプションが選択解除されます。「終了」を選択します。

16. 次に、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成する必要があります。198 ページの『プロファイルの作成』を参照してください。

以下の作業が完了しました。

- WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成。
- WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーの拡張。
- WebSphere Process Server スタンドアロン・プロファイルの WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・セルへの正常な統合。

Common Event Infrastructure、Business Process Choreographer、CommonDB、Service Integration Bus、および WebSphere Enterprise Service Bus Message Logger では、リモート i5/OS システム上に DB2 UDB for iSeries のテーブルおよびコレクションが生成されます。

リモート z/OS サーバーに DB2 を構成するスクリプト

Common Event Infrastructure および共通データベースのリポジトリ用に DB2 をリモート z/OS マシンで使用する場合は、ユーザーまたはデータベース管理者 (DBA) は、関連するデータベースおよび正しいストレージ・グループを z/OS ワークステーション上に作成する必要があります。

- Common Event Infrastructure リポジトリを作成するには、『イベント・データベースの構成』およびそのサブトピックを参照してください。
- 共通データベース・リポジトリを作成するには、標準的なデータベース定義ツールや手順を使用して、以下のディレクトリーに用意されているデフォルト・スクリプトを編集して実行します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

`install_root/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV7/`。

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

`install_root¥dbscripts¥CommonDB¥DB2zOSV7¥`。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

`install_root/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV8/`。

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

`install_root¥dbscripts¥CommonDB¥DB2zOSV8¥`。

第 11 章 デプロイメント環境の検証

実動アプリケーションを新しい環境に移動する前に、テストを行ってすべてのコンポーネントが正常に動作することを確認してください。

始める前に

『デプロイメント環境の実装』に記載されている説明に従って、デプロイメント環境の実装を完了します。

1. ソフトウェアをインストールする
2. デプロイメント・マネージャーをホストするノードを構成する
3. ノードを構成する
4. ノードをデプロイメント・マネージャーに統合する
5. デプロイメント環境に機能を提供するノードをクラスター化する

このタスクについて

デプロイメント環境の検証方法は、実装した環境が IBM 提供のデプロイメント環境であるかカスタム・デプロイメント環境であるかによって異なります。IBM 提供のデプロイメント環境は、管理コンソールで単一のパネルから管理できます。カスタム・デプロイメント環境は、管理コンソールで手動で作成し管理する必要があります。

プロシージャ

1. 検証するデプロイメント環境のタイプを識別します。

この情報は、元の計画に基づいて用意してください。

2. デプロイメント環境を開始します。

デプロイメント環境のタイプ	始動方法
IBM 提供のパターン	「システム管理」 > 「デプロイメント環境」 > 「デプロイメント環境構成」 (『デプロイメント環境の開始と停止』の説明を参照してください)。
カスタム	「サーバー」 > 「クラスター」 (『カスタム・デプロイメント環境の始動の検証 (Verifying a custom deployment environment starts)』を参照してください)。 注: デプロイメント環境に定義されているすべてのサーバーとクラスターを始動する必要があります。

3. テスト・アプリケーションをインストールします。
4. ルーティング用のテスト・アプリケーションを構成します。
5. テスト・アプリケーションを開始します。

6. テスト・アプリケーションを実行し、その結果を検証します。

次のタスク

実動アプリケーションをインストールします。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターの始動の確認

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターが始動可能なことを確認するには、デプロイメント環境の 3 つのクラスターをすべて始動する必要があります。このセクションでは、3 つのクラスターで構成されるデプロイメント環境についての事例を説明します。

始める前に

メッセージング・エンジン、Common Event Infrastructure (CEI) イベント・サーバー・アプリケーション、およびアプリケーション・デプロイメント・ターゲットのクラスターを作成して構成する必要があります。

このタスクについて

アプリケーション・デプロイメント・クラスターが始動可能なことを確認するには、各クラスターを順に始動します。

注:

- ここでは、トポロジーで 3 つのクラスターを構成しており、それぞれ MECluster、SupportCluster、AppCluster という名前になっているとして説明します。これらは実際のクラスター名に置き換えてください。また、デプロイメント環境に追加のクラスターがある場合は、該当するステップを繰り返してください。
- サーバーを初めて始動するときは、システムがデータベース・テーブルとスキーマを作成するため、2 回目以降の始動時よりも時間がかかります。

プロシージャ

1. デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「サーバー」を展開し、「クラスター」を選択します。
2. クラスターを開始します。
 - a. 「MECluster」の横にあるチェック・ボックスを選択します。
 - b. 「開始」を選択し、MECluster が始動して緑色の矢印が表示されるまで待ちます。
 - c. 「SupportCluster」の横にあるチェック・ボックスを選択します。
 - d. 「開始」を選択し、SupportCluster が始動して緑色の矢印がもう 1 つ表示されるまで待ちます。
 - e. 「AppCluster」の横にあるチェック・ボックスを選択します。
 - f. 「開始」を選択し、AppCluster が始動して緑色の矢印がもう 1 つ表示されるまで待ちます。
3. メッセージング・バスをクリックします。
 - a. すべてのクラスターが開始するまで待ちます。

- b. 「サービス統合」 → 「バス」の順にクリックします。
- c. バスごとに、メッセージング・エンジンが稼働していることを確認します。
 - 1) バス名を選択します。
 - 2) 「ローカル・トポロジ」をクリックしてバス・トポロジを表示します。
 - 3) メッセージング・エンジンの状況が表示されるまでバスを拡張します。
4. クラスタ・メンバーをホストするノードの `profile` ディレクトリーの `logs` サブディレクトリーにある、クラスタ・メンバーの `SystemOut.log` および `SystemErr.log` ファイルを確認します。エラーがないことを確認し、「サーバー `AppCluster_member1` が e-business 用に使われています (Server `AppCluster_member1` is open for e-business)」または「サーバー `AppCluster_member2` が e-business 用に使われています (Server `AppCluster_member2` is open for e-business)」という行を探します。これらの行があれば、クラスタは正常に始動しています。エラーがある場合は、訂正してから続行してください。

エラーを訂正した後には、ホストの別名を構成します。

注: 構成エラーを訂正した後は、必ずクラスタを停止してから再始動して、構成の変更を有効にする必要があります。

トラブルシューティング・ヒント: ログを調べていると、メッセージング・エンジンが特定のバスを検出できなかったために起動に失敗したことを示すメッセージが見つかることがあります。このメッセージは、クラスタを再始動すると除去されます。

テスト・アプリケーションのインストール

テスト・アプリケーションをインストールして、デプロイメント環境を検査するプロセスを開始します。

始める前に

- 完全なデプロイメント環境を作成およびインストールする必要があります。
- デプロイメント・マネージャー管理コンソールにログインします。

このタスクについて

BPCIVTApp (Business Process Choreographer Installation Verification Test) と呼ばれる、WebSphere Process Server に同梱されて提供されたアプリケーションを使用して、WebSphere Process Server 環境が正常にインストールおよび構成されていることを確認します。最初に、アプリケーションをインストールする必要があります。

このアプリケーションのインストールの詳細については、『Business Process Choreographer の処理の検証』を参照してください。管理コンソールからアプリケーションをインストールする方法の詳細については、『コンソールでのアプリケーション・ファイルのインストール』を参照してください。

注: ビジネス・プロセスとヒューマン・タスクを使用可能にしていない場合は、BPCIVTApp を使用してデプロイメント環境をテストすることはできません。この場

合は、ビジネス・ルールとセレクターを使用してデプロイメント環境を動作させる Service Component Architecture アプリケーションをインストールして、実行する必要があります。アプリケーションに合わせてデプロイメント環境をテストするようにプロセスを変更します。

プロシージャ

1. 管理コンソールで、「アプリケーション」>「新規アプリケーションのインストール」を選択します。
2. 「ローカル・ファイル・システム」が選択されていることを確認し、ファイル `bpcivt.ear` を参照します。このファイルは、`install_root/installableApps` ディレクトリにあります。
3. ファイル `bpcivt.ear` を選択し、「オープン」を選択します。
4. 以降のステップでは、デフォルト構成を使用することを想定しています。以降のパネルでは、「要約」ページが表示されるまで「次へ」を選択します。これらの各ステップでは、ほかのトピックで説明されているように、各種オプションを選択し、モジュールをサーバーにマップします。テスト用には、このモジュールをアプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターにマップします。

注: スタンドアロン・サーバーでは、モジュールをアプリケーション・ターゲット・クラスターにマップする必要はありません。

5. 「終了」を選択します。
6. 「保管」および「同期化」を選択します。

次のタスク

ルーティング用テスト・アプリケーションの構成

以下の手順を使用して、ルーティング用のテスト・アプリケーションを構成します。

始める前に

テスト・アプリケーションをインストールする必要があります。

このタスクについて

最初にアプリケーションを構成してから、プラグイン構成ファイルを生成します。

注: 説明では、クラスター名 `AppCluster` および Web サーバー名 `Webserver1` を使用します。テスト・アプリケーションでヒューマン・タスクまたはビジネス・プロセスを使用する場合は、`Business Process Choreographer` をご使用のアプリケーション・クラスターに既に構成していることを確認してください。

プロシージャ

1. Web サーバーおよびデプロイメント・ターゲットを識別するために実行するアプリケーション (複数可) を以下のように構成します。
 - a. 管理コンソールで、「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」を選択します。

- b. アプリケーションの名前を選択します。
 - c. 「追加プロパティ」で、「モジュールをサーバーにマップ」を選択します。
 - d. 「クラスターおよびサーバー」の下の選択リストで、*Webserver1* (事前に構成した Web サーバー) および *AppCluster* (アプリケーション・デプロイメント・ターゲット) を選択します。
 - e. 「適用」を選択し、次に「OK」を選択します。
 - f. デプロイメント環境に対してすべての Web サーバーおよびデプロイメント・ターゲットを構成するまで、ステップ 1d から 1e を繰り返します。
 - g. 「保管」および「同期化」を選択します。
2. プラグイン構成ファイルを生成します。
 - a. 管理コンソールで、「サーバー」>「Web サーバー」を選択します。
 - b. 名前 *Webserver1* の横にあるチェック・ボックスを選択します。
 - c. 「プラグインの生成」を選択します。プラグイン構成ファイルが作成され、その旨がウィンドウ上部のメッセージに示されます。
 - d. デプロイメント環境に対して必要な回数分、ステップ 2b および 2c を繰り返します。

次のタスク

デプロイメント・マネージャーおよびノード・エージェントを停止してから再始動します。次に、テスト・アプリケーションを開始します。

テスト・アプリケーションの開始

この手順を使用して、テスト・アプリケーションを開始し、実装をテストします。

始める前に

ルーティング用のテスト・アプリケーションがインストールおよび構成されている必要があります。

このタスクについて

テスト・アプリケーションは、管理コンソールから開始します。

プロシージャ

1. 管理コンソールで、「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション名の横にあるチェック・ボックスを選択し、「開始」を選択します。緑色の矢印が表示されるまで待機します。この矢印はアプリケーションが正常に開始されたことを示します。

次のタスク

テスト・アプリケーションを開始した後、このアプリケーションを実行します。

注: アプリケーションが正常に開始されない場合、ログ・ファイルを参照して、問題を示すエラー・メッセージを検索します。

テスト・アプリケーションの実行

この手順を使用して、テスト・アプリケーションを実行し、デプロイメント環境が正常に作動しているかどうかを判別します。

始める前に

テスト・アプリケーションを開始する必要があります。

このタスクについて

このアプリケーションが正常に実行された場合、デプロイメント環境は正常に作動しています。アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターのその他のメンバーについても、同一の手順に従い、正常に機能していることを確認します。

プロシージャ

1. ブラウザー・ウィンドウに `http://hostname:portnumber/testapp` の形式で URL を入力します。ここで、*hostname* は、アプリケーションをインストールしたクラスター・メンバーをホスティングするシステムの完全修飾 DNS 名または IP アドレス、*portnumber* は、そのクラスター・メンバーのデフォルト・ホストに関連付けられているポート番号、*testapp* はテスト・アプリケーションの名前です。
2. 画面上のログ・メッセージを確認します。

テスト・アプリケーションにヒューマン・タスクが含まれている場合は、「Looking up the HumanTaskManager API EJB...」で始まるログ・メッセージが画面に表示されます。アプリケーションでは、タスクが作成および要求され、入出力データが検査され、タスクが完了して削除されます。ログ・メッセージの終了付近で「合格」が表示され、アプリケーションが正常に実行されたことが示されます。

正常であることを示すためにアプリケーション内に組み込んだすべてのメッセージが表示されたことを確認してください。

次のタスク

その他のテスト・アプリケーションをインストールおよび開始します。

その他のアプリケーションのインストールおよびアクセス

管理コンソールまたは Business Process Choreographer Explorer からアプリケーションのインストールおよびアクセスを行い、デプロイメント環境をさらに検査します。

始める前に

デプロイメント環境が正常にインストールおよび構成されている必要があります。

このタスクについて

テスト・アプリケーションをインストールしたのと同様の方法で、その他のアプリケーションをインストールして開始できます。これらのアプリケーションにアクセスするには、管理コンソールまたは Business Process Choreographer Explorer を使用します。

プロシージャー

1. アプリケーションを見つけます。

管理コンソールで、「アプリケーション」 → 「新規アプリケーションのインストール」とクリックして、インストールするアプリケーションを見つけます。

2. アプリケーションをインストールします。
3. アプリケーションを開始します。
4. アプリケーションにアクセスします。

ブラウザ・ウィンドウにアプリケーションの URL を入力します。例えば、`http://hostname:portnumber/myapp` などです。ここで、*hostname* は、アプリケーションをインストールした、クラスター・メンバーに対応するシステムの完全修飾 DNS 名 (または IP アドレス) であり、*portnumber* は、そのクラスター・メンバーの `default_host` に関連付けられているポート番号です。

Business Process Choreographer Explorer で以下のステップを実行します。

- a. ブラウザー・ウィンドウに `http://hostname:portnumber/bpc` の形式で URL を入力します。ここで、*hostname* は、アプリケーションをインストールした、クラスター・メンバーに対応するシステムの完全修飾 DNS 名 (または IP アドレス) であり、*portnumber* は、そのクラスター・メンバーの `default_host` に関連付けられているポート番号です。

「ユーザーのタスク」というラベルのページが表示されますが、リストにはタスクが表示されていません。

- b. 「ユーザーのプロセス・テンプレート」を選択します。インストールしたアプリケーションに対応するテンプレートがリストされています。
 - c. ページ上のインターフェース・コントロールを使用して、タスクを開始、処理、および完了します。Business Process Choreographer タスクの実行の詳細については、『ビジネス・プロセスおよびヒューマン・タスクの管理』を参照してください。
5. 必要に応じて、アプリケーションの記録を表示したり、エラーを確認するために、クラスター・メンバーの `SystemOut.log` ファイルを確認することができます。

第 12 章 Update Installer を使用したフィックスパックおよびリフレッシュ・パックのインストール

IBM Update Installer for WebSphere Software を使用して暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パック (メンテナンス・パッケージと総称される) をインストールできます。Update Installer for WebSphere Software はまた、アップデート・インストーラー・プログラム、UpdateInstaller プログラム、およびアップデート・インストール・ウィザードと呼ばれています。

始める前に

製品の更新を正常にインストールするには、正しい権限を使用します。

管理セキュリティが WebSphere Application Server Network Deployment または WebSphere Process Server で有効になっている場合は、ファイルを更新する前に、管理ユーザー ID とパスワードを指定する必要があります。

更新する製品をインストールした際と同じインストーラーの ID で Update Installer プログラムを使用します。それ以外の ID の場合、ファイル所有権の不一致により root ユーザーによる修正が必要になる場合があります。

i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** Update Installer プログラムを *ALLOBJ 特殊権限を持つユーザー・プロファイルから使用します。

重要:

- 製品を更新するには、更新する製品を最初にインストールしたユーザー・アカウントを Update Installer のインストールに使用する必要があり、また同じユーザー・アカウントを使用して Update Installer プログラムを開始する必要があります。
 - Update Installer ファイルが配置されたロケーションを別のユーザー・アカウントで使用する場合は、そのユーザー・アカウントは、そのロケーションに対する読み取り権限および実行権限を持っている必要があります。また、このユーザー・アカウントは、logs ディレクトリーとそのサブディレクトリーに対する書き込み権限も持っている必要があります。Update Installer ファイルのロケーションについては、242 ページの『Update Installer for WebSphere Software のインストール』を参照してください。
 - ターゲットの WebSphere Application Server 製品のロケーションを更新するために別のユーザー・アカウントを使用する場合は、そのユーザー・アカウントが、保守パッケージを適用するターゲット・ロケーションに対する全アクセス権限 (読み取り、書き込み、および実行) を持っている必要があります。
- **AIX** **AIX プラットフォームの場合:** root 以外のユーザーが Update Installer プログラムを開始する場合は、そのユーザー・アカウントで slibclean コマンドを実行できる必要があります。実行できない場合は、Update Installer プログラムを使用するときに必ず root ユーザーで slibclean コマンドを実行する必要があります。

- 保守パッケージをインストールするターゲット・ロケーションにあるどのファイルも、どのユーザーからのプロセスでもロックしていないことを確認します。

Update Installer とは、グラフィカル・ユーザー・インターフェース、またはサイレント・モード (応答ファイルの使用不使用にかかわらず) で稼動する InstallShield MultiPlatform ウィザードです。サイレント・モードで応答ファイルを省略する場合、ウィザードは、デフォルトの保守ディレクトリーにダウンロードした最後の保守パッケージをインストールします。Update Installer を使用してインストールする応答ファイルの例について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『install.txt』のトピックを参照してください。

制約事項: i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS に対する Update Installer は、install.txt 応答ファイルを使用することでのみ実行できます。

このタスクについて

更新 とは、ファイルまたはデータ・セットを現行情報で変更することです。WebSphere Process Server がリフレッシュ・パック、暫定修正、またはフィックスパックで更新されると、その旧情報のファイルは新規バージョンと置き換えられます。更新はマイグレーションとは異なります。マイグレーションは、製品の新規バージョン全体をインストールして製品の旧バージョンと置き換えることです。マイグレーションについて詳しくは、『マイグレーション』を参照してください。

重要: このトピックの説明は、一般的な参照用として示しているにすぎません。暫定修正、フィックスパック、リフレッシュ・パックに用意されている説明のほうがこのトピックの説明よりも優先されます。必ず、暫定修正、フィックスパック、リフレッシュ・パックに用意されている具体的なインストール手順のほうを実行するようにしてください。

「WebSphere Process Server Recommended Fixes」のリストで、ソフトウェアが最新のメンテナンス・レベルであることを確認します。「Recommended Fixes」の Web ページで、インストールするフィックスパックまたはリフレッシュ・パックの readme ファイル (インストールの説明とも言う) を必ずお読みください。

重要: Update Installer の複数のコピーを一度に始動しないでください。Update Installer プログラムの並行インスタンスはサポートされていません。複数の更新を同時に実行すると、インストールの失敗や不完全なインストールを含む、予測不能の結果を引き起こす可能性があります。

注: このトピックでは、便宜上、特定のディレクトリー・パスは Linux および UNIX 形式でのみ示します。これに相当する Windows パスは、ディレクトリー区切り記号以外は同一です。

次の手順では、保守パッケージのインストール方法を説明します。保守パッケージのロールバック方法の説明については、『保守パッケージのアンインストール』を参照してください。

暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックをインストールするには、以下のステップを実行します。

プロシージャ

1. Update Installer for WebSphere Software の最新のバージョンがシステムにインストールされていることを確認します。 暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックをインストールするには、Update Installer for WebSphere Software がインストールされている必要があります。これは、WebSphere Process Server 製品サポートの Web サイトから、またはランチパッドを使用して製品 CD からダウンロードできます。初回のインストールについて詳しくは、242 ページの『Update Installer for WebSphere Software のインストール』を参照してください。 Update Installer の新しいバージョンのインストールについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『Updating the Update Installer for WebSphere Software』を参照してください。
2. 暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックの現行バージョンを、「WebSphere Process Server Recommended Fixes」 Web サイトから Update Installer の maintenance ディレクトリーにダウンロードします。 メンテナンス・ディレクトリーは、使用するオペレーティング・システムに応じて、以下のロケーションのいずれかにあります。
 - **AIX** **AIX** プラットフォームの場合: /usr/IBM/WebSphere/UpdateInstaller
 - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: /QIBM/ProdData/WebSphere/UpdateInstaller/V61/UPDI
 - **HP-UX** **Linux** **Solaris** **HP-UX、Linux、および Solaris** プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/UpdateInstaller
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: C:\Program Files\IBM\WebSphere\UpdateInstaller
3. **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: 「Windows Services」パネルを使用して、WebSphere Process Server プロセスのすべてのサービスを停止します。
4. Update Installer プログラムが使用されるシステム上で実行されているすべての WebSphere Process Server 関連の Java プロセスを停止します。

例えば、Java プロセスには以下のものが含まれます。

- すべての Java 仮想マシン (JVM)
- WebSphere Process Server プロセスには次のようなものがあります。
 - サーバー・プロセス
 - ノードがデプロイメント・マネージャー・セルに統合される場合、そのノード上のノード・エージェント・プロセス
 - デプロイメント・マネージャー・サーバーの dmgr プロセス
 - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: 上記の各プロセスは、WebSphere Process Server が実行されているサブシステムを終了させることによって停止することができます。このサブシステムは QWAS61 (デフォルト) または QWBI61 (カスタム) で、ENDSBS コマンドを使用して終了させることができます。
- IBM HTTP Server プロセス
- インストールしているプラグインを使用する Web サービス・プロセス
- ファースト・ステップ・コンソール

- インストール検証テスト (IVT) プロセス
 - プロファイル管理ツール
 - その他の InstallShield MultiPlatform (ISMP) インストール・プログラム
 - InstallShield MultiPlatform アンインストール・プログラム
 - IBM WebSphere Integration Developer Java プロセス
 - IBM Agent Controller
 - Derby Network Server データベース・サーバー (Derby Network Server を使用するよう構成されたデプロイメント・マネージャー・プロファイルを更新している場合)
5. ディレクトリーを Update Installer ディレクトリーに変更します。 Update Installer ディレクトリーは、使用するオペレーティング・システムに応じて、以下のロケーションのいずれかにあります。
- **AIX** **AIX** プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/UpdateInstaller
 - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: /QIBM/ProdData/WebSphere/UpdateInstaller/V61/UPDI
 - **HP-UX** **Linux** **Solaris** **HP-UX、Linux、および Solaris** プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/UpdateInstaller
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: C:\Program Files\IBM\WebSphere\UpdateInstaller
6. update コマンドを使用して、暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックをインストールします。更新する各サーバー・ノードに保守パッケージをインストールする前に、デプロイメント・マネージャー・ノードに保守パッケージをインストールします。
- グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用してメンテナンス・パッケージをインストールするには、以下のコマンドのいずれかを入力します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX** プラットフォームの場合: メンテナンス・パッケージ・フィールドを最新の日付スタンプおよびタイム・スタンプを持つパッケージの名前で初期化する場合、./update.sh を入力します。
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: メンテナンス・パッケージ・フィールドを最新の日付スタンプおよびタイム・スタンプを持つパッケージの名前で初期化する場合、update.bat を入力します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX** プラットフォームの場合: ./update.sh -options "responsefiles/file_name" を実行すると、グラフィカル・インターフェースのすべての値が、options 応答ファイルで指定した値でオーバーライドされます。Update Installer を使用してインストールする応答ファイルの例について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『install.txt』のトピックを参照してください。
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: update.bat -options "responsefiles/file_name" を実行すると、グラフィカル・インターフェースのすべての値が、options 応答ファイルで指定した値でオーバーライドさ

れます。Update Installer を使用してインストールする応答ファイルの例について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『install.txt』のトピックを参照してください。

update コマンドで使用するオプションについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『update command』のトピックを参照してください。

- メンテナンス・パッケージをサイレント・モードを使用してバックグラウンド・プロセスとしてインストールするには、以下のコマンドのいずれかを入力します。
 - **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォーム:** グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用せずに、オプション応答ファイル内に指定された値を使用してインストールする場合、`./update.sh -silent -options "responsefiles/file_name"` を入力します。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『install.txt』のトピックを参照してください。
 - **Windows** **Windows プラットフォーム:** グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用せずに、オプション応答ファイル内に指定された値を使用してインストールする場合、`update.bat -silent -options "responsefiles/file_name"` を入力します。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『install.txt』のトピックを参照してください。
 - **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** `update -silent -options responsefiles/file_name`

update コマンドについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『update command』のトピックを参照してください。

Update Installer は、`install_root/properties/version/nif/backup` ディレクトリーにバックアップ・ファイルを作成します。

注: root 以外のユーザーが所有しているプロファイル用のサービスが含まれた保守パッケージをインストールすると、保守パッケージによって作成されるすべての新規ファイルをインストール・ユーザーが所有します。root 以外のユーザーが正常にこの製品を開始できるように新規ファイルの所有権を変更できます。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment の資料の『Installing maintenance packages as an installer and changing the ownership of profile-related files』を参照してください。

保守パッケージをインストールした後、WebSphere ソフトウェアの使用を継続してください。

重要: 既知の問題については、WebSphere Application Server Network Deployment の資料の『Update command - known problems and workarounds』を参照してください。

Update Installer for WebSphere Software のインストール

WebSphere Process Server Launchpad から Update Installer for WebSphere Software をインストールできます。アップデート・インストーラーは、WebSphere Process Server の暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パックをインストールするために使用します。

始める前に

Update Installer for WebSphere Software をインストールする前に、以下の要件を確認してください。

- 製品のハードウェア前提条件およびソフトウェア前提条件がすべて満たされている必要があります。詳しくは、『WebSphere Process Server system requirements』を参照してください。
- アップデート・インストーラーをインストールする前に、いずれかのバージョンの WebSphere Process Server を正しくインストールしておく必要があります。
- アップデート・インストーラーは、1 つのシステムに 1 つだけインストールできます。このアップデート・インストーラーをすべての WebSphere 製品が共用しません。
- 当初 WebSphere Process Server 製品をインストールするために使用したユーザー・アカウントでアップデート・インストーラーをインストールするとともに、同じユーザー・アカウントを使用してアップデート・インストーラー・プログラムを実行し、製品を更新する必要があります。
 - 別のユーザー・アカウントがインストール済みのアップデート・インストーラーのロケーションを使用する場合は、そのユーザー・アカウントが、そのロケーションにあるアプリケーションを読み取って実行するためのセキュリティー・アクセス権限と、logs ディレクトリーのサブディレクトリーに対する書き込み権限を持っている必要があります。
 - 別のユーザー・アカウントを使用してターゲット WebSphere Process Server 製品のロケーションを更新する場合は、そのユーザー・アカウントが、保守パッケージを適用するターゲット・ロケーションに対する全アクセス権限 (読み取り、書き込み、および実行) を持っている必要があります。
- **AIX** **AIX プラットフォームの場合:** 非 root ユーザーがアップデート・インストーラー・プログラムを開始する場合は、そのユーザー・アカウントが slibclean コマンドを実行するためのセキュリティー・アクセス権限を持っている必要があります。持っていない場合は、アップデート・インストーラー・プログラムを使用するときに必ず root ユーザーが slibclean コマンドを実行する必要があります。
- アップデート・インストーラーをインストールするターゲット・ロケーションでは、他のユーザーによるプロセスがファイルをロックすることはできません。
- 最新バージョンの Update Installer for WebSphere Software をインストールしようとしていることを確認します。更新のバージョンを持っていない場合は、IBM Web サイト (Update Installer for WebSphere Software) から圧縮ファイルまたは TAR ファイルとして最新バージョンの Update Installer for WebSphere Software をダウンロードします。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料にある『Updating the Update Installer for WebSphere Software』を参照してください。

Update Installer for WebSphere Software をインストールするには、以下のステップを実行します。

プロシージャ

1. 新バージョンのアップデート・インストーラーをインストールする前に、既存のアップデート・インストーラーを除去する必要があります。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料にある『Uninstalling the Update Installer for WebSphere Software』を参照してください。
2. 以下のいずれかの方法で、Update Installer for WebSphere Software のインストール・ウィザードを開始します。
 - Launchpad から:
 - a. WebSphere Process Server Launchpad を開始します。Launchpad の開始方法について詳しくは、81 ページの『Launchpad の開始』を参照してください。
 - b. 「Launchpad」ウィンドウの左側に表示されるオプションのリストで、「**WebSphere ソフトウェアのインストール用の IBM Update Installer**」をクリックします。「WebSphere ソフトウェアのインストール用の IBM Update Installer」パネルが開きます。
 - c. Launchpad の「WebSphere ソフトウェアのインストール用の IBM Update Installer」パネルで、「**IBM Update Installer のインストール・ウィザードの起動**」をクリックします。
 - コマンド行から:
 - a. システムにログオンします。
 - b. **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: 必要な場合は、CD-ROM ドライブをマウントします。詳しくは、『Linux および UNIX オペレーティング・システムでの CD-ROM のマウント』を参照してください。
 - c. 「*WebSphere Process Server V6.1 Disk 1*」というラベルが付いた製品 CD、または「*WebSphere Process Server V6.1 DVD 1*」というラベルが付いた製品 DVD を CD-ROM ドライブに挿入します。
 - d. UpdateInstaller ディレクトリーにナビゲートします。
 - e. UpdateInstaller ディレクトリーから `install` または `install -silent` コマンドを入力します。
3. インストール・ウィザードの指示に従います。

結果

Update Installer for WebSphere Software は、使用しているプラットフォームに応じて以下のルート・ディレクトリーにインストールされます。

- **AIX** **AIX** プラットフォームの場合: `/usr/IBM/WebSphere/UpdateInstaller`
- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `/QIBM/ProdData/WebSphere/UpdateInstaller/V61/UPDI`

- **HP-UX** **Linux** **Solaris** **HP-UX、Linux、および Solaris プラットフォーム:** /opt/IBM/WebSphere/UpdateInstaller
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** C:\Program Files\IBM\WebSphere\UpdateInstaller

次のタスク

アップデート・インストーラーをインストールすると、それを使用して暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・バックをインストールできるようになります。詳しくは、『Update Installer を使用したフィックスパックおよびリフレッシュ・バックのインストール』を参照してください。

保守パッケージのアンインストール

Update Installer for WebSphere Software を使用して暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・バックをアンインストールできます。Update Installer for WebSphere Software はまた、アップデート・インストーラー・プログラム、updateInstaller プログラム、およびアップデート・インストール・ウィザードと呼ばれています。

始める前に

製品の更新を正常にインストールするには、正しい権限を使用します。

アップデート・インストーラーは、InstallShield MultiPlatform ウィザードであり、グラフィカル・ユーザー・インターフェースで実行されるか、応答ファイル (uninstall.txt) を使用してサイレント・モードで実行されます。

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS 上でのアップデート・インストーラーは、応答ファイルを使用する方法でのみ実行します。

重要: 既知の問題については、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『Update command - known problems and workaround』を参照してください。

重要: このトピックでは、便宜上、特定のディレクトリー・パスは Linux および UNIX 形式でのみ示します。それぞれのパスに相当する i5/OS 用のパスは、Linux および UNIX のものとまったく同じです。これに相当する Windows パスは、ディレクトリー区切り記号以外は同一です。

以下の説明には、WebSphere Process Server の暫定修正、修正パッケージ、およびリフレッシュ・バックをアンインストールする場合の参照情報が含まれています。

アンインストール手順の概説

保守パッケージをアンインストールするには、次のようにします。

1. アップデート・インストーラーを使用して保守パッケージをインストールしたときに作成されたバックアップ・ファイルがあることを確認します。このバックアップ・ファイルは `install_root/properties/version/nif/backup` ディレクトリーに置かれています。IBM は、バックアップ・ファイルに行うユーザー変更はサポートしません。

- このトピックで説明されているように、アップデート・インストーラー・プログラムを使用して保守パッケージを除去します。

ノードの修正レベルの表示

`install_root/bin` ディレクトリーの `versionInfo` コマンドを使用して、製品の正確な修正およびバージョン・レベルを表示することができます。ただし、保守パッケージのインストール中またはアンインストール中には、`versionInfo` コマンドは使用しないでください。

アップデート・インストーラーの複数のコピーを一度に起動しないでください。アップデート・インストーラー・プログラムの同時起動はサポートされていません。複数の更新を同時に実行すると、インストールの失敗や不完全なインストールを含む、予測不能の結果を引き起こす可能性があります。

必要な情報

グラフィカル・インターフェースでは、ユーザーは次の情報を提供する必要があります。

表 23. 保守パッケージのアンインストール時に必要な情報

フィールド	有効な値	説明
WebSphere 製品のインストール・ルート・ディレクトリーのファイル・パスおよびアップデート・インストーラー	IBM WebSphere Process Server のインストール・ルート・ディレクトリーを確認します。	アップデート・インストーラー・アプリケーションは、デフォルトでは前回と同じ製品ロケーションを参照します。
アンインストールする保守パッケージのファイル名	<code>install_root/properties/version/update/backup</code> ディレクトリーから、アンインストールする保守パッケージを選択します。	デフォルトの保守パッケージは、 <code>install_root /properties/version/update/backup</code> ディレクトリー内の、最新の日付スタンプおよびタイム・スタンプを持つパッケージです。

この作業に必要なセキュリティー・ロール: 製品の更新を正常にアンインストールするには、正しい権限を使用してください。アップデート・インストーラー・プログラムは、Linux または UNIX プラットフォームでは `root` ユーザーとして、Windows プラットフォームでは管理者として使用してください。

暫定修正、フィックスバック、またはリフレッシュ・バックを除去するには、以下のステップを実行します。

プロシージャ

- オペレーティング・システムにログオンします。

Linux **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** さらに、`umask` 設定が `0022` であることを確認します。

`umask` 設定を確認するには、以下のコマンドを入力します。 `umask`

`umask` 設定を `0022` に設定するには、以下のコマンドを入力します。 `umask 0022`

- ディレクトリーを Update Installer ディレクトリーに変更します。 Update Installer ディレクトリーは、使用するオペレーティング・システムに応じて、以下のロケーションのいずれかにあります。

- **AIX** **AIX** プラットフォームの場合: /usr/IBM/WebSphere/UpdateInstaller
 - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: /QIBM/ProdData/WebSphere/UpdateInstaller/V61/UPDI
 - **HP-UX** **Linux** **Solaris** **HP-UX、Linux、および Solaris** プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/UpdateInstaller
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: C:\Program Files\IBM\WebSphere\UpdateInstaller
3. **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: 「Windows Services」パネルを使用して、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server プロセスのすべてのサービスを停止します。
 4. IBM Software Developer Kit (SDK) または IBM Developer Kit for Java (JDK、および i5/OS プラットフォームで使用) を使用するすべての Java プロセスを停止します。

マシン上で暫定修正、フィックスパック、およびリフレッシュ・パックをアンインストールする前に、そのマシン上で、IBM SDK、Java Technology Edition を使用する Java プロセスをすべて停止してください。

WebSphere Process Server プロセスには次のようなものがあります。

- サーバー・プロセス
- ノードがデプロイメント・マネージャー・セルに統合される場合、そのノード上のノード・エージェント・プロセス
- デプロイメント・マネージャー・サーバーの dmgr プロセス

必要であれば、すべての Java プロセスを停止します。WebSphere Process Server 関連の Java プロセスの実行中に保守パッケージをアンインストールすると、製品が正常に (エラーなしで) 稼働しなくなる可能性があります。

5. アップデート・インストーラーを使用して、保守パッケージをアンインストールします。
 - グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して保守パッケージをアンインストールするには、以下のいずれかのコマンドを入力します。
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: update.bat -W update.type="uninstall" を実行すると、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して最新の日付スタンプおよびタイム・スタンプの保守パッケージがアンインストールされます。
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: ./update.sh -W update.type="uninstall" を実行すると、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して最新の日付スタンプおよびタイム・スタンプの保守パッケージがアンインストールされます。
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: update.bat -options "responsefiles/file_name" を実行すると、グラフィカル・インターフェースのすべての値が、options 応答ファイルで指定した値でオーバーライドされます。アップデート・インストーラーを使用してインストールする応答

ファイルの例について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『uninstall.txt』のトピックを参照してください。

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** `./update -silent -options "responsefiles/file_name"` を実行すると、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用せずに、options 応答ファイルで指定した値を使用してアンインストールされます。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料に記載されている『uninstall.txt』のトピックを参照してください。
- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `./update.sh -options "responsefiles/file_name"` を実行すると、グラフィカル・インターフェースのすべての値が、options 応答ファイルで指定した値でオーバーライドされます。アップデート・インストーラーを使用してインストールする応答ファイルの例について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料の『uninstall.txt』のトピックを参照してください。
- サイレント・モードを使用してバックグラウンド・プロセスとして保守パッケージをアンインストールするには、以下のいずれかのコマンドを入力します。
 - **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `update.bat -silent -options "responsefiles/file_name"` を実行すると、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用せずに、options 応答ファイルで指定した値を使用してアンインストールされます。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料に記載されている『uninstall.txt』のトピックを参照してください。
 - **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `./update.sh -silent -options "responsefiles/file_name"` を実行すると、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用せずに、options 応答ファイルで指定した値を使用してアンインストールされます。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料に記載されている『uninstall.txt』のトピックを参照してください。

注: デプロイメント・マネージャー・ノードから保守パッケージをアンインストールする前に、セル内の各サーバー・ノードから暫定修正をアンインストールします。

`update` コマンドを使用して保守パッケージをアンインストールするときに使用可能なすべてのオプションを示す表については、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 の資料に記載されている『update command』のトピックを参照してください。

結果

暫定修正、フィックスパック、またはリフレッシュ・パックが除去され、旧バージョンの WebSphere Process Server ソフトウェアがシステムに残されます。

次のタスク

保守パッケージをアンインストールした後で、引き続き WebSphere ソフトウェアを使用することができます。

第 13 章 ソフトウェアのアンインストール

IBM WebSphere Process Server をアンインストールするためのさまざまな方法について説明します。

アンインストーラー・プログラムにより、各プロファイル内の構成データやアプリケーションを含め、すべてのプロファイルがデフォルトで除去されます。i5/OS は例外で、デフォルトではすべてのプロファイルが除去されません。アンインストール手順を開始する前に、必要に応じて、各プロファイルの config フォルダー、installableApps フォルダー、および installedApps フォルダーをバックアップするか、または uninstall コマンドで `-OPT removeProfilesOnUninstall="false"` パラメーターを使用します。構成ファイルの管理の説明については、『コマンド行ツールの使用』を参照してください。別のロケーションに保管されていないすべてのアプリケーションをバックアップします。アンインストールするには、次のリストから、必要なアンインストール手順へのリンクを選択してください。

- 250 ページの『GUI の使用またはサイレント・モードによる製品のアンインストール』 -- WebSphere Process Server とその基盤になっている WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のコピーをアンインストールする方法について説明しています。アンインストール・ウィザードのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して対話式に実行する方法と、コマンド行の呼び出しによってサイレント・モードで実行する方法があります。

制約事項: i5/OS i5/OS プラットフォームの場合、アンインストールは、コマンド行呼び出しを使用してサイレント・モードでのみ実行できます。

- 256 ページの『アンインストールに失敗した後の再インストールの準備』 -- アンインストールが正常に完了しなかった場合は、いくつかのファイルが残ってしまい、それが原因で元のディレクトリーへの再インストールができなくなることがあります。アンインストールが失敗し、同じディレクトリーに再インストールする場合は、このセクションで説明する、ご使用のプラットフォームでの手順に従ってください。再インストールする予定がない場合は、この手順に従う必要はありません。

WebSphere Process Server のインストール済み環境からさまざまなコンポーネントを削除する方法についても説明しています。これらのコンポーネントは、WebSphere Process Server のアンインストール時にアンインストールされます。詳しくは、『Business Process Choreographer 構成の除去』、および『Common Event Infrastructure 構成の除去』を参照してください。

WebSphere Application Server 用 Web サーバー・プラグイン、IBM HTTP Server、および Application Client for WebSphere Application Server などの関連製品をアンインストールするには、WebSphere Application Server Network Deployment および IBM HTTP Server バージョン 6.1 インフォメーション・センターの以下のトピックを参照してください。

- Uninstalling the Web server plug-ins for WebSphere Application Server

- IBM HTTP Server のアンインストール
- Uninstalling Application Client for WebSphere Application Server feature pack

GUI の使用またはサイレント・モードによる製品のアンインストール

アンインストール・ウィザードのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用するか、コマンド行呼び出しを使用してサイレントに、WebSphere Process Server および基盤となる WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のコピーをアンインストールする方法について説明します。

始める前に

この手順を使用して、WebSphere Process Server をアンインストールする前に、以下の作業を行ってください。

- WebSphere Process Server のアンインストールを対話式に行うかサイレント・モードで行うかを決定します。各手順で実行する必要があるステップを、次の全体手順に示します。

制約事項: i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** WebSphere Process Server のアンインストールは、サイレントにのみ実行できます。

- WebSphere Process Server のアンインストール時に、基盤となる WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment 製品をアンインストールするかどうかを決定します。この製品をアンインストールすると、アンインストーラー・プログラムにより、各プロファイル内の構成データおよびアプリケーションも含めて、プロファイルがデフォルトですべて除去されます。一部のプロファイルだけを削除することもできます。

注: i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** Websphere Application Server はデフォルトでアンインストールされます。WebSphere Application Server をアンインストールしない場合、uninstall コマンドでこのオプションを変更する必要があります。

- 必要に応じて、各プロファイルの config フォルダー、installableApps フォルダー、および installedApps フォルダーをバックアップします。別のロケーションに保管されていないすべてのアプリケーションをバックアップします。
- イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーション、イベント・データベース、および Common Event Infrastructure アプリケーションの構成を、この順で除去します。
 - イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションの除去についての説明は、イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションの除去にあります。
 - イベント・データベースの除去についての説明は、『イベント・データベースの除去』にあります。
 - Common Event Infrastructure アプリケーションの構成の除去についての説明は、『Common Event Infrastructure アプリケーションの除去』にあります。

- Business Process Choreographer を構成した場合は、WebSphere Process Server をアンインストールした後で、すべての外部リソースを手動で削除する必要があります。これを行う方法については、『Business Process Choreographer の除去』を参照してください。
- 製品のインストール時に使用したものと同一ユーザー ID を使用して、製品をアンインストールしようとしていることを確認します。

制約事項: 部分的なアンインストール、カスタム・アンインストール、または増分アンインストールを行うことはできません。

このタスクについて

アンインストール・プログラムは、製品のインストール時に作成されます。このプログラムは、インストール済みの機能を除去するための特定のディスク・ロケーションおよびルーチンで、製品インストールごとにカスタマイズされています。

WebSphere Process Server をアンインストールするには、以下の手順を実行します。

プロシージャ

1. 製品のインストール時に使用したものと同一ユーザー ID を使用してログオンします。
2. 基盤となる WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment 製品をアンインストールする場合は、WebSphere Application Server の Web サーバー・プラグインのアンインストール・プログラムを実行します。

ご使用のシステムで、Web サーバーが WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment と共に稼働するように構成されている場合は、プラグインをアンインストールして、Web サーバーからその構成を除去する必要があります。プラグインのアンインストール手順については、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターにあるトピック『WebSphere Application Server 用の Web サーバー・プラグインのアンインストール』を参照してください。

3. すべてのデプロイメント・マネージャー、ノード・エージェント、およびサーバー・プロセスを停止します。これらのプロセスを停止する方法については、77 ページの『第 6 章 サーバーおよびノードの停止』を参照してください。
4. オプション: 必要に応じて、構成ファイルおよびログ・ファイルをバックアップし、後でそれらのファイルを参照します。

アンインストール・プログラムでは、*install_root* ディレクトリーにあるログ・ファイルは除去しません。基盤となる WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment 製品のアンインストールを選択すると、すべてのプロファイルおよびすべてのプロファイル内の全データが除去されます。

必要に応じて、各プロファイルの config フォルダと logs フォルダをバックアップして、後でそれらのフォルダを参照します。プロファイルは再利用できないため、プロファイル全体をバックアップする必要はありません。

対話式 GUI インターフェースを使用してアンインストールしたい場合は、ステップ 5 に進んでください。サイレント・モードでアンインストールしたい場合は、ステップ 6 (253 ページ) に進んでください。

制約事項: i5/OS WebSphere Process Server for i5/OS のインストール済み環境については、サイレント・アンインストールのみが実行できます。

5. アンインストール・ウィザードのみを使用して対話的にアンインストールする場合は、以下を実行してください。

a. プラットフォームに応じて次のコマンドのいずれかを使用し、コマンド行から **uninstall** コマンドを実行します。

- Linux UNIX **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
install_root/uninstall.wbi/uninstall
```

- Windows **Windows** プラットフォームの場合:

```
install_root%uninstall.wbi%uninstall.bat
```

アンインストール・ウィザードが開始し、「ようこそ」パネルが表示されません。

b. 「ようこそ」パネルで、WebSphere Process Server のアンインストール時に、基盤となる WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment 製品をアンインストールするかどうかを選択します。

- これらの製品をアンインストールする場合、「**基盤となっている WebSphere Application Server バージョン 6.1 のアンインストール**」チェック・ボックスを選択するか (WebSphere Application Server がインストールされている場合)、「**基盤となっている WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のアンインストール**」チェック・ボックスを選択します (WebSphere Application Server Network Deployment がインストールされている場合)。

- これらの製品をアンインストールしない場合は、このチェック・ボックスはクリアのままにしておきます。

c. 「次へ」をクリックして、製品のアンインストールを開始します。

アンインストーラー・ウィザードによって、アンインストールするコンポーネントの要約をリストした確認パネルが表示されます。

- 「次へ」をクリックして、製品のアンインストールを続行します。

基盤となる WebSphere Application Server をアンインストールしないことを選択した場合、WebSphere Process Server プロファイル・テンプレートを使用して拡張されたプロファイルは削除されます。

基盤となる WebSphere Application Server をアンインストールすることを選択した場合、コア製品ファイルが削除される前に、すべてのプロファイ

ルを削除するかどうかを選択できるパネルが表示されます。デフォルトでは、すべてのプロファイルが削除されますが、このオプションはパネルで選択解除することができます。

プロファイルをアンインストールした後、アンインストーラー・プログラムによってコア製品ファイルがコンポーネント順に削除されます。

- 製品が削除された後、「終了」をクリックしてウィザードを閉じます。

6. サイレント・モードでアンインストールする場合のみ、WebSphere Process Server をアンインストールするコマンドを実行します。WebSphere Process Server および基盤となる WebSphere Application Server をサイレント・アンインストールし、すべてのプロファイルを削除するには、次のコマンドを発行します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合:

```
install_root/bin/uninstall_wbi/uninstall -OPT isUmbrellaUninstall="true"  
-OPT removeProfilesOnUninstall="true" -silent
```

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
install_root/uninstall.wbi/uninstall  
-OPT isUmbrellaUninstall="true" -OPT removeProfilesOnUninstall="true" -silent
```

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

```
install_root%uninstall.wbi%uninstall.bat  
-OPT isUmbrellaUninstall="true" -OPT removeProfilesOnUninstall="true" -silent
```

WebSphere Process Server および基盤となる WebSphere Application Server をサイレント・アンインストールし、すべてのプロファイルを保持するには、次のコマンドを発行します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合:

```
install_root/bin/uninstall_wbi -OPT isUmbrellaUninstall="true"  
-OPT removeProfilesOnUninstall="false" -silent
```

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
install_root/uninstall.wbi/uninstall  
-OPT isUmbrellaUninstall="true" -OPT removeProfilesOnUninstall="false" -silent
```

- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

```
install_root%uninstall.wbi%uninstall.bat  
-OPT isUmbrellaUninstall="true" -OPT removeProfilesOnUninstall="false" -silent
```

WebSphere Process Server をサイレント・アンインストールし、基盤となる WebSphere Application Server を保持するには、次のコマンドを発行します。このコマンドでは、すべてのプロファイルが削除されます。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合:

```
install_root/bin/uninstall_wbi -OPT isUmbrellaUninstall="false"  
-silent
```

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
install_root/uninstall.wbi/uninstall  
-OPT isUmbrellaUninstall="false" -silent
```

- **Windows** Windows プラットフォームの場合:

```
install_root%uninstall.wbi%uninstall.bat -OPT isUmbrellaUninstall="false"
-silent
```

7. Business Process Choreographer を構成した場合は、すべての外部リソースを手動で削除する必要があります。

以下を実行します。

- WebSphere MQ を Business Process Choreographer 用の Java Message Service (JMS) プロバイダーとして使用している場合は、以前書き留めておいたキュー・マネージャーを削除します。
 - Derby データベースを使用しない Business Process Choreographer ごとに、以前書き留めておいたデータベースを削除します。(Business Process Choreographer 用に Derby データベースを使用する場合は、このデータベースは自動的に削除されています。)
8. 削除されたデプロイメント・マネージャーを説明する管理対象ノード内の構成エントリーをすべて除去します。

共通トポロジーでは、コア製品ファイルは、複数のワークステーション上にインストールされます。1 台のワークステーションにデプロイメント・マネージャーがあり、ほかのワークステーションにはカスタム・プロファイルから作成された管理対象ノードがあります。別のインストール済み環境のカスタム・プロファイルを統合しているデータ・マネージャーを作成したインストール済み環境を削除する場合、それらのカスタム・プロファイルの構成を更新する必要があります。

管理対象ノードにおけるノード構成問題の対応として公式に発表されているのは、最初のインストールの後に **backupConfig** コマンドを使用する方法です。保管する必要のある構成に重要な変更を行った場合は、必ずこのコマンドを再度使用してください。構成の有効なバックアップにより、常に **restoreConfig** コマンドを使用して、構成を以前の状態に戻すことができます。

また、管理対象ノードがあるマシン上で以下のコマンドのいずれかを使用して、ノードを除去することもできます。この例では、*profile_root* は管理対象ノード・プロファイルのインストール・ディレクトリーを表します。

- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: *profile_root/bin/removeNode -force*

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: *profile_root/bin/removeNode.sh -force*

- **Windows** Windows プラットフォームの場合: *profile_root%bin%removeNode.bat -force*

9. 削除された管理対象ノードを説明するデプロイメント・マネージャー内の構成エントリーをすべて除去します。

デプロイメント・マネージャーの管理コンソールを開き、「システム管理」>「ノード」をクリックします。削除したいノードの横にあるチェック・ボックスを選択し、「ノードの除去」を選択します。

管理コンソールが正常にノードを除去できない場合は、デプロイメント・マネージャーが稼働している状態で以下のコマンドを実行します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/bin/cleanupNode node_name`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `install_root/bin/cleanupNode.sh node_name`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root%bin%cleanupNode.bat node_name`

デプロイメント・マネージャーにおけるノード構成問題の対応として公式に発表されているのは、最初のインストールの後に **backupConfig** コマンドを使用する方法です。保管する必要のある構成に重要な変更を行った場合は、必ずこのコマンドを再度使用してください。構成の有効なバックアップにより、常に **restoreConfig** コマンドを使用して、構成を以前の状態に戻すことができます。

結果

この手順では WebSphere Process Server をアンインストールし、および選択した場合には、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment をアンインストールします。アンインストール・ウィザードを実行した後は、logs ディレクトリーなどのわずかなディレクトリーだけがディレクトリー構造に残ります。

アンインストール・プログラムにより、以下のファイルを含めて、このディレクトリーにいくつかのログ・ファイルが残されます。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `install_root/logs/wbi/uninstall/log.txt`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `install_root/logs/wbi/uninstall/log.txt`
- **Windows** プラットフォームの場合: `install_root%logs%wbi%uninstall%log.txt`

uninstlog.txt ファイルは、ファイル・システムまたはその他の異常なエラーを記録します。このログで、成功を示す INSTCONFSUCCESS を探します。

```
Uninstall, com.ibm.ws.install.ni.ismp.actions.  
  ISMPLogSuccessMessageAction, msg1,  
  INSTCONFSUCCESS
```

製品を同じインストール・ルート・ディレクトリーに再インストールする場合は、アンインストールが正常に終了したかどうかに応じて、以下のいずれかの操作を行う必要があります。

- アンインストールが正常に終了した場合は、`install_root` ディレクトリーを手動で除去する必要があります。

重要: WebSphere Process Server をアンインストールして、同じディレクトリーに再インストールする場合は、WebSphere Process Server と、その基盤となる WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network

Deployment 製品の両方をアンインストールする必要があります。したがって、手動で除去する必要のある `install_root` ディレクトリーは空になります。

- アンインストールが正常終了しなかった場合は、残っている製品の成果物を手動でアンインストールする必要があります。詳しくは、『アンインストールに失敗した後の再インストールの準備』を参照してください。再インストールする予定がない場合は、このタスクを行う必要はありません。

このトピックに記載されたコマンドについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 インフォメーション・センターの『Command-line utilities』セクションにある以下のトピックを参照してください。

- `stopManager`
- `stopNode`
- `stopServer`
- `backupConfig`
- `restoreConfig`

アンインストールに失敗した後の再インストールの準備

ソフトウェアの再インストール方法について説明します。アンインストール・プログラムが正常に完了しなかった場合、ファイルが残り、このために元のディレクトリーに再インストールできないことがあります。このトピックでは、再インストールのために行う必要がある手順の概要を示します。




始める前に

クリーンではないマシンに再インストールすることができます。ただし、このようなインストールでは、オリジナル・ディレクトリーへのインストールを防止することができる共存シナリオが作成されます。

マシンをクリーンにするというのは、アンインストール・ウィザードまたはサイレント・アンインストール手順の使用後に残されるログ・ファイルなど、以前のインストールによるすべてのファイルを削除することです。手順を開始する前に、必要な場合は、ログ・ファイルをバックアップします。ログ・ファイルのロケーションについては、ログ・ファイルを参照してください。

このタスクについて

その他の関連する製品がインストールの一部に含まれている場合があります、それらをアンインストールする必要があります。詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment および IBM HTTP Server バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある次のトピックを参照してください。

- Uninstalling the Web server plug-ins for WebSphere Application Server
-    IBM HTTP Server のアンインストール
- Uninstalling Application Client for WebSphere Application Server

アンインストールに失敗した後で再インストールの準備を行うには、ご使用のプラットフォームに適した手順に従ってください。

- AIX システム

- HP-UX システム
- i5/OS システム
- Linux システム
- Solaris システム
- Windows システム

システムをクリーンにすると、削除したインストール済み環境の痕跡がすべてなくなります。システムをクリーンにした後、『ソフトウェアのインストール』に進み、製品のインストール方法を再度参照してください。

AIX システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に AIX システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

始める前に

この手順を実行する前に、WebSphere Process Server がアンインストール・ウィザードを使用して、あるいはサイレントにアンインストールされていること、およびこの手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、388 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- */usr/.ibm/.nif/.nifregistry* ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、すべての WebSphere Application Server 製品を検索します。
- 作成されたプロファイルごとの *install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log* ファイルは、*invokeWSProfile* メソッドを含むスタンザにインストール・ロケーションを示します。

製品のアンインストールでは、*profile_root/logs* ファイルを含む *profile_root* ディレクトリー (*profile_root* はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。*install_root/logs* ディレクトリーも残ります。

このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべての

ファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

重要: この手順のステップを通して、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去を行います。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

プロシージャー

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログインします。
2. **kill** コマンドを使用して、稼働中のすべての Java プロセスを停止します。

稼働中の Java プロセスが WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品と無関係で、それらを停止できない場合は、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止してください。次のコマンドを使用して、実行中のすべてのプロセスを判別します。

```
ps -ef | grep java
```

kill -9 java_pid_1 java_pid_2...java_pid_n コマンドで、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止します。

3. インストール済みの WebSphere Process Server および WebSphere Application Server コンポーネントをリストします。

関連パッケージを検索するには、以下のコマンドを入力します。

```
ls1pp -l | grep -i WS
```

WebSphere Process Server パッケージのみを検索するように、照会の範囲を絞るには、次のコマンドを入力します。

```
ls1pp -l | grep -i WSEAA61
```

WebSphere Process Server のパッケージ名の接頭部は WSE、接尾部は 61 です。WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のパッケージ名の接頭部は WSB または WSP、接尾部は 61 です。アンインストールしなかった WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージは除去しないでください。

4. ディレクトリーを /usr/IBM ディレクトリー、またはご使用のインストール済み環境の相当するトップ・ディレクトリーに変更します。
5. **rm -rf WebSphere** と入力して、この WebSphere Process Server 関連のディレクトリーを削除します。ただし、ProcServer (または、削除した WebSphere Process Server インストール済み環境に関連付けられた AppServer ディレクトリー) が WebSphere ディレクトリー内の唯一のディレクトリーである場合のみ削除を実行してください。このディレクトリーに含まれるすべての製品を削除する場合は、このディレクトリーを削除します。

6. `installRegistryUtils` コマンドを使用して、インストール済みのすべての WebSphere Server 製品のインストール・ロケーションを調べ、インストール・レジストリーから対象の製品を削除します。
7. `vpd.properties` ファイルを編集して、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server のエントリーを除去します。

このファイルは、`root` ディレクトリーなどのオペレーティング・システムのインストール・ディレクトリー内にあります。アンインストールした WebSphere Process Server のインストール済み環境のすべてのエントリーを除去します。WebSphere Process Server の各エントリーは、`WSE` という文字で始まり、その後リリース番号を表す数値が続いています。また、同じ行に、アンインストールしたインストール済み環境に対応する `install_root` パスが含まれます。(ファイルがテキスト・エディターでワード・ラップをオフにして表示された場合、各エントリーは 1 行に表示されます。) 例えば、次のような行が表示されたとします。

```
WSEAA61|6|1|0|0|6.1.0.0|4=IBM WebSphere Process Server|
IBM WebSphere Process Server|IBM WebSphere Process Server V6.1.0.0|
IBM|http://www.ibm.com|6.1.0.0|6.1.0.0|
C:%Program Files%IBM%WebSphere%Procserver|0|0|1|WSEAA61|6|1|0|0|6.1.0.0|4|0|
false|"_uninst" "uninstall.jar" "uninstall.dat" "
"|true|3|WSEAA61|6|1|0|0|6.1.0.0|4
```

この行は、ディレクトリー `C:%Program Files%IBM%WebSphere%ProcServer` にインストールされた Websphere Application Server に対応しています。

注: 本書内では、このテキストは、書式設定のために複数行に表示されていますが、`vpd.properties` ファイル内では 1 行になっています。

`vpd.properties` ファイル内の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の各エントリーの形式はこれと同様です。削除するエントリーの判別に役立つエントリーの情報、および `vpd.properties` ファイルについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにあるトピック『`vpd.properties` ファイル』を参照してください。

`vpd.properties` ファイルは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) プログラムがインストールするほかの製品で使用するため、削除したり、名前変更したりしないでください。`vpd.properties` ファイル内に、アンインストールする WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品のエントリーしか存在しない場合は、このファイルを削除することができます。

8. `WPS_ODM_clean.sh` スクリプトを実行します。
 - a. WebSphere Application Server Product Support サイトにある「Manual Object Data Manager (ODM) cleanup script for AIX」というタイトルの技術情報文書からスクリプトを入手します。
 - b. `WPS_ODM_clean.sh` スクリプトを編集し、ストリング `/usr/WebSphere/AppServer` のすべてのインスタンスを実際のインストール・ルート・ディレクトリーで置き換えます。
 - c. コマンド行から `WPS_ODM_clean.sh` スクリプトを実行します。

9. .nifregistry ファイルをクリーンにします。このファイルをクリーンにする手順は以下のとおりです。
 - a. .nifregistry ファイルをバックアップします。
 - b. テキスト・エディターで .nifregistry ファイルを開きます (行の折り返しは必ずオフにしてください)。
 - c. <INSTALL_LOC> および <PRODUCT_ID> を含む行をすべて検索して削除します。ここで <INSTALL_LOC> は、アンインストールに失敗した環境があるインストールの場所であり、<PRODUCT_ID> は、アンインストールしようとしている製品の製品 ID です。
 - d. .nifregistry ファイルを保存して、テキスト・エディターを閉じます。

結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

次のタスク

システムをクリーンにした後、79 ページの『第 7 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

HP-UX システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に HP-UX システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

始める前に

この手順を実行する前に、アンインストール・ウィザードを使用して、あるいはサイレントに WebSphere Process Server がアンインストールされていること、およびこの手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、388 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- /opt/.ibm/.nif/.nifregistry ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、すべての WebSphere Application Server 製品を検索します。

- 作成されたプロファイルごとの `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log` ファイルは、`invokeWSProfile` メソッドを含むスタンプにインストール・ロケーションを示します。

製品のアンインストールでは、`profile_root/logs` ファイルを含む `profile_root` ディレクトリー (`profile_root` はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。`install_root/logs` ディレクトリーも残ります。

このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

重要: この手順のステップを通して、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去を行います。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

プロシージャ

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. **kill** コマンドを使用して、稼働中のすべての Java プロセスを停止します。

稼働中の Java プロセスが WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品と無関係で、それらを停止できない場合は、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止してください。次のコマンドを使用して、実行中のすべてのプロセスを判別します。

```
ps -ef | grep java
```

kill -9 java_pid_1 java_pid_2..java_pid_n コマンドで、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止します。

3. HP-UX System Administration Manager (SAM) ユーティリティーを使用して、パッケージを除去します。
 - a. SAM ユーティリティーを開始して、ご使用の DISPLAY および TERM 環境変数が、適切に設定されていることを検証します。
 - b. 「**Software management**」を選択します。
 - c. 「**View installed software**」を選択します。
 - d. SD リストで、WebSphere Process Server、WebSphere Application Server エントリーを探します。
 - e. SD リストをクローズします。
 - f. 「**Remove local host software**」を選択します。

- g. SD 除去リストに表示されている以下のインスタンスをすべて選択します。
 - WSEAA61
 - WSBAA61
 - h. 「アクション (Actions)」 > 「削除対象としてマーク (Mark for remove)」を選択します。
 - i. 「アクション (Actions)」 > 「削除 (Remove)」を選択します。
 - j. 「Remove analysis」ダイアログ・ボックスで「OK」を選択します。
 - k. 「Logs」を選択して、選択したパッケージの除去をリアルタイムで表示します。
 - l. すべてのパッケージを除去した後、「Done」を選択します。
 - m. SAM を終了します。
4. パッケージを検索し、除去されたことを確認します。

`swlist | grep WS` と入力すると、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server のパッケージが表示されます。

WebSphere Process Server パッケージのみを検索するように、照会の範囲を絞るには、次のコマンドを入力します。

```
swlist | grep WSEAA61
```

5. インストール・ルート・ディレクトリーを除去します。

`rm -rf install_root` と入力して、WebSphere Process Server を除去します。アンインストールした製品の正しい `install_root` を指定してください。例えば、デフォルト・インストール・ディレクトリー `/opt/IBM/WebSphere/ProcServer` から WebSphere Process Server をアンインストールした場合は、以下のコマンドを実行します。

```
rm -rf /opt/IBM/WebSphere/ProcServer
```

6. `installRegistryUtils` コマンドを使用して、インストール済みのすべての WebSphere Server 製品のインストール・ロケーションを調べ、インストール・レジストリーから対象の製品を削除します。
7. `.nifregistry` ファイルをクリーンにします。このファイルをクリーンにする手順は以下のとおりです。
- a. `.nifregistry` ファイルをバックアップします。
 - b. テキスト・エディターで `.nifregistry` ファイルを開きます (行の折り返しは必ずオフにしてください)。
 - c. `<INSTALL_LOC>` および `<PRODUCT_ID>` を含む行をすべて検索して削除します。ここで `<INSTALL_LOC>` は、アンインストールに失敗した環境があるインストールの場所であり、`<PRODUCT_ID>` は、アンインストールしようとしている製品の製品 ID です。
 - d. `.nifregistry` ファイルを保存して、テキスト・エディターを閉じます。

結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

次のタスク

システムをクリーンにした後、79 ページの『第 7 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

i5/OS システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に i5/OS システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

始める前に

この手順を実行する前に、WebSphere Process Server はサイレントにアンインストールされていること、およびこの手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install_root* および *profile_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、388 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- /QIBM/WAS/.ibm/.nif/.nifregistry ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。
- 作成されたプロファイルごとの *user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_create.log* ファイルは、`<method>invokeWSProfile</method>` タグを含むスタンザにインストール・ロケーションを示します。

製品をアンインストールしても、*user_data_root/profileRegistry/logs* は残りません。*install_root/logs* ディレクトリーも残りません。

このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

重要: この手順のステップを通して、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去を行います。対象となる

WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

プロシージャー

1. *ALLOBJ と *SECADM の特殊権限を持つユーザー・プロファイルで i5/OS システムにサインオンします。
2. Qshell で、*install_root* ディレクトリーに移動します。
3. 削除対象のインストールに関連するサブディレクトリーを削除します。該当インストールのサブディレクトリー、およびその中にあるすべてのファイルとディレクトリーを削除してください。

注: このサブディレクトリーは、増分インストールを実行するたびに 1 つずつ追加されます。例えば、1 番目のインストールでは *ProcServer*、2 番目のインストールでは *ProcServer1*、となります。

4. 次に、*user_data_root/profiles* ディレクトリーに移動します。
5. 削除対象のインストールに関連するサブディレクトリーを削除します。該当インストールのサブディレクトリー、およびその中にあるすべてのファイルとディレクトリーを削除してください。

注: このサブディレクトリーは、増分インストールを実行するたびに 1 つずつ追加されます。例えば、1 番目のインストールでは *ProcServer*、2 番目のインストールでは *ProcServer1*、となります。

6. /QIBM/WAS/.ibm/.nif/.nifregistry ファイルを編集します。該当インストールを参照しているすべてのレジストリー項目を削除します。
7. これが、システムから削除する WebSphere Process Server の最後のインストールである場合は、i5/OS CL コマンド・プロンプトで次のように DLTLICPGM コマンドを発行して、WebSphere Process Server の i5/OS ライセンス・プログラムのレジストリー項目も削除する必要があります。

```
DLTLICPGM LICPGM(5724L01)
```

結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

次のタスク

システムをクリーンにした後、79 ページの『第 7 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

Linux システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に Linux システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行し

た後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

始める前に

この手順を実行する前に、アンインストール・ウィザードを使用して、あるいはサイレントに WebSphere Process Server がアンインストールされていること、およびこの手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、388 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- *opt/.ibm/.nif/.nifregistry* ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品およびすべての WebSphere Application Server 製品のインストール・ルートを示します。作成されたプロファイルごとの *install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log* ファイルは、*invokeWSProfile* メソッドを含むスタンプにインストール・ロケーションを示します。

製品のアンインストールでは、*profile_root/logs* ディレクトリーを含む *profile_root* ディレクトリー (*profile_root* はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。*install_root/logs* ディレクトリーも残ります。

このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

重要: この手順のステップを通して、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去を行います。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

プロシージャ

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. **kill** コマンドを使用して、稼働中のすべての Java プロセスを停止します。

稼働中の Java プロセスが WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品と無関係で、それらを停止できない場合は、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止してください。次のコマンドを使用して、実行中のすべてのプロセスを判別します。

```
ps -ef | grep java
```

kill -9 java_pid_1 java_pid_2...java_pid_n コマンドで、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止します。

3. 関連パッケージを検索します。以下のコマンドを実行すると、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージが表示されます。

```
rpm -qa | grep WS
```

WebSphere Process Server パッケージのみを検索するように、照会の範囲を絞るには、次のコマンドを入力します。

```
rpm -qa | grep WSEAA61
```

例えば、コマンド `rpm -qa | grep WSEAA61` を実行した後、以下のようなパッケージ・リストを表示することができます。

```
WSEAA61WBICoreComponent-6.1-0
WSEAA61WBIServerSamplesComponent-6.1-0
WSEAA61BPCCComponent-6.1-0
WSEAA61WBIServerComponent-6.1-0
WSEAA61JavadocsComponent-6.1-0
WSEAA61LicensingComponent-6.1-0
WSEAA61CEISamplesComponent-6.1-0
WSEAA61AddBytesNonHP-6.1-0
WSEAA61WBICoreSamplesComponent-6.1-0
WSEAA61CEIComponent-6.1-0
WSEAA61BPCCSamplesComponent-6.1-0
```

WebSphere Process Server のパッケージ名の接頭部は WSE、接尾部は 61 です。WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のパッケージ名の接頭部は WSB または WSP、接尾部は 61 です。アンインストールしなかった WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージは除去しないでください。

4. 削除するパッケージがある場合は、`rpm -e packagename` と入力してアンインストールした製品のパッケージを除去します。

あるいは、以下のようにパッケージを検索し、リスト中のすべての項目が削除対象であることを確認することができます。

```
rpm -qa | grep WSEAA61
```

リストに削除する予定のパッケージのみが含まれている場合、以下のコマンドを使用してすべてのパッケージを除去します。

```
rpm -qa | grep WSEAA61 | xargs rpm -e
```

パッケージの依存関係に問題がある場合は、以下のコマンドを使用してパッケージを除去します。

```
rpm -e packagename --nodeps --justdb
```

`nodeps` オプションを指定すると、依存関係のチェックがスキップされます。`justdb` オプションを指定すると、パッケージのデータベースのみが更新され、ファイル・システムは更新されません。`nodeps` オプションだけを指定すると、パッケージを除去する際に、依存するファイル・システム (ファイルおよびディレクトリー) にミスマッチが生じた場合に、障害が発生する可能性があります。

5. インストール・ルート・ディレクトリーを除去します。 `rm -rf install_root` と入力して、WebSphere Process Server のディレクトリーを除去します。アンインストールした製品の正しい `install_root` を指定してください。例えば、デフォルト・インストール・ディレクトリー `/opt/ibm/WebSphere/ProcServer` から WebSphere Process Server をアンインストールした場合は、以下のコマンドを実行します。

```
rm -rf /opt/ibm/WebSphere/ProcServer
```

6. `vpd.properties` ファイルを編集して、WebSphere Process Server と、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のエントリーを除去します。

このファイルは、`root` ディレクトリーなどのオペレーティング・システムのインストール・ディレクトリー内にあります。アンインストールした WebSphere Process Server のインストール済み環境のすべてのエントリーを除去します。WebSphere Process Server の各エントリーは、`WSE` という文字で始まり、その後にリリース番号を表す数値が続いています。また、同じ行に、アンインストールしたインストール済み環境に対応する `install_root` パスが含まれます。(ファイルがテキスト・エディターでワード・ラップをオフにして表示された場合、各エントリーは 1 行に表示されます。) 例えば、次のような行が表示されたとします。

```
WSEAA61|6|1|0|0|6.1.0.0|4=IBM WebSphere Process Server|
IBM WebSphere Process Server|IBM WebSphere Process Server V6.1.0.0|
IBM|http://www.ibm.com|6.1.0.0||6.1.0.0|
C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥Procserver|0|0|1|WSEAA61|6|1|0|0|6.1.0.0|4|0|
false|"_uninst" "uninstall.jar" "uninstall.dat" "
"|true|3|WSEAA61|6|1|0|0|6.1.0.0|4
```

この行は、ディレクトリー `C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥ProcServer` にインストールされた WebSphere Process Server に対応しています。

注: 本書内では、このテキストは、書式設定のために複数行に表示されていますが、`vpd.properties` ファイル内では 1 行になっています。

`vpd.properties` ファイル内の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の各エントリーの形式はこれと同様です。削除するエントリーの判別に役立つエントリーの情報、および `vpd.properties` ファイルについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにあるトピック『`vpd.properties` ファイル』を参照してください。

`vpd.properties` ファイルは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) プログラムがインストールするほかの製品で使用するため、削除したり、名前変更したりしないでください。`vpd.properties` ファイル内に、アンインストールする WebSphere

Process Server または WebSphere Application Server 製品のエントリーしか存在しない場合は、このファイルを削除することができます。

7. /opt/.ibm/.nif/.nifRegistry ファイルを編集します。

このファイルは、製品のインストールに使用したユーザー ID のホーム・ディレクトリー内にあります。

/opt/.ibm/.nif/.nifRegistry ファイルには、WebSphere Process Server 製品のインストール環境ごとに 1 行のエントリー、WebSphere Application Server 製品のインストール環境ごとに 1 つのエントリーがあります。

フラット・ファイル・エディターを使用して、除去した製品のインストール・ルート・ディレクトリーを示す行を除去します。その他の行はそのままにしておきます。

結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

次のタスク

システムをクリーンにした後、79 ページの『第 7 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

Solaris システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に Solaris システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

始める前に

この手順を実行する前に、アンインストール・ウィザードを使用して、あるいはサイレントに WebSphere Process Server がアンインストールされていること、およびこの手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の *install_root* ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、388 ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- `/opt/.ibm/.nif/.nifregistry` ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、すべての WebSphere Application Server 製品を検索します。
- 作成されたプロファイルごとの `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log` ファイルは、`invokeWSProfile` メソッドを含むスタンザにインストール・ロケーションを示します。

製品のアンインストールでは、`profile_root/logs` ディレクトリー・ファイルを含む `profile_root` ディレクトリー (`profile_root` はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。`install_root/logs` ディレクトリーも残ります。

このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

重要: この手順のステップを通して、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去を行います。対象となる WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

プロシージャ

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. `kill` コマンドを使用して、稼働中のすべての Java プロセスを停止します。

稼働中の Java プロセスが WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品と無関係で、それらを停止できない場合は、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止してください。次のコマンドを使用して、実行中のすべてのプロセスを判別します。

```
ps -ef | grep java
```

`kill -9 java_pid_1 java_pid_2..java_pid_n` コマンドで、すべての WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品関連プロセスを停止します。

3. 関連パッケージを検索します。以下のコマンドを実行すると、WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージが表示されます (これらのコマンドを使用してもパッケージが表示されない場合は、次のステップをスキップしてください)。

```
pkginfo | grep WS
```

WebSphere Process Server パッケージのみを検索するように、照会の範囲を絞るには、次のコマンドを入力します。

```
pkginfo | grep WSEAA61
```

例えば、コマンド `pkginfo | grep WSEAA61` を実行した後、以下のようなパッケージ・リストを表示することができます。

```
application WSEAA61AB          Non-HPRepository
application WSEAA61BM          BPCSamples
application WSEAA61BN          BPCSamples.ismp.component
application WSEAA61BO          Bpc.ismp.component
application WSEAA61BP          Bpc
application WSEAA61CA          WBICoreSamples.ismp.component
application WSEAA61CC          WBICore.ismp.component
application WSEAA61CE          CEI
application WSEAA61CI          CEI.ismp.component
application WSEAA61CM          CEISamples
application WSEAA61CS          WBICoreSamples
application WSEAA61EMSCO       CEISamples.ismp.component
application WSEAA61JC          Javadocs.ismp.component
application WSEAA61JD          Javadocs
application WSEAA61LC          LAP Component
application WSEAA61SA          Samples
application WSEAA61SC          WBIServerSamples.ismp.component
application WSEAA61SS          WBIServerSamples
application WSEAA61WC          WBICore
application WSEAA61WS          WBIServer
```

WebSphere Process Server のパッケージ名の接頭部は WSE、接尾部は 61 です。WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のパッケージ名の接頭部は WSB または WSP、接尾部は 61 です。アンインストールしなかった WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージは除去しないでください。

4. ディレクトリーをパッケージ情報が登録されているディレクトリーに変更します。

```
cd /var/sadm/pkg
```

5. 次のコマンドを実行し、WebSphere Process Server または WebSphere Application Server 製品関連のパッケージをすべて除去します。

```
pkgrm packagename1 packagename2 packagename3 ...
```

アンインストールしなかった WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品のパッケージは除去しないでください。

`/var/sadm/pkg` ディレクトリーから次のコマンドを発行し、`/var/sadm/pkg` ディレクトリーに登録されているすべての WebSphere Application Server 製品関連パッケージを検索および除去します。

- a. 正しいディレクトリー `cd /var/sadm/pkg` に移動します。
- b. WebSphere Application Server 製品の場合は `ls |grep WSB|xargs -i pkgrm -n {}`
- c. WebSphere Application Server クライアントの場合は `ls |grep WSC|xargs -i pkgrm -n {}`
- d. WebSphere Application Server の Web サーバー・プラグインの場合は `ls |grep WSP|xargs -i pkgrm -n {}`
- e. WebSphere Process Server 製品の場合は `ls |grep WSE|xargs -i pkgrm -n {}`

WebSphere Application Server の Web サーバー・プラグインのパッケージ名は次のとおりです。

WSPAA61
WSPAA61AC
WSPAA61BC
WSPAA61CC
WSPAA61DC
WSPAA61FC
WSPAA61FB
WSPAA61GC
WSPAA61HC

パッケージを除去する際に問題が発生する場合は、除去前のファイルを含め、`/var/sadm/pkg` ディレクトリーの関連パッケージ・ディレクトリーを除去します。例えば、`pkgrm -n WSBA61` コマンドを実行する前に、以下のファイルを除去します。

```
/var/sadm/pkg/WSBA61/install/preremove
```

6. インストール・ルート (*install_root*) ディレクトリー内にはないプロファイル・ディレクトリーをすべて除去します。

プロファイル・ディレクトリーのロケーションを判別するには、最初に `wasprofile -listProfiles` コマンドを使用してプロファイル名を表示します。その後、プロファイル・ディレクトリーが存在する場所を判別するために、`wasprofile -getPath -profileName profile_name` コマンド (*profile_name* は特定のディレクトリーに対応するプロファイルの名前) を使用します。

7. インストール・ルート・ディレクトリーを除去します。 `rm -rf install_root` と入力して、WebSphere Process Server のディレクトリーを除去します。アンインストールした製品の正しい *install_root* を指定してください。例えば、デフォルト・インストール・ディレクトリー `/opt/IBM/WebSphere/ProcServer` から WebSphere Process Server をアンインストールした場合は、以下のコマンドを実行します。

```
rm -rf /opt/IBM/WebSphere/ProcServer
```

同様に、プロファイル・ディレクトリーもすべて除去します。

8. `/opt/.ibm/.nif/.nifregistry` ファイルを編集します。

このファイルには、各 WebSphere Process Server 製品のインストール環境ごとに 1 行のエントリー、各 WebSphere Application Server 製品のインストール環境ごとに 1 つのエントリーがあります。

それぞれが除去した製品を示す行が 1 行のみになった場合、これらのファイルを削除することができます。そうでない場合は、フラット・ファイル・エディターを使用して、除去した製品のインストール・ルート・ディレクトリーを示す行を除去します。その他の行はそのままにしておきます。

結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

次のタスク

システムをクリーンにした後、79ページの『第7章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

Windows システムでアンインストールに失敗した後の再インストールの準備

WebSphere Process Server のアンインストールに失敗した場合に Windows システムをクリーンにする方法について説明します。アンインストール・プログラムを実行した後に、製品を元のディレクトリーに再インストールする際にこれを妨げる可能性のあるレジストリー項目を、この手動ステップで除去します。

始める前に

この手順を実行する前に、アンインストール・ウィザードを使用して、あるいはサイレントに WebSphere Process Server がアンインストールされていること、およびこの手順が最後まで正常に実行されていないことを確認してください。この手順が正常に実行されている場合は、この作業を行う必要はありません。

正しい製品を除去してクリーンなシステムを作成できるように、製品の `install_root` ディレクトリーを判別します。

デフォルトのディレクトリーのロケーションについては、388ページの『製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー』を参照してください。

インストール・ウィザードおよびプロファイル管理ツールにより、インストール・ルート・ディレクトリーに対して独自のロケーションを指定することができます。以下のファイルを調べて、実際のロケーションを判別します。

- `C:\Windows*.nifRegistry` ファイルは、インストール済みのすべての WebSphere Process Server 製品のインストール・ルートを示します。また、すべての WebSphere Application Server 製品を検索します。
- 作成されたプロファイルごとの `install_root\logs\manageprofiles\profile_name_create.log` ファイルは、`invokeWSProfile` メソッドを含むスタンプにインストール・ロケーションを示します。

製品のアンインストールでは、`profile_root\logs` ディレクトリーを含む `profile_root` ディレクトリー (`profile_root` はプロファイルのインストール・ロケーションを表す) が削除されないまま残ります。`install_root\logs` ディレクトリーも残ります。

このタスクについて

以前のインストールのファイルが残っているときに製品を新規ディレクトリーに再インストールすると、共存シナリオを作成することができます。ただし、すべてのファイルおよびレジストリー項目を削除すると、WebSphere Process Server を完全に除去することができます。システムをクリーンにすることにより、共存なしで、元のディレクトリーに製品を再インストールすることができます。

重要: この手順のステップを通して、WebSphere Process Server と WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の両方のアンインストールの後に残された成果物の除去を行います。対象となる

WebSphere Application Server 製品は、WebSphere Process Server のインストール済み環境の基盤となる製品であることが前提となっています。

以下の手順を実行して、クリーンなシステムを作成します。

プロシージャー

1. 製品をインストールしたユーザーと同じユーザー ID でログオンします。
2. Emergency Recovery Disk があることを確認します。このディスクを作成するための説明は、Windows のヘルプ文書に記載されています。

このステップは安全機能です。この手順では、リカバリー・ディスクは必要ありません。

3. Windows のリソース・キットにある regback.exe プログラムを使用してレジストリーをバックアップします。

このステップは安全機能です。この手順では、レジストリーのバックアップ・コピーは必要ありません。

4. アンインストールした WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品の製品レジストリー項目を削除します。

コマンド・プロンプトから regedit.exe を呼び出して、Windows システムのレジストリーを編集します。

注意:

レジストリーの取り扱いには注意してください。レジストリー・エディターを使用して、レジストリーの内容を表示したり編集したりする際に、間違えることがよくあります。エディターは、きわめて危険な結果を生じる場合もある編集上のエラーについて、警告を発してはくれません。レジストリーが壊れることにより、システムが破壊され、Windows オペレーティング・システムを再インストールせざるを得なくなる場合もあります。

- a. **Ctrl-F** を使用して **WebSphere** のすべてのインスタンスを検索し、個々のエントリーを削除するかどうかを判断します。WebSphere Process Server および WebSphere Application Server に関連したすべてのエントリーを除去できない場合がありますが、これは問題ありません。
- b. WebSphere Process Server および WebSphere Application Server 製品に関連するキーを展開し、選択します。

WebSphere Application Server 製品用の以下のキーがある場合は、削除します。

- HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Explorer¥MenuOrder¥Start Menu2¥Programs¥IBM WebSphere¥Application Server Network Deployment V6.1
- HKEY_CURRENT_USER¥Software¥IBM¥WebSphere Application Server Network Deployment¥6.1.0.0
- HKEY_LOCAL_MACHINE¥ Software¥ IBM¥ Web server Plug-ins for IBM WebSphere Application Server¥ 6.1.0.0

WebSphere Process Server 製品用の以下のキーがある場合は、以下のキーを削除します。

- HKEY_CURRENT_USER¥ Software¥ Microsoft¥ Windows¥ Currentversion¥ Explorer¥ MenuOrder¥ Start Menu¥ Programs¥ IBM WebSphere¥ Process Server 6.1
 - HHKEY_LOCAL_MACHINECURRENT_USER¥Software¥IBM¥WebSphere Process Server¥6.1.0.0
- c. 関連するキーごとに、メニュー・バーから「編集」>「削除」を選択します。
 - d. キーの削除について確認を求められた場合は、「はい」を選択します。
 - e. 終了したら、メニュー・バーから「レジストリ エディタの終了」の順に選択します。
5. アンインストールした製品のインストール・ルート・ディレクトリーを削除します。
 6. regedit を使用して、次のレジストリー・キーを削除します:
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥IBM WAS61Service
 7. すべてのプロファイル・ディレクトリーを判別し、それらのディレクトリーを削除します。
 8. Windows エクスプローラー・ウィンドウを開き、以下のディレクトリーを参照します。
 - C:¥Documents and Settings¥All Users¥スタート メニュー¥プログラム¥IBM WebSphere
 - C:¥Documents and Settings¥¥スタート メニュー¥プログラム¥IBM WebSphere

インストールされた WebSphere Application Server が 1 つのみの場合は、以下のフォルダーを削除します (このフォルダーが存在する場合)。

Application Server v6.1

インストールされた WebSphere Application Server Network Deployment が 1 つのみの場合は、以下のフォルダーを削除します (このフォルダーが存在する場合)。

Application Server Network Deployment v6.1

インストールされた WebSphere Process Server が 1 つのみの場合は、以下のフォルダーを削除します (このフォルダーが存在する場合)。

Process Server 6.1

複数のバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Process Server がインストールされている場合は、フォルダー名の後に数値が付加されます (例: Application Server Network Deployment v6.1 (2) または Process Server 6.1 (2))。この場合は、以下の手順を実行して、削除すべきフォルダーを判別することができます。

- a. Windows エクスプローラーで、
 - C:¥Documents and Settings¥All Users¥スタート メニュー¥プログラム¥IBM WebSphere

- C:\Documents and Settings\¥¥スタート メニュー¥¥プログラム¥¥IBM WebSphere

を開きます。

- IBM WebSphere フォルダ内には Application Server v6.1 または Application Server Network Deployment v6 サブフォルダが存在する場合は、このサブフォルダを開きます。
 - First steps サブフォルダを右クリックして、「プロパティ」を選択し、「ショートカット」タブを選択します。
 - ターゲット・プロパティを調べて、アンインストールに失敗した WebSphere Application Server のインストールをターゲット・ディレクトリーが指しているかどうかを確認します。指している場合は、Application Server v6.1 または Application Server Network Deployment v6.1 フォルダを削除します。
 - ステップ b から d までの手順を繰り返します。ただし、今回は、ステップ b では Process Server 6.1 (2) サブフォルダを開くことから始めて、ステップ d ではターゲット・ディレクトリーがアンインストールに失敗した WebSphere Process Server のインストールを指しているかどうかを確認します。
 - このほかのフォルダ・セットについて (例えば、Application Server Network Deployment v6.1 (2) または Process Server 6.1 (2))、ステップ b から e までの手順を繰り返します。
9. .nifRegistry ファイルの項目を編集します。

これらのファイルは、製品のインストールに使用したユーザー ID のホーム・ディレクトリー内にあります。

.nifRegistry ファイルには、各 WebSphere Process Server 製品のインストール環境ごとに 1 行、および各 WebSphere Application Server 製品のインストール環境ごとに 1 行のエントリーがあります。

それぞれが除去した製品を示す行が 1 行のみになった場合、これらのファイルを削除することができます。そうでない場合は、フラット・ファイル・エディターを使用して、除去した製品のインストール・ルート・ディレクトリーを示す行を除去します。その他の行はそのままにしておきます。ファイルにリストされているインストール環境すべてを除去するまでは、.nifRegistry ファイルを削除しないでください。

10. 再始動を指示するプロンプトが表示された場合、サーバーを再始動します。

結果

この手順を行うと、システムがクリーンになります。これにより、同じディレクトリーに再インストールすることができます。クリーンなシステムには、以前削除したインストールの痕跡は残っていません。

次のタスク

システムをクリーンにした後、79 ページの『第 7 章 ソフトウェアのインストール』に進み、インストール手順を選択してください。

Business Process Choreographer のアンインストール

Business Process Choreographer コンポーネントを WebSphere Process Server のインストール済み環境から除去する方法については、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.1 インフォメーション・センターで、『**WebSphere Process Server** のインストールおよび構成』>『ソフトウェアのアンインストール』>『**Business Process Choreographer** 構成の除去』のトピックを参照してください。この情報は *Business Process Choreographer PDF* でも検索できます。

第 14 章 IBM Installation Factory の使用

IBM Installation Factory は、特定のニーズに合うように調整された WebSphere 製品を、信頼性のある反復可能な方法でインストールするための、すぐに使用可能なインストール・パッケージを作成します。このインストール・パッケージは、カスタマイズされた WebSphere Process Server のインストール・イメージです。このイメージには、1 つ以上の保守パッケージ、スクリプト、および作成されたインストーションのカスタマイズに役立つその他のファイルを含めることができます。

カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を作成してインストールする前に、WebSphere Process Server のインストール方法と構成方法を理解しておいてください。『WebSphere Process Server の計画』の PDF を参照してください。

また、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.1 のオンライン・インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6rxmx/index.jsp>) の『WebSphere Process Server の計画』で、計画のトピックを参照してください。

インストール方針の計画が完了すると、インフォメーション・センターで以下のパスをたどり、IBM Installation Factory を使用してインストールを迅速に処理できます。

- 『Installation Factory - 概要』
- Installation Factory のインストール
- CIP の使用
 - Installation Factory Console の開始
 - CIP の作成
 - CIP のインストール
 - CIP の保守
 - CIP のアンインストール
- Installation Factory のアンインストール

Installation Factory - 概要

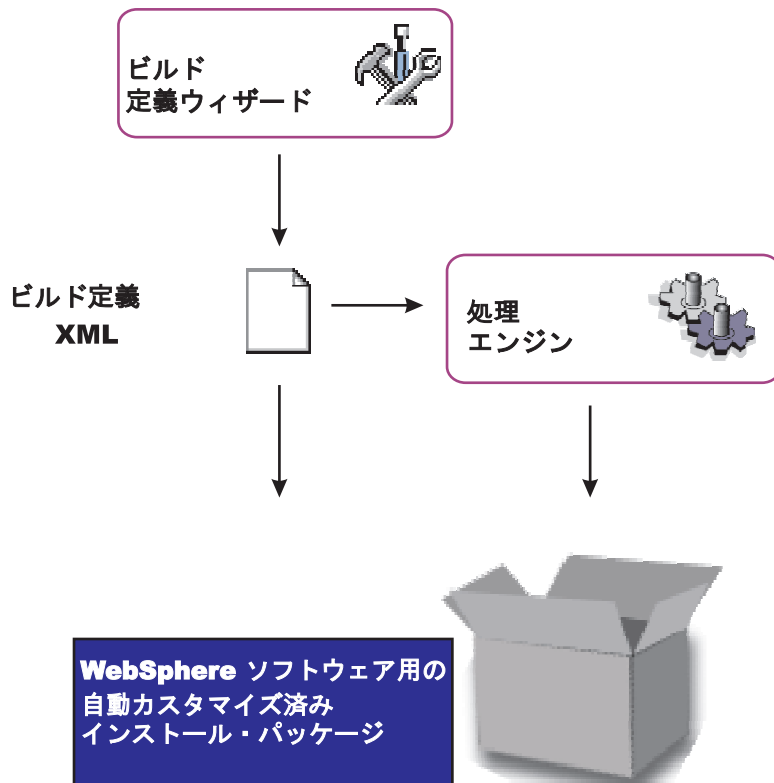
IBM Installation Factory は、WebSphere Process Server のインストール・イメージを適用可能な保守パッケージ、カスタマイズ・スクリプト、およびその他のファイルと結合して、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を作成します。これらのインストール・パッケージは、単一の手順でインストールできます。

WebSphere Process Server のインストールおよび構成は、通常は以下のような複数の手順で行います。

1. WebSphere Process Server の出荷済みバージョンをインストールします。
2. 現在のフィックスパックをインストールします。
3. リフレッシュ・パックをインストールします。
4. 必要に応じて 1 つ以上の暫定修正をインストールします。

5. アプリケーション・サーバーおよびその他の成果物を作成し、構成します。
6. アプリケーションをデプロイします。

Installation Factory では、単一のインストール・イメージ (カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP)) を作成することによって、処理が単純化されます。豊富なオプションを使用してインストール・イメージを作成できるため、結果として作成されるインストール済み環境をユーザーのニーズに合わせてカスタマイズできます。



Installation Factory を使用するプロセスは、以下の手順で構成します。

1. サポートされるプラットフォームに IBM Installation Factory をインストールします。
2. ターゲット・オペレーティング・システム用 WebSphere Process Server のインストール・イメージのコピーを取得します。ターゲット・システムは、ローカル・システムでもリモート・システムでも構いません。

注: Installation Factory ツールを使用して、このツール自体をサポートしないオペレーティング・システム用に CIP を作成できます。

3. ifgui コマンドを使用して Installation Factory GUI を起動します。

注: プラットフォームによっては、Installation Factory GUI はサポートしないが、ifcli コマンドはサポートするものもあります。このようなプラットフォームの場合は、別のプラットフォーム上で CIP を作成し、それをターゲットにエクスポートし、ifcli コマンドを呼び出してインストールを完了することもできます。

4. 可能であれば、「モードの選択」パネルで接続モードを選択します。作業中のオペレーティング・システムとターゲットのオペレーティング・システムの組み合わせによっては、接続モードをサポートしないものもあります。そういったインスタンスでは、切断モードで作業するか、あるいは作業中のオペレーティング・システムを、ターゲット・オペレーティング・システムに対する接続モード操作をサポートするオペレーティング・システムに変更します。
5. 同じパネルでターゲット・オペレーティング・システムを指定します。
6. GUI を処理し、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を作成します。
7. 必要な場合は、CIP をターゲット・マシンに転送します。
8. CIP をインストールします。

IBM Installation Factory のインストール

Installation Factory は、製品メディアで提供されます。また、最新バージョンは、IBM サポート・サイトからダウンロードすることができます。

始める前に

ご使用のシステムで認証を受ける必要があり、また、すべてのハードウェア要件とソフトウェア要件が満たされている必要があります。ソフトウェアおよびハードウェアの要件のページを参照してください。

プロシージャ

1. ご使用のオペレーティング・システム用の該当する Installation Factory アーカイブ・ファイルのコピーを取得します。

オプション	説明
製品メディアから取得	製品メディアの /IF ディレクトリーから適切なアーカイブを選択し、ご使用のシステム上のローカル・ディレクトリーにコピーします。

オプション	説明
IBMサポート・サイトから取得	<ol style="list-style-type: none"> 1. 基本の Installation Factory ツールをダウンロードします。「Category (カテゴリー)」で「WebSphere」、「Sub-category (サブカテゴリー)」で「WebSphere Application Server」を選択します。「Go (継続)」をクリックします。次のページで、「Tools/Utilities (ツールとユーティリティ)」をクリックします。Installation Factory のダウンロード・ページがリストされます。作業を行うマシンのオペレーティング・システム用の該当するアーカイブ・ファイルをダウンロードします。 2. WebSphere Process Server の Installation Factory プラグインをダウンロードします。「Category (カテゴリー)」で「WebSphere」、「Sub-category (サブカテゴリー)」で「WebSphere Process Server」を選択します。「Go (継続)」をクリックします。次のページで、「Tools/Utilities (ツールとユーティリティ)」をクリックします。Installation Factory のダウンロード・ページがリストされます。作業を行うマシンのオペレーティング・システム用の該当するアーカイブ・ファイルをダウンロードします。 <p>注: Installation Factory を特定のオペレーティング・システム上で使用して、異なるオペレーティング・システム用のインストール・パッケージを作成することができます。ただし、すべての組み合わせがサポートされているわけではありません。Installation Factory をインストールするプラットフォームを決定する前に、サポート対象のオペレーティング・システムのリストを調べてください。</p>

2. アーカイブ・ファイルを別の空ディレクトリーに解凍します。
3. オプション: 解凍されたパッケージの bin ディレクトリーをパス環境変数に追加します。bin ディレクトリーをパス変数に追加すると、コマンドでパスの修飾を行わずに、システム上のすべてのディレクトリーから Installation Factory コマンドにアクセスすることができます。
4. オプション: Installation Factory を使用する必要があるすべてのユーザーに、install ディレクトリー内の logs ディレクトリーに対する書き込み権限があることを確認してください。このディレクトリーに書き込み可能な Installation Factory ユーザーを制限する場合、ユーザーは、Installation Factory コマンドを起動して、作成されるログ・ファイルとトレース・ファイルの場所を変更する際に -logFile および -traceFile オプションを使用する必要があります。

次のタスク

Installation Factory が使用可能になりました。

カスタマイズ済みインストール・パッケージの処理

カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) とは、1 つ以上の保守パッケージ、プロファイル・カスタマイズ、EAR ファイル、スクリプト、および結果として生成されるインストールをカスタマイズするために役立つその他のファイルを組み合わせることができるカスタマイズ済み WebSphere Process Server のインストール・イメージです。WebSphere Process Server 用の IBM Installation Factory が CIP を作成します。

始める前に

このトピックおよび関連の各トピックをすべてお読みになり、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) の作成およびインストールの準備を行います。インストール・ツールの使用を開始する前に、CIP のインストール・オプションについて十分理解しておいてください。サポートされるハードウェアとソフトウェアについての Web サイトでハードウェア要件とソフトウェア要件を確認してから、作業を開始します。

ご使用のシステムにさらに多くのディスク・スペースや一時スペースが必要であったり、前提条件パッケージが存在しないなどの問題が発生した場合は、インストールをキャンセルして必要な変更を行ってからインストールを再開します。

このタスクについて

このトピックでは、CIP の作成に使用できる WebSphere Process Server 用の IBM Installation Factory について説明します。最初のステップでは、Installation Factory のコンソールを使用して CIP 用のビルド定義を作成します。ifgui コマンドを使用して、Installation Factory のコンソールを開始します。

i5/OS Installation Factory コンソールは、i5/OS ではサポートされていません。ただし、Windows、UNIX、または Linux サーバー上で Installation Factory を操作して、i5/OS 上で使用するためのビルド定義ファイルおよび CIP を作成できます。

注: i5/OS 上への CIP のインストールは、Windows プラットフォームからリモートで実行することも、i5/OS サーバー上でサイレントに実行することもできます。

ビルド定義ファイル内にビルド・パラメーターを定義した後、CIP を作成します。この CIP には WebSphere Process Server インストール・ウィザードの 1 バージョンが含まれます。

次の手順では、WebSphere Process Server 用の CIP の作成およびインストールの開始方法について説明します。

プロシージャ

1. Installation Factory を使用して、カスタマイズ済みインストール・パッケージを作成します。詳細については、関連タスク『カスタマイズ済みインストール・パッケージの作成』を参照してください。

2. インストール用のオペレーティング・システム・プラットフォームを準備します。 関連情報『インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。
3. CIP を使用して WebSphere Process Server をインストールします。 CIP インストール・ウィザードでは、以下の操作が実行されます。
 - 前提条件を自動的に検査します。
 - 前の WebSphere Process Server バージョン 6.1 を検索し、表示するインストール・オプションを決定します。オプションには、製品バイナリーにフィーチャーおよび保守を追加するオプションや、一連の新規製品バイナリーを CIP に含まれる更新された保守レベルでインストールするオプションなどがあります。
 - 関連する WebSphere 製品の前のバージョンを検索します。アップグレード・パスはそこから使用できます。
 - 一連の新規製品バイナリーと CIP に含まれる保守パッケージのインストール時に、デプロイメント環境または WebSphere Process Server Client をインストールすると同時に、スタンドアロン・サーバー、カスタム・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成できます。
4. 以下のインストール・シナリオの 1 つを選択して、インストールを続行します。

オプション	説明
CIP インストール・ウィザードを使用して、標準的インストールを実行します。	基本製品の標準インストールでは、CIP 内の使用可能なすべてのフィーチャー、および作成するプロファイルのタイプをインストールできます。
低い保守レベルから高い保守レベルへのスリップ・インストールを実行します。	CIP インストール・ウィザードでは、フィーチャーをインストールせずに、既存の製品に保守をインストールすることができます。
CIP インストール・ウィザードを使用して、保守パッケージと追加フィーチャーをインストールし、既存のインストールをインクリメントします。	CIP インストール・ウィザードでは、既存の製品に対して保守をインストールし、フィーチャーを追加できます。
低レベル製品から完全な製品へのトレードアップ・インストールを実行します。	CIP インストール・ウィザードでは、低レベル製品からのアップグレード時に保守パッケージをインストールできます。
CIP インストール・ウィザードを使用して、サイレント・インストールを実行します。	『CIP のサイレント・インストール (Installing a CIP silently)』を参照してください。サイレント・インストールでは、インストールの選択項目のすべてが含まれた応答ファイルを編集する必要があります。有効な応答ファイルを作成したら、コマンド・ウィンドウで <code>silent</code> パラメーターを指定して <code>install</code> コマンドを発行します。

インストーラー・プログラムは、コンソール・モード・インストールをサポートしていません。

結果

続くトピックで概説される手順に従って、CIP を使用して WebSphere Process Server をインストールできます。

Installation Factory の開始

コマンド行から Installation Factory のコンソールを起動します。Installation Factory のコンソールでは、インストール・パッケージの作成のための GUI が提供されています。

始める前に

このタスクを開始するには、システムに Installation Factory がインストールされている必要があります。Installation Factory の GUI を使用して CIP を作成する場合は、ローカル・マシンにある、または作業しているマシンからアクセス可能な場所にあるターゲット・オペレーティング・システム用のインストール・イメージのコピーを保有している必要があります。

このタスクについて

Installation Factory のコンソールには、ご使用のシステム用のビルド定義ファイル、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP)、または の作成に必要なすべてのツールが用意されています。

注: IIP は、このリリースの WebSphere Process Server にはサポートされていません。IIP は、他の製品 (WebSphere Application Server など) にサポートされています。

コンソールを起動する前に、インストール・パッケージに含めるすべてのコンポーネントを収集します。オプションの資産には、以下のものがあります。

- 保守パッケージ
- スクリプトまたは Java クラス
- 追加のユーザー・ファイル
- エンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイル

プロシージャ

1. Installation Factory グラフィカル・ユーザー・インターフェースを起動します。

Installation Factory ディレクトリーから、次のように ifgui コマンドを起動します。

HP-UX Linux AIX Solaris bin/ifgui.sh

Windows bin\ifgui.bat

2. Installation Factory コンソールの起動パネルで、新規カスタマイズ済みインストール・パッケージの作成、新規統合インストール・パッケージ (このリリースではサポートされていません) の作成、および既存のビルド定義ファイルのオープンのいずれかを選択します。また、Installation Factory のヘルプ・システムを起動することもできます。Installation Factory のコンソールのオプションの詳細は、後続の各トピックに記載されています。

ifgui コマンド

ifgui コマンドは Installation Factory コンソールを起動します。Installation Factory コンソールを使用すると、ビルド定義 XML ファイルを作成できます。このファイルは、インストールする製品、製品のフィーチャー、保守パッケージなどのカスタマイズを識別して、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) またはインストール・パッケージに組み込みます。ifgui ツールを接続モードで使用すると、CIP を直接作成することもできます。

目的

注: Installation Factory コンソールは、ビルド定義ウィザードとよばれることもあります。

ifgui コマンドを使用すると、Installation Factory コンソールにアクセスできます。ビルド定義ファイルを作成するには、この方法が最も簡単です。

ロケーション

ifgui コマンド・ファイルは、Installation Factory を解凍したディレクトリーの /bin ディレクトリーにあります。コマンド・ファイルは、以下の名前前のスクリプトです。

AIX

HP-UX

Linux

Solaris

ifgui.sh

Windows

ifgui.bat

ロギング

ifgui コマンドは、ビルド定義ファイルが正常に作成されたかどうかを示すログ・ファイルを作成します。接続モードでは、ログ・ファイルに CIP の作成に関する情報も含まれます。ビルド定義ファイルが正常に作成されていない場合は、トレース・ファイルを調べて問題のある箇所を突き止めてください。

以下のファイルに、ビルド定義ファイルのデータが記録されています。

- *IF_working_directory*/logs/trace.xml は、XML 形式の詳細なトレース・ログです。
- *IF_working_directory*/logs/log.txt はログ・ファイルです。

トレースおよびロギングの出力およびレベルは、**logLevel** および **traceLevel** パラメーターの説明に従って構成することができます。成功したことを示す指標は INSTCONFSUCCESS です。

障害の原因としてよく挙げられる問題は、フィックスパックおよび暫定修正の不一致、またはディスク・スペースの不足です。

AIX

HP-UX

Linux

Solaris

ifgui.sh の構文

ヘルプを表示する:

```
./ifgui.sh -help
```

ビルド定義を作成する:

```
./ifgui.sh
-logLevel log_level
-logFile log_file_path_name
-traceLevel trace_level
-traceFile trace_file_path_name
```

Windows

ifgui.bat の構文

ヘルプを表示する:

```
./ifgui.bat -help
./ifgui.bat -?
```

ビルド定義を作成する:

```
./ifgui.bat
-logLevel log_level
-logFile log_file_path_name
-traceLevel trace_level
-traceFile trace_file_path_name
```

パラメーター

以下の引数がサポートされています。

-? 使用法の情報を表示します。

-help

使用法の情報を表示します。

-logFile log_file_path_name

ログ・ファイルを識別します。デフォルト値は *current_working_directory/logs/log.txt* です。

-logLevel log_level

メッセージのロギングのレベルを設定します。log_level の有効な値は以下のとおりです。

- ALL
- CONFIG
- INFO
- WARNING
- SEVERE
- OFF (ロギングをオフにします)

デフォルト値は **INFO** です。

-traceFile trace_file

トレース・ファイルを識別します。デフォルト値は *current_working_directory/logs/trace.xml* です。

-traceLevel trace_level

トレースのレベルを設定します。trace_level の有効な値は以下のとおりです。

- ALL
- FINE
- FINER

- FINEST
- OFF (トレースをオフにします)

デフォルト値は OFF です。

使用法

このウィザード内から CIP を作成するには、ビルド定義ファイルを接続モードで使用します。異なるオペレーティング・システム向けの CIP を作成している場合でも、ビルド定義ウィザードは、ほとんどの場合、接続モードを使用することをお勧めします。カスタマイズ済みインストール・パッケージを作成する場合は、ビルド定義を Installation Factory の処理エンジンの入力として切断モードで使用します。詳しくは、ifcli コマンドを参照してください。

Installation Factory Console のオプション

Installation Factory のコンソールでは、ビルド定義ファイルの作成および変更の際に選択できるオプションが提供されます。これらのビルド定義ファイルは、次にカスタマイズ済みインストール・パッケージまたは統合インストール・パッケージ (CIP) を作成するために使用できます。

Installation Factory コンソールには、新規ビルド定義ファイルを作成し、オプションで新規ビルド定義から対応するカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を作成するオプション、または既存のビルド定義を開いて編集し、オプションでそのビルド定義から CIP を作成するオプションがあります。さらに、Installation Factory ヘルプ・システムを起動するためのオプションもあります。

新規カスタマイズ済みインストール・パッケージの作成 (Create New Customized Installation Package)

「新規カスタマイズ済みインストール・パッケージの作成 (Create New Customized Installation Package)」オプションでは、製品の選択ウィザードが起動されます。インストールする製品およびリリースを選択すると、ビルド定義ウィザードが起動されます。ビルド定義ウィザードを使用してビルド定義ファイルを作成し、オプションで対応するカスタマイズ済みインストール・パッケージを作成します。

新規統合インストール・パッケージの作成 (Create New Integrated Installation Package)

現在はサポートされていません。

統合インストール・パッケージは、WebSphere Application Server の Installation Factory ツールの機能の 1 つです。このオプションの詳細については、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

ビルド定義を開く

「ビルド定義を開く」オプションを選択すると、「既存のビルド定義の変更」パネルが表示され、編集するビルド定義をファイル・ブラウザで選択できます。

ヘルプ

ヘルプ・アイコンをクリックすると、Installation Factory 資料が表示されます。

ビルド定義の作成

ビルド定義とは、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) の作成元にてできる XML 文書です。Installation Factory コンソールからビルド定義ウィザードを使用して、ビルド定義を作成します。

始める前に

このタスクを実行する前に、Installation Factory が正しく設定されていることを確認してください。

注: **i5/OS** i5/OS インストール用のビルド定義と CIP を作成するには、Windows、UNIX、または Linux サーバーを使用する必要があります。Windows から CIP を i5/OS 上にインストールできますが、Linux または UNIX からは、インストール前に CIP を i5/OS サーバーまたは Windows サーバーに転送する必要があります。

このタスクについて

CIP を作成する前に、まず CIP 用のビルド定義を作成する必要があります。ビルド定義とは、Installation Factory による WebSphere Process Server のインストールのカスタマイズ方法が定義された XML 文書です。ビルド定義ウィザードは、ビルド定義を作成する最も簡単な方法です。 *Installation_Factory_home/bin* ディレクトリ (*Installation_Factory_home* は Installation Factory を解凍したディレクトリ) から *ifgui* コマンドを使用してこの Installation Factory コンソールを起動します。新規 CIP の作成を選択するか、既存のビルド定義を開くことにより、ビルド定義ウィザードを立ち上げます。ビルド定義を保管し、そのビルド定義を使用して、ビルド定義ウィザードから直接 CIP を生成できます。また、*ifcli* コマンドでオプションを使用して、ビルド定義をコマンド行インターフェースに受け渡すこともできます。あるマシン上でコンソールを使用して対話式にビルド定義を作成し、その後 CIP をバッチ・モードで生成する (例えば、異なるマシン上で生成したり、大規模な自動化プロセスの一部として生成したりする) 場合、この 2 番目の方法が役立ちます。

i5/OS ビルド定義ウィザードを接続モードで実行し、i5/OS をターゲット・オペレーティング・システムとして選択します。この CIP は、その後 i5/OS システムに転送して、サイレントにインストールできます。また、インストール GUI を使用して、Windows サーバーから i5/OS に対して CIP をインストールできます。

プロシージャ

1. Installation Factory コンソールを起動します。 *Installation_Factory_home/bin* ディレクトリ (*Installation_Factory_home* は、Installation Factory を解凍したディレクトリ) から *ifgui* コマンドを使用してコンソールを起動します。
2. ビルド定義ウィザードの各パネルで操作し、カスタマイズ・ビルド定義を作成します。各コンソール・パネルの詳細については、後続の各トピックを参照してください。
3. ビルド定義を保管します。
4. ビルド定義を使用して、CIP を生成します。CIP は、Installation Factory コンソールを直接使用するか、コマンド行ツールを使用して生成できます。

オプション	説明
ビルド定義ウィザードを使用	CIP を作成するためのオプションを選択します。
ifcli コマンド行ツールを使用	保管したビルド定義をオプションとして ifcli コマンドに受け渡します。

ビルド定義ウィザード:

カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を作成するには、最初にビルド定義ファイルを作成する必要があります。ビルド定義ファイルは、Installation Factory が CIP の生成に使用するファイルです。ビルド定義ファイルには、必要とするインストールのカスタマイズを行えるようにするために、Installation Factory が CIP に組み込む内容が正確に記述されています。ビルド定義ウィザードを使用すると、ビルド定義ファイルを簡単に作成できます。

目的

Installation Factory の GUI 内のビルド定義ウィザードは、ビルド定義ファイルの作成プロセスを、手順を追って案内します。さまざまなビルド定義ファイルに必要なだけ作成して、必要とする CIP を定義できます。また、ビルド定義ウィザードを使用して、既存のビルド定義ファイルを変更することもできます。ビルド定義ファイルは、選択したロケーションに XML 文書として保存されます。

概要

ビルド定義ウィザードの各パネルでは、CIP に関する情報の入力が必要されます。例えば、保守パッケージ、スクリプト、および組み込み可能なその他のコンポーネントのロケーションの入力が要求されます。CIP を生成するためのロケーションの入力も要求されます。この情報はすべて、新規のビルド定義ファイルに保存されるか、または変更中のビルド定義ファイルに保存されます。

ウィザードの最後のパネルでは、定義したばかりのビルド定義ファイルの内容に基づく CIP を生成するためのオプションが提供されます。または、ビルド定義ファイルのみを保存することもできます。以前に保存したビルド定義ファイルから CIP を作成するには、ifcli コマンドを使用します。ifcli コマンドは、Installation Factory コンソールの外部に CIP を生成するため、別のマシンまたはオペレーティング・システムで使用できます。

新規のビルド定義ファイルを作成する場合は、初期ウィザードで、カスタマイズする特定の製品およびインストール・パッケージを選択できます (例えば WebSphere Process Server 製品のインストール・パッケージなど)。この初期ウィザードが製品の選択ウィザードです。

カスタマイズするインストール・パッケージを選択すると、前述のように、ビルド定義ウィザードがビルド定義ファイルの作成を支援してくれます。

例

ビルド定義ファイルのサンプルが `IF_root/samples/wbi` ディレクトリーにあります。

ビルド定義ウィザードのパネル:

ビルド定義ウィザードは、ビルド定義ファイルおよびカスタマイズ済みインストール・パッケージを作成するための便利なツールを提供しています。

目的

ビルド定義ウィザードは、ビルド定義ファイルを作成する場合に使用されます。次にビルド定義ファイルを使用して、カスタマイズ済みインストール・パッケージを作成できます。

パネル

- 「モードの選択」パネル
- 「パッケージ ID」パネル
- 「ビルド情報」パネル
- 「製品インストール・イメージ」パネル
- 「フィーチャーの選択」パネル
- 「保守パッケージ」パネル
- 「インストール・スクリプトとアンインストール・スクリプト」パネル
- 「プロファイルのカスタマイズ」パネル
- 「追加ファイル」パネル
- 「作成情報」パネル
- 「カスタマイズされたインストールのプレビュー」パネル

「モードの選択」パネル:

「モードの選択」パネルを使用して、接続モードか切断モードかを選択します。i5/OS サーバーの CIP を作成するには、「モードの選択」パネルで接続モードを選択します。

ビルド定義ウィザードで、製品インストール・イメージ、保守パッケージ、およびカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) の作成に必要なその他のコンポーネントにアクセスできる場合、ウィザードを「接続モード」と呼ばれるモードで使用できます。このモードでは、ビルド定義ウィザードで、入力データとして提供されたファイルの検証、ビルド定義ファイルの作成、およびオプションで CIP の生成を行うことができます。製品インストール・イメージ、保守パッケージ、およびその他のコンポーネントが別のマシン上にあるためにアクセスできない場合、ビルド定義ウィザードは切断モードでしか使用できません。i5/OS サーバーの CIP を作成する場合は、接続モードを使用することをお勧めします。

切断モードでは、ビルド定義ウィザードを使用してターゲット・プラットフォームのビルド定義ファイルを作成することができますが、入力データを検証したり実際に CIP を生成したりすることはできません。その場合、ビルド定義ファイルをター

ゲット・マシンにコピーし、ifcli コマンドへの入力データとして使用して、実際に CIP を生成することができます。このとき、ビルド定義ウィザードで入力されたすべての入力データが検証されます。

可能な場合は常に接続モードで実行すると便利です。ビルド定義ウィザードと処理エンジンが同じマシン上で稼働する場合は、接続モードを選択します。

モードがコンポーネントのロケーション指定に与える影響

接続モードでは、すべてのコンポーネントのローカル・ファイル・パスを指定します。CIP を作成する処理エンジンもこのマシン上にあります。そのため、処理エンジンはローカル・コンポーネントにアクセスできます。切断モードでは、処理エンジンが稼働し CIP を作成するターゲット・マシンでのコンポーネントのロケーションを指定します。例えば、製品インストール・イメージがターゲット・マシンの /tmp/IBM/WASimage ディレクトリーにあるとします。ターゲット・マシンでのロケーションを指定します。ターゲット・マシンでは、処理エンジンは CIP に組み込む製品イメージを検出する必要があります。

モードがコンポーネント検証に与える影響

接続モードでは、ビルド定義ウィザードはビルド定義ファイルの作成時に、接続されたインストール・イメージ、保守パッケージ、およびその他のコンポーネントを検証できます。これは、すべて同じマシン上にあるためです。切断モードで実行する場合、ビルド定義ウィザードはコンポーネントにアクセスしないため、それらのコンポーネントを検証できません。この場合、Installation Factory はすべてのコンポーネントの検証を処理エンジンに任せます。処理エンジンは、CIP にコンポーネントを追加するときに、各コンポーネントを検証します。

モードがターゲット・オペレーティング・システムに与える影響

切断モードでは、ターゲット・オペレーティング・システムおよびハードウェア・プラットフォームを識別するための選択フィールドが表示されます。処理エンジンが稼働して CIP を作成し、CIP がインストールされるオペレーティング・システムおよびハードウェア・プラットフォームを選択します。コマンド行呼び出しツール (ifcli) は 32 ビット・カーネルおよび 64 ビット・カーネルで稼働します。

サポートされるアーキテクチャー

Linux **UNIX** 以下のプラットフォームの CIP を作成できます。

- HP PA-RISC
- HP Itanium®
- IBMAIXPPC32 および AIXPPC64
- IBM i5/OS
- Linux IA32
- LinuxPPC32
- LinuxPPC64
- LinuxS390
- LinuxS390x

- SolarisSparc
- SolarisX64
- SolarisX86_64
- WindowsIA32
- WindowsAMD64

Windows 以下のプラットフォームの CIP を作成できます。

- i5/OS
- WindowsIA32
- WindowsAMD64

「パッケージ ID」パネル:

「パッケージ ID」パネルで、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) の ID およびバージョンを指定します。

パッケージ識別フィールドは以下のとおりです。

- ID: 記述子を入力します。例えば、WebSphere Process Server インストール開発チームの機能検証テスト部門で作業している場合、作成したテスト CIP を識別するのに *com.ibm.toronto.wps.fvt* を使用できます。また、ノースカロライナ大学のスポーツ情報 IT 部門で作業するとします。プレスで使用するマシンに WebSphere Process Server の更新をインストールするため、作成する CIP の ID として *edu.unc.tarheels.sid.wps* を使用できます。

パッケージ ID は、汎用固有 ID となるように設計されています。単一のインストール済み環境に複数の CIP をインストールできます。各 CIP は、インストール済み環境の固有のディレクトリーにカスタマイズ資産をインストールします。固有のディレクトリー名は、固有 ID が提供された後にモデル化されます。このため、ID は固有でなければなりません。こうした理由で、IBM ではバージョン番号を使用した固有の逆ドメイン表記を提案しています。

- バージョン: 作成した CIP の識別に役立つバージョン番号を入力します。例えば、「GUI」フィールドに 1.0.0.0 と事前入力されている場合、そこから始めて増やしていきます。

CIP のバージョン番号は、製品のバージョン番号を反映していなくても構いません。

- フルパッケージ ID: 通知のみ。このフィールドには、前の 2 つのフィールドを連結したものが示されます。Installation Factory では、この固有 ID をカスタマイズ済みインストール・パッケージを保持するディレクトリーの名前として使用します。例えば、完全パッケージ ID は *edu.unc.tarheels.sid.was_1.0.0.0* のようになります。完全パッケージ ID は、変数 *cip_uid* として参照される場合もあります。

完全パッケージ ID の制約は以下のとおりです。

- **Windows** 35 文字以下とする
- 先頭と末尾の文字は英字 (A から Z, a から z) または数字 (0 から 9) のみとする

- 英字 (A から Z, a から z)、数字 (0 から 9)、ピリオド (.), および下線 (_) のみ使用可能
- スペース、または以下の文字は使用不可: ~ ` ! @ # \$ % ^ & () { } [] | ¥ / : ; , ? ' " < = > + *

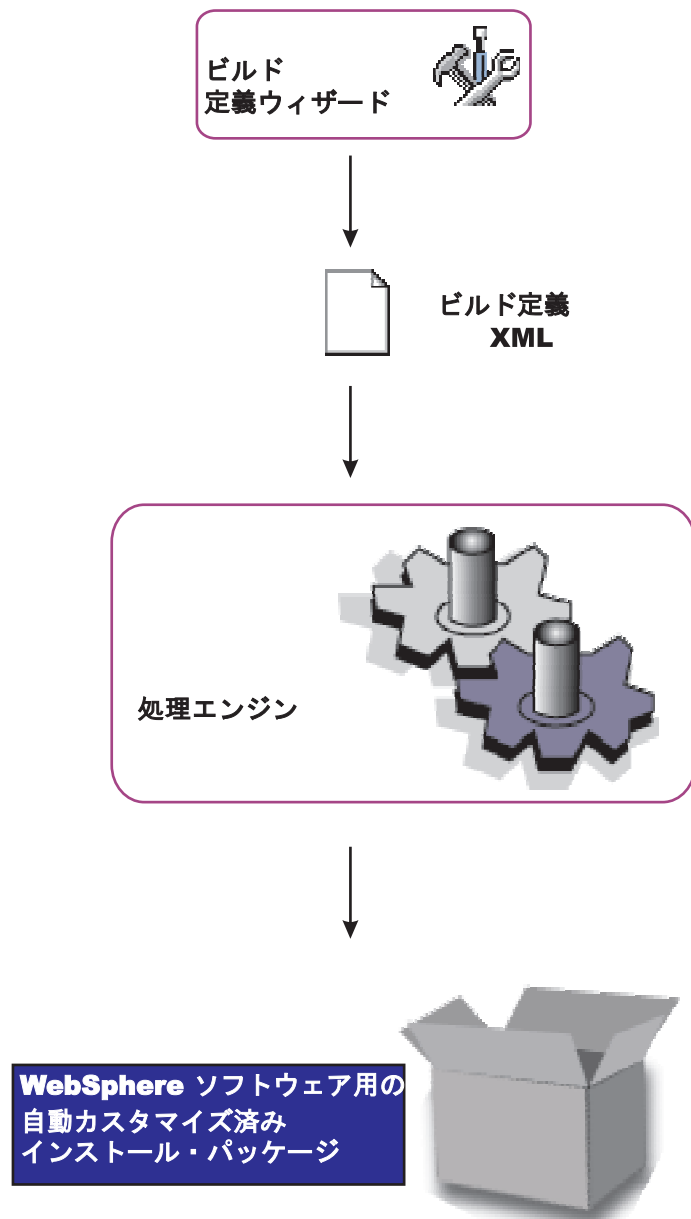
「ビルド情報」パネル:

「ビルド情報」パネルで、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) のビルド設定を指定します。

ビルド定義ウィザードでは、CIP の出力ロケーションを指定する XML ビルド定義ファイルを作成します。ファイルの名前とロケーションは、どちらもユーザーが制御します。ビルド定義ファイルは、常にビルド定義ウィザード・マシン上のディレクトリー・パスに保存されます。「ビルド定義」フィールドにビルド定義ファイルの名前を指定します。ビルド定義ファイルは、処理エンジンの応答ファイルと考えることができます。この XML ファイルは、処理エンジンが CIP のすべてのコンポーネントを配置するために必要な情報を提供します。「カスタマイズ・インストール・パッケージ」フィールドで、CIP を作成するディレクトリーの名前を指定します。Installation Factory は、CIP を含む圧縮ファイルを作成し、そのファイルをユーザーが名前を指定したディレクトリーに格納します。

注: Windows CIP ビルド・ディレクトリーの文字数は、30 文字以下にする必要があります。

処理エンジンは、ビルド定義ファイルから CIP ロケーションを読み取り、CIP を格納する場所を判別します。



カスタマイズ済みインストール・パッケージのビルド・ロケーション

/Opt/ifactory/wpsimages

ファイルおよびディレクトリ場所は、フィールドに直接入力できます。または、接続モードで「参照」をクリックして、既存のファイル (ビルド定義) または既存のディレクトリ (CIP) を検索し、選択します。CIP ディレクトリ・パスはターゲット・マシン上にあります。切断モードで作業している場合は、適切なパスを入力する必要があります。さらにそのパスがリモート・システムに対して適切である必要があります。例えば、ビルド定義ディレクトリのパスとファイル名は、以下のようになります。

- AIX
HP-UX
Linux
Solaris
 /IF/builddefs/
 com.ibm.ws.install.wbiserver_1.0.0.0.xml

- **Windows** C:\¥IF¥builddefs¥com.ibm.ws.install.wbiserver_1.0.0.0.xml
- **i5/OS** /IF/builddefs/com.ibm.ws.install.wbiserver_1.0.0.0.xml

対応する CIP ビルド・ディレクトリーのパスは以下のようになります。

- **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** /IF/
- **Windows** C:\¥IF¥
- **i5/OS** /IF/

「次へ」をクリックすると、検証が実行されます。検証では、ビルド・ディレクトリー・パスが正しいフォーマットであることが検査されます。

「製品インストール・イメージ」パネル:

「製品インストール・イメージ」パネルで、WebSphere Process Server のインストール・イメージのロケーションを指定します。

ビルド定義ファイルによって、処理エンジンに WebSphere Process Server のインストール・イメージが格納されているディレクトリーのロケーションが提供される必要があります。

製品インストール・イメージのディレクトリーのロケーションを「製品インストール・イメージのディレクトリー・パス」フィールドに指定します。指定するパスは、(製品 CD またはダウンロードしたイメージからの) WebSphere Process Server の最新のインストール・イメージが格納されているディレクトリーへのパスです。

親ディレクトリーを指定することもできます。例えば、イメージが /tmp/WAS ディレクトリーにある場合には /tmp と指定できます。

ディレクトリーのロケーションを指定するには、フィールドに直接入力します。または、接続モードで「参照」をクリックし、既存のディレクトリーを検索して選択します。

処理エンジンでは、ディレクトリーが存在し、製品の選択ウィザードで選択された製品と一致する有効なインストール・イメージを保持している必要があります。接続モードでは、「次へ」をクリックすると検証が行われます。切断モードでは、処理エンジンは、カスタマイズ済みインストール・パッケージを作成している間に検証を行います。

接続モードでは、インストール・イメージ用のディレクトリーが存在しなければなりません。切断モードの場合、処理エンジンが稼働するマシンのファイル・パスを指定するようにしてください。例えば、ターゲット・マシンの CD-ROM ドライブのマウント・ポイントを指定します。処理エンジンは、作成時にイメージを見つけられなければなりません。

「フィーチャーの選択」パネル:

「フィーチャーの選択」パネルを使用して、ビルド定義ファイルに組み込む機能を選択します。

ビルド定義ファイルには、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) に組み込む製品機能を指定する必要があります。組み込む機能を選択します。インストーラーで CIP を使用して製品をインストールするときには、ユーザーが CIP に組み込んだ機能が表示されます。

必須機能は「必須」という語が追加された名前でもリストされますが、選択できません。一部の製品には、実行可能な製品をインストールするための CIP に組み込む必要がある機能があります。

インストーラーで CIP を使用して製品をインストールするときには、ユーザーが CIP に組み込んでいないオプション機能は選択できません。

重要: インストールに組み込む機能は、この段階で組み込む必要があります。CIP をインストールするときに、これらの機能をインストールから除外するオプションはありますが、CIP に組み込まれていない機能を追加することはできません。

保守パッケージとは

保守パッケージには、フィックスパックと暫定修正が含まれます。

フィックスパックは修正の累積パッケージであり、バージョン 6.1.2.1 のようになります。フィックスパックは前のフィックスパックの上にインストールされます。例えば、バージョン 6.1.2.2 はバージョン 6.1.2.1 に適用されます。フィックスパックは累積的に追加されるため、バージョン 6.1.2.2 にはバージョン 6.1.2.1 のすべての修正が含まれます。配布されたフィックスパック内の修正のリストを確認して、再インストールする暫定修正を判別します。暫定修正が削除されていてフィックスパックにその修正が含まれない場合、暫定修正を再インストールします。

暫定修正は公開された 1 つの緊急の修正であり、1 つ以上の製品の問題点を解決します。暫定修正は、適用可能な場合、リリースまたはフィックスパックに適用することができます。暫定修正は、公開される前に 1 人以上のお客様によって検証されます。

「保守パッケージ」パネル:

「保守パッケージ」パネルを使用して、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) に組み込む保守パッケージ (*.pak ファイル) を選択します。保守パッケージには、リフレッシュ・パック、フィックスパック、および暫定修正が含まれます。

保守パッケージの選択はオプションです。どのようなパッケージのタイプも組み込むことができます。例えば、フィックスパックをスキップして暫定修正をインストールすることができます。または、リフレッシュ・パックを 1 つと暫定修正を 5 つインストールすることもできます。

フィックスパックの圧縮ファイルは、WebSphere ソフトウェア用の Update Installer にバンドルされます。ファイルを解凍して、保守パッケージ (*.pak) ファイルを /updateinstaller/maintenance ディレクトリーに格納します。

保守パッケージを選択するときには必ず *.pak ファイルを選択してください (例えば、updateinstaller¥maintenance¥6.1-WS-WBI-WinX32-RP0000001.pak ファイルなど)。

選択できるのは、1つのフィックスパックと1つのリフレッシュ・パックのみです。フィックスパックは累積されます。必ず入手可能な最新のパッケージを選択してください。

各フィールドに直接入力して、*.pak ファイルのファイル・パスとファイル名を指定します。接続モードでは、代わりに「参照」ボタンをクリックして、入手可能なリフレッシュ・パックとフィックスパックを検索することができます。

検証

処理エンジンには、有効なファイル・パスと有効なフォーマットを持つ保守パッケージが指定されている必要があります。接続モードでは、「次へ」をクリックすると、ファイル・パスの検証が行われます。フィックスパックの検証時に、作成される WebSphere Process Server CIP に必要な基本 WebSphere Application Server 保守レベルを示すダイアログが表示されます。

切断モードでは、処理エンジンがビルド定義からカスタマイズ済みインストール・パッケージをビルドするときに検証が行われます。

切断モードのファイル・パス指定への影響

接続モードでは、ディレクトリーおよび有効な保守パッケージが存在している必要があります。切断モードの場合、処理エンジンが稼働するマシンについて、ファイル・パスおよび *.pak ファイルの名前を指定するようにしてください。処理エンジンは、ビルド時に保守パッケージを見つけられなければなりません。

保守パッケージとは

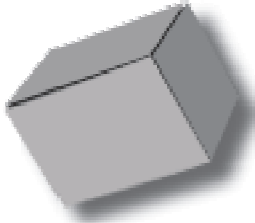
保守パッケージには、フィックスパック、リフレッシュ・パック、および暫定修正が含まれます。

フィックスパックは修正の累積パッケージであり、バージョン 6.1.2.1 のようになります。フィックスパックは前のフィックスパックの上にインストールされます。例えば、バージョン 6.1.2.2 はバージョン 6.1.2.1 に適用されます。フィックスパックは累積的に追加されるため、バージョン 6.1.2.2 にはバージョン 6.1.2.1 のすべての修正が含まれます。配布されたフィックスパック内の修正のリストを確認して、再インストールする暫定修正を判別します。暫定修正が削除されていてフィックスパックにその修正が含まれない場合、暫定修正を再インストールします。

リフレッシュ・パックは修正の累積パッケージであり、バージョン 6.1.2 のようになります。リフレッシュ・パックは前のリフレッシュ・パックの上にインストールされます。例えば、バージョン 6.1.2 はバージョン 6.1.1 に適用されます。リフレッシュ・パックは累積的に追加されるため、バージョン 6.1.2 にはバージョン 6.1.1 のすべての修正が含まれます。また、リフレッシュ・パックには、すべての中間フィックスパックからの修正も含まれます。リフレッシュ・パックで配布された修正のリストを確認して、再インストールする暫定修正を判別します。暫定修正が削除され、リフレッシュ・パックにその修正が含まれない場合、その暫定修正を再インストールします。

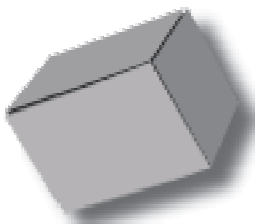
暫定修正は公開された 1 つの緊急の修正であり、1 つ以上の製品の問題点を解決します。

暫定修正は、適用可能な場合、リリース、リフレッシュ・パックまたはフィックスパックに適用することができます。暫定修正が公開される際には、1人以上のお客様によって事前に検証されます。



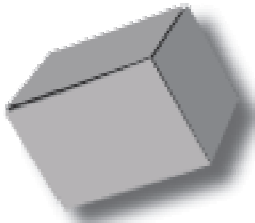
リフレッシュ・パック
Rp1

C:\WBI_downloads\name_of_refresh_pack_1_ZIP_file.pak



フィックスパック
FP3

C:\WBI_downloads\name_of_fix_pack_3_ZIP_file.pak



SDK、Java テクノロジー・エディション・フィックスパック
SDK

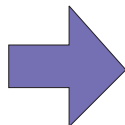
C:\WBI_downloads\name_of_SDK_fix_pack_ZIP_file.pak



暫定修正
iFix 「A」 および iFix 「B」

C:\WBI_downloads\name_of_ifix_A_file.pak

C:\WBI_downloads\name_of_ifix_B_file.pak



**ビルド
定義ウィザード**




「インストール・スクリプトとアンインストール・スクリプト」パネル:

ビルド定義ウィザードでは、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を正常にインストールした後、または CIP のアンインストール前に完全アンインストール

ールの一部として実行する構成スクリプトを組み込む方法を指定します。保守を含む CIP をインストールすることによって既存のインストールを更新する場合、これらのスクリプトは実行されません。

スクリプトは CIP の一部として組み込むことができます。このようなスクリプトは、インストールまたはアンインストールの一部として実行できます。サポートされるスクリプトのタイプは以下のとおりです。

- ANT (.ant)
- JACL (.jacl)
- Jython (.py)
-  バッチ・シェル・スクリプト (.bat)。

注: このプラットフォームは、ターゲット・プラットフォームを指します。これは Installation Factory を実行しているプラットフォームであるとは限りません。

-    シェル・スクリプト (.sh)

注: このプラットフォームは、ターゲット・プラットフォームを指します。これは Installation Factory を実行しているプラットフォームであるとは限りません。また、i5/OS では、シェル・スクリプトに .sh 拡張子がないことに注意してください。

- JAR ファイル (.jar)

「インストール」タブ

「インストール」タブで、CIP の正常なインストールの後に実行するスクリプトを指定します。

「アンインストール」タブ

「アンインストール」タブを使用して、完全アンインストール中の CIP のアンインストール前に実行するスクリプトを指定します。

ファイル名

スクリプトの追加後に「ファイル名」フィールドに表示されるスクリプトの名前。この名前は「変更」ボタンを使用して変更できます。

ディレクトリー・パス

スクリプトの追加後、「ディレクトリー・パス (Directory Path)」フィールドにスクリプト・ファイルが格納されているディレクトリーが示されます。このパスは「変更」ボタンを使用して変更できます。

障害時アクション




「障害時アクション」フィールドには、スクリプト・エラーの発生時に実行されるアクションが示されます。この値は、「スクリプトの追加」パネルの「このスクリプトの実行中にエラーが発生した場合に操作を停止する (Stop the operation if an error occurs while running this script)」チェック・ボックスを選択したかどうかしたがって最初に設定されます。このチェック・ボックスを選択した場合、「障害時

アクション」フィールドに「致命的エラー」という値が示されます。選択していない場合は「継続」という値が示されます。

「障害時アクション」フィールドの値を変更するには、「変更」ボタンを押し、「このスクリプトの実行中にエラーが発生した場合に操作を停止する (Stop the operation if an error occurs while running this script)」チェック・ボックスを選択または選択解除します。

スクリプトの追加 (Add Scripts)

CIP に組み込むスクリプトを検索して選択するには、「スクリプトの追加 (Add scripts)」ボタンを押します。スクリプトは、以下のサポートされるスクリプト・タイプのいずれかを選択できます。

- ANT スクリプト (*.ant)
-  Windows バッチ・ファイル (.bat)
-   シェル・スクリプト (.sh)
- JACL スクリプト
- Jython スクリプト
- JAR ファイル

.jar ファイルには、各 .jar ファイル内の META-INF/MANIFEST.MF ファイルにメイン・クラスが定義されています。CIP がインストールされる時、スクリプトは `cip_uid_root/config/install` ディレクトリー内にあります。これらのスクリプトは、通常のインストール手順のすべての構成アクションが実行された後に構成アクションとして実行されます。

- 「変更」：項目を選択して「変更」をクリックし、ファイル名またはディレクトリー・パスを変更します。
- 「削除」：選択したスクリプトを CIP から削除します。
- 「上へ移動」：リスト内のスクリプトを上へ移動させ、それより下にあるスクリプトよりも前に実行されるようにします。
- 「下へ移動」：リスト内のスクリプトを下へ移動させ、それより上にあるスクリプトの後に実行されるようにします。

「プロファイルのカスタマイズ」パネル:

プロファイルのカスタマイズ・パネルを使用して、プロファイルの作成時または削除時にスクリプトを実行できます。また、プロファイル拡張の一部として、1 つ以上のエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルをデプロイすることもできます。

プロファイルのカスタマイズ・パネルを使用して、以下の 3 つのプロファイル・タイプのいずれかについて、カスタマイズを作成することができます。

- スタンドアロン・サーバー
- デプロイメント・マネージャー
- カスタム

CIP のインストール時に、プロファイル管理ツールによって、プロファイル・タイプを選択するよう求められます。ここで定義するカスタマイズを使用するには、プロファイル・カスタマイズ・パネルで選択するプロファイル・タイプと同じプロファイル・タイプを、プロファイル管理ツールで選択する必要があります。

注: Network Deployment 環境にインストールする場合は、デプロイメント・マネージャーおよびカスタムのみを選択できます。

注: プロファイル・カスタマイズ・パネルを使用する際、EAR ファイルはデフォルト・オプションでのみデプロイできます。他のオプションで EAR ファイルをデプロイする必要がある場合は、その EAR ファイルをユーザー・ファイルとして組み込み、必要なオプションで EAR をデプロイするためのスクリプトを使用します。

.

プロファイルのタイプ

カスタマイズを作成するプロファイルのタイプを選択します。

- スタンドアロン・サーバー
- デプロイメント・マネージャー
- カスタム

Profile_type プロファイル

セクション「*Profile_type* プロファイル」(*Profile_type* は処理しているプロファイルのタイプ) では、プロファイル管理ツールに、カスタマイズを使用して新規プロファイルを作成する、または既存のプロファイルを拡張するためのオプションを表示するかどうかを指定できます。

注: 既存のプロファイルの拡張はサポートされていません。

プロファイル管理ツールが、カスタマイズを使用して作成することのできるプロファイル・タイプをすべてリストできるようにするには、「**カスタマイズを使用した新規プロファイルの作成を許可する (Allow creation of new profiles using the customizations)**」を選択します。

Profile_type のカスタマイズ

セクション「*Profile_type* のカスタマイズ」(*Profile_type* は処理しているプロファイルのタイプ) では、プロファイル作成時または削除時に作成するカスタマイズを指定できます。

プロファイルの作成

実行するスクリプト、または CIP を正常にインストールした後に組み込むファイルを指定します。

スクリプトの実行、構成アーカイブの組み込みと復元、エンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルの組み込み、および EAR ファイル内でのアプリケーションのデプロイなどのアクションを実行します。

プロファイルの削除

プロファイルを拡張解除する場合に実行するスクリプトを指定します。

プロファイルの削除時に、CIP は実行するスクリプトを追加で指定できます。通常、これらのスクリプトは、プロファイルの作成時に行われたカスタマイズ・アクションを元に戻すために必要です。実行するプロファイル削除時の構成アクションがある場合は、`cip_app_server_root\if_augmentingTemplates\deleteRegistry.xml` ファイルにその構成アクションが含まれます。manageprofiles コマンドは通常、プロファイルの削除時に、カスタマイズされた Installation Factory の拡張を解除します。

cip_app_server_root

Installation Factory によって生成されたカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを以下にリストします。

AIX	/usr/ibm/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid
HP-UX	/opt/ibm/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid
Linux	/opt/ibm/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid
Solaris	/opt/ibm/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid
Windows	C:\Program Files\ibm\WebSphere\ProcServer\cip\cip_uid
i5/OS	/QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer/V61/ND/cip/cip_uid

`cip_uid` 変数は、ビルド定義ファイルの作成時に生成された CIP 固有の ID です。ビルド定義ウィザードで生成された値は、オーバーライドできます。システムに複数の CIP をインストールできるようにするには、固有値を使用します。

アクション・タイプ

以下の構成アクション・タイプのいずれかを指定します。

- スクリプトの実行
- エンタープライズ・アーカイブのデプロイ。EAR ファイルは、スタンドアロン・サーバーにのみデプロイできます。

ファイル名

スクリプト、エンタープライズ・アーカイブ・ファイル、または構成アーカイブ・ファイルを指定します。

ディレクトリー・パス

スクリプト、エンタープライズ・アーカイブ・ファイル、または構成アーカイブ・ファイルが格納されるディレクトリーを指定します。

障害時アクション

スクリプトに障害が発生した場合、またはファイルがロードできない場合に行われるアクションを指定します。以下の選択項目が有効です。

- 致命的エラー
- 継続

スクリプトの追加

CIP に組み込むスクリプトを検索して選択できる、ファイル参照ダイアログ・ウィンドウを開きます。スクリプトは、以下のサポートされるスクリプト・タイプのいずれかを選択できます。

- ANT スクリプト (*.ant)
- **Windows** Windows バッチ・ファイル (*.bat)
- **Linux** **UNIX** **i5/OS** シェル・スクリプト (*.sh)

注: i5/OS では、シェル・スクリプトには .sh 拡張子がありません。

- JAR ファイル (.jar)
- JAcl スクリプト (.jacl)
- Jython スクリプト (.py)

注: 追加するスクリプトは、このパネルで選択したプロファイル・タイプおよびアクション・タイプ (作成または削除のいずれか) に明確に関連付けられます。そのため、スクリプトを追加する前にタイプおよびイベントを選択する必要があります。

エンタープライズ・アーカイブの追加

アプリケーション・サーバー・プロファイルの CIP に組み込むエンタープライズ・アプリケーション・アーカイブ (EAR) ファイルを検索して選択できる、参照ダイアログを開きます。

EAR ファイルは、拡張された Java アーカイブ (JAR) ファイルであり、J2EE アプリケーションを J2EE アプリケーション・サーバーにデプロイするために使用される J2EE 標準で定義されています。EAR ファイルには、エンタープライズ Bean、デプロイメント記述子、および個々の Web アプリケーションの Web アーカイブ (WAR) ファイルが含まれています。

「追加ファイル」パネル:

「追加ファイル」パネルを使用して、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) にファイルとディレクトリーを追加します。

スクリプトは以下の 4 つのタイミングのうちいつでも実行できます。

- CIP のインストール時
- CIP のアンインストール時
- プロファイルの作成時
- プロファイルの削除時

スクリプトは、追加ファイルとして組み込み可能な他のスクリプトを呼び出すことができます。

すべての追加ファイルおよびディレクトリーは、`WPS_HOME/cip/cip_uid/userFiles` ディレクトリーのインストール済み CIP 内にあります。

ファイルの追加

構成済みシステム内または関連ファイルのキャッシュ内を参照して、CIP に組み込む追加ファイルを選択します。例えば、「プロファイル・カスタマイズ」パネルにリストされたスクリプトによって呼び出される、1 つ以上のスクリプト・ファイルを組み込むことができます。スクリプトをプロファイルの作成時または削除時に実行する場合、スクリプトでは、追加ファイルとして組み込まれた他のスクリプトを呼び出すことができます。

同様に、「インストール・スクリプトとアンインストール・スクリプト」パネルにリストされたスクリプトは、CIP のインストール時または CIP の削除時に実行されます。このようなスクリプトは、追加ファイルとして組み込まれた他のスクリプトを呼び出すことができます。

ディレクトリーの追加

CIP に指定する追加ディレクトリーを参照して選択します。例えば、多数のスクリプトが含まれるディレクトリーを指定することができます。

変更

項目を選択して「変更」をクリックし、ファイル・パスとファイル名またはディレクトリー・パスとディレクトリー名を変更します。

削除

選択したファイルとディレクトリーを CIP から除去します。

ファイル名

ファイルを識別します。

ディレクトリー・パス

ファイルが格納されているディレクトリーを識別します。

「作成情報」パネル:

「作成情報」パネルを使用して、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) に関する有用な情報を指定します。

インストールを実行するユーザーは、「このカスタマイズ済みインストール・パッケージについて (About this customized installation package)」パネルを参照できます。「作成情報」パネルのフィールドに情報を入力することにより、インストールを実行するユーザーに追加情報を提供できます。

組織

組織に関する識別情報を入力します。

説明

CIP の説明を入力します。

「カスタマイズ・インストール・パッケージのプレビュー」パネル:

ビルド定義ウィザードでは、ユーザーが選択したすべての内容を確認するための要約パネルを参照できます。

ビルド定義ウィザードを接続モードで実行する場合、処理エンジンを開始してカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を作成することもできます。ビルド定義ウィザードを切断モードで実行する場合は、ビルド定義ファイルをターゲット・システムにコピーしてから、ifcli コマンドを使用してターゲット・システムで処理エンジンを開始してください。

「終了」をクリックすると、ビルド定義ファイルが自動的に作成されます。指定したファイルが既に存在する場合、ファイルを上書きすることを確認するダイアログが表示されます。また、CIP 用のディレクトリーも自動的に作成されます。指定したディレクトリーが既に存在する場合、現在の内容を上書きすることを確認するダイアログが表示されます。

「推定サイズとスペースの表示」ボタンをクリックすると、提示された CIP のサイズを推定し、ローカル・システムで使用可能なディスク・スペースと比較することができます。

ビルド定義ファイル:

ビルド定義ファイルとは、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) のコンポーネントおよび特性を識別する XML ファイルです。

目的

ビルド定義ファイルは、CIP の内容を識別します。Installation Factory のグラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用する場合は、ビルド定義ファイルを編集する必要はありません。ビルド定義ファイルを編集する場合は、サンプルのビルド定義ファイルから始め、XML 検証エディターを使用して変更を加える必要があります。サンプルのビルド定義ファイルは *IF_root/samples/wbi* ディレクトリーにあります。ここで *IF_root* は、Installation Factory を解凍したディレクトリーの名前です。

変更を加えた後、検証のための XML パーサーまたはエディターを使用して、ビルド定義ファイルをその XML スキーマ (Common.xsd、BaseBuildDefinition.xsd、および BuildDefinition.xsd ファイル) と突き合わせながら検証します。次に、コマンド行インターフェースを使用して、処理エンジンを開始し、カスタマイズ済みインストール・パッケージを作成します。XML スキーマ・ファイルは、次のシステム固有のディレクトリーにあります。

-     *IF_root/bin/eclipse/plugins/com.ibm.ws.install.factory.base_6.1.0/xsd*
-  *IF_root\bin\eclipse\plugins\com.ibm.ws.install.factory.base_6.1.0\xsd*

例

以下の例では、あるバージョンのビルド定義ファイルのいくつかの要素を示します。最新の例については、*IF_root/samples/wbi/SampleBuildDefinition.xml* ファイルを参照してください。XML スキーマのコーディングに関する疑問に対して明確な回答が必要な場合は、常に最新のビルド定義の XML スキーマを参照してください。

```
<basebuilddef:buildDefinition
xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xmlns:basebuilddef="http://www.ibm.com/xmlns/prod/websphere/ib/basebuilddef"
xmlns:builddef="http://www.ibm.com/xmlns/prod/websphere/ib/builddef"
xmlns:common="http://www.ibm.com/xmlns/prod/websphere/ib/common"
xsi:type="builddef:BuildDefinition">
  <installFactoryVersion>
    <version>6</version>
    <release>1</release>
    <refreshPack>0</refreshPack>
    <fixPack>0</fixPack>
    <buildID>o0618.44</buildID>
  </installFactoryVersion>
  <description lang="en_US">Custom Install Package for
  WebSphere Process Server</description>
  <qualifiedVersionedPackageId>
    <offeringId>WBI</offeringId>
    <editionId></editionId>
    <installPackageId></installPackageId>
    <version>
      <version>6</version>
      <release>1</release>
      <refreshPack>0</refreshPack>
      <fixPack>1</fixPack>
    </version>
  </qualifiedVersionedPackageId>
  <modeSelection>Connected</modeSelection>
  <supportMultiPlatformsImage>>false</supportMultiPlatformsImage>
  <buildOptions>
    <targetLocation>E:%test%</targetLocation>
    <overwriteWithoutWarning>>false</overwriteWithoutWarning>
  </buildOptions>
  <authorInfo lang="en_US">
    <organization>IBM</organization>
  </authorInfo>
  <packageIdentifier>
    <fullPackageIdentifier>com.ibm.ws.install.wbiserver_1.0.0.0
    </fullPackageIdentifier>
    <identifier>com.ibm.ws.install.wbiserver</identifier>
    <version>1.0.0.0</version>
  </packageIdentifier>
  <packageMergeInfo>
  <sourceFullInstallPackageLocation>
    E:%WPSImage%v6.1%installimage</sourceFullInstallPackageLocation>
    <sourceMaintenanceInstallPackages installOrder="1" maintenanceType="fixPack">
      <rootFolder>
        <whichFolderToUse>literalRootProvided</whichFolderToUse>
        <rootFolder>E:%WPSImage%v6.1%FixPack%Windows%6.1.0.1</rootFolder>
      </rootFolder>
      <relativeFolder>.</relativeFolder>
      <fileNamePattern isRegex="false">6.1.0-WS-WPS-ESB-WinX32-FP0000001.pak
      </fileNamePattern>
    </sourceMaintenanceInstallPackages>
    <interimFixes maintenanceType="interimFix">
      <rootFolder>
        <whichFolderToUse>literalRootProvided</whichFolderToUse>
        <rootFolder>E:%ICT%maintenance</rootFolder>
      </rootFolder>
      <relativeFolder>.</relativeFolder>
    </interimFixes>
  </packageMergeInfo>
</basebuilddef:buildDefinition>
```

```

        <fileNamePattern isRegex="false">6.1.0.1-WS-WBI-IFJR78946.pak
    </fileNamePattern>
</interimFixes>
</packageMergeInfo>
<userFiles>
    <files>
        <fileSet>
            <rootFolder>
                <whichFolderToUse>literalRootProvided</whichFolderToUse>
                <rootFolder>E:%test%</rootFolder>
            </rootFolder>
            <relativeFolder includeSubfolders="false">.</relativeFolder>
            <fileNamePattern isRegex="false">myFile</fileNamePattern>
        </fileSet>
    </files>
</userFiles>
<common:features>
    <feature>
        <featureId>
            <featureId isRegex="false">wbi.server.samples</featureId>
        </featureId>
        <selectedByDefault>>false</selectedByDefault>
        <userModifiable>>true</userModifiable>
        <hidden>>false</hidden>
    </feature>
</common:features>
</basebuilddef:buildDefinition>

```

以下は、WebSphere Process Server 用のサンプルの CustomInstallInfo.xml です。

```

<custinstinfo:customInstallInfo
xmlns:common="http://www.ibm.com/xmlns/prod/websphere/if/common"
xmlns:custinstinfo="http://www.ibm.com/xmlns/prod/websphere/if/custinstinfo">
    <installFactoryVersion>
        <version>6</version>
        <release>1</release>
        <refreshPack>0</refreshPack>
        <fixPack>0</fixPack>
        <buildID>o0618.44</buildID>
    </installFactoryVersion>
    <common:bundle>
        com.ibm.ws.install.factory.wbiserver.cip.v61.comd.provider.wbiservercip
    </common:bundle>
    <description lang="en_US">Custom Install Package for WebSphere Process Server
    </description>
    <qualifiedVersionedPackageId>
        <offeringId>WBI</offeringId>
        <editionId></editionId>
        <installPackageId></installPackageId>
        <version>
            <version>6</version>
            <release>1</release>
            <refreshPack>0</refreshPack>
            <fixPack>1</fixPack>
        </version>
    </qualifiedVersionedPackageId>
    <offeringDisplayName>
        <messageKey>COMD.OfferingName.WPS</messageKey>
    </offeringDisplayName>
    <platformInfo>
        <common:osVendor isRegex="false">MICROSOFT</common:osVendor>
        <common:osName isRegex="false">WINDOWS</common:osName>
        <common:osVersion isRegex="false">NA</common:osVersion>
        <common:osPatchLevel isRegex="false">NA</common:osPatchLevel>
        <common:osArch isRegex="false">x86</common:osArch>
        <displayName>
            <osVendorDisplayName>

```



```

        <messageKey></messageKey>
    </osVendorDisplayName>
    <osNameDisplayName>
        <messageKey>COMD.OS.Windows</messageKey>
    </osNameDisplayName>
    <osVersionDisplayName>
        <messageKey></messageKey>
    </osVersionDisplayName>
    <osArchDisplayName>
        <messageKey>COMD.Arch.x32</messageKey>
    </osArchDisplayName>
</displayName>
</platformInfo>
<authorInfo lang="en_US">
    <organization>IBM</organization>
</authorInfo>
<packageIdentifier>
    <fullPackageIdentifier>com.ibm.ws.install.wbiserver_1.0.0.0
    </fullPackageIdentifier>
    <identifier>com.ibm.ws.install.wbiserver</identifier>
    <version>1.0.0.0</version>
</packageIdentifier>
<buildDate>2006-06-26</buildDate>
<buildTime>15:59:44</buildTime>
<rollbackSupported>true</rollbackSupported>
<fixes>
    <fix>
        <name>6.1.0.1-WS-WBI-IFJR78946.pak</name>
    </fix>
    <folderWithinPackageForInterimFixes>custom.wbi/maintenance
    </folderWithinPackageForInterimFixes>
</fixes>
<common:features>
    <feature>
        <featureId>
            <featureId>wbis</featureId>
            <common:displayName>
                <messageKey>COMD.FeatureName.wbis</messageKey>
            </common:displayName>
        </featureId>
        <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
        <userModifiable>false</userModifiable>
        <hidden>true</hidden>
    </feature>
    <feature>
        <featureId>
            <featureId>wbisonly</featureId>
            <common:displayName>
                <messageKey>COMD.FeatureName.wbisonly</messageKey>
            </common:displayName>
        </featureId>
        <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
        <userModifiable>false</userModifiable>
        <hidden>true</hidden>
    </feature>
    <feature>
        <featureId>
            <featureId>wbis.itlm</featureId>
            <common:displayName>
                <messageKey>COMD.FeatureName.wbis.itlm</messageKey>
            </common:displayName>
        </featureId>
        <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
        <userModifiable>false</userModifiable>
        <hidden>true</hidden>
    </feature>
    <feature>
        <featureId>

```

```

        <featureId>wbi.common2</featureId>
        <common:displayName>
            <messageKey>COMD.FeatureName.wbi.common2</messageKey>
        </common:displayName>
    </featureId>
    <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
    <userModifiable>false</userModifiable>
    <hidden>true</hidden>
</feature>
<feature>
    <featureId>
        <featureId>wesb</featureId>
        <common:displayName>
            <messageKey>COMD.FeatureName.wesb</messageKey>
        </common:displayName>
    </featureId>
    <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
    <userModifiable>false</userModifiable>
    <hidden>true</hidden>
</feature>
<feature>
    <featureId>
        <featureId>bpc</featureId>
        <common:displayName>
            <messageKey>COMD.FeatureName.bpc</messageKey>
        </common:displayName>
    </featureId>
    <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
    <userModifiable>false</userModifiable>
    <hidden>true</hidden>
</feature>
<feature>
    <featureId>
        <featureId>soacore</featureId>
        <common:displayName>
            <messageKey>COMD.FeatureName.soacore</messageKey>
        </common:displayName>
    </featureId>
    <selectedByDefault>true</selectedByDefault>
    <userModifiable>false</userModifiable>
    <hidden>true</hidden>
</feature>
</common:features>
<omittedFeatures>
    <featureId>
        <featureId>wbi.samples</featureId>
        <common:displayName>
            <messageKey>COMD.FeatureName.wbi.samples</messageKey>
        </common:displayName>
    </featureId>
    <featureId>
        <featureId>bpc.samples</featureId>
        <common:displayName>
            <messageKey>COMD.FeatureName.bpc.samples</messageKey>
        </common:displayName>
    </featureId>
    <featureId>
        <featureId>wesb.samples</featureId>
        <common:displayName>
            <messageKey>COMD.FeatureName.wesb.samples</messageKey>
        </common:displayName>
    </featureId>
    <featureId>
        <featureId>soacore.samples</featureId>
        <common:displayName>
            <messageKey>COMD.FeatureName.soacore.samples</messageKey>
        </common:displayName>
    </featureId>
</omittedFeatures>

```

```

</featureId>
<featureId>
  <featureId>wbis.brb</featureId>
  <common:displayName>
    <messageKey>CMD.FeatureName.wbis.brb</messageKey>
  </common:displayName>
</featureId>
<featureId>
  <featureId>wbis.brb.samples</featureId>
  <common:displayName>
    <messageKey>CMD.FeatureName.wbis.brb.samples</messageKey>
  </common:displayName>
</featureId>
<featureId>
  <featureId>wbis.cmm</featureId>
  <common:displayName>
    <messageKey>CMD.FeatureName.wbis.cmm</messageKey>
  </common:displayName>
</featureId>
<featureId>
  <featureId>wbis.cmm.samples</featureId>
  <common:displayName>
    <messageKey>CMD.FeatureName.wbis.cmm.samples</messageKey>
  </common:displayName>
</featureId>
<featureId>
  <featureId>wbis.javadocs</featureId>
  <common:displayName>
    <messageKey>CMD.FeatureName.wbis.javadocs</messageKey>
  </common:displayName>
</featureId>
</omittedFeatures>
<slipInstallInfo>
  <supportsSlipInstall>true</supportsSlipInstall>
</slipInstallInfo>
</custinstinfo:customInstallInfo>

```

カスタマイズ済みインストール・パッケージの作成

カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) の作成は、ビルド定義ウィザードを直接使用するか、またはビルド定義ウィザードでビルド定義ファイルを作成し、コマンド行ツールを使用して CIP をビルドすることによって実行できます。

このタスクについて

i5/OS i5/OS では、Windows、Linux、または UNIX サーバー上で Installation Factory コンソールを使用して、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を作成する必要があります。次に、CIP を i5/OS サーバーにエクスポートして CIP を直接インストールするか、Windows サーバー上でインストール GUI を使用して、CIP をリモート i5/OS サーバーにインストールできます。

ビルド定義ウィザードの各パネルでは、CIP に関する情報の入力が必要されます。例えば、保守パッケージ、スクリプト、および組み込み可能なその他のコンポーネントのロケーションの入力が要求されます。CIP を生成するためのロケーションの入力も要求されます。この情報はすべて、新規のビルド定義ファイルに保存されるか、または変更中のビルド定義ファイルに保存されます。

ウィザードの最後のパネルでは、定義したばかりのビルド定義ファイルの内容に基づく CIP を生成するためのオプションが提供されます。または、ビルド定義ファイルの保存のみを行い、後で ifcli コマンドでファイルを使用することもできます。切

断モードでは、CIP を作成することはできません。ifcli コマンドは Installation Factory コンソールの外部で CIP を生成します。別のマシンやオペレーティング・システム上でも生成します。

i5/OS ビルド定義ウィザードが完了したら、後で i5/OS サーバーにインストールできるように、ビルド定義ファイルを保存し、接続モードで作業している場合は CIP を作成します。

プロシージャ

1. 「ビルド定義」ウィザードを使用して、新規のビルド定義ファイルを作成するか、または既存のビルド定義ファイルを編集します。
2. CIP の作成を選択するか、または新規または変更されたビルド定義ファイルのみを保存することを選択します。

一般に、CIP を使用できると便利なため、CIP を作成するオプションを選択することを推奨します。デフォルトの「ビルド定義ファイルのみを保管する」ではなく、「ビルド定義ファイルを保管し、カスタマイズ済みインストール・パッケージを生成する」を選択してください。

注: 切断モードで作業している場合、CIP を作成することはできません。

i5/OS CIP の作成を選択します。

3. CIP の作成を選択しない場合、ビルド定義ファイルをターゲット・サーバーに転送し、ターゲット・サーバー上で ifcli コマンドを使用して、ビルド定義ファイルから CIP を作成します。
4. **i5/OS** CIP をターゲット・サーバーに転送し、それを直接インストールします。

処理エンジン・マシン上で使用するカスタマイズ済みインストール・パッケージの作成

Installation Factory を使用して、ローカル・マシン上または他のサーバーで使用するカスタマイズ済みインストール・パッケージを作成することができます。ここでは、ビルド定義ウィザードをホストするマシン上での CIP の作成プロセスについて説明します。

始める前に

WebSphere Application Server 用の IBM Installation Factory と、WebSphere Process Server プラグイン用の Installation Factory の両方がインストールされたマシン上で作業している必要があります。

このタスクについて



以下の手順を使用して、ビルド定義ファイルとカスタマイズ済みインストール・パッケージを特定のマシン上に作成します。

プロシージャ

1. ご使用のオペレーティング・システム用の製品インストール・イメージをマウントするか、またはそのイメージにアクセスします。 WebSphere Process

Server インストール・イメージを持つ製品メディア (CD または DVD) が作業中のマシンからアクセスできることを確認します。カスタマイズ済みインストール・パッケージを作成するには、このインストール・イメージが必要です。

2. 保守パッケージをダウンロードします。 Web サイト「WebSphere Process Server のための推奨される更新 (Recommended updates for WebSphere Process Server)」で WebSphere Process Server 用のダウンロード・パッケージを見つけます。
3. ifgui スクリプトを使用して、Installation Factory のコンソールを開始します。
 - **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** `IF_root/bin/ifgui.sh` スクリプトを使用します。
 - **Windows** `IF_root/bin/ifgui.bat` スクリプトを使用します。
4. 新規のビルド定義を作成するか、または既存のビルド定義を編集します。

オプション	説明
新規ビルド定義ファイルの作成 	新規ビルド定義ファイル用のボタンをクリックします。ここから、Installation Factory によって、2 つのウィザードが順に起動されます。この 2 つのウィザードは、製品の選択ウィザードとビルド定義ウィザードです。
既存のビルド定義ファイルを開く 	ボタンをクリックして、既存のビルド定義ファイルを開きます。既存のビルド定義を開いた場合は、ビルド定義ウィザードのみが開始されます。製品を変更する必要がある場合は、新規ビルド定義を開始します。

5. 「**接続モード**」を選択し、後でビルド定義ファイルの作成だけでなくカスタマイズ済みインストール・パッケージの作成も行えるようにします。インストール・イメージのディレクトリーと保守パッケージ・ファイルを参照して選択します。
6. 製品、インストール・イメージ、保守パッケージ、エンタープライズ・アーカイブ・ファイル、その他のファイルとディレクトリー、スクリプト、ビルド定義ファイル用の出力場所、およびカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) 用の出力場所を特定するために必要なすべてのパラメーターを指定します。
7. 「ビルド定義ファイルを保管し、カスタマイズ済みインストール・パッケージを生成する」オプションを選択します。デフォルトの「**ビルド定義ファイルのみを保管する**」ではなく、「**ビルド定義ファイルを保管し、カスタマイズ済みインストール・パッケージを生成する**」を選択してください。
8. 「**終了**」をクリックして、CIP を生成します。

CIP の生成に必要な時間は、保守パッケージの数とパッケージに組み込んだフィーチャーの数によって決まります。

処理エンジンの終了時、Installation Factory によって /logs/log.txt ファイルに完了メッセージが記録されます。

9. CIP に組み込まれている InstallShield MultiPlatform (ISMP) インストール・ウィザードを使用して、カスタマイズ済みインストール・パッケージをインストールすることができます。CIP インストール・ウィザードのパネルは、インストールしている製品に応じて異なります。WebSphere Process Server 用のインストール・ウィザードは、*CIP_directory*/WBI ディレクトリーにある *install* コマンドです。
10. CIP ベースのカスタム・スタンドアロン・サーバー・プロファイルを以下のいずれかの方法で作成します。

オプション	説明
プロファイル管理ツールの使用	<p>CIP のインストール後に、プロファイル管理ツールを実行します。</p> <p>注: CIP にプロファイル・カスタマイズが含まれていない場合、または CIP にプロファイル・カスタマイズが含まれているが、それを使用しないように選択している場合、プロファイルの拡張のみを実行できます。</p>
manageprofiles コマンドの使用	<p>CIP のインストール後に、manageprofiles コマンドを実行して、サーバー・プロファイルを作成し、オプションでそれを拡張します。このプロファイルの作成は、コマンドを一度実行する (作成および拡張) か、または二度実行する (作成後に拡張) ことによって行うことができます。</p> <p>注: CIP にプロファイル・カスタマイズが含まれていない場合、または CIP にプロファイル・カスタマイズが含まれているが、それを使用しないように選択している場合、プロファイルの拡張のみを実行できます。</p>
CIP インストール・ウィザードの使用	<p>CIP を使用して新規インストール (アップグレードやパッチではない) を作成している場合、以下の処理を行うことによってサーバー・プロファイルを作成できます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「フィーチャーの選択」パネルで、「プロファイル・カスタマイズをインストールする (Install profile customizations)」チェック・ボックスを選択します。 2. 「環境の選択」パネルで、プロファイル・カスタマイズが定義されているプロファイルを選択します。選択したプロファイルにプロファイル・カスタマイズが定義されている場合は、インストール・ウィザードで、manageprofiles コマンドが効率的に一度実行され、作成および拡張が行われます。プロファイル・カスタマイズが定義されていない場合は、通常のプロファイルを取得します。

場合によっては、ターゲット・オペレーティング・システムのプラットフォーム上で **Installation Factory** コンソールを使用できないことがあります。例えば、プラットフォームによっては、**ifcli** コマンドがサポートされますが、**ifgui** コマンドはサポートされません。その場合には、以下の 2 つのオプションがあります。

- サポートされているマシンで、切断モードでコンソールを使用し、別のマシン上のターゲット・オペレーティング・システム用のビルド定義ファイルを作成します。

ファイルをターゲット・オペレーティング・システムにコピーし、コマンド行インターフェースを使用して処理エンジンを開始し、カスタマイズ済みインストール・パッケージを作成します。

この処理の詳細については、関連タスクを参照してください。

- 検証 XML エディターを使用して、ビルド定義の XML 文書を作成します。

IF_root/samples/wbi ディレクトリーから、サンプルのビルド定義文書の 1 つをコピーして開始します。

変更を行ったら、検証 XML パーサーまたは検証 XML エディターを使用して、ビルド定義文書とその XML スキーマ (*Commom.xsd*、*BaseBuildDefinition.xsd*、および *BuildDefinition.xsd* ファイル) で検証します。コマンド行インターフェースを使用して処理エンジンを開始し、カスタマイズ済みインストール・パッケージを作成します。

リモート・システム上で使用するビルド定義ファイルの作成

場合によっては、あるマシンで、別のマシンで使用するビルド定義ファイルを作成することが必要になったり、便利であったりする場合があります。ビルド定義ファイルは、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) の先行版です。CIP を i5/OS サーバーにインストールするには、ビルド定義ファイルおよび CIP を Windows、Linux、または UNIX サーバー上に接続モードで作成します。次に、CIP を i5/OS サーバーまたは Windows サーバーにエクスポートすると、そこから i5/OS サーバー上にインストールできます。

始める前に

WebSphere Process Server 用の IBM Installation Factory を、カスタマイズ済みインストール・パッケージの作成で使用するサーバー・マシンにダウンロードして、解凍しておく必要があります。

このタスクについて

以下の手順を使用して、ビルド定義ファイルおよび関連する CIP を作成し、別のサーバーへのインストールを実行します。分かりやすくするために、カスタマイズ済みインストール・パッケージをインストールするマシンを「ターゲット・システム」と呼び、ビルド定義ファイルを作成するマシンを「処理エンジン」と呼びます。

プロシージャ

1. ターゲット・システムのオペレーティング・システム用の製品インストール・イメージをマウントするか、そのイメージにアクセスします。

接続モードで作業する場合、WebSphere Process Server インストール・イメージを格納している製品メディア (CD または DVD) が処理エンジンからアクセスできることを確認します。

このイメージを指すビルド定義ファイルを作成できるように、このイメージの場所を認識しておく必要があります。

マウント・ポイントまたは保管場所を書き留めて、この保管場所を処理エンジン上で実行されているビルド定義ウィザードで指定できるようにします。


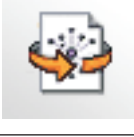
2. ターゲット・システムのオペレーティング・システム用の保守パッケージを処理エンジンにダウンロードします。

Web サイト「WebSphere Process Server のための推奨される更新 (Recommended updates for WebSphere Process Server)」で WebSphere Process Server 用のダウンロード・パッケージを見つけます。

リフレッシュ・パックの ZIP ファイルとフィックスパックの ZIP ファイルは、Update Installer for WebSphere Software にバンドルされています。ファイルを解凍して、その保守パッケージ (*.pak) ファイルを updateinstaller/maintenance ディレクトリーに格納します。

ダウンロードした保守パッケージの保管場所を書き留めて、この場所を処理エンジン上で実行されているビルド定義ウィザードで指定できるようにします。

3. ifgui スクリプトを使用して、処理エンジンで Installation Factory のコンソールを開始します。
 - **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** `IF_root/bin/ifgui.sh` スクリプトを使用します。
 - **Windows** `IF_root\bin\ifgui.bat` スクリプトを使用します。
4. 新規のビルド定義を作成するか、または既存のビルド定義を編集します。

オプション	説明
新規ビルド定義ファイルの作成 	新規ビルド定義ファイル用のボタンをクリックします。ここから、Installation Factory によって、2 つのウィザードが順に起動されます。この 2 つのウィザードは、製品の選択ウィザードとビルド定義ウィザードです。
既存のビルド定義ファイルを開く 	ボタンをクリックして、既存のビルド定義ファイルを開きます。既存のビルド定義を開いた場合は、ビルド定義ウィザードのみが開始されます。製品を変更する必要がある場合は、新規ビルド定義を開始します。

5. 「接続モード」を選択し、ターゲット・システムのオペレーティング・システムをリストから選択します。
6. 製品、インストール・イメージ、保守パッケージ、エンタープライズ・アーカイブ・ファイル、その他のファイルとディレクトリー、スクリプト、ビルド定

義ファイル用の出力場所、およびカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) 用の出力場所を特定するために必要なすべてのパラメーターを指定します。

7. CIP とビルド定義ファイルの両方を作成するオプションを選択します。デフォルトの「ビルド定義ファイルのみを保管する」ではなく、「ビルド定義ファイルを保管し、カスタマイズ済みインストール・パッケージを生成する」を選択してください。
8. 「終了」をクリックして、処理エンジン上にビルド定義ファイルを保存し、CIP を作成します。
9. CIP をターゲット・システムにコピーします。
10. **i5/OS** Windows サーバーから i5/OS に CIP を直接インストールすることもできます。関連タスク『Windows ワークステーションのグラフィカル・インターフェースによる System i への CIP のインストール』を参照してください。
11. ターゲット・システム上で、CIP に組み込まれている InstallShield for Multiplatforms (ISMP) インストール・ウィザードを使用して、カスタマイズ済みインストール・パッケージをインストールします。

CIP インストール・ウィザードのパネルは、インストールしている製品に応じて異なります。WebSphere Process Server 用のインストール・ウィザードは、以下の名前でも WBI ディレクトリーに保管されています。

- **AIX** **HP-UX** **Linux** **Solaris** インストール
- **Windows** install.bat

ifcli コマンド

ifcli コマンド行ツールは、指定されたビルド定義ファイルに対して Installation Factory の処理エンジンを起動します。この処理エンジンは、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を作成します。

目的

ifcli コマンド行ツールは、ビルド定義 XML ファイルを入力として受け取り、Installation Factory の処理エンジンを起動します。この処理エンジンは XML ファイルを解釈し、製品のソース・ファイルおよび保守パッケージを見つけ、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を作成します。

ロケーション

コマンド・ファイルは、Installation Factory を解凍したディレクトリーの /bin ディレクトリーにあります。コマンド・ファイルは、以下の名前のスクリプトです。

HP-UX **Linux** **AIX** **Solaris** ifcli.sh

Windows ifcli.bat

ロギング

ifcli コマンドは、カスタマイズされたインストールのイメージが正常に作成されたかどうかを示すビルド・ログ・ファイルを作成します。CIP が正常に作成されていない場合は、トレース・ファイルを調べて問題のある箇所を突き止めてください。

以下のファイルには、CIP 作成データが記録されています。

- trace.xml は、XML 形式の詳細トレース・ログです。
- log.txt はログ・ファイルです。

トレースおよびロギングの出力およびレベルは、**logLevel** および **traceLevel** パラメータの説明に従って構成することができます。

AIX

HP-UX

Linux

Solaris

ifcli.sh の構文

ヘルプを表示する:

```
./ifcli.sh -help
```

カスタマイズ済みインストール・パッケージを作成する:

```
./ifcli.sh -buildDef build_definition_file  
-silent  
-logLevel log_level  
-logFile log_file_path_name  
-traceLevel trace_level  
-traceFile trace_file_path_name
```

Windows

ifcli.bat の構文

ヘルプを表示する:

```
./ifcli.bat -help  
./ifcli.bat -?
```

カスタマイズ済みインストール・パッケージを作成する:

```
./ifcli.bat -buildDef build_definition_file  
-silent  
-logLevel log_level  
-logFile log_file_path_name  
-traceLevel trace_level  
-traceFile trace_file_path_name
```

パラメーター

以下の引数がサポートされています。

Windows **-.?**

使用法の情報を表示します。

-help

使用法の情報を表示します。

-buildDef *build_definition_file*

ビルド定義ウィザードによって作成されたビルド定義ファイルを識別します。

-logFile *log_file_path_name*

ログ・ファイルを識別します。デフォルト値は *current_working_directory/logs/log.txt* です。

-logLevel *log_level*

メッセージのロギングのレベルを設定します。*log_level* の有効な値は以下のとおりです。

- ALL
- CONFIG
- INFO
- WARNING
- SEVERE
- OFF (ロギングをオフにします)

デフォルト値は INFO です。

-silent

処理エンジンをサイレント・モードで、すなわち結果をコンソールに表示しないで実行することを指定します。

-traceFile *trace_file*

トレース・ファイルを識別します。デフォルト値は *current_working_directory/logs/trace.xml* です。

-traceLevel *trace_level*

トレースのレベルを設定します。*trace_level* の有効な値は以下のとおりです。

- ALL
- FINE
- FINER
- FINEST
- OFF (トレースをオフにします)

デフォルト値は OFF です。

使用法

ifcli コマンドを使用して、ビルド定義ファイルから WebSphere Process Server 製品用のカスタマイズ済みインストール・パッケージを作成します。

基礎となる WebSphere Application Server インストールの検証

WebSphere Process Server CIP は、WebSphere Application Server Network Deployment カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) が WebSphere Process Server CIP と同じディレクトリー・レベルにないと、システムにインストールすることはできません。また、WebSphere Application Server CIP は正しいフィックスアップ・レベルである必要があります。

WebSphere Process Server CIP は、WebSphere Application Server Network Deployment CIP を必要とします。これは、WebSphere Process Server CIP のインス

ツール時に、基礎となる WebSphere Application Server Base または WebSphere Application Server Network Deployment を包括的インストール (つまりスリップ・インストール) するために必要です。

WebSphere Application Server Network Deployment インストール・イメージは WebSphere Process Server 製品の一部として組み込まれており、これを使用して CIP を製品メディアから直接構築することができます。

Installation Factory ツールを使用して、WebSphere Process Server CIP をインストールするために必要な WebSphere Application Server Network Deployment CIP を作成することができます。 WebSphere Application Server Network Deployment CIP の作成およびインストールの詳細については、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

WebSphere Application Server Network Deployment CIP は、正しいフィックスパック・レベルである必要があります。必要なフィックスパック・レベルは、3 つのインスタンスのうち 1 つ以上において、メッセージ・ダイアログで報告されます。

- 「保守パッケージ」パネルで「次へ」をクリックする。
- Installation Factory GUI の最後のパネルで、保存を選択し、CIP を構築する。

メッセージ・ダイアログに以下の情報が表示されます。

- WebSphere Application Server Network Deployment CIP の必要なバージョン。バージョン要件は、WebSphere Process Server の要件に加え、フィックスパック、暫定修正から設定されます。
- サンプル・フィーチャーが WebSphere Application Server Network Deployment CIP 内に含まれている必要があるということ。

カスタマイズ済みインストール・パッケージのインストール: タスクのロードマップ

カスタマイズ済みインストール・パッケージは、いくつかの方法でインストールできます。

カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) の取り扱い方法はインストール・イメージの場合とほぼ同じです。つまり、CIP をインストールする場合は、標準インストールのインストール・ルートをたどっていきます。

CIP は、以下に示したさまざまな方法でインストールできます。

- WebSphere Process Server インストーラーを対話的に使用して、新規のインストールを作成する。
- 応答ファイルを使用してサイレント・インストールする。
- WebSphere Process Server インストーラーを対話的に使用して、既存のインストールに保守を追加する。
- 下位レベルの製品からより上位レベルの製品にトレードアップする。

カスタマイズ済みインストール・パッケージの対話式でのインストール

インストール・ウィザードを使用して、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を分散オペレーティング・システム・プラットフォームにインストールします。このインストールは、Installation Factory で作成された CIP イメージから行います。

始める前に

WebSphere Process Server 製品および 1 つ以上の保守パッケージと他のカスタマイズが組み込まれているカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) をインストールすることができます。CIP をインストールするには、その前に IBM Installation Factory で CIP を作成する必要があります。カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) の生成について詳しくは、『カスタマイズ済みインストール・パッケージの作成』を参照してください。

- CIP の対話式インストールに必要なステップは、標準的なインストールの場合と同じです。必要なステップについては、94 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』を参照してください。
- CIP をインストールしているときに、「ようこそ」パネルに、追加の「このカスタム・インストール・パッケージについて」ボタンが表示されます。このボタンをクリックして、以下のような CIP についての詳細情報を表示します。
 - CIP の作成に使用される Installation Factory のバージョン
 - CIP がインストールする製品のパッケージおよびバージョン
 - CIP のビルド日時
 - 機能および暫定修正のリスト
 - CIP をインストールできるオペレーティング・システム
 - スリップ・インストールがサポートされるかどうか
 - 作成者が「作成情報」パネルで追加した組織または説明

結果

これで、インストール・ウィザードの開始、使用条件への同意、前提条件の確認、インストールに影響を与える可能性のある WebSphere 製品の既存のインストールの識別が終わりました。また、実行するインストールのタイプ (標準的、デプロイメント環境、またはクライアント) も選択しました。

次のタスク

行った選択に応じて該当するリンクの説明に従い、インストールを続行します。

Windows ワークステーションのグラフィカル・インターフェースによる System i への CIP のインストール

System i では、Windows ワークステーションのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) から WebSphere Process Server CIP をインストールできます。

始める前に

このトピックは、Installation Factory を使用して CIP イメージを作成済みであること、CIP のインストール先オペレーティング・システムが i5/OS であること、および製品のインストールを CIP から行う必要があることを前提としています。CIP の作成について詳しくは、309 ページの『カスタマイズ済みインストール・パッケージの作成』を参照してください。

Windows ワークステーションから i5/OS システムにインストールされた

WebSphere Process Server CIP は、既存の WebSphere Process Server インストール環境に対してアップグレードを実行、機能を追加、または保守を適用する目的では使用できません。それらの作業を行う場合は、i5/OS システムからのローカルなサイレント・インストールによって WebSphere Process Server CIP を実行する必要があります。

このタスクについて

GUI インストール・ツールを実行する場合は、インストール・プロセスでいくつかのインストール・オプションを対話式に指定します。

GUI インストール・プログラムを使用して CIP から i5/OS に WebSphere Process Server をインストールするには、以下の手順に従ってください。

プロシージャ

1. TCP/IP が開始されていない場合、または TCP/IP が開始されているかどうか不明な場合は、制御言語 (CL) コマンド行に TCP/IP の開始 (STRTCP) コマンドを入力します。
2. ホスト・サーバーのジョブが、使用する System i サーバー上で開始されていることを確認します。ホスト・サーバーのジョブにより、インストール・コードが System i 上で実行可能になります。

CL コマンド行でこのコマンドを入力します。

```
STRHOSTSVR SERVER(*ALL)
```

3. ユーザー・プロファイルに *ALLOBJ と *SECADM の特殊権限が指定されていることを確認してください。
4. CIP for i5/OS のディスクを、Windows ワークステーションのディスク・ドライブにセットします。自動実行機能によりランチパッドが起動されます。

製品パッケージ内の IBM WebSphere Process Server Windows のディスク、またはその他のオペレーティング・システム・プラットフォーム用のディスクは使用しないでください。

5. WebSphere Process Server をインストールする i5/OS サーバーの名前、およびそのサーバーに対応する i5/OS ログイン情報を入力して、「OK」をクリックします。

さらに、そのサーバーに対して有効なユーザー ID とパスワードを入力する必要があります。このステップでは、プロファイルに *ALLOBJ と *SECADM の特殊権限が必要です。

6. 「ようこそ」パネルで「次へ」をクリックします。

7. 表示されるパネルで、使用許諾条件の条項に同意する場合は「**使用条件の条項に同意します (I accept the terms in the license agreement)**」を選択し、「次へ」をクリックします。使用許諾条件の条項に同意しない場合、インストールに進むことはできません。
8. システムの前提条件の検査が行われ、サーバーが製品をインストールするための最低限の要件を満たしているかどうかチェックされます。前提条件が満たされている場合は「次へ」をクリックします。前提条件が満たされていない場合でもインストールを続行することは可能です。しかし、ここでインストール・ウィザードを終了して必要な変更を加えることをお勧めします。
9. 「インストール・タイプ」パネルで、実行するインストールのタイプを選択して、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードでは、インストール・パスを選択することができます (前のパネルの選択内容によっては、すべてが表示されるとは限りません)。次のステップは、実行するインストールのタイプおよび (WebSphere Process Server クライアントの場合は) インストールを実行する既存環境に WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Network Deployment のどちらがインストールされているかによって異なります。

インストール・タイプ	次のステップ
<p>標準的インストール (デフォルト): WebSphere Process Server および WebSphere Application Server Network Deployment のインストールは、デフォルトのインストール・オプションと構成によって実行されます。また、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。</p> <p>重要: 標準的インストールを選択してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成し、セキュリティーを有効にした場合は、Business Process Choreographer のサンプル構成が作成されます。セキュリティーを有効に設定しない場合、Business Process Choreographer のサンプル構成は作成されません。後日、このサーバーを統合する場合は、ここで作成された Business Process Choreographer のサンプル構成があれば削除する必要があります。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。101 ページの『WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行』のトピックに進んでください。</p>
<p>デプロイメント環境インストール: WebSphere Process Server および WebSphere Application Server Network Deployment のインストールからデプロイメント環境のセットアップまでを、ウィザードのガイドに従って行います。デプロイメント環境パターンに基づいてデプロイメント・マネージャーを作成するか、すでに作成されているデプロイメント環境の定義ステップに進むかを選択できます。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。109 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックに進んでください。</p>

インストール・タイプ	次のステップ
<p>クライアント・インストール: WebSphere Process Server Client がインストールされ、WebSphere Application Server Network Deployment をインストールできます。これにより、同一セル内で WebSphere Process Server と対話するクライアント・アプリケーションの実行が可能になります。</p>	<p>表示されるパネルは、(基本または Network Deployment の) WebSphere Application Server のインストール済み環境にインストールを実行するかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment がインストール済みではない環境にインストールする場合は、「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。121 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックに進んでください。 • WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境にインストール場合は、「インストールの要約」パネルが表示されます。121 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックに進んでください。

10. 次に表示されるパネルで、インストールするフィーチャーを選択し「次へ」をクリックします。

CIP によってはサンプル・フィーチャーがない場合があります。その場合は、CIP に含まれていたものだけをインストールできます。

11. 次のパネルには、製品インストール・ルート・ディレクトリー、デフォルト・プロファイルのロケーション、および製品ライブラリー名が表示されます。それらの値を受け入れるか変更して、「次へ」をクリックします。

WebSphere Process Server for i5/OS の製品インストール・ルート・ディレクトリーには、コア製品ファイルが含まれます。このディレクトリーは、インフォメーション・センターで利用可能な多くの実例で *app_server_root* として示されます。

WebSphere Process Server for i5/OS のデフォルト・プロファイルのロケーションには、そのプロファイルの構成可能ファイルが含まれます。このディレクトリーは、インフォメーション・センター内の多くの実例で *user_data_root* と記述されます。デフォルト・プロファイルのロケーションは、プロファイル・レジストリーとプロファイル・ディレクトリーが作成されるディレクトリーです。デフォルト・プロファイルは *user_data_root/profiles/default* に作成されます。プロファイル・レジストリーは *user_data_root/profileRegistry* に作成されます。

製品ライブラリーは、インフォメーション・センター内の多くの実例で言及されている名称ですが、*product_library* と記述される場合もあります。

12. 次のパネルで、コア製品ファイルのインストール後に作成する WebSphere Process Server プロファイルのタイプを選択し、「次へ」をクリックします。

以下のいずれかのプロファイル・タイプを選択してください。

- デプロイメント・マネージャー

デプロイメント・マネージャーは、1 つ以上のマシン上にあるアプリケーション・サーバーの論理グループに、単一の管理インターフェースを提供します。

- スタンドアロン・サーバー

スタンドアロン・サーバー・プロファイルには、デフォルト・サーバー 1 つ、Snoop サブレットと HitCount サブレットが組み込まれるデフォルト・アプリケーション、およびアプリケーション・サンプルが設定されています。このスタンドアロン・サーバーは統合できるだけでなく、スタンドアロン・サーバーとして使用することもできます。

- カスタム

カスタム・プロファイルは、例えばメッセージング・サーバーのように、複数のアプリケーション・サーバー、クラスター、またはその他の Java プロセスを組み込むためにカスタマイズする必要のある空のノードです。

13. 次のパネルで、管理セキュリティーを有効にするかどうかを選択します。有効にする場合は、管理ツールにアクセスするためのユーザー名とパスワードを指定する必要があります。「次へ」をクリックして先に進みます。

ユーザー ID とパスワードは、システム・ユーザーの ID とパスワード、または LDAP のユーザー ID とパスワードである必要はありません。指定した ID とパスワードのペアは、ユーザー・レジストリーに保管され、デフォルト・プロファイルの管理セキュリティーで使用されます。

14. 次のパネルで、表示される要約情報が正しいかどうかを確認します。誤りがある場合は、「戻る」をクリックして指定内容を変更してください。要約情報に問題がなければ、「次へ」をクリックして WebSphere Process Server for i5/OS をインストールします。

InstallShield プログラムから、インストール状況を示すメッセージとインストールの進行状況を示すステータス・バーが表示されます。

インストールの実行後は、構成マネージャーの進行パネルが表示されます。構成マネージャーは、インストール後のタスクを実行し、デフォルト・プロファイルを作成します。

インストール・プロセスが完了すると、「要約」パネルにインストール・プロセスの結果が表示され、製品に関する追加情報へのリンクが示されます。

15. 「終了」をクリックして InstallShield プログラムを終了します。
16. セキュリティーのために、インストール前にホスト・サーバーが稼働していなかった場合、インストールが完了した後にホスト・サーバー終了 (ENDHOSTSVR) コマンドを実行することをお勧めします。

結果

この手順によって、Windows ワークステーション GUI からこの製品がインストールされます。

次のタスク

このインストールに進むには、318 ページの『カスタマイズ済みインストール・パッケージのインストール: タスクのロードマップ』を参照してください。

カスタマイズ済みインストール・パッケージのサイレント・インストール

サイレント・インストールを使用したカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) のインストールとは、応答ファイルの使用して、ユーザーとの対話なしでインストール・オプションを指定することを指します。インストールを構成するには、インストールのコマンドを発行する前に、応答ファイル内のオプションを変更します。サイレント・インストール・モードでは、対話式インストール・オプションを受け付けません。サイレント・インストール中にデフォルト以外のオプションを指定するには、応答ファイルを事前に編集しておく必要があります。サイレント・インストールを実行するには、使用許諾契約オプションでご使用条件を受け入れる必要があります。

始める前に

- 45 ページの『第 4 章 WebSphere Process Server のインストールに関する前提条件』で、製品をインストールするための前提条件のリストを確認してください。
- セキュリティーおよび役割ベースの許可を有効にする場合は、必ず管理者としてログインしてください。サイレント・インストール中には、デフォルトでセキュリティが有効になります。セキュリティを無効にするには、応答ファイルの **PROF_enableAdminSecurity** 値を "false" に変更します。

注: 標準的インストール中にスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成を選択し、セキュリティを有効にした場合、インストーラーによりそのプロファイルにサンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。セキュリティを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。

このタスクについて

WebSphere Process Server および 1 つ以上の保守パッケージとその他のカスタマイズを含むカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) をインストールすることができます。CIP をインストールするには、Installation Factory で CIP を作成する必要があります。カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) の作成について詳しくは、『カスタマイズ済みインストール・パッケージの作成およびインストール (Developing and installing customized installation packages)』を参照してください。

サイレント・インストールでは、インストール・ウィザードを使用して、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用せずに製品をサイレント・モードでインストールします。サイレント・インストールでは、ウィザードのインターフェースを表示する代わりに、インストール・プログラムが指定されたファイルからすべての応答を読み取ります。

この手順を使用して、製品のサイレント・インストールを実行します。

1. オペレーティング・システムにログオンします。
2. **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** ドライブに DVD を挿入後、一部の Linux および UNIX オペレーティング・システムではドライブをマウントする必要があります。
3. サンプル応答ファイル `responsefile.wbis.txt` を、CIP の WBI ディレクトリーからシステム上の識別が容易な場所にコピーし、新しい名前 (`myoptionsfile.txt` など) で保存します。
4. ターゲット・オペレーティング・システム上で、選択したフラット・ファイル・エディターを使用してファイルを編集し、ご使用のシステム用のパラメーターを使用してカスタマイズします。応答ファイル内の指示を読み、今回のサイレント・インストールのために設定するすべてのオプションに適切な値を選択します。

応答ファイル内のすべてのパラメーターを変更できますが、以下のオプションおよび値には注意してください。

重要: 必ず、ファイル内のご使用条件への同意に関する記述において、値を "true" に変更してください。値を "false" のままにすると、インストールが失敗します。

例えば、ご使用条件への同意として `-OPT`

`silentInstallLicenseAcceptance="true"` にしてください。

- `wpsInstallType` オプションの値を変更して、以下のいずれかのインストール・タイプを指定します。
 - "typical" - WebSphere Process Server をフルインストールします。このインストールでは、スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、カスタムの初期 WebSphere Process Server 環境を定義できます (環境を定義しないことも選択できます)。

デフォルトでは、`responsefile.wbis.txt` のインストール・タイプ設定は標準的インストール、つまり `-OPT wpsInstallType="typical"` です。

- "client" - WebSphere Process Server の部分インストールです。同一セル内でプロセス・サーバーと対話するクライアント・アプリケーションを実行できます。

操作可能な WebSphere Process Server クライアント環境を作成するには、オプション機能 (サンプルや Javadoc など) を選択したり、インストールの一部としてプロファイルを作成したりしないでください。これを行うと、インストールが失敗する可能性があります。クライアント・インストールを作成する方法の例については、応答ファイル例を参照してください。

- "ndGuided" - WebSphere Process Server のフルインストールです。デプロイメント環境をセットアップしたり、デプロイメント環境パターンに基づいてデプロイメント・マネージャーを作成したり、前に作成したデプロイメント環境を定義したりするためのガイドが表示されます。
- 標準的インストールの場合は、操作可能な WebSphere Process Server 環境を作成するためにプロファイルが必要です。インストール処理中にプロファイル

を作成するように応答ファイルで値を指定することにより、プロファイルをサイレントに作成できます。オプション `profileType` の値を以下のいずれかの値に変更します。

- `deploymentManager` - デプロイメント・マネージャーでプロファイルを作成します。以下に例を示します。

```
-OPT profileType="deploymentManager"
```

- `standAlone` - スタンドアロン・サーバーでプロファイルを作成します。以下に例を示します。

```
-OPT profileType="standAlone"
```

- `custom` - 空のノードでプロファイルを作成します。この空のノードは、インストール後に構成できます。

```
-OPT profileType="custom"
```

- `none` - インストール中にプロファイルを作成しません。この値は、サイレント・インストール・プロセス中にプロファイルを作成しない場合に使用します。インストール後にプロファイル管理ツールを実行してプロファイルを作成する必要があります。

```
-OPT profileType="none"
```

注: 既存のインストール済み環境のプロファイルを作成する場合は、応答ファイルの `-OPT installType="installNew"` セクションをコメント化し、応答ファイルの `-OPT createProfile` セクションからコメントを外し、オプション `-createProfile` の値を `true` に変更します。以下に例を示します。

```
#-OPT installType="installNew"  
-OPT createProfile="true"
```

プロファイルのサイレント作成について詳しくは、203 ページの『`manageprofiles` コマンドを使用したプロファイルの作成』を参照してください。

- デプロイメント環境のインストール (`-OPT wpsInstallType="ndGuided"`) を指定した場合は、追加のオプションも指定して、インストールを定義する必要があります。 `ndGuidedInstallType` オプションの値を以下のいずれかの値に変更します。

- `deploymentManager` - デプロイメント・マネージャーを作成するためのガイドを表示します。このガイドでは、選択したパターンに基づく新しいデプロイメント環境を作成します。以下に例を示します。

```
-OPT ndGuidedInstallType="deploymentManager"
```

`deploymentManager` の値を使用する場合は、応答ファイルの他の値も変更して、サイレント・インストール中のデプロイメント・マネージャー・サーバーの作成を詳細に定義する必要があります。

- `additionalRoles` - 定義済みのデプロイメント環境でカスタム・プロファイルを作成するためのガイドを表示します。そのデプロイメント環境で稼動しているデプロイメント・マネージャーに接続する必要があります。以下に例を示します。

```
-OPT ndGuidedInstallType="additionalRoles"
```

デプロイメント環境について詳しくは、計画に関する考慮事項およびデプロイメント環境の実装を参照してください。

注: どの時点でも *WebSphere Process Server V6.1 DVD* の WBI ディレクトリーに戻って応答ファイル例 `responsefile.wbis.txt` を参照し、デフォルトのオプションと値を確認できます。

5. コピーした応答ファイルに変更内容を保存します。
6. コマンドを実行し、カスタム応答ファイルを使用して *WebSphere Process Server* をインストールします。ここに示すコマンドでは、応答ファイルを一時ディレクトリーにコピーし、`myoptions.txt` に名前変更した後にファイルをカスタマイズしたと想定します。

次のコマンドを *WebSphere Process Server V6.1 DVD*、あるいはパスポート・アドバンテージまたは *WebSphere Process Server V6.1 Disk 1* および *WebSphere Process Server V6.1 Disk 2* からの電子イメージのコンテンツを保存した一時的な場所のいずれかから実行します。

- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `install -options /tmp/WBI/myoptions.txt -silent`
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `install.bat -options "C:¥temp¥WBI¥myoptions.txt" -silent`

CIP を既存のインストール済み環境にサイレントにインストールするには、応答ファイルを編集する必要があります。

`installType` オプションを `installAndPatch` に設定するか、同等に機能する `addFeature` に設定します。

設定するその他のオプションは `if_cip_modifyexistinginstall` です。これには、`maintenanceOnly` (製品バイナリーのみインストールし、プロファイルのカスタマイズを実行しない) または `customizationAndMaintenance` (製品バイナリーのインストールに加えて、プロファイルのカスタマイズを実行する) の値を設定できます。

結果

インストール・ウィザードとプロファイル管理ツールは、以下のログ・ファイルにインストール・イベントを記録します。

表 24.

ログ	内容	インディケータ
<code>app_server_root /logs/wbi/install/log.txt</code>	すべてのインストール・イベントが記録されます	戻りコード - 意味 0 - 成功 1 - 失敗 2 - 部分的に成功

表 24. (続き)

ログ	内容	インディケータ
<p>app_server_root /logs/manageprofiles/ profile_name_create.log</p> <p>user_data_root/profileRegistry/logs/ manageprofiles/create.log</p>	<ul style="list-style-type: none"> 名前付きのプロファイルの作成中に発生するすべてのイベントをトレースします プロファイル管理ツール、または manageprofiles コマンドの使用時に作成されます 	<p>INSTCONFFAIL - プロファイル作成全体の失敗。</p> <p>INSTCONFSUCCESS - プロファイル作成の成功。</p> <p>INSTCONFPARTIALSUCCESS - プロファイル作成エラーが発生したがプロファイルは機能している状態。追加情報でエラーを識別します。</p>
<p>app_server_root /logs/manageprofiles/ profile_name_delete.log</p> <p>user_data_root/profileRegistry/logs/ manageprofiles/delete.log</p>	<ul style="list-style-type: none"> 名前付きのプロファイルの削除中に発生するすべてのイベントをトレースします プロファイル管理ツール、または manageprofiles コマンドの使用時に作成されます 	<p>INSTCONFFAIL - プロファイル削除全体の失敗。</p> <p>INSTCONFSUCCESS - プロファイル削除の成功。</p> <p>INSTCONFPARTIALSUCCESS - プロファイル削除エラーがしたがプロファイルは削除されている。追加情報でエラーを識別します。</p>
<p>app_server_root /logs/wbi/install/ installconfig.log.gz</p>	<ul style="list-style-type: none"> インストール手順の最後に実行される ANT 構成スクリプトのアクティビティが記録されます Gzip ファイル 	<p>構成アクションが失敗しました: ANT スクリプト構成の失敗。</p> <p>構成アクションが成功しました (Configuration action succeeded): ANT スクリプト構成の成功。</p>

カスタマイズ済みインストール・パッケージの対話式的実行による、既存の WebSphere Process Server のインストール済み環境への保守の追加: 基本ステップ

WebSphere Process Server および 1 つ以上の保守パッケージが組み込まれたカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) のインストールのためのオプションはいくつかあります。CIP インストール・ウィザードを使用して、CIP 内に組み込まれたフィーチャーをインストールすることができます。CIP インストール・ウィザードは、CIP 内に組み込まれた保守パッケージもインストールします。考えられるユース・ケース・シナリオに共通の手順が提供されます。

始める前に

カスタム・インストール・パッケージをインストールするためには、適切な権限でシステムにログオンする必要があります。ターゲット・システム上に、少なくとも 1 つの WebSphere Process Server のインストール済み環境が存在している必要があります。

このタスクについて

CIP が作成されると、ビルド定義ウィザードの「ビルド情報」パネルで指示したディレクトリー (CIP_directory) に圧縮ファイルとして保管されます。CIP_directory には、WBI および custom.wbi という 2 つのサブディレクトリーがあります。

WebSphere Process Server の CIP をインストールするには、その前に WebSphere Application Server Network Deployment CIP を作成する必要があります。
WAS_ND_CIP_directory には次のディレクトリーが含まれています。

- WAS
- custom
- JDK

以下のステップは後続の各タスクに共通で、想定している特定のインストール・シナリオに進む前に実行する必要があります。

プロシージャ

1. WBI および custom.wbi を WebSphere Application Server Network Deployment CIP ディレクトリー WAS_ND_CIP_directory にコピーします。このステップを実行すると、WAS_ND_CIP_directory に以下のサブディレクトリーが含まれるようになります。

- custom.wbi
- WBI
- WAS
- custom
- JDK

WebSphere Process Server 製品メディアが手元にあり、必要な保守レベルについてメッセージで報告された WebSphere Application Server Network Deployment CIP のバージョンが、その製品メディア上のバージョンより低い場合、WBI ディレクトリーおよび custom.wbi ディレクトリーをインストール・イメージの WebSphere Application Server Network Deployment CIP ディレクトリーに単にコピーします。これは既存の WBI ディレクトリーを上書きします。

2. WebSphere Process Server のカスタム・インストール・パッケージのインストールを開始します。

install コマンドでインストールを直接開始します。

- a. WAS_ND_CIP_directory/WBI ディレクトリーに変更します。
- b. 以下のコマンドを発行します。

-      ./install
-  install.bat

コマンド行から CIP インストール・ウィザードを起動すると、ウィザードにより、「ようこそ」パネルが初期化され表示されます。「このカスタム・インストール・パッケージについて」をクリックして、エディションやバージョンなどの現在のカスタマイズ済みインストール・パッケージに関する詳細情報を表示します。

3. 「ライセンス」パネルに移動します。「ようこそ」パネルの「次へ」をクリックします。
4. ご使用条件をお読みになり、この条件を受け入れます。

「**IBM および IBM 以外の両方の条件を受諾します (I accept both the IBM and the non-IBM terms)**」をクリックしてご使用条件に同意し、「次へ」をクリックして先に進みます。

ライセンス条項に同意すると、インストール・ウィザードにより、サポートされるオペレーティング・システムと前提条件のパッチが検査されます。システムに適切な前提条件の更新が存在しないなどの問題が発生した場合は、インストールをキャンセルして必要な変更を行ってから、インストールを再開始します。

インストール・ウィザードでは、prereqChecker アプリケーションで前提条件のオペレーティング・システムのパッチがチェックされますが、前提条件をまだ確認していない場合は、サポートされるハードウェアとソフトウェアの Web サイトで前提条件を確認してください。

この Web サイトには、サポートされているオペレーティング・システム、およびオペレーティング・システムを準拠させるためにインストールする必要があるオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがすべて記載されています。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

5. 前提条件の確認を完了し、「既存のコピーの検出 (Detect existing copy)」パネルに移動します。システムの前条件の確認が完了したら、「次へ」をクリックします。
6. 製品の前のバージョンを確認します。

インストール・ウィザードでは、同じメジャー製品レベルの前のインストールかどうかを検査します。

ウィザードで前のインストールが検出されると、「既存のインストール (Existing installation)」パネルが表示されます。このタスクでは、前のインストールが存在していて、フィーチャーを増分インストールで追加していることが前提となります。

CIP ウィザードでは、すべての WebSphere Process Server のインストールが検出されます。CIP を使用して製品間インストールを実行することができます。ただし、CIP を使用して異なる製品インストールにフィーチャーを追加することはできません。例えば、WebSphere Process Server CIP を使用して、WebSphere Enterprise Service Bus のインストール済み環境にフィーチャーを追加することはできません。

7. 既存の WebSphere Process Server のコピーに保守を適用して、フィーチャーを追加することを選択します。

「**既存の WebSphere Process Server のコピーに保守を適用してフィーチャーを追加する (Apply maintenance and add features to an existing copy of WebSphere Process Server)**」をクリックして、リストから既存のインストールを選択します。選択したインストールに対してシステム前提条件の検査が実行されます。

次のタスク

CIP をインストールする場合、このタスクで説明した手順の実行では不十分で、インストールを実行するにはサブトピックで説明する手順に従う必要があります。インストール計画に適合したサブトピックを選択し、そこで説明されている手順に従います。

スリップ・インストール:

スリップ・インストールとは、機能の追加の有無に関わらず、既存の WebSphere Process Server インストールを高い保守レベルの WebSphere Process Server に移すことを意味します。

ある保守レベルの既存の WebSphere Process Server インストールがある場合、それより高い保守レベルの WebSphere Process Server インストールを含むカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を使用して、ご使用のインストールをこの高い保守レベルに移すことができます。このようなインストールを、スリップ・インストールといいます。

スリップ・インストールには、オプションでフィックスパックや追加の機能を組み込むことができます。

i5/OS スリップ・インストールは、リモートの i5/OS システムではサポートされません。この場合は、ローカルのサイレント・インストールを実行する必要があります。

CIP のインストールを完了して、既存の WebSphere Process Server インストール済み環境を拡張する:

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

このタスクについて

『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「フィーチャー (Features)」パネルで追加フィーチャーを選択しないでください。追加フィーチャーを含むインストール方法については、別の箇所で説明されています。「次へ」をクリックするだけです。

2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。 要約情報がユーザーの要件に合わない場合は、インストール・プロセスを停止して、再度開始します。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。
5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

結果

CIP のバックアップが `WPS_HOME/properties/versions/nif/backup` ディレクトリーに作成されます。システムをそのスリップ・インストールの前の状態に復元する場合 (例えば、WebSphere Process Server の前のバージョンに復元するなど)、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

WebSphere Process Server のスリップ・インストール - 追加フィーチャーなし:

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

このタスクについて

『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。既存のインストール済み環境に含まれるフィーチャーに対する追加フィーチャーが CIP に含まれていない場合、使用可能なすべてのフィーチャーが選択され使用不可にされた状態で、CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。「このインストールに含まれる保守更新のインストール」が選択され、使用不可にされています。

プロシージャ

1. 「フィーチャー (Features)」パネルの「次へ」をクリックします。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。 要約情報がユーザーの要件に合わない場合は、インストール・プロセスを停止して、再度開始します。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。

5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

結果

CIP のバックアップが `WPS_HOME/properties/version/nif/backup` ディレクトリーに作成されます。システムをそのスリップ・インストールの前の状態に復元する場合 (例えば、WebSphere Process Server の前のバージョンに復元するなど)、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

WebSphere Process Server のスリップ・インストール - 1 つ以上の追加フィーチャーあり:

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

このタスクについて

『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「フィーチャー (Features)」パネルでインストールする追加フィーチャーを選択します。インストールの一部としてインストールする追加フィーチャーを選択して、「次へ」をクリックします。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。要約のフィーチャー・セクションに、インストールされる追加フィーチャーおよび暫定修正がリストされます。既にインストールされているフィーチャーはリストされません。要約情報がユーザーの要件に合わない場合は、インストール・プロセスを停止して、再度開始します。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。
5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

結果

CIP のバックアップが `WPS_HOME/properties/version/nif/backup` ディレクトリーに作成されます。システムをそのスリップ・インストールの前の状態に復元する場合 (例えば、WebSphere Process Server の前のバージョンに復元するなど)、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

WebSphere Process Server のスリップ・インストール - 既存のインストール環境に暫定修正あり:

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

このタスクについて

『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。追加フィーチャーが CIP に含まれていない場合、CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルはスキップされます。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。パネルの上部にメッセージが表示され、(リストされている) 暫定修正が CIP のインストール時にアンインストールされることが警告されます。これらの暫定修正のうち CIP に含まれていないものがあれば、CIP のインストールの完了後に別個に再インストールする必要があります。
2. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
3. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。進行状況表示には暫定修正のアンインストールも含まれています。
4. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

結果

CIP のバックアップが `WPS_HOME/properties/version/nif/update/` ディレクトリーに作成されます。システムをそのスリップ・インストールの前の状態に復元する場合 (例えば、WebSphere Process Server の前のバージョンに復元するなど)、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

WebSphere Process Server のスリップ・インストール - CIP で一部のフィーチャーが欠落しており、更新できない:

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

このタスクについて

『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。CIP に追加フィーチャーが含まれている場合、CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。追加フィーチャーがない場合、以下の最初のステップが省略されます。

プロシージャ

1. インストールする追加フィーチャーがある場合、それらのフィーチャーが「フィーチャー (Features)」パネルに表示されます。追加フィーチャーがない場合、「フィーチャー (Features)」パネルは表示されません。CIP の一部であり、かつオリジナルの WebSphere Process Server インストールの一部であるすべてのフィーチャーは、チェック・ボックスが使用不可にされて表示され、フィーチャーがインストールされることが示されます。オリジナルの WebSphere Process Server インストールの一部ではない CIP フィーチャーは、チェック・ボックスがアクティブにされて表示されます。インストールするフィーチャーを選択し、インストールから除去するフィーチャーを選択解除します。完了したら、「次へ」をクリックします。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。パネルの上部にメッセージが表示され、(リストされている) 暫定修正が CIP のインストール時にアンインストールされることが警告されます。これらの暫定修正のうち CIP に含まれていないものがあれば、CIP のインストールの完了後に別個に再インストールする必要があります。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。進行状況表示には暫定修正のアンインストールも含まれています。
5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

結果

CIP のバックアップが `WPS_HOME/properties/version/nif/update/` ディレクトリーに作成されます。システムをそのスリップ・インストールの前の状態に復元する場合 (例えば、WebSphere Process Server の前のバージョンに復元するなど)、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

増分インストール:

増分インストールでは、基礎となる WebSphere Process Server のインストール済み環境を置き換えたり変更したりすることなく、既存のインストールの機能を追加または変更します。

増分インストールでは、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を使用して、同じ保守レベルの WebSphere Process Server を含む CIP を使用した現在の WebSphere Process Server インストール環境に機能を追加します。

増分インストールの結果、製品の保守バージョンは変更されないまま、インストールのほかの機能が追加またはアップグレードされます。

増分 WebSphere Process Server インストール - 同じ保守レベルの既存のインストール済み環境へのフィーチャーの追加 - 既存のインストール済み環境にある CIP 内の暫定修正の検出:

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

このタスクについて

増分インストールでは、WebSphere Process Server のバージョンが変更されるのではなく、フィックス、フィーチャー、または保守パックが追加されます。『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「フィーチャー (Features)」パネルでインストールする追加フィーチャーを選択します。CIP インストールの一部としてインストールするフィーチャーを選択します。「次へ」をクリックします。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。要約情報がユーザーの要件に合わない場合は、インストール・プロセスを停止して、再度開始します。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。
5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

結果

CIP のバックアップが `WPS_HOME/properties/version/nif/update/` ディレクトリーに作成されます。システムをその増分インストールの前の状態に復元する場合、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

WebSphere Process Server のバージョンは同じままで、暫定修正も変更されずに、選択した新規フィーチャーがインストールされます。

増分 WebSphere Process Server インストール - 既存のインストール済み環境に同じ保守レベルのフィーチャーを追加 - CIP のいずれの暫定修正も既存のインストール済み環境に存在しない場合:

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

このタスクについて

増分インストールでは、WebSphere Process Server のバージョンが変更されるのではなく、フィックス、フィーチャー、または保守パックが追加されます。『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「フィーチャー (Features)」パネルでインストールする追加フィーチャーを選択します。CIP インストールの一部としてインストールするフィーチャーを選択します。「次へ」をクリックします。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。要約情報がユーザーの要件に合わない場合は、インストール・プロセスを停止して、再度開始します。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。
5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

結果

CIP のバックアップが `WPS_HOME/properties/version/nif/update/` ディレクトリーに作成されます。システムをその増分インストールの前の状態に復元する場合、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

WebSphere Process Server のバージョンは同じままで、インストールされる暫定修正は以前にインストールされた暫定修正と CIP 内に組み込まれた暫定修正とが結合されたものになります。さらに、選択した新規フィーチャーもインストールされます。

増分 WebSphere Process Server インストール - 同じ保守レベルの既存のインストール済み環境へのフィーチャーの追加 - 既存のインストール済み環境にある CIP 内の一部の (すべてではない) 暫定修正の検出:

既存のインストール済み環境を拡張するためのコア・ステップを完了したら、このタスクを実行して拡張のプロセスを完了します。

始める前に

このタスクは、『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』というトピックで提供されている情報の続きです。前提条件タスクが完了するまで、このタスクを開始しないでください。

このタスクについて

増分インストールでは、WebSphere Process Server のバージョンが変更されるのではなく、フィックス、フィーチャー、または保守パックが追加されます。『既存の WebSphere Process Server インストール済み環境の拡張のための対話式での CIP の実行 (Running a CIP interactively to augment an existing WebSphere Process Server installation)』のタスクを完了した後すぐに以下のステップを実行してください。CIP インストール・ウィザードの「フィーチャー (Features)」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「フィーチャー (Features)」パネルで追加フィーチャーを選択しないでください。追加フィーチャーを含むインストール方法については、別の箇所で説明されています。「次へ」をクリックするだけです。
2. 「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルでインストール情報を確認します。要約情報がユーザーの要件に合わない場合は、インストール・プロセスを停止して、再度開始します。
3. インストールを開始します。「インストール・プレビューの要約 (Installation preview summary)」パネルの情報が正しい場合、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
4. 進行状況表示でインストールのプロセスを追跡します。
5. インストールが完了すると、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。パネルを調べて、インストールが正常に完了したことを確認します。

結果

CIP のバックアップが `WPS_HOME/properties/version/nif/update/` ディレクトリーに作成されます。システムをその増分インストールの前の状態に復元する場合、Update Installer を使用して CIP をスリップ・アンインストールすることができます。

WebSphere Process Server のバージョンは同じままで、インストールされる暫定修正は以前にインストールされた暫定修正と CIP 内に組み込まれた暫定修正とが結合されたものになります。さらに、選択した新規フィーチャーもインストールされます。

トレードアップ・インストール

カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を使用して、下位レベルの製品から上位レベルの製品へのトレードアップ・インストールを実行することができます。

始める前に

このタスクを実行するためには、下位レベルの製品の既存のインストール済み環境が存在している必要があります。また、上位レベルの製品イメージが含まれたカスタマイズ済みインストール・パッケージを保有している必要もあります。

このタスクについて

トレードアップ・インストールとは、下位レベルの製品から WebSphere Process Server の完全バージョンに変更することです。次の表に、どのトレードアップ・パスがサポートされるかを示します。

表 25.

既存の製品	トレードアップ製品	サポート対象
Enterprise Service Bus	WebSphere Process Server	はい
WebSphere Process Server Client	WebSphere Process Server	はい

トレードアップ・インストールとは、1 つのステップから成るプロセスで、CIP を実行すると、インストールを下位レベルの製品から上位レベルの製品へ移行し、次に、新しくインストールした製品を必要な保守レベルへ上げます。

プロシージャ

1. WebSphere Process Server のカスタム・インストール・パッケージのインストールを開始します。

install コマンドでインストールを直接開始します。

- a. `WPS_HOME` ディレクトリーに変更します。
- b. 以下のコマンドを発行します。

- `AIX` `HP-UX` `Linux` `Solaris` `UNIX` `./install`
- `Windows` `install.bat`

コマンド行から CIP インストール・ウィザードを起動すると、ウィザードにより、「ようこそ」パネルが初期化され表示されます。「このカスタム・インスト

ール・パッケージについて」をクリックして、エディションやバージョンなどの現在のカスタム・インストール・パッケージに関する詳細情報を表示します。

2. 「ライセンス」パネルに移動します。「ようこそ」パネルの「次へ」をクリックします。
3. ご使用条件をお読みにになり、この条件を受け入れます。

「IBM および IBM 以外の両方の条件を受諾します (I accept both the IBM and the non-IBM terms)」をクリックしてご使用条件に同意し、「次へ」をクリックして先に進みます。

ライセンス条項に同意すると、インストール・ウィザードにより、サポートされるオペレーティング・システムと前提条件のパッチが検査されます。システムに適切な前提条件の更新が存在しないなどの問題が発生した場合は、インストールをキャンセルして必要な変更を行ってから、インストールを再開始します。

インストール・ウィザードでは、prereqChecker アプリケーションで前提条件のオペレーティング・システムのパッチがチェックされますが、前提条件をまだ確認していない場合は、サポートされるハードウェアとソフトウェアの Web サイトで前提条件を確認してください。

この Web サイトには、サポートされているオペレーティング・システム、およびオペレーティング・システムを準拠させるためにインストールする必要があるオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがすべて記載されています。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

4. 前提条件の確認を完了し、「既存のコピーの検出 (Detect existing copy)」パネルに移動します。システムの前条件の確認が完了したら、「次へ」をクリックします。システムが WebSphere Process Server の既存のコピーを検出した場合
5. 実行しているトレードアップ (例えば、どの製品からトレードアップしているか、または WebSphere Process Server のどの保守レベルにトレードアップしているかなど) に基づいて、「既存のコピーの検出 (Detect existing copy)」パネル上にさまざまなオプションが表示されます。オプションを選択して、WebSphere Process Server の新規コピーをインストールします。
6. 「トレードアップ (Trade up)」パネルに、トレードアップする下位レベルの製品の既存のコピーが示されます。

「トレードアップ (Trade up)」パネルには、システムで検出された、製品用のフィールドのみが表示されます。「*product_name* の既存のコピーを使用 (Use an existing copy of *product_name*)」をクリックします。ここで、*product_name* は、トレードアップする下位レベルの製品です。

次に、既存の製品の固有のインストール済み環境をリストから選択します。

「次へ」をクリックします。このステップを完了すると、トレードアップ元の製品にすべての前提条件フィーチャーが備わっていることがチェックされます。問題が検出されない場合は、ウィザードは「フィーチャー (Features)」パネルに移動します。

7. 「フィーチャー (Features)」パネルで、CIP からインストールするフィーチャー、または下位の製品に既にインストールされているフィーチャーを選択します。

「フィーチャー (Features)」パネルのデフォルトの表示は以下のようになります。

- インストールされておらず CIP に含まれるすべてのフィーチャーが選択されている。
- インストール済みで CIP に含まれるすべてのフィーチャーが選択され、チェック・ボックスが使用不可にされている。
- インストールされていて CIP に含まれていないすべてのフィーチャーが、チェック・ボックスがクリアされて表示されている。

このパネル上のオプションは変更しないでください。「次へ」をクリックします。

8. 「インストールの要約」パネル上の情報を確認します。すべてが正しい場合は、「次へ」をクリックしてインストールを開始します。
9. 進行状況表示でインストールをモニターします。

install コマンド

このトピックでは、WebSphere Process Server 製品の Installation Factory インストーラー・プログラムについて説明します。install コマンドにより、InstallShield MultiPlatforms (ISMP) インストール・ウィザードが開始されます。WebSphere Process Server 用の Installation Factory インストーラー・プログラムでは、製品イメージおよび 1 つ以上の保守パッケージが組み込まれたカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) がインストールされます。

目的

Installation Factory インストーラー・プログラムは、CIP インストール・ウィザードまたは Installation Factory インストール・ウィザードとよばれることもあります。

インストール・ウィザードには、新規製品のインストール、既存のインストール済み環境への機能の追加による増分インストール、またはインストール済み環境を新しいサービス・レベルに更新する既存のインストール済み環境に対する更新を実行する機能があります。「スリップ・インストール」という用語は、インストール済み環境を新しいサービス・レベルに更新する既存のインストール済み環境に対する更新を表すために使用されることがあります。

コマンド・ファイルのロケーション

インストール・コマンド・ファイルは、customized_installation_package/WBI ディレクトリーにあります。

ロギング

Installation Factory インストーラー・プログラムのロギング・システムには、以下のものがあります。

- `app_server_root/logs/wbi/install/log.txt` ファイルへの ISMP ロギング

- コンポーネントのデプロイメントと構成のロギング
- システムの `temp` ディレクトリーにある一時ファイルへのプロファイル関連のロギング
- プロファイルの作成または削除時の以下の専用のログ・ファイルへのプロファイル関連のロギング
 - `app_server_root/logs/profiles/profile_name_create.log`
 - `app_server_root/logs/profiles/profile_name_delete.log`

構文

AIX **Linux** **Solaris** **UNIX** グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用したインストール: `.install`。

AIX **Linux** **Solaris** **UNIX** カスタマイズ済み応答ファイルを使用したサイレント・インストール: `.install -options /tmp/WBI/myoptionsfile.txt -silent`。

Windows グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用したインストール: `install.bat`。

Windows グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用したサイレント・インストール: `install.bat -options "C:¥temp¥WBI¥myoptionsfile.txt" -silent`。

カスタマイズ済みインストール・パッケージによりインストールした環境の保守

カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を使用してインストールした後は、インストールを直接実行した場合と同様にシステムを保守します。CIP を使用すると、任意の WebSphere Process Server のインストール済み環境に保守パッチまたは暫定修正を適用できます。

始める前に

以下のトピックでは、Installation Factory を使用して作成された WebSphere Process Server のインストール済み環境を保守する方法について説明します。

このタスクについて

WebSphere Process Server のインストール済み環境は、CIP を使用して作成した場合でも別の方法で作成した場合でも、実質的な違いはありません。したがって、保守、リフレッシュ・パック、フィックスパック、および暫定修正を適用する方法は、通常の手順と同じです。詳しくは、関連作業についてのトピックを参照してください。ただし、CIP を使用して適用された保守をロールバックするには特別なステップを実行する必要があります。

以降のトピックでは、CIP で作成された WebSphere Process Server のインストール環境に対して保守を適用したりロールバックしたりする方法について説明します。

Installation Factory で作成された WebSphere Process Server インストールに対する保守の適用

CIP を使用して作成された WebSphere Process Server インストール上に保守パッケージをインストールするために必要なステップは、その他の WebSphere Process Server のインストールの場合と同じです。

始める前に

保守を CIP インストールに適用するには、Update Installer for WebSphere ソフトウェアを使用する必要があります。

このタスクについて

保守を WebSphere Process Server のインストール済み環境に適用する方法については、保守パッケージのインストールに関する関連タスクを参照してください。

カスタマイズ済みインストール・パッケージでインストールされた WebSphere Process Server のインストール済み環境からの保守のロールバック

一般に、カスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) を使用して作成された WebSphere Process Server のインストール済み環境からの保守パッケージのロールバックは、他のインストール済み環境での手順と同じです。ただし特定の相違点があるため、ここではそれについて説明します。

始める前に

このタスクは、さまざまな方法のいずれかで保守パッケージが適用された CIP を使用して作成された WebSphere Process Server のインストール済み環境がある場合に当てはまります。Update Installer for WebSphere ソフトウェアを使用して、CIP インストール済み環境から保守をロールバックする必要があります。

このタスクについて

保守パッケージのロールバックに関する核心となる情報は、関連タスク『保守パッケージのアンインストール』に記載されています。CIP を使用して作成された WebSphere Process Server のインストール済み環境から保守パッケージをアンインストールするための追加ステップについて、以下に説明します。

- CIP を既存の WebSphere Process Server のインストール済み環境にスリップ・インストールした後に、製品全体をアンインストールしないで保守をアンインストールする場合。CIP は、リフレッシュ・パック、フィックスパック、および 1 つ以上の暫定修正をマージしたもので構成されます。
 1. スリップ・インストールの一環としてインストールされた暫定修正をアンインストールします。
 2. CIP に含まれている保守レベルをロールバックします。これは、単一のフィックスパックまたはリフレッシュ・パックをアンインストールすることと同じです。ただし単一の操作では、CIP にロールアップされていた保守がすべてロールバックされます。これは、CIP のフィックスパック部分のみをロールバックし、インストール済み環境をリフレッシュ・パック・レベルのままにしておく

ことはできないことを意味します。つまり、両方が同時にロールバックされ、インストール済み環境がスリップ・インストールが実行される前と同じ状態のままになります。

- スリップ・インストールの後で、スリップ・インストールの前にインストールされていた保守を除去する場合。
 1. スリップ・インストールをロールバックします。
 2. 関連タスク『保守パッケージのアンインストール』にある説明に従って、保守パッケージをロールバックします。
- CIP を使用して作成された WebSphere Process Server のインストール済み環境に暫定修正を追加した後の場合。この手順は、WebSphere Process Server のインストール方法とは関係がありません。
- CIP を使用して作成された WebSphere Process Server のインストール済み環境にフィックスパックまたはリフレッシュ・パックを追加した後の場合。この手順は、WebSphere Process Server のインストール方法とは関係がありません。

カスタマイズ済みインストール・パッケージのインストールのアンインストール

元のインストールの実行方法に関係なく、WebSphere Process Server をシステムからアンインストールするプロセスは同じです。

このタスクについて

カスタマイズ済みインストール・パッケージのインストールの内容 (例えば、フル、スリップ、または増分など) に関係なく、アンインストール・プロセスは、標準インストールの場合のソフトウェアのアンインストールと同じです。アンインストールの実行方法について詳しくは、関連トピックを参照してください。

Installation Factory ツールのアンインストール

Installation Factory ツールをシステムからアンインストールするには、単に Installation Factory が置かれているフォルダーを削除します。

このタスクについて

Installation Factory ツールをシステムからアンインストールするには、このツールが入っているフォルダーをオペレーティング・システムから除去します。

プロシージャ

1. 作成したビルド定義およびカスタマイズ済みインストール・パッケージで、将来使用する可能性があるものは、バックアップを取ります。
2. Installation Factory ツールが置かれているディレクトリーを除去します。このツールは、Installation Factory ツールを最初に解凍したディレクトリーにあります。

注: Installation Factory をアンインストールする前に、作成したファイル (ビルド定義ファイルなど) のバックアップを取る必要があります。

第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング

WebSphere Process Server のインストールおよび構成に失敗したときに、問題を診断できます。

このタスクについて

インストーラー・プログラムは、1 次ログ・ファイルの末尾に、インストールの成功を示す以下のような標識を記録します。これは、i5/OS、Linux、および UNIX では `install_root/logs/wbi/install/log.txt` に、Windows では `install_root¥logs¥wbi¥install¥log.txt` にあります。`install_root` は製品のインストール先ディレクトリーです。

- INSTCONFSUCCESS: インストールは正常に終了しました。
- INSTCONFPARTIALSUCCESS: インストールは部分的に正常に終了しました。一部のインストール操作は失敗しましたが、再試行可能です。
- INSTCONFFAILED: インストールは正常に終了しませんでした。リカバリーは不可能です。

結果が INSTCONFPARTIALSUCCESS または INSTCONFFAILED の場合は、以下のステップを実行して問題の分析を続行します。

インストールのトラブルシューティングを行うには、以下のステップを実行します。

プロシージャ

1. インストール・プロセスからのエラー・メッセージを読みます。

説明については、『エラー・メッセージ: インストールおよびプロファイルの作成と拡張』を参照してください。メッセージが、記載されているものと対応する場合は、問題を訂正し、インストールされた部分をクリーンアップして、再インストールを試みます。

再インストールの前にインストールされた部分をアンインストールする方法の詳細については、『アンインストールに失敗した後の再インストールの準備』を参照してください。

2. WebSphere Application Server Network Deployment のインストールが正常に完了したかどうかを判別します。(インストールが失敗していて、WebSphere Application Server Network Deployment が WebSphere Process Server インストールの一部としてインストールされていた場合、インストール・プロセスは続行されずにエラー・メッセージが表示されます。) WebSphere Process Server のインストールが正常に完了しなかった場合は、最初に `install_root/logs/install/log.txt` (Linux および UNIX プラットフォームの場合) または `install_root¥logs¥install¥log.txt` (Windows プラットフォームの場合) でエラーがないかどうかを調べ、WebSphere Application Network Deployment のインストールが正常に完了したかどうかを判別します。

WebSphere Application Server Network Deployment のインストールに失敗した場合は、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターにあるトピック『Troubleshooting installation』を参照し、そこにある情報を使用して問題を修正してから WebSphere Process Server の再インストールを試行してください。

WebSphere Application Server Network Deployment のインストールは正常に完了したが、WebSphere Process Server のインストールは失敗した場合、以下のトラブルシューティング情報を使用して問題を訂正します。

i5/OS

i5/OS プラットフォームで、インストールが失敗していて、WebSphere Application Server Network Deployment が WebSphere Process Server インストールの一部としてインストールされていた場合、インストール・プロセスは続行されずにエラー・メッセージが表示されます。 WebSphere Process Server のインストールが正常に完了しなかった場合は、最初に `install_root/logs/install/log.txt` (i5/OS プラットフォームの場合) でエラーがないかどうかを調べ、WebSphere Application Network Deployment のインストールが正常に完了したかどうかを判別します。

3. インストール後に、WebSphere Process Server インストール・ログ・ファイルでエラーがないか調べます。

作成されるさまざまなログ・ファイルの名前、存在場所、および説明について詳しくは、『ログ・ファイル』を参照してください。

以下の順序でログ・ファイルを確認してください。

i5/OS

i5/OS プラットフォームの場合:

- a. in the `install_root/logs/wbi/install` ディレクトリーにあるログ・ファイル
- b. `user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_create.log`、`user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`、および `user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/pmt.log`。
- c. インストール操作によって生成される追加のログ・ファイルまたはトレース・ファイル。`install_root/logs/wbi/install` で、インストール・プロセスの間に生成されたトレース・ファイルを探します。`install_root/logs/manageprofiles/profile_name` を参照して、プロファイルの作成または拡張で生成されたファイルを探します。(`install_root` および `profile_root` の場所について詳しくは、製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリーを参照してください。) これらのファイルは、主に IBM 技術サポートが使用するためのものです。

Linux

UNIX

Linux および UNIX プラットフォームの場合:

- a. `install_root/logs/wbi/install` ディレクトリーにあるログ・ファイル
- b. `%tmp%/niflogs.wbi` ディレクトリーにあるログ・ファイル (`install_root/logs/wbi/install` にファイルがない場合)
- c. `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log`、`install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`、`install_root/logs/manageprofiles/pmt.log`

- d. インストール操作によって生成される追加のログ・ファイルまたはトレース・ファイル。*install_root/logs/wbi/install* で、インストール・プロセスの間に生成されたトレース・ファイルを探します。*install_root/logs/manageprofiles/profile_name* を参照して、プロファイルの作成または拡張で生成されたファイルを探します。(*install_root* および *profile_root* の場所について詳しくは、製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリーを参照してください。) これらのファイルは、主に IBM 技術サポートが使用するためのものです。

Windows Windows プラットフォームの場合:

- a. *install_root/logs/wbi/install* ディレクトリーにあるログ・ファイル
 - b. *%tmp%\%niflogs.wbi* ディレクトリーにあるログ・ファイル (*install_root/logs/wbi/install* にファイルがない場合)
 - c. *install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log*,
install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log,
install_root/logs/manageprofiles/pmt.log
 - d. インストール操作によって生成される追加のログ・ファイルまたはトレース・ファイル。*install_root/logs/wbi/install* で、インストール・プロセスの間に生成されたトレース・ファイルを探します。
install_root/logs/manageprofiles/profile_name を参照して、プロファイルの作成または拡張で生成されたファイルを探します。(*install_root* および *profile_root* の場所について詳しくは、製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリーを参照してください。) これらのファイルは、主に IBM 技術サポートが使用するためのものです。
4. 失敗した構成スクリプトがインストールの問題の原因となっているかどうかを判別します。

install_root/logs/wbi/installconfig.log ファイル (i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合) または *install_root/logs/wbi/installconfig.log* ファイル (Windows プラットフォームの場合) では、製品の正しい動作を妨げている可能性のある構成の問題を示しています。

失敗した構成スクリプトの診断について詳しくは、353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』を参照してください。

5. エラー・ログに問題の原因を判別するための十分な情報が含まれない場合は、製品をアンインストールし、ログ・ファイルまたはその他の成果物が残っていればクリーンアップし、トレースをオンにしてから再インストールします。
- 以下のように、`install` コマンドに **-is:javaconsole** パラメーターを追加して、`stdout` ログおよび `stderr` ログをコンソール・ウィンドウにレポートします。

– **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合:

```
install -is:javaconsole
```

次のコマンドで、ストリームをファイルに取り込みます。

```
install -is:javaconsole > captureFileName.txt 2>&1
```

– **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:

```
install -is:javaconsole
```

次のコマンドで、ストリームをファイルに取り込みます。

```
install -is:javaconsole > captureFileName.txt 2>&1
```

– **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

```
install.bat -is:javaconsole
```

次のコマンドで、ストリームをファイルに取り込みます。

```
install.bat -is:javaconsole > drive:%captureFileName.txt
```

- `-is:log file_name` オプションを使用して、選択したログに対する追加情報を取り込みます。
6. サーバー・プロファイルを正常に作成した場合は、ファースト・ステップ・コンソールまたはコマンド行方式を使用して、サーバーを始動します。詳しくは、ファースト・ステップ・コンソール (First steps console)を参照してください。
 7. 実行中の Java プロセス、および SystemOut.log ファイルと SystemErr.log ファイル内の「*e-business* に対してオープンな状態です」というメッセージを調べて、サーバーが適切に始動およびロードされていることを確認します。

Java プロセスが存在せず、メッセージも記述されていない場合は、同じログでその他のエラーを検査します。すべてのエラーを訂正し、再試行します。

SystemOut.log および SystemErr.log ファイルは、以下のプラットフォーム固有のディレクトリにあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/logs/servername`
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/logs/servername`
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `profile_root%\logs\servername`
8. サーバーが稼働中の場合は、ファースト・ステップ・コンソールまたはコマンド行方式を使用して停止します。詳しくは、ファースト・ステップ・コンソールのオプションを参照してください。
 9. WebSphere Process Server デプロイメント環境のトラブルシューティングを行うには、デプロイメント環境の検証を参照してください。
 10. Snoop サブレットを使用して Web サーバーがアプリケーションを WebSphere Process Server から取得できるかどうかを検証する場合は、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『Troubleshooting installation』に記載されているステップ 10 を参照してください。
 11. 管理コンソールを開始します。詳しくは、『管理コンソールの始動と停止』を参照してください。
 12. IP アドレスのキャッシュに関する問題を解決するには、WebSphere Application Server Network Deployment 資料の『Troubleshooting installation』に記載されているステップ 14 を参照してください。

次のタスク

この Product Support Web サイトでは、既知の問題の解決方法に関する最新情報を確認できます。また、問題の解決に必要な情報の収集時間を節約できる資料を参照することができます。PMR を開く前に、IBM WebSphere Process Server サポート・ページを参照してください。

Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング

Launchpad アプリケーションが開始されない場合、以下のトラブルシューティングのヒントを試行してください。

変更を行った後、Launchpad を再起動します。

- パスポート・アドバンテージのイメージを使用している場合、*WebSphere Process Server V6.1 DVD*、*WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1 CD*、および *WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1 Disk 1* (プラットフォーム用に含まれる場合) のイメージの内容は、必ず 3 つの個別のディレクトリに抽出してください。イメージのファイルを同じディレクトリに抽出すると、エラーが発生する原因となります。3 つの兄弟ディレクトリを使用することをお勧めします。例えば、以下のようなディレクトリのセットを使用してください。

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
%/downloads/WPS/image1
%/downloads/WPS/image2
%/downloads/WPS/image3
```

– **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

```
C:%downloads%WPS%image1
C:%downloads%WPS%image2
C:%downloads%WPS%image3
```

- Launchpad は開始できるが、リンクを選択しても Launchpad 内のページが表示されない場合、ディスク・ドライブに異なるオペレーティング・システム用のメディアが挿入されている可能性があります。メディアの妥当性を確認してください。
- **Windows** Windows システムで Mozilla ブラウザーを使用しようとする、代わりに Internet Explorer が開くことがあります。Internet Explorer が同じシステムにインストールされている場合、Launchpad はデフォルトのブラウザーとして Mozilla を認識しません。Launchpad は Internet Explorer での操作性が良いため、処置は必要ありません。

Mozilla の使用を強制する環境変数を作成するには、コマンド・プロンプトで以下のコマンドを大文字小文字を正確に使用して実行します。

```
set BROWSER=Mozilla
```

- ご使用のブラウザーで JavaScript™ 機能が使用可能になっていることを確認してください。

Linux **UNIX** Mozilla: 「編集」 > 「設定」 > 「詳細」 > 「スクリプト & プラグイン」をクリックします。

- 「Enable JavaScript for: Navigator」を選択します。
- 「以下スクリプトを許可」ですべてのボックスを選択します。

Linux **UNIX** Mozilla Firefox: 「ツール」 > 「オプション」 > 「コンテンツ」をクリックします。

- 「Java を有効にする」を選択します。
- 「JavaScript を有効にする」を選択します。
- 「詳細設定」をクリックし、「次のスクリプトを許可」ですべてのボックスを選択します。

Windows Internet Explorer: 「ツール」 > 「インターネット オプション」 > 「セキュリティ」 > 「インターネット」の「レベルのカスタマイズ」 > 「スクリプト」 > 「アクティブ スクリプト」 > 「有効にする」をクリックします。

これらの操作を試した後でも Launchpad のリンクが機能しない場合は、コンポーネントのインストール・プログラムを直接開始してください。これらのプログラムのロケーションは、Launchpad のオプションにリストされています。

サイレント・インストールのトラブルシューティング

応答ファイルを使用したサイレント・インストールに失敗した場合は、ログ・ファイルおよびエラー・メッセージを調べて原因を判別し、応答ファイルを変更できます。

始める前に

WebSphere Process Server のサイレント・インストールのための応答ファイルの使用について詳しくは、『サイレント・インストール』を参照してください。

製品のサイレント・インストールのトラブルシューティングを行うには、以下のステップを実行します。

プロシージャ

1. 応答ファイルを調べて、ファイルでオプション値を指定するときに正確に指定しており、インストール・プログラムが値を読み取れることを確認します。誤った指定は、インストール・ウィザードのサイレント・インターフェースに影響を及ぼします。例えば、大/小文字の区別があるプロパティ名では、常に大/小文字の誤りのないようにしてください。また、値は常に二重引用符で囲みます。オプション値が正しくないというエラーの場合、InstallShield MultiPlatform プログラムには確認を要求する警告メッセージが表示され、インストールは停止します。
2. 応答ファイルを、製品に同梱される responsefile.wbis.txt ファイルと比較し、必要な修正を行います。このファイルは、*install_root*/WBI ディレクトリにあります。ファイルの修正後に、再インストールします。
3. 『メッセージ: インストールおよびプロファイルの作成と拡張』に記載されている、よくあるエラー・メッセージを確認します。
4. ログ・ファイルを調べます。関連したログ・ファイルの説明については、『ログ・ファイル』を参照してください。
5. 特定のイベントによって、InstallShield MultiPlatform がインストール・ウィザードをサイレント・モードで開始できなくなる可能性があります (例えば、インス

ツール・ウィザードを起動するためのディスク・スペースが十分でない状況などが考えられます)。インストールが失敗し、インストール・ログに情報がない場合は、ISMP プログラムによるインストール・ウィザードの開始が失敗する原因となるイベントについてのエントリーを記録します。

このようなイベントを記録するための install コマンドの構文は、以下のとおりです。

AIX AIX プラットフォームの場合:

```
install -options "/usr/IBM/WebSphere/silentFiles/myresponsefile.txt"  
-silent -log
```

HP-UX **Solaris** HP-UX および Solaris プラットフォームの場合:

```
install -options "/opt/IBM/WebSphere/silentFiles/myresponsefile.txt"  
-silent -log
```

i5/OS i5/OS プラットフォームの場合:

```
install -options responsefile.wbis.txt -silent -log log.txt @ALL
```

注: **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: コピーした CD または DVD イメージが含まれているディレクトリーを変更する必要があります。例:
/MYDIR/WBI

Linux Linux プラットフォームの場合:

```
install -options "/opt/ibm/WebSphere/silentFiles/myresponsefile.txt"  
-silent -log
```

Windows Windows プラットフォームの場合:

```
install.bat -options "C:¥IBM¥WebSphere¥silentFiles¥myresponsefile.txt"  
-silent -log # !C:¥IBM¥WebSphere¥silentFiles¥log.txt @ALL
```

6. インストールのトラブルシューティングに関するその他のヒントについては、『インストールのトラブルシューティング』を参照してください。
7. プロファイルが正常に作成されていなかった場合は、『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』を参照してください。

i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント

WebSphere Process Server 製品を i5/OS オペレーティング・システムにインストールする際に発生する問題のトラブルシューティングに役立つ可能性がある各種情報ソースを参照できます。

WebSphere Process Server には、問題のトラブルシューティング方法がいくつかあります。使用する方法は、問題の性質によって異なります。通常、さまざまな方法を組み合わせて問題の原因を判別してから、問題を解決するための適切な方法を決定します。

ヒント 1: WebSphere Application Server for i5/OS のトラブルシューティング資料の参照

以下のリソースでは、一般的なトラブルシューティングを支援しています。

- WebSphere Process Server リリース情報。
- WebSphere Application Server FAQ データベース。
- WebSphere Application Server for OS/400® ニュースグループ。この System i テクニカル・サポートの Web ベースのフォーラムは、WebSphere Application Server for i5/OS および OS/400 専用です。

ヒント 2: WebSphere Process Server for i5/OS バージョン 6.1 のインストール

- サーバーに間違ったバージョンの i5/OS がインストールされています。

WebSphere Process Server は i5/OS V5R3 または V5R4 で実行されます。この製品を前のリリースの i5/OS にインストールすることはできません。

- **IBM Development Kit for Java V1.5 がインストールされていません。**

ローカルおよびリモートのコマンド行インストールでは JDK 1.5 が必要です。製品 5722-JV1 オプション 7 をインストールして、JDK 1.5 を取得してください。オプション 7 をインストールした後、JDK 1.5 固有の修正を実行するため、累積 PTF パッケージおよび Java グループ PTF を再インストールする必要があります。

- ホスト・サーバーが開始されていないか、または正常に開始されませんでした。

インストール・プロセスでは、i5/OS ホスト・サーバーが実行されている必要があります。ホスト・サーバーを開始するには、CL コマンド行から次のコマンドを実行します。

```
STRHOSTSVR SERVER(*ALL)
```

ホスト・サーバー開始時に「ホスト・サーバー・デーモン・ジョブで、IPX を使用して通信することができません。(Host server daemon jobs unable to communicate using IPX.)」以外のエラーが発生した場合、エラー・メッセージの指示に従って問題を解決してください。問題が解決した後、ホスト・サーバーを開始して、再度 WebSphere Process Server Server のインストールを試行します。

- 「オブジェクトが見つかりません」または「許可されていません」のエラーのためにインストールが失敗しました。

製品をインストールしているユーザーのユーザー・プロファイルには *ALLOBJ および *SECADM 特殊権限が必要です。

ヒント 3: WebSphere Process Server for i5/OS の開始

- ポートの競合

前のバージョンの WebSphere Application Server がインストールされていて、それを実行中の場合、ポートの競合が発生することがあります。

失敗した Ant 構成スクリプトの診断

AIX、Linux、Windows、または i5/OS などのオペレーティング・システムに製品をインストールするときの問題が、Apache Ant 構成スクリプトの失敗に起因するかどうかを判別します。

始める前に

トラブルシューティング手順を参照して、インストールの問題の診断を開始します。『インストールのトラブルシューティング』を参照してください。インストールが正常に完了した後に、いくつかの Ant スクリプトが製品を構成します。以下では、Ant スクリプトに失敗したときに行う処理について説明します。インストール・ログに失敗が示されていない場合に、失敗した Ant 構成スクリプトの問題を訂正する方法について調べます。

このタスクについて

`install_root/logs/wbi/installconfig.log` ファイルが存在する場合は、そのファイルに Ant スクリプトの失敗が示されています。以下の構成スクリプトのうち、失敗したスクリプトがあるかどうかを判別します。ある場合は、構成スクリプトのリカバリー手順を使用します。調査アクションを使用して、WebSphere Process Server 製品の構成中に以下の構成スクリプトが正常に実行されたかどうかを手動で検証します。失敗したスクリプトがある場合は、リカバリー・アクションのステップを使用してそのスクリプトの機能を実行します。

失敗した Ant 構成スクリプトを診断するには、以下のステップを実行します。

- 実行が失敗した `90SConfigWBIMigrationScript.ant` 構成スクリプトを診断します。このスクリプトは、スクリプト `install_root/bin/wbi_migration` のアクセス権を 755 に変更します。このスクリプトは、`install_root/bin/wbi_migration` スクリプトにある以下のトークンも置換します。

変更前:	変更後 (インストール中に選択した値):
<code>\${JAVAROOT}</code>	<code>install_root/java/jre/bin/java</code>
<code>\${MIGRATIONJAR}</code>	<code>install_root/bin/migration/migrationGUI/migrationGUI.jar</code>
<code>\${WASROOT}</code>	<code>install_root</code>
<code>\${PRODUCTID}</code>	<code>\${WS_CMT_PRODUCT_TYPE}</code>

1. 調査アクション: `install_root/bin/wbi_migration.sh` スクリプト (Linux および UNIX プラットフォームの場合)、`install_root/bin/wbi_migration.bat` (Windows プラットフォームの場合)、あるいは `install_root/bin/wbi_migration` スクリプト (i5/OS プラットフォームの場合) で、アクセス権が 755 であることを確認します。
2. リカバリー・アクション: 以下のコマンドを実行します。 `chmod 755 install_root/bin/wbi_migration.sh` (Linux および UNIX プラットフォーム)、 `chmod 755 install_root/bin/wbi_migration.bat` (Windows プラットフォーム)、または `chmod 755 install_root/bin/wbi_migration` (i5/OS プラットフォーム)。

3. 調査アクション: エディターで、`install_root/bin/wbi_migration.sh` (Linux および UNIX プラットフォーム)、`install_root/bin/wbi_migration.bat` (Windows プラットフォーム)、または `install_root/bin/wbi_migration script` (i5/OS プラットフォーム) を開き、値 `${JAVAROOT}`、`${MIGRATIONJAR}`、`${WASROOT}`、および `${PRODUCTID}` の代わりに実際の値が存在することを確認します。
 4. リカバリー・アクション: 以下のトークンを、`wbi_migration` スクリプトで実際の値に変更します。`${JAVAROOT}`、`${MIGRATIONJAR}`、`${WASROOT}`、および `${PRODUCTID}`。
- 失敗した `85SConfigNoProfileFirstStepsWBI.ant` を診断します。このスクリプトは、`install_root/properties/version/install.wbi/firststeps.wbi` ディレクトリーにあるすべてのファイルを `install_root/firststeps/wbi/html/noprofile` ディレクトリーにコピーします。このスクリプトは、`install_root/firststeps/wbi/firststeps.sh` スクリプト (Linux、および UNIX)、`install_root/firststeps/wbi/firststeps.bat` スクリプト (Windows プラットフォーム)、または `install_root /firststeps/wbi/firststeps` スクリプト (i5/OS プラットフォーム) にある以下のトークンをも置き換えます。

変更前:	変更後 (インストール中に選択した値):
<code>\${JAVAROOT}</code>	<code>install_root/java/jre/bin/java</code>
<code>\${PROFILEROOT}</code>	<code>install_root</code>
<code>\${HTMLSHELLJAR}</code>	<code>install_root/lib/htmlshellwbi.jar</code>
<code>\${CELLNAME}</code>	<code>\${WS_CMT_CELL_NAME}</code>

1. 調査アクション: `install_root/properties/version/install.wbi/firststeps.wbi` ディレクトリーにあったすべてのファイルが `install_root/firststeps/wbi/html/noprofile` ディレクトリーにコピーされていることを確認します。
2. リカバリー・アクション: `install_root/properties/version/install.wbi/firststeps.wbi` ディレクトリーにあるすべてのファイルを `install_root/firststeps/wbi/html/noprofile` ディレクトリーにコピーします。
3. 調査アクション: エディターで `install_root/firststeps/wbi/firststeps` スクリプトを開きます。値 `${JAVAROOT}`、`${PROFILEROOT}`、`${HTMLSHELLJAR}`、および `${CELLNAME}` の代わりに実際の値が存在することを確認します。
4. リカバリー・アクション: `install_root/firststeps/wbi/firststeps` スクリプトにある以下のトークンを実際の値に変更します。`${JAVAROOT}`、`${PROFILEROOT}`、`${HTMLSHELLJAR}`、および `${CELLNAME}`。

結果

この手順に示す修正アクションを実行してインストール・エラーおよび Ant スクリプトの構成エラーをすべて訂正すると、インストールが完了します。

次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールを開始します。

メッセージ: インストールおよびプロファイル作成

インストール時および構成時に発生する一般的なエラー・メッセージの一部は、基本的な問題を解決するアクションで処理できます。WebSphere Process Server.

注: **Linux** **UNIX** **Windows** 以下の WebSphere Process Server のインストールおよび構成エラーは、Linux、UNIX、および Windows プラットフォームで発生します。

ヒント: WebSphere Application Server Network Deployment のインストールによって生成される可能性のあるメッセージについては、WebSphere Application Server Network Deployment ドキュメンテーションの『インストールのトラブルシューティング』トピックを参照してください。

発生している問題の種類

- 356 ページの『サポートされる IBM JDK が見つかりませんでした。この製品で出荷された IBM JDK は `install_root/JDK` に配置されている必要があります。問題を訂正して再試行してください。』
- 356 ページの『エラー: 入力行が長すぎます (Error: The input line is too long)』
- 357 ページの『注: 次のファイル・システムがインストール中に拡張されます (Note: The following file systems will be expanded during the installation)』
- 358 ページの『ディスク・スペースが必要とするより `nn MB` 足りません。(The disk space is `nn Mbyte` less than required.) インストールは続行できません。(The installation cannot continue.)』
- 358 ページの『別のディレクトリーを指定するか、または、手動アンインストールを実行してください (Specify a different directory or perform a manual uninstall)』
- 358 ページの『エラー: `/usr/opt/ibm/gskta/bin/gsk7ikm:` が見つかりません (Error: `/usr/opt/ibm/gskta/bin/gsk7ikm:` not found)』
- 359 ページの『ファイルの書き込みでエラー = 一時ディスクスペースが不足している可能性があります。(Error writing file = There may not be enough temporary disk space.)』
- 359 ページの『エラー: `localhost` はリモート・アクセスに有効なホスト名ではありません (Error: `localhost` is not a valid host name for remote access)』
- 359 ページの『警告: スtring "`<type_name>`" をタイプ `FontStruct` に変換できません (Warning: Cannot convert string "`<type_name>`" to type `FontStruct`)』
- 360 ページの『通知: システム設定ディレクトリーを `java.home` に作成しました (INFO: Created system preferences directory in `java.home`)』
- 360 ページの『インストーラーは RPM データベースに製品情報を正しく追加できませんでした。(The installer could not successfully add the product information into the RPM database.)』
- 360 ページの『エラー: `java.io.IOException: konqueror:` が見つかりません (Error: `java.io.IOException: konqueror:` not found)』

類似したエラー・メッセージが見つからない場合、または提供されている情報では問題が解決されない場合は、IBMの WebSphere Process Server サポートにさらに支援を求めて連絡してください。

サポートされる IBM JDK が見つかりませんでした。この製品で出荷された IBM JDK は `install_root/JDK` に配置されている必要があります。問題を訂正して再試行してください。

この製品に付属する IBM Java Development Kit (JDK)、またはご使用のシステムの PATH 環境変数にある JDK を指すためにシンボリック・リンクを使用した場合は、IBM SDK for Java の妥当性検査が失敗して、インストールが失敗するおそれがあります。この問題は、IBM SDK for Java の妥当性検査コードが、この製品に付属する JDK がインストールに使用された現行の JDK であるかどうかを検出する方法によって引き起こされます。

この問題を解決するには、WebSphere Process Server のインストール・イメージに提供された JVM 内でシンボリック・リンクを使用せず、またご使用のシステムの PATH 環境変数にあるすべての JVM からシンボリック・リンクを除去します。

エラー: 入力行が長すぎます (Error: The input line is too long)

Windows これはプロファイル作成のエラーです。インストール中、またはプロファイル管理ツールを使用時に発生する場合があります。

Windows インストール・ディレクトリー・パスは、60 文字以下でなければなりません。

- **オプション 1:** インストールが失敗した場合は、短いディレクトリー・パスおよび短いノード名を使用して WebSphere Process Server 製品を再インストールします。

ノード名フィールドは、カスタム・インストール中に使用可能です。デフォルトのノード名は、通常は十分短い長さです。10 文字より長いノード名は、可能な限り使用しないでください。

- **オプション 2:** インストールが正常に終了しても ISMPWSPprofileLaunchAction が失敗した場合は、プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルを作成します。プロファイルの作成時には、短いプロファイル・ディレクトリー・パス、短いプロファイル名、および短いノード名を使用してください。

例えば `C:\profiles` などの、独自のプロファイル・パスを選択することができません。

独自のプロファイル名を選択することができます。

ISMPConfigManagerLaunchAction が正常に終了したことを <インストール・ロケーション>/logs/install/log.txt ファイルで確認します。

log.txt ファイルで以下のメッセージを調べて、インストールが正常に終了したかどうかを判別します。正常終了した場合は、プロファイル管理ツールを実行して、デフォルト・プロファイルを作成することができます。

```
(date time), Install,  
com.ibm.ws.install.ni.ismp.actions.ISMPConfigManagerLaunchAction,  
msg1, INSTCONFSUCCESS: インストール後構成は正常に終了しました。
```

```
(date time), Install,  
com.ibm.ws.install.ni.ismp.actions.ISMPWSProfileLaunchAction,  
err, INSTCONFFAILED: インストール後に必要な構成処置を  
完了できません。構成は失敗しました。インストールは正常に終了しません。
```

詳しくは

```
C:%Program Files%IBM%WebSphere%AppServer1234567890%logs%wasprofile%  
wasprofile_create_default.log を参照してください。
```

詳しくは

```
C:%Program Files%IBM%WebSphere%AppServer1234567890%logs%manageprofiles%  
default_create.log を参照してください。
```

```
(date time), Install,  
com.ibm.ws.install.ni.ismp.actions.ISMPLogSuccessMessageAction,  
msg1, INSTCONFFAILED
```

`install_root%profiles%default%logs` ディレクトリーにあるログ内の以下のエラーは、`wsadmin` アクションがプロファイルの作成に失敗したことを示します。この失敗は、ファイル・パスの長さ、プロファイル名、およびコマンド・ストリングのノード名により、コマンド全体がオペレーティング・システムで制限されているコマンド長を超えたことが原因で起こります。

入力行が長すぎます。(The input line is too long.)

Windows `profile_root` 内の文字数は、80 文字を超えないようにする必要があります。`profiles_directory_path%profile_name` ストリングが 80 文字以内であっても問題が解決されない場合、`install_root%bin%setupCmdLine.bat` ファイルを編集し、Windows `subst` コマンドを使用します。`subst` コマンドは、仮想ドライブにパス全体をマップすることができます。ファイルを編集後、プロファイル管理ツールを再度実行します。`setupCmdLine.bat` ファイルを変更しても問題が修正されない場合、短いインストール・パス (C:%WAS など) を使用して、WebSphere Application Server 製品をインストールすることができます。

`setupCmdLine.bat` ファイルの編集方法については、WebSphere Application Server Network Deployment ドキュメンテーションの『Administrative scripting problems』の『The input line is too long』のセクションを参照してください。

注: 次のファイル・システムがインストール中に拡張されます (Note: The following file systems will be expanded during the installation)

AIX AIX 上のディレクトリーに、拡張したスペースを割り振ることができません。インストール・ウィザードに十分なスペースがない場合、InstallShield MultiPlatform (ISMP) がスペース割り振りを動的に増やすため、より多くのスペースを確保できるようにシステム呼び出しを行います。これが `/usr` ディレクトリーで発生したときに表示されるメッセージは、以下の例と類似しています。

注: 次のファイル・システムがインストール中に拡張されます:

```
/usr  
(NOTE: The following file systems will be expanded during the installation:  
/usr)
```


ディスク・スペースが必要とするより nn MB 足りません。(The disk space is nn Mbyte less than required.) インストールは続行できません。(The installation cannot continue.)

Linux **UNIX** ファイル・システムが動的に拡張可能でない場合、ディスク・スペースの容量が十分でないことにより、以下の例と同様のメッセージが表示されます。

ディスク・スペースが必要とするより 33 MB 足りません。
(The disk space is 33 Mbyte less than required.)
インストールは続行できません。(The installation cannot continue.)

別のディレクトリーを指定するか、または、手動アンインストールを実行してください (Specify a different directory or perform a manual uninstall)

このエラーは、製品を除去するアンインストーラー・プログラムを使用する前に、インストール・ルート・ディレクトリーを削除したことを意味します。そこで、同じディレクトリーに再インストールを試みます。

この問題を修正するには、手動アンインストールを実行します。手動アンインストールの概要については、『ソフトウェアのアンインストール』を参照してください。

\$TMP/log.txt ファイルの警告メッセージは以下のようになります。

```
(Month day, year time), Install,  
com.ibm.ws.install.ni.ismp.actions.ISMPWarningDialogAction,  
wrn, 別のディレクトリーを指定するか、または、同じディレクトリーに  
再インストールする前に手動アンインストールを実行してすべての  
パッケージを除去してください。
```

エラー: /usr/opt/ibm/gskta/bin/gsk7ikm: が見つかりません (Error: /usr/opt/ibm/gskta/bin/gsk7ikm: not found)

このエラーは、xIC.rte 6.0 ランタイム・コードがインストールされていないことを示しています。xIC.rte 6.0 ランタイム・コードは、Global Security Kit 7 (GSKit7) をインストールする前にインストールする必要があります。

この問題を修正するには、AIX のサポート・サイト (<https://www14.software.ibm.com/webapp/set2/sas/f/aix51fixes/ml9details.html>) から AIX 5.1 Maintenance Level 9 をダウンロードします。

AIX AIX 5.2 の場合は、AIX 5.2 CD から xIC.rte 6.0 ランタイム・コードをインストールできます。

インストール前提条件の完全なリストについては、WebSphere Process Server のシステム要件に関するページ (<http://www.ibm.com/support/docview.wss?rs=2307&context=SSQH9M&uid=swg27006205>) を参照してください。

ファイルの書き込みでエラー = 一時ディスクスペースが不足している可能性があります。(Error writing file = There may not be enough temporary disk space.)

Java(tm) 仮想マシンを検索中... (Searching for Java(tm) Virtual Machine...)
適切な JVM が見つかりませんでした。(A suitable JVM could not be found.)
オプション -is:javahome <JAVA HOME DIR> を使用してプログラムを再実行してください。
(Please run the program again using the option -is:javahome <JAVA HOME DIR>)
Error writing file = There may not be enough temporary disk space.
Try using -is:tempdir to use a temporary directory on a partition with more disk space.

このエラーは、プロファイル作成のための十分な一時スペースが与えられていない場合に発生することがあります。プロファイルを作成する前に、一時ディスク容量が少なくとも 40 MB あることを確認してください。

注: 製品のインストール時に、InstallShield MultiPlatform の -is:tempdir パラメータを使用して一時ディレクトリーの場所を指定変更することはできません。インストールを続行するには、システムの一時ディレクトリーのスペースを解放する必要があります。

エラー: localhost はリモート・アクセスに有効なホスト名ではありません (Error: localhost is not a valid host name for remote access)

このエラーは、プロファイル管理ツールで「ホスト名」フィールドの値に localhost を入力した場合に発生します。

ホスト名フィールドの値として localhost を入力した場合にも、製品のインストール中にこのエラーが発生する可能性があります。

警告: スtring "<type_name>" をタイプ FontStruct に変換できません (Warning: Cannot convert string "<type_name>" to type FontStruct)

WebSphere Application Server 用の Web サーバー・プラグインをインストールする場合には、ikeyman ユーティリティーもインストールします。ikeyman ユーティリティーは、Global Services Kit 7 (GSKit7) の一部です。

Linux Linux システムで ikeyman.sh スクリプトを実行すると、以下のメッセージが表示される場合があります。

```
警告: スtring
"-monotype-arial-regular-r-normal---140-*-p--iso8859-1" を
タイプ FontStruct に変換できません
(Warning: Cannotconvert string
"-monotype-arial-regular-r-normal---140-*-p--iso8859-1"
to type FontStruct)
```

この警告を無視して ikeyman ユーティリティーを使用しても問題ありません。

通知: システム設定ディレクトリーを java.home に作成しました (INFO: Created system preferences directory in java.home)

Linux Linux Redhat Enterprise 3.0 上の鍵管理ユーティリティー (ikeyman) は、ユーティリティーを最初に使用した後に以下のメッセージを表示します。

```
[root@benson12 bin]# ./ikeyman.sh
Oct 19, 2004 10:47:26 AM java.util.prefs.FileSystemPreferences$3 run
通知: システム設定ディレクトリーを java.home に作成しました。
(INFO: Created system preferences directory in java.home.)
```

ユーティリティーが設定をログに記録しています。このメッセージは、ユーティリティーを再度使用するときには表示されません。

メッセージを無視しても問題ありません。

インストーラーは RPM データベースに製品情報を正しく追加できませんでした。(The installer could not successfully add the product information into the RPM database.)

Linux log.txt ファイルの最終行が以下の例と同様であれば、RedHat Package Manager (RPM) データベースが壊れていることが問題である可能性があります。

```
(Oct 17, 2004 4:02:16 PM),
Plugin.Install,
com.ibm.wizard.platform.linux.LinuxProductServiceImpl,
wrn, The installer could not successfully add the product
information into the RPM database. Installation will continue
as this is not critical to the installation of the product.
```

以下のコマンドを実行して、問題が壊れた RPM データベースなのかどうかを確認してください。

```
rpm -q --all
```

コマンドが停止すれば、壊れた RPM データベースが問題であると分かります。

エラー: java.io.IOException: konqueror: が見つかりません (Error: java.io.IOException: konqueror: not found)

Linux **UNIX** AIX や Linux などのオペレーティング・システムでは、インストール・ウィザードまたは Update Installer ウィザードの ISMP Launch Browser アクションによって、以下のエラーが生成されます。

```
com.installshield.wizardx.actions.LaunchBrowserAction, err, java.io.IOException:
konqueror: not found
STACK_TRACE: 11
java.io.IOException: konqueror: not found
    at java.lang.UNIXProcess.forkAndExec(Native Method)
    at java.lang.UNIXProcess.<init>(UNIXProcess.java:72)
    at java.lang.Runtime.execInternal(Native Method)
    at java.lang.Runtime.exec(Runtime.java:602)
    at java.lang.Runtime.exec(Runtime.java:524)
    at java.lang.Runtime.exec(Runtime.java:490)
    at com.installshield.util.BrowserLauncher.openURL(BrowserLauncher.java:578)
    at com.installshield.wizardx.actions.LaunchBrowserAction.execute(LaunchBrowserAction
.java:62)
    at com.installshield.wizard.RunnableWizardBeanContext.run(RunnableWizardBeanContext.
java:21)
```

この操作では、HTML ページまたは Web サイトの表示のために Netscape、Mozilla、または Konqueror ブラウザーを検索します。WebSphere Application Server の Web サーバー・プラグインの場合、ターゲット・ページはプラグイン・ロードマップです。ISMP Launch Browser の操作で Mozilla または Netscape を検索されても、例外がスローされ、ログ・エントリーが記録されます。

このエラーは無視しても問題ありません。

ログ・ファイル

WebSphere Process Server のインストール時やアンインストール時、プロファイルの作成時、拡張時、および削除時には、さまざまなログ・ファイルが作成されます。これらの手順の実行中に問題が発生した場合は、該当するログを参照してください。

362 ページの表 26 に、WebSphere Process Server のログ、その内容、および成功/失敗を示す標識を示します。

logs ディレクトリーがシステム上に存在しない場合は、インストールがプロセスのごく初期の段階で失敗しています。この場合は、以下を確認してください。

- **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの /tmp/niflogs.wbi/log.txt ファイル
- **Windows** Windows プラットフォームの %TEMP%\niflogs.wbi\log.txt ファイル
- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの /tmp/InstallShield/niflogs.wbi/log.txt ファイル

重要: **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** Windows GUI からは、%TEMP% ディレクトリーが見えない場合があります。このディレクトリーのパスは、通常、C:\Documents and Settings\%username%\Local Settings\Temp です。%TEMP% ディレクトリーを検出するには、コマンド・プロンプトに以下のいずれかのコマンドを入力します。

- コマンド・プロンプトで、cd %TEMP% と入力します。
- コマンド・プロンプトで、echo %TEMP% と入力し、その結果をコピーして Windows のエクスプローラーにペーストします。

362 ページの表 26 に示すいくつかのディレクトリー・パス、ファイル名、および標識値には、エントリーがテーブル・セルのサイズに合うように、スペースが含まれています。実際のディレクトリー・パス、ファイル名、および標識値には、スペースは含まれません。

変数 *install_root* は、WebSphere Process Server のインストール・ディレクトリーを表します。変数 *profile_root* は、プロファイルのルートの場所を表します。

i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** 変数 *user_data_root* は、デフォルトのユーザー・データ・ディレクトリーを表します。

詳しくは、製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリーを参照してください。

表 26. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ

ログ	内容	インディケータ
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/wbi/install/</i> log.txt Windows Windows プラットフォームの場合: <i>install_root\logs\wbi\install\</i> log.txt i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/wbi/install/</i> log.txt 	<p>WebSphere Process Server に関するすべてのインストール・イベントをログに記録します。</p>	<p>INSTCONFFAILED すべてのインストールの失敗。</p> <p>INSTCONFSUCCESS インストールの成功。</p> <p>INSTCONFPARTIALSUCCESS インストール・エラーが発生しましたが、インストール・システムは使用することができます。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/wbi/</i> installconfig.log Windows Windows プラットフォームの場合: <i>install_root\logs\wbi\</i> installconfig.log i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/wbi/</i> installconfig.log 	<p>コンポーネントの構成、システム・アプリケーションのインストール、および Windows ショートカットとレジストリー項目の作成を行うために、インストール・プロセスの最後に実行される構成アクションをログに記録します。</p>	<p>構成処置を記録した一連の <record> エレメントを含んでいます。インストール後の構成処置が失敗した場合、以下のようなテキストがログに含まれています。</p> <pre><record> <date>2005-05-26T11:41:17</date> <millis>1117132877344</millis> <sequence>742</sequence> <logger>com.ibm.ws.install.configmanager.ConfigManager</logger> <level>WARNING</level> <class>com.ibm.ws.install.configmanager.ConfigManager</class> <method>executeAllActionsFound</method> <thread>12</thread> <message>Configuration action failed: com.ibm.ws.install.configmanager.actionengine.ANTAction-D:¥WBI¥AS¥properties¥version ¥install.wbi¥6.1.0.0¥config¥full¥install¥90SInstallCEI.ant</message> </record></pre> <p>失敗した処置がない場合は、ログのレコードに以下のメッセージがあります。</p> <pre><record> . . . <message>No errors were encountered while executing the repository actions</message> </record></pre>

表 26. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ (続き)

ログ	内容	インディケータ
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/manageprofiles/pmt.log</i> 	<p>プロファイル管理ツールからすべてのイベントをログに記録します。</p>	<p>INSTCONFFAILED すべてのプロファイル作成の失敗。</p> <p>INSTCONFSUCCESS プロファイル作成の成功。</p> <p>INSTCONFPARTIALSUCCESS プロファイル作成エラーが発生しましたが、プロファイルは機能していません。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Windows Windows プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/manageprofiles/pmt.log</i> 		
<ul style="list-style-type: none"> i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <i>user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/pmt.log</i> 		
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log</i> 	<ul style="list-style-type: none"> 名前付きのプロファイルの作成中に発生するすべてのイベントをトレースします。 完全インストールの間に、プロファイル管理ツールを使用したとき、または <code>manageprofiles</code> コマンドを使用したときに作成されます。 	<p>INSTCONFFAILED すべてのプロファイル作成の失敗。</p> <p>INSTCONFSUCCESS プロファイル作成の成功。</p> <p>INSTCONFPARTIALSUCCESS プロファイル作成エラーが発生しましたが、プロファイルは機能していません。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Windows Windows プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log</i> 		
<ul style="list-style-type: none"> i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <i>user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_create.log</i> 		
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log</i> 	<ul style="list-style-type: none"> 名前付きのプロファイルの拡張中に発生するすべてのイベントをトレースします。 プロファイルを拡張したとき、プロファイル管理ツールを使用したとき、または <code>manageprofiles</code> コマンドを使用したときに作成されます。 	<p>INSTCONFFAILED すべてのプロファイル拡張の失敗。</p> <p>INSTCONFSUCCESS プロファイル拡張の成功。</p> <p>INSTCONFPARTIALSUCCESS プロファイル拡張エラーが発生しましたが、プロファイルは機能していません。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Windows Windows プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log</i> 		
<ul style="list-style-type: none"> i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <i>user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log</i> 		

表 26. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ (続き)

ログ	内容	インディケータ
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log</i> Windows Windows プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log</i> i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <i>user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles/profile_name_delete.log</i> 	<ul style="list-style-type: none"> 名前付きのプロファイルの削除中に発生するすべてのイベントをトレースします。 manageprofiles コマンドによってプロファイル削除が実行されたときに作成されます。 	<p>INSTCONFFAILED すべてのプロファイル削除の失敗。</p> <p>INSTCONFSUCCESS プロファイル削除の成功。</p> <p>INSTCONFPARTIALSUCCESS プロファイル削除エラーが発生しましたが、プロファイルは削除されています。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/install/log.txt</i> Windows Windows プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/install¥log.txt</i> i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/wbi/install/log.txt</i> 	<ul style="list-style-type: none"> WebSphere Application Server Network Deployment に関連するすべてのインストール・イベントをログに記録します。 WebSphere Process Server と共にインストールされ、基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment のインストールの一部として作成されません。 	<p>INSTCONFFAILED すべてのインストールの失敗。</p> <p>INSTCONFSUCCESS インストールの成功。</p> <p>INSTCONFPARTIALSUCCESS インストール・エラーが発生しましたが、インストール・システムは使用することができます。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/installconfig.log</i> Windows Windows プラットフォームの場合: <i>install_root¥logs¥installconfig.log</i> i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: <i>install_root/logs/wbi/installconfig.log</i> 	<ul style="list-style-type: none"> コンポーネントの構成、システム・アプリケーションのインストール、および Windows ショートカットとレジストリー項目の作成を行うために、インストール・プロセスの最後に実行される構成アクションをログに記録します。 WebSphere Process Server と共にインストールされ、基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment のインストールの一部として作成されません。 	<p>構成処置を記録した一連の <record> エレメントを含んでいます。</p>

表 26. WebSphere Process Server コンポーネントのインストール・ログおよびプロファイル・ログ (続き)

ログ	内容	インディケータ
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: install_root/logs/wbi/uninstall/log.txt Windows Windows プラットフォームの場合: install_root¥logs¥wbi¥uninstall¥log.txt i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: install_root/logs/wbi/uninstall/log.txt 	<p>WebSphere Process Server に関するすべてのアンインストール・イベントをログに記録します。</p>	<p>INSTCONFFAILED すべてのアンインストールの失敗。</p> <p>INSTCONFSUCCESS アンインストールの成功。</p> <p>INSTCONFPARTIALSUCCESS アンインストール・ウィザードは、コア・プロダクト・ファイルを正常に削除しましたが、構成中にエラーが発生しました。他のログ・ファイルの追加情報でエラーを識別します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: install_root/logs/wbi/update/updateconfig.log Windows Windows プラットフォームの場合: install_root¥logs¥wbi¥update¥updateconfig.log i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: install_root/logs/wbi/update/updateconfig.log 	<p>アンインストール・プロセスの最後に実行される構成処置をログに記録します。</p>	<p>構成処置を記録した一連の <record> エレメントを含んでいます。</p>
<ul style="list-style-type: none"> i5/OS i5/OS プラットフォームの場合: %TEMP%¥firststeps_i5.log 	<p>ファースト・ステップの手順時に発生したエラーをログに記録し、それらの修正方法に関する提案を提供します。</p>	<p>このログは、ファースト・ステップをコマンド行から実行している場合に役立ちます。タイプミスなどのエラーが発生する可能性があります。ファースト・ステップがプロファイル管理ツールまたはインストーラーから起動された場合は、問題なく動作するはずですが、ファースト・ステップで予期しない動作や誤った動作が発生した場合は、必ずこのログ・ファイルを確認してください。</p>

プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー

プロファイル管理ツールでは、プロファイルの新規作成時、または既存プロファイルの拡張時に障害が発生する場合があります。manageprofiles コマンドの使用時にも同じことが起こる場合があります。このような障害が発生した場合は、このトピックで説明するように、最初にログ・ファイルを調べてから、その状況に応じて、以下のリカバリー手順に従ってください。

ログ・ファイル

`manageprofiles` コマンドに関するログ・ファイルはすべて、`install_root/logs/manageprofiles` ディレクトリーに格納されます。示されている順序で、次のログ・ファイルを参照します。各ログ・ファイルには、「INSTCONFSUCCESS」というエントリーが含まれていなければなりません。ファイルにこのエントリーが含まれていない場合、障害が検出されています。ログ・ファイルに目を通して、障害が発生した理由を確認し、その対応策を調べてください。

1. ログ・ファイル `profile_name_create.log` (`profile_name` はプロファイルの名前)。

注: 新規プロファイルを作成し、既存のプロファイルを拡張しなかった場合にのみ、このファイルを調べます。

このログ・ファイルは以下のディレクトリーにあります。

- **i5/OS** `user_data_root/profileregistry/logs/manageprofiles` (i5/OS システムの場合)。`user_data_root` は、WebSphere Process Server のユーザー・データ・ディレクトリーです。
- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles` (Linux および UNIX システムの場合)。`install_root` は、WebSphere Process Server のインストール・ルート・ディレクトリーです。
- **Windows** `install_root¥logs¥manageprofiles` (Windows システムの場合)。`install_root` は、WebSphere Process Server のインストール・ルート・ディレクトリーです。

このログ・ファイルで「Configuration action succeeded」または「Configuration action failed」というテキストを探します。

注: 「Configuration action failed」は、複数出力されていることがあります。それぞれの障害を調査し修正します。プロファイルが作成されている場合は、以下のオプションで説明するログ・ファイルも確認してください。

注: その他の情報を得るには、`manageprofiles` ディレクトリーの `pmt.log` というログ・ファイルを参照します。このファイルには、プロファイル管理ツールによる完全インストールの実行中にデフォルト・プロファイルが作成されたとき発生する、すべてのイベントが記録されます。

2. ログファイル `profile_name_augment.log` (`profile_name` は、プロファイルの名前)。

このログ・ファイルは以下のディレクトリーにあります。

- **i5/OS** `user_data_root/profileregistry/logs/manageprofiles` (i5/OS システムの場合)。`user_data_root` は、WebSphere Process Server のユーザー・データ・ディレクトリーです。
- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles` (Linux および UNIX システムの場合)。`install_root` は、WebSphere Process Server のインストール・ルート・ディレクトリーです。

- **Windows** `install_root\logs\manageprofiles` (Windows システムの場合)。
`install_root` は、WebSphere Process Server のインストール・ルート・ディレクトリです。

このログ・ファイルで「Configuration action succeeded」または「Configuration action failed」というテキストを探します。

注: 「Configuration action failed」は、複数出力されていることがあります。それぞれの障害を調査し修正します。プロファイルが作成されている場合は、以下のオプションで説明するログ・ファイルも確認してください。

3. 個々のプロファイル・テンプレート・アクション・ログ・ファイル。

これ以前のステップで説明したログ・ファイルで不適切な値が見つかった場合は、以下のディレクトリーにあるログ・ファイルを調べてください。

- **i5/OS** `user_data_root/profileregistry/logs` (i5/OS システムの場合)。
- **Linux** **UNIX** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name` (Linux および UNIX システムの場合)。
- **Windows** `install_root\logs\manageprofiles\profile_name` (Windows システムの場合)。

`profile_root` または `user_data_root` は、プロファイルのインストール・ロケーションを表します。

これらのログ・ファイルは一貫性のある命名規則に従っていませんが、通常は失敗した Ant スクリプト名の後に `.log` が続く名前になっています。例えば、`profile_name_augment.log` ファイルに次のエントリーがあるものとします。

```
<messages>Result of executing
E:%0536.15\profileTemplates\default.wbicore\actions\saveParamsWbiCore.ant
was:false</messages>
```

最初に、`install_root/logs/manageprofiles` ディレクトリーの `profile_name_augment.log` ファイル内で周囲のエントリーを調べます。周囲のエントリーから障害の原因を判別できない場合は、障害が発生している Ant スクリプトのエントリーに対応するログ・ファイルを探してください。この例では、`saveParamsWbiCore.ant` スクリプトによって作成されたログ・ファイルは `saveParamsWbiCore.ant.log` です。このファイルに目を通して、障害が発生した理由を詳しく調べます。

作成時の障害のリカバリー

プロファイル作成で障害が発生した理由を判別して、その障害の原因に対処した後、プロファイルの作成を再度実行することができます。

注: プロファイルを作成する場合は、最初に WebSphere Application Server プロファイルを作成し、次に WebSphere Process Server プロファイル・テンプレートを使用してこれを拡張して、WebSphere Process Server プロファイルを作成します。プロファイルの作成で障害が発生しても、必要とされる拡張の一部を含んでいないプロファイルとして存続可能です。

プロファイルが存在しているかどうかを判別するには、`install_root/bin/manageprofiles -listProfiles` コマンドを実行してください。作成時に使用したプロファイル名が存在しない場合は、そのプロファイルを再作成することができます。作成時に使用したプロファイル名が存在する場合は、そのプロファイルは作成されており、拡張時の障害が発生しています。拡張時の障害からのリカバリーのヒントについては、『拡張時の障害のリカバリー』を参照してください。

拡張時の障害のリカバリー

プロファイルの拡張で障害が発生した理由を判別し、その障害の原因に対処した後、以下の手順を実行すると、既存のプロファイルを再度拡張して、完全な WebSphere Process Server プロファイルを正常に作成することができます。

1. プロファイル管理ツールを開始して、プロファイルの新規作成ではなく既存プロファイルの拡張を選択します。
2. 処理を行ったプロファイルを選択して、そのプロファイルに正しい情報を入力します。

注: プロファイル管理ツールを初めて実行したときに、一部の拡張は正常に完了している場合があります。このため、最初にプロファイルを作成しようとしたときには表示されたパネルすべてが表示されない場合があります。これは、プロファイル管理ツールが残りのどの拡張を完了すべきかを検出して、必要なパネルのみを表示するためです。

Business Process Choreographer 構成のトラブルシューティング

Business Process Choreographer およびその Business Flow Manager、または Human Task Manager コンポーネントの構成に関する問題の解決方法については、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.1 インフォメーション・センターにアクセスし、『WebSphere Process Server のインストールおよび構成』 > 『インストールおよび構成のトラブルシューティング』 > 『Business Process Choreographer 構成のトラブルシューティング』のトピックを参照してください。この情報は *Business Process Choreographer PDF* でも検索できます。

第 16 章 インストール情報

この参照用セクションには、WebSphere Process Server のインストールと構成に関連するサブタスク、およびサポートされている概念と参照情報が記載されています。

i5/OS スクリプト

これらの WebSphere Application Server スクリプトは、WebSphere Process Server の使用時にタスクを実行するために一般に使用されます。これらのスクリプトのデフォルトの場所は、`install_root/bin` ディレクトリーです。プロファイルが作成されると、スクリプトのコピーも `profile_root/bin` ディレクトリーに書き込まれます。

注: 他のプラットフォームと異なり、i5/OS Qshell スクリプトではファイル名に拡張子 (`.bat` または `.sh`) が付きません。例えば、Windows プラットフォームでは `addNote.bat` というスクリプトが、i5/OS では `addNode` になります。

i5/OS 用の WebSphere Process Server でよく使用されるスクリプトの説明については、表を参照してください。

表 27. i5/OS 用の WebSphere Process Server でよく使用されるスクリプト

スクリプト	説明
<code>backupConfig</code>	backupConfig コマンドは、ノードの構成をファイルにバックアップするための単純なユーティリティです。
<code>enableJVM</code>	enableJVM コマンドを使用すると、サーバーの始動時に JVM に対して IBM® J2SE 5.0 32 ビット JVM と i5/OS® Java™ Developer Kit 5.0 JVM (64 ビット、「クラシック」JVM としても知られる) のどちらを使用するかを切り替えることができます。
<code>historyInfo</code>	historyInfo コマンドは、 <code>properties/version</code> フォルダーおよび <code>properties/version/history</code> フォルダー内の XML ファイルから抽出されたデータからレポートを生成します。このレポートには、変更されたコンポーネントのリスト、およびインストールされた保守パッケージまたはアンインストールされた保守パッケージの履歴が含まれています。
<code>ivt</code>	インストールの検証 (ivt) スクリプトは、あるインスタンスのアプリケーション・サーバーが正常に機能しているか検証します。
<code>manageprofiles</code>	manageprofiles コマンド行ツールは、アプリケーション・サーバーのすべてのランタイム環境を作成します。このコマンドは、スタンドアロンのアプリケーション・サーバーのランタイム環境を定義するファイル・セットであるプロファイルを作成します。
<code>restoreConfig</code>	restoreConfig コマンドは、 <code>backupConfig</code> コマンドを使用してノードの構成をバックアップした後に、その構成をリストアする場合に使用します。

表 27. i5/OS 用の WebSphere Process Server でよく使用されるスクリプト (続き)

スクリプト	説明
startNode	startNode コマンドは、ノード・エージェント・プロセスの構成ファイルを読み取って、launch コマンドを構成します。
startServer	startServer コマンドは、指定されたアプリケーション・サーバーの構成ファイルを読み取って、そのサーバーを開始します。
stopNode	stopNode コマンドは、Network Deployment のノード・エージェント・プロセスの構成ファイルを読み取り、ノード・エージェントのシャットダウンを指示する Java Management Extensions (JMX) コマンドを送信します。
stopServer	stopServer コマンドは、指定されたサーバー・プロセスの構成ファイルを読み取ります。このコマンドは、サーバーのシャットダウンを指示する Java Management Extensions (JMX) コマンドをサーバーに送信します。
versionInfo	versionInfo コマンドは、properties/version フォルダー内の XML ファイルから抽出されたデータからレポートを生成します。このレポートには、変更されたコンポーネント、およびインストールされた保守パッケージまたはアンインストールされた保守パッケージのリストが含まれています。

i5/OS 上の WebSphere Application Server では、いくつかの i5/OS プラットフォーム固有のスクリプトも提供しています。次の表には、i5/OS プラットフォーム固有の一部のスクリプトが記載されています。

表 28. i5/OS プラットフォーム固有のスクリプト

スクリプト	説明
chgwassvr	chgwassvr コマンドを使用すると、プロファイル内のアプリケーション・サーバーのポートを変更できます。
dspwasinst	dspwasinst コマンドは、プロファイルと、それに含まれているアプリケーション・サーバーに関する情報を表示します。

製品のバージョン情報および履歴情報

製品のバージョン情報および履歴情報とそのリンク

properties/version ディレクトリーにある WBI.product ファイルには、製品、バージョン、ビルドの日付、およびビルド・レベルなどの情報が記載されています。以下に例を示します。

```
WBI
6.1.0.0
date="9/29/07"
level="o0738.14"/>
```

該当する製品バージョン情報および履歴情報については、以下のリンクをクリックしてください。

表 29. 製品のバージョン情報および履歴情報のリンク

項目	リンク
製品のバージョン情報	http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_prodVersion.html
genVersionReport コマンド	http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_genVersionReport.html
versionInfo コマンド	http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_versionInfo.html
historyInfo コマンド	http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_historyInfo.html
genHistoryReport コマンド	http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/topic/com.ibm.websphere.nd.multiplatform.doc/info/ae/ae/rins_genHistoryReport.html

オペレーティング・システムのレジストリー・キー

WebSphere Process Server および関連製品をネイティブのオペレーティング・システム・レジストリーに登録するには、インストールの順に従います。このトピックでは、指定できるレジストリー・キーの値について説明します。

インストール済み環境は、ネイティブのオペレーティング・システム・レジストリーに登録されます (例えば、Linux システムでの Red Hat Package Manager (RPM) など)。

注: root 以外でインストールを実行する場合は、ネイティブのオペレーティング・システム・レジストリーに登録することはできません。

InstallShield MultiPlatform (ISMP) のインストール・ウィザードでは、ウィザードが実行したインストール処理を追跡するために ISMP が使用する製品コードのリストが格納されている .nifregistry ファイルと vpd.properties ファイルも作成されます。

i5/OS i5/OS 対応のライセンス・プログラム製品コードは、以下のとおりです。

- 5724I82 WebSphere Enterprise Service Bus V6.1
- 5724L01 WebSphere Process Server V6.1

その他の WebSphere Process Server オプションのいずれかをインストールした場合は、5724L01 WebSphere Process Server V6.1 となります。

レジストリー項目について詳しくは、『root 以外のユーザーがインストールする場合の制限』を参照してください。

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** root 以外でのインストールは、i5/OS プラットフォームでは利用できません。

表 30. WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus を登録するときに使用するキー

レジストリー・ファイルのロケーション	WebSphere Process Server	WebSphere Enterprise Service Bus
vpd.properties	WSEAA61	WSEAA61
AIX	WSEAA61	WSEAA61
HP-UX	WSEAA61	WSEAA61

表 30. WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus を登録するときに使用するキー (続き)

レジストリー・ファイルのロケーション	WebSphere Process Server	WebSphere Enterprise Service Bus
i5/OS	WSEAA61	WSEAA61
Linux	WSEAA61	WSEAA61
Solaris	WSEAA61	WSEAA61
Windows	HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\IBM\WebSphere Process Server\6.1.0.0	HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\IBM\WebSphere Enterprise Service Bus\6.1.0.0

インストール・プログラムは、vpd.properties ファイルの他に、インストール済み製品のレコードをインストール・レジストリー・ファイル内に作成し、IBM Tivoli License Compliance Manager が使用するためのカタログ署名ファイルを作成します。

インストール・レジストリー・ファイル

バージョン 6.1 のインストール・レジストリー・ファイルは、先ほどの表にリストされているすべてのインストール済み製品の以下のデータ項目を含む XML ファイルです。

- **製品情報:** 製品 ID (提供品)、製品のインストール場所、および製品のバージョン
- **パッケージ情報:** パッケージ名、パッケージのインストール場所、製品のインストール場所、および関連製品

カタログ署名ファイル

root 以外のインストーラーがインストールしたパッケージは、ネイティブのオペレーティング・システムのメカニズムを使用して登録できない場合があります。

AIX **AIX プラットフォームの場合:** 例えば、AIX バージョン 5.3 オペレーティング・システムに root 以外のユーザーとしてインストールした WebSphere Process Server バージョン 6.1 製品を AIX lpp コマンドに登録することはできません。このため、ls lpp コマンドを実行しても、インストールされている現在の WebSphere Process Server バージョンはリストに表示されません。

IBM Tivoli License Compliance Manager を使用すると、WebSphere Process Server のライセンスおよびバージョンを管理できます。

IBM Tivoli License Compliance Manager を使用可能に設定し、WebSphere Process Server ソフトウェア・コンポーネントを検出してモニターするには、ITLMReadinessOfferings.xml カatalog・ファイル入手します。このファイルは、IBM Tivoli License Compliance Manager では、IBMUseOnlySoftwareCatalog_****.***.***.xml ファイルまたは IBMSoftwareCatalog_****.***.***.xml ファイルとも呼ばれます。IBMUseOnlySoftwareCatalog_****.***.***.xml ファイルは、サブキャパシティー・バージョンで使用します。IBMSoftwareCatalog****.***.***.xml ファイルは、フル・バージョンに対して使用します。

カタログ・ファイルには、ソフトウェア・シグニチャー認識ファイルおよび使用法ファイルが XML 形式で登録されており、これらのファイルは、エージェントで検出されるソフトウェアを識別してモニターするために IBM Tivoli License

Compliance Manager コンポーネントによって使用されます。カタログ・ファイルは、<http://www.ibm.com/software/sysmgmt/products/support/IBMTivoliLicenseManager.html> で入手できます。

パッケージ入力の例

Linux Linux プラットフォームの場合: WebSphere Process Server のパッケージを表示するには、Linux システムで以下のコマンドを実行します。

```
rpm -qa | grep WS
```

.nifregistry ファイルおよび vpd.properties ファイル

WebSphere Process Server のインストーラー・プログラムでは、InstallShield MultiPlatform (ISMP) プログラムを使用してコードをインストールします。
.nifregistry ファイルおよび vpd.properties ファイルには、現在インストールされているプログラム・コンポーネントのリストがあります。これらのファイルは ISMP を補助します。また、WebSphere Process Server のインストーラー・プログラムは、WebSphere Process Server の以前のインストールを認識して、新しいインストールのオプションを制御します。

.nifregistry ファイルの場所

.nifregistry ファイルの場所は、以下に示すように作動プラットフォームにより異なります。

- **AIX** AIXプラットフォームの場合: root のディレクトリー
/usr/.ibm/.nif/.nifregistry または非 rootのディレクトリー <NON-ROOT-HOME>/
.ibm/.nif/.nifregistry
- **HP-UX** HP-UXプラットフォームの場合: root のディレクトリー
/opt/.ibm/.nif/.nifregistry または非 root のディレクトリー <NON-ROOT-HOME>/
.ibm/.nif/.nifregistry
- **i5/OS** i5/OSプラットフォームの場合: root のディレクトリー
/QIBM/WAS/.ibm/.nif/.nifregistry
- **Linux** Linuxプラットフォームの場合: root のディレクトリー
/opt/.ibm/.nif/.nifregistry
- **Solaris** Solarisプラットフォームの場合: root のディレクトリー
/opt/.ibm/.nif/.nifregistry または非 root のディレクトリー <NON-ROOT-HOME>/
.ibm/.nif/.nifregistry
- **Windows** Windowsプラットフォームの場合: root のディレクトリー
C:¥Windows¥.nifregistry

以下に例を示します。

```
NON-ROOT user: fvttest  
NON-ROOT-HOME: /home/fvttest .nifregistry dir: /home/fvttest/.ibm/.nif/.nifregistry
```

.nifregistry ファイルの例

特定の製品用の .nifregistry ファイルには、インストールされる PAK ごとに 1 項目 (行)、および製品 (例えば、WebSphere Business Integration、Enterprise Service Bus など) に対して 1 項目 (行) が格納されています。

以下の行に、.nifregistry ファイルの PAK 項目の例を示します。

```
<pak installrooturi="file:///C:/IBM/WebSphere/ProcServer/" name="wbi.primary.pak"
paklocationuri="zip:///C:/IBM/WebSphere/ProcServer/properties/version/nif/backup/
wbi.primary.pak" productid="WBI"/
<pak installrooturi="<INSTALL_LOC>" paklocationuri="<PAK_PATH>"
productid="<PRODUCT_ID>"/>
```

以下の行に、.nifregistry ファイルの製品項目の例を示します。

```
<product installrooturi="file:///C:/IBM/WebSphere/ProcServer/"
lastvisited="2007-10-29 00:07:43-0500" productid="WBI" version="6.1.0.0"/>
<product installrooturi="<INSTALL_LOC>" lastvisited="2007-10-29 00:07:43-0500"
productid="<PRODUCT_ID>" version="6.1.0.0"/>
```

アンインストール失敗後の .nifregistry ファイルのクリーンアップ

アンインストールの失敗後に .nifregistry ファイルを除去するには、以下の手順に従います。

1. .nifregistry ファイルをバックアップします。
2. テキスト・エディターで .nifregistry ファイルを開きます (行の折り返しは必ずオフにしてください)。
3. <INSTALL_LOC> および <PRODUCT_ID> を含む行をすべて検索して削除します。ここで <INSTALL_LOC> は、アンインストールに失敗した環境があるインストールの場所であり、<PRODUCT_ID> は、アンインストールしようとしている製品の製品 ID です。
4. .nifregistry ファイルを保存して、テキスト・エディターを閉じます。

HP-UX Solaris vpd.properties ファイルを使用するためのオペレーティング・システムの例外

- ISMP は、vpd.properties ファイルを使用して、Solaris および HP-UX を除くすべてのプラットフォームでインストールする WebSphere 製品を追跡します。
- root としてインストールする場合、ISMP はこれらのプラットフォームではネイティブのオペレーティング・システム登録を使用するため、vpd.properties ファイルは作成しません。

root 以外のインストーラーとしてインストールする場合、インストーラー・プログラムは、Solaris および HP-UX を含む すべてのプラットフォームで vpd.properties ファイルを作成します。

vpd.properties ファイルの編集が必要となる状況

ある一定の状況では、WebSphere Process Server を再インストールする前に、vpd.properties ファイルを編集する必要があります。WebSphere Process Server のアンインストーラー・プログラムは、製品をアンインストールすると同時に vpd.properties ファイルを編集して、製品の項目と、製品の機能のうちこのファイル内に項目があるすべての機能の項目を除去します。

状況によっては、製品を再インストールするためには、その前に vpd.properties ファイルから製品の項目を手動で除去しなければなりません。該当する状況には、以下の状況があります。

- アンインストーラー・プログラムを介さずに製品を手動でアンインストールする
- アンインストーラー・プログラムが存在しないか動作しない場合に製品を手動でアンインストールする

アンインストールした製品の項目が vpd.properties ファイルに存在する場合は、このファイルを編集して、その項目を除去する必要があります。 vpd.properties ファイルを編集せず、製品または製品の機能の項目を除去しなかった場合は、この製品を同じディレクトリー構造に再インストールすることはできません。 vpd.properties ファイルに製品の項目が存在する場合は、インストーラー・プログラムが vpd.properties ファイルを読み取り、製品が既にインストールされているものと判断して、既存の製品に追加機能をインストールするか、バイナリーを再度インストールするように求めるパネルを表示します。既存のバイナリーはその時点では有効でない可能性があります。インストーラー・プログラムは、vpd.properties ファイル内にリストされているのを検出した製品については検査を行いません。

vpd.properties ファイルの場所

vpd.properties ファイルの場所は、以下に示すように作動プラットフォームごとに異なります。

- **AIX** AIXプラットフォームの場合: root ディレクトリーまたは usr/lib/objrepos ディレクトリー
- **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: /InstallShield/VitalProductData/vpd.properties
- **Linux** Linux プラットフォームの場合: root ディレクトリー
- **Windows** Windows プラットフォームの場合: オペレーティング・システムのインストール・ディレクトリー (C:\WINNT ディレクトリーまたは C:\windows ディレクトリーなど)

vpd.properties ファイルの例

以下の例では、Windows プラットフォーム上にある WebSphere 製品のバージョン 6.1.0.0 を対象とする vpd.properties ファイルの項目を示します。この例では行全体を示しますが、書式を整えるため、各行を折り返しています。

```
WSEAA61|6|1|0|0|6.1.0.0|1=IBM WebSphere Process Server|IBM WebSphere Process Server|
IBM WebSphere Process Server V6.1.0.0|IBM|http://www.ibm.com|6.1.0.0|C:\Program Files\
IBM\WebSphere\ESB1|0|0|1|WSEAA61|6|1|0|0|6.1.0.0|1|0|false|"_uninst" "uninstall.jar" "
uninstall.dat" ""|true|3|WSEAA61|6|1|0|0|6.1.0.0|1
```

vpd.properties ファイルでの項目の識別

次の表を参照すると、製品項目を識別するのに役立ちます。

表 31. vpd.properties ファイル内にある WebSphere 製品の ID

ID	製品
WSE...61	すべてのバージョン 6.1 製品では、この ID を使用して以下のコア製品ファイルを識別します。 <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server バージョン 6.1 • WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.1

既存の WebSphere Process Server のインストール済み環境でのインストール

インストール・ウィザードが、WebSphere Process Server の既存のインストール (単独またはその他の WebSphere 製品のインストールと共に存在) をシステム上で検出しました。WebSphere Process Server の新規インストールをインストールして現行のインストールと共存させるか、その代わりに機能または新規プロファイルを既存のインストール済み環境に追加するかを決定する必要があります。

このタスクについて

以下の手順に従って、これらの選択を実行します。このトピックでは、94 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを既に開始し、ご使用条件を受諾し、前提条件を確認済みであることを前提としています。「検出された IBM WebSphere Process Server (Detected IBM WebSphere Process Server)」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「検出された IBM WebSphere Process Server (Detected IBM WebSphere Process Server)」パネルで、新規の WebSphere Process Server インストールを処理する方法に基づいてオプションを選択し、「次へ」をクリックします。表示されるパネルおよび次のステップは、以下のいずれのオプションを選択するかによって決まります。

選択するオプション	次のステップ
<p>「IBM WebSphere Process Server に機能を追加」: パネルのドロップダウン・リストから選択する機能を WebSphere Process Server の既存のインストール済み環境に追加します。</p> <p>ヒント: このオプションは、WebSphere Process Server の既存のインストール済み環境にインストールされていない機能がある場合にのみ使用可能です。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、125 ページの『既存のインストール済み環境への追加フィーチャーのインストール』のトピックを参照してください。</p>

選択するオプション	次のステップ
<p>「WebSphere Process Server の新規コピーをインストール」: WebSphere Process Server の新規コピーをインストールして、既存のバージョンと共存させます。</p> <p>ヒント: このオプションは、WebSphere Process Server を WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Process Server Client、WebSphere Application Server、または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールする場合にも選択できます。続く検出パネルで、それらの製品のインストールを確認し、それらの上にインストールすることができます。</p>	<p>次のパネルは、システム上に以下の WebSphere の別製品の既存のインストール済み環境があるかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere 製品の既存のインストール済み環境がほかにない場合、「インストール・タイプ」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。 • WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client の既存のインストール済み環境がある場合、「既存の製品またはコンポーネントのインストールが検出されました」パネルが表示されます。トピック 380 ページの『既存の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール済み環境でのインストール』に進んでください。 • WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境がある場合、かつ WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client の既存のインストール済み環境がない場合は、「検出された WebSphere Application Server」パネルが表示されません。トピック 383 ページの『既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境でのインストール』に進んでください。
<p>「プロファイル管理ツールを使用して、新しい WebSphere Process Server プロファイルを作成します」: プロファイル管理ツールを開いて、パネル上のドロップダウン・リストから選択する既存のインストール済み環境で、新規の WebSphere Process Server プロファイルを作成できるようにします。</p>	<p>「インストールの結果」パネルが表示され、プロファイル管理ツールが開始します。「終了」をクリックして、インストール・ウィザードを閉じます。</p>

2. 「インストール・タイプ」パネルで、実行するインストールのタイプを選択して、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードでは、インストール・パスを選択できます (インストール・パスの選択項目は、それ以前のパネルの選択内容に基づきます)。次のステップは、実行するインストールのタイプおよび (WebSphere Process Server クライアントの場合は) WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Network Deployment のどちらがインストールされているかによって異なります。

選択するオプション	次のステップ
<p>標準的インストール (デフォルト): WebSphere Process Server (および必要に応じ WebSphere Application Server Network Deployment) のインストールは、デフォルトのインストール・オプションと構成によって実行されます。また、WebSphere Process Server サンプルもインストールできます。さらに、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。またはこのオプションを省略して、後でプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成することも可能です。</p> <p>重要: 標準的インストール中にスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成を選択し、セキュリティーを有効にした場合、インストーラーによりそのプロファイルにサンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されません。インストールを完了するための手順については、101 ページの『WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行』のトピックを参照してください。</p>
<p>デプロイメント環境インストール: WebSphere Process Server をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment をインストールし、デプロイメント環境のセットアップを支援します。デプロイメント・マネージャーを作成して、そのデプロイメント・マネージャーにデプロイメント環境パターンを選択するか、あるいは管理対象ノードに適用する 1 つまたは複数のクラスターを選択できます。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されません。インストールを完了するための手順については、109 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックを参照してください。</p>

選択するオプション	次のステップ
<p>クライアント・インストール: デフォルトのインストール選択項目および構成を使用して、WebSphere Process Server Client をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment をインストールします。これにより、WebSphere Process Server と対話するクライアント・アプリケーションの実行が可能になります。</p>	<p>表示されるパネルは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールするかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしない場合は、「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、121 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。 • WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールする場合は、「インストールの要約」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、121 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。 <p>重要: WebSphere Process Server をインストールするユーザーは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment をインストールしたユーザーと同じである必要があります。</p>

結果

新規インストールに影響を与える可能性がある WebSphere Process Server の既存のインストール済み環境を検出しました。ほかの WebSphere 製品のインストール済み環境がシステム上にある場合、それらの既存のインストール済み環境に製品をインストールする方法について説明するほかのトピックを参照するように説明がありました。追加の WebSphere 製品がシステム上にインストールされていない場合、実行するインストールのタイプ (標準的、デプロイメント環境、またはクライアント) を選択しました。

次のタスク

行った選択に応じて該当するリンクの説明に従い、インストールを続行します。

既存の WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール済み環境でのインストール

インストール・ウィザードが、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client の既存のインストール済み環境 (単独またはその他の WebSphere 製品のインストール済み環境と共に存在) をシステム上で検出しました。 WebSphere Process Server の新規インストールをインストールして WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール済み環境と共存させるか、その代わりに WebSphere Process Server 機能を既存のインストール済み環境に追加するかを決定する必要があります。

このタスクについて

以下の手順に従って、これらの選択を実行します。このトピックでは、94 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを既に開始し、ご使用条件を受諾し、前提条件を確認済みであることを前提としています。「既存の製品またはコンポーネントのインストールが検出されました」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「既存の製品またはコンポーネントのインストールが検出されました」パネルで、新規の WebSphere Process Server インストールを処理する方法に基づいてオプションを選択し、「次へ」をクリックします。表示されるパネルおよび次のステップは、以下のいずれのオプションを選択するかによって決まります。

選択するオプション	次のステップ
「WebSphere Process Server の新規コピーをインストール」: WebSphere Process Server の新規コピーをインストールして、WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client のインストール済み環境と共存させます。 ヒント: このオプションは、WebSphere Process Server を WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストールの上にインストールする場合にも選択できません。続く検出パネルで、それらの製品のインストールを確認し、それらの上にインストールすることができます。	次のパネルは、システム上に以下の WebSphere の別製品の既存のインストール済み環境があるかどうかによって異なります。 <ul style="list-style-type: none">• WebSphere 製品の既存のインストール済み環境がほかにない場合、「インストール・タイプ」パネルが表示されます。ステップ 2 (381 ページ) に進んでください。• WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境がある場合は「検出された WebSphere Application Server」パネルが表示されます。トピック 383 ページの『既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境でのインストール』に進んでください。

選択するオプション	次のステップ
<p>「WebSphere Enterprise Service Bus の既存のインストールを使用する」または「Client の既存のインストールを使用する」: WebSphere Process Server を、パネルのドロップダウン・リストから選択した WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client バージョン 6.1.x の既存のインストール済み環境にインストールします。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、128 ページの『WebSphere Process Server インストール済み環境への WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client インストール済み環境の変換』のトピックを参照してください。</p>

2. 「インストール・タイプ」パネルで、実行するインストールのタイプを選択して、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードでは、インストール・パスを選択できます (インストール・パスの選択項目は、それ以前のパネルの選択内容に基づきます)。次のステップは、実行するインストールのタイプおよび (WebSphere Process Server クライアントの場合は) WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Network Deployment のどちらがインストールされているかによって異なります。

選択するオプション	次のステップ
<p>標準的インストール (デフォルト): WebSphere Process Server (および必要に応じ WebSphere Application Server Network Deployment) のインストールは、デフォルトのインストール・オプションと構成によって実行されます。また、WebSphere Process Server サンプルもインストールできます。さらに、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。またはこのオプションを省略して、後でプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成することも可能です。</p> <p>重要: 標準的インストール中にスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成を選択し、セキュリティーを有効にした場合、インストーラーによりそのプロファイルにサンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、101 ページの『WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行』のトピックを参照してください。</p>

選択するオプション	次のステップ
<p>デプロイメント環境インストール: WebSphere Process Server をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment をインストールし、デプロイメント環境のセットアップを支援します。デプロイメント・マネージャーを作成して、そのデプロイメント・マネージャーにデプロイメント環境パターンを選択するか、あるいは管理対象ノードに適用する 1 つまたは複数のクラスターを選択できます。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されません。インストールを完了するための手順については、109 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックを参照してください。</p>
<p>クライアント・インストール: デフォルトのインストール選択項目および構成を使用して、WebSphere Process Server Client をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment をインストールします。これにより、WebSphere Process Server と対話するクライアント・アプリケーションの実行が可能になります。</p>	<p>表示されるパネルは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールするかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしない場合は、「インストール・ロケーション」パネルが表示されません。インストールを完了するための手順については、121 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。 • WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールする場合は、「インストールの要約」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、121 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。 <p>重要: WebSphere Process Server をインストールするユーザーは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment をインストールしたユーザーと同じである必要があります。</p>

結果

新規インストールに影響を与える可能性がある WebSphere Enterprise Service Bus または WebSphere Process Server Client の既存のインストール済み環境をすべて検出しました。ほかの WebSphere 製品のインストール済み環境がシステム上にある場合、それらの既存のインストール済み環境に製品をインストールする方法について説明するほかのトピックを参照するように説明がありました。追加の WebSphere 製品がシステム上にインストールされていない場合、実行するインストールのタイプ (標準的、デプロイメント環境、またはクライアント) を選択しました。

次のタスク

行った選択に応じて該当するリンクの説明に従い、インストールを続行します。

既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment インストール済み環境でのインストール

インストール・ウィザードが、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストールを検出しました。WebSphere Process Server の新規インストール (基盤となる WebSphere Application Server Network Deployment の新規インストールが必要) をインストールするか、代わりに WebSphere Process Server 機能を WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境に追加するかを決定する必要があります。

このタスクについて

以下の手順に従って、これらの選択を実行します。このトピックでは、94 ページの『WebSphere Process Server の対話式インストール』の手順に従って、インストール・ウィザードを既に開始し、ご使用条件を受諾し、前提条件を確認済みであることを前提としています。「検出された WebSphere Application Server」パネルが表示されます。

プロシージャ

1. 「検出された WebSphere Application Server」パネルで、新規の WebSphere Process Server インストールを処理する方法に基づいてオプションを選択します。
 - 「WebSphere Application Server Network Deployment の新規コピーをインストール」: WebSphere Process Server のインストール中に WebSphere Application Server Network Deployment の新規コピーをインストールします。
 - 「WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストールを使用する」または「WebSphere Application Server の既存のインストールを使用する」: WebSphere Process Server を、パネルのドロップダウン・リストから選択した WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境上にインストールします。

重要: WebSphere Process Server をインストールするユーザーは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment をインストールしたユーザーと同じである必要があります。

制約事項: i5/OS 選択した WebSphere Application Server Network Deployment インストールが古いサービス・レベルで、WebSphere Process Server のインストールが Windows クライアントからリモートで行われている場合、このインストールを続行する前に、i5/OS システムからローカル・サイレント・インストールを使用して、WebSphere Application Server Network Deployment を更新する必要があります。

選択したら、「次へ」をクリックします。「インストール・タイプ」パネルが表示されます。

- 「インストール・タイプ」パネルで、実行するインストールのタイプを選択して、「次へ」をクリックします。

インストール・ウィザードでは、インストール・パスを選択できます (インストール・パスの選択項目は、それ以前のパネルの選択内容に基づきます)。次のステップは、実行するインストールのタイプおよび (WebSphere Process Server クライアントの場合は) インストールを実行する既存環境に WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Network Deployment のどちらがインストールされているかによって異なります。

選択するオプション	次のステップ
<p>標準的インストール (デフォルト): WebSphere Process Server (および必要に応じ WebSphere Application Server Network Deployment) のインストールは、デフォルトのインストール・オプションと構成によって実行されます。また、WebSphere Process Server サンプルもインストールできます。さらに、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、またはカスタム・プロファイルを作成することもできます。またはこのオプションを省略して、後でプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成することも可能です。</p> <p>重要: 標準的インストール中にスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成を選択し、セキュリティーを有効にした場合、インストーラーによりそのプロファイルにサンプルの Business Process Choreographer 構成が作成されます。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。スタンドアロン・サーバーをデプロイメント・マネージャーに統合する場合は、事前にこのサンプル構成の削除が必要となります。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、101 ページの『WebSphere Process Server のインストールおよびプロファイルの作成の対話式実行』のトピックを参照してください。</p>
<p>デプロイメント環境インストール: WebSphere Process Server をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment をインストールし、デプロイメント環境のセットアップを支援します。デプロイメント・マネージャーを作成して、そのデプロイメント・マネージャーにデプロイメント環境パターンを選択するか、あるいは管理対象ノードに適用する 1 つまたは複数のクラスターを選択できます。</p>	<p>「フィーチャーの選択」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、109 ページの『デプロイメント環境による WebSphere Process Server の対話式インストール』のトピックを参照してください。</p>

選択するオプション	次のステップ
<p>クライアント・インストール: デフォルトのインストール選択項目および構成を使用して、WebSphere Process Server Client をインストールし、オプションで WebSphere Application Server Network Deployment をインストールします。これにより、WebSphere Process Server と対話するクライアント・アプリケーションの実行が可能になります。</p>	<p>表示されるパネルは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールするかどうかによって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールしない場合は、「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、121 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。 • WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールする場合は、「インストールの要約」パネルが表示されます。インストールを完了するための手順については、121 ページの『WebSphere Process Server Client の対話式インストール』のトピックを参照してください。

結果

新規インストールに影響を与える可能性がある WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境をすべて検出しました。また、実行するインストールのタイプ (標準的、デプロイメント環境、またはクライアント) も選択しました。

次のタスク

行った選択に応じて該当するリンクの説明に従い、インストールを続行します。

Linux および UNIX オペレーティング・システムでのディスク・ドライブのマウント

一部の Linux および UNIX オペレーティング・システムでは、ドライブをマウントしなければ CD または DVD 上のデータにアクセスできません。

始める前に

ドライブをマウントする前に、ドライブに CD または DVD を挿入してください。ディスク・ドライブをマウントするには、root ユーザーでなければなりません。

このタスクについて

以下の手順を使用して、WebSphere Process Server の製品 CD または DVD をマウントします。

- **AIX** AIX システムで CD または DVD をマウントします。 System Management Interface Tool (SMIT) を使用して、AIX システムで CD または DVD をマウントするには、以下のステップを実行します。
 1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
 2. ドライブにディスクを挿入します。
 3. `mkdir -p /cdrom` コマンドを入力して、ディスク・マウント・ポイントを作成します。ここで、`cdrom` はディスク・マウント・ポイント・ディレクトリーを表します。
 4. **smit storage** コマンドを入力することによって、SMIT を使用してディスク・ファイル・システムを割り振ります。
 5. SMIT の開始後、「システム記憶域管理 (物理および論理域)」>「ファイルシステム」>「ファイルシステムの追加/変更/表示/削除」>「**CDROM** ファイルシステム」>「**CDROM** ファイルシステムの追加」を選択します。
 6. 「CDROM ファイルシステムの追加」ウィンドウで、以下のようになります。
 - 「デバイス名」フィールドで、ご使用のディスク・ファイル・システムのデバイス名を入力します。ディスク・ファイル・システムのデバイス名は固有でなければなりません。デバイス名が重複する場合は、先に定義したディスク・ファイル・システムを削除するか、またはディレクトリーに他の名前を使用する必要があります。例では、デバイス名として `/dev/cd0` を使用します。
 - 「マウント・ポイント」ウィンドウで、ディスク・マウント・ポイント・ディレクトリーを入力します。この例では、マウント・ポイント・ディレクトリーは `/cdrom` です。
 - 「システム再始動時に自動的にマウントする」フィールドで、「はい」を選択し、ファイル・システムの自動マウントを使用可能にします。
 - 「OK」を選択してウィンドウを閉じ、「取り消し」を 3 回選択して SMIT を終了します。
 7. 次に、**smit mountfs** コマンドを入力して、ディスク・ファイル・システムをマウントします。
 8. 「ファイルシステムのマウント」ウィンドウで、以下を実行します。
 - 「ファイルシステム名」フィールドで、ご使用のディスク・ファイル・システムのデバイス名を入力します。この例では、デバイス名は `/dev/cd0` です。
 - 「マウントするディレクトリ」フィールドにディスク・マウント・ポイントを入力します。この例では、マウント・ポイントは `/cdrom` です。
 - 「ファイルシステムのタイプ」フィールドに `cdrfs` を入力します。マウント可能なその他のタイプのファイル・システムを表示するには、「リスト (List)」を選択します。
 - 「読み取り専用システムとしてマウントする」フィールドで、「はい」を選択します。
 - 残りのデフォルト値を受け入れて、「OK」を選択し、ウィンドウを閉じます。

ご使用のディスク・ファイル・システムがマウントされました。CD または DVD のコンテンツを表示するには、ドライブに CD または DVD を入れて、**cd /cdrom** コマンドを入力します。ここで、**cdrom** はディスク・マウント・ポイント・ディレクトリーです。

- **HP-UX** **HP-UX システムで CD または DVD をマウントします。** WebSphere Process Server には長いファイル名のファイルがいくつかあるため、マウント・コマンドが失敗する場合があります。以下のステップを実行すると、WebSphere Process Server 製品 CD または DVD を HP-UX プラットフォームに正常にマウントすることができます。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. /etc ディレクトリーで、pfs_fstab ファイルに次の行を追加します。

```
/dev/dsk/c0t2d0 mount_point pfs-rrip ro,hard
```

ここで、*mount_point* は、CD または DVD のマウント・ポイントを表します。

3. 次のコマンドを入力して、*pfs* デーモンを始動します (まだ実行していない場合)。

```
/usr/sbin/pfs_mountd &  
/usr/sbin/pfsd 4 &
```

4. CD または DVD をドライブに挿入して、次のコマンドを入力します。

```
mkdir /cdrom  
/usr/sbin/pfs_mount /cdrom
```

ここで、*/cdrom* 変数はディスクのマウント・ポイントを表します。

5. ログアウトします。

- **Linux** **Linux システムで CD または DVD をマウントします。** Linux システムで CD または DVD をマウントするには、以下を実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. ディスクをドライブに挿入して、次のコマンドを入力します。

```
mount -t iso9660 -o ro /dev/cdrom /cdrom
```

ここで、*/cdrom* 変数はディスクのマウント・ポイントを表します。

3. ログアウトします。

一部のウィンドウ・マネージャーでは、自動的に CD または DVD がマウントされます。詳しくは、ご使用のシステムの資料を参照してください。

- **Solaris** **Solaris システムで CD または DVD をマウントします。** Solaris システムで CD または DVD をマウントするには、以下を実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. ディスクをドライブに挿入します。
3. ボリューム・マネージャー (vold) がご使用のシステムで稼働していない場合は、以下のコマンドを入力してディスクをマウントします。

```
mkdir -p /cdrom/unnamed_cdrom  
mount -F hsfs -o ro /dev/dsk/c0t6d0s2 /cdrom/unnamed_cdrom
```


`/cdrom/unnamed_cdrom` 変数はディスク・マウント・ディレクトリーを表し、`/dev/dsk/c0t6d0s2` はディスク・ドライブ・デバイスを表します。

NFS を使用してリモート・システムからディスク・ドライブをマウントしている場合、リモート・マシンのディスク・ファイル・システムは root アクセスでエクスポートされる必要があります。また、ローカル・マシンでは root アクセスでファイル・システムをマウントする必要があります。

ボリューム・マネージャー (vold) がご使用のシステムで稼働している場合、ディスクは自動的に次のようにマウントされます。

```
/cdrom/unnamed_cdrom
```

4. ログアウトします。

製品、プロファイル、およびツールのデフォルト・インストール・ディレクトリー

製品情報での `install_root`、`user_data_root`、`profile_root`、`updi_root`、および `cip_proc_server_root` の記述は、製品のインストール済み環境、プロファイル構成ファイル、およびツールのための特定のデフォルト・ディレクトリーの場所を示します。このトピックでは、WebSphere Process Server に使用する規則について説明します。これらの変数の意味は、製品をクリーン・サーバーにインストールするか、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、WebSphere Process Server、または WebSphere Enterprise Service Bus が既にインストールされているサーバーにインストールするかによって異なる場合があります。またこれらは、インストールを root ユーザー (Windows システムでは Administrator) として実行しているか、非 root ユーザーとして実行しているかによっても異なる場合があります。

root 以外のユーザーがインストールする場合の制限

Linux **UNIX** **Windows** root、Administrator、および非 root ユーザーが製品をインストールできます。インストール・ウィザードが用意するデフォルトのディレクトリーは、ユーザーが root (Administrator) 権限を持つかどうかで異なります。

Linux **UNIX** **Windows** root および Administrator ユーザーは共用製品を登録でき、システム所有のディレクトリー (すべてのユーザーが使用可能なグローバル共有リソース) にインストールできますが、非 root ユーザーはこれできません。root 以外のユーザーは、そのユーザーが所有しているディレクトリーにしかインストールできません。

この資料で使用されている変数

この資料では、特定のデフォルト・ディレクトリーを表すいくつかの変数が使用されています。これらのファイル・パスは、デフォルトのロケーションです。書き込み権限を所有しているディレクトリーであればどのディレクトリーにも、製品およびその他のコンポーネントをインストールし、プロファイルを作成できます。

WebSphere Process Server 製品またはコンポーネントを複数インストールする場合は、もちろん複数のロケーションが必要です。

以下に、この資料で使用されている主な変数を示します。

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォーム:** i5/OS システム上でインストールを実行するには、*SECADM および *ALLOBJ の特殊権限を備えたユーザー・プロファイルを持つ必要があります。

Linux **UNIX** **Windows** **Linux、UNIX、および Windows プラットフォーム:**
install_root

WebSphere Process Server のインストール・ロケーション。WebSphere Process Server は常に、関連付けられた WebSphere Application Server Network Deployment と同じ場所にインストールされます。

i5/OS **i5/OS プラットフォーム:** *user_data_root*

WebSphere Process Server のデフォルト・ユーザー・データ・ディレクトリ。 *user_data_root* は *install_root* とは異なるため、これらを同じ場所にすることはできません。製品をインストールすると、*profiles* および *profileRegistry* サブディレクトリがこのディレクトリの下に作成されます。

profile_root

WebSphere Process Server プロファイルの場所。

updi_root

Update Installer for WebSphere Software のインストール場所。

cip_proc_server_root

Installation Factory によって作成されたカスタマイズ済みインストール・パッケージ (CIP) のインストール・ロケーション。CIP は、1 つ以上の保守パッケージとその他のオプション・ファイルおよびスクリプトと一緒にバンドルされている WebSphere Process Server 製品です。

クリーンなサーバー上のデフォルト・ディレクトリ

以下の表に、WebSphere Process Server、WebSphere Process Server プロファイル、および Update Installer for WebSphere Software のデフォルトのインストールの場所と、インストール・ファクトリーによって生成されたカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) のデフォルトのインストールの場所を示します。ただし、これらがデフォルトの場所になるのは、その他の WebSphere 製品の既存のインストール済み環境がない 場合です。

表 32 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、インストール・ウィザードが WebSphere Process Server および WebSphere Application Server Network Deployment の両方をインストールするデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリを示したものです。

表 32. *install_root* デフォルト・ディレクトリ

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
AIX AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/ProcServer	AIX AIX プラットフォーム: <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ProcServer

表 32. *install_root* デフォルト・ディレクトリー (続き)

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
<p>HP-UX Solaris HP-UX および Solaris プラットフォームの場合: /opt/IBM/WebSphere/ProcServer</p>	<p>HP-UX Solaris HP-UX および Solaris プラットフォームの場合: user_home/IBM/WebSphere/ProcServer</p>
<p>Linux Linux プラットフォーム: /opt/ibm/WebSphere/ProcServer</p>	<p>Linux Linux プラットフォーム: user_home/ibm/WebSphere/ProcServer</p>
<p>Windows Windows プラットフォーム: C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer</p>	<p>Windows Windows プラットフォーム: C:\IBM\WebSphere\ProcServer</p>

表 33 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、*profile_name* という名前のプロファイルのデフォルト・インストール・ディレクトリーを示したものです。

表 33. *profile_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>
<p>AIX AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i></p>	<p>AIX AIX プラットフォーム: user_home/IBM/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i></p>
<p>HP-UX Solaris HP-UX および Solaris プラットフォームの場合: /opt/IBM/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i></p>	<p>HP-UX Solaris HP-UX および Solaris プラットフォームの場合: user_home/IBM/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i></p>
<p>Linux Linux プラットフォーム: /opt/ibm/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i></p>	<p>Linux Linux プラットフォーム: user_home/ibm/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i></p>
<p>Windows Windows プラットフォーム: C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer\profiles\ <i>profile_name</i></p>	<p>Windows Windows プラットフォーム: C:\IBM\WebSphere\ProcServer\profiles\ <i>profile_name</i></p>

表 34 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、Update Installer for WebSphere Software のデフォルト・インストール・ディレクトリーを示したものです。

表 34. *updi_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>updi_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>updi_root</i>
<p>AIX AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/UpdateInstaller</p>	<p>AIX AIX プラットフォーム: user_home/IBM/WebSphere/UpdateInstaller</p>

表 34. updi_root デフォルト・ディレクトリー (続き)

root または Administrator ユーザーのデフォルトの updi_root	root 以外のユーザーのデフォルトの updi_root
<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> HP-UX Linux Solaris </div> HP-UX、Linux、および Solaris プラットフォームの場合: /opt/IBM/WebSphere/UpdateInstaller	<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> HP-UX Linux Solaris </div> HP-UX、Linux、および Solaris プラットフォームの場合: user_home/IBM/WebSphere/UpdateInstaller
<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> Windows </div> Windows プラットフォーム: C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥UpdateInstaller	<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> Windows </div> Windows プラットフォーム: C:¥IBM¥WebSphere¥UpdateInstaller

Linux
UNIX
Windows
Linux、UNIX、および Windows プラットフォーム : 表 35 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、インストール・ファクトリーによって作成されたカスタマイズ・インストール・パッケージ (CIP) のデフォルト・インストール・ディレクトリーを示したものです。cip_uid 変数は、ビルド定義ファイルの作成時に生成された CIP 固有の ID です。ビルド定義ウィザードで生成された値は、オーバーライドできます。システムに複数の CIP をインストールできるようにするには、固有値を使用します。

表 35. cip_proc_server_root デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの cip_proc_server_root	root 以外のユーザーのデフォルトの cip_proc_server_root
<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> AIX </div> AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid	<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> AIX </div> AIX プラットフォーム: user_home/IBM/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid
<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> HP-UX Solaris </div> HP-UX および Solaris プラットフォームの場合: /opt/IBM/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid	<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> HP-UX Solaris </div> HP-UX および Solaris プラットフォームの場合: user_home/IBM/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid
<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> Linux </div> Linux プラットフォーム: /opt/ibm/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid	<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> Linux </div> Linux プラットフォーム: user_home/ibm/WebSphere/ProcServer/cip/cip_uid
<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> Windows </div> Windows プラットフォーム: C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥cip¥cip_uid	<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> Windows </div> Windows プラットフォーム: C:¥IBM¥WebSphere¥ProcServer¥cip¥cip_uid

表 36 は、i5/OS プラットフォームのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

表 36. クリーン・サーバーの i5/OS デフォルト・ディレクトリー

デフォルト・ディレクトリー変数	デフォルト・ディレクトリー
install_root	<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> i5/OS </div> i5/OS プラットフォーム: /QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer

表 36. クリーン・サーバーの i5/OS デフォルト・ディレクトリー (続き)

デフォルト・ディレクトリー変数	デフォルト・ディレクトリー
<i>updi_root</i>	i5/OS i5/OS プラットフォーム: /QIBM/ProdData/WebSphere/UpdateInstaller
<i>user_data_root</i>	i5/OS i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer/
<i>profile_root</i>	i5/OS i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer/profiles/ <i>profile_name</i>

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合のデフォルト・ディレクトリー

サポートされるバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment がサーバーにインストールされている場合、WebSphere Process Server をその上にインストールすると、WebSphere Process Server は同じ場所にインストールされます。表 37 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、そのような場合でのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 37. WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合の *install_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
AIX AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/AppServer	AIX AIX プラットフォーム: <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/AppServer
HP-UX Linux Solaris HP-UX、Linux、および Solaris プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/AppServer	HP-UX Linux Solaris HP-UX、Linux、および Solaris プラットフォーム: <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/AppServer
Windows Windows プラットフォーム: C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥AppServer	Windows Windows プラットフォーム: C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer

profile_root、*updi_root*、および *cip_proc_server_root* 用のデフォルト・ディレクトリーは同じように扱われます。

表 38 は、i5/OS プラットフォームのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

表 38. WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー

デフォルト・ディレクトリー変数	デフォルト・ディレクトリー
<i>install_root</i>	i5/OS i5/OS プラットフォーム: /QIBM/ProdData/WebSphere/Appserver/V61/ND

表 38. WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー (続き)

デフォルト・ディレクトリー変数	デフォルト・ディレクトリー
<i>user_data_root</i>	i5/OS i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/Appserver/V61/ND
<i>profile_root</i>	i5/OS i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/Appserver/V61/ND/ profiles/ <i>profile_name01</i>

WebSphere Process Server のインストールが存在する場合のデフォルト・ディレクトリー

WebSphere Process Server がサーバー上にインストールされているとき、インストール・ウィザードを実行して製品の 2 度目のインストールを開始すると、インストール・ウィザードは既存のインストール済み環境を検出して、2 つ目のデフォルト・ディレクトリーに番号を追加します。例えば、WebSphere Process Server がデフォルト・ディレクトリー /opt/IBM/WebSphere/ProcServer に存在している場合に、2 回目のインストール・ウィザードを実行すると、インストール・ウィザードは、「インストール・ロケーション」パネルに 2 番目の製品インストール用のデフォルトのインストール・ロケーション /opt/IBM/WebSphere/ProcServer1 を表示します。表 39 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、そのような場合でのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 39. WebSphere Process Server の既存のインストールが存在している場合の *install_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
AIX AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/ProcServer1	AIX AIX プラットフォーム: <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ProcServer1
HP-UX Solaris HP-UX および Solaris プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/ProcServer1	HP-UX Solaris HP-UX および Solaris プラットフォーム: <i>user_home</i> /IBM/WebSphere/ProcServer1
Linux Linux プラットフォーム: /opt/ibm/WebSphere/ProcServer1	Linux Linux プラットフォーム: <i>user_home</i> /ibm/WebSphere/ProcServer1
Windows Windows プラットフォーム: C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer1	Windows Windows プラットフォーム: C:\IBM\WebSphere\ProcServer1

重要: このシナリオでは、WebSphere Process Server がインストールされていない状態の WebSphere Application Server Network Deployment の 2 つ目のインストール済み環境は、サーバー上に存在しないことを想定しています。これがある場合、WebSphere Process Server を同じディレクトリー (/opt/IBM/WebSphere/AppServer な

ど) にインストールするか、または WebSphere Process Server および WebSphere Application Server Network Deployment の両方を、前述のディレクトリーに新たにインストールすることができます。

表 40 は、i5/OS プラットフォームのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

表 40. WebSphere Process Server がインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー

デフォルト・ディレクトリー変数	デフォルト・ディレクトリー
<i>install_root</i>	i5/OS i5/OS プラットフォーム: /QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer1
<i>user_data_root</i>	i5/OS i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer1
<i>profile_root</i>	i5/OS i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer1/ profiles/profile_name01

WebSphere Enterprise Service Bus がインストールされている場合のデフォルト・ディレクトリー

WebSphere Enterprise Service Bus がサーバー上にインストールされている場合、WebSphere Process Server をその上にインストールすると、WebSphere Process Server は同じ場所にインストールされます。表 41 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、そのような場合でのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 41. WebSphere Process Server を WebSphere Enterprise Service Bus の既存のインストール済み環境の上にインストールしたときの *install_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	root 以外のユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
AIX AIX プラットフォーム: /usr/IBM/WebSphere/ESB	AIX AIX プラットフォーム: user_home/IBM/WebSphere/ESB
HP-UX Solaris HP-UX および Solaris プラットフォーム: /opt/IBM/WebSphere/ESB	HP-UX Solaris HP-UX および Solaris プラットフォーム: user_home/IBM/WebSphere/ESB
Linux Linux プラットフォーム: /opt/ibm/WebSphere/ESB	Linux Linux プラットフォーム: user_home/ibm/WebSphere/ESB
Windows Windows プラットフォーム: C:\Program Files\IBM\WebSphere\ESB	Windows Windows プラットフォーム: C:\IBM\WebSphere\ESB

重要: このシナリオでは、WebSphere Process Server がインストールされていない状態の WebSphere Application Server Network Deployment の 2 つ目のインストール済み環境は、サーバー上に存在しないことを想定しています。存在している場合

は、WebSphere Process Server をそれと同じディレクトリー (例えば /opt/IBM/WebSphere/AppServer) にインストールできます。

profile_root、*updi_root*、および *cip_proc_server_root* のデフォルト・ディレクトリーは同じように扱われます。

表 42 は、i5/OS プラットフォームのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

表 42. WebSphere Enterprise Service Bus がインストールされている場合の i5/OS デフォルト・ディレクトリー

デフォルト・ディレクトリー変数	デフォルト・ディレクトリー
<i>install_root</i>	i5/OS i5/OS プラットフォーム: /QIBM/ProdData/WebSphere/ESB1
<i>user_data_root</i>	i5/OS i5/OS プラットフォーム: /QIBM/UserData/WebSphere/ESB1
<i>profile_root</i>	i5/OS i5/OS プラットフォーム: QIBM/UserData/WebSphere/ESB1/profiles/ <i>profile_name01</i>

製品コンポーネント

このトピックでは、WebSphere Process Server のフィーチャーについて説明します。

表 43 に、WebSphere Process Server のインストール可能なフィーチャーをリストします。開発環境であっても、または実稼働環境であっても、パフォーマンス改善のためには WebSphere Process Server のサンプルをインストールしないようにしてください。

注: **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: インストールで使用可能な唯一のコンポーネントは、WebSphere Process Server のサンプルです。

表 43. WebSphere Process Server のフィーチャー

フィーチャー	説明
Business Rule Bean (非推奨)	アプリケーションからビジネス・ポリシーを外部化して、ビジネス・ニーズが変化してもアプリケーションのコアの振る舞いおよびユーザー・インターフェース・オブジェクトを未変更のままにすることを可能にするルールを作成および変更するための機能をインストールします。この機能は、WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.1.1 から継承されています。WebSphere Process Server の今後のバージョンではサポートされなくなります。

表 43. WebSphere Process Server のフィーチャー (続き)

フィーチャー	説明
拡張メッセージング (非推奨)	メッセージの処理およびそのメッセージへの応答処理に関する拡張サポートを提供する機能をインストールします。この機能は、既存のコンテナ管理パーシスタンスおよびトランザクションの振る舞いを使用するように、基本の JMS、EJB 2.0 メッセージ駆動型 Bean、および Enterprise Java Bean (EJB) コンポーネント・モデルのサポートを拡張します。この機能は、WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.1.1 から継承されています。WebSphere Process Server の今後のバージョンではサポートされなくなります。
WebSphere Process Server のサンプル	WebSphere Process Server および WebSphere Application Server Network Deployment の両方のサンプル・アプリケーションをインストールします。最新の Java 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE) および WebSphere テクノロジーのいくつかを実証する、ソース・コード・ファイルと統合エンタープライズ・アプリケーションの両方が含まれます。 これらのサンプルについて詳しくは、『サンプル (サンプル・ギャラリー) へのアクセス』を参照してください。

install コマンド

install コマンドは、製品と製品内の大半のコンポーネントをインストールするコマンドです。製品をインストールする場合、インストーラー・プログラムによってコア製品ファイルがインストールされ、プロファイルが作成されます。インストール時の選択内容によっては、プロファイルが作成されない場合もあります。サイレント・パラメーターを指定すると、インストール・ウィザードがサイレント・モードで実行され、グラフィカル・ユーザー・インターフェースが表示されません。

目的

このトピックでは、install コマンドのコマンド行構文について説明します。install コマンド・モジュールをコマンド行から開始して、製品をインストールします。

製品のインストールを始める前に

インストールできるようにオペレーティング・システムを準備します。49 ページの『第 5 章 インストールのためのオペレーティング・システムの準備』の手順に従って作業を開始します。

コマンド・ファイルは、製品ディスク上にあるコンポーネントのルート・ディレクトリにあります。

作業環境を簡素化するため、WebSphere Process Server では、バージョン 6.1 の製品パッケージで WebSphere ソフトウェア・コンポーネントの共通インストール・エ

ンジンを採用しました。install コマンドを実行すると、製品パッケージのほとんどすべてのコンポーネントでインストール・プログラムが開始されます。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム: install
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォーム: install
- **Windows** **Windows** プラットフォーム: install.bat

このコマンドまたは代替コマンドを特定のオペレーティング・システムのコンポーネントに適用できない場合は、N/A という略語を表 44 に記載しています。コンポーネントをオペレーティング・システムにインストールできない場合、コマンドを適用することはできません。

表 44. WebSphere Application Server コンポーネントのインストール・コマンド

オペレーティング・システム	Application Client	IBM HTTP Server	Web サーバー・プラグイン	Application Server Toolkit	Update Installer (UPDI)
AIX	install	install	install	N/A	/UpdateInstaller/install
HP-UX	/AppClient/install	/IHS/install	/plugin/install	N/A	/UpdateInstaller/install
i5/OS	インストール	N/A	install	install	/UpdateInstaller/install
Linux	N/A	/IHS/install	/plugin/install	/install	/UpdateInstaller/install
Solaris	N/A	install	install	N/A	/UpdateInstaller/install
Windows	¥AppClient¥install.exe	¥IHS¥install.exe	¥plugin¥install.exe	¥install.exe	¥UpdateInstaller¥install.exe

表 45. コンポーネントのインストール・コマンド

オペレーティング・システム	WebSphere Process Server	IBM Installation Factory	IBM WebSphere Process Server ヘルプ・システム	IBM Support Assistant	Message Service Clients for C/C++	Message Service Clients for .NET
AIX	install	インストール			MsgClients/XMSCC/setupAix.bin	
HP-UX	/WBI/install	/WBI/install	/IEHS/install.exe	/ISA/install.bin		
i5/OS	インストール	インストール			N/A	N/A
Linux	/WBI/install	/WBI/install	IEHS/install.exe	/ISA/install.bin	<ul style="list-style-type: none"> • 32 ビット: MsgClients/XMSCC/setuplinuxia32 • 64 ビット: MsgClients/XMSCC/setuplinux-x86_64 	
Solaris	install	インストール			MsgClients/XMSCC/setupSolaris	
Windows	¥WBI¥install.bat	¥WBI¥install.bat	¥IEHS¥install.exe	¥ISA¥install.exe	MsgClients¥XMSCC¥setup.exe	MsgClients¥XMSNET¥dotNETClientsetup.exe

パラメーターおよび構文

このセクションでは、インストール・ウィザードを開始するコマンドについて説明します。

- インストール・ウィザードを開始してグラフィカル・ユーザー・インターフェースを表示するには、install コマンドを以下のように実行します。

```
component_disc_directory/install
```

- インストール・ウィザードをサイレント・モードで開始してグラフィカル・ユーザー・インターフェースを表示しないようにするには、install -silent コマンドを以下のように実行します。

```
component_disc_directory/install -options "response_file_name" -silent
```

新規のインストール、既存のインストール済み環境への機能の追加、またはプロファイルの作成による既存の WebSphere Process Server 製品の構成を行うには、以下の install コマンド・オプションを使用します。

各オプションの有効な値を調べるには、表 46 を参照します。

表 46. WebSphere Process Server install コマンド・オプションの値の表

オプション名 (-OPT)	値	デフォルト	説明
silentInstallLicenseAcceptance	true/false	false	ご使用条件に同意するかどう かを選択します。
installType	<ul style="list-style-type: none"> installNew addfeature upgrade 	installNew	実行するインストールのタ イプを選択します。
samplesSelected	<ul style="list-style-type: none"> true - その機能はインストールの 対象として選択されている false - その機能はインストールの 対象として選択されていない 	false	この機能を使用する場合 は、必要な値を選択しま す。
brbeansSelected	<ul style="list-style-type: none"> true - その機能はインストールの 対象として選択されている false - その機能はインストールの 対象として選択されていない 	false	この機能を使用する場合 は、必要な値を選択しま す。この機能は i5/OS では サポートされていません。
extendedMessagingSelected	<ul style="list-style-type: none"> true - その機能はインストールの 対象として選択されている false - その機能はインストールの 対象として選択されていない 	false	この機能を使用する場合 は、必要な値を選択しま す。この機能は i5/OS では サポートされていません。
installLocation	任意の有効なインストールの場所	対象プラットフ ォーム・タイプ のデフォルトの 場所	インストールの宛先パスを 選択します。
PROF_profilesInfo			プロファイル引数のリスト を表示します。
allowNonRootSilentInstall	true/false	false	root 以外のユーザーによる インストールを認めること を選択します。

表 46. WebSphere Process Server install コマンド・オプションの値の表 (続き)

オプション名 (-OPT)	値	デフォルト	説明
PROF_enableAdminSecurity	true/false	true	出荷時の設定のままのセキュリティを有効にするかどうかを選択します。 samplesSelected オプションをインストールする場合や Network Deployment dmgr の場合は、「true」を選択する必要があります。
profileType	<ul style="list-style-type: none"> • standalone • deploymentManager • managed node • none 	standalone	4 つのプロファイル作成オプションのいずれかを選択します。
profileLocation	任意の有効なユーザー・データの場所		i5/OS にのみ適用可能
traceLevel	<ul style="list-style-type: none"> • OFF 0 - トレースは生成されない • SEVERE 1 - 重大エラーのみがトレース・ファイルに出力される • WARNING 2 - 致命的以外の例外および警告に関するメッセージがトレース・ファイルに追加される • INFO 3 - 通知メッセージがトレース・ファイルに追加される • CONFIG 4 - 構成関連のメッセージがトレース・ファイルに追加される • FINE 5 - 非 public メソッドのメソッド呼び出しをトレースする • FINER 6 - getter および setter を除く非 public メソッドのメソッド呼び出しをトレースする • FINEST 7 - すべてのメソッド呼び出しをトレースし、入口および出口をトレースして、パラメータおよび戻り値を組み込む 	0	取り込むトレース情報の量を選択します。
traceFormat	<ul style="list-style-type: none"> • text - 読みやすいようにトレース・ファイルはプレーン・テキスト形式で生成される • XML - トレース・ファイルは標準の Java ロギング XML 形式で生成される 	両方の形式が、2 つの異なるトレース・ファイルに生成されず。生成する必要がある形式が 1 つのみである場合は、該当するオプションを選択します。	トレース・ファイルの出力形式を選択します。

表 46. WebSphere Process Server install コマンド・オプションの値の表 (続き)

オプション名 (-OPT)	値	デフォルト	説明
wpsInstallType	<ul style="list-style-type: none"> • typical • ndguided • クライアント 	typical	標準インストール、デプロイメント環境インストール、およびクライアント・インストールの中から選択します。
ndGuidedInstallType	<ul style="list-style-type: none"> • deploymentManager • additionalRoles 	deployment Manager	実行するデプロイメント環境インストールのタイプを選択します。
disableOSPrereqChecking	true/false	false	オペレーティング・システム前提条件の検査を使用不可に設定するかどうかを選択します。
disableNonBlockingPrereqChecking	true/false	false	非ブロッキング前提条件の検査を使用不可に設定するかどうかを選択します。
createProfile	true/false	false	既存のインストール済み環境のプロファイルを作成するかどうかを選択します。
PROF_topologyPattern	<ul style="list-style-type: none"> • Reference - リモート・メッセージングおよびリモート・サポート • CondensedAsync - リモート・メッセージング • CondensedSync - 単一クラスター 		デプロイメント環境インストールを選択します。
PROF_topologyRole	<ul style="list-style-type: none"> • ADT - アプリケーション・デプロイメントのターゲット • Messaging - メッセージング・インフラストラクチャー • Support - サポート・インフラストラクチャー 		このノードをデプロイメント環境トポロジーに割り当てるために 1 つ以上のクラスターを選択します。複数の項目を選択する場合は、分離文字としてコンマ (,) を使用します。使用可能なオプションは、選択したデプロイメント環境インストールの種類により異なります。
useExistingWAS	true/false	false	WebSphere Application Server の既存のインストール済み環境を使用するかどうかを選択します。true を選択した場合は、installLocation オプションを、既存の WebSphere Application Server インストール済み環境のインストール・ルートに設定する必要があります。

Mozilla 1.7 での各国語サポート

Mozilla 1.7 は、すべてのネイティブ言語とオペレーティング・システムの組み合わせで使用可能なわけではありません。

WebSphere Process Server バージョン 6.1.x 配布製品は、以下のネイティブ言語でサポートされています。

- ブラジル・ポルトガル語
- チェコ語
- 英語
- フランス語
- ドイツ語
- ハンガリー語
- イタリア語
- 日本語
- 韓国語
- ポーランド語
- ロシア語
- スペイン語
- 中国語 (簡体字)
- 中国語 (繁体字)

バージョンが 1.7 より前の Mozilla には、機密漏れがあることが知られています。これらの機密漏れの詳細は、Mozilla Web サイト (<http://www.mozilla.org/projects/security/known-vulnerabilities.html>) で入手できます。

Mozilla でサポートされるネイティブ言語とオペレーティング・システムの組み合わせは、リリースのたびに頻繁にリストに追加されるため、更新がないかを Web サイト (<http://www.mozilla.org/releases/>) でチェックしてください。

パスポート・アドバンテージからインストールするときの特別な考慮事項

パスポート・アドバンテージで取得したイメージからインストールする予定である場合は、イメージに付属するダウンロードの手順説明を精読し、ユーザー許可とディレクトリー・セットアップに関するいくつかのガイドラインに従う必要があります。

注: i5/OS **i5/OSプラットフォームの場合:** パスポート・アドバンテージから取得したインストール・イメージは、Windows ワークステーションにダウンロードする必要があります。

これらのイメージは、*WebSphere Process Server V6.1 ディスク 1* または *WebSphere Process Server V6.1 DVD* と、*WebSphere Application Server CD* に、1 対 1 でマップします。これらのイメージは、プラットフォーム別に電子アセンブリーに分類さ

れます。それぞれのアセンブリーにはそのプラットフォーム用のすべてのイメージが含まれているため、そのプラットフォームに必要なすべてのソフトウェアを素早く識別することができます。

パスポート・アドバンテージで取得したインストール・イメージからインストールする場合は、以下のガイドラインに従ってください。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `untar` コマンドでファイルを解凍したユーザーと同じユーザーが、製品をインストールするようにします。これらの作業を異なるユーザーが実行した場合、製品のインストーラーは正しく機能しません。
- *WebSphere Process Server V6.1* ディスク 1 または *WebSphere Process Server V6.1 DVD*、*WebSphere Application Server Network Deployment Supplements V6.1* CD、および *WebSphere Application Server Toolkit V6.1.1* ディスク 1 CD のイメージの内容を 3 つの別個のディレクトリーに解凍するようにしてください。複数のイメージからのファイルを同じディレクトリーに解凍すると、エラーの原因となります。以下の例のように、3 つの兄弟ディレクトリーの使用を検討してください。

– **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合:

```
%/downloads/WPS/image1  
%/downloads/WPS/image2  
%/downloads/WPS/image3
```

– **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:

```
%/downloads/WPS/image1  
%/downloads/WPS/image2  
%/downloads/WPS/image3
```

– **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:

```
C:¥downloads¥WPS¥image1  
C:¥downloads¥WPS¥image2  
C:¥downloads¥WPS¥image3
```

製品ライブラリー、ディレクトリー、サブシステム、ジョブ・キュー、ジョブ記述、および出力キュー

i5/OS プラットフォームでは、WebSphere Process Server を他のプラットフォームにインストールする場合とは異なる構成を使用します。このトピックでは、WebSphere Process Server が i5/OS プラットフォーム上で使用する、製品ライブラリー、ディレクトリー、サブシステム、ジョブ・キュー、ジョブ記述、および出力キューについて説明します。

製品ライブラリーおよびディレクトリー

デフォルトのインストールでは、i5/OS 用の WebSphere Process Server は、以下のライブラリーとディレクトリーを使用します。

QWBI61

製品ライブラリー。

/QIBM/ProdData/WebSphere/ProcServer

デフォルトのルート・ディレクトリー。すべての WebSphere Process Server プロファイルで共有される製品データが含まれます。

/QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer

デフォルトの WebSphere Process Server ユーザー・データ・ルート・ディレクトリー。すべての WebSphere Process Server プロファイルおよび profileRegistry サブディレクトリーは、このディレクトリーの下に作成されます。

サブシステム

i5/OS 用の WebSphere Process Server のインストール済み環境では、以下のサブシステムのいずれか 1 つを使用できます。

QWAS61

WebSphere Application Server によって提供および構成されたサブシステム。デフォルトでは、サーバーはこのサブシステム内で稼働します。

QWBI61

WebSphere Process Server 固有のサブシステム。QWBI61 サブシステム内でサーバーを稼働させるには、startServer スクリプトを変更し、サーバーを再始動する必要があります。

以下のパラメーターを指定して startServerスクリプトを実行します。

- **-sbs** *QWBI61/QWBI61*
- **-jobq** *QWBI61/QWBIJOBQ*
- **-jobd** *QWBI61/QWBIJOB*
- **-outq** *QWBI61/QWBIJOB*

詳しくは、『i5/OS でのサブシステムの構成』を参照してください。

ジョブ・キュー

i5/OS 用の WebSphere Process Server は、使用されるサブシステムに基づいて、サーバー、ノード・エージェント、およびデプロイメント・マネージャー・プロセス用の以下のいずれかのジョブ・キューを使用します。

- QWASJOBQ キューは QWAS61 サブシステムで使用します。
- QWBIJOBQ キューは QWBI61 サブシステムで使用します。

ジョブ記述

i5/OS 用の WebSphere Process Server は、使用されるサブシステムに基づいて、サーバー、ノード・エージェント、およびデプロイメント・マネージャー・プロセス用の以下のいずれかのジョブ記述を使用します。

- QWASJOBQ 記述は QWAS61 サブシステムで使用します。
- QWBIJOBQ 記述は QWBI61 サブシステムで使用します。

出力キュー

i5/OS 用の WebSphere Process Server は、使用されるサブシステムに基づいて、サーバー、ノード・エージェント、およびデプロイメント・マネージャー・プロセス用の以下のいずれかの出力キューを使用します。

- QWASOUTQ キューは QWAS61 サブシステムで使用します。
- QWBIOUTQ キューは QWBI61 サブシステムで使用します。

ポート競合の回避

同じマシンで WebSphere Process Server と他の WebSphere 製品のインストール済み環境を共存させる場合は、ポートの競合を回避してください。

このタスクについて

別の WebSphere 製品の管理対象ノードが存在する WebSphere Process Server システムと同じシステム上に管理対象ノードを作成して、「固有の HTTP ポートを生成する」チェック・ボックスにチェック・マークを付けた場合は、addNode コマンドにより、競合が発生しないように 2 番目のノード・エージェント・プロセスのポート割り当てが自動的に増分されます。addNode コマンドは、既存のプロファイルが以下のいずれかのタイプである場合に、ポート割り当てを自動的に増分します。

- WebSphere Process Server
- WebSphere Enterprise Service Bus
- WebSphere Application Server バージョン 6.0 以降
- WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.0 以降

プロファイル管理ツールでも、WebSphere Process Server のカスタム・プロファイルの作成中にカスタム・プロファイルを統合するとき、ポート割り当てを正常に処理します。

addNode コマンドは、既存のインスタンスが以下のいずれかのタイプである場合は、ポート割り当てを自動的に増分しません。

- WebSphere Business Integration Server Foundation
- WebSphere Application Server Enterprise
- バージョン 6.0 より前の WebSphere Application Server
- バージョン 6.0 より前の WebSphere Application Server Network Deployment

この場合は、addNode コマンドでも、プロファイル管理ツールでも、これらのインスタンスに対するポート割り当てのレコードが保持されません。2 番目の WebSphere Process Server ノード・エージェント・プロセスへのポート割り当てが増分されないため、競合が発生する可能性があります。

この競合により、2 番目のノードを始動できなくなることがあります。例えば、既存の管理対象ノードを最初に始動した場合、WebSphere Process Server ノードを始動できません。WebSphere Process Server ノードを最初に始動すると、既存のノードを始動できません。

addNode コマンドがポート割り当てを自動的に増分しないこのような場合、以下の手順を実行し、競合しないポートを使用して WebSphere Process Server 管理対象ノードを作成する必要があります。

プロシージャ

1. WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを作成します。

プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルを作成します。「プロファイル作成オプション」パネルで、「標準的なプロファイル作成」または「高度なプロファイル作成」の実行を選択します。カスタム・プロファイルを作成する場合は、作成時に統合しないでください。「プロファイル管理ツール」パネルで、プロファイルを後で統合するチェック・ボックスを選択します。

2. 使用中のポートを確認して、WebSphere Process Server のノード・エージェント・プロセスの開始ポート番号を決定します。

既存のポート割り当てを確認するには、netstat -a コマンドを使用します。ポート割り当てを分析して、12 の順次空きポートを判別します。

注: **i5/OS** i5/OS システムの場合、コマンドは、i5/OS のコマンド行から実行する必要がある CL コマンドである netstat *cnn です。

3. ポートを更新します。この実行方法に詳しくない場合は、『ポートの構成』にある情報を参照してください。

ポート番号設定

WebSphere Process Server のインストール済み環境を、WebSphere Process Server のインストール済み環境や、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、WebSphere Business Integration Server Foundation、または WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境と共存させる必要がある場合は、ポートの競合が発生しないようにしてください。

WebSphere Process Server は WebSphere Application Server をベースとしているため、ポートの設定はいずれの製品の場合も同じです。WebSphere Application Server の複数のバージョンのポート番号設定の表を参照すると、ご使用のさまざまなサーバーの範囲内で、どのポートが既に使用中であるかを調べるのに役立つため、ポートの競合を防止できます。これらの表の値はデフォルトのポート番号であるため、値を大きくして競合を回避する必要があります。

WebSphere Process Server を WebSphere Application Server のインストール済み環境の上にインストールした場合は、**Application Server** という見出しの列にある値を使用します。WebSphere Process Server を WebSphere Application Server Network Deployment のインストール済み環境の上にインストールした場合、または WebSphere Application Server Network Deployment を、ご使用の WebSphere Process Server インストール済み環境の一部としてインストールした場合は、**Deployment Manager** という見出しの列にある値を使用します。

これらの表で、**Application Server** という見出しの列は、スタンドアロン・サーバーまたは管理対象サーバーのいずれかに使用されている値を表します。

注: WebSphere Application Server バージョン 5.x および WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 5.x の値は、WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.x にも適用されます。

manageprofiles コマンド

`manageprofiles` コマンドはプロファイルを作成します。プロファイルとは、デプロイメント・マネージャー、管理対象ノード、またはスタンドアロン・サーバーのランタイム環境を定義する一連のファイルのことです。

プロファイルはランタイム環境を定義し、サーバー・プロセスが実行中に変更できるすべてのファイルを含んでいます。

`manageprofiles` コマンドとそのグラフィカル・ユーザー・インターフェースであるプロファイル管理ツールは、プロファイルを作成する唯一の方法、すなわちランタイム環境を作成する唯一の方法です。 `manageprofiles` コマンドでは、プロファイルの拡張および削除も可能です。

コマンド・ファイルは、`install_root/bin` ディレクトリー内にあります。コマンド・ファイルとは、i5/OS プラットフォームの場合は `manageprofiles`、Linux および UNIX プラットフォームの場合は `manageprofiles.sh`、Windows プラットフォームの場合は `manageprofiles.bat` という名前のスクリプトです。

`manageprofiles` コマンドは、それが作成、削除、または拡張するそれぞれのプロファイルのログを作成します。ログは `install_root/logs/manageprofiles` ディレクトリーにあります。

注: i5/OS `manageprofiles` フォルダは `user_data_root/profileRegistry/logs/manageprofiles` ディレクトリーの下にあります。

ファイルは以下のように命名されます。

- `profile_name_create.log`
- `profile_name_augment.log`
- `profile_name_delete.log`

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates` ディレクトリー内にあります。このディレクトリー内に、各プロファイル・タイプに対応するさまざまなディレクトリーがあります。各ディレクトリーは、`manageprofiles` コマンドを **-templatePath** オプションを指定して使用するときに指定するパスになります。インストール・ルートの外部にプロファイル・テンプレートがあれば、そのプロファイル・テンプレートを指定することもできます。WebSphere Process Server では、以下のテンプレートを使用してください。

- `default.wbiserver`: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.wbiserver`: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用。デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.wbiserver`: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーと統合すると、管理対象ノードを定義します。

- **default.esbserver:** WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- **dmgr.esbserver:** WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- **managed.esbserver:** WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーと統合すると、管理対象ノードを定義します。

構文

manageprofiles コマンドは、以下の作業を実行するために使用します。

- プロファイルを作成する (**-create** パラメーター)。

manageprofiles コマンドの手順を実行します。

- プロファイルを拡張する (**-augment** パラメーター)。

212 ページの『**manageprofiles** コマンドを使用したプロファイルの拡張』の手順を実行します。

注: 拡張解除 (**-unaugment** パラメーター) したプロファイルの使用はサポートされません。

- プロファイルを削除する (**-delete** パラメーター)。

216 ページの『**manageprofiles** コマンドを使用したプロファイルの削除』の手順を実行します。

- すべてのプロファイルを削除する (**-deleteAll** パラメーター)
- すべてのプロファイルをリストする (**-listProfiles** パラメーター)
- 既存のプロファイルの名前から既存のプロファイルの名前を取得する (**-getName** パラメーター)
- 既存のプロファイルのパスから既存のプロファイルの名前を取得する (**-getPath** パラメーター)
- プロファイル・レジストリーを検証する (**-validateRegistry** パラメーター)
- プロファイル・レジストリーを検証して更新する (**-validateAndUpdateRegistry** パラメーター)
- デフォルト・プロファイル名を取得する (**-getDefaultName** パラメーター)
- デフォルト・プロファイル名を設定する (**-setDefaultName** パラメーター)
- プロファイルをバックアップする (**-backupProfile** パラメーター)
- プロファイルをリストアする (**-restoreProfile** パラメーター)
- **manageprofiles** コマンドの実行に必要な情報を含む応答ファイルを使用する (**-response** パラメーター)

manageprofiles コマンドで実行する各タスクの必須パラメーターなどの詳細なヘルプを参照するには、**-help** パラメーターを使用します。Windows オペレーティング・システムで **manageprofiles** コマンドの **-augment** パラメーターと一緒に **help** パラメーターを使用した例は、**manageprofiles.bat -augment -help** となります。出力によって、どのパラメーターが必須でどのパラメーターがオプションかが指定されます。

パラメーター

manageprofiles コマンドで実行する操作によっては、『manageprofiles コマンド・パラメーター』で説明している 1 つ以上のパラメーターを指定する必要があります。プロファイル管理ツールは、必須パラメーターが指定されていること、およびこれらのパラメーターの入力値が有効であることを検査します。コマンド行はパラメーター名の大/小文字を検証しないため、パラメーターの名前は必ず大/小文字を正しく区別して入力してください。大/小文字を正しく区別せずにパラメーターを入力すると、誤った結果になることがあります。

コマンドの出力

このコマンドでは、完了時に以下のいずれかのメッセージが表示されます。(正確な言い回しは、プロファイルを作成、削除、または拡張した場合で異なります。)

- INSTCONFSUCCESS: プロファイルが正常に作成されました。
- INSTCONFFAILED: プロファイルを作成できませんでした。
- INSTCONFPARTIALSUCCESS: 一部の重要でないインストール後構成アクションが正常に実行されませんでした。

ステートメントは 2 回以上表示されることもあります。例えば、INSTCONFSUCCESS 行はコマンド行に 3 回表示されます。

manageprofiles コマンド・パラメーター

WebSphere Process Server の manageprofiles コマンドでは、以下のパラメーターを使用してください。

manageprofiles コマンド・ファイルは、*install_root/bin* ディレクトリーにあります。コマンド・ファイルとは、i5/OS プラットフォームの場合は manageprofiles、Linux および UNIX プラットフォームの場合は manageprofiles.sh、Windows プラットフォームの場合は manageprofiles.bat という名前のスクリプトです。

重要: WebSphere Process Server プロファイルを作成する場合は、WebSphere Process Server のインフォメーション・センターで文書化されているパラメーターのみを使用してください。

注: すべてのパラメーターの大文字小文字が区別されます。

以下のオプションは、manageprofiles コマンドに使用できます。

-adminUserName *adminUser_ID*

管理セキュリティに使用されるユーザー ID を指定します。管理セキュリティが有効になっている既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターが必要です。

-adminPassword *adminPassword*

-adminUserName パラメーターで指定されている管理セキュリティ・ユーザー ID のパスワードを指定します。管理セキュリティが有効になっている既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターが必要です。

-appSchedulerServerName

WebSphere Process Server Application Scheduler の実行が構成されているサーバ

ーの名前。このパラメーターは、プロファイルに複数のサーバーが定義されている場合、プロファイルの拡張に対して有効です。

-augment

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンドは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。

注: `install_dir/profileTemplates` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。例えば、プロファイルの作成中にポートを変更する場合は、プロファイル・テンプレート・ディレクトリー内のファイルを変更するのではなく、プロファイル管理ツールを使用するか、または `manageprofiles` コマンドで `-startingPort` または `-portsFile` 引数を使用します。

-templatePath の完全修飾ファイル・パスを指定します。以下に例を示します。

```
manageprofiles(.bat)(.sh) -augment -profileName profile_name  
-templatePath fully_qualified_template_path
```

-backupProfile

プロファイル・フォルダー、およびプロファイル・レジストリー・ファイルに含まれているプロファイル・メタデータのファイル・システム・バックアップを実行します。

このパラメーターは、WebSphere Process Server ではサポートされていません。

-backupFile backupFile_name

指定されたファイルにプロファイル・レジストリー・ファイルをバックアップします。`backupFile_name` には完全修飾ファイル・パスを指定する必要があります。

-cbeServerName

WebSphere Process Server Common Base Event ブラウザーの実行が構成されているサーバーの名前。

-ceiBufferPool4k

Common Event Infrastructure の 4K バッファー・プールの名前を指定します。このバッファー・プールは、データベース DDL スクリプトが実行できるようになる前にアクティブである必要があります。

-ceiBufferPool8k

Common Event Infrastructure の 8K バッファー・プールの名前を指定します。このバッファー・プールは、データベース DDL スクリプトが実行できるようになる前にアクティブである必要があります。

-ceiBufferPool16k

Common Event Infrastructure の 16K バッファー・プールの名前を指定します。このバッファー・プールは、データベース DDL スクリプトが実行できるようになる前にアクティブである必要があります。

-ceiCollection

Common Event Infrastructure の DB2 iSeries ライブラリー SQL コレクション。コレクション名の最大長は 10 文字です。これが指定されていない場合のデフォルト値は event です。

-ceiDbExecuteScripts

管理コマンドが Common Event Infrastructure イベント・データベース構成スクリプトを作成および実行する必要があるかどうかを指示します。このパラメーターが true に設定されていると、コマンドは DDL データベース・スクリプトを生成してデータベースを作成します。このパラメーターが false に設定されている場合、スクリプトは生成されますが実行されません。そのため、データベース構成を完了するには、データベース構成スクリプトを実行する必要があります。データベースを作成するには、現行のシステムがデータベース・コマンドを実行するよう既に構成済みである必要があります。

デフォルト値はプラットフォームに依存し、Common Event Infrastructure データベースにどの -ceiDbProduct 値を指定したかにより異なります。デフォルト値が false になるのは、プロファイルが i5/OS 以外のすべてのプラットフォームで作成され、-ceiDbProduct が iSeries Toolbox または iSeries Native と設定されている場合です。それ以外の場合、デフォルトは true です。

-ceiDbHostName

Common Event Infrastructure イベント・データベース・サーバーのインストール先となるマシンのホスト名。このパラメーターは DB2 および Informix データベースで必須です。i5/OS プラットフォームでは、このパラメーターは、Toolbox for Java JDBC ドライバーを使用する場合に必須です。Derby ネットワーク・データベースを作成する場合は、このパラメーターと -ceiDbPort パラメーターを指定しますが、Derby ローカル・データベースを作成する場合は、これらのパラメーターを指定しないでください。

-ceiDbInformixDir

Common Event Infrastructure 用の Informix データベース・ソフトウェアがインストールされているディレクトリー。このパラメーターは、ceiDbExecuteScripts パラメーターで true を指定した場合にのみ必須になります。

-ceiDbInstallDir

Common Event Infrastructure 用にデータベースがインストールされているディレクトリー。このパラメーターは、ceiDbExecuteScripts パラメーターで true を指定した場合にのみ必須になります。

-ceiDbName

作成される Common Event Infrastructure イベント・データベースの名前。DB2 データベース、Derby データベース、Informix データベース、および Microsoft SQL Server データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ event です。DB2 iSeries Native データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ *LOCAL です。DB2 iSeries Toolbox データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ *SYSBAS です。

Oracle データベースの場合、テーブルを作成してテーブルにデータを取り込むには、Oracle システム ID (SID) が既に作成済みで、イベント・サービス・コマンドで使用可能になっている必要があります。デフォルト値は、指定がなければ orcl です。

-ceiDbNodeName

Common Event Infrastructure の DB2 ノード名 (8 文字以下にする必要があります)。このノードは既にカタログに入れられていて、DB2 サーバーと通信するよう構成済みである必要があります。現行のマシンが DB2 クライアントとして構成済みで、パラメーター **ceiDbExecuteScripts** が true に設定されている場合に、このパラメーターを設定する必要があります。

-ceiDbPassword

Common Event Infrastructure データベースまたはスキーマのパスワードを指定します。

DB2 データベースの場合、このパラメーターは必須です。

Derby データベースの場合、このパラメーターは、セキュリティを無効にしている場合はオプションであり、セキュリティを有効にしている場合は必須です。このパラメーターを指定する場合は、**ceiDbUser** パラメーターを指定する必要があります。

Informix データベースの場合、このパラメーターは必須です。これは、イベント・サービス Informix テーブルを所有するスキーマ・ユーザー ID のパスワードです。WebSphere データ・ソースはこのパスワードを使用して Informix データベース接続を認証します。

Oracle データベースの場合、このパラメーターは必須です。これは、データベース作成時に作成されたスキーマ・ユーザー ID のパスワードであり、WebSphere データ・ソースでは、このパスワードを使用して Oracle データベース接続を認証します。

SQL Server データベースの場合、このパラメーターは必須です。これは、**ceiDbUser** パラメーターで指定された SQL Server ユーザー ID のパスワードです。

-ceiDbPort

Common Event Infrastructure イベント・データベース・インスタンスのポート番号を指定します。

DB2 データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ 50000 です。

Derby データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ 1526 です。

Derby ネットワーク・データ・ソースを作成するには、このパラメーターおよび **dbHostName** パラメーターを指定します。Derby ローカル・データ・ソースを作成するには、これらのパラメーターを指定しないでください。

Informix の場合、デフォルト値は、指定がなければ 1526 です。

Oracle の場合、デフォルト値は、指定がなければ 1521 です。

SQL Server の場合、デフォルト値は、指定がなければ 1433 です。

-ceiDbProduct

Common Event Infrastructure イベント・データベース用に使用されたデータベース製品。指定可能な値: CEI_DB_DERBY_EMBEDDED (Derby Embedded)、CEI_DB_DB2 (IBM DB2)、CEI_DB2_ZOS (IBM DB2 z/OS)、CEI_DB_ISERIES_NATIVE (iSeries Native)、CEI_DB_DERBY_NETWORKSERVER (Derby Network Server)、

CEI_DB_ISERIES_TOOLBOX (iSeries Toolbox)、CEI_DB_INFORMIX (Informix)、CEI_DB_ORACLE (Oracle)、CEI_DB_SQL_SERVER (Microsoft SQL Server)。

-ceiDbServerName

Common Event Infrastructure イベント・データベースのサーバー・インスタンス名。Informix を使用するとき、このパラメーターは必須です。Microsoft SQL Server を使用しており、ceiDbExecuteScripts パラメーターが true に設定されている場合は、このパラメーターを設定する必要があります。

-ceiDbSubSystemName

Common Event Infrastructure イベント・データベースの DB2 z/OS サブシステム名。このパラメーターは必須です。

-ceiDbSysPassword

ceiDbSysUser パラメーターで指定されたユーザーのパスワード。このパラメーターは、Common Event Infrastructure イベント・データベースに Oracle を使用している場合のみです。デフォルト値は、指定がなければ空ストリングです。

-ceiDbSysUser

Common Event Infrastructure イベント・データベースの Oracle SYSUSER ユーザー ID。このユーザー ID には、SYSDBA 特権が必要です。

-ceiDbUser

Common Event Infrastructure イベント・データベースに使用するユーザー ID を指定します。

DB2 データベースの場合、デフォルト値は、指定がなければ db2inst1 です。

i5/OS i5/OS データベースの場合、データベースの作成および除去の特権を持つユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

Derby データベースの場合、データ・ソースが Derby データベース認証に使用するユーザー ID です。このパラメーターは、WebSphere ドメイン・セキュリティを無効にしている場合はオプションであり、WebSphere ドメイン・セキュリティを有効にしている場合は必須です。このパラメーターを指定した場合、**ceiDbPassword** パラメーターも指定する必要があります。

Informix データベースの場合、イベント・サービス・データベース・テーブルを所有する Informix データベース・スキーマのユーザー ID を指定します。WebSphere データ・ソースはこのユーザー ID を使用して Informix データベース接続を認証します。このパラメーターは必須です。

Oracle データベースの場合、イベント・サービス Oracle テーブルを所有する Oracle スキーマのユーザー ID を指定します。ユーザー ID はデータベースの作成中に作成され、WebSphere データ・ソースはこのユーザー ID を使用して Oracle データベース接続を認証します。デフォルト値は、指定がなければ ceiuser です。

Microsoft SQL Server データベースの場合、イベント・サービス・テーブルを所有する SQL Server のユーザー ID を指定します。デフォルト値は、指定がなければ ceiuser です。

-ceiInstancePrefix

Informix、Oracle、および Microsoft SQL Server データベースの場合、このコマ

ンドは Common Event Infrastructure イベント・データベース・インスタンスの名前を使用して、データベース・ファイルを固有の名前でディレクトリー内にグループ化します。デフォルト値は、指定がなければ `ceiinst1` です。

-ceiJdbcClassPath

Informix、Oracle、および DB2 データベースの場合は、Common Event Infrastructure の JDBC ドライバーへのパスを指定します。ドライバー・ファイルへのパスのみを指定します。ファイル名は指定しないでください。

-ceiNativeJdbcClassPath

Common Event Infrastructure の DB2 for iSeries ネイティブ JDBC ドライバーへのパス。Toolbox for Java ドライバーの代わりにネイティブの JDBC ドライバーを使用する場合のみ、このパラメーターを使用します。ドライバー・ファイルへのパスのみを指定します。ファイル名は含めないでください。

-ceiOracleHome

ORACLE_HOME のディレクトリー。パラメーター `ceiDbExecuteScripts` が `true` に設定されているとき、このパラメーターは必須です。

-ceiOutputScriptDir

生成されたデータベース構成スクリプトのロケーション。この構成スクリプトを使用すると、イベント・データベースをいつでも手動で構成できます。

-ceiOverrideDataSource

このパラメーターが `true` に設定されると、コマンドは指定された有効範囲の既存の Common Event Infrastructure サービス・データ・ソースを除去した後に、データ・ソースを新規作成します。このパラメーターが `false` に設定されている場合、指定された有効範囲と同じ有効範囲に別のイベント・サービス・データ・ソースが見つかったと、このコマンドは、指定された有効範囲にはイベント・サービス・データ・ソースを作成しません。これが指定されていない場合のデフォルト値は `false` です。

-ceiSaUser

Common Event Infrastructure のテーブル、デバイス、およびキャッシュを作成するための特権を持つ Microsoft SQL Server ID。 `ceiDbExecuteScripts` パラメーターが `true` に設定されている場合、このパラメーターは必須です。

-ceiSaPassword

Common Event Infrastructure のテーブル、デバイス、およびキャッシュを作成するための特権を持つ Microsoft SQL Server ID のパスワード。 `ceiSaUser` パラメーターに値を指定したときにこのパラメーターは必須ですが、sa ユーザー ID がパスワードを持たない場合は除きます。

-ceiServerName

Common Event Infrastructure サービスをランタイム環境でデプロイする必要があるサーバーの名前。この値は、プロファイルに対して有効なサーバーである必要があります。値を指定すると、その値が、プロファイルの作成時に作成するサーバー、または既存のプロファイルの拡張時に最初に見つかったサーバーのデフォルトになります。

-ceiToolBoxJdbcClassPath

Common Event Infrastructure の IBM Toolbox for Java DB2 JDBC ドライバーへのパス。ネイティブの JDBC ドライバーの代わりに Toolbox for Java ドライ

パーを使用する場合のみ、このパラメーターを使用します。ドライバー・ファイルへのパスのみを指定します。ファイル名は含めないでください。

-cellName *cell_name*

Common Event Infrastructure のプロファイルのセル名を指定します。プロファイルごとに固有のセル名を使用します。このパラメーターは、プロファイルの作成にのみ使用します。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

このパラメーターのデフォルト値は、短縮ホスト名、定数のセル、および末尾の数字の組み合わせに基づいています。以下に例を示します。

```
if (DMgr)
  shortHostNameCellCellNumber
else
  shortHostNameNodeNodeNumberCell
```

ここで、*CellNumber* は 01 から始まる連続番号、*NodeNumber* は、ノード名の定義に使用したノード番号です。

このパラメーターの値には、スペースや、*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。

-configureBPC true | false

Business Process Choreographer のサンプル構成を作成するかどうかを決定します。このパラメーターを true に設定する場合は、**-adminUserName** および **-adminPassword** パラメーターも設定する必要があります。このパラメーターのデフォルトは **-enableAdminSecurity** パラメーターと同じ値です。

注: Business Process Choreographer のサンプル構成では、共通データベース (WPRCSDB) を使用しません。この構成では、必ず Derby データベースが使用されますが、このデータベースは ND 環境ではサポートされていません。このスタンドアロン・プロファイルを後で統合する予定である場合は、**-configureBPC** を true に設定しないでください。

-configureBRM true | false

ビジネス・ルール・マネージャーを構成します。デフォルト値は false です。

-create

プロファイルを作成します。

プロファイルの作成に関する特定の情報については、`manageprofiles -create -templatePath fully_qualified_file_path_to_template -help` を指定します。使用可能なテンプレートは以下のとおりです。

- `default.wbiserver`: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- `dmgr.wbiserver`: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用。デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.wbiserver`: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーと統合すると、管理対象ノードを定義します。
- `default.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。

- `dmgr.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- `managed.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーと統合すると、管理対象ノードを定義します。

-dbCommonForME

メッセージング・エンジン用の共通データベースを使用するかどうかを指示します。DB2 z/OS データベースの場合、デフォルト値は `true` です。それ以外のすべてのデータベースの場合のデフォルト値は `false` です。このパラメーターが `false` に設定されている場合、メッセージング・エンジンはファイル・ストア・データ・ストアを使用します。

-dbConnectionLocation

DB2 z/OS データベースの場所。

-dbCreateNew

データベースを作成するのか、再使用するのかを示します。有効な値は `true` または `false` です。

-dbDelayConfig

テーブルの作成をプロファイルの作成後まで延期するかどうかを示します。有効な値は `true` または `false` です。このパラメーターは、デフォルトでは `false` に設定されています。

-dbDriverType

データベースのドライバー・タイプ。Oracle データベースの場合、有効な値は `THIN` または `OCI` です。DB2 データベースの場合、有効な値は `2` または `4` です。

-dbHostName

データベース・サーバーのホスト名または IP アドレス。デフォルト値は `localhost` です。

-dbInstance

Informix データベースのデータベース・インスタンス名。

-dbJDBCClasspath

JDBC ドライバー・ファイルのロケーション。

-dbLocation

Informix データベースを使用している場合、データベース・インストール・ディレクトリーを指示します。`dbCreateNew` パラメーターが `true` に設定されている場合にのみ、このパラメーターを使用できます。

-dbName

データベースの名前。この値は、デフォルトでは `WPRCSDB` に設定されています。

-dbOutputScriptDir

エクスポートされたデータベース・スクリプトのロケーション。

-dbPassword

データベース認証に必要なパスワード。このパラメーターは、Derby Embedded を除くすべてのデータベースに必要です。

-dbSchemaName

データベース・スキーマ名。

-dbServerPort

データベース・サーバーのポート番号。使用しているデータベースに応じて、デフォルトのポート番号以外の別のポート番号を指定できます。

-dbStorageGroup

DB2 z/OS データベースのストレージ・グループ名。

-dbType

データベース・タイプ。

WebSphere Process Server と併用しているデータベース製品のタイプとして、以下の値のいずれかを設定します。

- Derby Embedded データベースの場合は DERBY_EMBEDDED
- Derby Network Server データベースの場合は DERBY_NETWORKSERVER
- DB2_UNIVERSAL (DB2 Universal データベース)
- DB2UDBOS390_V7_1 (DB2 for z/OS および OS/390 v7 データベース)
- DB2UDBOS390_V8_1 (DB2 for z/OS v8 データベース)
- DB2UDBISERIES_NATIVE (DB2 for i5/OS Native Driver データベース)
- DB2UDBISERIES_TOOLBOX (DB2 for i5/OS Toolbox Driver データベース)
- DB2_CLI (DB2 Universal Runtime Client データベース)
- INFORMIX (Informix Dynamic Server データベース)
- MSSQLSERVER_EMBEDDED (Embedded ドライバーを使用する Microsoft SQL Server データベース)
- MSSQLSERVER_DATADIRECT (DataDirect ドライバーを使用する Microsoft SQL Server データベース)
- Oracle 9i データベースの場合は ORACLE9I
- Oracle 10g データベースの場合は ORACLE10G

-dbUserId

データベース認証に必要なユーザー ID。このパラメーターは、Derby Embedded を除くすべてのデータベースに必要です。

-debug

manageprofiles コマンドが使用する Apache Ant ユーティリティのデバッグ機能をオンにします。

-defaultPorts

プロファイルにデフォルトのポート値または基本ポート値を割り当てます。

-startingPort または -portsFile パラメーターを使用している場合は、このパラメーターを使用しないでください。

-startingPort パラメーター、-defaultPorts パラメーター、または -portsFile パラメーターを指定していない場合、manageprofiles コマンドは、プロファイルの作成中に、自動的に生成された推奨ポートのセットを使用します。この推奨ポート値は、デフォルト・ポートが使用可能かどうかに応じて、デフォルト・ポート値とは異なる場合があります。

注: 管理対象プロファイル・テンプレートを使用している場合は、このパラメーターを使用しないでください。

-delete

プロファイルを削除します。

プロファイルを削除してもプロファイル・ディレクトリーは削除されません。例えば、`/usr/WebSphere/ProcServer/profiles/managedProfile` ディレクトリー (i5/OS プラットフォームの場合は `QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer/profiles/managedProfile` ディレクトリー) にプロファイルを作成した場合、このディレクトリーはプロファイルを削除した後も残ります。

このディレクトリーは削除しても、残しておいてもかまいません。ただし、`profile_root/logs` ディレクトリーには、プロファイルのアンインストールに関する情報が含まれています。例えば、アンインストール手順中の問題の原因を判別するために、`_nodeuninst.log` ファイルを保持することができます。

プロファイル・レジストリー内の、拡張テンプレートが登録されているプロファイルを削除すると、拡張解除アクションが自動的に実行されます。

-deleteAll

登録済みのすべてのプロファイルを削除します。

プロファイルを削除してもプロファイル・ディレクトリーは削除されません。例えば、`/usr/WebSphere/ProcServer/profiles/managedProfile` ディレクトリー (i5/OS プラットフォームの場合は `QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer/profiles/managedProfile` ディレクトリー) にプロファイルを作成したとします。このディレクトリーは、そのプロファイルを削除した後もそのまま残ります。

このディレクトリーは削除しても、残しておいてもかまいません。ただし、`profile_root/logs` ディレクトリーには、プロファイルのアンインストールに関する情報が含まれています。例えば、アンインストール手順中の問題の原因を判別するために、`_nodeuninst.log` ファイルを保持することができます。

プロファイル・レジストリー内の、拡張テンプレートが登録されているプロファイルを削除すると、拡張解除アクションが自動的に実行されます。

-dmgrHost dmgr_host_name

デプロイメント・マネージャーが稼働しているマシンを示します。作成時または拡張時にカスタム・プロファイルを統合する場合に、このパラメーターと **dmgrPort** パラメーターを指定します。このパラメーターは、`managed.wbiserver` および `managed.esbserver` プロファイル・テンプレートと併用できます。

ホスト名には、長い DNS 名、短い DNS 名、またはデプロイメント・マネージャー・マシンの IP アドレスを指定できます。

このオプション・パラメーターを指定すると `manageprofiles` コマンドは、カスタム・プロファイルを作成するときに、カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャー・セルへの統合を試行するよう指示されます。このパラメーターは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルまたはスタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成時には無視されます。

デプロイメント・マネージャーが稼働していない場合にカスタム・ノードを統合すると、ログのインストール・インディケーターが完全な失敗を表す `INSTCONFFAILED` となります。結果として生成されるカスタム・プロファイルは使用不可になります。同じプロファイル名で別のカスタム・プロファイルを作

成する前に、カスタム・プロファイル・ディレクトリーをプロファイル・リポジトリー（プロファイルのインストール・ルート・ディレクトリー）から移動させる必要があります。

セキュリティーを使用可能に設定している場合、またはデフォルトの JMX コネクター・タイプを変更している場合は、`manageprofiles` コマンドによる統合はできません。代わりに、`addNode` コマンドを使用してください。

このパラメーターのデフォルト値は `localhost` です。このパラメーターの値は正しく形成されたホスト名でなければならず、スペースや、*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。デプロイメント・マネージャーとの接続を `dmgrPort` パラメーターと併用できるようになっている必要もあります。

-dmgrPort *dmgr_port_number*

デプロイメント・マネージャーの SOAP ポートを示します。作成時または拡張時にカスタム・プロファイルを統合する場合に、このパラメーターと `dmgrHost` パラメーターを指定します。デプロイメント・マネージャーが稼働しており、アクセス可能である必要があります。

セキュリティーを使用可能に設定している場合、またはデフォルトの JMX コネクター・タイプを変更している場合は、`manageprofiles` コマンドによる統合はできません。代わりに、`addNode` コマンドを使用してください。

このパラメーターのデフォルト値は `8879` です。指定するポートは正整数で、デプロイメント・マネージャーとの接続が `dmgrHost` パラメーターと併用できるようになっている必要があります。

-enableAdminSecurity *true | false*

管理セキュリティーを使用可能にします。有効な値は、`true` または `false` です。デフォルト値は `false` です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

`enableAdminSecurity` が `true` に設定されている場合は、`-adminUserName` および `-adminPassword` パラメーターをこれらのパラメーターの値と一緒に指定する必要もあります。アプリケーション・サーバーのインストール中にサンプルがインストールされた場合、管理セキュリティーを使用可能にするプロファイルを作成するときに、`-samplesPassword` パラメーターも指定する必要があります。管理セキュリティーが有効になっている場合に `-samplesPassword` パラメーターが指定されていないと、プロファイルは正常に作成されますが、サンプルを実行しようとするとき、サーバーのシステム出力ログに例外と失敗が記録されます。

Linux

-enableService *true | false*

Linux サービスの作成を有効にします。有効な値は、`true` または `false` です。このパラメーターのデフォルト値は `false` です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

`manageprofiles` コマンドの `-enableService` オプションを `true` に設定して実行すると、`root` ユーザーがコマンドを実行したときに Linux サービスがプロファイルと共に作成されます。非 `root` ユーザーが `manageprofiles` コマンドを実行すると、プロファイルは作成されますが、Linux サービスは作成されません。非

root ユーザーは Linux サービスをセットアップするための十分な許可を持たないため、サービスは作成されません。INSTCONPARTIALSUCCESS の結果がプロフィール作成の終了時に表示され、現行ユーザーは Linux サービスをセットアップするための十分な許可がないことを示すメッセージがプロフィール作成ログ `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log` に記載されます。

-federateLater true | false

管理対象プロフィールをプロフィールの作成中に統合するか、または `addNode` コマンドを使用して後で統合するかを示します。WebSphere Process Server プロフィールを作成する場合は、値を入力しないでください。デフォルトである `true` を使用してください。

-federateLaterProcServer true | false

管理対象プロフィールを `managed.wbiserver` テンプレートを使用して後で統合するかどうかを示します。有効な値は `true` または `false` です。`dmgrHost`、`dmgrPort`、`dmgrAdminUserName` および `dmgrAdminPassword` パラメーターが設定されていない場合、このパラメーターのデフォルト値は `true` です。

-federateLaterWESB true | false

管理対象プロフィールを `managed.wesbserver` テンプレートを使用して後で統合するかどうかを示します。有効な値は `true` または `false` です。`dmgrHost`、`dmgrPort`、`dmgrAdminUserName` および `dmgrAdminPassword` パラメーターが設定されていない場合、このパラメーターのデフォルト値は `true` です。

-fileStoreForME true | false

`true` に設定すると、メッセージング・エンジンに対してファイル・ストア・データ・ストアが使用されます。このパラメーターのデフォルト値は `false` です。

注: `-dbCommonForME` パラメーターと `-fileStoreForME` パラメーターの両方を `true` に設定することはできません。そのように設定すると、妥当性検査エラーが発生します。

-getDefaultName

デフォルト・プロフィールの名前を返します。

-getName

指定した `-profilePath` パラメーターで登録されたプロフィールの名前を取得します。

-getPath

指定された名前のプロフィールのファイル・システム・ロケーションを取得します。`-profileName` パラメーターが必要です。

-help

コマンド構文を表示します。

-hostName *host_name*

プロフィールを作成するホストの名前を指定します。既存のプロフィールを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。これは、最初の製品のインストール時に指定したホスト名と一致している必要があります。このパラメーターのデフォルト値は、長形式のドメイン・ネーム・システムです。このパラメーターは、プロフィールの作成にのみ必要です。このパラメーターの値は有効

な IPv6 ホスト名でなければならず、スペースや、*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。

-ignoreStack

拡張された特定のプロファイルの拡張を解除するための `-templatePath` パラメーターと併用されるオプション・パラメーター。

注: WebSphere Process Server の場合は、拡張が解除されている (`-unaugment` パラメーター) プロファイルの使用はサポートされていません。

-isDefault

一緒に指定されている `-profileName` パラメーターで識別されるプロファイルが登録された場合には、そのプロファイルをデフォルト・プロファイルにすることを指定します。デフォルト・プロファイルを処理するコマンドを発行する場合には、このコマンドの `-profileName` 属性を使用する必要はありません。

-isDeveloperServer

サーバーを開発の目的にのみ使用するかどうかを指定します。このパラメーターは、アプリケーションをその実動アプリケーション・サーバーにデプロイする前に、実動サーバー以外のサーバーでアプリケーションをテストするためのプロファイルを作成する場合に役立ちます。このパラメーターは、WebSphere Process Server でプロファイルを作成する場合にのみ有効です。

WebSphere Process Server プロファイルの作成時に `-isDeveloperServer` を設定すると、事前に構成された VMM ファイル・リポジトリがインストールされます。このファイル・リポジトリには、Business Process Choreographer の要員分析をテストする目的で使用できる組織のサンプルが格納されており、そのままの状態ですぐに使用できます。

-listProfiles

定義済みのプロファイルをすべてリストします。

-ndTopology

プロファイルの作成にデプロイメント環境パスを使用するかどうかを示します。有効な値は `true` または `false` です。

-nodeName *node_name*

新しいプロファイルを使用して作成されるノードのノード名を指定します。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。セル内、またはマシン上で固有な値を使用してください。同じ製品のバイナリー・セットを共有する各プロファイルは、それぞれ固有のノード名を持つ必要があります。このパラメーターは、`default.wbiserver`、`dmgr.wbiserver`、および `managed.wbiserver` テンプレートを使用してプロファイルを作成する場合にのみ必要です。

Linux **UNIX** **Windows** このパラメーターのデフォルト値は、短縮ホスト名、プロファイル・タイプ、および末尾の番号に基づきます。以下に例を示します。

```
if (DMgr)
  shortHostNameCellManagerNodeNumber
else
  shortHostNameNodeNodeNumber
```

ここで、`NodeNumber` は 01 から始まる連続番号です。

デフォルトのノード名は以下のとおりです。

- **dmgr** テンプレート: *profilenameManager*
- デフォルト・テンプレート: *shorthostname_profilename*
- 管理対象テンプレート: *shorthostname_profilename*
- セル: 前出の **dmgr** およびデフォルト・テンプレートの例を参照して、必要に応じて、作成された 2 つのプロファイルに適用します。

このパラメーターの値には、スペースや、*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。

-omitAction *feature1 feature2... featureN*

プロファイルのフィーチャーを除外するオプション・パラメーター。

各プロファイル・テンプレートには、いくつかのオプション・フィーチャーが事前定義されています。samplesInstallAndConfig オプションは、選択されたサンプル・アプリケーションと一緒に製品がインストールされたときのみ利用可能です。以下のオプション・フィーチャーは、**-omitAction** パラメーターと併用して、以下のプロファイル・テンプレートに使用できます。

- **デフォルト** - アプリケーション・サーバー
 - deployAdminConsole
 - samplesInstallAndConfig
 - defaultAppDeployAndConfig
- **dmgr** - デプロイメント・マネージャー
 - deployAdminConsole

-portsFile *file_path*

新規プロファイルのポート設定を定義しているファイルへのパスを指定するオプション・パラメーター。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-startingPort または **-defaultPorts** パラメーターを使用している場合は、このパラメーターを使用しないでください。

-startingPort パラメーター、**-defaultPorts** パラメーター、または **-portsFile** パラメーターを指定していない場合、**manageprofiles** コマンドは、プロファイルの作成中に、自動的に生成された推奨ポートのセットを使用します。この推奨ポート値は、デフォルト・ポートが使用可能かどうかに応じて、デフォルト・ポート値とは異なる場合があります。

-profileName *profile_name*

プロファイルの名前を指定します。プロファイルの作成時には固有値を使用してください。

同じ製品のバイナリー・セットを共有する各プロファイルは、それぞれ固有の名前を持つ必要があります。デフォルトのプロファイル名は、プロファイル・タイプと末尾の番号に基づきます。以下に例を示します。

profileType ProfileNumber

ここで、*profileType* は、ProcSrv、Dmgr、または Custom などの値で、*ProfileNumber* は、固有のプロファイル名を作成する連続番号です。

このパラメーターの値には、スペースや、*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。使用されていないプロファイル名を選択する必要があります。

-profilePath *profile_root*

プロファイルへの完全修飾パスを指定します。このパスは、インフォメーション・センターでは *profile_root* と表されます。

以下に例を示します。

```
-profilePath profile_root
```

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを設定しないでください。

Windows **Windows プラットフォーム:** 完全修飾パスにスペースが含まれている場合、値を引用符で囲みます。

デフォルト値は *install_root* ディレクトリー、*profiles* サブディレクトリー、およびファイルの名前に基づいています。

例えば、プロファイル作成のデフォルトは以下のようになります。

```
WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName
```

ここで、*WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME* は、*install_root/properties* ディレクトリー内の *wasprofile.properties* ファイルで定義されています。

このパラメーターの値は、ターゲット・システムの有効なパスで、現在未使用のものである必要があります。

このディレクトリーへの書き込み権限が必要です。

-response *response_file*

コマンド行から *manageprofiles* コマンドを使用して、すべての API 関数にアクセスします。

コマンド行インターフェースは、プロパティー・ファイルの指定されたコマンドの入力引数を、キーと値という形式で含んでいる応答ファイルによって駆動できます。以下に、*create* 命令に対する応答ファイルの例を示します。

```
create
profileName=testResponseFileCreate
profilePath=profile_root
templatePath=install_root/profileTemplates/default
nodeName=myNodeName
cellName=myCellName
hostName=myHostName
omitAction=myOptionalAction1, myOptionalAction2
```

Windows **Windows プラットフォーム:** Windows オペレーティング・システムの *PATH* ステートメントでは、スラッシュ (/) または円記号 (¥) のいずれかが使用できます。パス記述で円記号を使用する場合は、そのパスを正しく把握するために、応答ファイルには二重の円記号が必要です。以下に、*create* 命令に対する応答ファイルで二重の円記号を使用している例を示します。

```
create
templatePath=C:¥¥WebSphere¥¥ProcServer¥¥profileTemplates¥¥default
```


各種のプロファイル・テンプレートおよびアクションについて、どの入力引数が必要であるかを判別するには、`manageprofiles` コマンドに **-help** パラメーターを付けて使用してください。

-restoreProfile

プロファイル・バックアップをリストアします。`-backupFile` パラメーターと一緒に使用する必要があります。このパラメーターは、WebSphere Process Server ではサポートされていません。

-samplesPassword *samplesPassword*

サンプルに使用されるパスワードを作成します。パスワードは、アプリケーション・サーバーのインストール中にインストールした Web アプリケーションのサンプルに対するアクセスを制限するために使用されます。

Linux

-serviceUserName *service_user_ID*

Linux サービスの作成中に使用されるユーザー ID を指定して、Linux サービスがこのユーザー ID で実行されるようにします。Linux サービスは、ユーザー ID がログオンするごとに実行されます。

-setDefaultName

既存のプロファイルの 1 つにデフォルト・プロファイルを設定します。

`-profileName` パラメーターと併用する必要があります。以下に例を示します。

```
manageprofiles(.bat)(.sh) -setDefaultName -profileName profile_name
```

-startingPort *startingPort*

プロファイルにすべてのポートを生成して割り当てるための開始ポート番号を指定します。

既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを設定しないでください。ポート値は **-startingPort** から順に割り当てられ、使用中のポートは除外されます。i5/OS 以外のすべてのシステムで、システムは現在使用中のポートを認識および解決して、ポートの競合を回避するためにポート割り当てを決定します。

このパラメーターは、**defaultPorts** パラメーターまたは **portsFile** パラメーターと併用しないでください。

-startingPort パラメーター、**-defaultPorts** パラメーター、または **-portsFile** パラメーターを指定していない場合、`manageprofiles` コマンドは、プロファイルの作成中に、自動的に生成された推奨ポートのセットを使用します。この推奨ポート値は、デフォルト・ポートが使用可能かどうかに応じて、デフォルト・ポート値とは異なる場合があります。

注: 管理対象プロファイル・テンプレートを使用している場合は、このパラメーターを使用しないでください。

-templatePath *template_path*

インストール・ルート・ディレクトリー内にあるテンプレート・ファイルへのディレクトリー・パスを指定します。`profileTemplates` ディレクトリー内には、プロファイル・タイプおよびインストールされている製品のタイプに応じてさまざまなディレクトリーがあります。プロファイルのディレクトリーは、**-templatePath** オプションの使用中に示したパスです。インストール・ルートの外部にプロファイル・テンプレートがある場合には、そのプロファイル・テンプレートを指定できます。

絶対パスを使用します。このパラメーターはディレクトリーとして存在し、有効なテンプレート・ディレクトリーを指している必要があります。 WebSphere Process Server では、以下のテンプレートを使用してください。

- default.wbiserver: WebSphere Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- dmgr.wbiserver: WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャー・プロファイル用。デプロイメント・マネージャーを定義します。
- managed.wbiserver: WebSphere Process Server カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーと統合すると、管理対象ノードを定義します。
- default.esbserver: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。
- dmgr.esbserver: WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャー・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーを定義します。
- managed.esbserver: WebSphere Enterprise Service Bus カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーと統合すると、管理対象ノードを定義します。

-topologyPattern

作成しているデプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターンを決定します。有効な値は CondensedSync、CondensedAsync、または Reference です。

-topologyRole

作成済みのプロファイルを統合するときに、プロファイルがデプロイメント環境で果たす機能を示します。有効な値は、デプロイメント・ターゲットの場合は ADT、ホスト・メッセージングの場合は Messaging、またはサービスをサポートする場合は Support です。1つの値を指定するか、または複数の値をそれぞれスペースで区切って指定できます。例えば、AD Messaging Support または Messaging または AD Support とします。

-unaugment

注: WebSphere Process Server の場合は、拡張が解除されている (-unaugment パラメーター) プロファイルの使用はサポートされていません。

-validateAndUpdateRegistry

プロファイルがファイル・システムに存在しているかどうかを確認するために、プロファイル・レジストリー内にリストされているすべてのプロファイルをチェックします。欠落しているプロファイルはレジストリーから除去されます。レジストリーから削除された欠落プロファイルのリストを返します。

-validateRegistry

プロファイルがファイル・システムに存在しているかどうかを確認するために、プロファイル・レジストリー内にリストされているすべてのプロファイルをチェックします。欠落しているプロファイルのリストを返します。

-validatePorts

ポートが予約されておらず、使用中でもないことを確認するために、ポートを検査することを指定します。このパラメーターは、使用されていないポートを識別する場合に役立ちます。ポートが使用中であることが判明した場合は、プロファイルの作成が停止して、エラー・メッセージが表示されます。このパラメーター

は create コマンド行でいつでも使用できます。このパラメーターは -portsFile パラメーターと組み合わせて使用することをお勧めします。

-webServerCheck true | false

Web サーバー定義をセットアップするかどうかを示します。有効な値は、true または false です。このパラメーターのデフォルト値は false です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-webServerHostname *webserver_host_name*

サーバーのホスト名。このパラメーターのデフォルト値は、ローカル・マシンの長いホスト名です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-webServerInstallPath *webserver_installpath_name*

ローカルまたはリモートの Web サーバーのインストール・パス。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

このパラメーターのデフォルト値は、ローカル・マシンのオペレーティング・システム、および webServerType パラメーターの値によって異なります。以下に

例を示します。 **AIX**

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "/usr/IBM/HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "/opt/sun/webserver"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to "?"  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to "?"  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

HP-UX

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "/opt/IBM/HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "/opt/sun/webserver"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

Linux

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "/opt/IBM/HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "/opt/sun/webserver"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

Solaris

```
webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "/opt/IBM/HTTPServer"  
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"  
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "/opt/sun/webserver"  
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to ""  
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"
```

Windows

webServerType=IHS: webServerInstallPath defaulted to "C:\Program Files\IBM\HTTPServer"
webServerType=IIS: webServerInstallPath defaulted to "C:\"
webServerType=SUNJAVASYSTEM: webServerInstallPath defaulted to "C:\"
webServerType=DOMINO: webServerInstallPath defaulted to ""
webServerType=APACHE: webServerInstallPath defaulted to ""
webServerType=HTTPSERVER_ZOS: webServerInstallPath defaulted to "n/a"

-webServerName *webserver_name*

Web サーバーの名前。このパラメーターのデフォルト値は `webserver1` です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-webServerOS *webserver_operating_system*

Web サーバーが常駐しているオペレーティング・システム。有効な値は、`windows`、`linux`、`solaris`、`aix`、`hpux`、`os390`、および `os400` です。このパラメーターは **webServerType** パラメーターと併用してください。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-webServerPluginPath *webserver_pluginpath*

Web サーバーが使用するプラグインへのパス。このパラメーターのデフォルト値は `install_root/plugins` です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-webServerPort *webserver_port*

Web サーバーにアクセスするときのポートを指定します。このパラメーターのデフォルト値は `80` です。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

-webServerType *webserver_type*

Web サーバーのタイプ。有効な値は、`IHS`、`SUNJAVASYSTEM`、`IIS`、`DOMINO`、`APACHE`、および `HTTPSERVER_ZOS` です。このパラメーターは **webServerOS** パラメーターと併用してください。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

Windows **-winserviceAccountType** *specifieduser | localsystem*

プロファイル用に作成された Windows サービスの所有者アカウントのタイプ。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

有効な値は、`specifieduser` または `localsystem` です。値を `localsystem` とした場合、プロファイルを作成するユーザーのローカル・アカウントで Windows サービスが実行されます。このパラメーターのデフォルト値は `system` です。

Windows **-winserviceCheck** *true | false*

この値は `true` または `false` のいずれかです。プロファイル内に作成されたサー

バー・プロセス用の Windows サービスを作成するには、true を指定してください。Windows サービスを作成しないときは false を指定します。このパラメーターのデフォルト値は false です。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

Windows **-winservicePassword** *winservice_password*

Windows サービスの所有者となる、指定されたユーザーまたはローカル・アカウントのパスワードを指定します。このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

Windows **-winserviceStartupType** *manual | automatic | disabled*

Windows サービスの開始用に指定可能な値は、以下のとおりです。

- manual
- automatic
- disabled

このパラメーターのデフォルト値は automatic です。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

Windows **-winserviceUserName** *winservice_user_ID*

Windows サービスを作成できる ID であることを Windows オペレーティング・システムが確認できるよう、ユーザー ID を指定します。使用するユーザー ID は管理者グループに属していなければならない、次の拡張ユーザー権限を持つ必要があります。

- オペレーティング・システムの一部として振る舞う
- サービスとしてログオン

このパラメーターのデフォルト値は、現在のユーザー名です。このパラメーターの値には、スペースや、*、?、"、<、>、,、/、¥、| などの無効な文字を使用してはなりません。指定するユーザーは、Windows サービスを作成する適切な許可を持つ必要があります。選択したユーザー名の正しいパスワードを指定する必要があります。

このパラメーターは、プロファイルを作成する場合にのみ使用してください。既存のプロファイルを拡張する場合は、このパラメーターを指定しないでください。

プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項

このトピックでは、予約語と、プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名時に考慮すべき問題 (該当する場合) について説明します。

プロファイルの命名の考慮事項

プロファイル名には、固有の名前を付けることができますが、以下の制限があります。プロファイルの名前を付ける際には、以下の文字を使用しないでください。

- スペース
- *, &, または ? など、ご使用のオペレーティング・システムのディレクトリー名に許可されていない特殊文字
- スラッシュ (/) または円記号 (¥)

全角文字は許可されています。

制約事項: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** i5/OS オペレーティング・システムでは、パス名の各コンポーネントの長さを最大 255 文字に制限しています。IBM では、プロファイルのルート・ディレクトリーのパス名はできるだけ短くすることをお勧めします。

ノード、ホスト、セルの命名の考慮事項

予約名: フィールド値として予約済みのフォルダ名を使用しないでください。予約済みフォルダ名を使用すると、予測不能な結果が起こる可能性があります。以下のワードは、予約されています。

- buses
- cells
- nodes
- servers
- clusters
- applications
- deployments

「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」パネルのフィールドの説明: 表 47 では、プロファイル管理ツールの「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」パネルにあるフィールドについて説明します。この表には、フィールド名、デフォルト値、および制約が示されています。プロファイルを作成する場合、この情報をガイドとして使用してください。

表 47. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
スタンドアロン・サーバー・プロファイル			

表 47. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p><i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i></p> <p>ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。 • <i>NodeNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。 	予約名を使用しないでください。	希望の名前を選出してください。システムに複数のサーバーを作成する予定がある場合、インストールを編成するには、固有の名前を使用します。
ホスト名	ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。	ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。	ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。

表 47. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
セル名	<p><i>shortHostName</i> Cell <i>CellNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。 • <i>CellNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。 	<p>デプロイメント・マネージャー・セルに固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティー間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要があるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。ネーム・スペースが統合される場合でも、セル名は固有である必要があります。固有でなければ、 javax.naming.NameNotFoundException 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。このセルは、プロファイル管理ツールの「ノード名、ホスト名、セル名」パネルで指定します。</p>
Deployment manager プロファイル			

表 47. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<p><i>shortHostName</i> Cell <i>ManagerNode</i> <i>Number</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。 • <i>NodeNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。 	<p>デプロイメント・マネージャーの固有の名前を使用します。予約名を使用しないでください。</p>	<p>この名前は、デプロイメント・マネージャー・セル内の管理に使用されます。</p>
ホスト名	<p>ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。予約名を使用しないでください。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>

表 47. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
セル名	<p><i>shortHostName</i> Cell <i>CellNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。 • <i>CellNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。 	<p>デプロイメント・マネージャー・セルに固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティー間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要があるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。ネーム・スペースが統合される場合でも、セル名は固有である必要があります。固有でなければ、 <i>javax.naming.NameNotFoundException</i> 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。このセルは、プロファイル管理ツールの「ノード名、ホスト名、セル名」パネルで指定します。</p>
カスタム・プロファイル			

表 47. ノード、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i> ここで、 • <i>shortHostName</i> は短いホスト名です。 • <i>NodeNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。	予約名を使用しないでください。 デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。	この名前は、カスタム・プロファイルが追加されるデプロイメント・マネージャー・セル内で管理のために使用されます。デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。
ホスト名	ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。	ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。	ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。

ホスト名の考慮事項:

ホスト名は、ノードがインストールされている物理ワークステーションのネットワーク名です。ホスト名は、サーバー上の物理ネットワーク・ノードに解決する必要があります。サーバーが複数のネットワーク・カードを備えている場合は、ホスト名または IP アドレスは、そのネットワーク・カードのいずれか 1 つに解決されなければなりません。リモート・ノードは、ホスト名を使用して、このノードに接続および通信します。

WebSphere Process Server は、インターネット・プロトコル・バージョン 4 (IPv4) およびバージョン 6 (IPv6) の両方に対応しています。管理コンソールなどで IP アドレスを入力できる場所では、どちらの形式で入力しても構いません。ご使用のシステムに IPv6 が実装されている場合は、IP アドレスを IPv6 形式で入力する必要があります。反対に、IPv6 を使用できない環境では、IP アドレスを IPv4 形式で入力してください。IPv6 について詳しくは、IPv6 の公式 Web サイトを参照してください。

以下のガイドラインが、ご使用のマシンに適切なホスト名を付ける場合に役立ちます。

- その他のワークステーションがネットワーク内でアクセスできるホスト名を選択します。
- この値に汎用 ID、localhost を使用しないでください。
- 2 バイト文字セット (DBCS) の文字を使用しているホスト名を持つサーバーには、WebSphere Process Server 製品をインストールしないでください。DBCS 文字は、ホスト名に使用する場合はサポートされていません。

- サーバー名には下線文字 (_) を使用しないようにしてください。インターネット標準では、ドメイン・ネームが Internet Official Protocol Standards の RFC 952 および RFC 1123 に記述されているホスト名の要件に適合するよう定めています。ドメイン・ネームには、文字 (大文字または小文字) および数字のみを使用する必要があります。ただし、名前の末尾にならない限り、ドメイン・ネームにダッシュ文字 (-) を使用してもかまいません。ホスト名では、下線文字 (_) はサポートされていません。サーバー名に下線文字を使用しているサーバーにすでに WebSphere Process Server をインストールした場合、このサーバーにアクセスするには、その名前を変更するまで IP アドレスを使用してアクセスしてください。

同一コンピュータ上に共存している複数のノードを固有の IP アドレスで定義する場合は、ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) のルックアップ・テーブルで、個々の IP アドレスを定義してください。スタンドアロン・サーバーの構成ファイルでは、ネットワーク・アドレスが 1 つしかないワークステーションでの複数 IP アドレスのドメイン・ネーム解決が提供されません。

ホスト名に指定する値は、構成文書で `hostName` プロパティの値として使用されます。次のいずれかの形式で、ホスト名の値を指定してください。

- 完全修飾のドメイン・ネーム・サーバー (DNS) ホスト名ストリング。例えば `xmachine.manhattan.ibm.com` など。
- デフォルトの DNS 短縮ホスト名ストリング。例えば `xmachine` など。
- 数値 IP アドレス。例えば `127.1.255.3` など。

完全修飾 DNS ホスト名には、あいまいなところがなく、しかも柔軟性に富むという利点があります。この柔軟性により、ユーザーは、ホスト・システムの実際の IP アドレスを変更しても、スタンドアロン・サーバー構成を変更する必要がありません。ホスト名のこの値は、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用して IP アドレスを割り当てる際に頻繁に IP アドレスを変更することが予定されている場合には、特に有用です。この形式の欠点は、DNS に依存するということです。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

短縮ホスト名も、動的に解決可能です。ショート・ネーム形式には、ネットワークから切断されたときでもシステムがスタンドアロン・サーバーを実行できるように、ローカルの `hosts` ファイルで再定義されるという機能もあります。`hosts` ファイルの `127.0.0.1` (ローカル・ループバック) に対するショート・ネームを、切断した状態でも実行されるように定義します。ショート・ネーム形式の欠点は、リモート・アクセスでは DNS に依存するということです。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

数値 IP アドレスには、DNS によって名前を解決する必要がないという利点があります。リモート・ノードは、DNS が使用できなくても、数値 IP アドレスを使用して名付けられたノードに接続できます。この形式の欠点は、数値 IP アドレスを使用するとアドレスが固定化されるということです。ワークステーションの IP アドレスを変更したら、構成文書の `hostName` プロパティの設定も必ず変更しなければなりません。したがって、DHCP を使用するか、あるいは IP アドレスを定期的に変更する場合は、数値 IP アドレスを使用しないでください。もう一方の形式の欠点としては、ホストがネットワークから切断されるとノードを使用できないということがあります。

複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド

サーバーに複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用するプロファイルを指定する必要があります。これらのコマンドでは、`-profileName` 属性を使用して、アドレス指定するプロファイルを指定します。コマンドごとに `-profileName` 属性を指定する必要をなくすためには、各プロファイルの `bin` ディレクトリーに存在するバージョンのコマンドを使用します。

WebSphere Process Server の 1 つのインストール済み環境内部で作成する最初のプロファイルがデフォルト・プロファイルになります。デフォルト・プロファイルは、WebSphere Process Server がインストールされているディレクトリーの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。システム上にプロファイルが 1 つしかない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに対して作用します。デフォルト以外のプロファイルをコマンドのターゲットにするには、以下のようにしてコマンドを実行する必要があります。

- 任意のディレクトリーからコマンドを実行する場合は、コマンドの後に `-profileName` 属性と、アドレス指定するプロファイルへの完全修飾パスを指定します。以下に例を示します。

```
startServer -profileName server1
```

- コマンドに対して `-profileName` 属性を指定せずに済むようにするには、アドレス指定するプロファイルの `bin` ディレクトリーに存在するコマンドのバージョンを使用します。i5/OS、Linux、および UNIX プラットフォームの場合のディレクトリーは `profile_root/bin` であり、Windows プラットフォームの場合のディレクトリーは `profile_root\bin` になります。

デフォルト値を使用したプロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、デフォルトの構成設定でプロファイルを作成または拡張する方法について説明します。

始める前に

このセクションの各トピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張中で、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従っていることを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、あるいはカスタム・プロファイルの作成または拡張を選択し、**標準的な**プロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

プロファイルをデフォルト値で構成する場合は、プロファイル管理ツールによって、デフォルト値がポート、プロファイルのロケーション、プロファイル名、ノード、ホスト、セル (該当する場合)、およびすべての必要なデータベース構成に割り当てられます。

スタンドアロン・サーバー・プロファイルについては、プロファイル管理ツールで以下の作業も実行できます。

- 管理コンソールをインストールします。
- 管理セキュリティを有効にします。
- 管理セキュリティを有効にする場合は、サンプル **Business Process Choreographer** 構成を作成します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーの実行用のシステム・サービスを作成します。
- デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各アプリケーションを含む) をインストールします。

デプロイメント・マネージャー・プロファイルでは、オペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合にサーバーを実行するシステム・サービスも、プロファイル管理ツールによって作成されます。

カスタム・プロファイルの場合、プロファイル管理ツールを使用すると、作成または拡張のプロセス時にノードを既存のデプロイメント・マネージャーに統合することができます。また、後で `addNode` コマンドを使用して統合することもできます。

以下のサブトピックでは、プロファイルの構成方法 (プロファイル・タイプによって異なります) について説明します。

- 『デフォルト値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 439 ページの『デフォルト値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 442 ページの『デフォルト値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』

デフォルト値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、デフォルトの構成設定で **WebSphere Process Server** または **WebSphere Enterprise Service Bus** スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張を選択し、**標準的な**プロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

標準的なプロファイル作成または拡張のオプションを選択すると、デフォルト構成設定でプロファイルが作成または拡張されます。このタイプの構成では、プロファイル管理ツールは、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、

ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。管理コンソール およびデフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各アプリケーションを含む) がインストールされます。オプションで、管理セキュリティーを有効にすることができます (セキュリティーが有効になっているプロファイルを拡張するのではない場合です。そのプロファイルを拡張する場合には、プロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力して、それを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張する必要があります)。ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、このツールによってサーバーを実行するためのシステム・サービスが作成されます。Common Event Infrastructure および共通データベースの構成は Derby Embedded に設定されます。

セキュリティーを有効にすると、インストーラーはプロファイルに対してサンプルの Business Process Choreographer 構成を作成します。セキュリティーを有効にしない場合は、このサンプルの構成は作成されません。

制約事項: このスタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合、**標準的な**オプションを使用してプロファイルを作成しないでください。**標準的な**プロファイル作成または拡張で提供されるメッセージング・エンジン・ストレージおよびデータベース・タイプのデフォルト値は、デプロイメント環境のインストールには適していません。代わりに、**拡張**オプションを使用してプロファイルを作成または拡張してください。詳しくは、447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』を参照してください。

207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』または 199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』のいずれかの手順に従うと、「管理セキュリティー」パネルまたは「プロファイルの要約」パネルが表示されます。以下の手順を実行して、新しいスタンドアロン・サーバー・プロファイルをデフォルトの構成値で構成します。

プロシージャ

1. プロファイル管理ツールに表示されるパネルは、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なります。プロファイルを拡張する場合は、セキュリティーがそのプロファイル上で有効になっているかどうかによっても異なります。

実行内容	最初のステップ
「標準的なプロファイル拡張」を実行中で、拡張中のプロファイルで管理セキュリティーが有効になっている場合。	「管理セキュリティー」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。
「標準的なプロファイル拡張」を実行中で、拡張中のプロファイルで管理セキュリティーが有効になっていない場合。	「プロファイルの要約」パネルが表示されます。ステップ 3 (438 ページ) に進んでください。
標準的なプロファイル作成	「管理セキュリティー」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 管理セキュリティーを使用可能にします。

この画面は、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なります。

プロファイルを作成する場合、管理セキュリティをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティをすぐに有効にするには、「**管理セキュリティを使用可能にする**」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名およびパスワードを指定して、「**次へ**」をクリックします。管理セキュリティを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「**セキュリティ**」>「**ビジネス・インテグレーション・セキュリティ**」を選択してください。

重要: プロファイル管理ツールの機能で Business Process Choreographer サンプル構成を作成する場合、管理セキュリティを有効にする必要があります。

プロファイルを拡張しているときにこのパネルが表示される場合、拡張中のプロファイルでセキュリティが有効にされています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

3. 「プロファイルの要約」パネルで、「**作成**」または「**拡張**」をクリックしてプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました**」または「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました**」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成または拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません**」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。361 ページの『ログ・ファイル』にリストされている該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』

- 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
 - 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
 - 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
 - 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
 - 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
 - 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
4. 「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」または「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」、あるいはこの両方を選択します。終了するには、「終了」をクリックします。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。

結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの Websphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイル内のノードには、server1 (Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合) または servername (i5/OS プラットフォームの場合) という名前のサーバーがあり、複数の WebSphere Process Server がインストールされている場合、番号が増えていきます。

次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「サーバーの起動」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー server1 が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3348
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

デフォルト値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、デフォルトの構成値で WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』

または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張を選択し、標準的なプロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

標準的なプロファイル作成または拡張のオプションを選択すると、デフォルト構成設定でプロファイルが作成または拡張されます。このタイプの構成では、プロファイル管理ツールは、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。また、管理コンソールがインストールされます。オプションで、管理セキュリティーを有効にすることができます (セキュリティーが有効になっているプロファイルを拡張するのではない場合です。そのプロファイルを拡張する場合には、プロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力して、それを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張する必要があります)。ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、このツールによってサーバーを実行するためのシステム・サービスが作成されます。共通データベースの構成は、Derby Network Server に設定されます。

207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』または 199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順に従うと、「管理セキュリティー」パネルまたは「プロファイルの要約」パネルが表示されます。以下の手順を実行し、デフォルト値を使用して新規デプロイメント・マネージャー・プロファイルを構成します。

プロシージャ

1. プロファイル管理ツールに表示されるパネルは、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なり、また拡張する場合はプロファイルで管理セキュリティーが有効になっているかどうかによって異なります。

実行内容	最初のステップ
「標準的なプロファイル拡張」を実行中で、拡張中のプロファイルで管理セキュリティーが有効になっている 場合。	「管理セキュリティー」パネルが表示されず。ステップ 2 に進んでください。
「標準的なプロファイル拡張」を実行中で、拡張中のプロファイルで管理セキュリティーが有効になっていない 場合。	「プロファイルの要約」パネルが表示されず。ステップ 3 (441 ページ) に進んでください。
標準的なプロファイル作成	「管理セキュリティー」パネルが表示されず。ステップ 2 に進んでください。

2. 管理セキュリティーを使用可能にします。

この画面は、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なります。

プロファイルを作成する場合、管理セキュリティーをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティーをすぐに有効にするには、「管理セキュリティーを使用可能にする」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名および

パスワードを指定して、「次へ」をクリックします。管理セキュリティーを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティーを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「セキュリティー」>「ビジネス・インテグレーション・セキュリティー」をクリックしてください。

プロファイルを拡張しているときにこのパネルが表示される場合、拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効にされています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

3. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」をクリックしてプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成または拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。361 ページの『ログ・ファイル』にリストされている該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
- 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
- 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
- 351 ページの『iOS インストールのトラブルシューティングのヒント』
- 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
- 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
- 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』

4. 「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」または「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」、あるいはこの両方を選択します。終了するには、「終了」をクリックします。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。
5. ご使用の環境で Business Process Choreographer コンポーネントを使用する場合、それを構成する必要があります。データベース管理者に Business Process Choreographer データベースの作成し、構成してもらうことが必要になる場合があります。

詳しくは、『Business Process Choreographer の構成』にある各トピックを参照してください。

結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Process Server または Websphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server Network Deployment または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイルで定義されたノードには、名前が Dmgr というデプロイメント・マネージャーがあります。

ファースト・ステップ・コンソールから「デプロイメント・マネージャーの始動」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072  
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境の場合には、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画、および WebSphere Process Server で必要とされるデータベースについて詳しくは、『WebSphere Process Server の計画』の各トピックを参照してください。

デフォルト値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成

プロファイル管理ツールを使用して、デフォルト構成値を使用するカスタム・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、カスタム・プロファイルの作成または拡張を選択し、**標準的な**プロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

このタイプの構成では、プロファイル管理ツールによって、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホストの名前にデフォルト値が割り当てられます。ノードは、作成または拡張のプロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーに統合することができますし、後で `addNode` コマンドを使用して統合することもできます。プロファイルを作成または拡張プロセス時に統合することを決定した場合は、このツールによって共通データベースの構成がデプロイメント・マネージャーと同じデータベースに設定されます。統合しないことを決定した場合は、データベースは未構成のままになります。

199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うと、「フェデレーション」パネルが表示されます。以下の手順を実行して、デフォルト値を使用して新規のカスタム・プロファイルを構成します。

プロシージャ

1. 「フェデレーション」パネルで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成または拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成または拡張とは別に後で実行するかを選択します。
 - プロファイル作成または拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティが使用可能になっている場合) を指定します。「**後でこのノードを統合する**」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。次に、「**次へ**」をクリックします。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティで保護されている場合) が検査されます。

重要: 以下の条件すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの作成または拡張時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない。(ノードの統合はシリアライズする必要があります。)
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。

- デプロイメント・マネージャーが WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーである。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーが、作成または拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。

以下の条件のいずれかに該当する場合は、プロファイルの作成または拡張時にカスタム・ノードを統合しないでください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている。(ノードの統合はシリアライズする必要があります。)
- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか不明。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成または拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」をクリックします。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由で使用できないときにカスタム・ノードを統合しようとする、警告パネルが表示されて、続行できなくなります。この警告パネルが表示されたら、「OK」をクリックしてこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」パネルで別の選択を行ってください。

- ノードを後で統合することを選択してプロファイルの作成または拡張とは別に行う場合は、「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。

addNode コマンドを使用してノードを統合する方法については、516 ページの『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。このコマンドについては、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにあるトピック『addNode コマンド』を参照してください。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

2. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」をクリックしてプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成または拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。361 ページの『ログ・ファイル』にリストされている該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
 - 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
 - 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
 - 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
 - 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
 - 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
 - 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
3. 「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」または「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」, あるいはこの両方を選択します。終了するには、「終了」をクリックします。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。

結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server Network Deployment または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

次のタスク

プロファイルの作成または拡張中にプロファイルを統合しなかった場合、ここで統合します。プロファイル内のノードを統合し、デプロイメント・マネージャーを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

カスタマイズした値を使用したプロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、カスタマイズした構成設定でプロファイルを作成または拡張する方法について説明します。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、あるいはカスタム・プロファイルの作成または拡張を選択し、**高度な**プロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

プロファイルをカスタマイズした値で構成する場合、カスタマイズした値をポート、プロファイルのロケーション、プロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前、およびすべての必要なデータベース構成に割り当てることができます。

スタンドアロン・サーバー・プロファイルについては、プロファイル管理ツールで以下の作業も実行できます。

- Common Event Infrastructure を構成します。
- 共通データベースを構成します。
- 管理コンソールをインストールし、Web サーバー定義を作成します。
- 管理セキュリティーを使用可能にします。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーの実行用のシステム・サービスを作成します。
- デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各アプリケーションを含む) および WebSphere Application Server のサンプル・アプリケーションをデプロイします。
- Business Rules Manager を構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成します。

デプロイメント・マネージャー・プロファイルについては、プロファイル管理ツールで以下の作業も実行できます。

- 共通データベースを構成します。
- 管理コンソールをインストールします。
- 管理セキュリティーを使用可能にします。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権でサービスの作成が許可される場合は、サーバーの実行用のシステム・サービスを作成します。

カスタム・プロファイルの場合、プロファイル管理ツールを使用すると、作成または拡張のプロセス時にノードを既存のデプロイメント・マネージャーに統合することができます。また、後で `addNode` コマンドを使用して統合することもできます。

以下のサブトピックでは、プロファイルの構成方法 (プロファイル・タイプによって異なります) について説明します。

- 『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 509 ページの『カスタマイズした値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』

カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、カスタマイズした構成設定で WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

始める前に

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張を選択し、**高度な**プロファイル作成または拡張オプションを選択しているということです。

このタスクについて

高度なオプションを選択することによって、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前などの設定に独自の値を指定することができます。オプションで、管理コンソール、デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含む)、WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションをデプロイするか、Web サーバー定義を作成するかを選択できます。必要に応じて、管理セキュリティーを使用可能にすることができます。ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作

成することができます。 Common Event Infrastructure および共通データベースに独自の構成値を指定し、オプションで Business Rules Manager を構成し、Business Process Choreographer サンプル構成を作成することもできます。

重要: プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合、メッセージング・エンジン用にファイル・ストア・オプションまたは Common Event Infrastructure、Business Process Choreographer、あるいは共通データベース用に Derby Embedded を選択しないでください。ファイル・ストア・オプションおよび Derby Embedded データベースはデプロイメント環境構成では使用できません。

207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』または 199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』のいずれかの手順に従うと、「管理セキュリティー」パネルまたは「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルが表示されます。以下の手順を実行し、新しいスタンドアロン・サーバー・プロファイルをカスタマイズした構成値で構成します。

プロシージャー

1. プロファイル管理ツールに表示されるパネルは、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なります。プロファイルを拡張する場合は、セキュリティーがそのプロファイル上で有効になっているかどうか、および Common Event Infrastructure がシステム上で構成されているかどうかによっても異なります。

実行内容	最初のステップ
WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの高度なプロファイル拡張を実行中で、 <ul style="list-style-type: none"> • 拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効になっている場合。 	「管理セキュリティー」パネルが表示されます。ステップ 5 (450 ページ) に進んでください。
WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの高度なプロファイル拡張を実行中で、 <ul style="list-style-type: none"> • 拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効になっていないで、 • Common Event Infrastructure は、まだシステム上で構成されていない場合。 	「Common Event Infrastructure の構成」パネルが表示されます。ステップ 10 (455 ページ) に進んでください。
WebSphere Process Server プロファイルの高度なプロファイル拡張を実行中で、 <ul style="list-style-type: none"> • 拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効になっていないで、 • Common Event Infrastructure が、既にシステム上で構成されている場合。 	「Business Process Choreographer のサンプル構成」パネルが表示されます。ステップ 11 (455 ページ) に進んでください。
WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの高度なプロファイル拡張を実行中で、 <ul style="list-style-type: none"> • 拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効になっていないで、 • Common Event Infrastructure が、既にシステム上で構成されている場合。 	「データベース構成」パネルが表示されます。ステップ 14 (456 ページ) に進んでください。

実行内容	最初のステップ
高度なプロファイル作成	「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルで、作成するスタンドアロン・サーバー・プロファイル環境にデプロイするアプリケーションを選択して、「次へ」をクリックします。

以下のリストからアプリケーションを選択するには、アプリケーションの横にあるチェック・ボックスを選択したままにします。アプリケーションを選択解除するには、チェック・ボックスのチェックを外します。

- 「管理コンソールのデプロイ (推奨)」: サーバーを管理する Web ベースの管理コンソールをインストールします。
- 「デフォルト・アプリケーションのデプロイ」: Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含むデフォルト・アプリケーションをインストールします。
- 「サンプル・アプリケーションのデプロイ」: WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションをインストールします。WebSphereApplication Server のサンプル・アプリケーションは、実稼働環境へのデプロイメントが推奨されていません。

注: このチェック・ボックスを選択すると、WebSphere Process Server サンプルはデプロイされません。

「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。

3. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: 「プロファイル名およびロケーション」パネルで、以下のステップを実行します。
- a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さ制限などのプロファイルの命名時に考慮する必要がある問題について、427 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。

- **Linux** **UNIX** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、*profile_name* は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- b. 開発環境用に最適化された構成設定値でスタンドアロン・サーバーを作成するには、「**開発テンプレートを使用するサーバーの作成**」チェック・ボックスを選択します。開発テンプレートは起動時間を削減し、サーバーがパワーの面で劣るハードウェア上でも実行できるようにします。このオプションは実動サーバーには使用しないでください。
- c. 「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

マシンで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。マシン上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、435 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- d. 「**次へ**」をクリックします。(「**戻る**」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このパネルが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルが表示されます。

4. 「**高度なプロファイル作成**」の場合のみ: 「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルで、スタンドアロン・サーバー・プロファイルのノード、ホスト、およびセル名を指定するか、またはデフォルトを受け入れて、「**次へ**」をクリックします。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。ノード、ホスト、セルの名前を設定するときに検討しなければならない予約語や問題点については、427 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「管理セキュリティー」パネルが表示されます。

5. 管理セキュリティーを使用可能にします。

この画面は、プロファイルを作成するのか拡張するののかによって異なります。

プロファイルを作成する場合、管理セキュリティーをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティーをすぐに有効にするには、「**管理セキュリティーを使用可能にする**」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユー

ザー名およびパスワードを指定して、「次へ」をクリックします。管理セキュリティを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「セキュリティ」>「ビジネス・インテグレーション・セキュリティ」をクリックしてください。

重要: 11 (455 ページ) のステップで Business Process Choreographer サンプル構成を作成することを計画する場合、管理セキュリティを有効にする必要があります。

2 (449 ページ) のステップで WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションを「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルからデプロイすることを選択した場合、サンプルを実行するためのアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

プロファイルを拡張しているときにこのパネルが表示される場合、拡張中のプロファイルでセキュリティが有効にされています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

次のステップは、以下の条件に応じて異なります。

- プロファイルの作成と拡張のどちらを実行しているか。
- Common Event Infrastructure がすでにシステム上で構成されているか。
- 拡張の場合、プロファイルが WebSphere Process Server と WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルのどちらであるか。

実行内容	次のステップ
WebSphere Process Server プロファイルの高度なプロファイル拡張を実行中で、Common Event Infrastructure が既にシステム上で構成されている場合。	「Business Process Choreographer のサンプル構成」パネルが表示されます。ステップ 11 (455 ページ) に進んでください。
WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの高度なプロファイル拡張を実行中で、Common Event Infrastructure が既にシステム上で構成されている場合。	「データベースの構成」パネルが表示されません。ステップ 14 (456 ページ) に進んでください。
プロファイルの高度なプロファイル拡張を実行中で、Common Event Infrastructure が、まだシステム上で構成されていない場合。	「Common Event Infrastructure の構成」パネルが表示されます。ステップ 10 (455 ページ) に進んでください。
高度なプロファイル作成	「ポート値の割り当て」パネルが表示されます。ステップ 6 に進んでください。

6. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。 2 (449 ページ) のステップの「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネル上

で、管理コンソールをデプロイしないことを選択した場合、管理コンソール・ポートは「ポート値の割り当て」パネル上で使用できません。

以下の条件が満たされる場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」パネルにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」パネルで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **i5/OS** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Linux** **UNIX** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root¥properties¥portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 インフォメーション・センターのトピック

『Updating ports in an existing profile』を参照し、**ws_ant** スクリプトによって `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを `root` (管理者) ユーザーで行っているか、非 `root` ユーザーで行っているかによって異なります。

インストールの内容	次のステップ
Linux プラットフォーム上で、プロファイル管理ツールを <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「Linux サービスの定義」パネルが表示されます。ステップ 8 (453 ページ) に進んでください。
Windows プラットフォーム上で、管理者グループの特権を持っている場合	「Windows サービスの定義」パネルが表示されます。ステップ 7 に進んでください。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「Web サーバー定義」パネルが表示されません。ステップ 9 (454 ページ) に進んでください。

7. **Windows** 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: サーバーを Windows サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」をクリックします。

Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権がある場合にのみ、「Windows サービスの定義」パネルが Windows プラットフォームに表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、**startServer** コマンドによって開始されるサーバー・プロセスに対応す

る Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスの開始を試みます。

重要: 指定のユーザー・アカウントとしてログオンすることを選択する場合は、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および開始タイプ (デフォルトは Automatic) を指定する必要があります。ユーザー ID は、名前にスペースを使用できず、管理者グループに属していて、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」および「オペレーティング・システムの一部として機能」を持つ必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、サービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

「Web サーバー定義」パネルが表示されます。

8. **Linux** 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: サーバーを Linux サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」をクリックします。

「Linux サービスの定義」パネルは、現在のオペレーティング・システムがサポートされるバージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

WebSphere Process Server によって、**startServer** コマンドで開始されたサーバー・プロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startServer** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスの開始を試みます。

デフォルトでは、WebSphere Process Server は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーが root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」パネルは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

「Web サーバー定義」パネルが表示されます。

9. 「詳細プロファイル作成」の場合のみ: Web サーバー定義をすぐにプロファイルに組み込む場合は、以下のステップを実行します。

- a. 「Web サーバー定義を作成する」チェック・ボックスを選択します。
- b. パネル上の Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。
- c. 「第 2 部」パネルの Web サーバーの特性を指定して、「次へ」をクリックします。

Web サーバーを使用して、要求を WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むことも、後で Web サーバーを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus に対して定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を定義する場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」パネル上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus に対して定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイル内に定義する必要があります。

次のステップは、以下の条件に応じて異なります。

- Common Event Infrastructure がすでにシステム上で構成されているか。
- Common Event Infrastructure がすでにシステム上で構成されている場合、作成しているプロファイルが WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルのどちらであるか。

実行内容	次のステップ
WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus プロファイルを作成中で、Common Event Infrastructure が、まだシステム上で構成されていない場合。	「Common Event Infrastructure の構成」パネルが表示されます。ステップ 10 (455 ページ) に進んでください。
WebSphere Process Server プロファイルおよび Common Event Infrastructure の作成は、すでにシステム上で構成されています。	「Business Process Choreographer のサンプル構成」パネルが表示されます。ステップ 11 (455 ページ) に進んでください。

実行内容	次のステップ
WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルを作成中で、Common Event Infrastructure が、既にシステム上で構成されている場合。	「データベースの構成」パネルが表示されません。ステップ 14 (456 ページ) に進んでください。

10. 「Common Event Infrastructure の構成」パネルで、Common Event Infrastructure コンポーネントが使用するデータベースを構成します。

このパネルは、Common Event Infrastructure がまだ構成されていない場合にのみ表示されます。詳細については、458 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成』のトピックを参照してください。「Common Event Infrastructure の構成」パネルと「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルの各フィールドで値の入力を完了したら、このステップに戻ります。

次のステップは、作業対象が WebSphere Process Server と WebSphere Enterprise Bus のいずれのプロファイルであるかによって異なります。

プロファイル・タイプ	次のステップ
WebSphere Process Server	「Business Process Choreographer のサンプル構成」パネルが表示されます。ステップ 11 に進んでください。
WebSphere Enterprise Service Bus	「データベースの構成」パネルが表示されます。ステップ 14 (456 ページ) に進んでください。

11. Business Process Choreographer サンプル構成を作成するかどうかを選択します。

制約事項: 実稼働環境でこのコンポーネントを使用するか、このスタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合は、Business Process Choreographer サンプル構成を作成しないでください。サンプル構成は、開発専用です。実動の設定においてこのコンポーネントをセットアップする方法については、Business Process Choreographer の構成にあるトピックを参照してください。

サンプル構成を作成するには、「**サンプル Business Process Choreographer の構成**」チェック・ボックスを選択し、「次へ」をクリックします。

「ビジネス・ルール・マネージャーの構成」パネルが表示されます。

12. ビジネス・ルール・マネージャーを構成してインストールするかどうか選択してから、「次へ」をクリックします。ビジネス・ルール・マネージャーは、ビジネス・アプリケーションの必要に合わせてビジネス・ルール・テンプレートをカスタマイズする Web アプリケーションです。

次のステップは、プロファイルを作成するのか拡張するのか、および複数のサーバーがシステム上で定義されているかどうかによって異なります。

実行内容	次のステップ
<ul style="list-style-type: none"> プロファイルの作成 プロファイルを拡張しており、システム上で複数のサーバーが定義されていません。 	「データベースの構成」パネルが表示されず。ステップ 14 に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> プロファイルを拡張しており、システム上で複数のサーバー定義されています。 	「Application Scheduler の構成」パネルが表示されます。ステップ 13 に進んでください。

13. 「高度なプロファイル拡張」の場合のみ: 「Application Scheduler の構成」パネルで、ドロップダウン・リストからノード上のサーバーの名前としてデフォルト値の server1 を受け入れて、「次へ」をクリックします。

Application Scheduler コンポーネントについて詳しくは、『Application Scheduler』のトピックを参照してください。

「データベースの構成」パネルが表示されます。

14. 「データベース構成」パネルで、選択した WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Bus コンポーネントで使用する共通データベースを構成します。

詳細については、469 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成』のトピックを参照してください。「データベース構成」情報パネルと「データベース構成 (第 2 部)」情報パネルの各フィールドの入力を完了したら、このステップに戻ります。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

15. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」をクリックしてプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成または拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。361 ページの『ログ・ファイル』にリストされている該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
 - 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
 - 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
 - 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
 - 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
 - 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
 - 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
16. Common Event Infrastructure データベースと共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のいずれかを実行し、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成を完了します。
- プロファイル管理ツールを使用して Common Event Infrastructure および共通データベースの構成が完了した場合、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」、「**別のプロファイルの作成 (Create another profile)**」、またはその両方を選択します。終了するには、「**終了**」をクリックします。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。「**別のプロファイルの作成 (Create another profile)**」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。
 - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を先送りする場合は、以下のステップを実行します。
 - a. ファースト・ステップ・コンソールを起動するチェック・ボックスをクリックし、「**終了**」をクリックしてプロファイル管理ツールを閉じます。
 - b. サイトの標準的なデータベース定義ツールおよび手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集および実行し、event、eventcat、および WPRCSDB の各データベース (システムで別の名前が設定されている場合はこれらに相当するデータベース) を作成するか、作成および構成します。このスクリプトの場所は、以下で指定しました。
 - Common Event Infrastructure データベースの場合: 458 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成』トピックの 2 (459 ページ) のステップ。
 - 共通データベースの場合: 469 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成』トピックの 2 (471 ページ) のステップ。
- また、新規のデータベースまたは既存のデータベース内の新規テーブルを手動で作成することについて説明しているトピックも参照してください。
- Common Event Infrastructure データベース: 『イベント・データベースの構成』とそのサブトピック。

- 共通データベースの場合: 217 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 218 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』。

データベースの構成時に、140 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているように、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

17. ご使用の環境で Business Process Choreographer コンポーネントを使用する予定がある場合、データベース管理者に Business Process Choreographer データベースの作成および構成を依頼する必要がある場合があります。

詳しくは、『Business Process Choreographer の構成』にある各トピックを参照してください。

結果

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイル内のノードが、server1 というサーバーを持つようになりました。

次のタスク

ファースト・ステップ・コンソールから「サーバーの起動」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー server1 が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3348  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

プロファイル管理ツールを使用した Common Event Infrastructure データベースの構成

プロファイル管理ツールでは、各「Common Event Infrastructure の構成」パネル上で指定された値を使用して、このコンポーネントで使用するための新規のローカル・データベースを自動的に作成および構成でき、またスクリプトも生成できるためユーザーやデータベース管理者はこれらの作業を後で実行することができます。インストール済み環境で実際に作業するには、このデータベースを作成および構成する必要があります。(Business Process Choreographer データベースと共通データベースの構成は別々に行います。)

始める前に

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** データベースへの参照では、データベース・コレクションが参照されます。

この手順では、プロファイル管理ツールをすでに開始していて、「高度なプロファイル作成」または「高度なプロファイル拡張」オプションによって、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成または拡張を選択済みであることを前提とします。ここでは、447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックの手順の中で、Common Event Infrastructure データベースを構成するステップです。

このタスクについて

WebSphere Process Server 製品で使用される各種データベースとデータベース・テーブルについて詳しくは、『データベースの選択』を参照してください。

以下のステップに従って、Common Event Infrastructure データベース構成パネルに必要なデータを入力します。

プロシージャ

1. 「データベース製品の選択」フィールドで、使用するデータベース製品を選択するか、またはデフォルト値の Derby Embedded を受け入れます。

以下の項目の中からいずれかを選択します (各項目の後に、それぞれに対応するデータベースを示します)。

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) および Derby Embedded は、ローカルでのみ、i5/OS上のデータベースとして使用できます。Derby Network Server および DB2 for iSeries (ツールボックス) は、ローカルおよびリモートのどちらでも、i5/OS 上で使用できます。リストされたその他すべてのデータベースは、適切なりモート・データベース・ドライバが使用されている場合は、i5/OS 上でのみ、リモート・データベースとして使用できます。

- Derby Embedded (Derby Embedded)
 - Derby Network Server (Derby Network Server)
 - DB2 Universal (DB2 Universal Database)
 - DB2 UDB for z/OS (DB2 UDB for z/OS)
 - DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) (DB2 UDB for iSeries (ツールボックス))
 - **i5/OS** DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) (DB2 UDB for iSeries (ネイティブ))
 - Informix (Informix Dynamic Server)
 - Oracle (Oracle)
 - MSSQL Server (Microsoft SQL Server)
2. プロファイル管理ツールによって作成されるデータベースの作成と構成スクリプトを「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールド内のデフォルトの場所以外の場所に保管するには、「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーのオーバーライド」チェック・ボックスを選択して、「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドに使用する新規の場所を指定します。プロファイル管理ツールに、プロファイルの作成または拡張を自動的に実

行させないことを選択した場合、プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ユーザーまたはデータベース管理者が新規のデータベースとそれに必要なテーブルを作成するために手動で実行できるスクリプトが生成されます。(ステップ 4 で説明しているように、このパネル内の「データベース・スクリプトの実行の遅延」チェック・ボックスを選択して、このデータベースの自動作成と自動構成を実行しないようにします。)

3. データベース名を入力するか、または「データベース名」フィールド内のデフォルト値を受け入れます。

デフォルトのデータベース名は、データベース製品に基づいて異なります。

- event Derby Embedded、Derby Network Server、DB2 Universal Database、DB2 UDB for z/OS、Informix Dynamic Server、および Microsoft SQL Server 用
- *SYSBAS: DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) 用
- **i5/OS** *LOCAL: DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) 用
- orcl Oracle 用

i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** 独立補助ストレージ・プール (IASP: Independent Auxiliary Storage Pool) を使用する i5/OS 上のデータベースの名前は、IASP という名前である可能性があります。

デフォルトの名前がすでに別の WebSphere Process Server プロファイルに関連付けられている場合は、別のデータベース名を使用する必要があります。

4. プロファイル管理ツールでデータベースを自動的に作成および構成しない場合は、「データベース・スクリプトの実行の遅延」チェック・ボックスを選択します。このオプションを選択した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者は、このパネル上の「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定された場所にプロファイル管理ツールによって作成および保管されるスクリプトを手動で実行する必要があります。プロファイル管理ツールを使用するか、または有効なインストール済み環境を手動で作成することによって、このデータベースを作成および構成する必要があります。データベースは、ローカル・ワークステーションとリモート・ワークステーションのいずれかに配置できます。
5. 「データ・ソースのオーバーライド」チェック・ボックスを選択して、指定された有効範囲のすべての既存のイベント・サービス・データ・ソースを除去し、新規のイベント・サービス・データ・ソースを作成します。プロファイルの作成プロセスまたは拡張プロセスでは、常にデータ・ソースが作成されます。このチェック・ボックスを選択せず、別のイベント・サービス・データ・ソースが同じ有効範囲に存在している場合は、イベント・サービス・データ・ソースは作成されません。
6. 「次へ」をクリックします。次のステップは、選択したデータベース製品によって異なり、Derby Embedded を選択した場合は、そのプロファイルに対して管理セキュリティーが使用可能になっているかどうかでも異なります。

選択したデータベース	次のステップ
<ul style="list-style-type: none"> Derby Embedded (プロファイルに対して管理セキュリティが有効でない) 	<p>「Business Process Choreographer の構成」パネルが表示されます。447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』のステップ 10 (455 ページ) に戻ります。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Derby Embedded (プロファイルに対して管理セキュリティが有効) その他すべてのデータベース製品 (プロファイルに対して管理セキュリティが有効または有効でない) 	<p>「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部) (Common Event Infrastructure configuration (Part 2))」パネルが、選択したデータベース製品に固有のフィールドを伴って表示されます。このパネルでの入力方法については、『「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネル』のトピックを参照してください。このパネルの情報入力が完了したら、「次へ」をクリックします。</p>

「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネル:

プロファイル管理ツールの「Common Event Infrastructure の構成」パネルでデータベース製品を選択すると、後続のパネルにより、データベース固有の情報を入力するよう求められます。その「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルのフィールドやデフォルト値は、選択したデータベース製品に応じて若干異なります。例外として、プロファイルのセキュリティを有効にせず、Derby Embedded データベース製品を選択した場合は、このパネルは表示されません。

重要: 前のパネルで「データベース・スクリプトの実行の遅延」チェック・ボックスを選択して、新規データベースの作成を先送りすることを選択する場合でも、このパネルの入力は行う必要があります。このパネルで選択する値は、プロファイル管理ツールにより作成され、前のパネルの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリーに保管されるデータベース構成スクリプトに追加されます。

「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルに入力する方法を決定するには、以下のリストから、ご使用のデータベース製品へのリンクを選択します。

- 462 ページの『Derby Embedded』
- 462 ページの『Derby Network Server』
- 463 ページの『DB2 Universal Database』
- 463 ページの『DB2 UDB for z/OS』
- 465 ページの『DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)』
- **i5/OS** 465 ページの『DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)』
- 466 ページの『Informix』
- 467 ページの『Oracle』
- 468 ページの『Microsoft SQL Server』

「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルの入力が完了したら、「次へ」をクリックします。表示されるパネルは、作成するプロファイルが WebSphere Process Server プロファイルか WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルかに

よって異なります。

表 48. 「Common Event Infrastructure の構成」パネルの後の次のステップ

プロファイル・タイプ	次のステップ
WebSphere Process Server	「Business Process Choreographer の構成」パネルが表示されます。『447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』』のステップ 11 (455 ページ) に戻ります。
WebSphere Enterprise Service Bus	「データベースの構成」パネルが表示されます。『447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』』のステップ 14 (456 ページ) に戻ります。

Derby Embedded

表 49 に、Derby Embedded をデータベース製品として選択する場合に「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 49. Derby Embedded の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

Derby Network Server

表 50 に、Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合に「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 50. Derby Network Server の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	サーバー・ポート番号を入力してください。

DB2 Universal Database

表 51 に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 51. DB2 Universal Database の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	デフォルト値 db2inst1 を受け入れるか、データベースを認証するための正しいユーザー名を入力します。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 (Linux、UNIX、または i5/OS プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code> 、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root¥universalDriver_wbi¥lib</code>) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cu.jar または db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
現在のメンバーを DB2 クライアントとして構成	DB2 インストールがクライアントでありサーバー・インストールではない場合、「現在のメンバーを DB2 クライアントとして構成」チェック・ボックスを選択し、「DB2 ノード名」フィールドに DB2 ノード名を入力します。
DB2 ノード名	「現在のメンバーを DB2 クライアントとして構成」チェック・ボックスを選択した場合のみ必要です。DB2 ノード名を入力してください。1 から 8 文字の長さでなければなりません。

DB2 UDB for z/OS

464 ページの表 52 に、DB2 UDB for z/OS をデータベース製品として選択する場合に「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要がある

フィールドを示します。

表 52. DB2 UDB for z/OS の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 (Linux および UNIX プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code> 、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root¥universalDriver_wbi¥lib</code>) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 5027 を受け入れるか、正しいサーバー・ポート番号を入力します。
データベース・ストレージ・グループ名	データベース・ストレージ・グループ名を入力してください。
データベース・サブシステム名	データベース・サブシステム名を入力してください。
4K バッファー・プール名	4K バッファー・プール名を入力してください。
8K バッファー・プール名	8K バッファー・プール名を入力してください。
16K バッファー・プール名	16K バッファー・プール名を入力してください。
イベント・サービス・データベースのディスク・サイズを指定	データベースのディスク・サイズを指定する場合は、このチェック・ボックスを選択し、「ディスク・サイズ (MB)」フィールドにサイズ (MB) を入力します。
ディスク・サイズ (MB)	「イベント・サービス・データベースのディスク・サイズを指定」チェック・ボックスを選択した場合のみ必要です。データベースのサイズを入力してください (MB 単位)。データベースのサイズは 10 MB 以上でなければなりません。

DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)

表 53 に、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) をデータベース製品として選択する場合に「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 53. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/HTTP/Public/jt400/lib (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 • jt400.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 event を受け入れるか、正しいデータベース・コレクション名を入力します。名前の長さは 1 から 10 文字以下でなければなりません。

DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)

制約事項: **i5/OS** このデータベース構成は、i5/OS にのみ適用されます。

表 54 に、DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) をデータベース製品として選択する場合に「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 54. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

表 54. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>デフォルト値 /QIBM/ProdData/Java400/ext (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • db2_classes.jar <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・コレクション名	<p>デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。</p>

Informix

表 55 に、Informix をデータベース製品として選択する場合に「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 55. Informix の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	データベース・サーバーのインストール・ディレクトリーを入力してください。
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ifxjdbc.jar • ifxjdbcx.jar <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 1526 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

表 55. Informix の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
イベント・サービスのインスタンス名	デフォルト値 <code>ceiinst1</code> を受け入れるか、正しいイベント・サービスのインスタンス名を入力します。

Oracle

表 56 に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 56. Oracle の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのインストール・ディレクトリー	データベース・サーバーのインストール・ディレクトリーを入力してください。(前のパネルで「データベース・スクリプトの実行の遅延」を選択した場合は、このフィールドは表示されません。)
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証する正しいユーザー名を入力してください。この ID は Oracle データベースで SYSDBA 特権およびスキーマ作成権限を持っている必要があります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	ファイル <code>ojdbc14.jar</code> が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>your workstation name</code> を受け入れるか、正しいデータベース・サーバーのホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>1521</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
イベント・サービスのインスタンス名	デフォルト値 <code>ceiinst1</code> を受け入れるか、正しいイベント・サービスのインスタンス名を入力します。
管理ユーザー名	デフォルト値 <code>sys</code> を受け入れるか、正しい管理ユーザー名を入力します。
パスワード	管理ユーザー名のパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

Microsoft SQL Server

表 57 に、Microsoft SQL Server をデータベース製品として選択する場合に「Common Event Infrastructure の構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 57. Microsoft SQL Server の場合の必須の Common Event Infrastructure データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	デフォルト値 <code>ceiuser</code> を受け入れるか、データベースを認証するための正しいユーザー名を入力します。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • <code>sqlserver.jar</code> • <code>base.jar</code> • <code>util.jar</code> <p>また、ファイル <code>spy.jar</code> が、JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーションに対する次の相対ロケーションで使用可能である必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Linux UNIX Linux および UNIX プラットフォームの場合: <code>../spy/spy.jar</code> • Windows Windows プラットフォームの場合: <code>..¥spy¥spy.jar</code> <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・サーバー名	データベース・サーバー名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>1433</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
イベント・サービスのインスタンス名	デフォルト値 <code>ceiinst1</code> を受け入れるか、正しいイベント・サービスのインスタンス名を入力します。
管理ユーザー名	デフォルト値 <code>sa</code> を受け入れるか、正しい管理ユーザー名を入力します。
パスワード	管理ユーザー名のパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。

プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成

選択した WebSphere Process Server コンポーネントでは、共通 データベースというデータベースが操作に必要となります。プロファイル管理ツールは、データベースの構成パネルで指定された値を使用して、既存のローカル・データベースまたはリモート・データベース内にローカルに、このデータベースと必要なテーブルを自動的に作成できます。また、ツールにデータベースまたはテーブルを自動的に作成させないことを選択することもできます。ツールによってスクリプトが生成されるため、ユーザーまたはデータベース管理者は、プロファイルの作成または拡張の後でこれらの機能を手動で実行することができます。インストール済み環境で実際に作業するには、このデータベースを構成する必要があります。(Common Event Infrastructure および Business Process Choreographer コンポーネントのデータベース構成は別々に実行されます。)

始める前に

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** データベースへの参照では、データベース・コレクションが参照されます。

この手順では、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、「高度なプロファイル作成」または「デプロイメント環境プロファイル作成」あるいは「高度なプロファイル拡張」または「デプロイメント環境プロファイル拡張」オプションによって、プロファイルの作成または拡張を選択済みであることを前提とします。以下のうちいずれか 1 つのトピックの手順を実行します。

- 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』

これは、トピックの中で、「データベースの構成」パネルに入力することによって、共通データベースを構成する手順のステップです。

このタスクについて

以下の WebSphere Process Server コンポーネントは、共通データベースを使用します。

- Application Scheduler
- ビジネス・ルール・グループ
- メディエーション
- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- セレクター
- イベント順序付け (ロック・マネージャー)
- Enterprise Service Bus ロガー・メディエーション・プリミティブ
- メッセージング・エンジン (6 (473 ページ) のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。」チェック・ボックスを選択した場合)。

WebSphere Process Server 製品で使用する各種データベースとデータベース・テーブルについて詳しくは、『データベースの選択』を参照してください。

重要: プロファイルの作成または拡張が完了した後で、Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーがプロファイルの作成または拡張時に指定したホストとポートで稼働していることを確認してください。

以下のステップに従って、データベース構成パネルに、必要なデータを入力します。

プロシージャー

1. 「データベース製品の選択」フィールドで、使用するデータベース製品を選択するか、またはデフォルト値の Derby Embedded (スタンドアロン・サーバー・プロファイル用) または Derby Network Server (デプロイメント・マネージャー・プロファイル用) を受け入れます。

制約事項:

- Informix Dynamic Server、Microsoft SQL Server Data Direct、および Microsoft SQL Server Embedded は、デプロイメント環境構成を使用したデプロイメント・マネージャー上ではサポートされません。
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) および Derby Embedded は、ローカルでのみ、i5/OS上のデータベースとして使用できます。Derby Network Server および DB2 for iSeries (ツールボックス) は、ローカルおよびリモートのどちらでも、i5/OS 上で使用できます。ここにリストされたほかのすべてのデータベースは、適切なリモート・データベース・ドライバーが使用されている場合は、i5/OS 上でのみ、リモート・データベースとして使用できます。

以下の項目の中からサポートされるデータベース製品を選択します (各項目の後に、それに対応するデータベースを示します)。

- Derby Embedded (Derby Embedded): スタンドアロン・サーバー・プロファイルのためにのみサポートされています
- Derby Network Server (Derby Network Server)
- DB2 Universal (DB2 Universal Database)
- DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 (DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7)
- DB2 UDB for z/OS V8 (DB2 UDB for z/OS V8)
- DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) (DB2 UDB for iSeries (ツールボックス))
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) (DB2 UDB for iSeries (ネイティブ))
- DB2_CLI (DB2 Call Level Interface)
- Informix (Informix Dynamic Server)
- MSSQL Server Data Direct (Microsoft SQL Server Data Direct)
- MSSQL Server Embedded (Microsoft SQL Server Embedded)
- Oracle 9i (Oracle 9i)
- Oracle 10g (Oracle 10g)

2. プロファイル管理ツールによって作成されるデータベースの作成と構成スクリプトを「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールド内のデフォルトの場所以外の場所に保管するには、「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーのオーバーライド」チェック・ボックスを選択して、「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドに使用する新規の場所を指定します。プロファイル管理ツールに、プロファイルの作成または拡張を自動的に実行させないことを選択した場合、プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ユーザーまたはデータベース管理者が新規のデータベースとそれに必要なテーブルを作成するために手動で実行できるスクリプトが生成されます。(ステップ 5 (472 ページ) で説明しているように、このパネル内の「データベース・スクリプトの実行の遅延」チェック・ボックスを選択して、このデータベースの自動作成と自動構成を実行しないようにします。)
3. 新規のローカル・データベースを作成するか、あるいは既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用するかを、該当のラジオ・ボタンで選択します。
 - 「新規ローカル・データベースの作成」：プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、新しいデータベースと必要なテーブルがローカル・マシンに作成されます。同じ名前のデータベースが別に存在する場合は、手順が失敗します。

制約事項:

- DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7、DB2 UDB for z/OS V8、Oracle 9i、または Oracle 10g のいずれかを使用する場合は、新規データベースを作成できません。このいずれかのデータベースを選択する場合に「新規ローカル・データベースの作成」オプションを選択すると、「次へ」ボタンを選択できません。「データベース構成」パネルで、別の選択を行ってください。
- Derby Embedded または Derby Network Server を使用する場合は、新規のローカル・データベースを作成する必要があります。
- Linux UNIX Windows **Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合**：「既存のデータベースの使用」：プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ローカル・マシンまたはリモート・マシンの既存のデータベースで必要なテーブルが作成されます。

注: i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合**：プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ローカル・マシンまたはリモート・マシンの既存のデータベースが関連付けられます。

新規データベースの作成または既存のデータベースへのテーブルの追加を延期する場合でも、これらのオプションのいずれかを選択する必要があります。データベースの作成と構成を延期するには、5 (472 ページ) のステップで詳しく説明しているように、「新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせます。」チェック・ボックスを選択します。

4. データベース名を入力するか、またはデフォルト値を受け入れます。

i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** 独立補助ストレージ・プール (IASP: Independent Auxiliary Storage Pool) を使用する i5/OS 上のデータベースの名前は、IASP という名前である可能性があります。

デフォルトのデータベース名は、データベース製品に基づいて異なります。

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** *LOCAL DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) 用
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** *SYSBAS DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) 用
- WPRCSDB 他のすべてのデータベース製品用

既存のデータベースを使用する場合は、この名前がそのデータベースの名前と一致していなければなりません。新規データベースを作成する場合、指定した名前が既に別の WebSphere Process Server プロファイルに関連付けられていた場合は、異なるデータベース名を使用する必要があります。

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** これは i5/OS には適用されません。i5/OS 上のすべてのプロファイルで同じデータベース名が使用されます。

5. プロファイル管理ツールにプロファイルの作成または拡張時にローカル・データベースを自動的に作成および構成させないか、または既存のデータベースにテーブルを自動的に作成させない場合は、「**新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせます。**」チェック・ボックスを選択します。このオプションを選択した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者は、このパネル上の「**データベース・スクリプトの出力ディレクトリー**」フィールドで指定された場所にプロファイル管理ツールによって作成および保管されるスクリプトを手動で実行する必要があります。新規の共通データベースの手動での作成および構成、または既存のデータベース内でのテーブルの作成についての説明は、217 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 218 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』を参照してください。

重要: 以下のディレクトリーにあるスクリプトは使用しないでください (変数の *db_type* は、サポートされるデータベース製品を表します)。

- **Linux** **UNIX** `install_root/dbscripts/CommonDB/db_type`
- **Windows** `install_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type`

これらは、プロファイル管理ツールによって更新されていないデフォルトのスクリプトです。

制約事項: このオプションは、Derby Embedded または Derby Network Server 製品を選んだ場合は選択できません。

次のステップは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張する場合とデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成または拡張する場合とで異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
スタンドアロン・サーバー	ステップ 6 (473 ページ) に進んでください。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
デプロイメント・マネージャー	ステップ 8 に進んでください。

6. **スタンドアロン・サーバー・プロファイル場合のみ:** メッセージング・エンジンでファイル・ストアを使用するには、「**メッセージング・エンジン (ME) ではファイル・ストアを使用します。 (Use a file store for Messaging Engines (MEs))**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択すると、メッセージング・エンジンがファイル・ストア上に作成および構成されます (Common Event Infrastructure のメッセージング・エンジンを除きます。このメッセージング・エンジンでは、このオプションを選択しても、Derby Embedded のローカル・データベースが使用されます)。このチェック・ボックスを選択せず、7 のステップで説明されている「**メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。**」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded データベース上に作成および構成されます。Derby Embedded データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。ファイル・ストアについては、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『ファイル・ストア』を参照してください。
7. **スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合:** 「**メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します**」チェック・ボックスを選択して、メッセージング・エンジンで共通データベースを使用します。このチェック・ボックスを選択せず、6 のステップで説明されている「**メッセージング・エンジン (ME) ではファイル・ストアを使用します。 (Use a file store for Messaging Engines (MEs))**」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded データベース上に作成および構成されます。Derby Embedded データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。データ・ストアについては、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『データ・ストア』を参照してください。
- 制約事項:** このオプションは、Derby Embedded 製品を選んだ場合は選択できません。
8. 「次へ」をクリックします。次のステップは、作成または拡張するプロファイルのタイプ、および選択したデータベース製品によって異なります。

選択	次のステップ
スタンドアロン・サーバー・プロファイルおよび Derby Embedded のデフォルト値。	「プロファイルの要約」パネルが表示されます。447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』のステップ 15 (456 ページ) に戻ります。

選択	次のステップ
<ul style="list-style-type: none"> • スタンドアロン・サーバー・プロファイル、および選択したデータベース製品 (Derby Embedded 以外)。 • デプロイメント・マネージャー・プロファイル、および選択したデータベース製品。 	<p>「データベース構成 (第 2 部)」パネルが、選択したデータベース製品に固有のフィールドを伴って表示されます。このパネルでの入力方法については、『共通データベース構成のための「データベース構成 (第 2 部)」パネル』のトピックを参照してください。このパネルの情報入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、有効なデータベース接続が存在することが確認されます。データベース接続が存在していない場合は、続行する前に、データベースを始動するか、指定したパラメーターを変更して、この問題を修正する必要があります。「プロファイルの要約」パネルが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックのステップ 15 (456 ページ) • 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 10 (492 ページ) • 520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 9 (526 ページ)

共通データベース構成のための「データベース構成 (第 2 部)」パネル:

プロファイル管理ツールの「データベースの構成」パネルでデータベース製品を選択すると、後続のパネルにより、データベース固有の情報を入力するよう求められます。(スタンドアロン・サーバー・プロファイルを構成するとき、Derby Embedded を選択した場合、このパネルは表示されません。) このパネル (「データベース構成 (第 2 部)」パネル) のフィールドやデフォルト値は、選択したデータベース製品に応じて若干異なります。

前のパネルで「新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせず」チェック・ボックスを選択して、新規データベースの作成または既存のデータベースへのテーブルの追加を先送りすることを選択する場合でも、このパネルの入力は行う必要があります。このパネルで選択する値は、プロファイル管理ツールにより作成され、前のパネルの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリーに保管されるデータベース構成スクリプトに追加されます。

制約事項: DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7、DB2 UDB for z/OS V8、Oracle 9i、または Oracle 10g のいずれかを使用する場合は、新規データベースを作成できません。このいずれかのデータベースを選択する場合に「新規ローカル・データベースの作成」オプションを選択すると、「次へ」ボタンを選択できません。「データベース構成」パネルで、別の選択を行ってください。

「データベースの構成 (第 2 部)」パネルに入力する方法を調べるには、ご使用のデータベース製品へのリンクを以下のリストから選択します。

- 『Derby Network Server』
- 476 ページの『DB2 Universal Database』
- 477 ページの『DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7』
- 477 ページの『DB2 UDB for z/OS V8』
- 478 ページの『DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)』
- i5/OS 479 ページの『DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)』
- 479 ページの『DB2 CLI』
- 480 ページの『Informix』
- 480 ページの『Microsoft SQL Server Embedded』
- 481 ページの『Microsoft SQL Server Data Direct 』
- 482 ページの『Oracle 9i』
- 482 ページの『Oracle 10g』

重要: スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張していて、Derby Embedded データベース製品を選択した場合、追加のデータベース構成は必要ありません。

「データベース構成 (第 2 部)」パネルの入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、有効なデータベース接続が存在することが確認されます。ツールでエラーが検出される場合は、データベースが稼働中であることを確認するか、接続を正常にするためにパラメーターを変更して、問題を訂正してから続行する必要があります。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。

- 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックのステップ 15 (456 ページ)
- 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 10 (492 ページ)
- 520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 9 (526 ページ)

Derby Network Server

476 ページの表 58 に、Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

重要: データベース製品として Derby Network Server を選択する場合は、プロファイルの作成または拡張が完了した後、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーが必ずプロファイルの作成中に指定したホストおよびポート上で実行するようにしてください。

表 58. Derby Network Server の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1527 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

DB2 Universal Database

表 59 に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 59. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 (Linux、UNIX、または i5/OS プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code> 、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root%universalDriver_wbi%lib</code>) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cu.jar または db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	デフォルト値 4 をそのまま確定するか、正しい JDBC ドライバー・タイプの横にあるラジオ・ボタンを選択します。

表 59. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7

表 60 に、DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 60. DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

DB2 UDB for z/OS V8

478 ページの表 61 に、DB2 UDB for z/OS V8 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 61. DB2 UDB for z/OS V8 の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)

表 62 に、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 62. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/HTTP/Public/jt400/lib (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> • jt400.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

表 62. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォーム:** このデータベース構成は、i5/OS プラットフォームにのみ適用されます。

表 63 に、DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 63. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリ)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/Java400/ext (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 • db2_classes.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

DB2 CLI

480 ページの表 64 に、DB2 CLI をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 64. DB2 CLI の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	db2java.zip ファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

Informix

表 65 に、Informix をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 65. Informix の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • ifxjdbc.jar • ifxjdbcx.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1526 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
イベント・サービスのインスタンス名	正しいイベント・サービスのインスタンス名を入力してください。

Microsoft SQL Server Embedded

481 ページの表 66 に、Microsoft SQL Server Embedded をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 66. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

Microsoft SQL Server Data Direct

表 67 に、Microsoft SQL Server Data Direct をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 67. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • sqlserver.jar • base.jar • util.jar <p>また、ファイル spy.jar が、JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーションに対する次の相対ロケーションで使用可能である必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Linux UNIX ../spy/spy.jar • Windows ..%spy%spy.jar <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

Oracle 9i

表 68 に、Oracle 9i をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 68. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。この ID は Oracle データベースで SYSDBA 特権およびスキーマ作成権限を持っている必要があります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	ファイル ojdbc14.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	OCI または Thin をクリックします。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

Oracle 10g

表 69 に、Oracle 10g をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 69. Oracle 10g の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。この ID は Oracle データベースで SYSDBA 特権およびスキーマ作成権限を持っている必要があります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	ファイル ojdbc14.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	OCI または Thin をクリックします。

表 69. Oracle 10g の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン・サーバー・プロファイルのデプロイメント・マネージャーへの統合

addNode コマンドを使用して、スタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャー・セルに統合する方法を学習します。統合の後に、ノード・プロセス・エージェント・プロセスが作成されます。このノード・エージェントおよびサーバー・プロセスの両方とも、デプロイメント・マネージャーにより管理されます。スタンドアロン・サーバー・プロファイルを統合し、サーバー・アプリケーションをすべて組み込むと、統合動作によりデプロイメント・マネージャーにアプリケーションがインストールされます。スタンドアロン・サーバー・プロファイルは、他に統合されたプロファイルがない場合にのみ統合できます。

始める前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- WebSphere Process Server がインストール済みであり、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーが作成済みである。
- スタンドアロン・サーバー・プロファイルが WebSphere Process Server プロファイルである。WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルであり、それが統合されている場合は、まずそのプロファイルの統合を解除し、WebSphere Process Server プロファイルに拡張してから、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに統合する必要があります。
- スタンドアロン・サーバー・プロファイルが、メッセージング・エンジン用にファイル・ストアも Derby Embedded データ・ストアも使用していない。プロファイル管理ツールで「標準的」オプションを使用してプロファイルを作成した場合、プロファイルはこれらのオプションを使用します。このプロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合することはできません。
- スタンドアロン・サーバーが、リモート・アクセスをサポートするデータベース・ドライバー (Derby Network または Java toolbox JDBC など) を使用している。
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。ここで、*profile_root* はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します。

```
- i5/OS profile_root/bin/startManager
```

```
- Linux UNIX profile_root/bin/startManager.sh
```


- **Windows** `profile_root%bin%startManager.bat`
- スタンドアロン・サーバーが実行されていません。実行されている場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの停止**」を選択するか、または以下のコマンドを入力してそのサーバーを停止します。ここで、`profile_root` はスタンドアロン・サーバー・プロファイルのインストール場所を表します (i5/OS プラットフォームの場合、デフォルトで `/QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer`)。
 - **i5/OS** `profile_root/bin/stopServer`
 - **Linux** **UNIX** `profile_root/bin/stopServer.sh`
 - **Windows** `profile_root%bin%stopServer.bat`
- デプロイメント・マネージャーが、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されている。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- デプロイメント・マネージャーにほかのノードが統合されていません。

重要: 以下の項目のいずれかに該当する場合は、この時点ではスタンドアロン・サーバー・プロファイルを統合しないでください。

- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか不明。
- スタンドアロン・サーバーが実行中、またはそれが停止されているかどうか不明。
- スタンドアロン・サーバーが、リモート・アクセスをサポートするデータベース・ドライバー (Derby Network または Java toolbox JDBC など) を使用しない。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。 WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたスタンドアロン・サーバー・プロファイルと同じか、それより高くない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」を選択します。)
- 別のノードが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている。

デプロイメント・マネージャーが実行されていないとき、または他の理由で使用できないときにスタンドアロン・サーバー・プロファイルを統合すると、プロファイルの統合に失敗し、そのプロファイルが使用不可になります。そのため、同じプロファイル名で別のプロファイルを作成する前に、このスタンドアロン・サーバー・プロファイル・ディレクトリーをプロファイル・リポジトリーの外に移動させる必要があります。

このタスクについて

このタスクを実行する必要があるのは、既存のスタンドアロン・サーバー・プロファイルがあり、Network Deployment が提供する機能 (中央管理またはクラスタリング) をそのサーバーに追加する必要がある場合です。この機能は、既存のスタンドアロン・サーバー・プロファイルに拡張のパスを提供します。ただし、このデプロイメント環境を使用する場合、単一のクラスタ構成に制限されます。単一のクラスタ・パターンの説明については、『デプロイメント環境パターン』を参照してください。

このタスクは、各セルごとに 1 回、そのセルに統合された最初のプロファイルに対してのみ実行します。統合されたノードがそのセルに既にある場合は、このタスクを実行しないでください。既存のスタンドアロン・サーバー・プロファイルがない環境を作成する場合は、カスタム・プロファイルを使用して環境を作成します。カスタム・プロファイルの作成については、198 ページの『プロファイルの作成』を参照してください。

addNode コマンドを使用し、以下の手順を実行してスタンドアロン・サーバー・プロファイルのノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。

プロシージャー

1. 統合するスタンドアロン・サーバー・プロファイルの `bin` ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、プラットフォームに応じて、以下のディレクトリーのいずれかに移動します。ここで、`profile_root` はサーバー・プロファイルのインストール・ロケーションを表します。デフォルトでは、ディレクトリーは `/QIBM/UserData/WebSphere/ProcServer` (i5/OS プラットフォームの場合) です。

- `i5/OS` `profile_root/bin/`
- `Linux` `UNIX` `profile_root/bin`
- `Windows` `profile_root\bin`

2. **addNode** コマンドを実行します。

セキュリティーが無効である場合は、以下のいずれかのコマンドを発行します。ポート・パラメーターはオプションで、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成時にデフォルト・ポート番号を使用した場合は省略できます。

- `i5/OS` `addNode deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -includeapps -includebuses`
- `Linux` `UNIX` `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -includeapps -includebuses`
- `Windows` `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -includeapps -includebuses`

セキュリティーが有効である場合は、以下のいずれかのコマンドを発行します。

- `i5/OS` `addNode deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication -localusername localuserID_for_authentication -localpassword localpassword_for_authentication -includeapps -includebuses`
- `Linux` `UNIX` `./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication -localusername localuserID_for_authentication -localpassword localpassword_for_authentication -includeapps -includebuses`
- `Windows` `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication -localusername localuserID_for_authentication -localpassword localpassword_for_authentication -includeapps -includebuses`

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの統合は成功しています。

```
ADMU0003I: ノード DMNDID2Node02 は正常に統合されました。  
(Node DMNDID2Node02 has been successfully federated.)
```

結果

スタンドアロン・サーバー・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。 **addNode** コマンドおよびそのパラメーターについては、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x のインフォメーション・センターにあるトピック『addNode コマンド』を参照してください。

カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、カスタマイズした構成設定で WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

始める前に

重要: このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成または拡張を選択済みで、**高度な**プロファイル作成または拡張のオプションを選択しているはずです。

このタスクについて

このタイプの構成では、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前などの設定に独自の値を指定することができます。オプションで、管理コンソールをデプロイするかどうか、または管理セキュリティを使用可能にするかどうかを選択できます。ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成することができます。また、独自の構成値を共通データベースに指定することもできます。

207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』または 199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順に従うと、「管理セキュリティ」パネル、「データベース構成」パネル、または「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルが表示されます。以下の手順を実行して、新規デプロイメント・マネージャー・プロファイルをカスタマイズした構成値で構成します。

プロシージャ

1. プロファイル管理ツールに表示されるパネルは、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なり、また拡張する場合はプロファイルで管理セキュリティが有効になっているかどうかによって異なります。

実行内容	最初のステップ
「高度なプロファイル拡張」を実行中で、拡張中のプロファイルで管理セキュリティが有効になっている場合。	「管理セキュリティ」パネルが表示されません。ステップ 5 (489 ページ) に進んでください。

実行内容	最初のステップ
「高度なプロファイル拡張」を実行中で、拡張中のプロファイルで管理セキュリティが有効になっていない場合。	「データベースの構成」パネルが表示されません。ステップ 9 (492 ページ) に進んでください。
高度なプロファイル作成	「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネルで、作成するプロファイル環境に対して管理コンソールをデプロイするかどうかを選択した後、「次へ」を選択します。

管理コンソールとは、サーバーを管理するための Web ベースのツールです。管理コンソールのデプロイを選択するには、「管理コンソールのデプロイ (推奨)」チェック・ボックスが選択されたままにしておきます。選択解除するには、チェック・ボックスをクリアします。

「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。

3. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: 「プロファイル名およびロケーション」パネルで、以下のステップを実行します。
 - a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さ制限などのプロファイルの命名時に考慮する必要がある問題について、427 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトでは、このディレクトリーは以下のロケーションにあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `user_data_root/profiles/profile_name`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root%profiles%profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
- 指定したディレクトリーが空ではない。
- 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
- プロファイルを作成するための十分なスペースがない。

- b. 「**デフォルトにするプロファイル**」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

マシンで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。マシン上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、435 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- c. 「**次へ**」を選択します。(「**戻る**」を選択してプロファイル名を変更した場合、このパネルが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルが表示されます。

- 4. 「**高度なプロファイル作成**」の場合のみ: 「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルで、デプロイメント・マネージャーにノード、ホスト、およびセルの各名前を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「**次へ**」を選択します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。ノードおよびホストの命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、427 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「管理セキュリティー」パネルが表示されます。

- 5. 管理セキュリティーを使用可能にします。

この画面は、プロファイルを作成するのか拡張するののかによって異なります。

プロファイルを作成する場合、管理セキュリティーをすぐに有効にすることも、後で管理コンソールから有効にすることもできます。管理セキュリティーをすぐに有効にするには、「**管理セキュリティーを使用可能にする**」チェック・ボックスを選択したままにし、管理コンソールにログオンするためのユーザー名およびパスワードを指定して、「**次へ**」を選択します。管理セキュリティーを無効にするには、チェック・ボックスのチェックを外します。管理セキュリティーを後で管理コンソールから有効にするには、コンソールを開き、「**セキュリティー**」>「**ビジネス・インテグレーション・セキュリティー**」を選択してください。

プロファイルを拡張しているときにこのパネルが表示される場合、拡張中のプロファイルでセキュリティーが有効にされています。そのプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力する必要があります。

次のステップは、プロファイルを作成するのか拡張するののかによって異なります。

実行内容	次のステップ
高度なプロファイル拡張	「データベースの構成」パネルが表示されま す。ステップ 9 (492 ページ) に進んでくださ い。
高度なプロファイル作成	「ポート値の割り当て」パネルが表示されま す。ステップ 6 に進んでください。

6. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: プロファイルに指定されたポートが
固有であることを確認して、「次へ」を選択します。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されてい
るポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定さ
れたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが
存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。ステップ
2 (488 ページ) の「オプションのアプリケーション・デプロイメント」パネル上
で、管理コンソールをデプロイしないことを選択した場合、管理コンソール・
ポートは「ポート値の割り当て」パネル上で使用できません。

以下の場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプ
ロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」パネルにアクセスするときにポートはツールによって
検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」パネルで行わ
れる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポート
は、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のフ
ァイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/properties/
portdef.props`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`profile_root¥properties¥portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値で
す。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることがで
きます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server Network
Deployment バージョン 6.1 インフォメーション・センターのトピック
『Updating ports in an existing profile』を参照し、**ws_ant** スクリプトによって
`updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを `root` (管
理者) ユーザーで行っているか、非 `root` ユーザーで行っているかによって異な
ります。

インストールの内容	次のステップ
Linux プラットフォーム上で、プロファイル管理ツールを <i>root</i> ユーザーとして実行している場合	「Linux サービスの定義」パネルが表示されます。ステップ 8 (492 ページ) に進んでください。
Windows プラットフォーム上で、管理者グループの特権を持っている場合	「Windows サービスの定義」パネルが表示されます。ステップ 7 に進んでください。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <i>root</i> ユーザーとして実行している場合	「データベースの構成」パネルが表示されます。ステップ 9 (492 ページ) に進んでください。

7. **Windows** Windows プラットフォームの場合: 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: サーバーを Windows サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」を選択します。

Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権がある場合のみ、「Windows サービスの定義」パネルが Windows プラットフォームに表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、**startManager** コマンドによって開始されるサーバー・プロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスの開始を試みます。

重要: 指定のユーザー・アカウントとしてログオンすることを選択する場合は、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および開始タイプ (デフォルトは Automatic) を指定する必要があります。ユーザー ID は、名前にスペースを使用できず、管理者グループに属していて、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」および「オペレーティング・システムの一部として機能」を持つ必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたサーバーは、このサービスがローカル・システム で実行するように構成されている場合、IPv6の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム 変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、サービスはローカル・システム として実行するように設定されます。WebSphere Process Server サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロフ

ファイルの作成時に、WebSphere Process Server サービスが、ローカル・システム の代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

「データベースの構成」パネルが表示されます。

8. **Linux** Linux プラットフォームの場合: 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: サーバーを Linux サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」を選択します。

「Linux サービスの定義」パネルは、現在のオペレーティング・システムがサポートされるバージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

WebSphere Process Server によって、**startManager** コマンドで開始されたサーバー・プロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスの開始を試みます。

デフォルトでは、WebSphere Process Server は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーが root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」パネルは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

「データベースの構成」パネルが表示されます。

9. 「データベース構成」パネルで、選択した製品コンポーネントで使用する共通データベースを構成します。

詳細については、469 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成』のトピックを参照してください。「データベース構成」パネルと「データベース構成 (第 2 部)」パネルの各フィールドへの入力を完了したら、このステップに戻ります。「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

10. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」を選択してプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」を選択してプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成または拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません**」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。361 ページの『ログ・ファイル』にリストされている該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
 - 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
 - 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
 - 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
 - 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
 - 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
 - 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
11. 共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のいずれかを実行し、プロファイル構成を完了します。
- プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成が完了したら、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」または「**別のプロファイルの作成 (Create another profile)**」、あるいはこの両方を選択します。終了するには、「**終了**」を選択します。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。「**別のプロファイルの作成 (Create another profile)**」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。
 - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を先送りした場合は、以下のようになります。
 - a. ファースト・ステップ・コンソールを開始するチェック・ボックスをクリアし、「**終了**」を選択してプロファイル管理ツールを閉じます。
 - b. ここで、ユーザーまたは DBA (データベース管理者) はそのサイトの標準的なデータベース定義ツールおよび手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、WPRCSDB データベース (または、システムで別の名前が設定されている場合はそれに相当す

るデータベース)を作成するか、または作成して構成する必要があります。このスクリプトの場所は、469 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成』トピックの 2 (471 ページ) のステップで指定しました。また、217 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 218 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』にある、新規の共通データベースまたはテーブルを既存の共通データベースに手動で作成する方法について説明している各トピックも参照してください。各データベースの構成が完了したら、140 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているように、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

結果

以下のいずれかが完了しました。

- WebSphere Process Server プロファイルを作成しました。
- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072  
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境の場合には、別のデータベースを作成して構成し、カスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに、計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画、および WebSphere Process Server で必要とされるデータベースについて詳しくは、「*WebSphere Process Server for Multiplatforms* バージョン 6.1 計画」 PDF の『*WebSphere Process Server* の計画』の各トピックを参照してください。または、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.1 オンライン・インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r1mx/>) で、「**WebSphere Process Server** の計画」にナビゲートして各トピックを参照してください。

プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成

選択した WebSphere Process Server コンポーネントでは、共通 データベースというデータベースが操作に必要となります。プロファイル管理ツールは、データベースの構成パネルで指定された値を使用して、既存のローカル・データベースまたはリモート・データベース内にローカルに、このデータベースと必要なテーブルを自

動的に作成できます。また、ツールにデータベースまたはテーブルを自動的に作成させないことを選択することもできます。ツールによってスクリプトが生成されるため、ユーザーまたはデータベース管理者は、プロファイルの作成または拡張の後でこれらの機能を手動で実行することができます。インストール済み環境で実際に作業するには、このデータベースを構成する必要があります。(Common Event Infrastructure および Business Process Choreographer コンポーネントのデータベース構成は別々に実行されます。)

始める前に

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** データベースへの参照では、データベース・コレクションが参照されます。

この手順では、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、「高度なプロファイル作成」または「デプロイメント環境プロファイル作成」あるいは「高度なプロファイル拡張」または「デプロイメント環境プロファイル拡張」オプションによって、プロファイルの作成または拡張を選択済みであることを前提とします。以下のうちいずれか 1 つのトピックの手順を実行します。

- 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』

これは、トピックの中で、「データベースの構成」パネルに入力することによって、共通データベースを構成する手順のステップです。

このタスクについて

以下の WebSphere Process Server コンポーネントは、共通データベースを使用します。

- Application Scheduler
- ビジネス・ルール・グループ
- メディエーション
- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- セレクター
- イベント順序付け (ロック・マネージャー)
- Enterprise Service Bus ロガー・メディエーション・プリミティブ
- メッセージング・エンジン (6 (473 ページ) のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。」チェック・ボックスを選択した場合)。

WebSphere Process Server 製品で使用される各種データベースとデータベース・テーブルについて詳しくは、『データベースの選択』を参照してください。

重要: プロファイルの作成または拡張が完了した後で、Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーがプロファイルの作成または拡張時に指定したホストとポートで稼動していることを確認してください。

以下のステップに従って、データベース構成パネルに、必要なデータを入力します。

プロシージャ

1. 「データベース製品の選択」フィールドで、使用するデータベース製品を選択するか、またはデフォルト値の Derby Embedded (スタンドアロン・サーバー・プロファイル用) または Derby Network Server (デプロイメント・マネージャー・プロファイル用) を受け入れます。

制約事項:

- Informix Dynamic Server、Microsoft SQL Server Data Direct、および Microsoft SQL Server Embedded は、デプロイメント環境構成を使用したデプロイメント・マネージャー上ではサポートされません。
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) および Derby Embedded は、ローカルでのみ、i5/OS上のデータベースとして使用できます。Derby Network Server および DB2 for iSeries (ツールボックス) は、ローカルおよびリモートのどちらでも、i5/OS 上で使用できます。ここにリストされたほかのすべてのデータベースは、適切なりモート・データベース・ドライバが使用されている場合は、i5/OS 上でのみ、リモート・データベースとして使用できます。

以下の項目の中からサポートされるデータベース製品を選択します (各項目の後に、それに対応するデータベースを示します)。

- Derby Embedded (Derby Embedded): スタンドアロン・サーバー・プロファイルのためにのみサポートされています
 - Derby Network Server (Derby Network Server)
 - DB2 Universal (DB2 Universal Database)
 - DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 (DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7)
 - DB2 UDB for z/OS V8 (DB2 UDB for z/OS V8)
 - DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) (DB2 UDB for iSeries (ツールボックス))
 - **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) (DB2 UDB for iSeries (ネイティブ))
 - DB2_CLI (DB2 Call Level Interface)
 - Informix (Informix Dynamic Server)
 - MSSQL Server Data Direct (Microsoft SQL Server Data Direct)
 - MSSQL Server Embedded (Microsoft SQL Server Embedded)
 - Oracle 9i (Oracle 9i)
 - Oracle 10g (Oracle 10g)
2. プロファイル管理ツールによって作成されるデータベースの作成と構成スクリプトを「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールド内のデフォルトの場所以外の場所に保管するには、「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーのオーバーライド」チェック・ボックスを選択して、「データベース・ス

クリプトの出力ディレクトリー」フィールドに使用する新規の場所を指定します。プロファイル管理ツールに、プロファイルの作成または拡張を自動的に実行させないことを選択した場合、プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ユーザーまたはデータベース管理者が新規のデータベースとそれに必要なテーブルを作成するために手動で実行できるスクリプトが生成されます。(ステップ 5 (472 ページ) で説明しているように、このパネル内の「データベース・スクリプトの実行の遅延」チェック・ボックスを選択して、このデータベースの自動作成と自動構成を実行しないようにします。)

3. 新規のローカル・データベースを作成するか、あるいは既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用するかを、該当のラジオ・ボタンで選択します。
 - 「新規ローカル・データベースの作成」：プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、新しいデータベースと必要なテーブルがローカル・マシンに作成されます。同じ名前のデータベースが別に存在する場合は、手順が失敗します。

制約事項:

- DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7、DB2 UDB for z/OS V8、Oracle 9i、または Oracle 10g のいずれかを使用する場合は、新規データベースを作成できません。このいずれかのデータベースを選択する場合に「新規ローカル・データベースの作成」オプションを選択すると、「次へ」ボタンを選択できません。「データベース構成」パネルで、別の選択を行ってください。
- Derby Embedded または Derby Network Server を使用する場合は、新規のローカル・データベースを作成する必要があります。
- **Linux** **UNIX** **Windows** **Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合:** 「既存のデータベースの使用」：プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ローカル・マシンまたはリモート・マシンの既存のデータベースで必要なテーブルが作成されます。

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ローカル・マシンまたはリモート・マシンの既存のデータベースが関連付けられます。

新規データベースの作成または既存のデータベースへのテーブルの追加を延期する場合でも、これらのオプションのいずれかを選択する必要があります。データベースの作成と構成を延期するには、5 (472 ページ) のステップで詳しく説明しているように、「新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせます。」チェック・ボックスを選択します。

4. データベース名を入力するか、またはデフォルト値を受け入れます。

i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** 独立補助ストレージ・プール (IASP: Independent Auxiliary Storage Pool) を使用する i5/OS 上のデータベースの名前は、IASP という名前である可能性があります。

デフォルトのデータベース名は、データベース製品に基づいて異なります。

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** *LOCAL DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) 用
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** *SYSBAS DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) 用
- WPRCSDB 他のすべてのデータベース製品用

既存のデータベースを使用する場合は、この名前がそのデータベースの名前と一致していなければなりません。新規データベースを作成する場合、指定した名前が既に別の WebSphere Process Server プロファイルに関連付けられていた場合は、異なるデータベース名を使用する必要があります。

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** これは i5/OS には適用されません。i5/OS 上のすべてのプロファイルで同じデータベース名が使用されます。

5. プロファイル管理ツールにプロファイルの作成または拡張時にローカル・データベースを自動的に作成および構成させないか、または既存のデータベースにテーブルを自動的に作成させない場合は、「**新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせます。**」チェック・ボックスを選択します。このオプションを選択した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者は、このパネル上の「**データベース・スクリプトの出力ディレクトリー**」フィールドで指定された場所にプロファイル管理ツールによって作成および保管されるスクリプトを手動で実行する必要があります。新規の共通データベースの手動での作成および構成、または既存のデータベース内でのテーブルの作成についての説明は、217 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 218 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』を参照してください。

重要: 以下のディレクトリーにあるスクリプトは使用しないでください (変数の *db_type* は、サポートされるデータベース製品を表します)。

- **Linux** **UNIX** `install_root/dbscripts/CommonDB/db_type`
- **Windows** `install_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type`

これらは、プロファイル管理ツールによって更新されていないデフォルトのスクリプトです。

制約事項: このオプションは、Derby Embedded または Derby Network Server 製品を選んだ場合は選択できません。

次のステップは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張する場合とデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成または拡張する場合とで異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
スタンドアロン・サーバー	ステップ 6 (473 ページ) に進んでください。
デプロイメント・マネージャー	ステップ 8 (473 ページ) に進んでください。

6. **スタンドアロン・サーバー・プロファイル場合のみ:** メッセージング・エンジンでファイル・ストアを使用するには、「**メッセージング・エンジン (ME)**」ではファイル・ストアを使用します。 (**Use a file store for Messaging Engines**)

(MEs))」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択すると、メッセージング・エンジンがファイル・ストア上に作成および構成されます (Common Event Infrastructure のメッセージング・エンジンを除きます。このメッセージング・エンジンでは、このオプションを選択しても、Derby Embedded のローカル・データベースが使用されます)。このチェック・ボックスを選択せず、7 (473 ページ) のステップで説明されている「**メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。**」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded データベース上に作成および構成されます。Derby Embedded データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。ファイル・ストアについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『ファイル・ストア』を参照してください。

7. **スタンドアロン・サーバー・プロファイルのみの場合:** 「**メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します**」チェック・ボックスを選択して、メッセージング・エンジンで共通データベースを使用します。このチェック・ボックスを選択せず、6 (473 ページ) のステップで説明されている「**メッセージング・エンジン (ME) ではファイル・ストアを使用します。(Use a file store for Messaging Engines (MEs))**」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded データベース上に作成および構成されます。Derby Embedded データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。データ・ストアについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『データ・ストア』を参照してください。

制約事項: このオプションは、Derby Embedded 製品を選んだ場合は選択できません。

8. 「次へ」をクリックします。次のステップは、作成または拡張するプロファイルのタイプ、および選択したデータベース製品によって異なります。

選択	次のステップ
スタンドアロン・サーバー・プロファイルおよび Derby Embeddedのデフォルト値。	「プロファイルの要約」パネルが表示されます。447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』のステップ 15 (456 ページ) に戻ります。

選択	次のステップ
<ul style="list-style-type: none"> • スタンドアロン・サーバー・プロファイル、および選択したデータベース製品 (Derby Embedded 以外)。 • デプロイメント・マネージャー・プロファイル、および選択したデータベース製品。 	<p>「データベース構成 (第 2 部)」パネルが、選択したデータベース製品に固有のフィールドを伴って表示されます。このパネルでの入力方法については、474 ページの『共通データベース構成のための「データベース構成 (第 2 部)」パネル』のトピックを参照してください。このパネルの情報入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、有効なデータベース接続が存在することが確認されます。データベース接続が存在していない場合は、続行する前に、データベースを始動するか、指定したパラメーターを変更して、この問題を修正する必要があります。「プロファイルの要約」パネルが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックのステップ 15 (456 ページ) • 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 10 (492 ページ) • 520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 9 (526 ページ)

共通データベース構成のための「データベース構成 (第 2 部)」パネル:

プロファイル管理ツールの「データベースの構成」パネルでデータベース製品を選択すると、後続のパネルにより、データベース固有の情報を入力するよう求められます。(スタンドアロン・サーバー・プロファイルを構成するとき、Derby Embedded を選択した場合、このパネルは表示されません。) このパネル (「データベース構成 (第 2 部)」パネル) のフィールドやデフォルト値は、選択したデータベース製品に応じて若干異なります。

前のパネルで「新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせます」チェック・ボックスを選択して、新規データベースの作成または既存のデータベースへのテーブルの追加を先送りすることを選択する場合でも、このパネルの入力は行う必要があります。このパネルで選択する値は、プロファイル管理ツールにより作成され、前のパネルの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリーに保管されるデータベース構成スクリプトに追加されます。

制約事項: DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7、DB2 UDB for z/OS V8、Oracle 9i、または Oracle 10g のいずれかを使用する場合は、新規データベースを作成できません。このいずれかのデータベースを選択する場合に「新規ローカル・データベースの作成」オプションを選択すると、「次へ」ボタンを選択できません。「データベース構成」パネルで、別の選択を行ってください。

「データベースの構成 (第 2 部)」パネルに入力する方法を調べるには、ご使用のデータベース製品へのリンクを以下のリストから選択します。

- 475 ページの『Derby Network Server』
- 476 ページの『DB2 Universal Database』
- 477 ページの『DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7』
- 477 ページの『DB2 UDB for z/OS V8』
- 478 ページの『DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)』
- **i5/OS** 479 ページの『DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)』
- 479 ページの『DB2 CLI』
- 480 ページの『Informix』
- 480 ページの『Microsoft SQL Server Embedded』
- 481 ページの『Microsoft SQL Server Data Direct 』
- 482 ページの『Oracle 9i』
- 482 ページの『Oracle 10g』

重要: スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張していて、Derby Embedded データベース製品を選択した場合、追加のデータベース構成は必要ありません。

「データベース構成 (第 2 部)」パネルの入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、有効なデータベース接続が存在することが確認されます。ツールでエラーが検出される場合は、データベースが稼働中であることを確認するか、接続を正常にするためにパラメーターを変更して、問題を訂正してから続行する必要があります。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。

- 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックのステップ 15 (456 ページ)
- 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 10 (492 ページ)
- 520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 9 (526 ページ)

Derby Network Server

476 ページの表 58 に、Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

重要: データベース製品として Derby Network Server を選択する場合は、プロファイルの作成または拡張が完了した後、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーが必ずプロファイルの作成中に指定したホストおよびポート上で実行するようにしてください。

表 70. Derby Network Server の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1527 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

DB2 Universal Database

476 ページの表 59 に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 71. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 (Linux、UNIX、または i5/OS プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code> 、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root%universalDriver_wbi%lib</code>) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cu.jar または db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	デフォルト値 4 をそのまま確定するか、正しい JDBC ドライバー・タイプの横にあるラジオ・ボタンを選択します。

表 71. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7

477 ページの表 60 に、DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 72. DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

DB2 UDB for z/OS V8

478 ページの表 61 に、DB2 UDB for z/OS V8 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 73. DB2 UDB for z/OS V8 の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)

478 ページの表 62 に、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 74. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/HTTP/Public/jt400/lib (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> • jt400.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

表 74. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォーム:** このデータベース構成は、i5/OS プラットフォームにのみ適用されます。

479 ページの表 63 に、DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 75. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリ)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/Java400/ext (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 • db2_classes.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

DB2 CLI

480 ページの表 64 に、DB2 CLI をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 76. DB2 CLI の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	db2java.zip ファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

Informix

480 ページの表 65 に、Informix をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 77. Informix の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • ifxjdbc.jar • ifxjdbcx.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1526 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
イベント・サービスのインスタンス名	正しいイベント・サービスのインスタンス名を入力してください。

Microsoft SQL Server Embedded

481 ページの表 66 に、Microsoft SQL Server Embedded をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。




表 78. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

Microsoft SQL Server Data Direct

481 ページの表 67 に、Microsoft SQL Server Data Direct をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 79. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • sqlserver.jar • base.jar • util.jar <p>また、ファイル spy.jar が、JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーションに対する次の相対ロケーションで使用可能である必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> •   ../spy/spy.jar •  ..%spy%spy.jar <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

Oracle 9i

482 ページの表 68 に、Oracle 9i をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 80. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。この ID は Oracle データベースで SYSDBA 特権およびスキーマ作成権限を持っている必要があります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリ)	ファイル ojdbc14.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	OCI または Thin をクリックします。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

Oracle 10g

482 ページの表 69 に、Oracle 10g をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 81. Oracle 10g の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。この ID は Oracle データベースで SYSDBA 特権およびスキーマ作成権限を持っている必要があります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリ)	ファイル ojdbc14.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	OCI または Thin をクリックします。

表 81. Oracle 10g の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

カスタマイズした値を使用したカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成

プロファイル管理ツールを使用して、カスタマイズした構成設定でカスタム・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

始める前に

重要: このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。すなわち、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、カスタム・プロファイルの作成または拡張を選択済みで、**高度な**プロファイル作成またはプロファイル拡張のオプションを選択しているはずで

このタスクについて

このタイプの構成では、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホストの名前などの設定に独自の値を指定することができます。ノードは、作成または拡張のプロセス時に既存のデプロイメント・マネージャーに統合することができますし、後で `addNode` コマンドを使用して統合することもできます。

207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』または 199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順に従うと、「フェデレーション」パネルまたは「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。以下の手順を実行して、新規カスタム・プロファイルをカスタマイズした構成値で構成します。

プロシージャ

1. プロファイル管理ツールに表示されるパネルは、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なります。

実行内容	最初のステップ
高度なプロファイル拡張	「フェデレーション (Federation)」パネルが表示されます。ステップ 4 (511 ページ) に進んでください。
高度なプロファイル作成	「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。ステップ 2 (510 ページ) に進んでください。

2. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: 「プロファイル名およびロケーション」パネルで、以下のステップを実行します。

- a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトでは、このディレクトリーは以下のロケーションにあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `user_data_root/profiles/profile_name`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- b. 「デフォルトにするプロファイル」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

マシンで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。マシン上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、435 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出しますが、指定されたポートを使用する可能性がある他のアプリケーションのポートは検出しません。カスタム・プロファイルを統合すると、**addNode** コマンドは、競合しないポートを使用します。つまり、プロファイルを作成する際にはデフォルトのポート割り当てを使用し、

addNode コマンドでノードを統合する際に、競合しないポートを指定することができます。ポート割り当ては、サーバー上で固有でなければなりません。別のサーバーのサーバー・プロセスは、競合なしで同じポート割り当てを使用することができます。

- c. 「次へ」を選択します。(「戻る」を選択してプロファイル名を変更した場合、このパネルが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード名およびホスト名」パネルが表示されます。

3. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: 「ノード名およびホスト名」パネルで、プロファイルにノード名およびホスト名を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「次へ」を選択します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。ノードおよびホストの命名時に考慮する必要がある予約済みの用語やその他の問題については、427ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「フェデレーション (Federation)」パネルが表示されます。ステップ 4 に進んでください。

4. 「フェデレーション」パネルで、ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合をプロファイルの作成または拡張の一部としてここで実行するか、またはプロファイルの作成または拡張とは別に後で実行するかを選択します。
 - プロファイル作成または拡張の一部としてノードを統合することを選択した場合は、デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワード (デプロイメント・マネージャー上で管理セキュリティが使用可能になっている場合) を指定します。「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択解除されたままにしておきます。次に、「次へ」を選択します。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であること (デプロイメント・マネージャーがセキュリティで保護されている場合) が検査されます。

重要: 以下の項目すべてに該当する場合にのみ、プロファイルの作成または拡張時にカスタム・ノードを統合してください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。
- 他のノードは統合されていない。(ノードの統合はシリアライズする必要があります。)
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。
- デプロイメント・マネージャーが WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーである。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。

- デプロイメント・マネージャーが、作成または拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。

以下の項目のいずれかに該当する場合は、プロファイルの作成または拡張時にカスタム・ノードを統合しないでください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている。(ノードの統合はシリアライズする必要があります。)
- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか不明。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。
- デプロイメント・マネージャーが、作成または拡張するカスタム・プロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルではない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」を選択します。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由で使用できないときにカスタム・ノードを統合しようとする、警告パネルが表示されて、続行できなくなります。この警告パネルが表示されたら、「OK」を選択してこの警告パネルを終了し、「フェデレーション」パネルで別の選択を行ってください。

- ノードを後で統合することを選択してプロファイルの作成または拡張とは別に行う場合は、「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスを選択して、「次へ」を選択します。

addNode コマンドを使用してノードを統合する方法については、516 ページの『カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合』を参照してください。このコマンドについては、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにあるトピック『addNode コマンド』を参照してください。

次のステップは、実行しているプロファイルの作成または拡張のタイプ、および「高度なプロファイル作成」で、プロファイル作成プロセスの一部としてプロファイルを統合することを選択したかどうかによって異なります。

実行内容	次のステップ
<ul style="list-style-type: none"> 「高度なプロファイル作成」で、プロファイルを統合しない 場合 高度なプロファイル拡張 	「データベースの構成」パネルが表示されません。ステップ 6 に進んでください。
<ul style="list-style-type: none"> 「高度なプロファイル作成」で、プロファイルを統合する 場合 	「ポート値の割り当て」パネルが表示されません。ステップ 5 に進んでください。

5. 「高度なプロファイル作成」の場合のみ: プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」を選択します。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。

以下の場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」パネルにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」パネルで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合: `profile_root/properties/portdef.props`
- Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合: `profile_root/properties/portdef.props`
- Windows** Windows プラットフォームの場合: `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、トピック『Updating ports in an existing profile』を参照し、**ws_ant** スクリプトによって `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

「データベースの構成」パネルが表示されます。

6. 「データベースの構成」パネルで、以下を実行します。
- データベース製品を確認します。このカスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーで使用されているデータベースと一致するデータベースが表示されます。このデータベースは、以下のいずれかです (リストから選択できる各項目を示し、その後その項目が表すデータベースを示します)。

- Derby Network Server (Derby Network Server)
 - DB2 Universal Database (DB2 Universal Database)
 - DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 (DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7)
 - DB2 UDB for z/OS V8 (DB2 UDB for z/OS V8)
 - **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合のみ:** DB2UDB for iSeries (ネイティブ) (DB2 UDB for iSeries (ネイティブ))
 - DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) (DB2 UDB for iSeries (ツールボックス))
 - DB2 CLI (DB2 Call Level Interface)
 - Informix (Informix Dynamic Server)
 - MSSQL Server Embedded (Microsoft SQL Server Embedded)
 - MSSQL Server Data Direct (Microsoft SQL Server DataDirect)
 - Oracle 9i (Oracle 9i)
 - Oracle 10g (Oracle 10g)
- b. データベースの JDBC ドライバー・クラス・パス・ファイルのロケーション (ディレクトリー) を指定します。Derby Network Server、DB2 Universal Database、または MSSQL Server Embedded の各デフォルト値を受け入れることができます。
- c. 「次へ」を選択します。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

7. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」を選択してプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」を選択してプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成または拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。361 ページの『ログ・ファイル』にリストされている該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
 - 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
 - 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
 - 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
 - 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
 - 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
 - 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
8. 「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルで、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」または「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」、あるいはこの両方を選択します。終了するには、「終了」を選択します。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。

結果

以下のいずれかが完了しました。

- WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイル内のノードを統合し、管理コンソールを使用してそのノードをカスタマイズするまでは、そのノードは空です。

デプロイメント環境で、データベースを作成して構成し、他のカスタム・プロファイルを作成してそれをご使用のデプロイメント・マネージャーに統合し、サーバーを作成し、ワークロード管理機能が必要な場合はクラスターを作成し、さらに計画したインストール環境に固有のその他のタスクを実行する必要があります。計画した環境では、実行が必要なタスク、およびその実行順序を指示します。

インストールの計画、および WebSphere Process Server で必要とされるデータベースについて詳しくは、「*WebSphere Process Server for Multiplatforms* バージョン 6.1 計画」PDF の『*WebSphere Process Server の計画*』の各トピックを参照してください。または、WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.1 オンライン

ン・インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r1mx/>) で、「**WebSphere Process Server の計画**」にナビゲートして各トピックを参照してください。

カスタム・ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合

addNode コマンドを使用して、カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合する方法について説明します。

始める前に

この手順を実行する前に、以下のことを確認してください。

- WebSphere Process Server がインストール済みであること、および WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーとカスタム・プロファイルが作成済みである。この手順では、カスタム・プロファイルの統合がその作成または拡張中に (プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンドを使用して) 行われていないことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが稼働している。稼働していない場合は、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択するか、以下のコマンドを入力してデプロイメント・マネージャーを始動します。(ここで、`profile_root` はデプロイメント・マネージャー・プロファイルのインストール場所を表します)。
 - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合 (コマンド行から):
`profile_root/bin/startManager`
 - **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/bin/startManager.sh`
 - **Windows** **Windows** プラットフォームの場合 (コマンド行から):
`profile_root%bin%startManager.bat`
- デプロイメント・マネージャーが、WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されている。WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高い。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっている。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がない。

重要: 以下の項目のいずれかに該当する場合は、この時点ではカスタム・ノードを統合しない ください。

- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうか不明。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。 WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成または拡張されたカスタム・プロファイルと同じか、それより高くない。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」を選択します。)
- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。

デプロイメント・マネージャーが実行されていないとき、または他の理由で使用できないときにカスタム・プロファイルを統合すると、プロファイルの統合に失敗し、カスタム・プロファイルが使用不可になります。その場合は、同じプロファイル名で別のカスタム・プロファイルを作成する前に、このカスタム・プロファイル・ディレクトリーをプロファイル・リポジトリーから移動させる必要があります。

このタスクについて

カスタム・ノードをデプロイメント・マネージャーが管理できるように、カスタム・ノードを統合します。 **addNode** コマンドを使用し、以下の処理を実行してカスタム・プロファイルをデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。

プロシージャ

1. 統合するカスタム・プロファイルの bin ディレクトリーに移動します。 コマンド・ウィンドウを開き、プラットフォームに応じて、以下のディレクトリーのいずれかに移動します (ここで、*profile_root* はカスタム・プロファイルのインストール・ロケーションを表します)。
 - **i5/OS** i5/OS プラットフォームの場合 (コマンド行から):
`profile_root/bin`
 - **Linux** **UNIX** Linux および UNIX プラットフォームの場合:
`profile_root/bin`
 - **Windows** Windows プラットフォームの場合 (コマンド行から):
`profile_root\bin`
2. **addNode** コマンドを実行します。 セキュリティーが無効である場合は、以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合 (コマンド行から): `addNode deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合 (コマンド行から): `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port`

セキュリティーが有効である場合は、以下のいずれかのコマンドを発行します。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合 (コマンド行から): `addNode deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`./addNode.sh deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合 (コマンド行から): `addNode.bat deployment_manager_host deployment_manager_SOAP_port -username userID_for_authentication -password password_for_authentication`

出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示されたら、カスタム・プロファイルの統合は成功しています。

```
ADMU00031: ノード DMNDID2Node03 は正常に統合されました。
(Node DMNDID2Node03 has been successfully federated.)
```

結果

カスタム・プロファイルはデプロイメント・マネージャーに統合されました。

addNode コマンドおよびそのパラメーターについては、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1.x のインフォメーション・センターにあるトピック『addNode コマンド』を参照してください。

次のタスク

カスタム・プロファイルを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して、空のノードをカスタマイズします。

デプロイメント環境に対するプロファイルの構成

新規または既存のデプロイメント環境パターンで使用するプロファイルを、カスタマイズした構成設定で作成または拡張する方法について説明します。プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルを構成します。

始める前に

重要: このセクションの各トピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張中で、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従っていることを前提としています。つまり、プロファイル管理ツールを開始済みで、デプロイメント・マネージャー・プ

ロファイルの作成、あるいはカスタム・プロファイルの作成または拡張を選択済みで、「**デプロイメント環境**」プロファイル作成オプションまたはプロファイル拡張オプションを選択しているはずで

このタスクについて

「**デプロイメント環境**」プロファイル作成オプションまたは拡張オプションを選択して、デプロイメント環境に合わせて完全に構成されたプロファイルをセットアップします。このパスは、WebSphere Process Server が動作するために必要なすべてのコンポーネントを構成してインストールします。以下のコンポーネントがこのパスの一環として構成されます。

- Business Process Choreographer
- Common Event Infrastructure
- ビジネス・ルール・マネージャー
- Service Component Architecture

このオプションを選択することによって、カスタマイズした値をポート、プロファイルのロケーション、プロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前、およびすべての必要なデータベース構成に割り当てることもできます。

デプロイメント・マネージャー・プロファイルの場合は、このツールで以下のことも実行できます。

- 管理セキュリティ用の管理ユーザー ID およびパスワードを提供します。
- ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
- インストールに使用するデプロイメント環境パターンを選択します。

カスタム・プロファイルの場合、このツールを使用すれば、定義されたデプロイメント環境パターンがすでに保持された既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合することもできます。また、そのデプロイメント環境に対して定義するクラスターを指定することもできます。

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- **デプロイメント環境パターン** - デプロイメント環境パターンは、デプロイメント環境に含まれるコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。デプロイメント環境パターンは、お客様がデプロイメント環境を最も簡単な方法で作成できるよう支援することを目的とし、大半のビジネス要件を満たせるように設計されています。
- **デプロイメント・パターン内のデプロイメント環境機能** - 堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが特定の IBM 提供のデプロイメント環境パターンまたはカスタム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。この知識は、ニーズに最も合うデプロイメント環境パターンを正しく判別するのに役立ちます。

プロファイルを構成するには、プロファイル・タイプに応じて以下のトピックから選択してください。

- 520 ページの『**デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成**』

- 542 ページの『デプロイメント環境用のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成』

デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成

プロファイル管理ツールを使用して、提供されたパターンに基づいて新規デプロイメント環境で使用するカスタマイズした構成値で WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

始める前に

重要: このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成して、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行していることを前提としています。つまり、プロファイル管理ツールを既に開始していて、デプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成を選択済みで、「**デプロイメント環境**」プロファイル作成オプションを選択しているはずで、「**デプロイメント環境**」オプションを使用した既存のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張はサポートされません。

このタスクについて

「**デプロイメント環境**」プロファイル作成のオプションを選択して、ご使用のデプロイメント環境に対して、完全に構成されたプロファイルをセットアップします。このパスは、WebSphere Process Server が動作するために必要なすべてのコンポーネントを構成してインストールします。以下のコンポーネントがこのパスの一環として構成されます。

- Business Process Choreographer
- Common Event Infrastructure
- ビジネス・ルール・マネージャー
- Service Component Architecture

このタイプの構成では、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前などの設定に独自の値を指定することができます。管理セキュリティ用の管理ユーザー ID とパスワードを指定できます。ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合は、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成することができます。使用するデプロイメント環境パターン、および共通データベースの構成のための独自の値を選択することもできます。

199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順を実行すると、「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。以下の手順を実行して、新規デプロイメント・マネージャー・プロファイルをカスタマイズした構成値でデプロイメント環境に対して構成します。

プロシージャ

1. 「プロファイル名およびロケーション」パネルで、以下のステップを実行します。

- a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトでは、このディレクトリーは以下のロケーションにあります。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`install_root%profiles%profile_name`
- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `user_data_root/profiles/profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- b. 「デフォルトにするプロファイル」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

マシンで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの `bin` ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。マシン上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、435 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- c. 「次へ」を選択します。(「戻る」を選択してプロファイル名を変更した場合、このパネルが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。)

「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルが表示されます。

2. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」パネルで、デプロイメント・マネージャーにノード、ホスト、およびセルの各名前を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「次へ」を選択します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。

ん。ノードおよびホストの命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、427 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「管理セキュリティー」パネルが表示されます。

3. 「管理セキュリティー」パネルで、ユーザー名とパスワードを指定して管理コンソールにログオンし、「次へ」を選択します。

重要: 「デプロイメント環境プロファイル作成」を実行している場合は、管理セキュリティーが必要です。

「ポート値の割り当て」パネルが表示されます。

4. プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」を選択します。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。

以下の場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」パネルにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」パネルで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合:
`profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合:
`profile_root\properties\portdef.props`
- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `profile_root/properties/portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 インフォメーション・センターのトピック『Updating ports in an existing profile』を参照し、**ws_ant** スクリプトによって `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

次のステップは、ご使用のプラットフォーム、およびインストールを root (管理者) ユーザーで行っているか、非 root ユーザーで行っているかによって異なります。

インストールの内容	次のステップ
Linux プラットフォーム上で、プロファイル管理ツールを <i>root</i> ユーザーとして実行している場合	「Linux サービスの定義」パネルが表示されます。ステップ 6 (524 ページ) に進んでください。
Windows プラットフォーム上で、管理者グループの特権を持っている場合	「Windows サービスの定義」パネルが表示されます。ステップ 5 に進んでください。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <i>root</i> ユーザーとして実行している場合	「デプロイメント環境構成」パネルが表示されます。ステップ 7 (524 ページ) に進んでください。

5. **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** サーバーを Windows サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」を選択します。

Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権がある場合にのみ、「Windows サービスの定義」パネルが Windows プラットフォームに表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、**startManager** コマンドによって開始されるサーバー・プロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーを Windows サービスとして構成し、**startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスの開始を試みます。

重要: 指定のユーザー・アカウントとしてログオンすることを選択する場合は、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および開始タイプ (デフォルトは Automatic) を指定する必要があります。ユーザー ID は、名前にスペースを使用できず、管理者グループに属していて、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」および「オペレーティング・システムの一部として機能」を持つ必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたサーバーは、このサービスがローカル・システム で実行するように構成されている場合、IPv6の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム 変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスすることができます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、サービスはローカル・システム として実行するように設定されます。WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時

に、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus の Windows サービスが、ローカル・システム の代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

「デプロイメント環境構成」パネルが表示されます。

6. **Linux** **Linux プラットフォームの場合:** サーバーを Linux サービスとして実行するかどうかを選択して、「次へ」を選択します。

「Linux サービスの定義」パネルは、現在のオペレーティング・システムがサポートされるバージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

WebSphere Process Server によって、**startManager** コマンドで開始されたサーバー・プロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーを Linux サービスとして構成し、**startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスの開始を試みます。

デフォルトでは、WebSphere Process Server は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーが root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」パネルは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

「デプロイメント環境構成」パネルが表示されます。

7. 「デプロイメント環境構成」パネルで、デプロイメント環境に対して、このデプロイメント・マネージャー・プロファイルで使用するパターンを選択します。

以下のパターンのいずれかの隣にあるラジオ・ボタンを選択して、「次へ」を選択します。

- **リモート・メッセージングおよびリモート・サポート - アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、メッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスター、および Common Event Infrastructure とその他のサポート・アプリケーション用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。** このパターンでは、大半のビジネス統合のニーズに適合するセットアップが構成されます。迷う場合は、このパターンを選択してください。
- **リモート・メッセージング - アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスターおよびメッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。** Common Event Infrastructure とその他の

サポート・アプリケーションが、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスター上に構成されます。

- **単一クラスター** - アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスターを定義します。サポート・アプリケーションを持つメッセージング・インフラストラクチャーと **Common Event Infrastructure** の両方がアプリケーション・デプロイメント・クラスター上に構成されます。

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- **デプロイメント環境パターン** - デプロイメント環境パターンは、デプロイメント環境に含まれるコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。デプロイメント環境パターンは、お客様がデプロイメント環境を最も簡単な方法で作成できるよう支援することを目的とし、大半のビジネス要件を満たせるように設計されています。
- **デプロイメント・パターン内のデプロイメント環境機能** - 堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが特定の **IBM** 提供のデプロイメント環境パターンまたはカスタム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。この知識は、ニーズに最も合うデプロイメント環境パターンを正しく判別するのに役立ちます。

「データベースの構成」パネルが表示されます。

8. 「データベース構成」パネルで、**Common Event Infrastructure** データベース、システム・バスのメッセージング・データベース、およびすべての **Business Process Choreographer** 関連のデータベースを含む、すべての **WebSphere Process Server** コンポーネントによって使用される共通データベースを構成します。

これらのコンポーネントに対して共通データベース以外のデータベースを使用する場合は、以下のオプションがあります。

- このデプロイメント環境プロファイルの作成を取り消し、代わりに管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成します。詳しくは、『デプロイメント環境の作成』を参照してください。
- 同じデータベース・ベンダーによって作成された異なるデータベース製品を使用する場合でも、このプロファイルの作成を続行し、後で管理コンソールでデータベース構成を変更できます。JDBC ドライバーとデータ・ソースの構成について詳しくは、**WebSphere Server Network Deployment** バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『**Configuring a JDBC provider and data source**』を参照してください。

詳細については、トピック 469 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成』を参照してください。「データベース構成」情報パネルと「データベース構成 (第 2 部)」情報パネルの各フィールドの入力を完了したら、このステップに戻ります。プロファイル管理ツールによりデータベース構成の選択が検証され、誤りがある場合はメッセージが表示されます。例えば、既に存在するデータベース名を入力して新規データベースの作成を選択した場合は、エラー・メッセージにより、そのデータベースが存在することが通知されます。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

9. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」を選択してプロファイルを作成するか、「戻る」を選択してプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成または拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」：プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。361 ページの『ログ・ファイル』にリストされている該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
 - 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
 - 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
 - 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
 - 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
 - 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
 - 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
10. 共通データベースを手動で構成する必要があるかどうかに応じて、以下のいずれかを実行し、プロファイル構成を完了します。
- プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成が完了したら、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」または「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」、あるいはこの両方を選択します。終了するには、「終了」を選択します。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。「別のプロファイルの作成 (Create another profile)」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。

- 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を先送りした場合は、以下のようにします。
 - a. ファースト・ステップ・コンソールを起動するチェック・ボックスをクリアし、「終了」を選択してプロファイル管理ツールを閉じます。
 - b. ここで、ユーザーまたは DBA (データベース管理者) はそのサイトの標準的なデータベース定義ツールおよび手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、WPRCSDB データベース (または、システムで別の名前が設定されている場合はそれに相当するデータベース) を作成するか、または作成して構成する必要があります。このスクリプトの場所は、469 ページの『プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成』トピックの 2 (471 ページ) のステップで指定しました。217 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 218 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』にある、新規の共通データベースまたはテーブルを既存の共通データベースに手動で作成する方法について説明している各トピックも参照してください。各データベースの構成が完了したら、140 ページの『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているように、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

結果

以下のいずれかが完了しました。

- WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

プロファイル内のノードには、名前が dmgr であるデプロイメント・マネージャーがあります。

デプロイメント・マネージャーを開始する前に、データベースがローカルに配置されている場合でも、データベース・インスタンスが実行されていることを確認します。次に、ファースト・ステップ・コンソールから「**デプロイメント・マネージャーの始動**」を選択して、サーバーが作動することを確認します。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、デプロイメント・マネージャーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: サーバー dmgr が e-ビジネス用にオープン。プロセス ID は 3072
(Server dmgr open for e-business; process id is 3072)
```

デプロイメント環境内にあるカスタム・ノードを構成して、デプロイメント環境パターンを完了させます。

インストールの計画について詳しくは、『WebSphere Process Server の計画』のトピックを参照してください。

プロファイル管理ツールを使用した共通データベースの構成

選択した WebSphere Process Server コンポーネントでは、共通 データベースというデータベースが操作に必要となります。プロファイル管理ツールは、データベースの構成パネルで指定された値を使用して、既存のローカル・データベースまたはリモート・データベース内にローカルに、このデータベースと必要なテーブルを自動的に作成できます。また、ツールにデータベースまたはテーブルを自動的に作成させないことを選択することもできます。ツールによってスクリプトが生成されるため、ユーザーまたはデータベース管理者は、プロファイルの作成または拡張の後でこれらの機能を手動で実行することができます。インストール済み環境で実際に作業するには、このデータベースを構成する必要があります。(Common Event Infrastructure および Business Process Choreographer コンポーネントのデータベース構成は別々に実行されます。)

始める前に

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** データベースへの参照では、データベース・コレクションが参照されます。

この手順では、プロファイル管理ツールをすでに開始しており、「高度なプロファイル作成」または「デプロイメント環境プロファイル作成」あるいは「高度なプロファイル拡張」または「デプロイメント環境プロファイル拡張」オプションによって、プロファイルの作成または拡張を選択済みであることを前提とします。以下のうちいずれか 1 つのトピックの手順を実行します。

- 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』
- 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』
- 520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』

これは、トピックの中で、「データベースの構成」パネルに入力することによって、共通データベースを構成する手順のステップです。

このタスクについて

以下の WebSphere Process Server コンポーネントは、共通データベースを使用しません。

- Application Scheduler
- ビジネス・ルール・グループ
- メディエーション
- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- セレクター
- イベント順序付け (ロック・マネージャー)
- Enterprise Service Bus ロガー・メディエーション・プリミティブ
- メッセージング・エンジン (6 (473 ページ) のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。」チェック・ボックスを選択した場合)。

WebSphere Process Server 製品で使用される各種データベースとデータベース・テーブルについて詳しくは、『データベースの選択』を参照してください。

重要: プロファイルの作成または拡張が完了した後で、Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーがプロファイルの作成または拡張時に指定したホストとポートで稼働していることを確認してください。

以下のステップに従って、データベース構成パネルに、必要なデータを入力します。

プロシージャ

1. 「データベース製品の選択」フィールドで、使用するデータベース製品を選択するか、またはデフォルト値の Derby Embedded (スタンドアロン・サーバー・プロファイル用) または Derby Network Server (デプロイメント・マネージャー・プロファイル用) を受け入れます。

制約事項:

- Informix Dynamic Server、Microsoft SQL Server Data Direct、および Microsoft SQL Server Embedded は、デプロイメント環境構成を使用したデプロイメント・マネージャー上ではサポートされません。
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) および Derby Embedded は、ローカルでのみ、i5/OS上のデータベースとして使用できます。Derby Network Server および DB2 for iSeries (ツールボックス) は、ローカルおよびリモートのどちらでも、i5/OS 上で使用できます。ここにリストされたほかのすべてのデータベースは、適切なりモート・データベース・ドライバーが使用されている場合は、i5/OS 上でのみ、リモート・データベースとして使用できます。

以下の項目の中からサポートされるデータベース製品を選択します (各項目の後に、それに対応するデータベースを示します)。

- Derby Embedded (Derby Embedded): スタンドアロン・サーバー・プロファイルのためにのみサポートされています
- Derby Network Server (Derby Network Server)
- DB2 Universal (DB2 Universal Database)
- DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 (DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7)
- DB2 UDB for z/OS V8 (DB2 UDB for z/OS V8)
- DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) (DB2 UDB for iSeries (ツールボックス))
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) (DB2 UDB for iSeries (ネイティブ))
- DB2_CLI (DB2 Call Level Interface)
- Informix (Informix Dynamic Server)
- MSSQL Server Data Direct (Microsoft SQL Server Data Direct)
- MSSQL Server Embedded (Microsoft SQL Server Embedded)
- Oracle 9i (Oracle 9i)
- Oracle 10g (Oracle 10g)

2. プロファイル管理ツールによって作成されるデータベースの作成と構成スクリプトを「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールド内のデフォルトの場所以外の場所に保管するには、「生成したスクリプト用の宛先ディレクトリーのオーバーライド」チェック・ボックスを選択して、「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドに使用する新規の場所を指定します。プロファイル管理ツールに、プロファイルの作成または拡張を自動的に実行させないことを選択した場合、プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ユーザーまたはデータベース管理者が新規のデータベースとそれに必要なテーブルを作成するために手動で実行できるスクリプトが生成されます。(ステップ 5 (472 ページ) で説明しているように、このパネル内の「データベース・スクリプトの実行の遅延」チェック・ボックスを選択して、このデータベースの自動作成と自動構成を実行しないようにします。)
3. 新規のローカル・データベースを作成するか、あるいは既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用するかを、該当のラジオ・ボタンで選択します。
 - 「新規ローカル・データベースの作成」：プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、新しいデータベースと必要なテーブルがローカル・マシンに作成されます。同じ名前のデータベースが別に存在する場合は、手順が失敗します。

制約事項:

- DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7、DB2 UDB for z/OS V8、Oracle 9i、または Oracle 10g のいずれかを使用する場合は、新規データベースを作成できません。このいずれかのデータベースを選択する場合に「新規ローカル・データベースの作成」オプションを選択すると、「次へ」ボタンを選択できません。「データベース構成」パネルで、別の選択を行ってください。
- Derby Embedded または Derby Network Server を使用する場合は、新規のローカル・データベースを作成する必要があります。
- Linux UNIX Windows **Linux、UNIX、および Windows プラットフォームの場合**：「既存のデータベースの使用」：プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ローカル・マシンまたはリモート・マシンの既存のデータベースで必要なテーブルが作成されます。

注: i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合**：プロファイルの作成または拡張のプロセスによって、ローカル・マシンまたはリモート・マシンの既存のデータベースが関連付けられます。

新規データベースの作成または既存のデータベースへのテーブルの追加を延期する場合でも、これらのオプションのいずれかを選択する必要があります。データベースの作成と構成を延期するには、5 (472 ページ) のステップで詳しく説明しているように、「新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせます。」チェック・ボックスを選択します。

4. データベース名を入力するか、またはデフォルト値を受け入れます。

i5/OS **i5/OS プラットフォームの場合:** 独立補助ストレージ・プール (IASP: Independent Auxiliary Storage Pool) を使用する i5/OS 上のデータベースの名前は、IASP という名前である可能性があります。

デフォルトのデータベース名は、データベース製品に基づいて異なります。

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** *LOCAL DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) 用
- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** *SYSBAS DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) 用
- WPRCSDB 他のすべてのデータベース製品用

既存のデータベースを使用する場合は、この名前がそのデータベースの名前と一致していなければなりません。新規データベースを作成する場合、指定した名前が既に別の WebSphere Process Server プロファイルに関連付けられていた場合は、異なるデータベース名を使用する必要があります。

注: **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** これは i5/OS には適用されません。i5/OS 上のすべてのプロファイルで同じデータベース名が使用されます。

5. プロファイル管理ツールにプロファイルの作成または拡張時にローカル・データベースを自動的に作成および構成させないか、または既存のデータベースにテーブルを自動的に作成させない場合は、「**新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせます。**」チェック・ボックスを選択します。このオプションを選択した場合は、ユーザーまたはデータベース管理者は、このパネル上の「**データベース・スクリプトの出力ディレクトリー**」フィールドで指定された場所にプロファイル管理ツールによって作成および保管されるスクリプトを手動で実行する必要があります。新規の共通データベースの手動での作成および構成、または既存のデータベース内でのテーブルの作成についての説明は、217 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成』または 218 ページの『プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースでのテーブルの作成』を参照してください。

重要: 以下のディレクトリーにあるスクリプトは使用しないでください (変数の `db_type` は、サポートされるデータベース製品を表します)。

- **Linux** **UNIX** `install_root/dbscripts/CommonDB/db_type`
- **Windows** `install_root¥dbscripts¥CommonDB¥db_type`

これらは、プロファイル管理ツールによって更新されていないデフォルトのスクリプトです。

制約事項: このオプションは、Derby Embedded または Derby Network Server 製品を選んだ場合は選択できません。

次のステップは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張する場合とデプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成または拡張する場合とで異なります。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
スタンドアロン・サーバー	ステップ 6 (473 ページ) に進んでください。

作成または拡張するプロファイルのタイプ	次のステップ
デプロイメント・マネージャー	ステップ 8 (473 ページ) に進んでください。

6. **スタンドアロン・サーバー・プロファイル場合のみ:** メッセージング・エンジンでファイル・ストアを使用するには、「メッセージング・エンジン (ME) ではファイル・ストアを使用します。 (Use a file store for Messaging Engines (MEs))」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択すると、メッセージング・エンジンがファイル・ストア上に作成および構成されます (Common Event Infrastructure のメッセージング・エンジンを除きます。このメッセージング・エンジンでは、このオプションを選択しても、Derby Embedded のローカル・データベースが使用されます)。このチェック・ボックスを選択せず、7 (473 ページ) のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します。」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded データベース上に作成および構成されます。Derby Embedded データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。ファイル・ストアについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『ファイル・ストア』を参照してください。
7. **スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合:** 「メッセージング・エンジン (ME) ではこのデータベースを使用します」チェック・ボックスを選択して、メッセージング・エンジンで共通データベースを使用します。このチェック・ボックスを選択せず、6 (473 ページ) のステップで説明されている「メッセージング・エンジン (ME) ではファイル・ストアを使用します。 (Use a file store for Messaging Engines (MEs))」チェック・ボックスも選択しない場合は、メッセージング・エンジンは、デフォルトの Derby Embedded データベース上に作成および構成されます。Derby Embedded データベースは、リモート・ワークステーション上に作成することはできません。データ・ストアについて詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 のインフォメーション・センターにある『データ・ストア』を参照してください。

制約事項: このオプションは、Derby Embedded 製品を選んだ場合は選択できません。

8. 「次へ」をクリックします。次のステップは、作成または拡張するプロファイルのタイプ、および選択したデータベース製品によって異なります。

選択	次のステップ
スタンドアロン・サーバー・プロファイルおよび Derby Embedded のデフォルト値。	「プロファイルの要約」パネルが表示されません。447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』のステップ 15 (456 ページ) に戻ります。

選択	次のステップ
<ul style="list-style-type: none"> • スタンドアロン・サーバー・プロファイル、および選択したデータベース製品 (Derby Embedded 以外)。 • デプロイメント・マネージャー・プロファイル、および選択したデータベース製品。 	<p>「データベース構成 (第 2 部)」パネルが、選択したデータベース製品に固有のフィールドを伴って表示されます。このパネルでの入力方法については、474 ページの『共通データベース構成のための「データベース構成 (第 2 部)」パネル』のトピックを参照してください。このパネルの情報入力が完了したら、「次へ」をクリックします。ツールにより、有効なデータベース接続が存在することが確認されます。データベース接続が存在していない場合は、続行する前に、データベースを始動するか、指定したパラメーターを変更して、この問題を修正する必要があります。「プロファイルの要約」パネルが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックのステップ 15 (456 ページ) • 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 10 (492 ページ) • 520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 9 (526 ページ)

共通データベース構成のための「データベース構成 (第 2 部)」パネル:

プロファイル管理ツールの「データベースの構成」パネルでデータベース製品を選択すると、後続のパネルにより、データベース固有の情報を入力するよう求められます。(スタンドアロン・サーバー・プロファイルを構成するとき、Derby Embedded を選択した場合、このパネルは表示されません。) このパネル (「データベース構成 (第 2 部)」パネル) のフィールドやデフォルト値は、選択したデータベース製品に応じて若干異なります。

前のパネルで「新規または既存のデータベースのデータベース・スクリプトの実行を遅らせます」チェック・ボックスを選択して、新規データベースの作成または既存のデータベースへのテーブルの追加を先送りすることを選択する場合でも、このパネルの入力は行う必要があります。このパネルで選択する値は、プロファイル管理ツールにより作成され、前のパネルの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリーに保管されるデータベース構成スクリプトに追加されます。

制約事項: DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7、DB2 UDB for z/OS V8、Oracle 9i、または Oracle 10g のいずれかを使用する場合は、新規データベースを作成できません。このいずれかのデータベースを選択する場合に「**新規ローカル・データベースの作成**」オプションを選択すると、「**次へ**」ボタンを選択できません。「データベース構成」パネルで、別の選択を行ってください。

「データベースの構成 (第 2 部)」パネルに入力する方法を調べるには、ご使用のデータベース製品へのリンクを以下のリストから選択します。

- 475 ページの『Derby Network Server』
- 476 ページの『DB2 Universal Database』
- 477 ページの『DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7』
- 477 ページの『DB2 UDB for z/OS V8』
- 478 ページの『DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)』
- **i5/OS** 479 ページの『DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)』
- 479 ページの『DB2 CLI』
- 480 ページの『Informix』
- 480 ページの『Microsoft SQL Server Embedded』
- 481 ページの『Microsoft SQL Server Data Direct 』
- 482 ページの『Oracle 9i』
- 482 ページの『Oracle 10g』

重要: スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成または拡張していて、Derby Embedded データベース製品を選択した場合、追加のデータベース構成は必要ありません。

「データベース構成 (第 2 部)」パネルの入力が完了したら、「**次へ**」をクリックします。ツールにより、有効なデータベース接続が存在することが確認されます。ツールでエラーが検出される場合は、データベースが稼働中であることを確認するか、接続を正常にするためにパラメーターを変更して、問題を訂正してから続行する必要があります。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。このパネルへのアクセス元のトピックに応じて、以下のいずれかの手順に戻ります。

- 447 ページの『カスタマイズした値を使用したスタンドアロン・サーバー・プロファイルの構成』トピックのステップ 15 (456 ページ)
- 487 ページの『カスタマイズした値を使用したデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 10 (492 ページ)
- 520 ページの『デプロイメント環境用のデプロイメント・マネージャー・プロファイルの構成』トピックのステップ 9 (526 ページ)

Derby Network Server

476 ページの表 58 に、Derby Network Server をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

重要: データベース製品として Derby Network Server を選択する場合は、プロファイルの作成または拡張が完了した後、データベース・ホストがローカルの場合でも、サーバーが必ずプロファイルの作成中に指定したホストおよびポート上で実行するようにしてください。

表 82. Derby Network Server の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1527 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

DB2 Universal Database

476 ページの表 59 に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 83. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 (Linux、UNIX、または i5/OS プラットフォームの場合は <code>install_root/universalDriver_wbi/lib</code> 、Windows プラットフォームの場合は <code>install_root%universalDriver_wbi%lib</code>) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cu.jar または db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	デフォルト値 4 をそのまま確定するか、正しい JDBC ドライバー・タイプの横にあるラジオ・ボタンを選択します。

表 83. DB2 Universal Database の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7

477 ページの表 60 に、DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 84. DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

DB2 UDB for z/OS V8

478 ページの表 61 に、DB2 UDB for z/OS V8 をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 85. DB2 UDB for z/OS V8 の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • db2jcc.jar • db2jcc_license_cisuz.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
サーバー・ポート	デフォルト値 446 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
データベースの別名	データベースの別名を入力してください。
接続のロケーション	接続のロケーションを入力してください。
ストレージ・グループ名	ストレージ・グループ名を入力してください。

DB2 UDB for iSeries (ツールボックス)

478 ページの表 62 に、DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 86. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/HTTP/Public/jt400/lib (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 <ul style="list-style-type: none"> • jt400.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

表 86. DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) の場合の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

DB2 UDB for iSeries (ネイティブ)

注: **i5/OS** **i5/OS** プラットフォーム: このデータベース構成は、i5/OS プラットフォームにのみ適用されます。

479 ページの表 63 に、DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力する必要があるフィールドを示します。

表 87. DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	デフォルト値 /QIBM/ProdData/Java400/ext (i5/OS プラットフォームの場合) を確定するか、またはシステム上で次のファイルが置かれている場所までブラウズします。 • db2_classes.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	データベース・サーバーのホスト名を入力してください。
データベース・コレクション名	デフォルト値 WPRCSDB をそのまま確定するか、正しいスキーマ名を入力します。指定したデータベース内で命名の競合を防止するために、スキーマ名を指定するときは、その先頭の 3 文字がデータベース内のその他のスキーマ名と重複しないようにしてください。

DB2 CLI

480 ページの表 64 に、DB2 CLI をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 88. DB2 CLI の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	db2java.zip ファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

Informix

480 ページの表 65 に、Informix をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 89. Informix の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • ifxjdbc.jar • ifxjdbcx.jar 指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1526 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
イベント・サービスのインスタンス名	正しいイベント・サービスのインスタンス名を入力してください。

Microsoft SQL Server Embedded

481 ページの表 66 に、Microsoft SQL Server Embedded をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。




表 90. Microsoft SQL Server Embedded の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

Microsoft SQL Server Data Direct

481 ページの表 67 に、Microsoft SQL Server Data Direct をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 91. Microsoft SQL Server Data Direct の場合の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリー)	<p>以下のファイルが格納されているシステム上の場所を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • sqlserver.jar • base.jar • util.jar <p>また、ファイル spy.jar が、JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーションに対する次の相対ロケーションで使用可能である必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> •   ../spy/spy.jar •  ..%spy%spy.jar <p>指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

Oracle 9i

482 ページの表 68 に、Oracle 9i をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 92. Oracle 9i の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。この ID は Oracle データベースで SYSDBA 特権およびスキーマ作成権限を持っている必要があります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリ)	ファイル ojdbc14.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	OCI または Thin をクリックします。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

Oracle 10g

482 ページの表 69 に、Oracle 10g をデータベース製品として選択する場合、「データベースの構成 (第 2 部)」パネルで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 93. Oracle 10g の必須の共通データベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
データベースで認証するユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。この ID は Oracle データベースで SYSDBA 特権およびスキーマ作成権限を持っている必要があります。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのロケーション (ディレクトリ)	ファイル ojdbc14.jar が格納されているシステム上の場所を入力します。指定されたロケーションでファイルが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。
JDBC ドライバー・タイプ	OCI または Thin をクリックします。

表 93. Oracle 10g の必須の共通データベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

デプロイメント環境用のカスタム・プロファイル (管理対象ノード) の構成

プロファイル管理ツールを使用して、既存のデプロイメント環境パターンで使用するカスタマイズした構成値で WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のカスタム・プロファイルを作成および構成する方法について説明します。

始める前に

重要: このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成または拡張し、199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』または 207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』のいずれかの手順に従うことを前提としています。つまり、プロファイル管理ツールをすでに開始していて、カスタム・プロファイルの作成または拡張を選択済みで、**デプロイメント環境**のプロファイル作成またはプロファイル拡張のオプションを選択しているはずです。

このタスクについて

「**デプロイメント環境**」プロファイル作成オプションまたは拡張オプションを選択して、デプロイメント環境に合わせて完全に構成されたプロファイルをセットアップします。このパスは、WebSphere Process Server が動作するために必要なすべてのコンポーネントを構成してインストールします。以下のコンポーネントがこのパスの一環として構成されます。

- Business Process Choreographer
- Common Event Infrastructure
- ビジネス・ルール・マネージャー
- Service Component Architecture

このタイプの構成では、ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホストの名前などの設定に独自の値を指定することができます。デプロイメント環境パターンが既に定義されている既存のデプロイメント・マネージャーにノードを統合する方法を指定する必要があります。また、そのデプロイメント環境に定義するクラスター、および共通データベースの構成用の独自の値を指定することもできます。

207 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』または 199 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの作成』の手順に従うと、「フェデレーション」パネルまたは「プロファイル名およびロケーション」

パネルが表示されます。以下の手順を実行して、新規カスタム・プロファイルをデプロイメント環境用にカスタマイズした構成値で構成します。

プロシージャー

1. プロファイル管理ツールに表示されるパネルは、プロファイルを作成するのか拡張するのかによって異なります。

実行内容	最初のステップ
「デプロイメント環境プロファイル拡張」	「フェデレーション (Federation)」パネルが表示されます。ステップ 4 (544 ページ) に進んでください。
「デプロイメント環境プロファイル作成」	「プロファイル名およびロケーション」パネルが表示されます。ステップ 2 に進んでください。

2. 「デプロイメント環境プロファイル作成」の場合のみ: 「プロファイル名およびロケーション」パネルで、以下のステップを実行します。

- a. プロファイルに固有の名前とディレクトリー・パスを指定するか、またはデフォルト値を受け入れます。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって最上位で区別することができます。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルトでは、このディレクトリーは以下のロケーションにあります。

- **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: `user_data_root/profiles/profile_name`
- **Linux** **UNIX** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `install_root¥profiles¥profile_name`

ここで、`profile_name` は指定した名前です。以下の場合は、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。
 - 指定したディレクトリーが空ではない。
 - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
 - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- b. 「デフォルトにするプロファイル」チェック・ボックスを選択して、作成するプロファイルをデフォルト・プロファイルにする (コマンドが自動的にこのプロファイルを処理するようにする) こともできます。このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

マシンで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。

デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。マシン上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、435 ページの『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出しますが、指定されたポートを使用する可能性がある他のアプリケーションのポートは検出しません。カスタム・プロファイルを統合すると、**addNode** コマンドは、競合しないポートを使用します。つまり、プロファイルを作成する際にはデフォルトのポート割り当てを使用し、**addNode** コマンドでノードを統合する際に、競合しないポートを指定することができます。ポート割り当ては、サーバー上で固有でなければなりません。別のサーバーのサーバー・プロセスは、競合なしで同じポート割り当てを使用することができます。

- c. 「次へ」を選択します。（「戻る」を選択してプロファイル名を変更した場合、このパネルが再表示されたときに、このパネルで手動で名前を変更しなければならないことがあります。）

「ノード名およびホスト名」パネルが表示されます。

3. 「**デプロイメント環境プロファイル作成**」の場合のみ: 「ノード名およびホスト名」パネルで、プロファイルにノード名およびホスト名を指定するか、またはデフォルト値を受け入れて「次へ」を選択します。ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。ノードおよびホストの命名時に考慮する必要がある予約済みの用語やその他の問題については、427 ページの『プロファイル、ノード、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

「フェデレーション (Federation)」パネルが表示されます。

4. 「フェデレーション」パネルで、プロファイルの作成または拡張の一部として、ここでノードをデプロイメント・マネージャーに統合する必要があります。デプロイメント・マネージャーのホスト名または IP アドレスと SOAP ポート、および認証ユーザー ID とパスワードを指定します。次に、「次へ」を選択します。

デプロイメント・マネージャーの SOAP ポート番号を確認するには、*profile_root/logs/* 下でそのデプロイメント・マネージャーの *AboutThisProfile.txt* ファイルを開き、「SOAP connector port」の値を調べます。

重要: 「後でこのノードを統合する」チェック・ボックスは、このタイプのプロファイルの作成または拡張用の「フェデレーション」パネル上には表示されません。

プロファイル管理ツールによって、デプロイメント・マネージャーが存在し、通信が可能であること、および認証ユーザー ID とパスワードがそのデプロイメント・マネージャーに有効であることが検査されます。また、有効なデプロイメン

ト環境がデプロイメント・マネージャー上に定義されていることも検査され、パターンとデータベース・タイプがデプロイメント・マネージャーから取得されま
す。

重要: 以下の項目のいずれかに該当する場合は、ノードを統合しないでください。

- このカスタム・ノードをマイグレーション・ターゲットとして使用する予定がある。
- 別のプロファイルが統合されている。(ノードの統合はシリアルライズする必要があります。)
- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうかが不明。
- そのデプロイメント・マネージャーは、まだ WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーに拡張されていない。 WebSphere Process Server プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用できませんが、WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルは WebSphere Process Server デプロイメント・マネージャーを使用できます。
- デプロイメント・マネージャーが、作成または拡張しているカスタム・プロファイルよりも低いリリース・レベルにある。
- デプロイメント・マネージャーで、JMX 管理ポートが有効になっていない。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクタとして使用するよう再構成されている。(優先コネクタ・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理」>「デプロイメント・マネージャー」>「管理サービス」を選択します。)

デプロイメント・マネージャーが実行中でないとき、またはほかの理由で使用できないときにカスタム・ノードを統合しようとする、警告パネルが表示されて、続行できなくなります。この警告パネルが表示されたら、「OK」を選択してこの警告パネルを終了し、プロファイルの作成または拡張を取り消し、システムに必要な変更を行ってください。

次のステップは、プロファイルを作成するのか拡張するのによって異なります。

実行内容	次のステップ
「デプロイメント環境プロファイル作成」	「ポート値の割り当て」パネルが表示されます。ステップ 5 に進んでください。
「デプロイメント環境プロファイル拡張」	「デプロイメント環境構成」パネルが表示されます。ステップ 6 (546 ページ) に進んでください。

5. 「デプロイメント環境プロファイル作成」の場合のみ: プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認して、「次へ」を選択します。

プロファイル管理ツールは、ほかの WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定され

たポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。

以下の場合、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーによって実行されたインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている場合。
- ポートが現在使用中の場合。

「ポート値の割り当て」パネルにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」パネルで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポート競合が疑われる場合、プロファイルの作成後に調査できます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **i5/OS** **i5/OS プラットフォームの場合:** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Linux** **UNIX** **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** **Windows プラットフォームの場合:** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.1 インフォメーション・センターのトピック『Updating ports in an existing profile』を参照し、**ws_ant** スクリプトによって `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

「デプロイメント環境構成」パネルが表示されます。

6. 「デプロイメント環境構成」パネルで、少なくとも 1 つのクラスターを選択し、このノードをデプロイメント環境パターンに割り当て、「次へ」を選択します。デプロイメント・マネージャーで前に定義されたデプロイメント環境パターンに基づいて、以下のクラスターが 1 つから 3 つ、パネルに表示されます。

表 94. 既存のデプロイメント・マネージャー上のデプロイメント環境パターンによって提供されるクラスター

デプロイメント・マネージャーのデプロイメント環境パターン	提供されるクラスター
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	<ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメントのターゲット - ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要がある 1 つのクラスターから構成されます。 • メッセージング・インフラストラクチャー - メッセージング・エンジンが配置されている 1 つのクラスターから構成されます。 • サポート・インフラストラクチャー - システムの管理に使用される Common Event Infrastructure サーバーおよびその他の各種インフラストラクチャー・サービスをホストする 1 つのクラスターから構成されます。
リモート・メッセージング	<ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメントのターゲット - ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要がある 1 つのクラスターから構成されます。リモート・メッセージングのデプロイメント環境パターンを使用すると、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスターは、サポート・インフラストラクチャー・クラスターの機能も果たします。 • メッセージング・インフラストラクチャー - バス・メンバーが配置されている 1 つのクラスターから構成されます。
単一クラスター	<ul style="list-style-type: none"> • アプリケーション・デプロイメントのターゲット - ユーザー・アプリケーションをデプロイする必要がある 1 つのクラスターから構成されます。単一クラスターのデプロイメント環境パターンを使用すると、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスターは、メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターおよびサポート・インフラストラクチャー・クラスターの機能も果たします。

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- **デプロイメント環境パターン** - デプロイメント環境パターンは、デプロイメント環境に含まれるコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。デプロイメント環境パターンは、お客様がデプロイメント環境を最も簡単な方法で作成できるよう支援することを目的とし、大半のビジネス要件を満たせるように設計されています。

- デプロイメント・パターン内のデプロイメント環境機能 - 堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが特定の IBM 提供のデプロイメント環境パターンまたはカスタム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。この知識は、ニーズに最も合うデプロイメント環境パターンを正しく判別するのに役立ちます。

「データベースの構成」パネルが表示されます。

7. 「データベース構成」パネルで、以下の手順を実行します。

- a. データベース製品を確認します。このカスタム・プロファイルの統合先のデプロイメント・マネージャーで使用されているデータベースと一致するデータベースが表示されます。このデータベースは、以下のいずれかです (リストから選択できる各項目を示し、その後その項目が表すデータベースを示します)。
 - Derby Network Server (Derby Network Server)
 - DB2 Universal Database (DB2 Universal Database)
 - DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7 (DB2 UDB for z/OS および OS/390 V7)
 - DB2 UDB for z/OS V8 (DB2 UDB for z/OS V8)
 - **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合: DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) (DB2 UDB for iSeries (ネイティブ))
 - DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) (DB2 UDB for iSeries (ツールボックス))
 - DB2 CLI (DB2 Call Level Interface)
 - Oracle 9i (Oracle 9i)
 - Oracle 10g (Oracle 10g)

注: **i5/OS** **i5/OS** プラットフォームの場合のみ: DB2 UDB for iSeries (ネイティブ) は、i5/OS プラットフォーム上でローカルにアクセスすることができます。Derby Network Server および DB2 UDB for iSeries (ツールボックス) は、ローカルおよびリモートでアクセスすることができます。リスト内の他のすべてのデータベースも i5/OS システムで引き続き使用できますが、リモート・データベースとしてのみ使用できます。

- b. データベースの JDBC ドライバー・クラス・パス・ファイルのロケーション (ディレクトリー) を指定します。Derby Network Server および DB2 Universal Database の各デフォルト値を受け入れることができます。
- c. 「次へ」を選択します。

「プロファイルの要約」パネルが表示されます。

8. 「プロファイルの要約」パネルで、「作成」または「拡張」を選択してプロファイルを作成または拡張するか、あるいは「戻る」を選択してプロファイルの特性を変更します。

プロファイルの作成または拡張が完了すると、「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました」または「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました」というメッセージが表示されます。

重要: プロファイルの作成または拡張中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません**」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。361 ページの『ログ・ファイル』にリストされている該当するログ・ファイルの説明を参照してください。

トラブルシューティングに役立つ情報は以下のトピックにも記載されています。

- 345 ページの『第 15 章 インストールおよび構成のトラブルシューティング』
 - 349 ページの『Launchpad アプリケーションのトラブルシューティング』
 - 350 ページの『サイレント・インストールのトラブルシューティング』
 - 351 ページの『i5/OS インストールのトラブルシューティングのヒント』
 - 353 ページの『失敗した Ant 構成スクリプトの診断』
 - 354 ページの『メッセージ: インストールおよびプロファイル作成』
 - 365 ページの『プロファイルの作成または拡張時の障害からのリカバリー』
9. 「プロファイル完了 (Profile complete)」パネルで、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」または「**別のプロファイルの作成 (Create another profile)**」、あるいはこの両方を選択します。終了するには、「**終了**」を選択します。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。「**別のプロファイルの作成 (Create another profile)**」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。「**別のプロファイルの作成 (Create another profile)**」オプションを使用してプロファイル管理ツールを再始動し、追加のプロファイルを作成します。

結果

以下のいずれかが完了しました。

- WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルの作成。
- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの WebSphere Process Server プロファイルへの拡張。

- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

次のタスク

デプロイメント・マネージャーを使用して、ノードをカスタマイズします。割り当てられていないクラスター・メンバーがある場合は、カスタム・ノードをさらに追加することができます。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711
東京都港区六本木 3-2-12
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
577 Airport Blvd., Suite 800
Burlingame, CA 94010
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。(c) (お客様の会社名) (西暦年)。このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。(c) Copyright IBM Corp. _年を入れる_。 All rights reserved.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報がある場合、それらはこのプログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立つよう提供されています。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

警告: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

商標

IBM、IBM logo、AIX、DB2、developerWorks、i5/OS、Informix、iSeries、OS/390、OS/400、Passport Advantage、PowerPC、Rational、Tivoli、WebSphere、z/OS、zSeries、DB2 Universal Database、POWER、System i、System Storage、および System z は、International Business Machines Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Adobe は、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft および Windows は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標です。

Intel および Itanium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における登録商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

この製品には、Eclipse Project (<http://www.eclipse.org>) により開発されたソフトウェアが含まれています。



IBM WebSphere Process Server for Multiplatforms バージョン 6.1.0



Printed in Japan